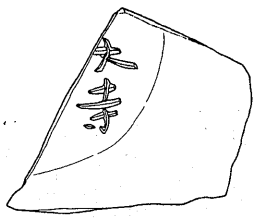
kan ze on ji

觀世音寺

― 寺域編 ―



2006

九州歴史資料館

觀世音寺

— 寺域編 —

2006

九州歴史資料館



観世音寺周辺航空写真



観世音寺境内全景



(1)　南辺域第109次調査区全景



(2)　南辺域第111次調査区全景



(1)　南辺域第115次調査区全景



(2)　南辺域第117次調査区全景



東辺域第119次調査区全景



(1) 東辺域第121次調査区全景



(2) 東辺域第121次調査建物群



(1) 北辺域第70次調査区全景



(2) 北辺域第70次調査区全景



(1)　第70次調査暗渠ＳＸ1831・1832



(2)　第70次調査暗渠ＳＸ1834

序

「筑紫観世音寺」は，天智天皇が母帝斉明天皇の菩提を弔うために発願された寺院であります。伽藍は天智天皇の発願から80余年を経た天平一八年（746）に完成をみました。観世音寺の寺域は方三町と推定され，壮大な伽藍は鎮西第一の名刹であり，「府の大寺」と称された規模と壮麗さを誇っていました。

また，天平宝字五年（761）には，僧尼に戒を授けるための戒壇院が設置され，名実ともに西海道随一の寺院としての地位を不動のものとしました。

菅原道真公は，「都府の楼はわずかに瓦の色を看　観音寺はただ鐘の声をのみ聴く」と詠われました。現在，観世音寺の梵鐘は国宝に指定され，大晦日には古の荘厳な音色を今に伝えています。

古代においては，大宰府の庇護のもと隆盛を極めた観世音寺でしたが，大宰府の衰退以後は急速に勢力を失い，東大寺の末寺となります。しかし，一方では，観音信仰の霊場として大衆の崇敬を集めました。その後，観世音寺は廃寺寸前までに追い込まれますが，江戸時代には黒田藩が中心となり再興がなされ，現在も法燈を保つに至っております。

今回の報告は，前回の「観世音寺－伽藍編－」の続編であり，40数回にわたった観世音寺の調査のなかで，伽藍周辺域の調査成果を取りまとめたものです。これまで，不明瞭であった伽藍周辺の様相が少しでも明らかとなり，古代史研究の一助となれば幸であります。

なお，本報告書の刊行に際しまして，大宰府史跡調査研究指導委員長をはじめとする委員各位には，諸事繁忙中にもかかわらず適切な御指導をいただき深謝に耐えません。また，境内の発掘調査を快諾いただいた観世音寺住職および御家族の方々に謝意を申し上げるとともに，今回の調査・報告書刊行にあたり，文化庁，太宰府市，地元関係各位，さらには故人となられた職員および作業員の皆様に対して深甚なる敬意を表する次第であります。

平成18年３月31日

九州歴史資料館長　　森山　良一

例　　言

1．本書は，昭和45年度（1970）から福岡県が国庫補助を受け，九州歴史資料館が発掘調査を実施した観世音寺の正式報告書－寺域編－である。

当初，観世音寺の報告書としては，遺構編及び遺物・考察編の二分冊の刊行を予定していたが，報告すべき内容が膨大であったため遺構編を伽藍編と寺域編に分け，都合三編とした。

2．本書には，観世音寺推定寺域内において観世音寺の解明を目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第5次・16次・20次・23次・28次・39-1次・39-2次・39-3次・45次・47次・48次・61次・66次・70次・71次・103次・109次・111次・115次・117次・118次・119次・120次・121次・122次・123次・130次・144次・154次調査の成果を掲載した。

なお，大宰府史跡第8次・21次・68次・78次・93次・184次・185次調査は，観世音寺子院跡関連の調査であり，戒壇院を除く子院跡に関しては子院跡の調査成果をとりまとめた正式報告書の刊行を予定しており，今回の報告からは除外した。

3．発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4．本書掲載の遺構実測図は，国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成し，各次調査担当者の実測による。挿図の北は座標北であり，真北からは西に18分振っている。

なお，遺構配置図に掲載した大宰府条坊跡第140次・246次調査遺構図は，太宰府市教育委員会から提供を受けた。

5．本書掲載の写真は，当館参事補佐石丸洋及び各次調査担当者の撮影による。

6．観世音寺－寺域編－に係る整理関係者は，下記のとおりである。

図面整理：大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝

版下作成：小田和利

製図作業：高田いく子・初山淳子

7．本書の執筆は，小田の監修のもとに井戸を主として吉村が担当し，それ以外の遺構は小田による。なお，文末には名を記し，分担を明らかにした。

8．先に刊行した『観世音寺－伽藍編－』の誤りは，今回の報告書で訂正を行っているが，最終的な正誤表は『観世音寺－遺物・考察編－』で示したい。

9．本書の編集は，小田が行った。

凡　　例

遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

ＳＡ：築地・柵，ＳＢ：建物，ＳＣ：回廊，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＧ：池，ＳＨ：広場，ＳＩ：竪穴住居，ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

本 文 目 次

Ⅰ　調査の組織と経過 …… 1
(1)　はじめに …… 1
(2)　調査経過 …… 1
(3)　調査組織 …… 6

Ⅱ　調査の概要 …… 9
(1)　基本層序 …… 9
(2)　遺構の概要 …… 11

Ⅲ　寺域の調査 …… 19
(1)　南辺域 …… 19
1）築地・柵 …… 19　2）建　物 …… 28
3）溝 …… 57　4）井　戸 …… 68
5）土　坑 …… 84　6）鋳造関連遺構 …… 119
7）埋甕・埋桶 …… 121　8）落　込 …… 122
9）その他の遺構 …… 123
(2)　東辺域 …… 125
1）柵 …… 125　2）建　物 …… 132
3）竪穴住居 …… 145　4）溝 …… 146
5）井　戸 …… 149　6）土　坑 …… 163
7）池状遺構 …… 173　8）暗　渠 …… 175
9）鋳造関連遺構 …… 176　10）落　込 …… 177
11）その他の遺構 …… 177
(3)　北辺域 …… 180
1）柵 …… 180　2）建　物 …… 182
3）溝 …… 185　4）井　戸 …… 188
5）土　坑 …… 193　6）暗　渠 …… 200
7）地　鎮 …… 203　8）その他の遺構 …… 204
(4)　西辺域 …… 205
1）溝 …… 205　2）土　坑 …… 205

Ⅳ　総　括 …… 207

挿 図 目 次

Fig. 1　観世音寺調査地域図（1/3,000）……2
Fig. 2　調査区配置図（1/1,500）……折込
Fig. 3　南辺域土層図（1/60）……9
Fig. 4　東辺域土層図（1/60）……10
Fig. 5　北辺域土層図（1/60）……11
Fig. 6　西辺域土層図（1/60）……11
Fig. 7　第５・23次調査区（1/600）……12
Fig. 8　第28次調査区（1/600）……12
Fig. 9　第39-1次調査区（1/600）……12
Fig. 10　第39-2次調査区（1/600）……12
Fig. 11　第39-3次調査区（1/600）……12
Fig. 12　第16・109・111・154次調査区（1/600）……13
Fig. 13　第115次調査区（1/600）……14
Fig. 14　第61・122・130次調査区（1/600）……14
Fig. 15　第103・117次調査区（1/600）……15
Fig. 16　第20次調査区（1/600）……15
Fig. 17　第47次調査区（1/600）……16
Fig. 18　第45次調査区（1/600）……16
Fig. 19　第119次調査区（1/600）……17
Fig. 20　第121次調査区（1/600）……17
Fig. 21　第70・123次調査区（1/600）……18
Fig. 22　第120次調査区（1/600）……18
Fig. 23　第48・77次調査区（1/600）……18
Fig. 24　築地ＳＡ091・095実測図（1/60）……20
Fig. 25　築地ＳＡ467，溝ＳＤ468実測図（1/60）……21
Fig. 26　築地ＳＡ472実測図（1/60）……22
Fig. 27　南辺域柵実測図①（1/80）……23
Fig. 28　南辺域柵実測図②（1/80）……25
Fig. 29　南辺域柵実測図③（1/80）……26
Fig. 30　南辺域建物実測図①（1/60）……29
Fig. 31　南辺域建物実測図②（1/60）……30
Fig. 32　南辺域建物実測図③（1/80）……32
Fig. 33　南辺域建物実測図④（1/80）……34
Fig. 34　南辺域建物実測図⑤（1/80）……35
Fig. 35　南辺域建物実測図⑥（1/80）……37
Fig. 36　南辺域建物実測図⑦（1/80）……38

Fig.37　南辺域建物実測図⑧（1/60）……40
Fig.38　南辺域建物実測図⑨（1/80）……41
Fig.39　南辺域建物実測図⑩（1/80）……42
Fig.40　南辺域建物実測図⑪（1/80）……44
Fig.41　南辺域建物実測図⑫（1/80）……45
Fig.42　南辺域建物実測図⑬（1/80）……47
Fig.43　南辺域建物実測図⑭（1/80）……49
Fig.44　南辺域建物実測図⑮（1/80）……50
Fig.45　南辺域建物実測図⑯（1/100）……52
Fig.46　南辺域建物実測図⑰（1/80）……53
Fig.47　南辺域建物実測図⑱（1/80）……55
Fig.48　南辺域建物実測図⑲（1/80）……56
Fig.49　溝ＳＤ363実測図（1/60）……57
Fig.50　溝ＳＤ892・929・939・942土層図（1/60）……58
Fig.51　石組溝ＳＤ916実測図（1/60）……59
Fig.52　溝ＳＤ3239・3300・3400土層図（1/60）……62
Fig.53　溝ＳＤ3333・3334・3340土層図（1/60）……64
Fig.54　護岸施設ＳＸ3845実測図（1/40）……66
Fig.55　石組溝ＳＤ3843・3846・3860実測図（1/60）……67
Fig.56　南辺域井戸実測図①（1/50）……69
Fig.57　南辺域井戸実測図②（1/50）……70
Fig.58　南辺域井戸実測図③（1/50）……71
Fig.59　南辺域井戸実測図④（1/50）……73
Fig.60　南辺域井戸実測図⑤（1/40）……74
Fig.61　南辺域井戸実測図⑥（1/50）……75
Fig.62　南辺域井戸実測図⑦（1/50）……76
Fig.63　南辺域井戸実測図⑧（1/50）……78
Fig.64　南辺域井戸実測図⑨（1/50）……79
Fig.65　南辺域井戸実測図⑩（1/50）……80
Fig.66　南辺域井戸実測図⑪（1/50）……82
Fig.67　南辺域井戸実測図⑫（1/50）……83
Fig.68　南辺域土坑実測図①（1/40）……85
Fig.69　南辺域土坑実測図②（1/60）……87
Fig.70　南辺域土坑実測図③（1/40）……89
Fig.71　南辺域土坑実測図④（1/60）……90
Fig.72　南辺域土坑実測図⑤（1/60）……92
Fig.73　南辺域土坑実測図⑥（1/60）……94
Fig.74　南辺域土坑実測図⑦（1/40）……96

Fig. 75　南辺域土坑実測図⑧（1/60）……98
Fig. 76　南辺域土坑実測図⑨（1/40）……99
Fig. 77　南辺域土坑実測図⑩（1/60）……101
Fig. 78　南辺域土坑実測図⑪（1/40）……103
Fig. 79　南辺域土坑実測図⑫（1/60）……105
Fig. 80　南辺域土坑実測図⑬（1/40）……106
Fig. 81　南辺域土坑実測図⑭（1/40）……107
Fig. 82　南辺域土坑実測図⑮（1/40・1/80）……109
Fig. 83　南辺域土坑実測図⑯（1/60）……111
Fig. 84　南辺域土坑実測図⑰（1/40・1/80）……112
Fig. 85　南辺域土坑実測図⑱（1/40・1/80）……113
Fig. 86　南辺域土坑実測図⑲（1/60）……115
Fig. 87　南辺域土坑実測図⑳（1/40）……117
Fig. 88　土坑ＳＫ3853，防空壕ＳＸ3874実測図（1/60）……118
Fig. 89　石組区画ＳＸ525実測図（1/80）……119
Fig. 90　保土穴ＳＸ901・923実測図（1/20）……119
Fig. 91　埋甕・埋桶実測図（1/30）……120
Fig. 92　土坑ＳＫ1521，落込ＳＸ3682（1/80）……122
Fig. 93　柱列ＳＡ488，通路ＳＸ487実測図（1/80）……124
Fig. 94　柵ＳＡ1235Ａ～Ｃ，溝ＳＤ1230実測図（1/60）……折込
Fig. 95　柵ＳＡ1235Ａ・Ｃ実測図（1/60）……折込
Fig. 96　東辺域柵実測図①（1/80）……126
Fig. 97　東辺域柵実測図②（1/80）……127
Fig. 98　東辺域柵実測図③（1/80）……129
Fig. 99　東辺域柵実測図④（1/80）……130
Fig. 100　築地ＳＡ3625実測図（1/80）……131
Fig. 101　東辺域建物実測図①（1/80）……132
Fig. 102　東辺域建物実測図②（1/80）……134
Fig. 103　東辺域建物実測図③（1/80）……135
Fig. 104　東辺域建物実測図④（1/80）……136
Fig. 105　東辺域建物実測図⑤（1/80）……138
Fig. 106　東辺域建物実測図⑥（1/80）……139
Fig. 107　東辺域建物実測図⑦（1/80）……141
Fig. 108　東辺域建物実測図⑧（1/100）……142
Fig. 109　東辺域建物実測図⑨（1/80）……143
Fig. 110　東辺域建物実測図⑩（1/80）……144
Fig. 111　竪穴住居ＳＩ3638実測図（1/80）……145
Fig. 112　溝ＳＤ1230・1300・3500・3520土層図（1/60）……148

Fig. 113　東辺域井戸実測図①（1/50）……150
Fig. 114　東辺域井戸実測図②（1/50）……152
Fig. 115　東辺域井戸実測図③（1/50）……153
Fig. 116　東辺域井戸実測図④（1/50）……154
Fig. 117　東辺域井戸実測図⑤（1/50）……155
Fig. 118　東辺域井戸実測図⑥（1/50）……156
Fig. 119　東辺域井戸実測図⑦（1/50）……157
Fig. 120　東辺域井戸実測図⑧（1/50）……158
Fig. 121　東辺域井戸実測図⑨（1/50）……160
Fig. 122　東辺域井戸実測図⑩（1/50）……161
Fig. 123　東辺域井戸実測図⑪（1/50）……162
Fig. 124　東辺域土坑実測図①（1/60）……164
Fig. 125　東辺域土坑実測図②（1/60）……166
Fig. 126　東辺域土坑実測図③（1/80）……167
Fig. 127　東辺域土坑実測図④（1/40）……169
Fig. 128　東辺域土坑実測図⑤（1/20・1/40・1/80）……171
Fig. 129　東辺域土坑実測図⑥（1/80）……172
Fig. 130　池ＳＧ1305実測図（1/80）……174
Fig. 131　排水施設ＳＸ1306，暗渠1310，瓦組ＳＸ1245実測図（1/40）……175
Fig. 132　鋳造遺構ＳＸ3566・3640実測図（1/20・1/40）……176
Fig. 133　石垣ＳＸ437実測図（1/60）……178
Fig. 134　積石塚ＳＸ1220実測図（1/80）……179
Fig. 135　北辺域柵実測図①（1/80）……180
Fig. 136　北辺域柵実測図②（1/80）……181
Fig. 137　北辺域建物実測図①（1/60）……182
Fig. 138　北辺域建物実測図②（1/80）……182
Fig. 139　北辺域建物実測図③（1/80）……183
Fig. 140　北辺域建物実測図④（1/80）……184
Fig. 141　溝ＳＤ1805土層図（1/60）……185
Fig. 142　溝ＳＤ1805石列実測図（1/60）……186
Fig. 143　溝ＳＤ1830・1850・3701・3702土層図（1/60）……187
Fig. 144　北辺域井戸実測図①（1/50）……189
Fig. 145　北辺域井戸実測図②（1/50）……190
Fig. 146　北辺域井戸実測図③（1/50）……191
Fig. 147　北辺域井戸実測図④（1/50・1/80）……192
Fig. 148　北辺域土坑実測図①（1/40）……194
Fig. 149　北辺域土坑実測図②（1/80）……195
Fig. 150　北辺域土坑実測図③（1/60）……197

Fig. 151　北辺域土坑実測図④（1/40）……198
Fig. 152　北辺域土坑実測図⑤（1/40）……199
Fig. 153　北辺域暗渠実測図①（1/40）……201
Fig. 154　北辺域暗渠実測図②（1/40）……202
Fig. 155　暗渠ＳＸ3572，石組ＳＸ1842実測図（1/40）……203
Fig. 156　地鎮ＳＸ1810実測図（1/10）……203
Fig. 157　溝ＳＤ1366・3450土層図（1/60）……205
Fig. 158　土坑ＳＫ3451・3452・3453実測図（1/40）……206

表　目　次

Tab. 1　観世音寺発掘調査地域一覧……5
Tab. 2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員……6
Tab. 3　観世音寺発掘調査関係者一覧……7

付　　図

付　図1　観世音寺遺構配置図（1/1,000）
付　図2　南辺域遺構配置図①（1/200）
付　図3　南辺域遺構配置図②（1/200）
付　図4　南辺域遺構配置図③（1/200）
付　図5　東辺域遺構配置図①（1/200）
付　図6　東辺域遺構配置図②（1/200）
付　図7　北辺域遺構配置図（1/200）

図 版 目 次

巻頭図版1　観世音寺周辺航空写真
2　観世音寺境内全景
3　(1)　南辺域第109次調査区全景
(2)　南辺域第111次調査区全景
4　(1)　南辺域第115次調査区全景
(2)　南辺域第117次調査区全景
5　東辺域第119次調査区全景
6　(1)　東辺域第121次調査区全景
(2)　東辺域第121次調査建物群
7　(1)　北辺域第70次調査区全景
(2)　北辺域第70次調査区全景
8　(1)　第70次調査暗渠ＳＸ1831・1832
(2)　第70次調査暗渠ＳＸ1834

PL. 1　観世音寺本堂（背後の山は四王寺山，南上空から）

南辺域

PL. 2　(1)　5次調査区1層柱穴群（西から）
(2)　5次調査区2層柱穴群（西から）
PL. 3　(1)　築地ＳＡ091Ａ・Ｂ（北から）
(2)　築地ＳＡ091Ａ・Ｂ（東から）
PL. 4　(1)　築地ＳＡ095（東から）
(2)　築地ＳＡ095（南から）
PL. 5　(1)　溝ＳＤ093（南から）
(2)　石積ＳＸ092（北から）
PL. 6　(1)　16次調査区（東から）
(2)　溝ＳＤ363（南から）
(3)　土坑ＳＫ365（北から）
PL. 7　(1)　23次調査区上層遺構（西から）
(2)　23次調査区下層遺構（西から）
PL. 8　(1)　築地状遺構ＳＡ467，溝ＳＤ468（北から）
(2)　築地状遺構ＳＡ472（北西から）
PL. 9　(1)　溝ＳＤ485（北から）
(2)　井戸ＳＥ480（東から）
(3)　井戸ＳＥ480枠（東から）
(4)　礫敷ＳＸ487（南から）
PL. 10　(1)　28次調査区（西から）
(2)　28次調査区（南から）

PL. 11 (1) 土坑ＳＫ521（南から）
(2) 下層遺構東半部（南から）
PL. 12 (1) 39-1次調査区（西から）
(2) 井戸ＳＥ870（南から）
PL. 13 (1) 井戸ＳＥ867（南から）
(2) 井戸ＳＥ867枠（南から）
(3) 井戸ＳＥ868（西から）
PL. 14 (1) 井戸ＳＥ868枠（西から）
(2) 井戸ＳＥ872（北から）
(3) 井戸ＳＥ872枠（北から）
PL. 15 (1) 39-2次調査区３Tr上層遺構（東から）
(2) 39-2次調査区４Tr下層遺構（東から）
(3) 39-2次調査区４Tr下層遺構（西から）
PL. 16 (1) 掘立柱建物ＳＢ884・889，溝ＳＤ890（西から）
(2) 井戸ＳＥ895（南から）
(3) 井戸ＳＥ895枠（南から）
PL. 17 (1) 井戸ＳＥ902（南から）
(2) 土坑ＳＫ913（南から）
(3) 土坑ＳＫ927（南から）
PL. 18 (1) 土坑ＳＫ911・912（北東から）
(2) 瓦敷ＳＸ917（北から）
PL. 19 (1) 39-3次調査区１Tr（西から）
(2) 39-3次調査区２Tr（東から）
(3) 39-3次調査区２Tr（西から）
PL. 20 (1) 61次調査区（南から）
(2) 61次調査区（西から）
PL. 21 (1) 103次調査区（南東から）
(2) 溝ＳＤ3050（南西から）
PL. 22 109次調査区全景（空中写真，西上空から）
PL. 23 (1) 109次調査区（空中写真，南上空から）
(2) 111次調査区（空中写真，北上空から）
PL. 24 (1) 109次調査区西半部（北真上から）
(2) 109次調査区東半部（北真上から）
PL. 25 (1) 109次調査区（西から）
(2) 111次調査区西半部（北から）
PL. 26 (1) 柵ＳＡ3195，溝ＳＤ3190（北から）
(2) 掘立柱建物ＳＢ3205周辺（北から）
PL. 27 (1) 掘立柱建物ＳＢ3230（東真上から）
(2) 掘立柱建物ＳＢ3230（北から）
PL. 28 (1) 井戸ＳＥ3155周辺（東から）

(2) 井戸ＳＥ3160周辺（北から）

PL.29 (1) 溝ＳＤ3200（南から）

(2) 溝ＳＤ3200（北から）

PL.30 (1) 溝ＳＤ3290，掘立柱建物ＳＢ3304周辺（北から）

(2) 溝ＳＤ3300（西から）

PL.31 (1) 井戸ＳＥ3145（東から）

(2) 井戸ＳＥ3150（西から）

(3) 井戸ＳＥ3155（西から）

PL.32 (1) 井戸ＳＥ3160（東から）

(2) 井戸ＳＥ3165（西から）

(3) 井戸ＳＥ3170（北西から）

PL.33 (1) 井戸ＳＥ3175（西から）

(2) 井戸ＳＥ3180（東から）

(3) 井戸ＳＥ3185（東から）

PL.34 (1) 井戸ＳＥ3215（南東から）

(2) 井戸ＳＥ3235（北から）

(3) 井戸ＳＥ3240（西から）

PL.35 (1) 井戸ＳＥ3245（東から）

(2) 井戸ＳＥ3250（南から）

(3) 井戸ＳＥ3255（西から）

PL.36 (1) 井戸ＳＥ3260（西から）

(2) 井戸ＳＥ3260枠（東から）

(3) 井戸ＳＥ3265（北から）

PL.37 (1) 井戸ＳＥ3265枠（北西から）

(2) 井戸ＳＥ3270・3275・3280，土坑ＳＫ3264（北から）

(3) 井戸ＳＥ3270（北東から）

PL.38 (1) 井戸ＳＥ3275（北から）

(2) 井戸ＳＥ3275枠（南から）

(3) 井戸ＳＥ3280（東から）

PL.39 (1) 土坑ＳＫ3174周辺（西から）

(2) 土坑ＳＫ3247周辺（北から）

PL.40 (1) 土坑ＳＫ3246（西から）

(2) 土坑ＳＫ3247（東から）

(3) 土坑ＳＫ3259（西から）

PL.41 (1) 土坑ＳＫ3264（北から）

(2) 土坑ＳＫ3266（東から）

(3) 土坑ＳＫ3268（北東から）

PL.42 (1) 土坑ＳＫ3271（北から）

(2) 土坑ＳＫ3273（西から）

(3) 土坑ＳＫ3295（北から）

PL.43　115次調査区全景（空中写真，南上空から　奥の建物は戒壇院本堂）

PL.44 (1) 115次調査区全景（空中写真，東真上から）

(2) 115次調査区南半部（東真上から）

PL.45 (1) 掘立柱建物ＳＢ3351，溝ＳＤ3340（東から）

(2) 溝ＳＤ3338（東から）

(3) 溝ＳＤ3333・3335（東から）

PL.46 (1) 井戸ＳＥ3345（西から）

(2) 井戸ＳＥ3350（南から）

(3) 井戸ＳＥ3350下部（南から）

PL.47 (1) 117次調査区全景（空中写真，西上空から）

(2) 調査区西半Pit群（東から）

PL.48 (1) 溝ＳＤ3400Ａ・Ｂ（北東から）

(2) 溝ＳＤ3430・3440（北東から）

PL.49 (1) 井戸ＳＥ3370（南から）

(2) 井戸ＳＥ3375（東から）

(3) 井戸ＳＥ3375枠（南から）

PL.50 (1) 井戸ＳＥ3380・3385（北から）

(2) 井戸ＳＥ3380枠（東から）

(3) 井戸ＳＥ3390（南東から）

PL.51 (1) 井戸ＳＥ3395（東から）

(2) 井戸ＳＥ3395下部（東から）

(3) 井戸ＳＥ3405（東から）

PL.52 (1) 井戸ＳＥ3410（北西から）

(2) 井戸ＳＥ3415・3420（北から）

(3) 井戸ＳＥ3425（南西から）

PL.53 (1) 122次調査区全景（東から）

(2) 122次調査区全景（空中写真，東上空から）

PL.54 (1) 掘立柱建物ＳＢ3660（東真上から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ3660（北から）

PL.55　掘立柱建物ＳＢ3660柱掘方断割

PL.56 (1) 掘立柱建物ＳＢ3670（東から）

(2) 溝ＳＤ3666，石組ＳＸ3662（北から）

PL.57 (1) 井戸ＳＥ3680上部（北東から）

(2) 井戸ＳＥ3680瓦出土状況（北東から）

(3) 井戸ＳＥ3680下部土器出土状況（南から）

PL.58 (1) 井戸ＳＥ3680枠（北西から）

(2) 井戸ＳＥ3690（北東から）

(3) 井戸ＳＥ3690枠（北東から）

PL.59 (1) 井戸ＳＥ3685（東から）

(2) 井戸ＳＥ3695（東から）

(3) 土坑ＳＫ3677（北から）

PL.60 (1) 130次調査区全景（空中写真，南東上空から）

(2) 130次調査区全景（空中写真，東上空から）

PL.61 (1) 130次調査区（東から）

(2) 130次調査区（西から）

PL.62 (1) 掘立柱建物ＳＢ3862，溝ＳＤ3842（南から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ3852・3862（東から）

PL.63 (1) 護岸ＳＸ3845（西から）

(2) 護岸ＳＸ3845細部（西から）

PL.64 (1) 溝ＳＤ3840笊出土状況

(2) 溝ＳＤ3840箕出土状況

(3) 溝ＳＤ3840蓆出土状況

PL.65 (1) 溝ＳＤ3841（南から）

(2) 溝ＳＤ3843・3860・3865（東から）

PL.66 (1) 溝ＳＤ3855・3860（南から）

(2) 溝ＳＤ3854，ＳＤ3840下層遺構（南から）

(3) 採土穴ＳＸ3856，土坑ＳＫ3853（南から）

PL.67 (1) 埋甕ＳＸ3864（南から）

(2) 埋甕ＳＸ3867（南から）

(3) 埋甕ＳＸ3868（南から）

(4) 埋甕ＳＸ3872（南から）

PL.68 (1) 154次調査区（南から）

(2) 154次調査区（東から）

東辺域

PL.69 (1) 20次調査区（南から）

(2) 石垣ＳＸ437（南から）

PL.70 (1) 47次調査区（南から）

(2) 47次調査区（北から）

PL.71 (1) 掘立柱建物ＳＢ1350，土坑ＳＫ1359（南から）

(2) 井戸ＳＥ1365（東から）

PL.72 45次調査区全景（南から）

PL.73 (1) 45次調査区（北から）

(2) 45次調査区（北東から）

PL.74 (1) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（西から）

(2) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（東から）

(3) 溝ＳＤ1230（北から）

(4) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（北から）

PL.75 (1) 溝ＳＤ1230（南から）

(2) 溝ＳＤ1230護岸石列（南東から）

(3) 溝ＳＤ1300（南から）

(4) 溝ＳＤ1230（北から）

(5) 唐三彩出土状況

PL.76 (1) 掘立柱建物ＳＢ1250（西から）

(2) 門遺構ＳＢ1240Ａ・Ｂ（北から）

PL.77 (1) 井戸ＳＥ1180（北から）

(2) 井戸ＳＥ1181（西から）

(3) 井戸ＳＥ1181枠（西から）

PL.78 (1) 井戸ＳＥ1182（北から）

(2) 井戸ＳＥ1183・1184（西から）

PL.79 (1) 井戸ＳＥ1183枠（西から）

(2) 井戸ＳＥ1184枠（西から）

(3) 井戸ＳＥ1184下部（西から）

PL.80 (1) 井戸ＳＥ1188・1189（北から）

(2) 井戸ＳＥ1188枠（南から）

(3) 井戸ＳＥ1189枠（北から）

PL.81 (1) 井戸ＳＥ1186（南から）

(2) 井戸ＳＥ1190，土坑ＳＫ1204（西から）

(3) 井戸ＳＥ1190（西から）

PL.82 (1) 井戸ＳＥ1191（北から）

(2) 井戸ＳＥ1192・1193，土坑ＳＫ1243（西から）

(3) 井戸ＳＥ1193（西から）

PL.83 (1) 井戸ＳＥ1194・1195（北東から）

(2) 井戸ＳＥ1194枠（南から）

(3) 井戸ＳＥ1195（北から）

PL.84 (1) 井戸ＳＥ1196（西から）

(2) 井戸ＳＥ1197・1199，土坑ＳＫ1248・1249（南から）

(3) 井戸ＳＥ1198，1199枠（南から）

PL.85 (1) 井戸ＳＥ1201（西から）

(2) 井戸ＳＥ1202（北から）

(3) 土坑ＳＫ1205（北から）

PL.86 (1) 土坑ＳＫ1211（南から）

(2) 土坑ＳＫ1248（南西から）

(3) 土坑ＳＫ1255（西から）

PL.87 (1) 暗渠ＳＸ1245・1310（北から）

(2) 暗渠ＳＸ1245（東から）

PL.88 (1) 暗渠ＳＸ1310（南から）

(2) 暗渠ＳＸ1310（西から）

(3) 積石塚ＳＸ1220（北から）

PL.89 (1) 池ＳＧ1305，排水施設ＳＸ1306，溝ＳＤ1300（北から）

(2) 排水施設ＳＸ1306（北から）

(3) 排水施設ＳＸ1306（西から）

PL.90 119次調査区全景（空中写真，南上空から）

PL.91 (1) 119次調査区全景（空中写真，南上空から）

(2) 119次調査区北半部（東真上から）

PL.92 (1) 119次調査区全景（北から）

(2) 119次調査区全景（南から）

PL.93 (1) 119次調査区北半部（西から）

(2) 柵ＳＡ3561（東から）

PL.94 (1) 柵ＳＡ3527，礎石建物ＳＢ3460（北から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ3461（西から）

(3) 掘立柱建物ＳＢ3565（南から）

PL.95 (1) 溝ＳＤ1230（北から）

(2) 溝ＳＤ1230（南から）

(3) 溝ＳＤ1300（北から）

PL.96 (1) 溝ＳＤ3550（南から）

(2) 溝ＳＤ3550（南から）

PL.97 (1) 井戸ＳＥ3465（南から）

(2) 井戸ＳＥ3470・3475，土坑ＳＫ3464（北から）

(3) 井戸ＳＥ3470枠（南から）

PL.98 (1) 井戸ＳＥ3480（西から）

(2) 井戸ＳＥ3490（西から）

(3) 井戸ＳＥ3495（北から）

PL.99 (1) 井戸ＳＥ3505（西から）

(2) 井戸ＳＥ3515（西から）

(3) 井戸ＳＥ3525（北から）

PL.100 (1) 井戸ＳＥ3535（東から）

(2) 井戸ＳＥ3535枠（東から）

PL.101 (1) 井戸ＳＥ3530（西から）

(2) 井戸ＳＥ3540（北から）

(3) 井戸ＳＥ3545（北から）

PL.102 (1) 121次調査区全景（空中写真，西上空から）

(2) 121次調査区全景（北から）

PL.103 (1) 柵・建物群（西真上から）

(2) 柵ＳＡ3622・3623，溝ＳＤ3637（東から）

(3) 柵ＳＡ3625，溝ＳＤ3630（南から）

PL.104 (1) 掘立柱建物ＳＢ3610・3626（東から）

(2) 掘立柱建物ＳＢ3615（西から）

PL.105 (1) 掘立柱建物ＳＢ3620（南から）

(2) ＳＢ3620柱痕２

(3) ＳＢ3620柱痕３

PL. 106 (1) 井戸ＳＥ3636（西から）
(2) 井戸ＳＥ3645（北から）
(3) 井戸ＳＥ3645枠（北から）
PL. 107 (1) 井戸ＳＥ3645下部（北から）
(2) 土坑ＳＫ3648（南から）
(3) 土坑ＳＫ3658（西から）
PL. 108 (1) 鋳造遺構ＳＸ3640（東から）
(2) 鋳造遺構ＳＸ3640（北から）
(3) 同　土層断面（北から）

北辺域

PL. 109 (1) 観世音寺北辺域（空中写真，北東上空から）
(2) 観世音寺北辺域（空中写真，北西上空から）
PL. 110 (1) 70次調査区上層遺構（南から）
(2) 70次調査区上層遺構（西から）
PL. 111 (1) 70次調査区下層遺構（南から）
(2) 70次調査区下層遺構（西から）
PL. 112 (1) 柵ＳＡ1840（東から）
(2) 柵ＳＡ1840柱根（東から）
(3) 門建物ＳＢ1748柱痕（南から）
PL. 113 (1) 掘立柱建物ＳＢ1730・1735・1845・1855（東から）
(2) 溝ＳＤ1805（西から）
PL. 114 (1) 井戸ＳＥ1760（北から）
(2) 井戸ＳＥ1765（北から）
(3) 井戸ＳＥ1770（東から）
PL. 115 (1) 井戸ＳＥ1755，土坑ＳＫ1750（東から）
(2) 井戸ＳＥ1775（東から）
PL. 116 (1) 井戸ＳＥ1780（西から）
(2) 井戸ＳＥ1785（北から）
(3) 井戸ＳＥ1790（北から）
PL. 117 (1) 井戸ＳＥ1795（東から）
(2) 井戸ＳＥ1795枠（東から）
PL. 118 (1) 井戸ＳＥ1800（南から）
(2) 井戸ＳＥ1701（東から）
PL. 119 (1) 井戸ＳＥ1781（南から）
(2) 井戸ＳＥ1783，土坑ＳＫ1782（北から）
(3) 土坑ＳＫ1740・1745（北から）
PL. 120 (1) 土坑ＳＫ1788（南から）
(2) 土器出土状況（西から）
PL. 121 (1) 石組土坑ＳＫ1685（南から）
(2) 石組ＳＸ1842（東から）

PL. 122 (1) 石列ＳＸ1690（南から）
(2) 石列ＳＸ1690（東から）
(3) 地鎮ＳＸ1810（南から）
PL. 123 (1) 下層暗渠群（西から）
(2) 下層暗渠群（東から）
PL. 124 (1) 暗渠ＳＸ1831・1832・1833（東から）
(2) 暗渠ＳＸ1831・1832（西から）
PL. 125 (1) 暗渠ＳＸ1831・1832（北から）
(2) 暗渠ＳＸ1831・1832（南から）
(3) 暗渠ＳＸ1833（北から）
(4) 70次補足調査　暗渠ＳＸ1833，溝ＳＤ1850（西から）
(5) 同　暗渠ＳＸ1833（東から）
PL. 126 (1) 暗渠ＳＸ1834（東から）
(2) 暗渠ＳＸ1834（南から）
(3) 暗渠ＳＸ1834（北から）
PL. 127 (1) 70次補足調査　暗渠ＳＸ1834，溝ＳＤ1850（北から）
(2) 暗渠ＳＸ1835（南西から）
(3) 暗渠ＳＸ1835（北西から）
PL. 128 (1) 120次調査区上層遺構（北から）
(2) 120次調査区上層遺構（北から）
PL. 129 (1) 中層遺構（北から）
(2) 柵ＳＡ3590・3595，掘立柱建物ＳＢ3585（東から）
(3) 柵ＳＡ3590・3595（南から）
PL. 130 (1) 下層遺構（南から）
(2) 溝ＳＤ3605（東から）
(3) 溝ＳＤ3605，土坑ＳＫ3576（北から）
PL. 131 (1) 暗渠ＳＸ3572（東から）
(2) 123次調査区（東から）
(3) 掘立柱建物ＳＢ3700（北から）
(4) 同　柱根（北から）
PL. 132 (1) 144次調査区上層遺構（南西から）
(2) 144次調査区上層遺構（北東から）
PL. 133 (1) 48次調査区（東から）
(2) 48次調査区（南から）
PL. 134 (1) 118次調査区（東から）
(2) 土坑ＳＫ3451（南から）

Ⅰ　調査の組織と経過

(1)　はじめに

観世音寺は，『続日本紀』元明天皇和銅２年（709）２月の詔に，「筑紫観世音寺，淡海大津宮御宇天皇（天智）奉二為後岡本宮御宇天皇（斉明）一誓願所一レ基」とあり，天智天皇が母帝斉明天皇の菩提を弔うために発願された寺として著名である。

伽藍は天智天皇の発願から80余年を経た天平18年（746）に落慶を迎えた。その壮大な伽藍は鎮西第一の名刹であった。また，観世音寺の寺域は方３町と推定され，“府の大寺”と称された規模と壮麗さを誇っていた。天平宝字５年（761）には，僧尼に戒を授けるための建物－戒壇院が設置され，名実ともに西海道随一の寺院としての地位を確立した。

府の大寺

戒壇院の設置

大宰権帥菅原道真が「都府楼は僅かに瓦色を看　観音寺は只鐘声を聴く」と詠った観世音寺であったが，寺院完成後は大宰府の盛衰と軸を一つにし，東大寺の末寺となるまでは大宰府管内諸寺の僧統位置に君臨した。その一方で観音信仰の霊場として大衆の崇敬を集めた。大宰府の庇護の下に隆盛を極めた観世音寺であったが，大宰府の衰退以後は急速に勢力を失うものの中世に入ると再び隆盛期を迎え，戒壇院・金光寺他49の子院を擁することになる。

観音信仰の霊場

その後，観世音寺は島津軍の北部九州遠征に巻き込まれ，島津軍は金堂を灰燼に帰すという暴挙に出る。さらに，観世音寺別当が九州に下向した豊臣秀吉の怒りを買い，寺領を没収されてしまう。これにより観世音寺は廃寺寸前までに追い込まれるが，江戸時代には黒田藩が中心となり再興がなされ，同藩の庇護のもと現在も法燈を保つに至った。

黒田藩による庇護

現在，観世音寺境内には，江戸時代再建の金堂と講堂の他，鐘楼・庫裡・天智院（茶室）・宝蔵などの建物が存在する。また，元禄16年（1703）に観世音寺から分離した戒壇院には，本堂・庫裡・鐘楼・茶室などの建物があり，観世音寺とともに古刹として人々に憩いの場を提供している。

(2)　調査経過

伽藍自体の調査経過に関しては，『観世音寺－伽藍編－』で詳述しているので，今回は寺域を中心に述べることとする。

大正８年（1919），「史跡名勝天然記念物保存法」が制定され，同10年（1921）に大宰府政庁跡は水城跡・大野城跡・筑前国分寺跡とともに「大宰府跡」として面積約12haが国の史跡に指定された。昭和25年（1950），新たに「文化財保護法」が制定され，それに伴い史跡「大宰府跡」・「大野城跡」・「水城跡」は特別史跡へと昇格したものの拡大追加指定はされなかった。

特別史跡へ昇格

その後，昭和38年に，観世音寺から政庁跡背面にかけて宅地造成計画が福岡の大手不動産会社から出され，大宰府の遺跡は一挙に破壊の危機に瀕した。この状況を憂慮した福岡県と文化財保護委員会は，「大宰府学校院跡」と「観世音寺境内及び同子院跡」を新たに指定するとともに政庁跡についても追加指定することを検討し，昭和41年10月，福岡県教育委員会は追加指

追加指定

定申請を行い，これを受けて文化財保護委員会は同年11月，特別史跡大宰府跡の追加指定と観世音寺境内及び同子院跡，学校院跡を新たに指定することとし，指定面積を約110haに拡大することを決定し，地元に提案した。この広範囲にわたる追加指定は，住民の日常生活に強い規制をかけるものとして地元住民の猛反発にあい，追加指定反対の住民運動へと発展した。

指定反対の住民運動

昭和42年６月，福岡県，太宰府町，地元住民代表及び学識経験者からなる「太宰府地区史跡等保護整備協議会」が結成され，さらに翌年７月には太宰府町議会に「史跡対策特別委員会」が設置され，指定拡大に絡む様々な問題点について幾度となく協議が重ねられた。

こうした長期にわたる国，福岡県，太宰府町，地元住民との協議を経て，昭和45年９月に特別史跡大宰府跡の追加指定並びに「大宰府学校院跡」と「観世音寺境内及び同子院跡」の新たな史跡指定が官報告示された。

史跡指定の官報告示

一方，文化庁は昭和43年に「大宰府史跡発掘調査指導委員会」を組織し，その指導・助言の下に発掘調査を行い，遺構の解明に着手することとした。史跡の保存を行うには，ただその重要性を強調するだけでは一般住民の理解は得難く，発掘調査によって遺跡の状況を具体的に示し，その価値を明らかにすることが極めて重要である。また，遺跡を整備し，保存・活用を計るための基礎資料を得るためにも発掘調査は必要と言える。

発掘調査の必要性

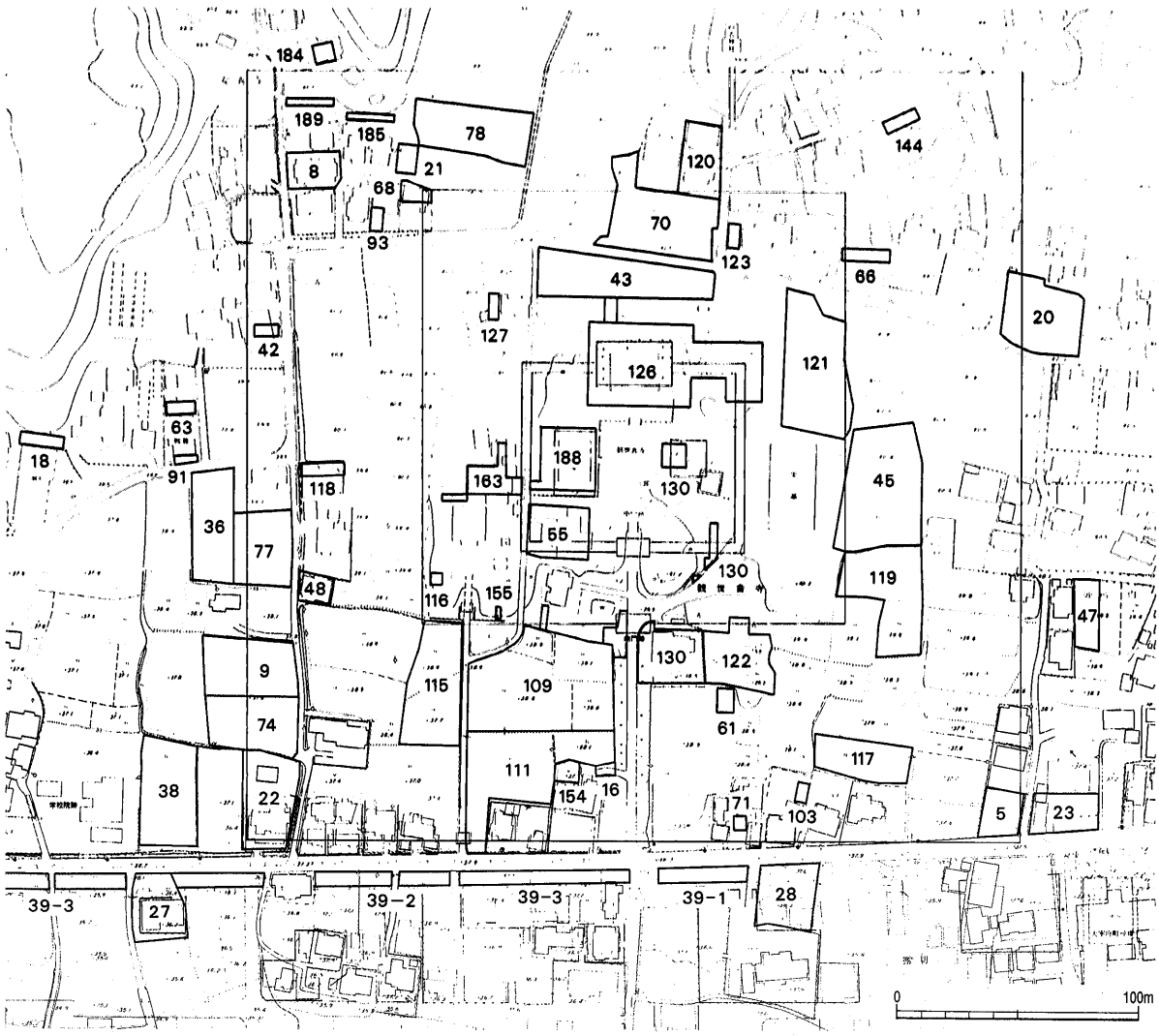


Fig. 1　観世音寺調査地域図（1/3,000）

大宰府史跡発掘調査指導委員会は，国史学・考古学・建築史学の研究者10名で構成され，委員長に竹内理三氏，副委員長に鏡山猛氏が選任された。昭和43年７月，第１回目の会議が地元福岡で開催され，発掘調査の基本計画，当面の発掘調査箇所が協議された。昭和59年には「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し，造園学・都市工学の専門家を加えた13名の委員で構成され，今日に至っている。

さて，観世音寺の解明を目的とした発掘調査は，『延喜五年観世音寺資財帳』（以下，『資財帳』）及び『観世音寺絵図』を参考としながら，それらに記載された堂宇の規模を想定し，かつ残存している礎石などから調査範囲を決定している。当館が行った観世音寺の発掘調査は，昭和45年に大宰府史跡第５次調査として実施したのが一等最初であり，この時点での調査体制は十分なものではなく，トレンチによる小規模調査であったが，東西方向の新旧築地２基，南北方向の築地１基を検出した。今回の調査区は推定寺域の南東隅部で，鏡山条坊復原案による４条７坊の南東隅部に位置するものであった。

推定寺域の南東隅部

観世音寺地区の本格的な調査に着手したのは，昭和51年に大宰府史跡第43次調査として実施した推定僧房跡の調査である。遺構面は後世の削平が著しかったものの，辛うじて礎石２個と礎石据付穴33個が遺存しており，長大な東西棟礎石建物ＳＢ1080を検出することができた。礎石据付穴の規模・配列から建物の復原を試みた結果，『資財帳』記載の大房と寸法が近似することから大房建物と判断するに至った。

大房建物の発見

引き続き，寺域の北限を確認するとともに『資財帳』に記された小子房・客僧房・馬道屋などの場所を確認することを目的として，昭和55年に大宰府史跡第70次調査を，平成元年には大宰府史跡第120次・70次補足調査を実施した。これらの調査の結果，第70次調査区北端で幅6.5ｍの版築状遺構から６条の瓦組暗渠施設を検出し，暗渠の北端が東西溝ＳＤ1850に接続していることを確認した。通常，暗渠は建物基壇や回廊・築地塀などの基礎地形として埋設されるもので，版築状遺構を築地塀と考えることも可能であるが，大きな問題が生じる事となった。

瓦組暗渠

それは，この位置に築地を想定すると東辺・西辺築地の長さが65丈（195m）なので，南大門の推定位置を南側に15m程移動させる必要が生じ，新たな疑問として浮上した。また，特筆される点として，流路中の出土であったが，大和川原寺の軒丸瓦と同笵の瓦が１点発見され，天智天皇ゆかりの寺であることを改めて認識した次第である。

川原寺と同笵の軒丸瓦

北辺域の第120次調査では，製塩土器を多量に廃棄した土坑が発見され，厨的施設の存在が想定できる。また，北辺築地の位置であるが，現南大門礎石付近を推定南辺築地とすると北辺築地は当調査区の北半部に位置することになる。しかしながら，版築積土などの北辺築地に関する遺構は検出できておらず，第70次調査検出の版築状遺構を築地関連遺構とすると『資財帳』記載の数値を検討し直す必要が生じる。

厨的施設

昭和62年から平成３年にかけては，寺域の東辺域及び南辺域に集中して調査を実施した。大宰府史跡第45次・119次・121次調査地は伽藍の東側で，東辺築地の推定地にあたる。調査箇所は宝蔵の北から南東側にかけてで，そこには南北に畦畔が走っており，堂宇の東側を画する築地塀の存在が予測された。調査の結果，第121次調査区の東端において南北に走る８世紀後半の柵ＳＡ3625を検出した。『資財帳』には，「□（東）□（渡）陸拾伍丈板葺」と記されており，他の築地３面が瓦葺であるのに対し，東辺築地は板葺である。西側の学校院との境界は瓦葺の築地塀でもっ

ＳＡ3625は板塀

て厳格に規制しているが，第121次調査で検出した遺構は板塀とみなせるものであり，第45次・119次調査区での遺構の広がり状況を勘案すると，東側は規制が緩やかであったことが窺われる。また，南北溝ＳＤ1300から唐三彩三足壺（鍍）が出土したことは特筆されよう。

唐三彩壺の出土

次に，推定南門跡の位置を手掛かりに，南辺築地の検出を目指した。昭和62年には大宰府史跡第109次・111次調査として推定築地跡南西部を，さらに昭和63年には大宰府史跡第115次調査として推定築地跡南西隅を調査対象地に選定し，平成２年は大宰府史跡第122次調査として推定築地跡南東部の発掘調査を進めた。翌平成３年には第122次調査の西隣を大宰府史跡第130次調査として実施した。この一連の調査により観世音寺前面域の様相が明らかになってきた。検出した遺構は，掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・落込などで，時期的には９～16世紀にかけてで，大きくⅢ時期に分けることが可能である。

懸案事項であった南辺築地は検出できなかったが，南門礎石をもとに築地を想定すると，築地想定ラインと平行する形で東西溝ＳＤ3149が存在し，第115次調査で検出したＳＤ3340に接続するものとみられる。また，参道側溝の南北溝ＳＤ3200・3840の先端は東西溝付近で終焉しており，やはりこの付近に南辺築地を想定せざるを得なくなる。

第109・111次調査においては，13～16世紀にかけて掘削された小溝や柵によって区画された中世の集落跡が検出され，仏具・容器などの鋳型が多量に出土したことから鋳物師集団の集落跡の可能性が高まった。また，古代の遺構が検出されなかったことから，観世音寺南門前面域一帯は，寺院創建当時は一種の空閑地であったことが窺われた。

中世の鋳物師集落か

さらに，推定南門跡から南に延びる現参道は，古い時代から存在していたと確定できたことは大きな成果であった。現参道の西側で幅８～11ｍの南北溝ＳＤ3200を検出し，溝下層埋土中から「嘉元二年（1304）十一月卅日」の紀年銘を有する卒塔婆が発見された。また，参道を挟んだ第130次調査区の南北溝ＳＤ3840からは「元亨三年（1323)」銘の木札が出土しており，両者は同時併存していることが確かめられた。中世の溝ではあるが，両溝の先端は推定南門跡付近から始まっており，参道を区画するため掘削された溝と考えられる。

第122次調査では梁行３間，桁行８間の南北棟建物ＳＢ3660と井戸ＳＥ3680が注目される。建物・井戸ともに８世紀前半の終焉で，観世音寺建築に際して設けられた仮設事務所的な性格が考えられる。伽藍の完成とともに廃棄されたものである。

ＳＢ3660は現場事務所

昭和27年の発掘調査以後，福岡県教委及び九州歴史資料館が観世音寺の伽藍及び寺域周辺の調査に着手して48次数を数える。観世音寺は奈良時代の落慶以降，幾たびかの災難に遭遇しては建物を修復しながら寺としての命脈を現代まで保ち続けてきた。それは大変素晴らしいことである。しかし，建物の改築，中世遺構による削平，後世の攪乱などによって創建伽藍の殆どがダメージを受けてしまった。一時代で終焉し，創建当時の状況を残す寺院とは歴史の重みを比すべくもないが，調査に携わった者として何かしら感慨深いものがある。

また，中門をはじめ鐘楼や経蔵など，未だ建物の位置，規模・構造を把握するに至っていない現状である。これらの様々な課題については，将来的に解決されることを期待するに留めるが，今次報告書は，当館が実施した寺域周辺の調査成果をとりまとめ，大方の研究資料として供する次第である。

Tab. 1　観世音寺発掘調査地域一覧

次数	地区略号	調査箇所	面積㎡	調査期間	地　番
		金堂・講堂他		昭和27年	観世音寺字堂廻
		講堂・東面回廊		昭和32年	〃
5	6KKZ-B-G	寺域南東隅部	60	700710～700730	観世音寺字露切73-1
16	〃 -B-P	南辺域	21	711125～711214	〃 堂廻174
20	〃 -B-B	東辺域	130	720603～720703	〃 朝日13-1
23	〃 -C-F	寺域南東隅部	240	720928～730110	〃 露切74-1
28	6AYE-B	左郭五条七坊	77	730525～730613	〃 露切96-1,96-2
39-1	6AYE-C	左郭五条六坊	279	751020～751127	〃 露切98-8
39-2	〃 -D	左郭五条五坊	250	760202～760416	〃 土井ノ内154他
39-3	〃 -C	左郭五条三～六坊	600	760630～760927	〃 土井ノ内169-6他
43	6KKZ-B-K	僧房跡	970	761012～770224	〃 堂廻183-4
45	〃 -B-M	東辺築地東面部	1,570	770410～771007	〃 今道50･52
47	〃 -C-E	東辺域	105	770405～770424	〃 御所ノ内41-1
48	〃 -A-H	西辺域	20	770425～770427	〃 堂廻191
55	〃 -B-M	西面回廊南西隅部	70	780403～780415	〃 堂廻182
61	〃 -B-O	南辺域	48	781124～781205	〃 今道63-2
66	〃 -B-H	東辺築地東面部	50	800108～800111	〃 山ノ井857
70	〃 -B-J	推定小子房跡	1,150	800406～801203	〃 山ノ井845･846
71	〃 -B-P	南辺域	5	800410～800415	〃 今道63-3
103	〃 -B-P	南辺域	13	861104～861120	〃 今道62-9
109	〃 -B-O	南辺築地前面	1,790	870704～871224	〃 堂廻178-1他
111	〃 -B-P	南辺域	1,480	880104～880617	〃 堂廻176-1他
115	〃 -B-P	戒壇院南辺域	860	880708～881117	〃 堂廻195･199
116	〃 -A-F	戒壇院境内地	11	880919～880926	〃 堂廻192-2
117	〃 -B-O	南辺域	630	881110～890214	〃 今道59
118	〃 -A-H	西辺域	35	881205～881214	〃 堂廻190-2
119	〃 -B-N	東辺築地南東隅部	870	890322～890812	〃 今道54-1･2
120	〃 -B-I	推定北辺築地跡	360	890821～891030	〃 山ノ井893-3
121	〃 -B-L	推定東辺築地跡	1,235	891127～900516	〃 今道48-3
122	〃 -B-O	南辺築地南面部	630	900601～900917	〃 今道62
123	〃 -B-H	僧坊跡北側	7	900810～900811	〃 山ノ井847-1
126	〃 -B-L	講堂跡	800	891119～900809	〃 堂廻182
126補	〃 -B-L	講堂跡	250	040119～040521	〃 堂廻182
127	〃 -A-C	僧坊跡南西隅部	10	901114～901116	〃 堂廻184-1
130	〃 -B-O	塔・南門・回廊跡	867	920109～921222	〃 今道64他
144	〃 -B-H	北辺域	59	920729～920907	〃 山ノ井862-1
154	〃 -B-O	南辺域	22	940117～940125	〃 堂廻175-1
155	〃 -B-O	推定南辺築地跡	4	931224～940124	〃 堂廻192-1
163	〃 -A-E	戒壇院庫裡	278	941017～950206	〃 堂廻192-1
188	〃 -B-M	金堂跡	160	021001～030210	〃 堂廻182

(3) 調査組織

通算48回に及ぶ調査

観世音寺境内及びその周辺域の発掘調査は，昭和27年に行った金堂・講堂跡の調査から子院跡を含めると通算48回を数える。本格的な発掘調査は，昭和44年に福岡県教育委員会に文化課が発足し，大宰府史跡を中心に調査を進めてゆくようになってからであり，観世音寺の発掘調査も大宰府史跡を解明する目的の一環として実施することになった。

発掘調査を実施するに際しては，諮問機関として10名の委員で構成される「大宰府史跡発掘調査指導委員会」(後に「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改名し，委員も13名に増員）を設置し，その指導・助言のもとに計画的に進められた。

九歴の発足

九州歴史資料館が昭和47年に発足してからは調査体制も整備され，大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げ調査計画が立案された。しかしながら，当館における大宰府史跡の調査は，大宰府政庁跡や観世音寺のみならず，大野城跡・水城跡・学校院跡・筑前国分寺跡などの大規模かつ歴史的に重要な遺跡を数多く抱え，さらに大宰府政庁前面域の土地区画整理事業に係る緊急調査の対応に終始する有様であった。政庁前面域の調査においては，政庁

Tab. 2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員　（在任年順，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山　猛	考　古	九州大学教授	S43～S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43～S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43～S56
大田　静六	建　築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎　敬	考　古	九州大学助教授	S43～H2
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43～S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43～S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
小田富士雄	考　古	九州大学助手	S43～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野　久	国　史	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59～
澤村　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59～
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村　一	造　園	京都大学教授	S59～
◎横山　浩一	考　古	九州大学教授	S59～H11
渡辺　定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木　充	国　史	山口大学教授	S63～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63～
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷　正	考　古	九州大学教授	H4～
佐藤　信	国　史	東京大学教授	H6～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H8～
田中　琢	考　古	奈良国立文化財研究所長	H8～H10
町田　章	考　古	奈良国立文化財研究所長	H11～H16
山中　章	考　古	三重大学教授	H12～
田辺　征夫	考　古	奈良国立文化財研究所長	H17～

関連の官衙域が御笠川付近まで拡がっているという新たな事実が判明したが，それと引き替えに観世音寺及びその他の史跡の計画調査が遅々として進展しない状況にあった。その都度，年次計画を練り直し，指導委員会に諮るという有様であった。

また，観世音寺の発掘調査は，1970年の第５次調査から2003年の第188次調査までの33年間に及び，その間多くの職員が出入りした。それに加えて，平成11年度までは発掘調査成果を概

Tab. 3　観世音寺発掘調査関係者一覧

	役職	館長						副館長					参事							課長	参補		技術主査				主任技師					
西暦	名前＼次数	※鏡山 猛	※田村 圓澄	※吉久 勝美	※高橋 良平	※光安 常喜	森山 良一	※藤井 功	※石松 好雄	※宮小路賀宏	※柳田 康雄	橋口 達也	※渡辺 正気	※西村 強三	※八尋 和泉	※横田 義章	※栗原 和彦	石丸 洋	※横田賢次郎	児玉 真一	高橋 章	※倉住 靖彦	中間 研志	※亀井 明徳	※高倉 洋彰	※森田 勉	赤司 善彦	小田 和利	吉村 靖徳	小川 泰樹	齋部 麻矢	杉原 俊之	岡寺 良	加藤 和歳	酒井 芳司
1970	5																		○					◎									
1971	16																		◎		○			○									
1972	20								○										◎	○	○												
	23								○										○	○	◎												
1973	28								○										○	○	◎												
1975	39								○						△	△		△	○		○	△			◎	△							
1976	43								○							△		△	○		○	△			◎	△							
1977	45								○							△		△	◎		○	△			○	△							
	47								○									△	◎			△			○	△							
	48								○									△	○			△			○	◎							
1978	55								○									△	○		◎	△			○	△							
	61								○									△	◎		○	△			○	△							
1980	66								○									△	◎		○	△			○	△							
	70								○					△	△	△		△	○		○	△			○	◎							
	71								◎									△	○		○	△			○	△							
1986	103								○									△	○						◎	△	○						
1987	109								○					△	△	△		△	○						◎	○	○						
1988	111								○					△	△	△		△	◎							○	○		○					
	115								○									△	○							◎	○		○					
	116								○									△	○							○	◎		○					
	117								○						△	△		△	◎							○	◎		○					
	118								◎									△	○							○	○		○					
1989	119								○					△	△	△		△	◎								○		○					
	120								○					△	△	△		△	◎								○		○					
	121								○							△		△	◎								○		○					
1990	122											○		△		△	△	△	◎								◎		○					
	123											◎					△	△	○								○		○					
	126											○		△	△	△	△	△	◎								○		○		△			
	127											○					△		◎								○		○					
1992	130											○		△	△	△	△	△	◎									◎	○		△			
	144											△					△	△	△									◎	○					
1994	154																△	△	△									◎	○					
	155																△	△	△									◎	○					
	163														△	△	△	△	△									◎	○					
2002	188																	△	△		○							◎				△	△
2004	126補																	△	△		○							◎				△	△

凡例　－･－：在任期間，※：退職者，◎：調査主任，○：調査担当，△：調査関係者

要報告書という体裁で刊行し，正式報告書を先送りしてきた経緯がある。大規模遺跡では，ある程度広範囲に調査を行わないと遺跡の全体像を把握できず，報告書の度に従前の見解を訂正する必要が生じる恐れを避けるための措置ではあったが，実際の調査に携わった担当者も数人現役を引退しており，全く調査に携わっていない者が報告書に関わる状況となっている。こうした弊害を将来に残さないために，平成12年度以降は概要報告書ではなく，報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を刊行し，従前のやり方を改めている。

昨今は地方分権・構造改革・民営化という言葉がもてはやされ，県庁にも機構改革の波が押し寄せている。当館調査課も御多分に漏れず，以前は課長以下５名いた課員が平成16年度は２名までに削減され，平成17年度は名目上４名になったが，実働は３名という厳しい状況下にある。なお，大宰府史跡第５次・16次調査は，福岡県教育委員会文化課が調査を担当し，大宰府史跡第20次調査以降は九州歴史資料館調査課が発掘調査を担当し，現在に至っている。

観世音寺に係る発掘調査関係者は，Tab.3のとおりである。各個人の役職は，退職者については調査に関与した最終時点での役職，現役の者は平成16年度時点での役職を示した。

なお，平成17年度の『観世音寺－寺域編－』に係る報告書関係者は，下記のとおりである。

九州歴史資料館

＜総　括＞	館　長	森山　良一（福岡県教育委員会教育長兼務）
	副館長	濱田　信也
	参　事	副島　邦弘
＜庶　務＞	総務課長	浅野　健二
	副　長	松井　安彦
	主任主事	白谷　有三
＜実　務＞	調査課長	児玉　真一
	参事補佐	石丸　　洋
	参事補佐	小田　和利（執筆・編集）
	主任技師	杉原　俊之
	主任技師	岡寺　　良

＜整　理＞　大田千賀子　市川千香枝　中田千枝子　高田いく子　初山　淳子

なお，本報告書作成にあたり，観世音寺石田琳圓住職（故人），同石田琳彰住職，戒壇院柏木文正住職，太宰府市文化財課諸氏には有益な御教示を得た。末筆ながら，記して感謝いたします。

（小田）

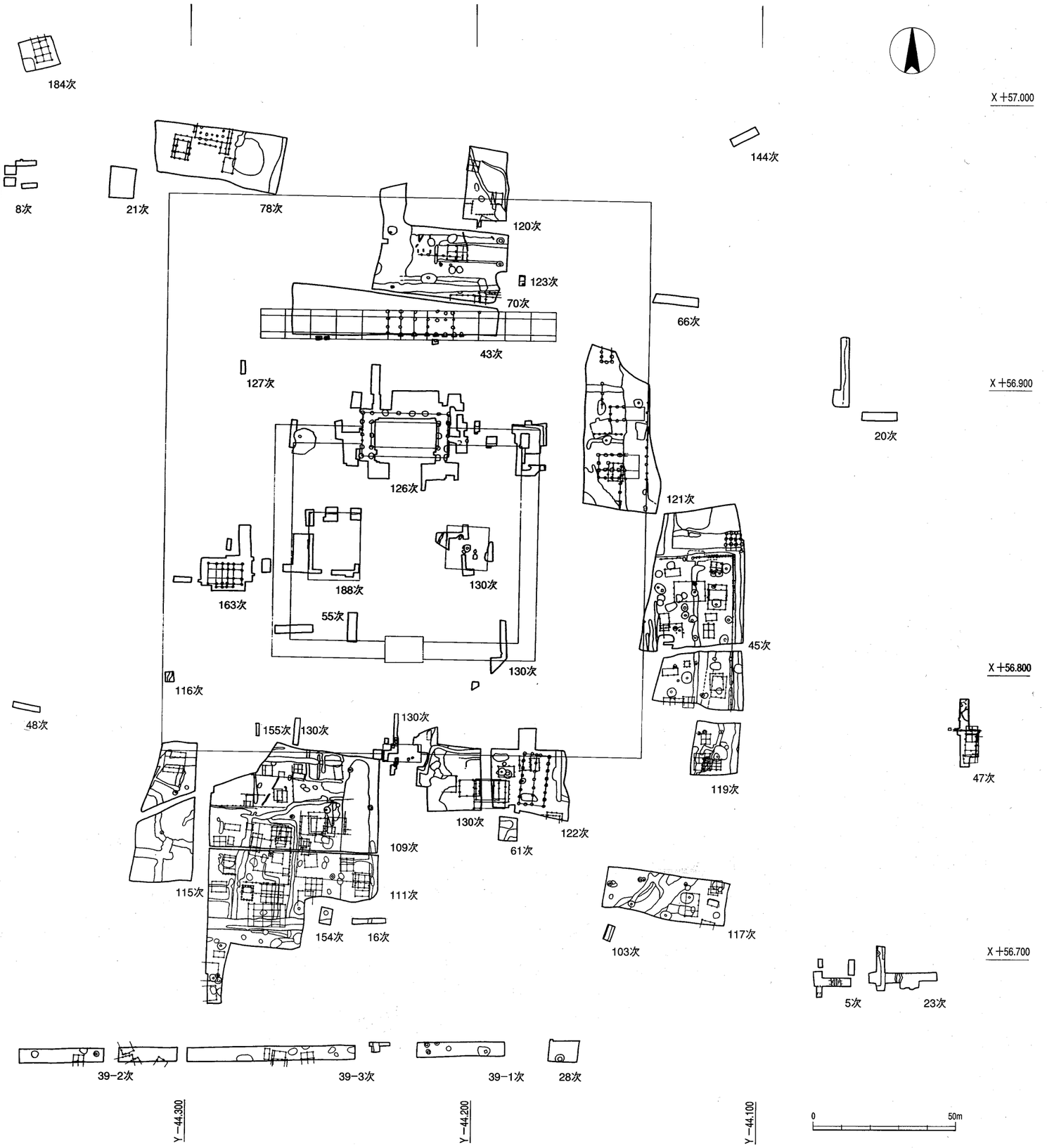


Fig. 2　調査区配置図（1/1,500）

Ⅱ　調査の概要

(1)　基本層序

今回の寺域編は，主要伽藍を除いた周辺部を南辺域・東辺域・北辺域・西辺域の４地区に区切り，各地区ごとに検出した遺構を報告するものである。各地区においては，土層の堆積状況が異なり，観世音寺全体の基本層序として一括できないので４地区ごとに記述を行う。

南辺域（Fig.3）

Fig.3-1は第109次調査区南壁の土層図で，南壁のほぼ中央付近の堆積状況である。基本層序は上層から表土（１層），床土（２層），茶灰色土（３層），暗褐色土（４層），淡茶色土（５層），黒灰色砂質土（６層），灰褐色砂質土（７層），黄白色粘土（地山）となる。４層の暗褐色土は床土下層の堆積土で，調査区全域にみられる。６層の黒灰色砂質土は遺構面を覆う土層で，北西部を除く全域に堆積している。この堆積土は発掘区の南端及び東側に向かって徐々に厚さを増している。

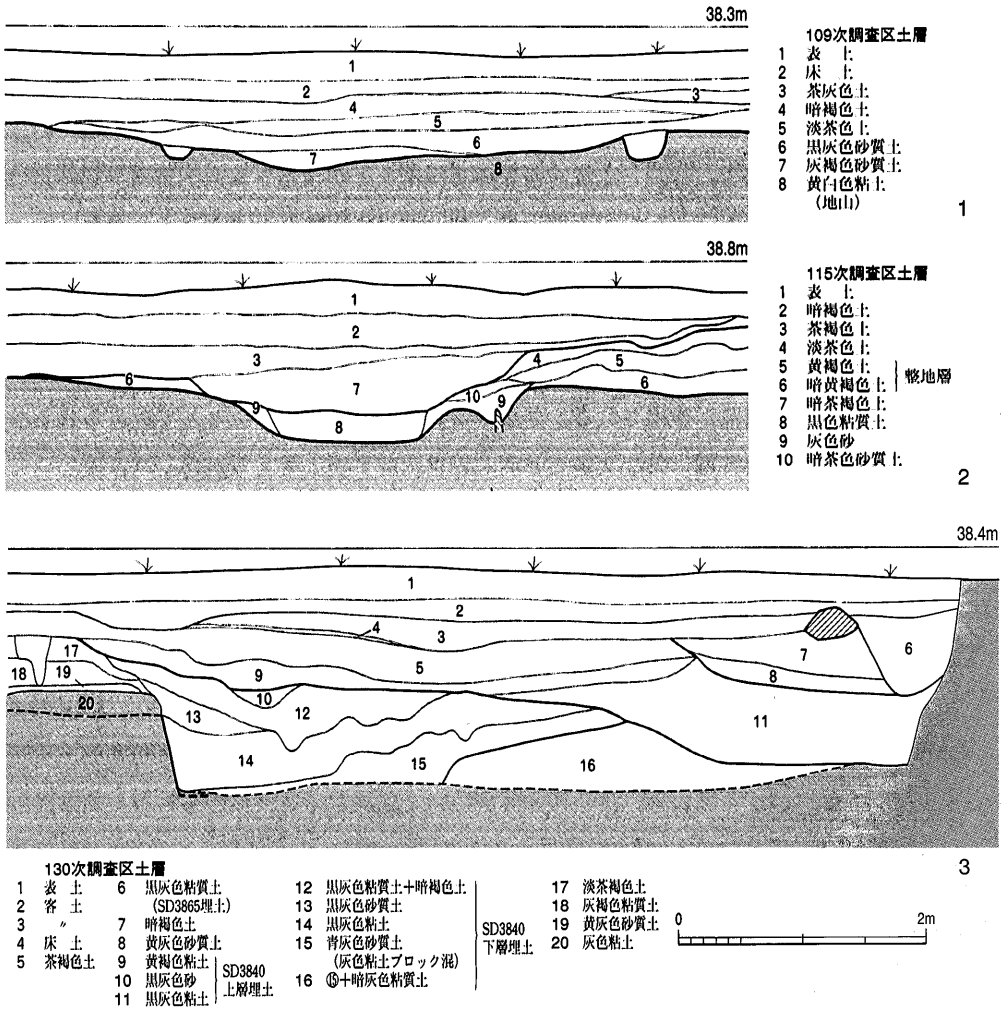


Fig. 3　南辺域土層図（1/60）

Fig.3-2は第115次調査区南壁土層図で，ＳＤ3333付近の堆積状況を示す。上層から表土（１層），暗褐色土（２層），茶褐色土（３層），淡茶色土（４層），黄褐色土（５層），暗黄褐色土（６層）を基調とし，８～10層はＳＤ3333の埋土である。調査区北側は表土・床土を除去するとすぐさま地山面に達する。南側には中～近世の遺物を包含する暗褐色土（２層）が堆積しているが，南側に向かって厚くなっている。この暗褐色土を除去すると溝・ピットが検出される。南東部には黒色粘質土及び黒灰色粘質土が厚く堆積した箇所がみられるが，第109次調査区側には拡がっておらず，部分的な堆積である。

Fig.3-3は第130次調査区南壁土層図で，ＳＤ3840付近の堆積状況である。基本層序は上層から表土（１層），客土（２・３層），床土（４層），茶褐色土（５層），淡茶褐色土（17層），灰褐色粘質土（18層），黄灰色砂質土（19層），灰色粘土（地山）が堆積している。６層はＳＤ3865埋土，７・８層はＳＫ3863埋土で，ともに茶褐色土から切り込んでいる。９～11層はＳＤ3840上層埋土で，12～16層がＳＤ3840下層埋土である。ただ，下層埋土の12層と13～16層とは堆積状況が異なり，12層が下層埋土の最終堆積層となっている。

東辺域（Fig.4）

Fig.4-1は第45次調査区中央部の土層図で，暗渠ＳＸ1310付近の堆積状況である。層序は上層から床土（１層），黒褐色土（２層），黄褐色土（３層），黄灰褐色土（４層），茶灰色土（５層），灰色粘砂（６層），青色粘土（７層），黒茶色粘土（８層），腐植土（地山）が堆積する。Ⅰ期（８世紀中頃）の遺構は，５層上面から掘り込まれる。Ⅱ期（12世紀前半～中頃）の遺構は４層から掘り込むもので，井戸・土坑・多数のピットなどが検出された。Ⅲ期（13～14世紀代）の遺構は２層から掘り込むもので，溝・柵・池・井戸・土坑などがある。

Fig.4-2は第119次調査区北西隅部の土層図で，溝ＳＤ1230付近の堆積状況である。土層は大きく暗褐色土（２層），黄褐色土（３層），暗茶褐色土（４層），明褐色土（５層）に分けられる。６・７層がＳＤ1230Ｂの埋土で，８・９層がＳＤ1230Ａの埋土である。黄褐色土を除去すると溝・ピットなどの遺構が検出される。３層の黄褐色土は明確な層位として捉えられる層位ではないが，形成された時期は第45次調査と同じ12世紀前半頃と考えられる。

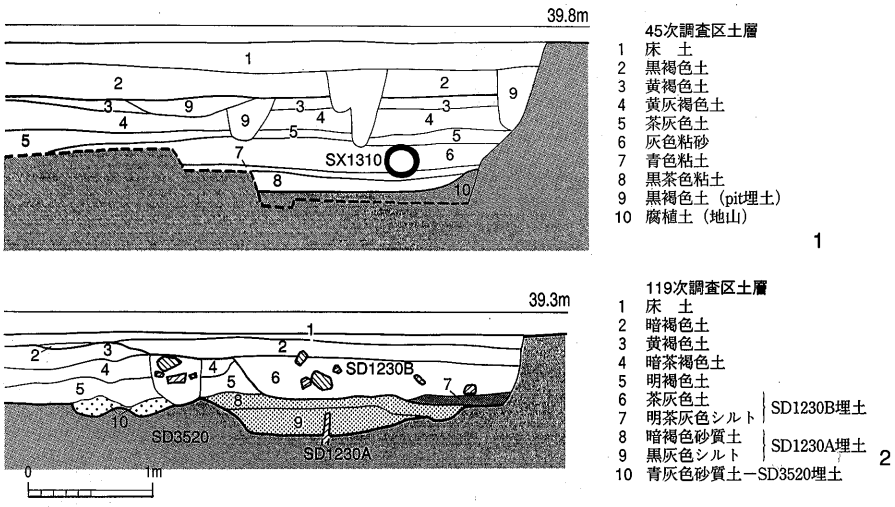


Fig. 4　東辺域土層図（1/60）

北辺域（Fig.5）

Fig.5は第120次調査区の南壁土層図で，井戸ＳＥ3570付近の土層堆積状況である。遺構との関係からすると，最上層（３層：茶灰色土），上層（４・５層：黒褐色土，６層：黒色土），中層（８層：淡茶色土，９層：明茶灰色土），下層（11層：黄褐色整地土）で，上層の黒褐色土には鎌倉時代の遺物を多く包含している。中層上面には土坑・多くのピットが掘り込まれ，その密度は高い。また，奈良・平安時代の遺構は11層の黄褐色整地土上面から掘り込まれている。

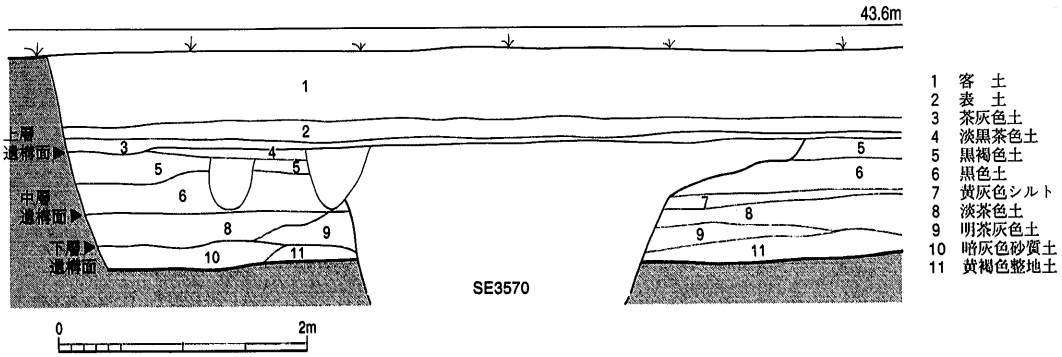


Fig. 5　北辺域土層図（1/60）

西辺域（Fig.6）

Fig.6は第118次調査区の北壁土層図で，溝ＳＤ3450近辺の土層堆積状況である。客土の下が暗褐色粘質土（２層）で，遺構はそれを除去して検出した。３～５層は溝ＳＤ3450の埋土である。

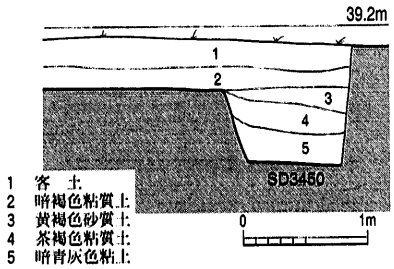


Fig. 6　西辺域土層図（1/60）

(2) 遺構の概要

遺構の概要についても，南辺域（第５・16・23・28・39-1・39-2・39-3・61・103・109・111・115・117・122・130・154次調査），東辺域（第20・45・47・66・119・121次調査），北辺域（第70・120・123・144次調査），西辺域（第48・118次調査）の４地区に分けて説明を加える。

１）南辺域

第５・23次調査

住宅建設に伴う事前調査として実施した。寺域を方三町（鏡山案）とした場合，推定寺域の南東隅部にあたり，「観世音寺文書」の記事からも注目される場所である。調査の結果，築地状遺構・石積・ピットなどを検出した。これらは平安後半～中世の時期で，東西方向の築地状遺構ＳＡ091は同位置に２回建て替えられている。位置的には問題はないが，版築土層は認められず，築地とするにはやや疑問が残る。

方三町の寺域

第23次調査区は第５次調査区とは道路を隔てた東側に位置する。ＳＡ091の延長線上にあた

るが，それに関する遺構の検出はなかった。上層遺構として，

築地状の遺構ＳＡ467

調査区中央で築地状遺構ＳＡ467，北西隅で井戸ＳＥ480を検出した。下層遺構としては，礫敷の通路状遺構ＳＸ487，柱列ＳＡ488を検出している。

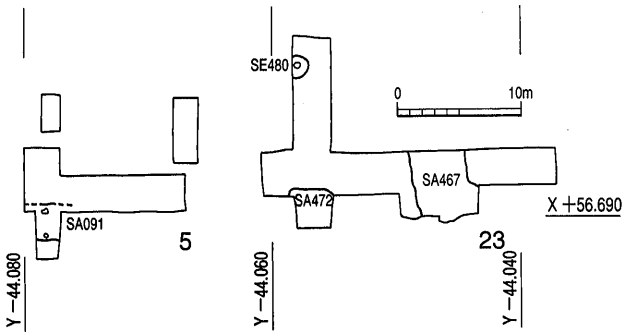


Fig. 7　第５・23次調査区（1/600）

第28次調査

住宅建設に伴う事前調査で，寺域南辺部と条坊との関連について把握することを目的とした。調査の結果，中世の円形石積土坑ＳＫ521と鋳造に関わる石組区画ＳＸ525を検出した。遺構上面には保土穴が２箇所あり，銅滓が出土していることから工房跡とみられる。

工房跡か

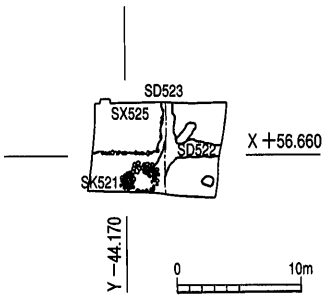


Fig. 8　第28次調査区（1/600）

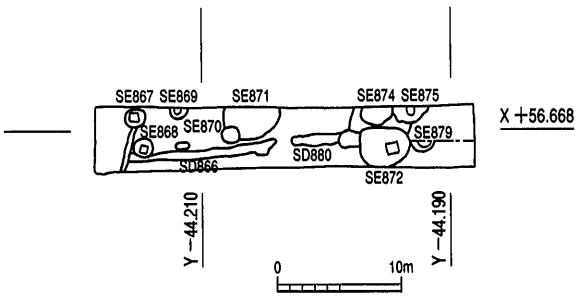


Fig. 9　第39-1次調査区（1/600）

（第39-1・2・3次調査）

県道拡幅工事の事前調査として実施した。当該地は『筑前国続風土記附録』の挿絵によると「観世音寺公文所別当」の屋敷が存在した場所で，掘立柱建物９棟，井戸11基，土坑55基，溝10条，保土穴２基などを検出したが，調査区の幅が５ｍと狭いこともあり，公文所別当屋敷については判然としなかった。

公文所別当の屋敷跡か

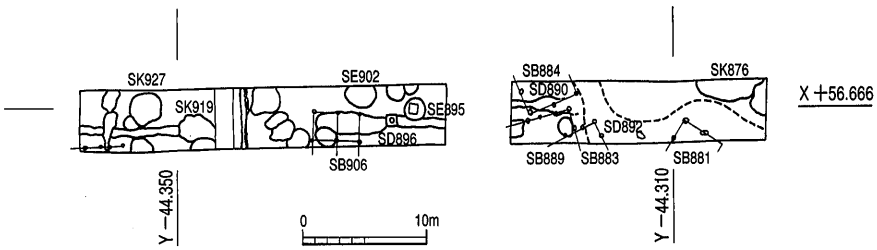


Fig. 10　第39-2次調査区（1/600）

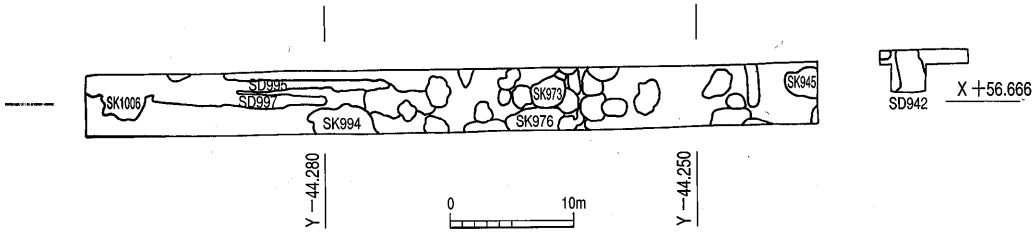


Fig. 11　第39-3次調査区（1/600）

第16・109・111・154次調査

第16次調査は現参道の西側に接する部分で，現状変更（車庫建設）に伴うものである。旧参道についての知見を得る目的で調査を行った。南北方向の石組溝ＳＤ363を検出したが，鎌倉後半頃のものである。調査範囲が狭小であり，詳細は不明。

第109・111次調査は南辺築地及びその前面域の状況を把握することを目的とした計画調査である。調査年度は異なるが，両調査区は南北に接し，遺構も連続しているので同時に報告する。遺構は大きく３期３層に及んでいる。Ⅰ期は９～10世紀代，Ⅱ期は11～13世紀前半代，Ⅲ期は13世紀後半代～16世紀代に位置付けられる。

Ⅰ期で明確に捉えられるのは，井戸ＳＥ3150のみである。Ⅱ期には掘立柱建物・井戸・土坑などの遺構があるものの，東西溝ＳＤ3300以南で収まり，溝以北へは拡がらない。この事は，Ⅰ期にはこの地域が空閑地であったこと，Ⅱ期にはＳＤ3300が寺域の東西境界であったことを

Ⅰ期は空閑地だった

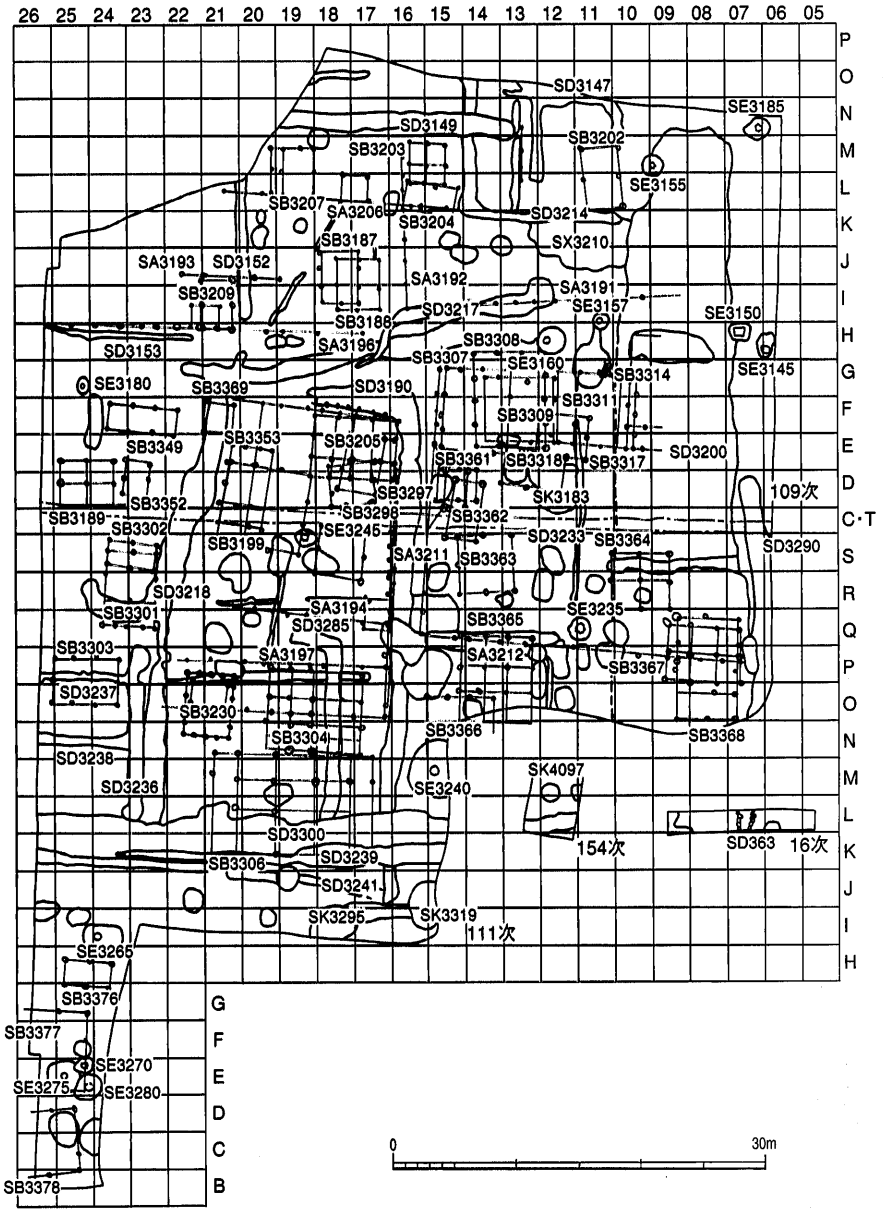


Fig. 12　第16・109・111・154次調査区（1/600）

仏具製作工房

示している。また，土坑・落込からは仏像・仏具類の鋳型が出土しており，近辺に仏具類を鋳造した工房の存在が指摘できる。

Ⅲ期には区画溝及び柵で囲繞された掘立柱建物・井戸・土坑が存在し，中世集落の一端が窺える。南北溝ＳＤ3200は現在の参道と平行して掘削され，参道の西側溝とみられる。埋土下層からは「嘉元二年（1304）」銘の卒塔婆が出土しており，中世には南門から南に参道が延びると言う現在の状況に近いものであったと考えられる。

嘉元二年銘木簡

第154次調査は現状変更（住宅改築）に伴い実施した。第111次調査地の南隣接地で，東西溝ＳＤ3300の延長と土坑，ピットなどを確認したにすぎない。

第115次調査

現戒壇院参道の西側に接する地区で，第109・111次調査区の西側にあたる。第109次調査において明らかにし得なかった南辺築地を把握する目的で行った計画調査である。調査の結果，古代の遺構は全く存在せず，13世紀後半～14世紀代の交差する数条の溝及び掘立柱建物・井戸が検出されたのみである。この溝の規模・形態は，第109・111次調査区の区画溝と類似しており，建物は１棟しか検出されなかったが，建物を囲繞する区画施設と考えられ，中世の集落が戒壇院前面以西に拡がっていることが十分予測される。

中世集落は戒壇院以西にも拡大

懸案の南辺築地に関する遺構は検出できなかったが，東西溝ＳＤ3340以北には主立った遺構は延びておらず，第109次調査と同じ結果を呈することからＳＤ3149・3340の北側に南辺築地を想定しても強ち無理はないものと思われる。

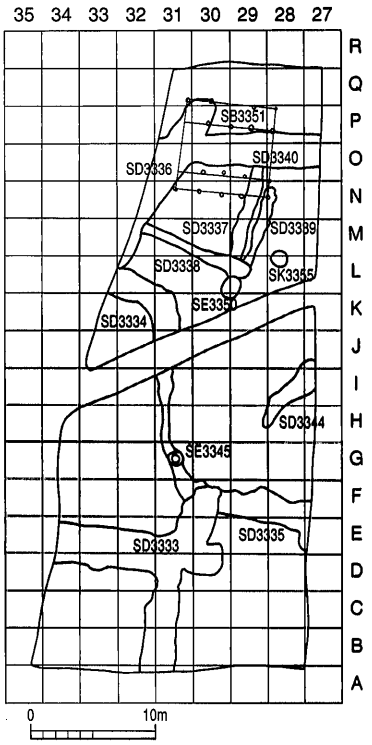


Fig.13　第115次調査区（1/600）

第61・122・130次調査

第61次調査は史跡環境整備（便所設置）に伴う現状変更として行った。狭小な調査区で，溝・土坑を検出したに過ぎない。

第122・130次調査は南辺築地及びその前面域の状況を把握することを目的とした計画調査である。

調査の結果，７世紀末～８世紀前半代の掘立柱建物ＳＢ3660，井戸ＳＥ3680を検出した。建物は

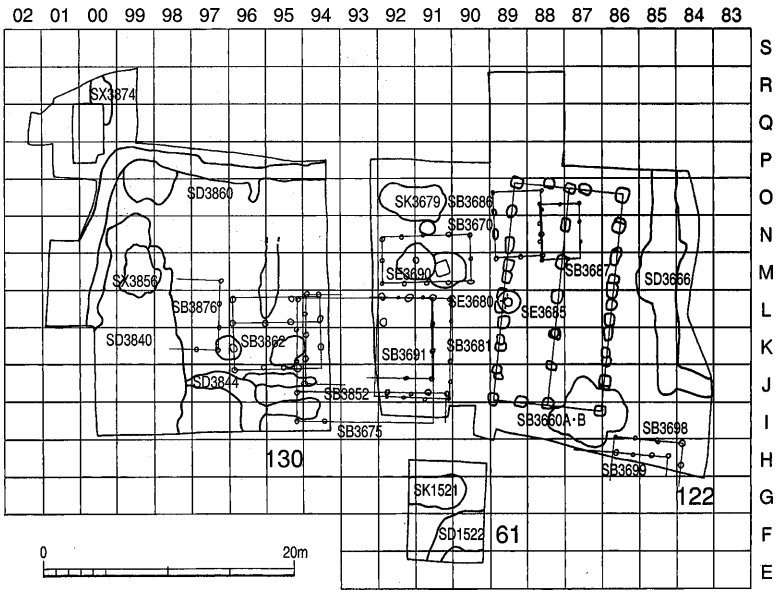


Fig.14　第61・122・130次調査区（1/600）

年代的に落慶以前の存在であること，推定伽藍中心線から東へ6度傾くこと，掘方に比して柱痕が小さいこと，柱掘方の並びがやや変測的であることなどから一般的な建物とは考え難い。また，同時存在した井戸中からは建築部材，建築時に使用する道具，藤葛の縄索が出土したことから，観世音寺建設に際して設けられた仮設事務所的性格の建物と判断された。

造観世音寺事務所

第130次調査区は第122次調査区に西接し，上層遺構として埋甕・埋桶・石組溝及び推定南門跡を鉤形に屈曲して流れる溝ＳＤ3865などがある。下層遺構としては，掘立柱建物・土坑及び第109・111次調査検出の南北溝ＳＤ3200と対になる溝ＳＤ3840がある。ＳＤ3840からは「元亨三年（1323）」紀年銘木札が出土しており，両溝の同時存在を裏付ける。当調査区においても南辺築地に関する痕跡は得られなかったが，ＳＤ3855・3860・3865何れの近世溝も南門を避けるかの如く屈折して流れていることから，この付近に南門及び南辺築地が想定される。

元亨三年銘木簡

第103次調査

住宅改築に伴う現状変更として実施した。『筑前名所図会』の挿絵によると，当該地付近には小さな社が描かれ，「ぎおん」と記されている。現在でも，その参道の名残がみられる。この様なことから，古代・中世観世音寺に関連する遺構の検出を目的として調査を行った。調査の結果，12世紀初頭に埋没したとみられる溝１条を検出したに過ぎず，調査区も狭小であるため溝の規模・性格についても不詳。

ぎおん社

第117次調査

当該地は鏡山氏条坊復原案によれば観世音寺寺域内に含まれ，条坊で呼称すると左郭四条七坊にあたる。『観世音寺文書』には，長徳２年（996），観世音寺に新たに施入された土地として左郭四条七坊の土地がみえる。寺地と郭地が相交わる所とされ，その四至が記載されていることから条坊復原の有力な手掛かりとされてきた。

四至の範囲

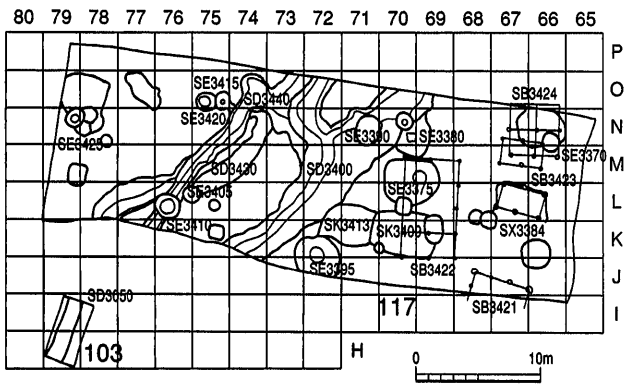


Fig. 15　第103・117次調査区（1/600）

調査の結果，３期（９～14世紀）にわたる溝・井戸・土坑・多数のピットなどの遺構を検出したものの，寺域を明示する遺構は捉えていない。

２）東辺域

第20次調査

寺域東辺の北部にあたる。調査の結果，溝状遺構ＳＤ435と石垣ＳＸ437を検出したが，いずれも中世のもので，古代観世音寺と関連するものはみられなかった。

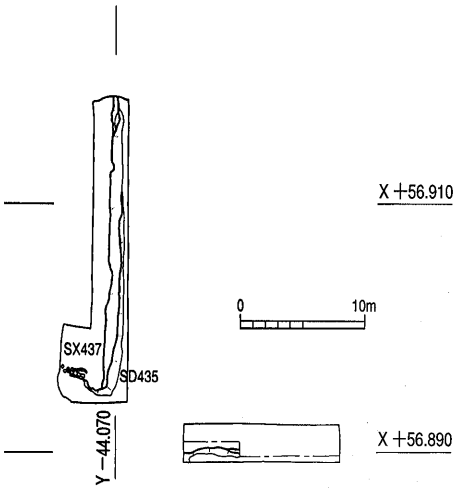


Fig. 16　第20次調査区（1/600）

第47次調査

住宅建設に伴う事前調査として実施した。推定寺域に東接し，

少弐氏の居館跡か

「御所ノ内」と言う小字名から少弐氏に関連する遺構の存在が考えられた。検出した遺構は，13世紀代の柵２条，掘立柱建物６棟，井戸１基，土坑４基，溝１条などである。狭小な調査区であるため即断はできないが，時期的にも少弐氏関連の遺構である可能性が考えられる。

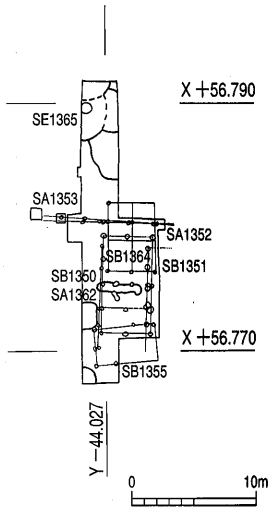


Fig.17　第47次調査区（1/600）

第45次調査

東辺築地及びその近辺の状況を把握することを目的とした計画調査である。東辺築地については残念ながら検出できなかったが，古代～中世における観世音寺東辺地域の状況を幾ばくか垣間見ることができた。

遺構は大略３期に区分され，第Ⅰ期は８世紀中頃，第Ⅱ期は12世紀前半～中頃，第Ⅲ期は13～14世紀初頭

東院・厨□銘墨書土器

における。墨書土器には「東院」・「厨□」があり，同施設の存在が窺える。また，多数の鋳造関連遺物の出土により，近辺に鋳造工房が存在したことが知られる。

唐三彩の出土

さらにＳＤ1300出土の唐三彩壺は，盛唐期よりやや降る時期であるが，優美な出来栄えであった。こうした墨書土器・特殊品の出土は，この場所が観世音寺と密接な関係にあることを物語っている。Ⅲ期には石組溝と柵で区画された中に多数の掘立柱建物・井戸・土坑が掘削され，中世には大きく変貌している。

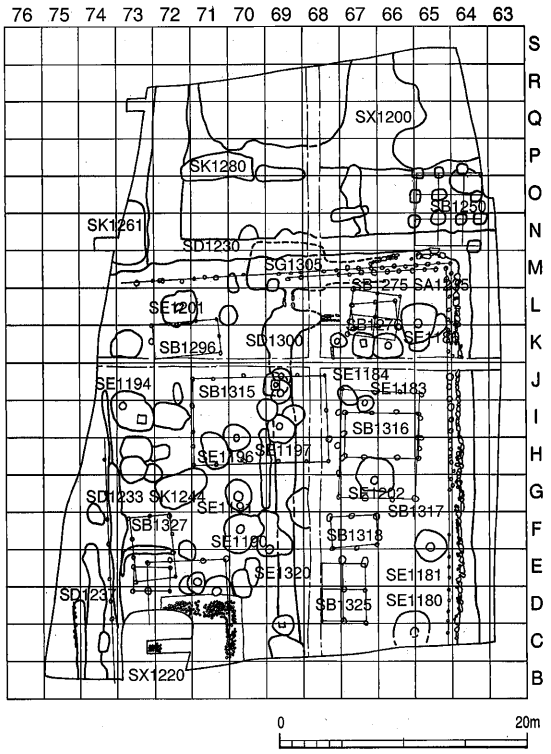


Fig.18　第45次調査区（1/600）

第66次調査

推定東辺築地の北側隣接地で，現状変更（住宅改築）に伴い実施した。当該地が東辺築地の推定場所にあたるため，築地遺構の検出を目指した。調査区の東端部で落込を検出したが，埋土は地山の黄褐色粘質土に類似した土が堆積しており，遺物の出土はなかった。結果的に，東辺築地に関する遺構は削平により遺存していないものと判断された。

第119次調査

第45次調査区の南隣の調査区で，第45次調査で明らかにし得なかった東辺築地に関して知見を得ることを目的とした計画調査である。調査の結果，第45次調査同様，３期の遺構を検出し

た。Ⅰ期は8世紀後半～11世紀後半代，Ⅱ期は12世紀前半代，Ⅲ期は12世紀後半～14世紀代である。注目される南北溝ＳＤ1300は11世紀まで降るものであり，東辺築地に関連する溝ではない。また，Ⅲ期の石組溝ＳＤ1230についての性格も明確にできなかった。

第121次調査

本次調査も東辺築地及び東辺地域の状況把握を目的として行った計画調査である。調査の結果，伽藍推定中軸線から東に84.8mの箇所で南北方向の柵ＳＡ3625を検出した。この距離は『資財帳』でいう南辺築地57丈（171m）の半分の距離85.5mに近似する数値である。版築積土による築地遺構ではないため，すぐさまＳＡ3625を東辺築地と断定できなかったが，築地と同様な役割を果たす板塀と考えた。

東辺築地は板塀

また，柵の内側では8世紀後半～9世紀中頃の掘立柱建物3棟，柵3条，それに9世紀前半～中頃の鍛造遺構ＳＸ3640が営まれている。「西院」銘墨書土器が出土しており，第45次出土の「東院」銘墨書土器と対をなすものとして，これら建物との関連が注目される。

「西院」銘墨書土器

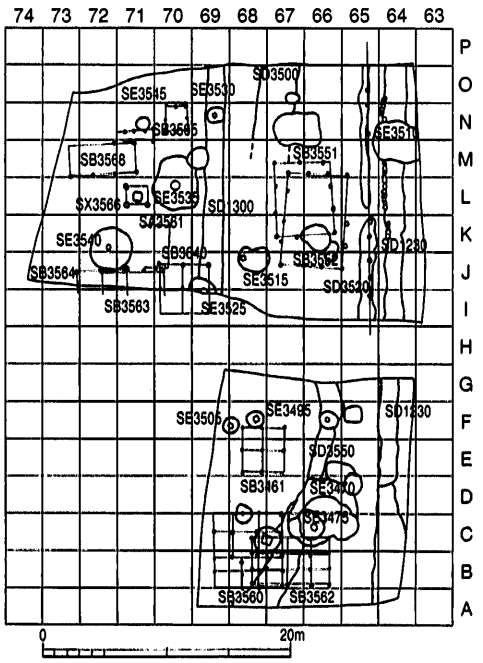


Fig. 19　第119次調査区（1/600）

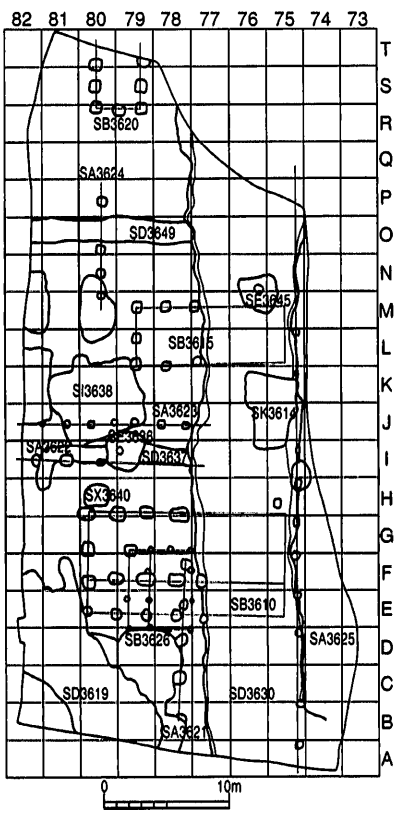


Fig. 20　第121次調査区（1/600）

3）北辺域

第70次・第123次調査

第43次調査で大房建物ＳＢ1080を検出していたため，その後方に推定される小子房の確認を目的として調査を行った。調査の結果，上層には中・近世の遺構が錯綜しており，古代の遺構の検出は困難を極めた。小子房に関する建物掘方などは見られなかったものの，規則的に並んだ土坑・溝によって区画された細長い空閑地，その空閑地の地下に埋設された数条の瓦組暗渠

瓦組暗渠

小子房が存在したが

の存在は，何らかの構造物が存在した可能性を示唆し，墨書土器・硯・瓦などの出土遺物は，小子房の存在を裏付ける。

第123次調査は浄化槽埋設に伴い調査を行った。狭小な調査区であったが，第70次調査検出のＳＤ1786に接続すると考えられる溝ＳＤ3702と柱根１個を検出した。

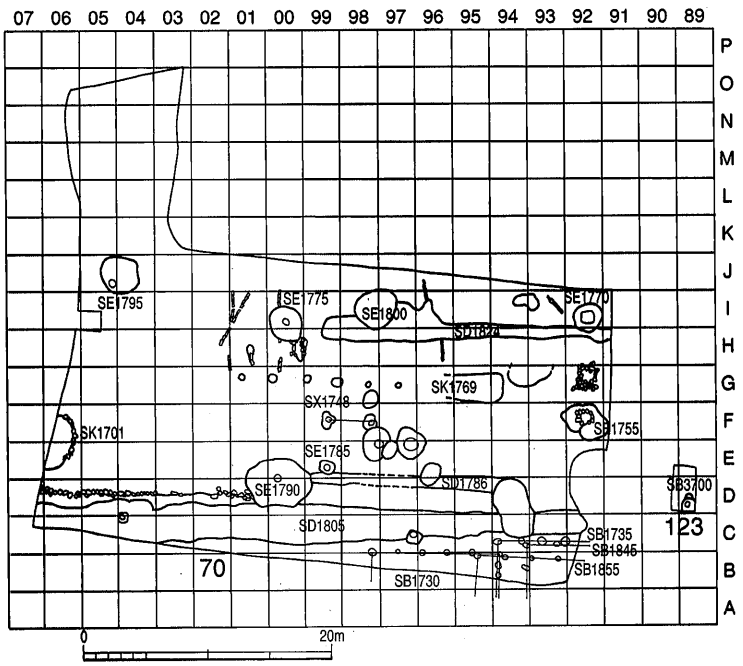


Fig. 21　第70・123次調査区（1/600）

北門礎石

第120次調査

第70次調査地の北側に接し，北辺築地推定地のほぼ中央部にあたる。北辺築地関連遺構の検出を目的として実施した計画調査である。かつて，この地付近から北門の礎石とされる軸擦り穴を有する礎石が発見されており，そのことからも注目される地域であった。調査の結果，奈良，平安後期，鎌倉期の遺構を検出したものの，築地に関する遺構は検出されなかった。

第144次調査

寺域の北東部にあり，住宅改築に伴う現状変更として実施した。調査地は小丘陵をカットして平坦地を造っており，遺構の存在が予測されたが，14～15世紀の遺物が若干出土した程度であった。

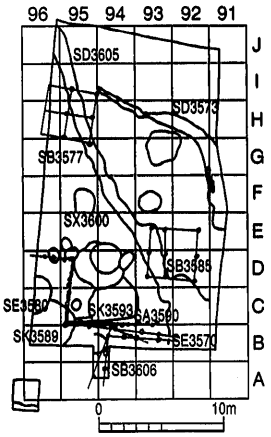


Fig. 22　第120次調査区（1/600）

4）西辺域

第48次調査

ＳＤ205は学校院との境界線

第９次調査で検出した南北溝ＳＤ205は，学校院と観世音寺の境界線の役目を果たす。溝の規模等を把握するために調査を行った。その結果，ＳＤ205の東岸とみられる肩部を検出した。この肩部が溝の東岸とすると幅14m程になる。

第118次調査

調査面積が狭小なこともあり，顕著な遺構は確認できなかった。

（小田）

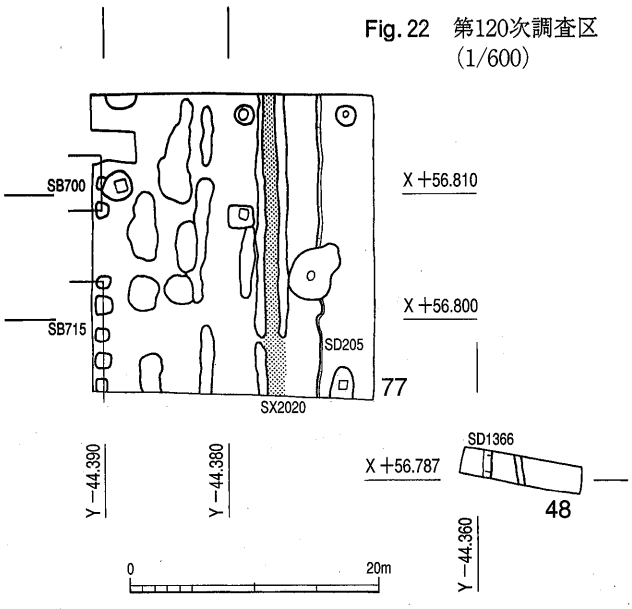


Fig. 23　第48・77次調査区（1/600）

Ⅲ　寺域の調査

鏡山条坊復原案によると，観世音寺は方三町の寺域が推定されている。主要伽藍は築地によって囲繞されており，築地から推定寺域までの間を東西南北の４地域に分けて報告する。

南辺域は推定南辺築地から県道筑紫野古賀線までの間とし，北辺域は僧房跡北側の東西道路から推定北辺築地間とした。東辺域は推定東辺築地の東西部分で，西辺域は推定西辺築地から学校院との推定境界付近までとした。

なお，出土遺物に関しては，『観世音寺－遺物・考察編－』で報告する。従って，各遺構の時期については大枠を示し，詳細な時期については遺物・考察編に譲る。

(1)　南辺域

南辺域では第５次・16次・23次・28次・39-1～３次・61次・71次・103次・109次・111次・115次・117次・122次・130次・154次調査の17次にわたる調査を実施している。

１）築地・柵

ＳＡ091Ａ・Ｂ（Fig.24，PL.3）

第５次調査区の南西隅で検出した東西方向の築地で，第Ⅱ整地面に構築している。新旧二時期あり，古期をＳＡ091Ａ，新期をＳＡ091Ｂとした。古期は基底部幅2.25mで，寄柱は２個の検出に留まる。礎石形式のもので，礎石には25×35cmの偏平な花崗岩を用いる。柱間は心々で2.05mを測る。狭小なトレンチでの確認であるため桁行規模は不詳。

二時期の築地

寄柱は礎石形式

ＳＡ091Ｂは基底部幅2.2mで，寄柱はＳＡ091Ａより0.2m程南側にずらしている。寄柱礎石は北側のみの遺存であるが，南側は抜き取られたものであろう。柱間は心々で1.97mを測る。礎石の表面は火熱により赤変し，焼壁片とみられる焼土塊も出土しており，新期の築地は火災により崩壊したものと考えられる。また，築地に伴う瓦の出土がないことから屋根は板葺ないしは草葺とみられる。当築地も桁行規模は不詳。

屋根は板葺か草葺

ＳＡ095（Fig.24，PL.4）

第５次調査区の中程で検出した南北方向の築地で，第Ⅴ整地面に構築している。積土は暗茶色砂質土・茶灰褐色粘質土を積んでいるが，版築を呈するものではない。寄柱は掘立柱形式で，掘方内には５～10cm大の礫を充填していた。築地の基底部幅3.1m，寄柱の心々距離は2.27mを測る。築地の東半部が砂礫層で覆われていることから，御笠川の氾濫がこの近辺まで及んだことが窺われる。

寄柱は掘立形式

御笠川の氾濫

ＳＡ467（Fig.25，PL.8-1）

第23次調査区の中央部で検出した築地で，上層の遺構である。南北両端が調査区外に延びるため長さは4.7mの検出に留まる。築地基壇の版築土として黄色土（５層），暗灰茶色砂質土（６層）を交互に積んでおり，基部幅は4.6mを測る。寄柱は掘立柱形式で，柱穴は径0.5mの円形を呈し，深さ0.2～0.3m。柱間は心々で2.76mを測る。柱穴の中には小石を詰めており，根固めとして入れたものであろう。ＳＤ468は築地に伴う西側溝であるが，東側には側溝を設けて

寄柱は掘立形式

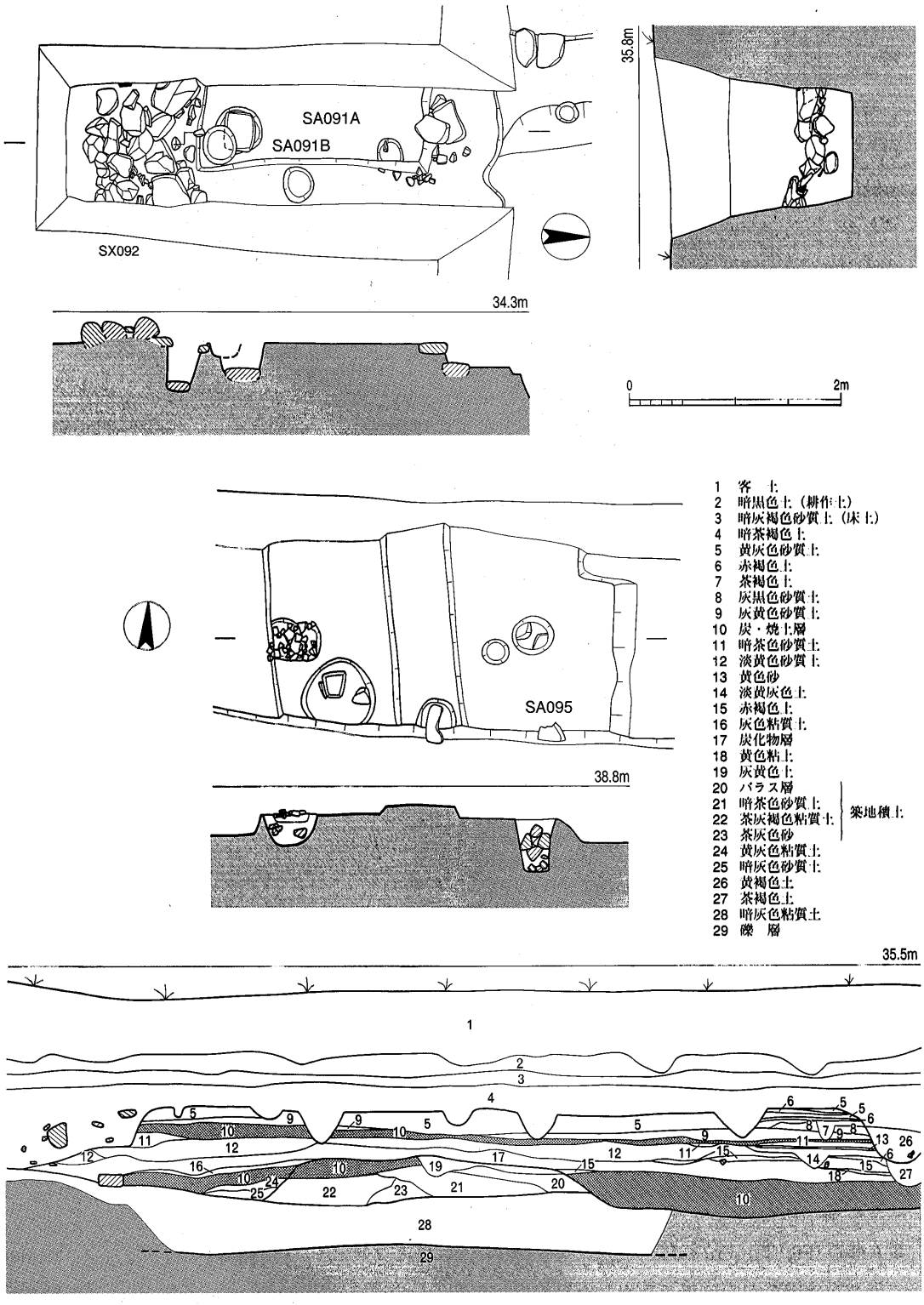


Fig. 24　築地ＳＡ091・095実測図（1/60）

いない。また，築地下層には茶色粗砂がみられ，河川の氾濫後に築いている。調査区が狭小なこともあり，第５次調査で検出した東西築地ＳＡ091との関係は明らかではない。

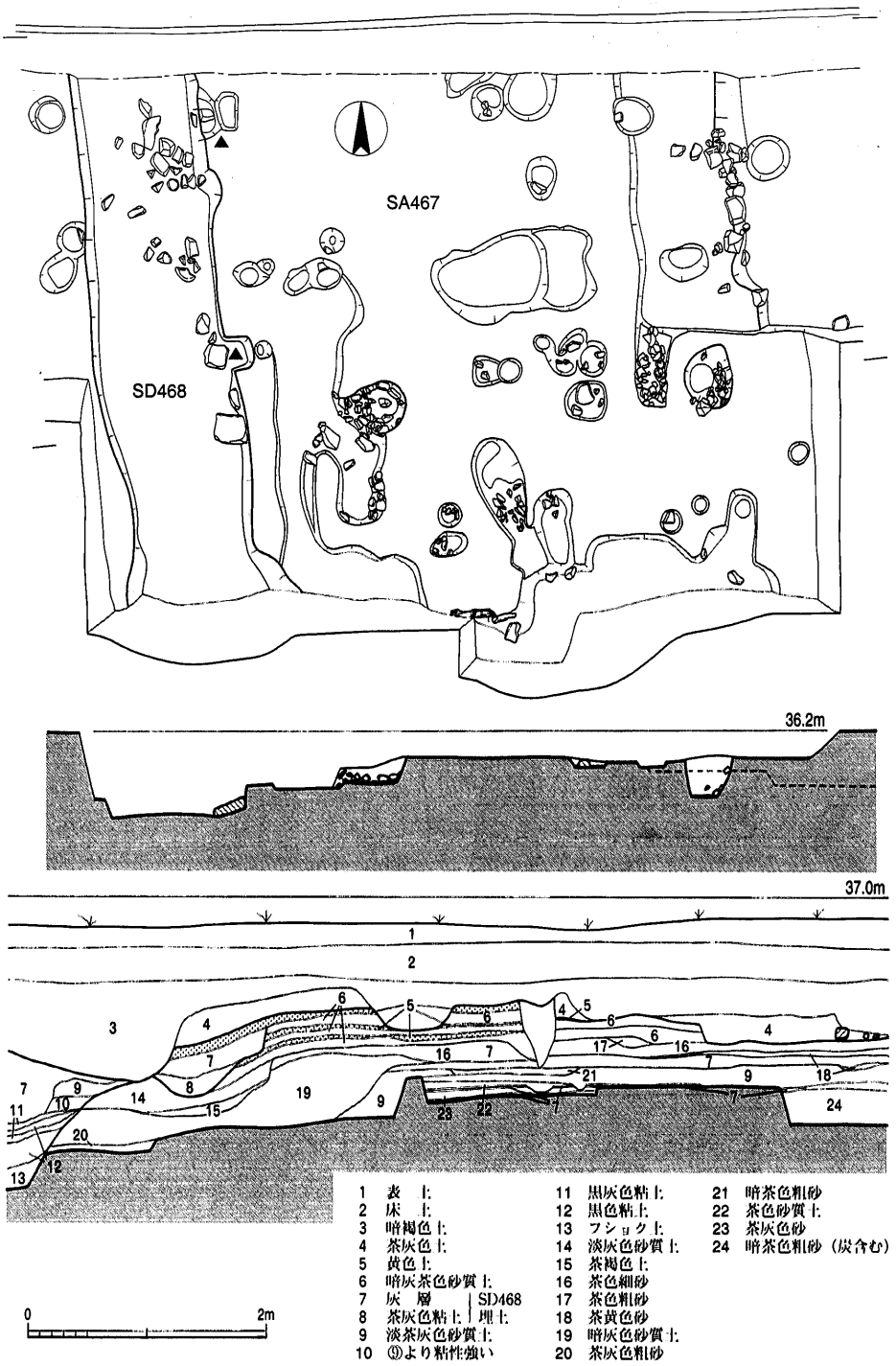


Fig. 25 築地ＳＡ467，溝ＳＤ468実測図（1/60）

ＳＡ472（Fig. 26, PL. 8-2）

第23次調査区の西側で検出した上層の築地である。石列が検出されたため南側に拡張したが，基部幅などつかめていない。北側面には角礫を並べており，長さ2.9mを測る。積土は黄色粘質土，暗茶灰砂質土を積んでおり，上面には焼土層が堆積していた。狭小な調査区であったため寄柱は検出できていない。また，ＳＡ467とは同一レベルで検出しており，両者の間隔は約５mを測る。同時期に存在したとすると両者間に通路を想定することが可能である。 通路が存在

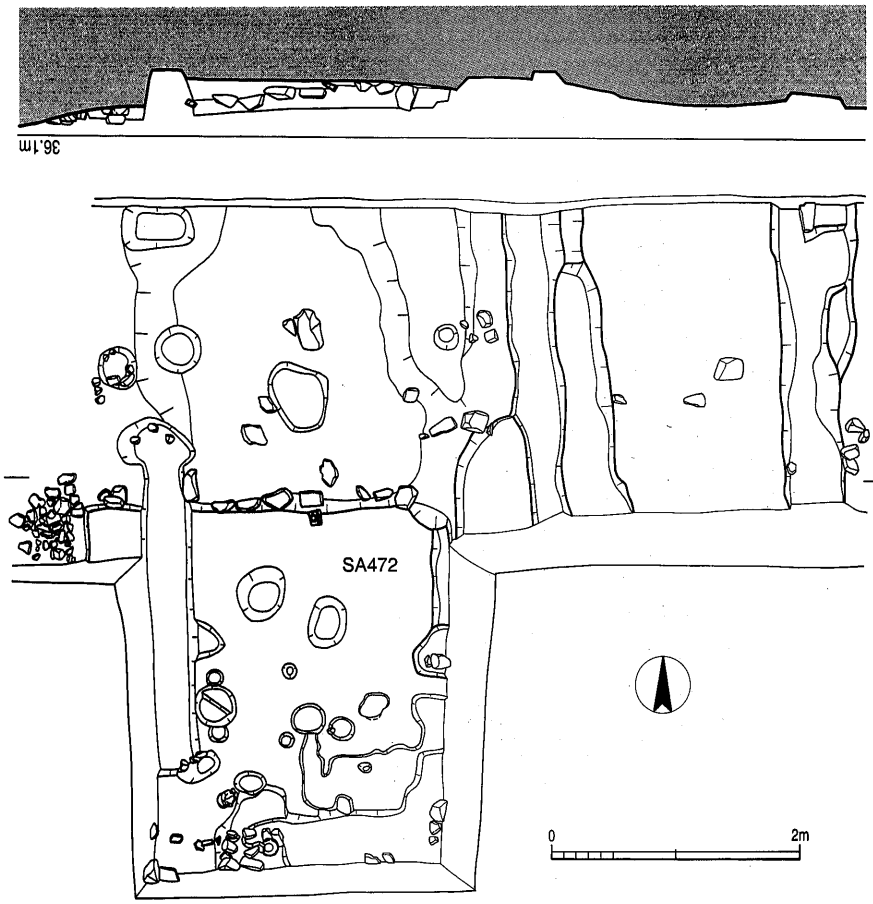


Fig. 26　築地ＳＡ472実測図（1/60）

ＳＡ488（Fig. 93，PL. 9-4）

第23次調査区の南北Trで検出した下層の柱列で，井戸ＳＥ480に切られ，ＳＸ487と重複する。柱穴５個を確認したが，北端の柱穴も伴うとしたら井戸の掘方部分で屈折することになる。柱穴は隅丸方形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.15～0.35mを測る。

ＳＡ940（Fig. 28）

第39-3次調査２Trの東側で検出した南北方向の柵で，４間以上を検出した。長さにして3.3m分であるが，南北両側に延びるものと思われる。柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さ0.3m前後を測る。柱間は0.7～1.0mと若干ばらついている。柵の方向は真北を示す。

ＳＡ3191（Fig. 27）

第109次調査区の北東側に位置する東西方向の柵で，長さ19m分を検出した。ＳＤ3217・3200と重複するが，一部溝に切られ柱穴を失うため柵が先行するものと思われる。柱穴は11間分７個遺存し，柱間は1.5～1.75mの間隔。径0.25～0.4mの円形を呈し，深さ0.2m前後を測る。

区画施設

なお，南北柵ＳＡ3192とは直交関係にあり，両者で南門南西隅の一角を区切る。内部施設として掘立柱建物ＳＢ3202，井戸ＳＥ3155が存在する。柵の方位は東から北に２度30分振っている。

ＳＡ3192（Fig. 27）

ＳＡ3191と直交関係にある南北方向の柵で，ＳＢ3204・ＳＤ3217と重複する。柱間７間分の長さ12.3mを検出したが，東西溝ＳＤ3149以北へは延びない。柱穴は径20cm，深さ20cm前後とＳＡ3191に比してやや小振りのものであった。柱間間隔は1.7～1.9mを測る。柵の方位は北か

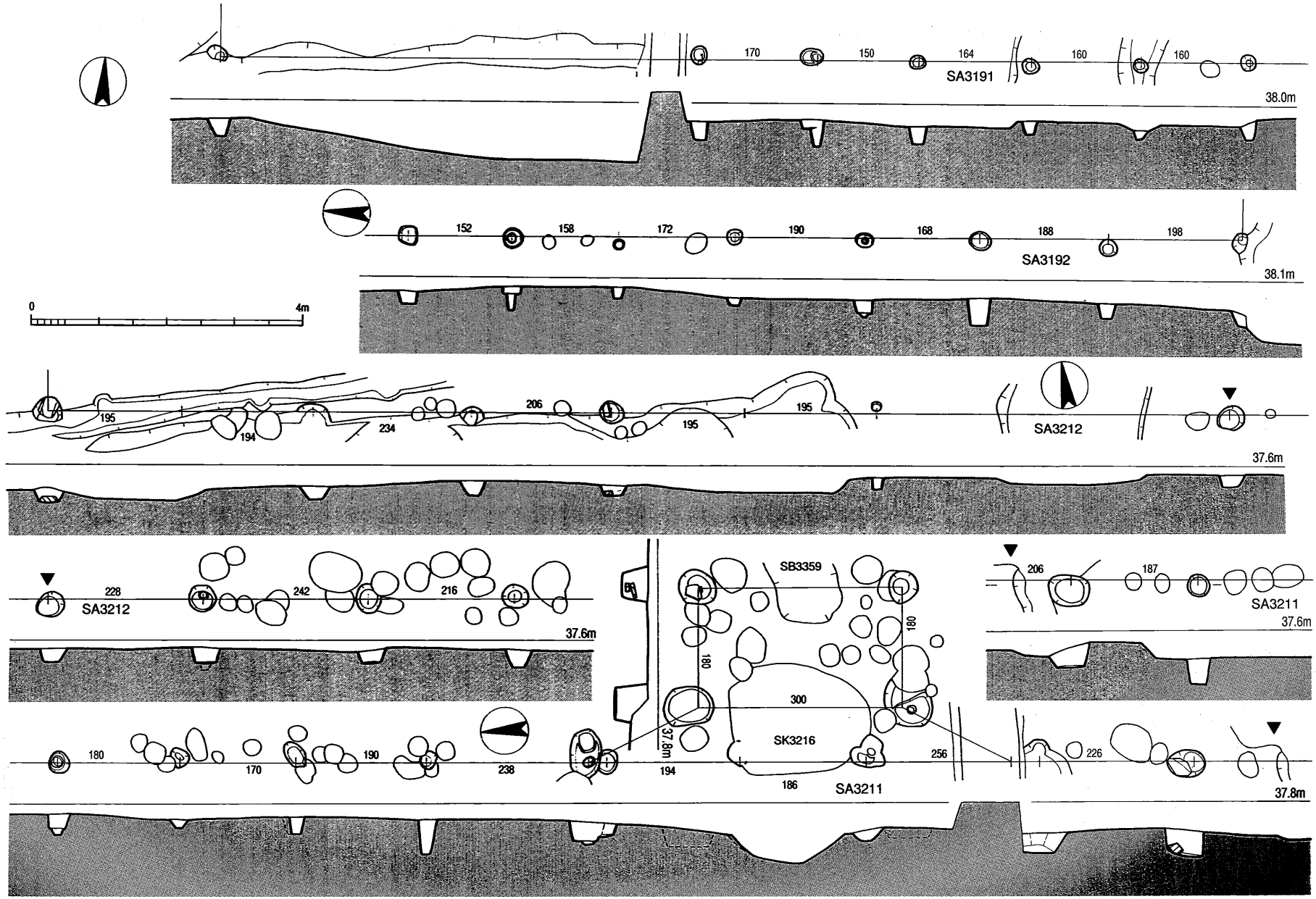


Fig. 27　南辺域柵実測図①（1/80）

ら西へ3度振っている。

ＳＡ3193（Fig.33）

第109次調査区の北側に位置し，ＳＤ3149と重複する。東西方向の柵で，4間分（4.3m）を検出した。柱穴は円形を呈し，径0.15～0.3m，深さ0.2～0.35m，柱間0.8～1.2mを測る。柵のすぐ南に位置するＳＢ3203の目隠塀と考えられる。

目隠塀

ＳＡ3194（Fig.29）

第111次調査区の北西側に位置し，ＳＤ3234と重複する。東西方向の柵で，ＳＡ3195以東には延びない。7間分（12.5m）で北に折れ，ＳＡ3208と接続する。東端柱穴から西に5.5mの箇所は間口が2.0mと広くなっており，門を想定できる。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3m，柱間間隔1.2～1.6mを測る。柵の方位は東から南に2度振っている。ＳＡ3194・3208の中には掘立柱建物ＳＢ3219と井戸ＳＥ3245があり，それを囲む施設とみられる。

区画施設

ＳＡ3195Ａ・Ｂ（Fig.28，PL.26-1）

第109次調査区の南端から第111次調査区の中程にかけて検出した。南北方向の柵で，ＳＤ3190の西肩部と併走している。溝寄りの方をＳＡ3195Ｂ，やや西側のものをＳＡ3195Ａとした。両者には切合い関係があり，古期がＳＡ3195Ａ，新期がＳＡ3195Ｂである。

古期のＳＡ3195Ａは掘立柱建物ＳＢ3205と重複しているが，建物が後出する。柱間14間分（20.4m）で西に折れ，当柵とは直交関係にある東西柵ＳＡ3197に接続する。また，南端の柱穴から北に4間分は間口が広くなっており，門建物ＳＢ3357を設けている。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.3m前後を測る。中には柱根を残す柱穴もみられた。柵の方位は北から東に4度振っている。

新期のＳＡ3195Ｂは12間分（23.5m）を検出した。柱穴は径0.3～0.4mの円・楕円形を呈し，深さ0.3～0.4mで，柱間間隔は0.9～1.5mとばらつきがある。柵の方位は北から東に1度30分振っている。また，柱穴は東西溝ＳＤ3300北岸から北に7.5mの箇所で西に折れ，東西柵ＳＡ3198に接続する。柵の西側には十数棟の掘立柱建物及び井戸・土坑が存在し，ＳＡ3195・3198はこれらの遺構を囲繞する区画施設である。

ＳＡ3196Ａ・Ｂ（Fig.28）

第109次調査区の北西側に位置する東西方向の柵で，ＳＢ3209と重複する。また，新旧二時期あり，南北柵ＳＡ3195Ｂと直交関係にある方をＳＡ3196Ａとした。ＳＡ3196Ａは5間分(9.3m）を検出したが，東西両方向には延びていない。柱穴は不整円形を呈し，径0.4～0.5mとＳＡ3196Ｂよりも大振りであり，ＳＡ3196Ｂ構築に際して，柱を抜き取ったと考えられることからＳＡ3196Ａの方が先行するとみられる。柵の方位は東から南に3度振っている。

ＳＡ3196Ｂは柱間11間分（20.5m）を確認したが，東側はＳＤ3217により失われ，西側は調査区外に延びるものと思われる。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2m前後を測る。柱間間隔は1.8～2mであるが，西から6間分の箇所は間口が2.3mと他よりも広く，北側に控えの柱穴がみられることからこの箇所を門建物ＳＢ3356とした。柵の方位は東から南に2度振っている。

ＳＡ3197（Fig.29）

南北柵ＳＡ3195Ａに接続する東西柵で，13間分（16m）確認したが，ＳＤ3236以西へは延び

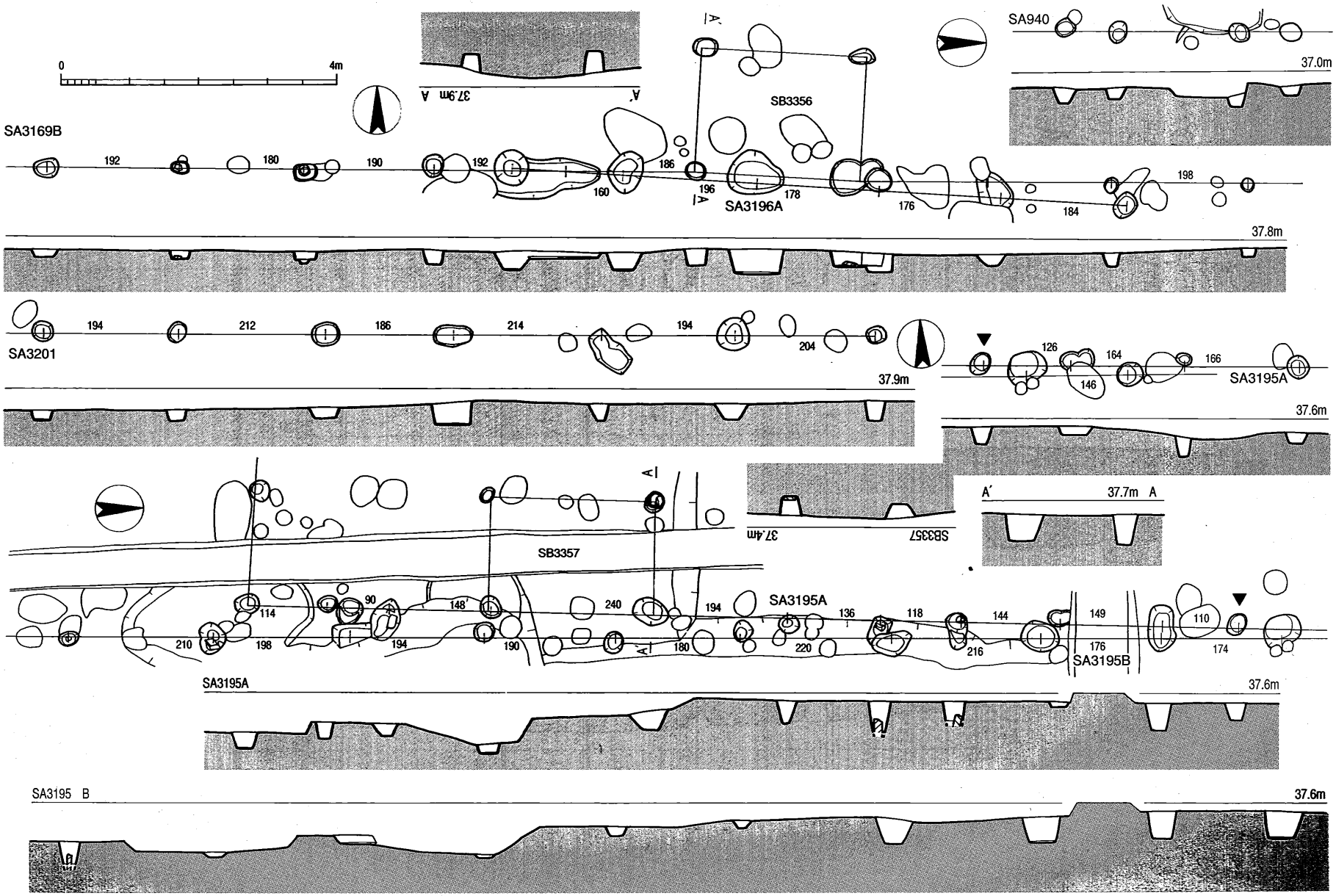


Fig. 28 南辺域柵実測図② (1/80)

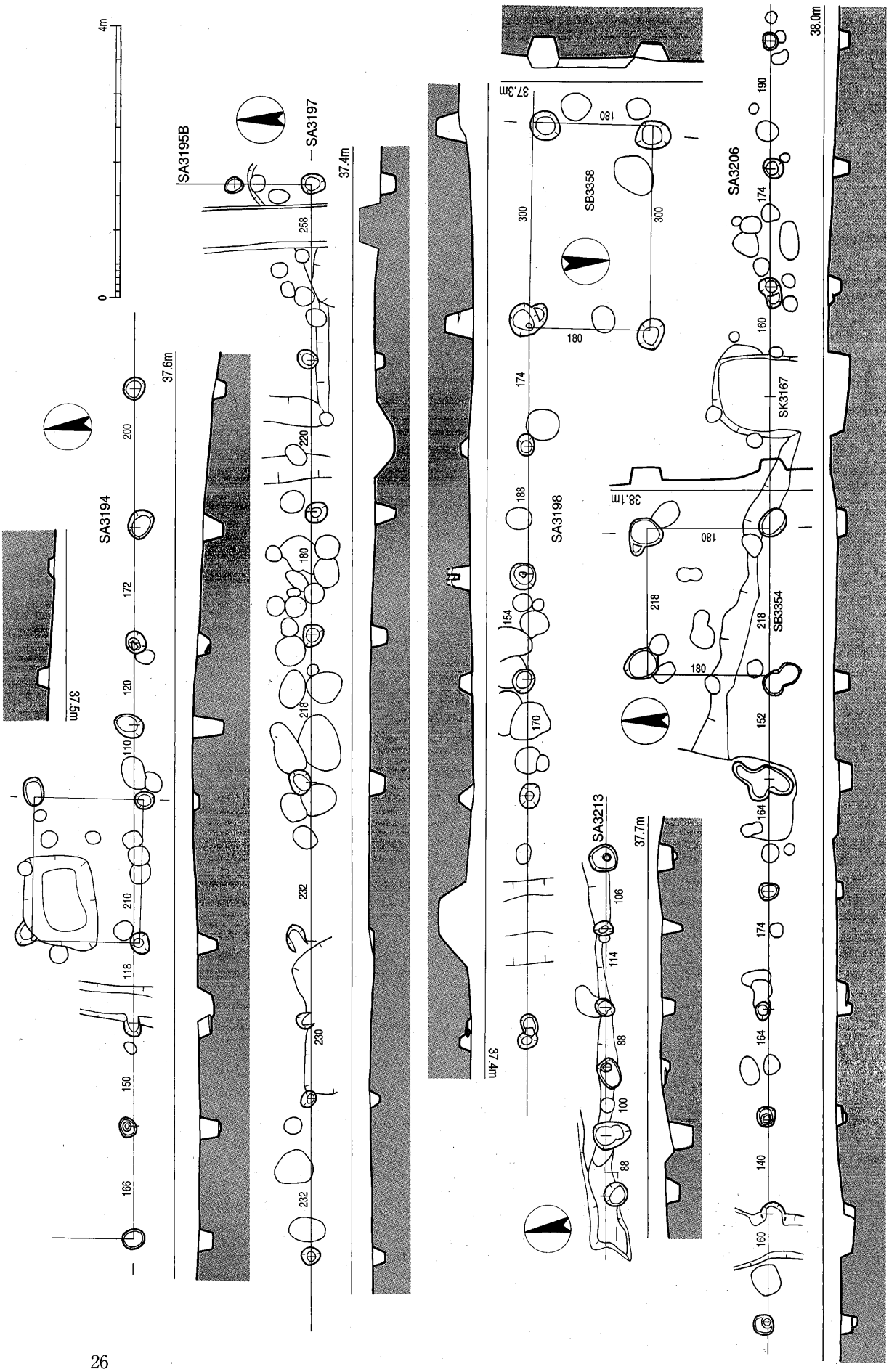


Fig. 29　南辺域柵実測図③（1/80）

ていない。ＳＤ3285に切られ，ＳＫ3292と重複する。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2m前後，柱間間隔は1.2～1.5mを測る。

ＳＡ3198（Fig.29）

南北柵ＳＡ3195Ｂに接続する東西柵で，８間分（13m）確認した。ＳＢ3230・3304と重複するが，ＳＢ3230と関連する溝ＳＤ3285に柱穴が切られていることから建物の方が後出する。また，柱穴の西端部分が門建物ＳＢ3358となっており，さらに柱列を西に延長すると掘立柱建物ＳＢ3303の南桁行柱列と重なり，建物を取り込んだ柵とみられる。柱穴は0.3m前後の円形を呈し，深さ0.3m前後，柱間間隔はほぼ1.8m等間である。

ＳＡ3201（Fig.28）

第109次調査区の北西側に位置し，ＳＤ3152と重複する。東西方向の柵で，６間分（12m）を検出した。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さ0.25m前後で，柱間は２mの等間。

ＳＡ3206（Fig.29）

第109次調査区の北西側に位置し，ＳＢ3204・3207，ＳＫ3167と重複する。東西方向の柵で，柱間12間分（19m）を確認した。西端柱穴から７間分に門建物ＳＢ3354を設けている。柱穴は0.3m前後の円形を呈し，深さ0.2m前後を測る。柱間間隔は１～1.5mを測る。

ＳＡ3208

ＳＡ3213のすぐ南に位置し，ＳＢ3205と重複する。ＳＡ3194とは直交関係にある東西柵で，西側へ柱間７間分（11.2m）で南に折れ，同柵に接続する。柱穴は0.3m程の円形を呈し，深さ0.2m前後，柱間間隔は1.2～1.5mを測る。南北柵ＳＡ3195Ａと関連するものと考えられる。

ＳＡ3211（Fig.27）

南北柵ＳＡ3195Ａの2.5m東側に位置し，同柵と平行する南北方向の柵である。南端はＳＤ3231・3291と重複し，北端はＳＤ3217に切られるが，同溝以北へは延びていない。北端柱穴から８m以南には柱穴が途切れ，若干引っ込んだ形であるが門建物ＳＢ3359を設けている。ＳＢ3359が区画の中心とすると南北長24mに復原できる。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.5m，深さ0.2m前後で，柱間間隔は1.1～1.5mとばらつきがある。なお，東西方向の柵ＳＡ3212は，当柵とは直交関係にあり，両者で参道西側の一角を区切っている。また，ＳＤ3190との間は１m余りの犬走となっている。

参道西側の一角を区画

ＳＡ3212（Fig.27）

南北柵ＳＡ3211に接続する東西方向の柵で，東西長25.6mを確認した。ＳＤ3231，ＳＫ3242・3269・3277に切られ，ＳＢ3267・3268・3365と重複する。新期の参道側溝ＳＤ3290との関連が注目されるが，参道との関係からすると溝の手前で北に折れるものと考えられる。柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さ0.3m前後を測る。

ＳＡ3213（Fig.29）

第109次調査区の南側で検出した東西方向の柵で，５間分（5.3m）を確認した。柱穴は0.3～0.4mの円形を呈し，柱間間隔は0.9～1.1mを測る。なお，２m南に位置するＳＢ3297の梁行柱列と方位を同じくすることから同建物の目隠塀と考えられる。（小田）

目隠塀

2）建　　物

第39次・109次・111次・115次・117次・122次・130次調査において建物を検出している。何れの調査区でも柱穴が密集し，恐らくは報告分以上に建物が存在すると思われるが，柱穴同士の同時性を明確にできないため建物として確実と思われるものを図示するに留めた。

ＳＢ881（Fig.30）

第39-2次調査３Trの南東側に位置する。柱穴３個を検出した程度であるが，他のピットより大きく，中に石が入っていた事から建物とみなした。梁行・桁行とも１間以上の掘立柱建物で，柱間が1.8mと長い方が梁行側で，桁行側の柱間は1.65mを測る。柱穴は0.4～0.6mの楕円形を呈し，深さは0.2～0.4mを測る。桁行方位は北から西に35度振っている。

ＳＢ883（Fig.30）

第39-2次調査３Trの南西側に位置し，ＳＫ887を切り，ＳＢ889と重複する。梁行１間以上，桁行２間以上の掘立柱建物で，大半が調査区外にある。柱間は東側が1.3m，西側が1.1m・1.45mを測る。恐らく東側が梁行になろう。柱穴は0.3m前後の円形を呈し，深さは0.1～0.2mであった。桁行方位は北から東に64度振っている。

ＳＢ884（Fig.30）

ＳＢ883の2.9m北側に位置し，同建物とは平行関係にある。ＳＤ890と重複するが，前後関係は不詳。梁行２間（4.2m），桁行１間以上の掘立柱建物で，柱間は梁行側が2.1m等間，桁行側が1.8mを測る。柱穴は0.3m前後の円形を呈し，深さ0.1～0.2mを測る。桁行方位は北から西に26度振っている。

ＳＢ889（Fig.30，PL.16-1）

ＳＢ884の南に位置し，ＳＢ883と重複する。柱間間隔が広い東側が梁行で，柱間は1.65mを測る。桁行は３間以上の検出で，柱間は北東隅柱から1.1m・1.27m・1.05mとばらついている。柱穴は0.3m前後の円形を呈し，深さ0.25m前後。梁行方位は北から西に13度振っている。

ＳＢ906（Fig.31）

第39-2次調査４Tr東側に位置し，土坑ＳＫ907，落込ＳＸ903と重複する。梁行２間（3.68m），桁行１間以上（2.32m）の掘立柱建物であるが，２×２間の総柱建物になる可能性が高い。柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さ0.2m前後を測る。桁行方位は東に６度振っている。

ＳＢ950（Fig.31）

第39-3次調査２Tr東側に位置し，土坑ＳＫ960・963・964・967・970と重複する。梁行２間（4.27m），桁行１間以上（2.1m）の掘立柱建物で，南半部は未調査であるが，２×２間の総柱建物になろう。柱穴は円形を呈し，径0.25～0.5m，深さ0.2m前後を測る。桁行方位は西に６度振っている。

ＳＢ985（Fig.31）

ＳＢ950の５m西側に位置し，ＳＢ990と重複するが前後関係は不詳。また，土坑ＳＫ976・983と切合い関係にある。梁側柱穴４個を検出した程度で，全体の規模はつかめていない。梁行３間（4.86m）で，柱間は東から1.63・1.44・1.79mとばらつきがある。柱穴は0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後の遺存状態である。

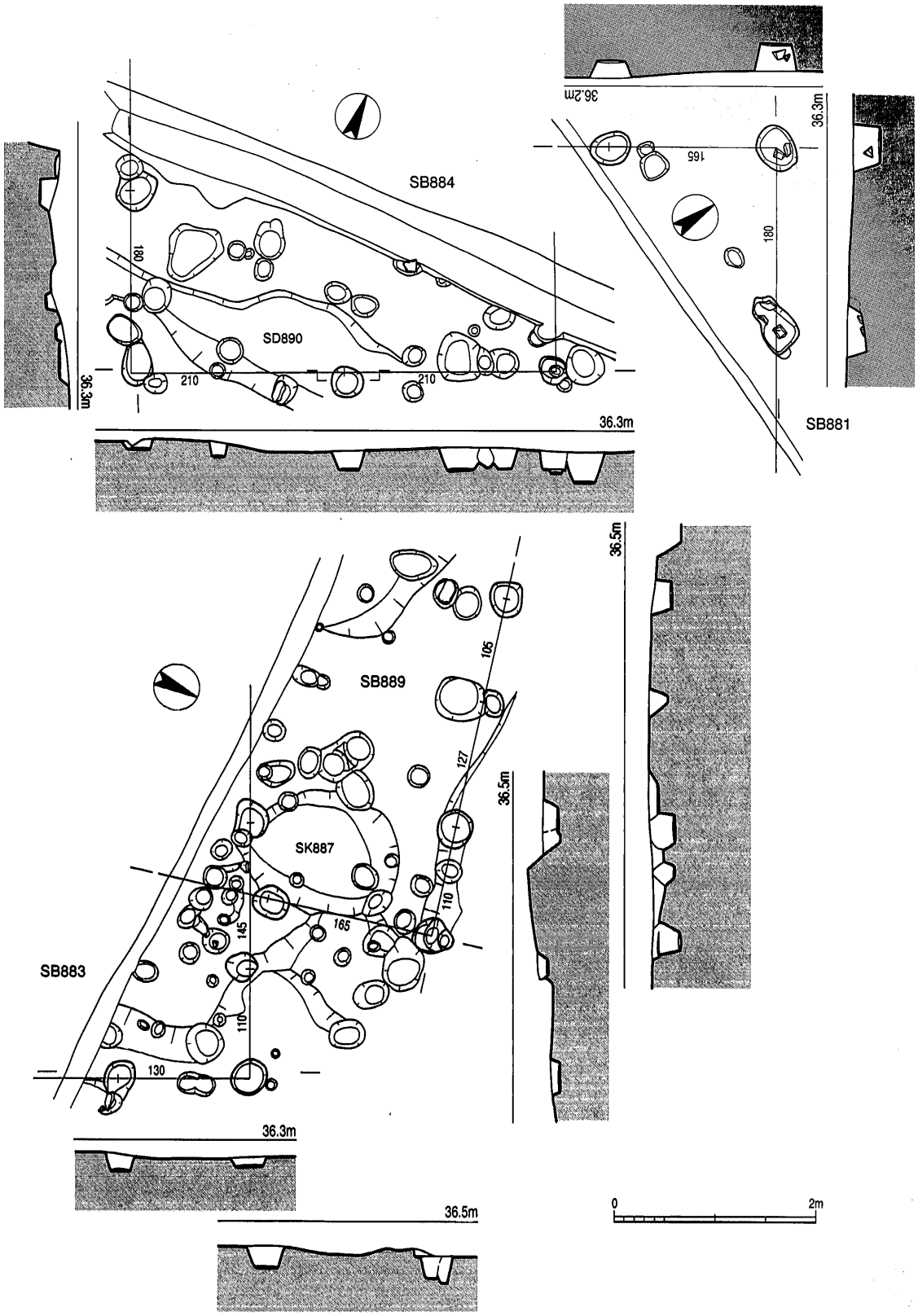


Fig. 30　南辺域建物実測図①（1/60）

S B 986（Fig. 31）

ＳＢ985の1.2m西側に位置し，ＳＢ990とは並列関係にある。土坑ＳＫ988・989と重複するものの前後関係は判然としない。梁行１間（1.75m）×桁行２間（3.7m）の南北棟掘立柱建

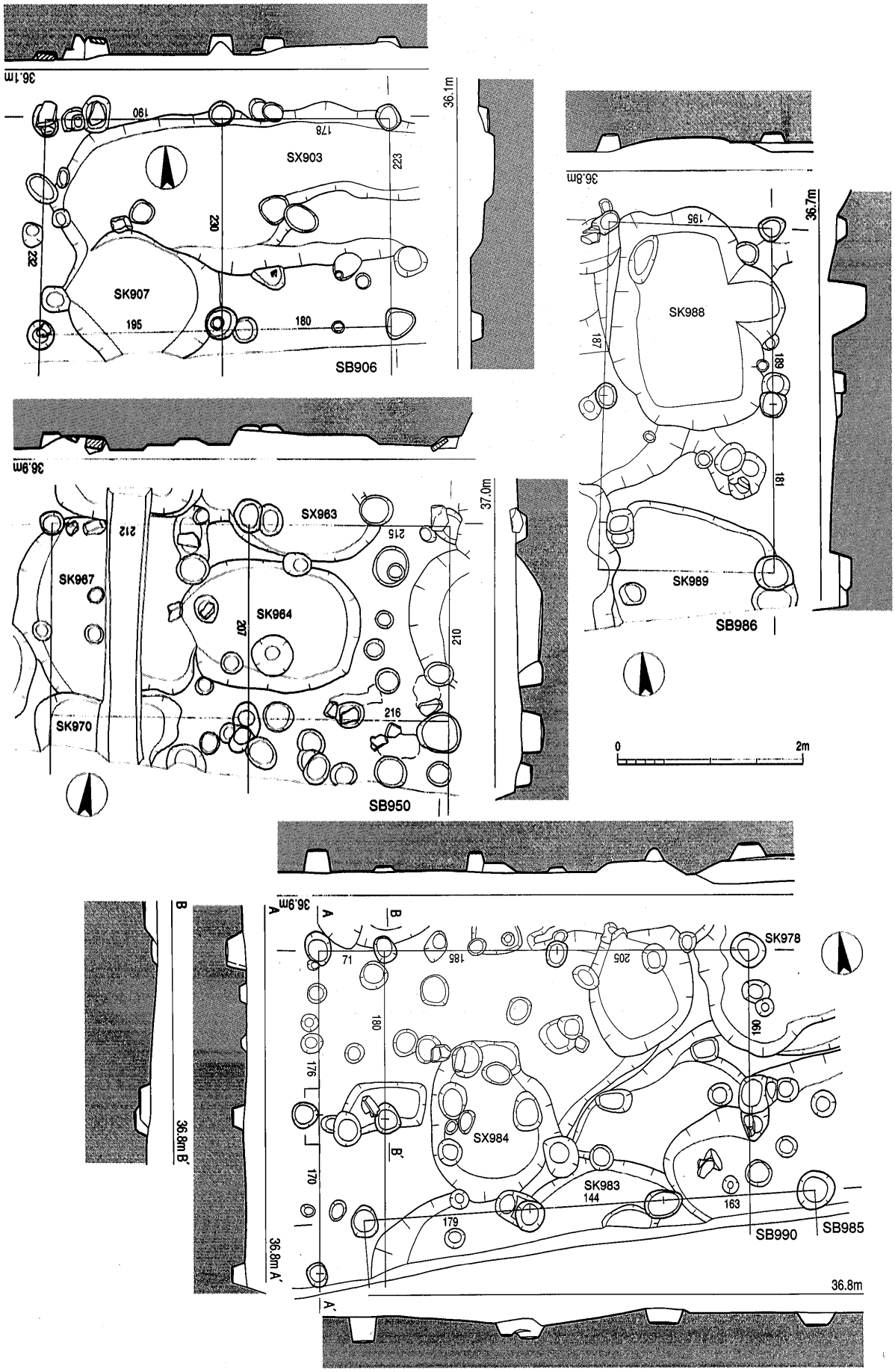


Fig. 31　南辺域建物実測図②（1/60）

物で，桁行の柱間は1.81～1.89m間隔。柱穴は0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.2mの遺存状況であった。桁行方位は東に5度振っている。

ＳＢ990（Fig.31）

ＳＢ986の1.2m東側で，同建物と平行する形で検出した。ＳＢ985及び土坑ＳＫ976・978・980・983・984と重複する。梁行2間（3.9m）×桁行1間以上の南北棟掘立柱建物で，西桁行側に廂を付設している。 片廂建物

ＳＢ3187（Fig.32）

第109次調査区の北西側に位置し，ＳＢ3188と重複する。当建物の東桁行側柱穴は，何れも掘方が大きく不整形を呈することから柱を抜き取ったと考えられ，ＳＢ3188を建てるための所作とみられることから当建物が先行する。梁行2間（3.06m）×桁行3間（4.12m）の南北棟掘立柱建物であるが，北梁行の棟柱柱穴は確認し得ていない。柱間は梁行側が1.5m・1.56m，桁行側は1.24～1.48mとばらつく。柱穴は径0.3～0.6m前後の円形を呈し，深さ0.2mの遺存状況である。建物の1.1m東側にあるＬ字形の小溝（長さ1.5m，幅0.2m）は，当建物に伴う区画溝と考えられる。なお，西側の桁行方位は，北から西に3度振っている。 建物に伴う区画溝

ＳＢ3188（Fig.32）

ＳＢ3187の東側に重複して位置し，同建物の建替えとみられる。梁行2間（3.5m）×桁行3間（4.22m）の南北棟掘立柱建物であるが，西桁行の南隅柱から2個目の柱穴は確認し得ていない。柱間は梁行が1.46～2.04m，桁行は1.32～1.42mとばらついている。柱穴は径0.26～0.34m前後の円形を呈し，深さは0.2mを測る。西側の桁行方位は北から西に1度30分振っている。

ＳＢ3189（Fig.32）

第109次調査区の南西隅に位置する。現状で1×2間の東西棟掘立柱建物であるが，111次調査区へは延びていないことから梁行2間（3.8m）×桁行2間（4.24m）の総柱建物の可能性がある。柱穴は径0.3～0.55mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。

ＳＢ3199（Fig.33）

ＳＢ3189の9m東側に位置し，ＳＢ3353・ＳＡ3194・ＳＥ3245と重複する。建物の南半分は第111次調査区で確認した。梁行2間（4.4m）×桁3行間（6.6m）身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が2.0～2.4m，桁行側は1.7～2.44mとばらつきがみられる。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に9度振っている。 片廂建物

ＳＢ3202（Fig.32）

第109次調査区の北東側に位置し，ＳＫ3158に南西隅柱を切られる。梁行1間（2.96m）×桁行2間（4.74m）の南北棟掘立柱建物である。桁行の柱間は2.26～2.48mとばらつく。柱穴は径0.4m前後の円形で，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から西に4度振っている。

ＳＢ3203（Fig.33）

ＳＢ3202の11m西側に位置し，ＳＢ3204と重複する。梁行2間（3.16m）×桁行2間（3.26m）の総柱建物である。西桁行側の柱間は1.44m・1.7mを測る。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さは0.4m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に2度振っている。また，建物の0.9m北側には建物と平行する形でＳＡ3193が存在し，目隠塀と考えられる。 目隠塀

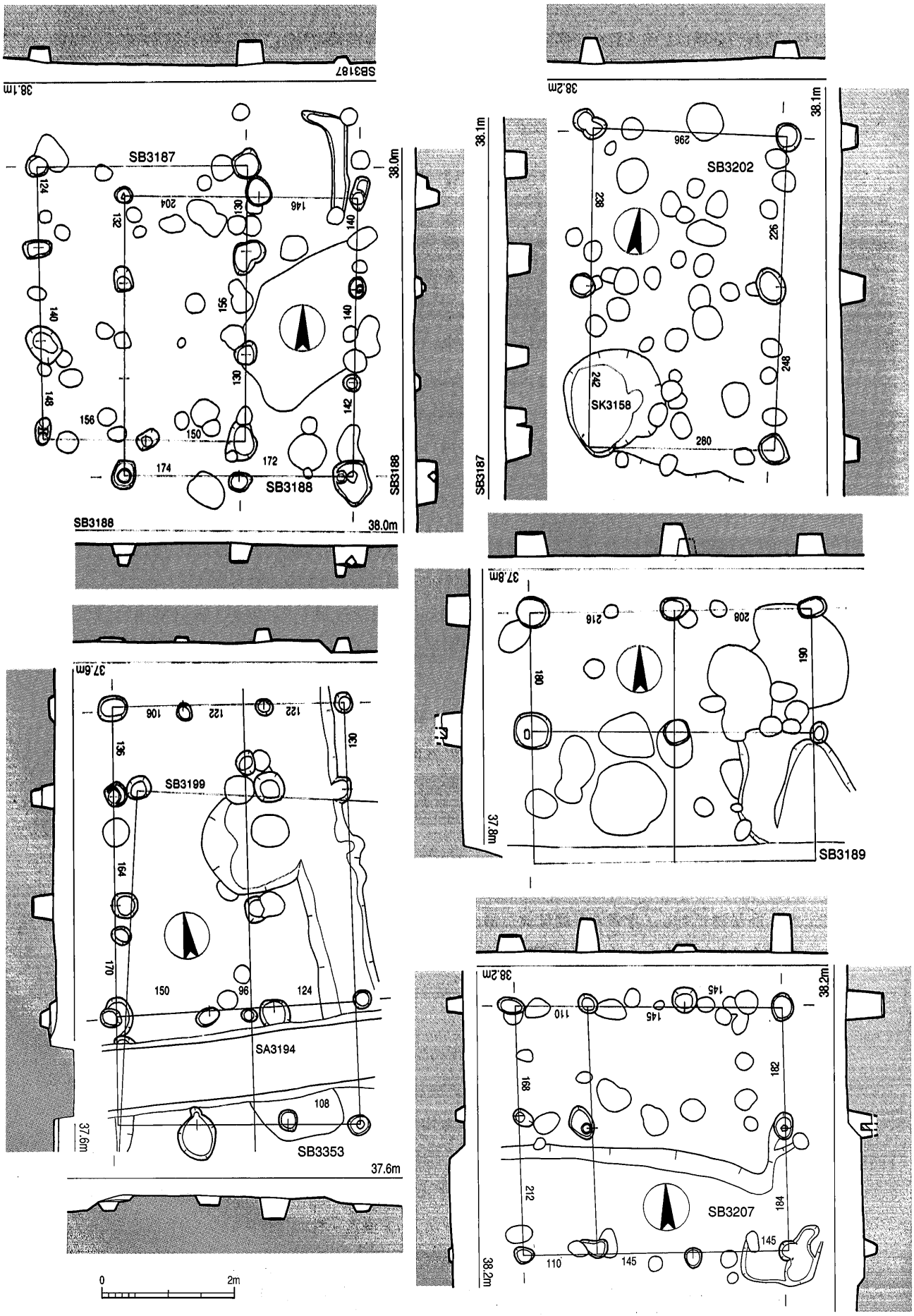


Fig. 32　南辺域建物実測図③（1/80）

S B 3204 (Fig. 33)

S B3203の南側に位置し，同建物と重複するが，前後関係は不詳。梁行１間（2.1m）×桁行２間（3.98m）の小規模な掘立柱建物である。桁行側の柱間は1.9～2.06mとばらつきがある。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。西側の梁行方位は北から東に14度と他の建物に比して大きく傾く。

S B 3205 (Fig. 34, PL. 26-2)

第109次調査区の南中央で検出した。S A3195・3208，S B3297・3298，S D3190，S K3182と重複する。梁行２間（3.1m）×桁行４間（6.9m）身舎の南桁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.46～1.64mで，桁行側は1.4～2.0mとばらつく。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.4m前後を測る。棟柱列にも柱穴が２個みられるが，側柱柱穴に比して小さいことから床束柱穴と考えられる。東側の梁行方位は北から東に３度振っている。 片廂建物

S B 3207 (Fig. 32)

S B3203の７m西側に位置し，S A3206・S K3168と重複する。梁行２間（2.9m）×桁行２間（3.8m）身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.45m等間で，桁行側は1.68～2.12mとばらつく。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.2m前後を測る。東側の桁行方位は北から西に30分振っている。 片廂建物

S B 3209 (Fig. 35)

S B3187の７m東側に位置し，S A3196A・Bと重複する。柱穴が大きく，不整形を呈するのは，S A3196B構築に際して柱を抜き取ったためと考えられる。梁行１間（2.4m）×桁行２間（4.0m）の小規模な掘立柱建物である。桁行の柱間は２m等間とした。柱穴は長さ0.5～0.8mの不整形を呈し，深さは0.4mを測る。南東隅柱には柱根が遺存していた。西側の桁行方位は北から東に２度振っている。

S B 3219 (Fig. 33)

S B3199の1.5m東側に位置し，S K3252を切っている。梁行１間（3.8m）×桁行２間（4.0m）の小規模な掘立柱建物である。桁行側の柱間は1.9～2.06mとばらつきがある。柱穴は径0.3～0.5m前後の円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には礎盤として偏平な石を入れているものもある。西側の桁行方位は北から東に７度30分振っている。なお，当建物は東西柵S A3194と方位を等しくして配されていることからS A3194区画内の主要建物とみられる。 礎盤あり

S B 3230 (Fig. 35, PL. 27)

第111次調査区の西側で検出した南北棟掘立柱建物で，S K3292・S D3289に切られる。また，当建物の0.6m北側に位置するL字形溝S D3347は建物を囲む区画施設と考えられる。規模は梁行４間（3.75m）×桁行５間（4.95m）の側柱建物で，梁行の柱間は0.9～1.05mで，桁行側は0.9～1.3mを測る。桁行の中央間が1.3mと広いことからこの位置に扉を設けていたことが判る。柱穴は円形を呈し，径0.4～0.7m，深さ0.4m前後を測る。なお，底面には石を据え，礎盤としている。柱間間隔が狭く，礎盤を敷いていることから高床倉庫と考えられる。西側の桁行方位は北から４度60分東に振っている。 高床倉庫

S B 3297 (Fig. 35)

S B3219の３m北側に位置し，S B3205・3298，S K3182と重複する。桁行は３間(4.4m)

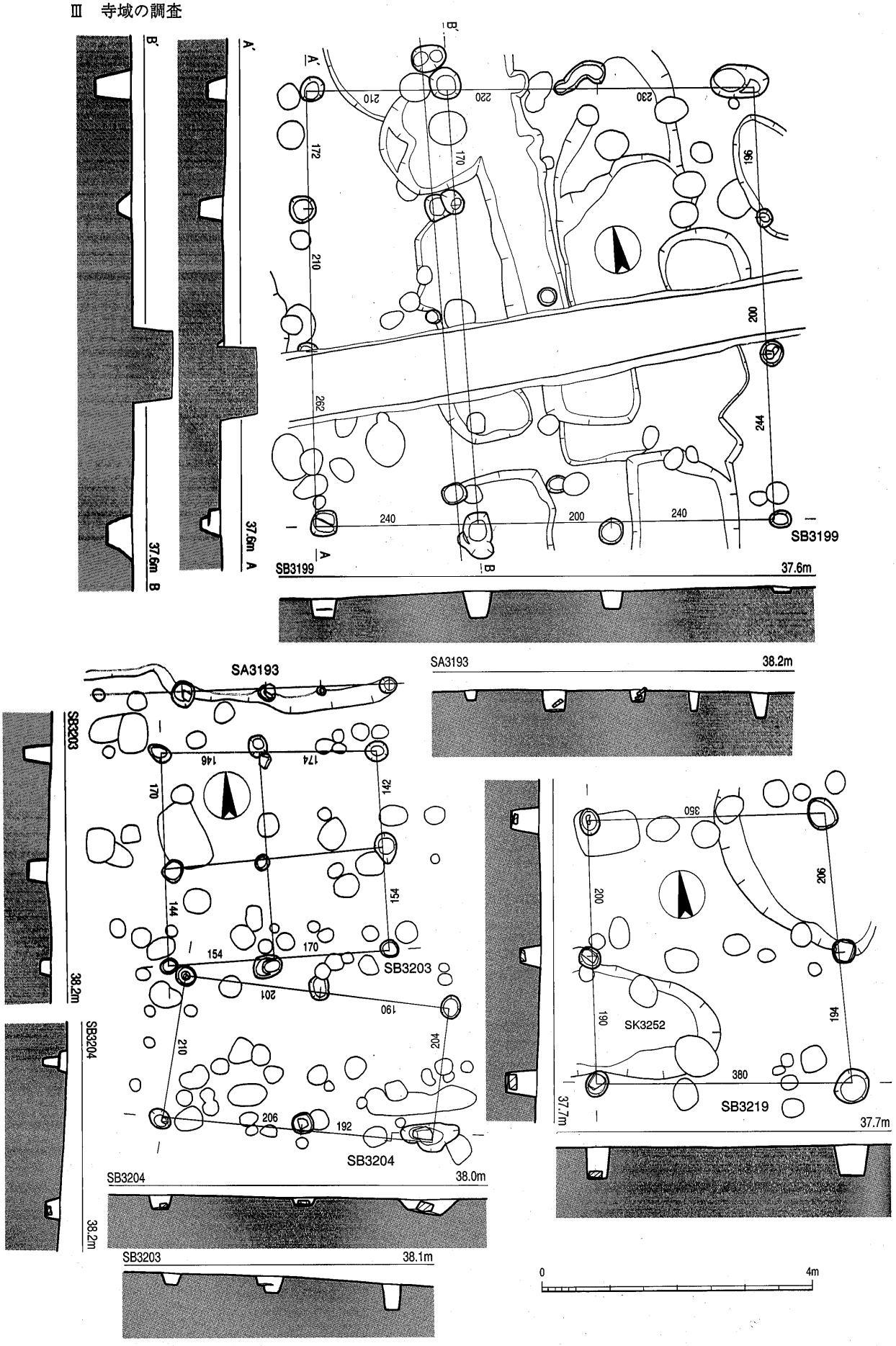


Fig. 33　南辺域建物実測図④（1/80）

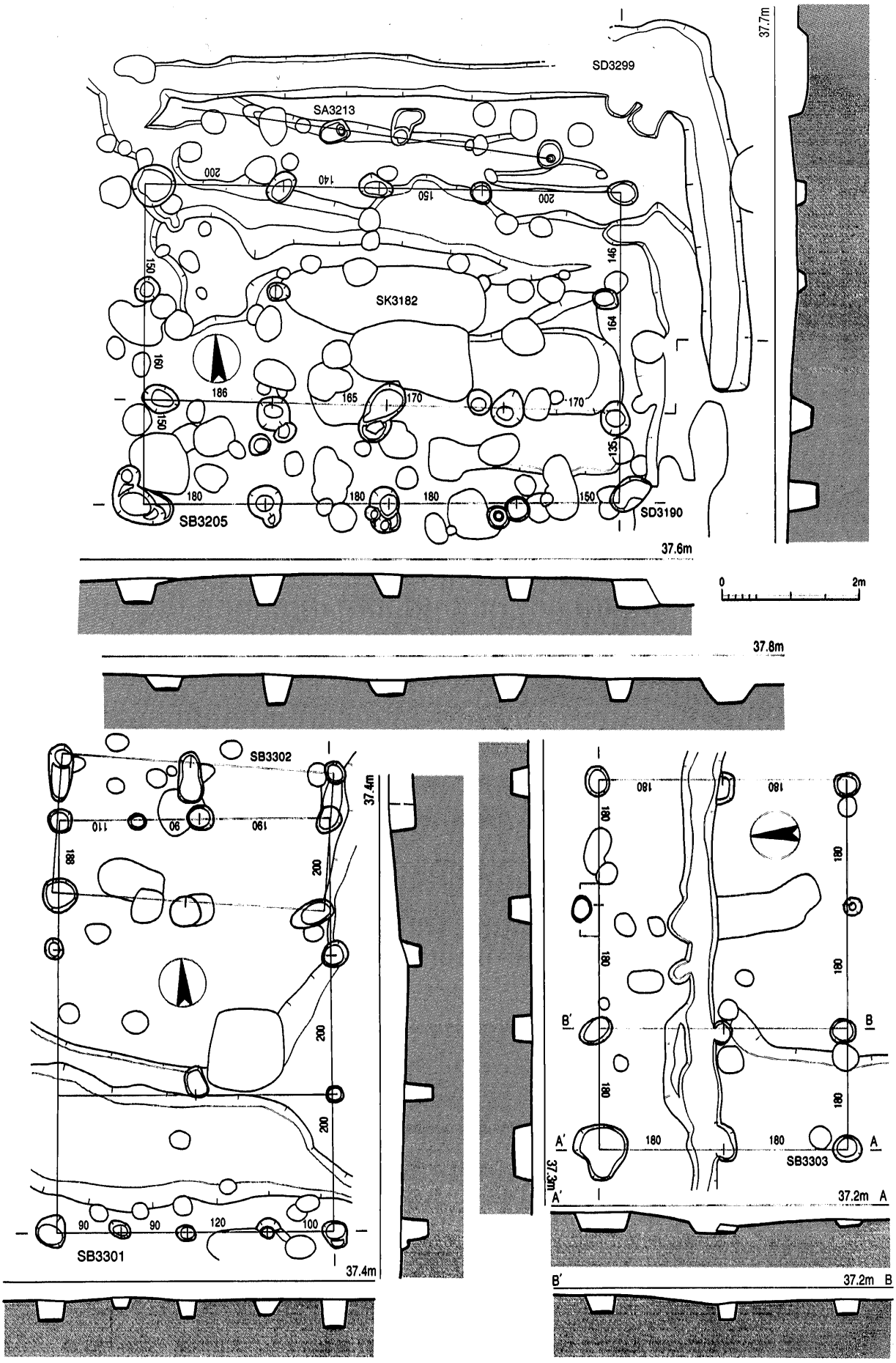


Fig. 34 南辺域建物実測図⑤ (1/80)

であるが，梁側には棟柱が見あたらないことから１間（3.18m）と思われる。桁行の柱間は1.2～1.68mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し，径0.4m前後，深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から東に12度30分振っている。

ＳＢ3298（Fig.35）

ＳＢ3297の南側に重複して位置するが，前後関係は不詳。無数の柱穴が存在する中，梁行２間（3.2m）×桁行２間（3.26m）の方形プランの掘立柱建物として復原した。柱間は1.5～1.84mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し，径0.4m前後，深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から西に５度振っている。

ＳＢ3301（Fig.34）

ＳＢ3189の2.5m南側に位置し，ＳＢ3302と重複し，ＳＤ3218に切られる。梁行２間（3.9m）×桁行２間（4.0m）の身舎の南梁行側に廂を付設した片廂建物であるが，北梁側は３間で，入側柱は２間，廂部分は４間と変則的である。身舎の桁行柱間は２m等間で，廂の柱間は0.9～1.2mとばらつく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，隅柱柱穴は0.3～0.4mと深く，しっかりしている。東側の桁行方位は北から東に３度振る。

片廂建物

ＳＢ3302（Fig.37）

ＳＢ3301の北側に位置し，同建物と重複する。柱を抜き取っていることから当建物がＳＢ3301より先行するものと考えられる。梁行１間（2.04m）×桁行２間（3.94m）の小規模な掘立柱建物である。桁行の柱間は1.84～2.08mとばらつきがある。柱穴は径0.5～0.8mの楕円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の梁行方位は北から東に11度30分振っている。

ＳＢ3303（Fig.34）

ＳＢ3301の2.5m南側に位置し，ＳＤ3237に切られる。梁行２間（3.6m）×桁行２間（3.6m）身舎の西側柱列に廂を設けた片廂建物で，柱間は身舎・廂とも1.8mに復原した。柱穴は径0.3～0.8mの円形を呈し，深さは0.3m前後。西側の梁行方位は北から東に３度振っている。

片廂建物

ＳＢ3304（Fig.36）

ＳＢ3230の３m東側に位置し，ＳＤ3285に切られ，ＳＡ3197・3198，ＳＢ3306と重複する。無数の柱穴が存在する中，梁行３間（6.5m）×桁行４間（7.5m）の東西棟総柱建物として考えた。東梁行の柱間は北から2.15・2.1・2.25mと中央間が若干狭い。北桁行の柱間は東から２・1.9・２・1.6mとばらつきが見られる。柱穴は円形を呈し，径0.4～0.7m，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に４度振っている。

ＳＢ3306（Fig.36）

ＳＢ3230の１m南側に位置し，ＳＤ3285・3300に切られ，ＳＢ3304，ＳＥ3255，ＳＫ3258・3284と重複する。当建物も無数の柱穴が存在する中，梁行４間（8.3m）×桁行３間（９m）身舎の東西梁行側に廂を設けた二面廂建物として考えた。身舎の柱間は西梁行側が北から２・2.2・2.2・1.8mで，桁行は3.0m等間とした。柱穴は円形を呈し，径0.4～0.6m，深さは0.2m前後を測る。西梁行方位は北から東に１度30分振っている。規模的に南面域において主体となる建物と考えられる。

二面廂建物

ＳＢ3307（Fig.38）

第109次調査区の南東側で，柵ＳＡ3211と平行して位置する。また，ＳＢ3308・3309・3318

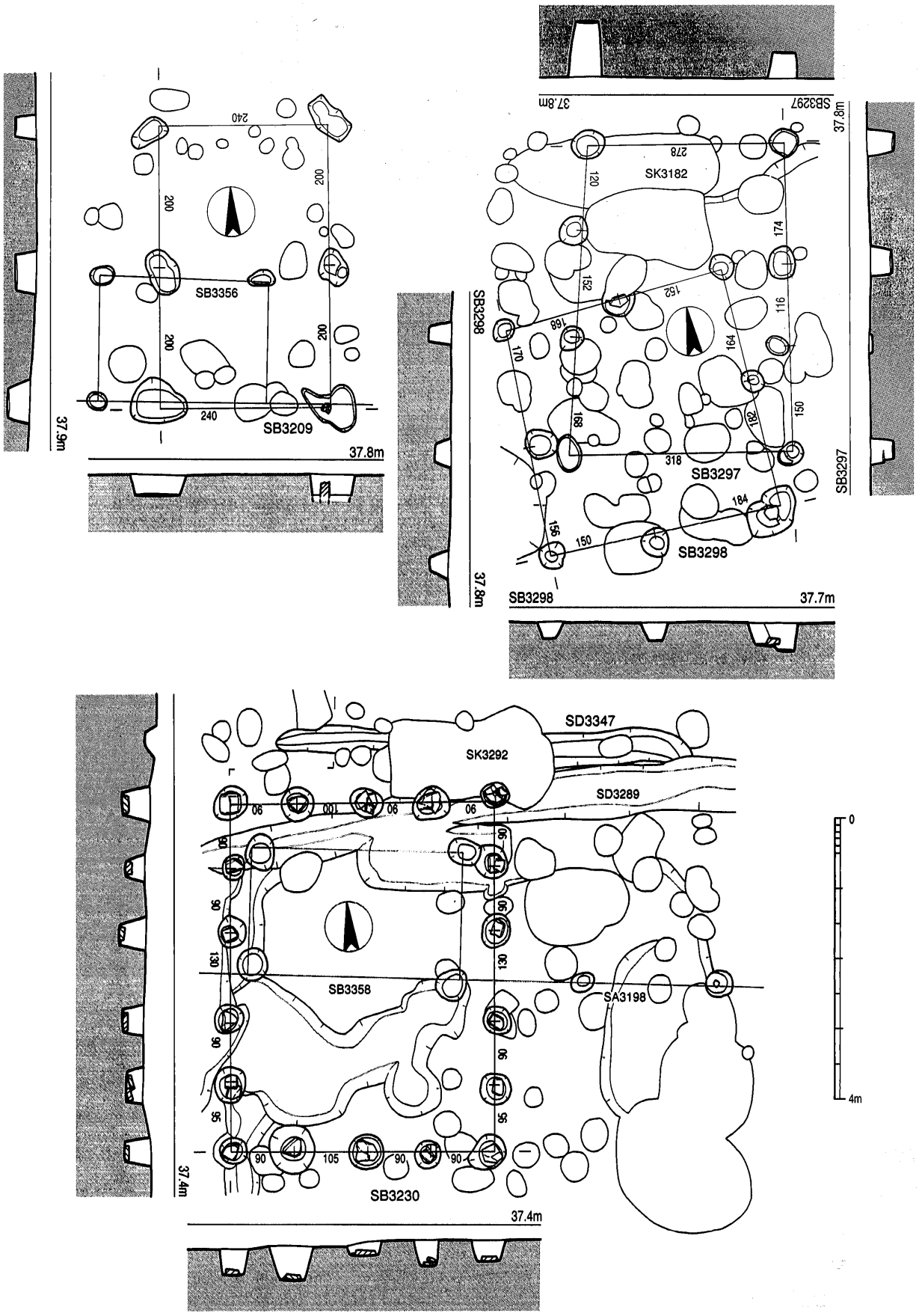


Fig. 35 南辺域建物実測図⑥ (1/80)

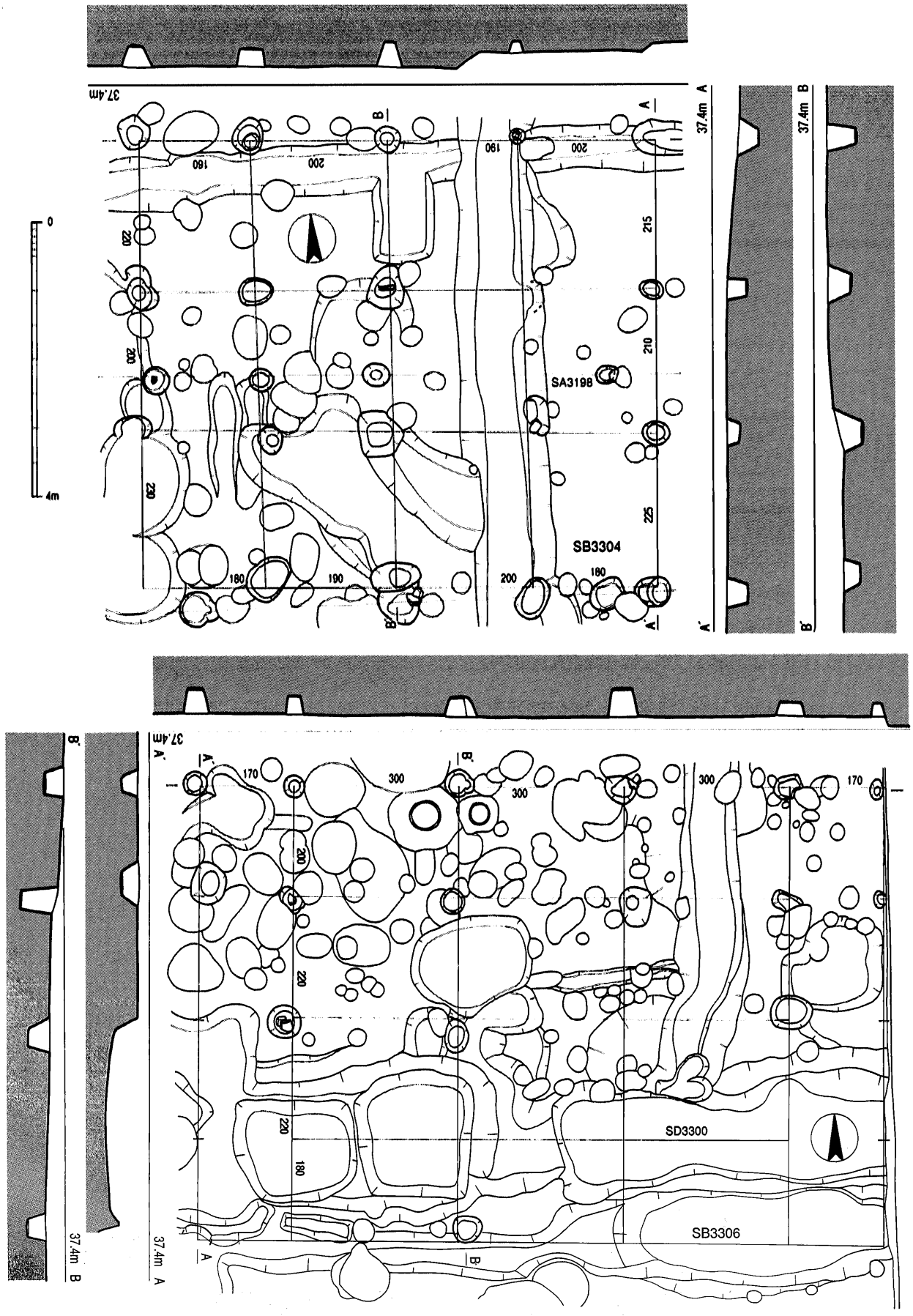


Fig. 36　南辺域建物実測図⑦（1/80）

と重複するが，前後関係は不詳。無数の柱穴が存在するが，梁行３間（4.7m）×桁行３間（6.6m）身舎の西桁行側に廂を付設した片廂建物として考えた。身舎の柱間は梁行側が1.55～2.25m，桁行側が1.8～2.65mとばらつきがある。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に２度振っている。柵ＳＡ3211とは0.5mと近接するが，建物方位は柵と平行していることから同時併存も考えられる。 片廂建物

ＳＢ3308（Fig.38）

ＳＢ3307の東側で，ＳＢ3307・3309・3317・3318と重複する。無数の柱穴が存在する中，梁行２間（3.8m）×桁行４間（7.5m）身舎の西桁行に廂を付設した片廂建物として考えた。梁行側の柱間は1.9m等間で，桁行側は1.8～2.0mとばらつきがみられるが，桁側も本来は1.9m等間で設計されたものであろう。柱穴は径0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。建物方位は真北を示す。 片廂建物

ＳＢ3309（Fig.39）

ＳＢ3307の東側で，ＳＢ3307・3308・3311・3317・3318と重複し，ＳＫ3181に切られる。当建物も近辺に無数の柱穴が存在するが，梁行３間（5.2m）×桁行３間（5.7m）の側柱建物として考えた。梁行側の柱間は1.7～1.8mで，桁行側は1.6～2.2mとばらつきがある。柱穴は径0.4mの円形を呈し，深さは0.2m前後を測る。東側の梁行方位は北から東に１度30分振っている。

ＳＢ3311（Fig.39）

ＳＢ3309の東隣で，ＳＢ3314・3317と重複し，ＳＫ3273に切られる。梁行３間（6.6m）×桁行４間（6.6m）の総柱建物である。梁行側の柱間は1.9～2.64mで，桁行側は1.5～1.9mとばらつきがみられる。柱穴は径0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側桁行方位は北から西に３度振っている。

ＳＢ3314（Fig.39）

ＳＢ3311の東側で，同建物と重複して位置する。また，大半が調査区外にあるため詳細は不明。現状で桁行３間以上（5.4m），梁行１間以上の掘立柱建物で，南梁行側に廂を付設している。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.6m，深さ0.15mを測り，身舎部分の柱穴はやや大きめである。桁行方位は北から東に３度60分振っている。

ＳＢ3315（Fig.42）

ＳＡ3212の1.8m南側に位置し，ＳＢ3365・3366と重複するが，柱穴同士の切り合いはなく，前後関係は明らかではない。南半部は調査区外に位置するため現状で１×４間の東西棟掘立柱建物であるが，梁行２間（4.9m）×桁行４間（5.8m）の総柱建物と考えた。梁行の柱間は2.5mで，桁行側は1.4・1.5m。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。埋土中に礫を入れているものがあり，根固めとしていれたものか。 根固めの礫

ＳＢ3317（Fig.40）

第109次調査区の南東側で，ＳＢ3308・3309・3311・3318，ＳＤ3233と重複する。梁行２間（3.55m）×桁行３間（4.1m）の東西棟掘立柱建物で，柱間は梁行が1.35～1.9m，桁行が1.2～1.55mとばらつきがある。柱穴は円・楕円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.3m前後を測る。隅柱及び棟柱柱穴は他の穴に比して大きい。東側の梁行方位は７度東に振っている。

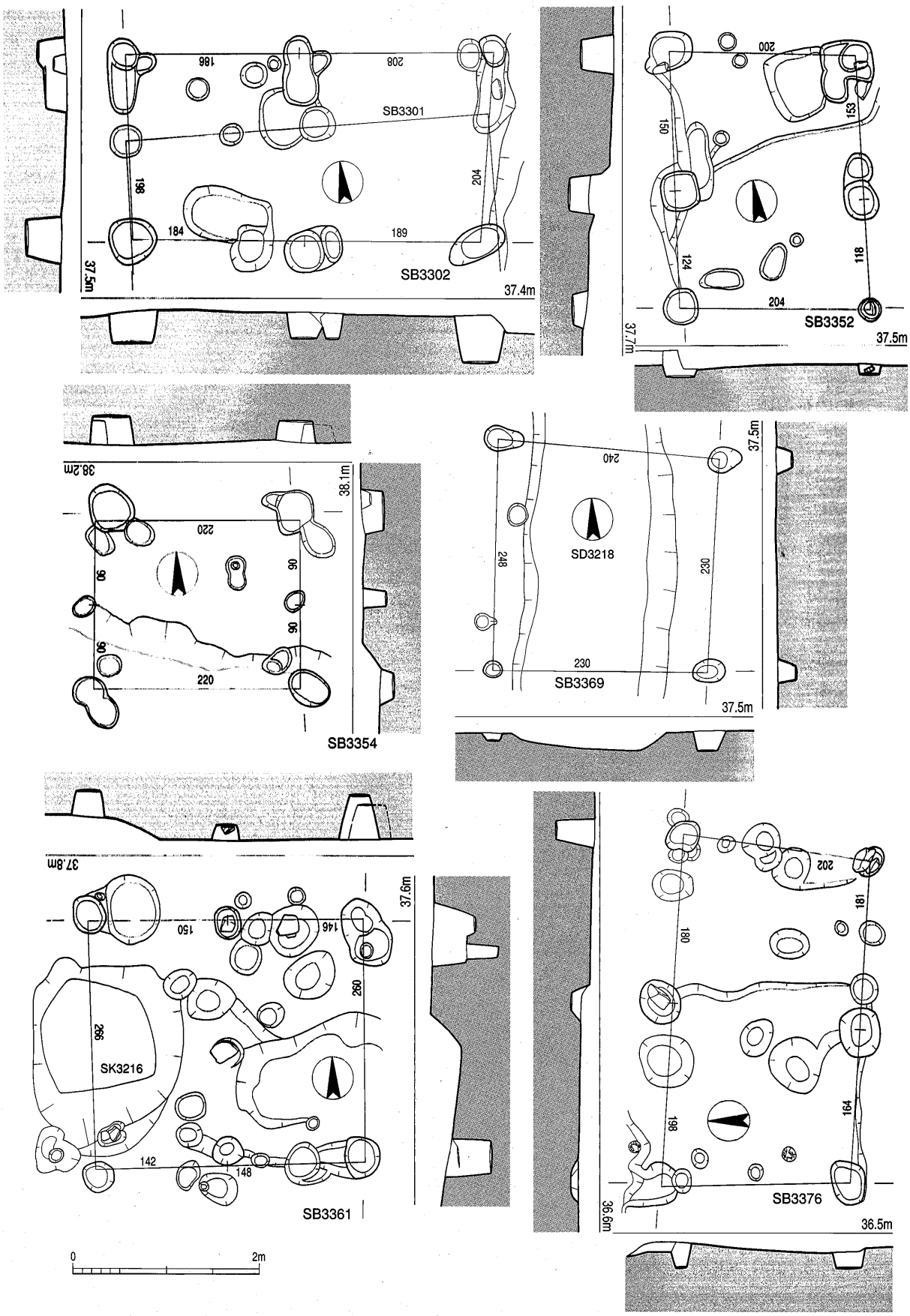


Fig. 37　南辺域建物実測図⑧（1/60）

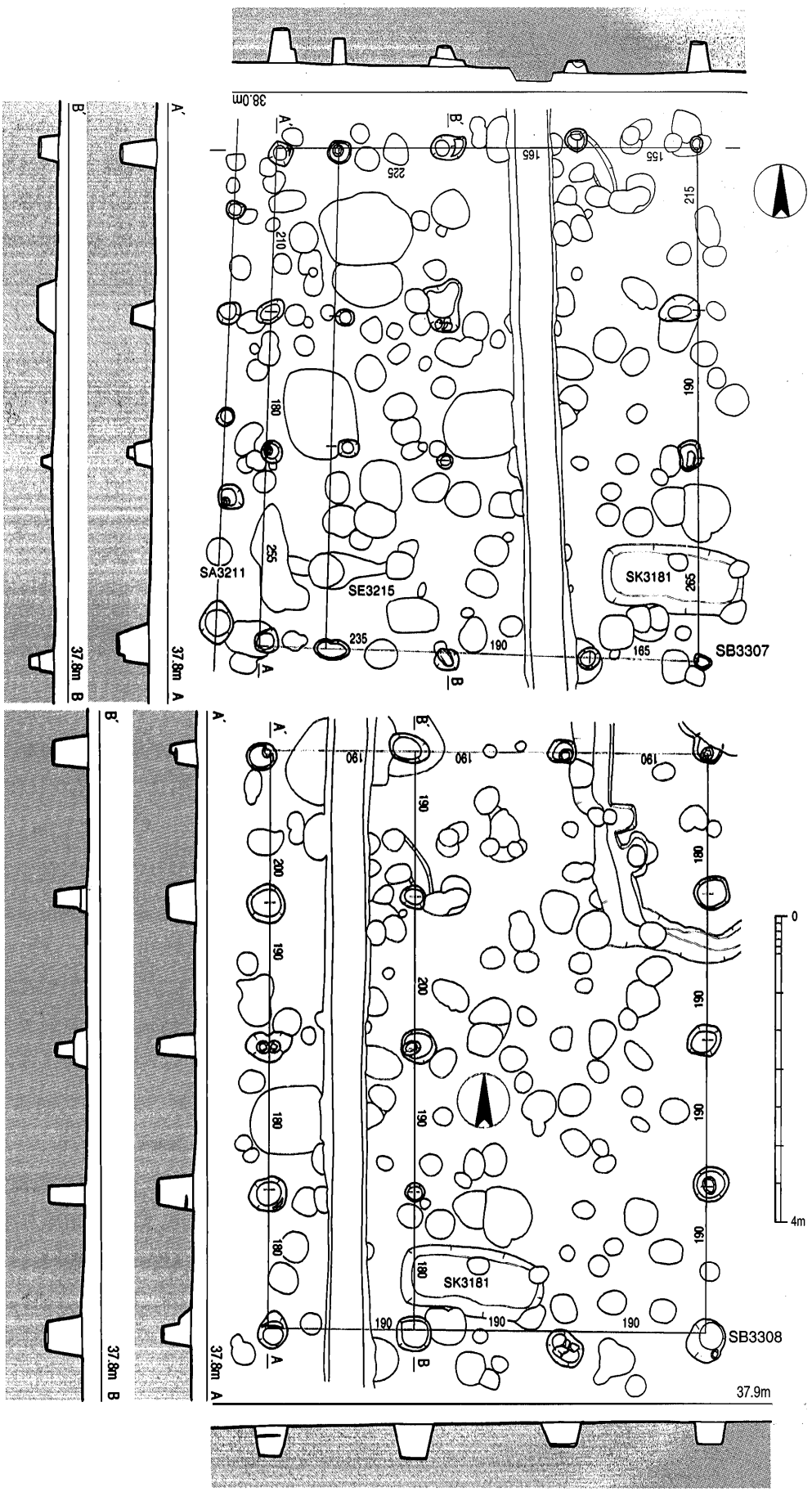


Fig. 38 南辺域建物実測図⑨ (1/80)

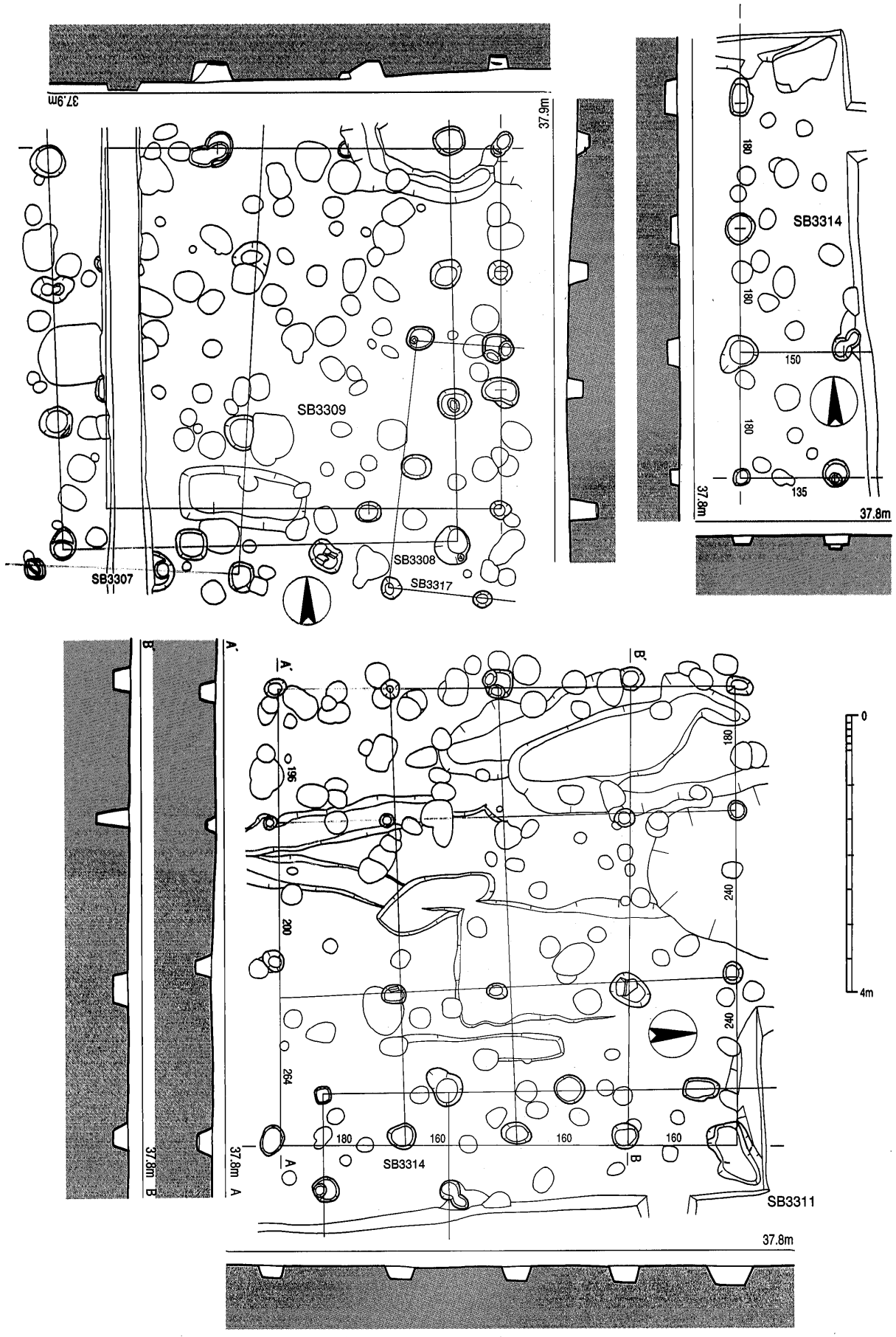


Fig. 39　南辺域建物実測図⑩（1/80）

SB3318（Fig.40）

第109次調査区の南東側に位置し，SB3307・3308・3317，SK3179と重複し，SK3184に切られる。梁行1間（3.0m）×桁行2間（4.1m）の小規模な東西棟掘立柱建物で，柱間は梁行側が3.0m，桁行側は1.9・2.2mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さも0.3m前後を測る。西側の梁行方位は9度東に振っている。

SB3348（Fig.33）

南北柵SA3194に伴う南側の門で，土坑と切り合う。間口一間（2.18m）で，北側には控柱の柱穴を持つ。

SB3349（Fig.41）

SB3189の2.5m北側に位置し，SA3208西延長線とは平行関係にある。梁行1間（2.2m）×桁行3間（5.4m）の東西棟掘立柱建物で，柱間は梁行側が2.2m，桁行側は1.5～1.8mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.4m前後，深さ0.2m前後を測る。西側の梁行方位は6度東に振っている。当建物の西側に位置するSK3174及び南に位置する長円形土坑は建物を囲むように位置し，関連するものと考えられる。

SB3351（Fig.41，PL.45-1）

第115次調査区の北側に位置し，SD3336・3337・3339・3340に切られる。棟柱を溝に切られて失うが，梁行2間（4.0m）×桁行4間（7.5m）身舎の南北桁側に廂を付設した二面廂建物である。桁行の柱間は1.69～1.86mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.4m前後，深さ0.3m前後を測る。柱穴内には礫が入っており，礎盤として入れたものか。東側の梁行方位は5度東に振っている。

二面廂建物

礎盤の礫

SB3352（Fig.37）

SB3189のすぐ東隣で検出した。梁行1間（2.04m）×桁行2間（2.74m）の小規模な南北棟掘立柱建物である。桁行の柱間は1.18～1.53mとばらつきがある。柱穴は径0.3～0.5mの円形を呈し，深さは0.2m前後であった。西側の梁行方位は北から東に7度振っている。

SB3353（Fig.32）

SB3369の1m南側に位置し，SB3199・SA3194と重複する。廂部分は第111次調査区で確認した。梁行3間（3.5m）×桁行3間（4.7m）身舎の南梁行側に廂を付設した片廂建物である。身舎の柱間は梁行側が1.06～1.22m，桁行側が1.3～1.7mとばらついている。柱穴は径0.25～0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に7度振っている。

片廂建物

SB3354（Fig.29・37）

SB3207の2m東側に位置し，SD3151に切られる。東西柵SA3206に設けられた門建物である。間口一間（2.2m）で，控柱柱穴が4個あることから門の形式は一間一戸四脚門となる。間口が狭いものの，柵に付随する寺域の門建物の中にあっては比較的立派な門と言える。

一間一戸四脚門

SB3356（Fig.28）

第109次調査区の西側で，東西柵SA3196Bに設けられた門建物である。間口一間（2.4m）で，北側1.8mの箇所には控柱柱穴を持つ。

SB3357（Fig.28）

南北柵SA3195Aに設けられた門建物である。間口一間（2.4m）で，本柱と控柱とは1.7m

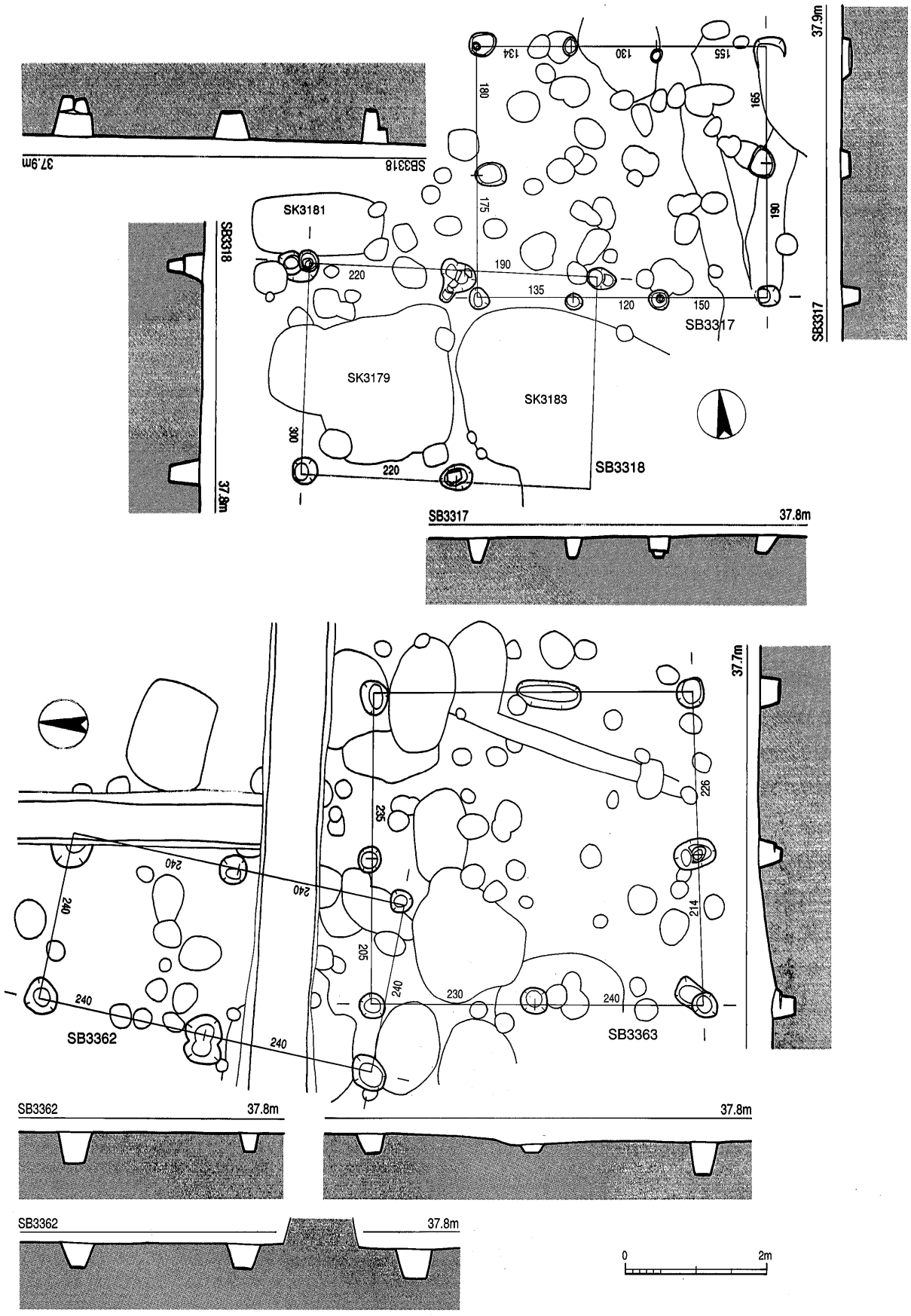


Fig. 40　南辺域建物実測図⑪（1/80）

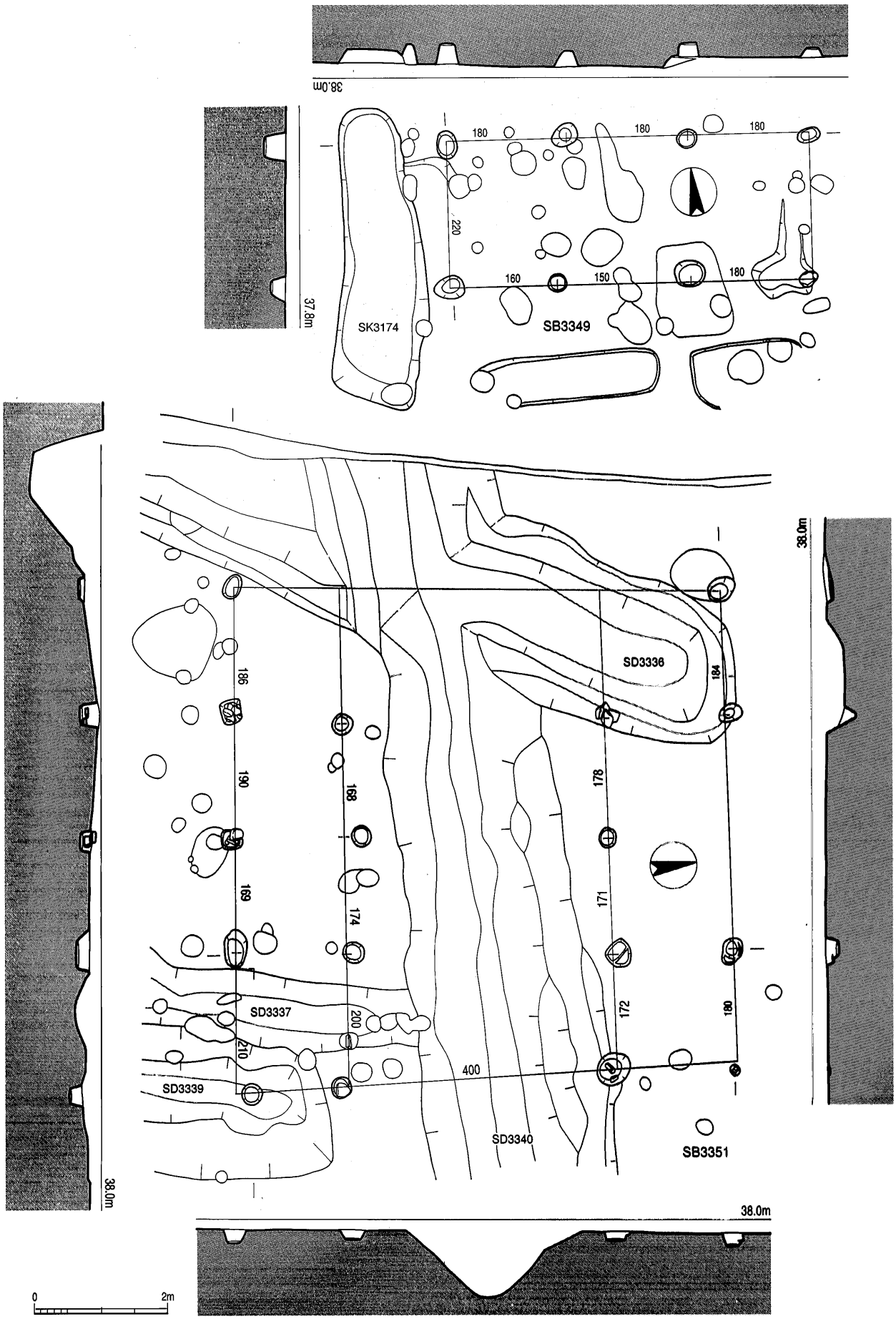


Fig. 41 南辺域建物実測図⑫ (1/80)

離れている。柱穴は円形を呈し，本柱が50cm，控柱が30cmの大きさ。

ＳＢ3358（Fig.29）

第111次調査区の西側で，東西柵ＳＡ3198に設けられた門建物である。ＳＢ3230と切り合うが，前後関係は不詳。間口一間（3.0m）で，本柱と控柱の間隔は1.8mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.5m，深さ0.4mを測る。

ＳＢ3359（Fig.27）

南北柵ＳＡ3211の中程に設けられた門建物である。ＳＢ3361・3362と切り合うが，当建物が最も古い。柵との取付きは「只」字形に内側に引っ込めている。間口一間（3.0m）で，本柱と控柱の間隔は1.8mを測る。柱穴は楕円形を呈し，径0.4～0.8mの大きさ。なお，門建物及び接続する箇所の柵の柱穴数個を抜き取り，新たに柵を設け遮蔽している。

改築した門

ＳＢ3361（Fig.37）

ＳＢ3307の1.5m南側に位置し，ＳＢ3359・3362と重複する。梁行１間（2.66m）×桁行２間（2.9m）の小規模な東西棟掘立柱建物である。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。西側の梁行方位は真北を示す。

ＳＢ3362（Fig.40）

第109次調査区と第111次調査区に跨って検出した。門建物ＳＢ3359を切り，ＳＢ3361・3363と重複する。梁行１間（2.4m）×桁行２間（4.8m）の小規模な南北棟掘立柱建物である。柱穴は径0.3～0.5m前後の円形を呈し，深さは0.4m前後としっかりしていた。西側の桁行方位は北から東に11度振っている。

ＳＢ3363（Fig.40）

ＳＢ3362の南側で，同建物と重複する。梁行２間（4.4m）×桁行２間（4.7m）の側柱建物である。柱穴は径0.3～0.4m前後の円形を呈し，深さは0.3mを測る。西側の桁行方位は北から東に11度振っている。

ＳＢ3364（Fig.42）

ＳＢ3363の８m東側に位置し，ＳＫ3244と重複する。梁行２間（4.5m）×桁行２間（4.6m）の総柱建物である。柱間は2.1～2.5mとばらつきがある。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の梁行方位は真北を示す。

ＳＢ3365（Fig.42）

ＳＢ3363の３m南側に位置し，ＳＢ3315・3366と重複し，ＳＤ3232，ＳＫ3281に切られる。現状で，梁行３間（5.7m）×桁行２間以上（4.6m）の総柱建物であるが，桁行は３間になる可能性がある。柱間は1.8～2.4mとばらつきがみられる。柱穴は径0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には偏平な石を入れ，礎盤としている。東側の桁行方位は北から東に２度振っている。

ＳＢ3366（Fig.42）

第111次調査区の南側に位置し，ＳＥ3240に切られ，ＳＢ3315・3365，ＳＫ3251と重複する。南半部は調査区外に延びるため現状で梁行３間（5.35m），桁行２間以上の建物であるが，桁行は４間になるものと思われる。また，西桁行側に廂を付設している。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.6mで，深さは0.5mとしっかりしている。西側の桁行方位は北から東に２度振っている。

片廂建物

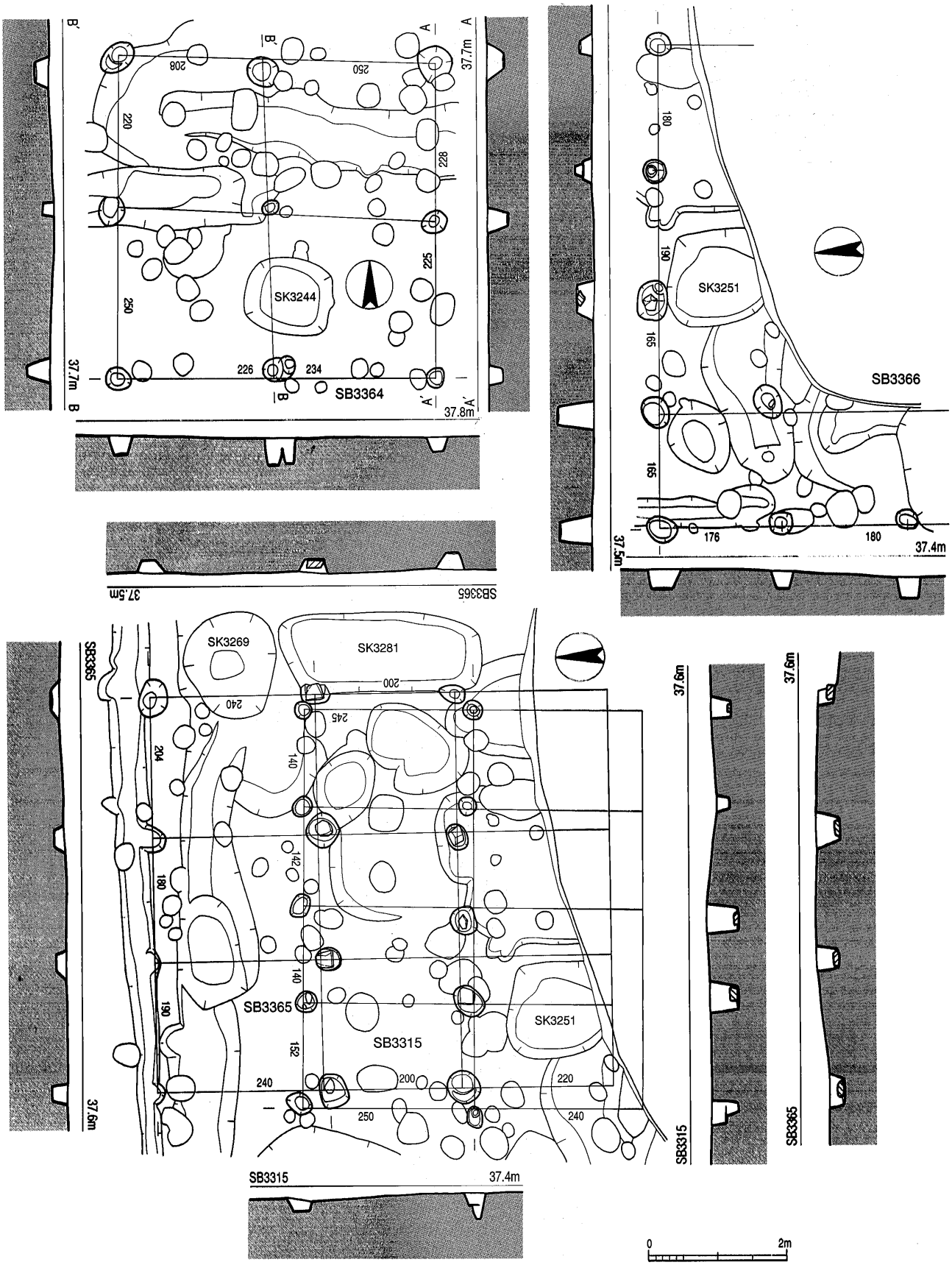


Fig. 42 南辺域建物実測図⑬（1/80）

ＳＢ3367（Fig.43）

第111次調査区の南東隅に位置し，ＳＡ3212・ＳＢ3368と重複する。この近辺もピットが無数に存在するが，比較的大きなものを柱穴として抽出し，梁行２間（4.5m）×桁行３間（5.7m）の総柱建物として考えた。柱間は梁行側が2.1～2.3m，桁行側が1.6～2.1mとばらついている。柱穴は径0.3～0.6mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。東側の桁行方位は北から東に４度60分振っている。

ＳＢ3368（Fig.43）

第111次調査区の南東隅に位置し，ＳＡ3212・ＳＢ3367と重複する。梁行２間（4.95m）×桁行３間（6.0m）身舎の南梁行に廂を付設した片廂建物である。梁行の柱間は2.3m・2.65m，桁行側は1.85～2.1mを測る。柱穴は径0.3～0.6mの円・楕円形を呈し，深さは0.3m前後。東側の桁行方位は北から東に３度分振っている。

片廂建物

ＳＢ3369（Fig.37）

第109次調査区の西側で，ＳＢ3349の２m東側で検出した。丁度，ＳＤ3218を跨ぐ格好で位置する。桁行・梁行とも１間で，柱間は大略2.4mを測る。

ＳＢ3376（Fig.37）

第111次調査区の南西隅で検出した。梁行１間（2.03m）×桁行２間（3.78m）の小規模な東西棟の掘立柱建物である。柱穴は径0.3～0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には石を詰めているものがあった。

ＳＢ3377（Fig.43）

第111次調査区の南西拡張部で検出した。ＳＫ3264，ＳＥ3270・3275・3280に切られる。西半部が調査区外にあるため梁行１間以上，桁行３間（6.4m）の規模であるが，梁行２間だと南北棟建物となる。柱穴は径0.4mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には柱根を留めるものがあり，10cm程の大きさであった。東桁行方位は北から東に４度振っている。

ＳＢ3378（Fig.43）

第111次調査区の南西拡張部で検出した。ＳＫ3266・3267と重複する。西半部が調査区外にあるため梁行１間以上（2.35m），桁行３間（5.1m）の規模であるが，当建物も梁行が２間だと南北棟建物になる。桁行側の柱間は，北から1.5m・1.8m・1.8mとした。柱穴は径0.25～0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。隅柱の柱穴は他の穴に比してやや大きい。東桁行方位は北から東に４度振っている。また，ＳＢ3377とは桁行の柱筋が通り，方位も等しいことから同時併存と考えられる。

ＳＢ3421（Fig.44）

第117次調査区の南東隅で検出した。南半部が調査区外にあるため梁行は３間（4.5m）で，桁行は１間以上（1.12m）を確認したに過ぎない。梁行の柱間は1.5m等間とした。柱穴は0.5m前後，深さは0.3m前後を測る。柱穴の中には角礫が入っているが，礎盤として入れたものであろう。桁行方位は北から東に17度振っている。

礎盤

ＳＢ3422（Fig.44）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＥ3375，ＳＫ3399・3409・3411に切られる。ピットが無数に存在する中，比較的大きめなものを柱穴として抽出し，梁行２間（4.4m）×桁行３間（5.9

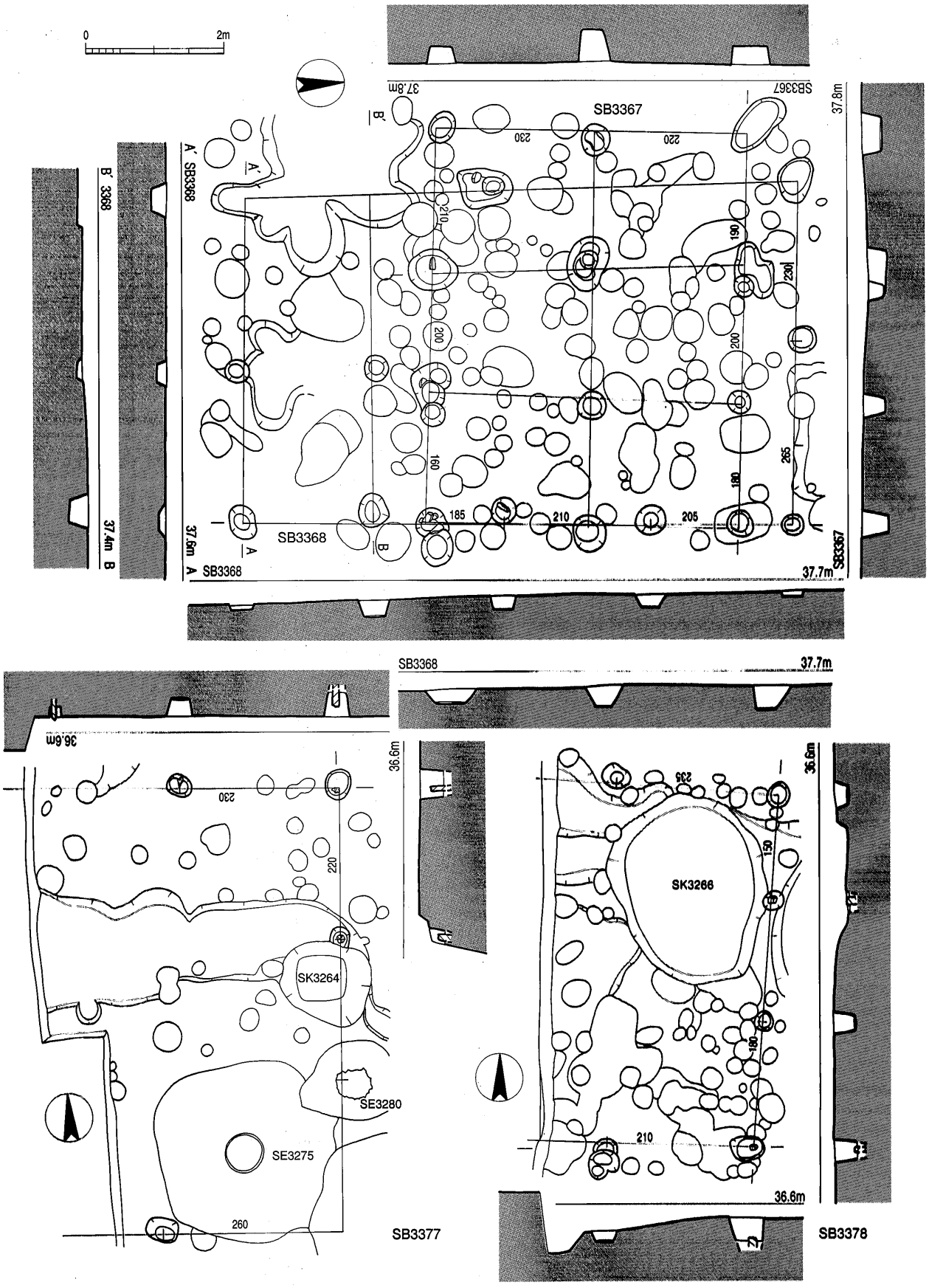


Fig. 43 南辺域建物実測図⑭ (1/80)

片廂建物　m)身舎の南梁行に廂を付設した片廂建物と考えた。柱間は梁行側が2～2.36m，桁行側は1.9～2.12mとばらつく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さは0.2m前後。東側の桁行方位は北から東に3度振っている。

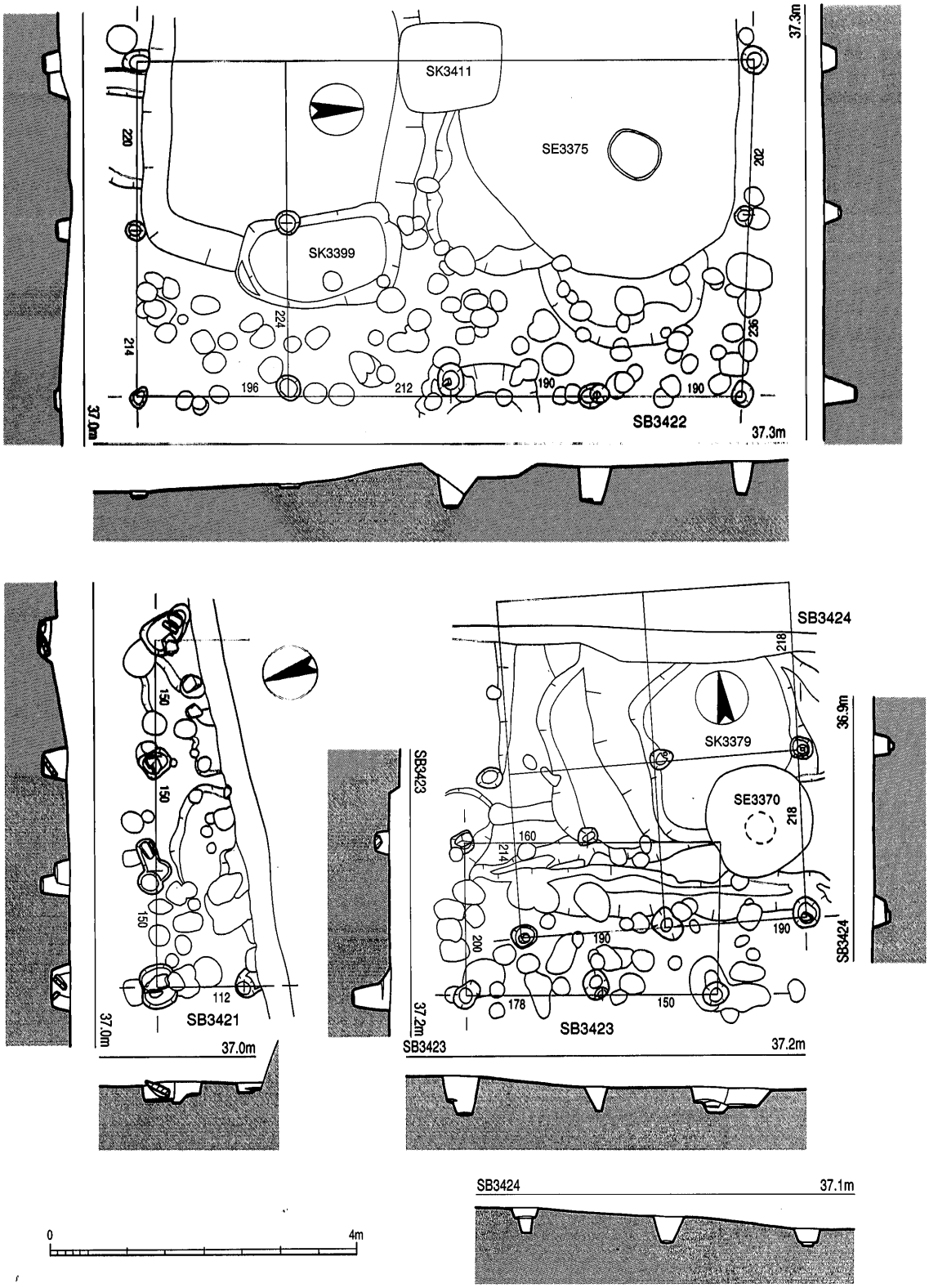


Fig. 44　南辺域建物実測図⑮（1/80）

ＳＢ3423（Fig.44）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＥ3370切られ，ＳＢ3424・ＳＤ3435と重複する。当建物もピットが無数に存在する中，梁行１間（2.0m）×桁行２間（3.3m）の小規模な東西棟掘立柱建物とした。柱間は梁行側が2.0m，桁行側は1.5～1.78mとばらつく。柱穴は径0.4m前後の円形を呈し，深さは0.2m前後を測る。西側の梁行方位は北から東に６度振っている。

ＳＢ3424（Fig.44）

ＳＢ3423と重複し，同建物の北側に位置する。ＳＫ3379に切られ，北半部は調査区外にあるため現状で梁行２間（3.8m），桁行１間以上の建物であるが，２×２間の総柱建物になる可能性が高い。柱間は梁行側が1.9m等間である。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さは0.2m前後。東側の梁行方位は北から東に３度振っている。

ＳＢ3660Ａ・Ｂ（Fig.45，PL.54･55）

第122次調査区の中央やや東側で検出した掘立柱建物で，ＳＢ3686・3687，ＳＥ3685，ＳＤ3663・3668・3669，ＳＫ3672，ＳＸ3682などの遺構に切られる。前回の報告では，古期の南北棟建物（梁行３間×桁行８間）をＳＢ3660とし，それと重複する新期の建物（梁行３間×桁行７間）をＳＢ3665として報告していたが，同一建物の同一場所における建替えなので，今回は古期建物をＳＢ3660Ａ，新期建物をＳＢ3660Ｂとして報告する。

前回，ＳＢ3660Ａは梁行３間×桁行８間で，中央柱列を有する建物としていた。しかし，新期・古期建物とも梁行を３間とした場合，梁行に古期建物の痕跡が全くみられないのは大きな疑問であった。今回は梁行２間（8.7m）×桁行８間（17.5m）で，中央柱列を有する建物と考えた。柱穴掘方は0.8×1.1m程の長方形を呈し，径20cm余りの柱痕を確認した。柱穴掘方が新期建物と重複していないものには柱痕があり，建替えに際しては柱を掘り抜かずに切断している。柱間は梁行が4.35mで，桁行は2.2～2.5mを測る。また，中央柱列は６間で，柱間は2.65～3.0mであり，梁行側柱から３間目で桁行側柱掘方と揃う。掘方は深く，しっかりしていることから棟木支え柱の掘方と考えられる。

棟木支え柱

ＳＢ3660Ｂは梁行３間（8.7m）×桁行７間（17.8m）の側柱建物で，柱間は梁行が2.75～2.95mで，桁行が2.18～2.96mとばらつく。柱穴掘方は0.8mの方形ないしは長方形を呈し，25cm前後の柱痕を確認した。また，掘方は整然と並ばず，左右にぶれる。建物方位は６度東に振れている。当建物は古期建物と同一場所に建て替えられており，逆の見方をすると，何らかの理由により限定されたこの場所でしか建替えができなかった。その理由の一つとして，周囲が資材置き場になっていたことなどが考えられよう。なお，建物北部は推定南辺築地ＳＡ3880と重複するが，築地の完成が天平18年の観世音寺供養と同じであるなら，建物は既に終焉していたことになる。

供養時には終　焉

ＳＢ3670（Fig.46，PL.56-1）

ＳＢ3660の2.5m西側に位置し，ＳＥ3680を切り，ＳＥ3690・3695，ＳＫ3674と重複する。前回の報告では梁行２間×桁行３間の掘立柱建物としていたが，図面検討の結果，梁行２間（3.6m）×桁行４間（7.16m）の東西棟建物とした。柱間は梁行が1.72～2.04m，桁行は1.54～1.84mとばらつく。柱穴は円形を呈し，径0.3m前後，深さ0.4mを測る。中には柱根を留める柱穴がみられる。東側の梁行方位は北から西に３度30分振っている。

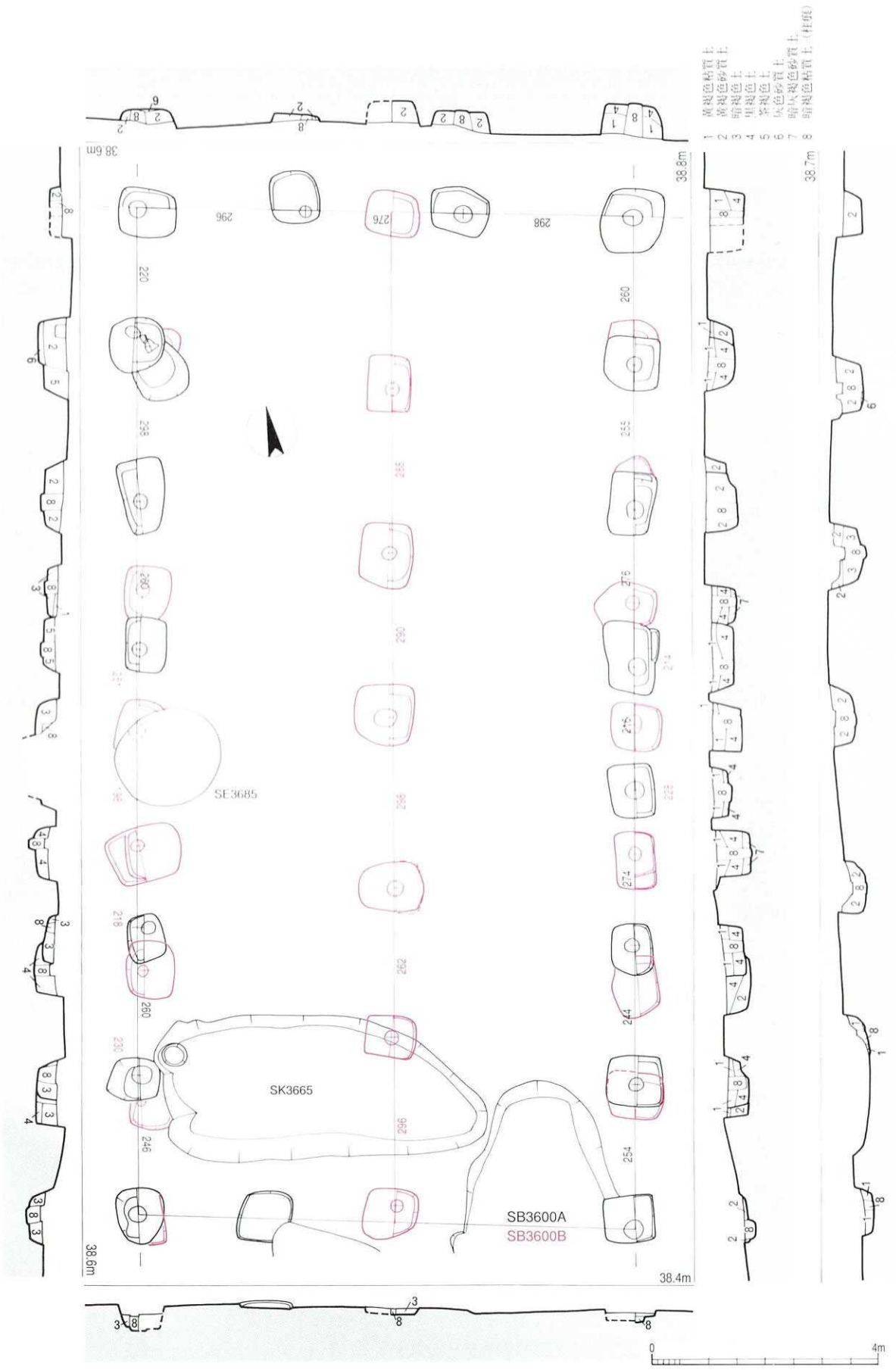


Fig. 45　南辺域建物実測図⑯（1/100）

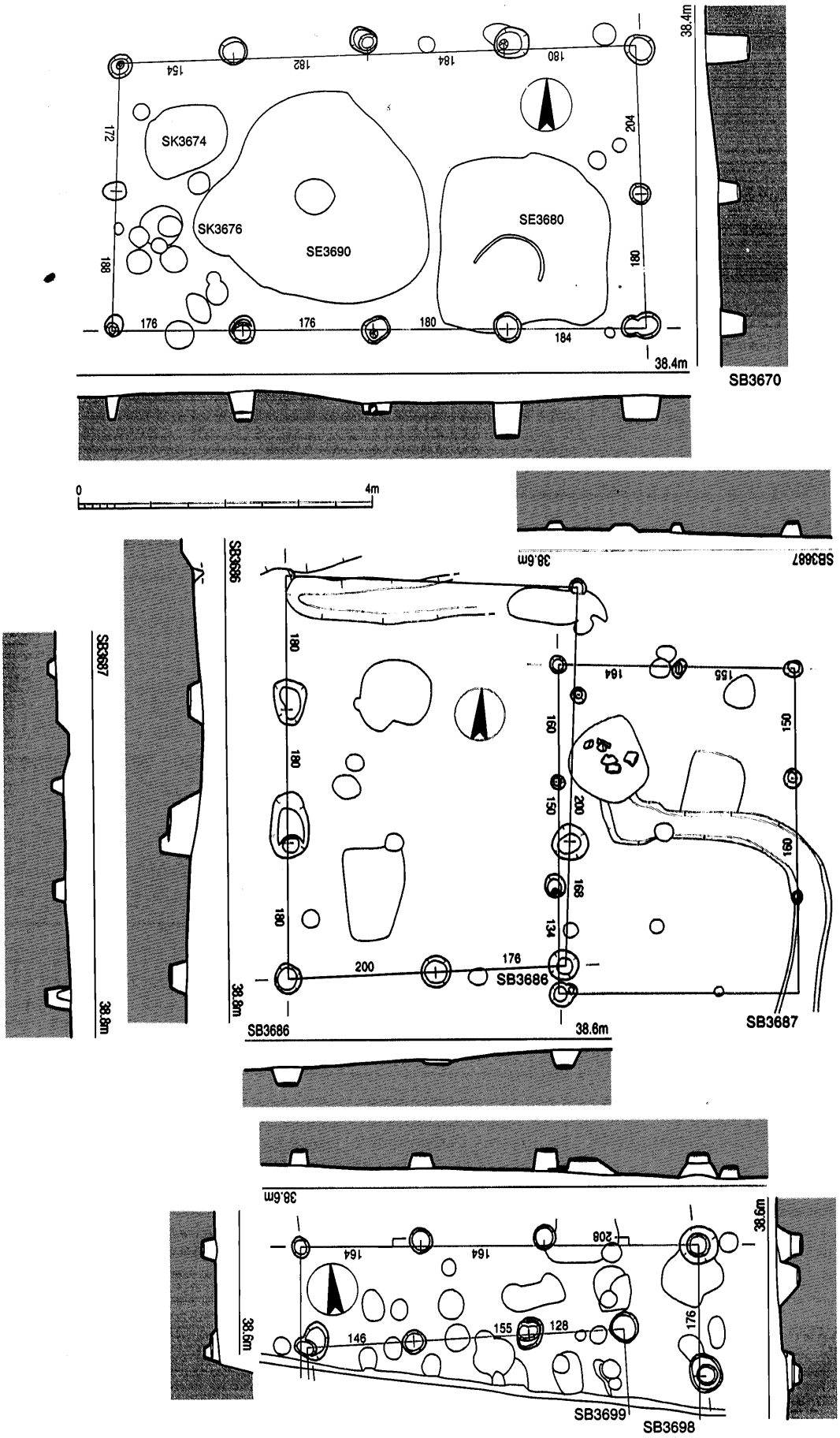


Fig. 46 南辺域建物実測図⑰ (1/80)

ＳＢ3675（Fig.47）

ＳＢ3852と完全に重複するが，当建物が新しい。梁行３間（7.65m）×桁行５間（10.7m）

片廂建物　身舎の南桁行に廂を付設した片廂掘立柱建物である。柱間は梁行側が2.24～2.76mで，桁行側は1.92～2.38mとばらつく。柱穴は円形を呈し，径0.5前後m，深さ0.3mを測る。柱根を残す柱穴が２個あり，径14cm程であった。

ＳＢ3681（Fig.48）

第122次調査区の西側で，ＳＢ3675・3691と重複する。西側桁行は調査区外にあるが，恐らく，梁行間３（６m）×桁行５間（8.1m）の南北棟掘立柱建物になろう。柱間は梁行側が1.8～2.4m，桁行側は1.35～1.75m間隔。柱穴は円形を呈し，径0.2m前後と小振りで，深さは0.2mを測る。桁行の方位は北から東に２度振っている。

ＳＢ3686（Fig.46）

第122次調査区の北側に位置し，ＳＢ3660を切っている。また，ＳＢ3687と重複するが，柱穴を抜き取っているので当建物がＳＢ3687に先行すると考えられる。梁行２間（3.66m）×桁行３間（5.4m）の南北棟掘立柱建物で，柱間は梁行側が1.66m・2.0m，桁行側は1.46～1.8mを測る。柱穴は径0.4～0.9mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。西側の桁行方位は北から西に４度振っている。

ＳＢ3687（Fig.46）

ＳＢ3686の東隣に重複して位置する。南東隅柱をＳＤ3663に切られて失うが，梁行２間(3.2m）×桁行３間（4.46m）の南北棟掘立柱建物である。柱間は梁行側が1.55m・1.64m，桁行側は1.34～1.6mの間隔。柱穴は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mと小振り。西側の桁行方位は北から西に２度振っている。

ＳＢ3691（Fig.48）

第122次調査区の西端部に位置し，ＳＢ3675・3681と重複するが，前後関係は不詳。また，調査区外の西側に延びているので，規模も把握できていない。現状で桁行３間（6.7m），梁行１間以上の建物であるが，梁行が２間だとすると南北棟掘立柱建物となる。桁行側の柱間は北から2.2m・2.2m・2.3mの間隔。柱穴は円形を呈し，径0.4m前後，深さ0.2m前後を測る。建物の方位は北から東に２度30分振っている。

ＳＢ3698（Fig.46）

第122次調査区の南東側に位置し，ＳＢ3699と重複するが，前後関係は不詳。南半部が調査区外にあるため現状で梁行３間（5.4m）×桁行１間以上の掘立柱建物とした。梁行側の柱間は1.64～2.08mを測る。柱穴は径0.3～0.5mの円形を呈し，深さは0.3m前後を測る。

ＳＢ3699（Fig.46）

ＳＢ3698の南側で，同建物と重複する。当建物も大半が調査区外に延び，梁行側と考えられる柱穴４個を確認したに過ぎない。こちらが梁行とすると梁行３間（4.2m）の南北棟掘立柱建物となる。梁行側の柱間は東から1.28m・1.55m・1.46mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.4m，深さ0.25m前後を測る。

ＳＢ3852（Fig.47，PL.62-2）

第122次調査区西端から第130次調査区東端に跨って検出した東西棟の掘立柱建物で，ＳＢ

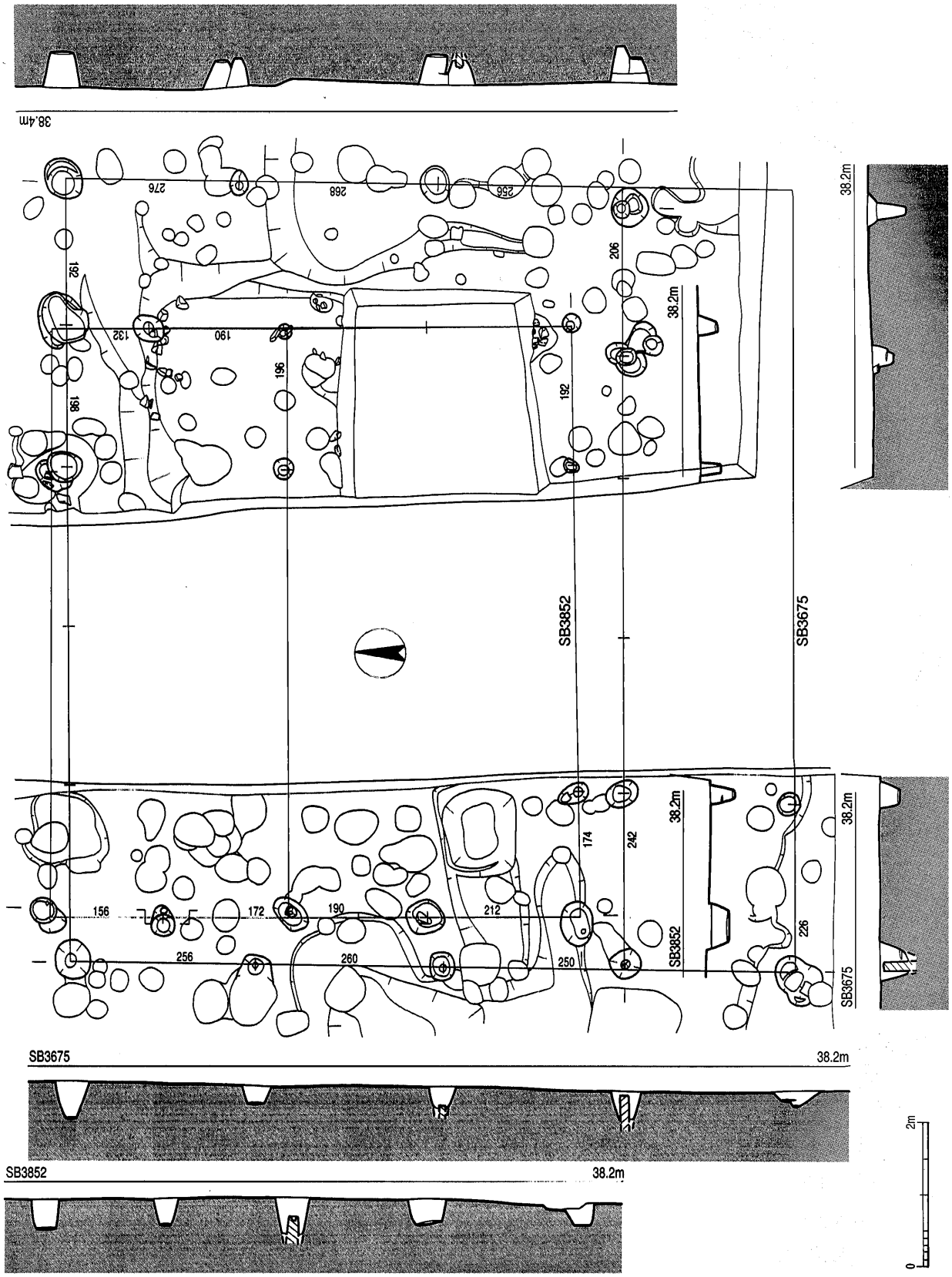


Fig.47 南辺域建物実測図⑱ (1/80)

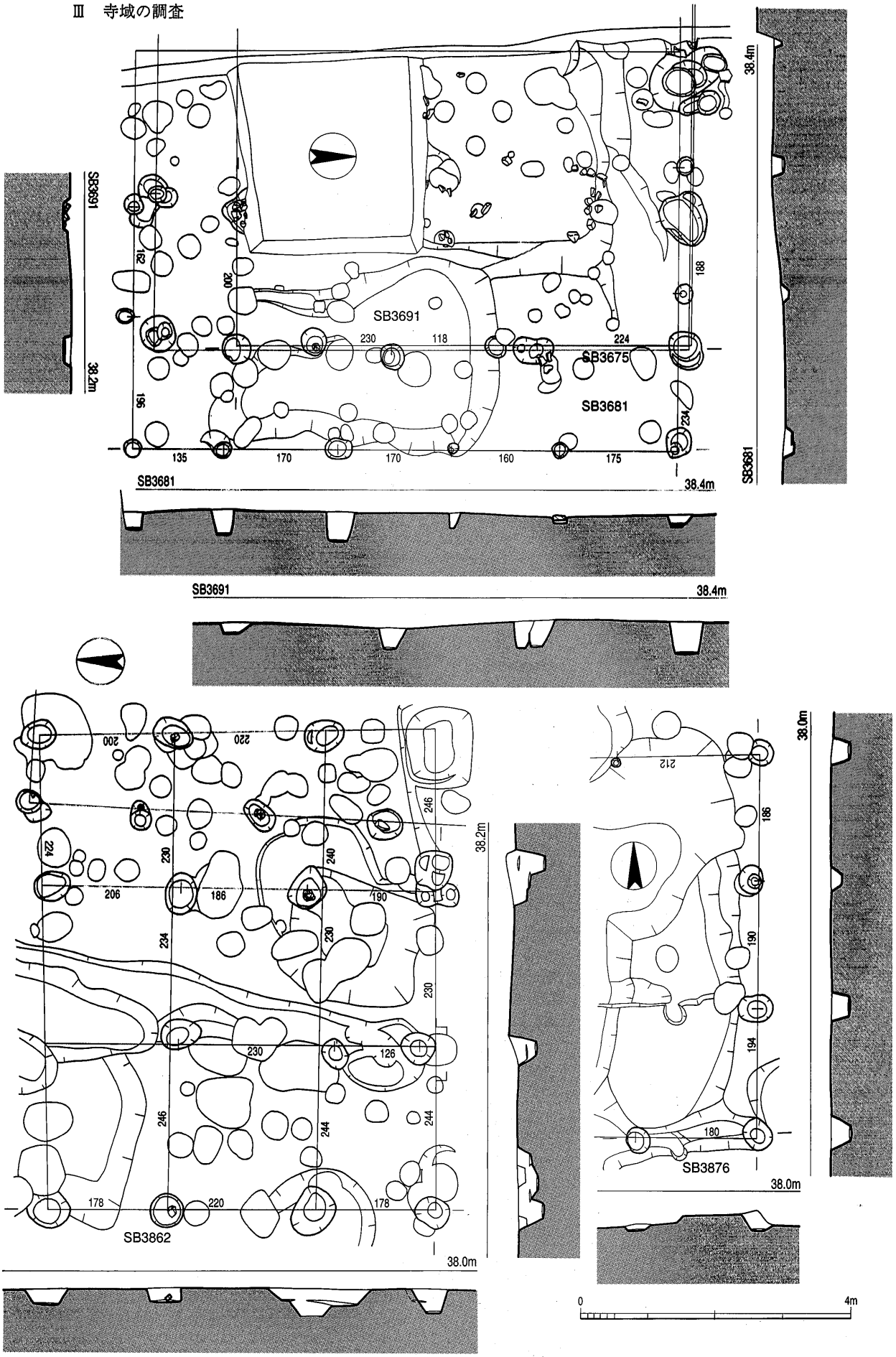


Fig. 48　南辺域建物実測図⑲（1/80）

3675に切られる。建物規模は梁行4間（7.3m）×桁行4間（8.2m）で，梁行の中央に柱列を有する。柱間は梁行側が1.56～2.12m，桁行側は1.74～1.96mの間隔を測る。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.6m，深さ0.2mと小振り。柱穴の中には礫を入れたものがあり，柱の根固めとしたものか。西側の梁行方位は真北を示す。 柱の根固め

S B3862（Fig.48，PL.62）

第130次調査区の東側に位置し，S B3675・3852と重複するが，前後関係は判然としない。梁行3間（5.84m）×桁行3間（7.2m）の東西棟総柱建物で，柱間は梁行側が1.68～2.2m，桁行側は2.24～2.46mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.6m前後と比較的大きく，深さ0.2mを測る。西側の梁行方位は北から2度西に振っている。

S B3876（Fig.48）

第130次調査区の中程で検出した。S D3840に切られるため現状で梁行3間（5.7m）×桁行1間以上の掘立柱建物である。梁行の柱間は北から1.86・1.9・1.94mとばらつく。柱穴は径0.5mの円形を呈し，深さ0.3mを測る。東側梁行方位は北から東に3度振っている。（小田）

3）溝

S D093（PL.5-1）

第5次調査区の西側で検出した南北溝で，幅0.8m，深さ0.2mを測る。長さ2m余りを検出した程度で，詳細は不明。

S D363（Fig.49，PL.6-2）

第16次調査区で検出した石組溝で，長さはトレンチ幅の1.5mに留まるが，幅0.6m，深さ0.56mを測る。両岸に自然石による護岸を施しており，2段分が残っていた。埋土には暗灰色粘土が堆積していた。

S D468（Fig.25，PL.8-1）

第23次調査区の中程で検出した上層の溝で，築地S A467の西側溝と考えられる。南北長は 築地の側溝

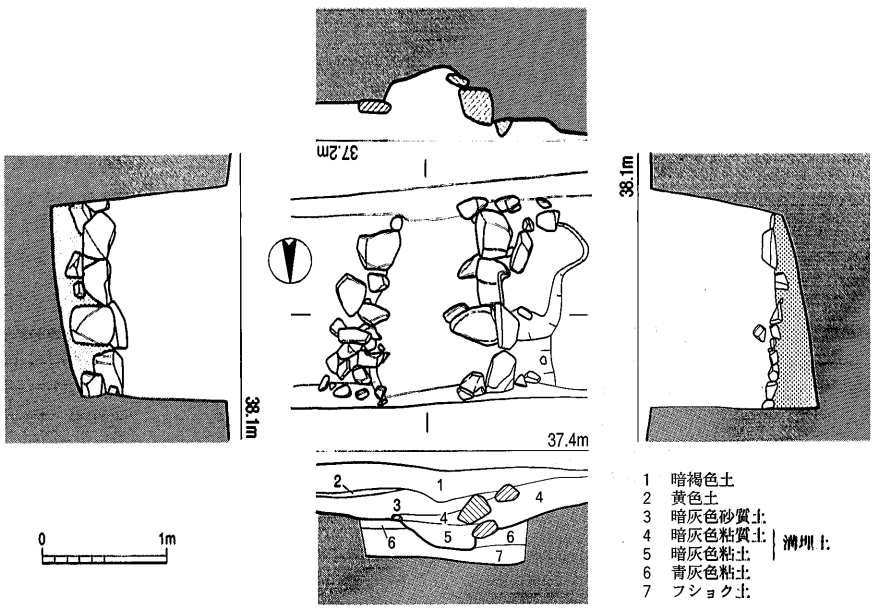


Fig.49 溝S D363実測図（1/60）

両端が調査区外に延びるため長さ4.8mの検出であるが，上面幅1.1m，検出面からの深さ0.2mを測る。なお，▲印を付した箇所は円形に抉れ，西側は2.1mの間隔を有することから堰板支柱の柱穴と考えられる。

ＳＤ485（PL.9-1）

第23次調査区の中程で検出した下層の溝で，南北両側は調査区外に延びる。上面幅2.2m，深さ0.6mを測る。一応，溝としたものの調査区が狭小なこともあり，詳細は不明。埋土は黒色粘土・黒灰色粘土で，最下層には腐植土が堆積していた。

ＳＤ522（PL.11-2）

第28次調査区東半部で検出した下層の溝状遺構である。ＳＤ523と接続し，Ｌ字形をなす。上面幅1.1m，深さ0.3mを測り，埋土中から多量の土師器が出土した。

ＳＤ523（PL.11-2）

ＳＤ522と連続する下層の南北溝である。上層遺構ＳＸ525を残した状態で掘り下げたため溝の幅はつかめていない。ＳＤ522・523とも調査区外に延びるため規模等は明らかでないが，何らかの区画施設と思われる。

ＳＤ866（PL.12-1）

第39-1次調査区の西側で検出した東西溝で，井戸ＳＥ868に切られる。上面幅0.5m，深さ0.1mで，長さ12.3mの箇所で北に折れ曲がる。当溝の東に位置する東西溝ＳＤ880との間が1.4m程途切れており，出入り口になるか。ただ，門的な施設は検出していない。

ＳＤ880

ＳＤ866の1.4m東側に位置し，同溝とは直線関係を有する東西溝である。規模的にもＳＤ866と等しく，上面幅0.6m，深さ0.15mを測る。東半部は下層遺構を把握する目的で掘り下げたため溝全体の長さはつかんでいない。恐らく，ＳＤ866とで北側に存在する施設を囲む区画溝と考えられる。

ＳＤ890（PL.16-1）

第39-2次調査3Trの西端で検出した南北溝で，長さ4.3mを確認した。

ＳＢ884と重複するが，前後関係は不詳。西端での幅0.46m，深さ0.2mで，東側が広くなっている。

ＳＤ892（Fig.50）

第39-2次調査3Trで検出した下層溝で，調査区をＳ字形に蛇行する。北端部での上面幅2.1m，深さ0.4mで，埋土上層が暗灰色砂で，下層には黒茶

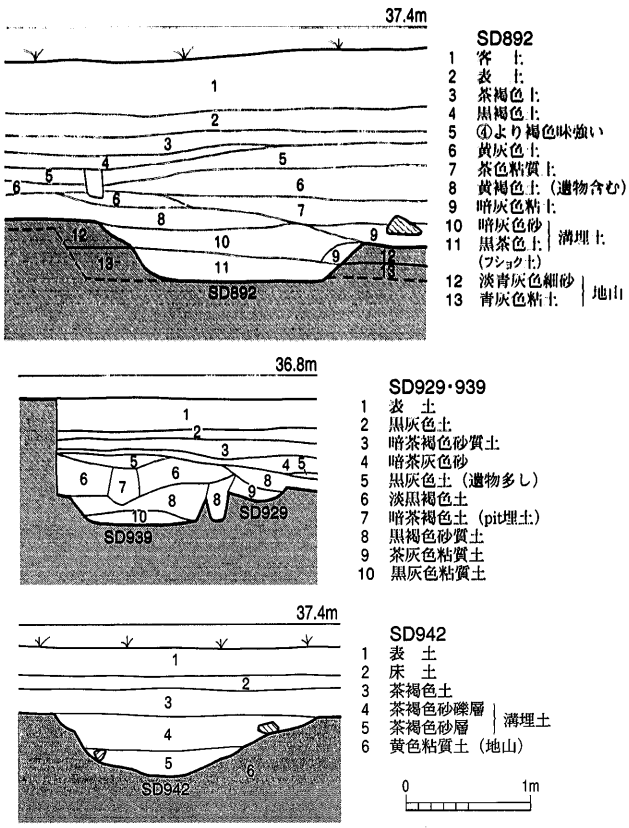


Fig.50　溝ＳＤ892・929・939・942土層図（1/60）

色土（腐植土）が堆積していた。埋土中から古墳時代の須恵器・土師器が出土しており，同時期の自然河川と考えられる。 自然河川

ＳＤ896（PL.15-2）

第39-2次調査４Trの東側で検出した東西溝で，西側は落込ＳＸ903に接続し，東側は39-2次調査３Trまで延びていることから全長18.5mになる。上面幅0.6～0.9m，深さは15cmと浅い。

ＳＤ916（Fig.51）

第39-2次調査４Trの中程で検出した南北溝で，長さ4.7mを確認した。上面幅0.4m，深さ0.2mで，東壁は20cm大の花崗岩自然石で護岸されているが，西壁は素掘りのままとなっている。また，北西側には杭が20cmの間隔で５本打ち込まれており，しがらみを設けていたものか。底面は北側に下がっている。

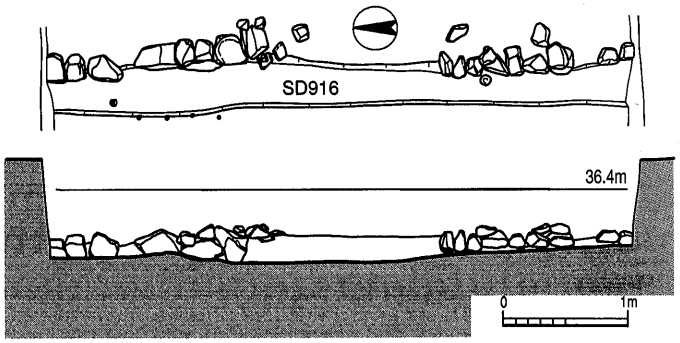


Fig.51 石組溝ＳＤ916実測図（1/60）

ＳＤ929

第39-2次調査４Trの西側で検出した東西溝で，ＳＫ919・935に切られる。西端は調査区外に延びているが，東端部はＳＤ916以東へは延びない。長さ7.8mを確認した。上面幅0.3～0.5m，深さ0.2mを測る。埋土には茶灰色粘質土が堆積していた。

ＳＤ939

ＳＤ929のすぐ南で検出した東西溝で，東側はＳＫ926に切られる。長さ3.4m分を確認した。上面幅1.2m，深さ0.3mを測り，西側に流れている。

ＳＤ942

第39-3次調査１Trの西側で検出した南北溝で，長さ3.4m分を確認した。上面幅2.2m，底面幅0.8～1.6m，深さ0.5mを測る。埋土は上層が茶褐色砂礫層，下層が茶褐色砂層である。

ＳＤ947

第39-3次調査２Trの東側で検出した東西溝で，ＳＤ948と対をなす新期の溝である。上面幅0.28mで，深さは５cm足らずと浅いため両端部は削平により失う。

ＳＤ948

ＳＤ947の0.9m南側に位置し，同溝と平行する。上面幅0.32mで，深さは５cmと浅いため両端部は削平されたものと考えられる。

ＳＤ995

第39-3次調査２Trの西側で検出した東西溝で，長さ13m分を検出した。上面幅0.6mで，深さは８cmと浅いが，西側に向かって下がっている。

ＳＤ997（PL.19-3）

ＳＤ995の南側で検出した東西溝で，ＳＫ1006を切る。長さ19.1m分を確認した。西側は調査区外に延びるが，東端はＳＫ993の2.9m手前で終わっている。上面幅0.7～1.4m，西端部で

の深さ0.25mを測る。

ＳＤ1522（PL.20-1）

第61次調査区の南東部で検出したＬ字形溝で，溝の南岸には20cm大の礫がみられることから護岸を施していたものと考えられる。上面幅1.1～3.2m，深さ0.4mを測る。埋土は上層が暗茶灰色土，下層が暗褐色砂質土であった。

ＳＤ3050（PL.21）

第103次調査区で検出した南北溝で，長さ4.7mを確認した。上面幅1.3m，深さ0.3mで，両端とも調査区外に延びるが，規模・埋土の状況からみてＳＤ3050は第117次調査ＳＤ3430に接続するものと考えられる。なお，溝の東岸には0.9m間隔で護岸のため杭が打ち込まれていた。埋土は上層が黒灰色粘質土で，下層は灰色粗砂で，多量の土師器・陶磁器が出土している。

護岸の杭

ＳＤ3146

第109次調査区の北東側で検出した東西溝で，ＳＤ3156と重複する。小規模な溝で，長さ5.5m，上面幅0.5m，深さ0.3mを測る。

ＳＤ3147

第109次調査区の北側で検出した溝で，逆Ｌ字形を呈する。北へ６mの地点で東に折れ，５m行ったヶ所でさらに南に屈曲する。上面幅0.6～1.2m，深さ0.2～0.3mを測る。

ＳＤ3148

ＳＤ3147の南北方向溝と平行して西側に位置する。小規模な溝で，長さ8.9mを確認したが，ＳＤ3147以北へは延びていない。北側の溝は長さ2.65mで一旦途切れている。溝と平行して直線的に並ぶ柱穴４が個存在し，柱穴を柵とした場合，雨落ち溝的性格になろう。

雨落ち溝

ＳＤ3149

第109次調査区の北側で検出した東西溝で，ＳＡ3193と重複する。上面幅1.4m，深さ0.1mを測り，長さ18.6mを確認した。方向・規模的に第115次調査の東西溝ＳＤ3340に接続すると考えられ，南辺築地に関わる溝の可能性を有する。

南辺築地に関わる溝

ＳＤ3151

第109次調査区の北西側に位置し，ＳＡ3206・ＳＢ3354と重複する。北東～南西に走る溝で，ＳＡ3196以南へは延びない。２箇所で途切れるが，全長15.7m，上面幅0.25～0.5m，深さ0.1～0.2mを測る。南側部分は長さ２mの間隔を有し，この部分は通路となるか。

ＳＤ3152

第109次調査区の北西部で，ＳＤ3151の２m西側に位置する南北溝で，長さ11.3mを確認した。北側は調査区外に延びるが，南端はＳＡ3196以南には延びず，柵とは0.7m空いている。東西溝ＳＤ3153とは直交関係にある。上面幅0.7～1.1mで，深さ0.15mを測る。

ＳＤ3153

ＳＡ3196のすぐ南側を東西に走る溝である。東西長15.3mで南に折れ，ＳＤ3218と切り合う。西側は調査区外に延びる。西端幅0.25m，深さ0.08m，東端幅1.05m，深さ0.2mで，東側に向かって溝幅・深さを増す。

ＳＤ3154

ＳＤ3153の南を東西に走る溝で，西端はＳＤ3153と重複するが，東に8.4m行った箇所で一

且途切れる。ＳＤ3218と一連の溝と考えられる。上面幅0.45m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ3156

第109次調査区の北東部で検出した逆Ｌ字形の溝で，ＳＤ3146と重複し，南部分はＳＤ3233となる。東西長6.2m，上面幅0.4～0.6mで，深さは５cmと削平が著しい。

ＳＤ3190（PL.26-1）

第109・111次調査区の中央で検出した溝で，溝の北側はＳＤ3299と重複し，中程はＳＤ3291・3232と重複し，南端はＳＤ3200と重複する。全体としてコ字形を呈し，東辺長38mを測るが南端部分の肩部は必ずしも明瞭ではない。上面幅0.6～1.3m，深さ0.3～0.4mを測る。溝の西肩部には南北柵ＳＡ3195があり，溝・柵で一連の区画施設を構成する。

ＳＤ3200（PL.29）

第109・111次調査区の東部で検出した南北溝である。北端はＳＤ3149付近から始まり，南側は調査区外に延びる。溝幅は北端で4.5m，南側で９mと南側に向かって広くなる。深さは南側で0.7mを測る。埋土上層が暗灰色粘土，下層には黒色粘質土が堆積しており，埋土下層の黒色粘質土からは「嘉元二年十一月卅日」の紀年銘を有する卒塔婆ほか，多数の木製品が出土している。第130次調査で検出したＳＤ3840と対をなす溝で，中世観世音寺の参道側溝と言える溝である。

「嘉元二年」銘木簡

ＳＤ3214

第109次調査区の北端に位置する溝で，ＳＤ3149と重複する。調査区の北端から南へ10.5mの箇所で東に屈曲する。南北部分は上面幅1.1～1.5m，深さ0.1m，東西部分の長さは13m，上面幅0.9m，深さ0.25mで，南東側に向かって深くなる。

ＳＤ3217

第109次調査区の中央に位置し，北側はＳＡ3191・ＳＤ3146と重複し，南端部はＳＤ3218と切り合う。北東から南西方向に鉤形に走る溝で，長さ17mを検出した。東側での上面幅1.5m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ3218

第109次調査区の北西側から第111次調査区の西側にかけて検出したＬ字形の溝で，南端はＳＤ3300に接続する。東西長16.5m，南北長35.5mを確認したが，南側部分の肩部は明瞭ではない。上面幅は北側の屈曲部分で幅1.5m，深さ0.15mを測る。

ＳＤ3231

第111次調査区の東側で検出した東西溝で，西端はＳＤ3190に接続し，東端はＳＥ3235付近で不明瞭となる。また，ＳＢ3365を切り，ＳＡ3212と重複する。検出長11.3m，上面幅0.5m，深さ0.15mで，ＳＤ3190に向かって深くなっている。

ＳＤ3232

ＳＤ3231の南隣に位置し，ＳＥ3269に切られ，ＳＡ3212・ＳＢ3365・ＳＫ3276と重複し，当溝も西端はＳＤ3190に接続する。東に10m行った箇所で南に折れ，南端は調査区外に延びる。上面幅0.65～1.05m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3233

第109次調査区の南東側から第111次調査区の北東側にかけて走る南北溝である。北端はＳＤ

3156と接続し，南端はＳＥ3235に切られるが，ＳＤ3231とは直交関係にあるため両者は一連の溝になる可能性が高い。また，ＳＥ3235の2.5m北側では溝が一旦途切れ，すぐ西隣に同溝と平行して小溝が存在する。軸がずれているものの一連の溝と考える。上面幅0.5m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ3234

第111次調査区の北西部で検出した南北溝で，北端はＳＫ3253と切り合い，南端はＳＡ3197の手前で終焉する。検出長6.5m，幅0.5m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3236

第111次調査区の南西側に位置する南北溝で，ＳＢ3303と重複する。南端はＳＤ3300と接続するが，中程はＳＤ3238，建物部分でＳＤ3237と重複する。南北長14m，北端幅1.2m，深さ0.3mで，ＳＤ3300に向かって下がっている。

ＳＤ3237

第111次調査区の北西側に位置する東西溝で，ＳＢ3303と重複する。東端はＳＤ3236と接続し，西端は調査区外に延びる。検出長6.9m，上面幅0.4～0.6m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3238

第111次調査区の北西側に位置する東西溝で，ＳＫ3296に切られる。東端はＳＤ3236と接続し，西端は調査区外に延びる。検出長7.3m，上面幅0.8m，深さ0.1mを測る。ＳＤ3237とＳＤ3238の距離は4.5mで，ＳＤ3238からＳＤ3300までの距離は5.6mを測り，両溝で小区画を形成する。

ＳＤ3239（Fig.52）

第111次調査区の南側で検出した東西溝で，ＳＤ3300の南縁と併走するが，前後関係は不詳。東端での上面幅1.7m，深さ0.5mを測り，東側に深くなっている。埋土中から鞴の鋳型が出土しているが，ＳＫ3295及びＳＸ3305に関わるものと推測される。

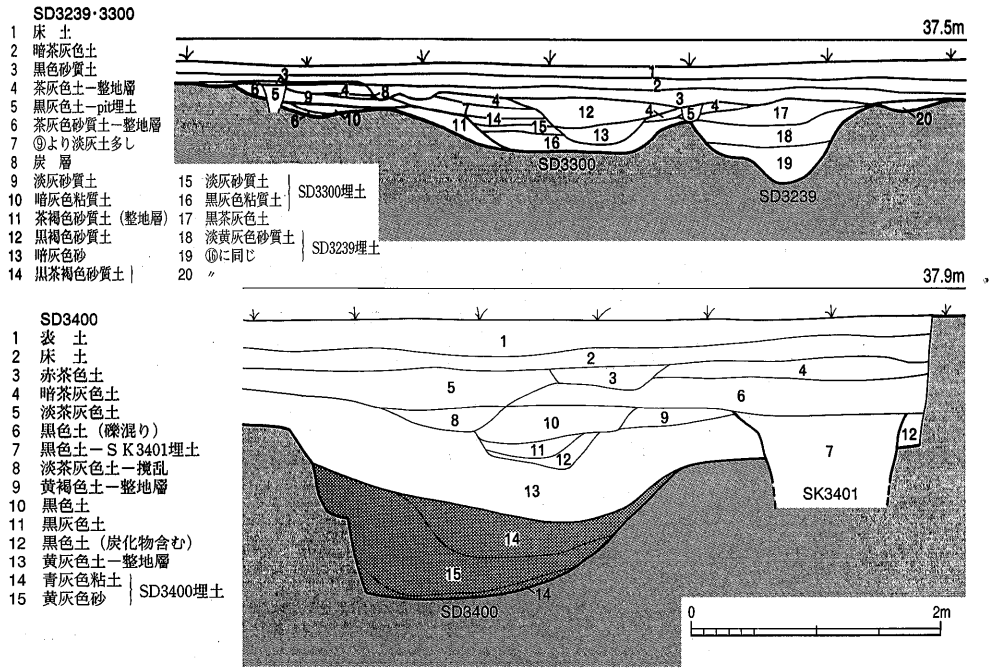


Fig.52　溝ＳＤ3239・3300・3400土層図（1/60）

ＳＤ3241

ＳＤ3239の南側で，同溝とほぼ併走する東西溝で，ＳＫ3259・3261と重複する。東端はＳＤ3190に接続するが，西側については攪乱されているため延長を確認できない。東端部での幅0.7m，深さ0.4mで，東側に深くなっている。

ＳＤ3285

第111次調査区の西側に位置し，ＳＡ3197・3198，ＳＢ3304・3306，ＳＤ3289と重複する。ＳＢ3230の7.5m東側に位置し，同建物を区画するコ字形溝である。南北長14.5mで，南端はＳＤ3300に接続する。幅は北側で1.3m，深さ0.5mで，南側に向かって深くなる。

ＳＤ3289

第111次調査区の西側に位置する東西溝で，ＳＢ3230・3304・3358，ＳＫ3292と重複する。西端はＳＤ3218と接続し，東端はＳＤ3190に接続する。東端での幅0.65m，深さ0.3mを測る。溝底はＳＤ3218に向かって深くなる。

ＳＤ3290（PL.30-1）

第109・111次調査区の東端部で検出した南北溝で，ＳＤ3200の上層遺構となる。溝の先端は第109次調査区北東隅から29mの地点で終焉する。北端幅1.35mで，南側に向かって深くなる。位置的にＳＤ3200埋没後の参道西側溝と考えられる。

参道西側溝

ＳＤ3291

第111次調査区の中央やや北側に位置するＬ字形溝で，ＳＡ3194・3195・3211・3212，ＳＤ3190と重複する。溝の西端はＳＤ3218と接続し，東端はＳＤ3231と接続するが，同溝以南には延びていない。北東隅部での幅0.6m，深さ0.15mを測る。

ＳＤ3299（Fig.34）

第109次調査の中央やや南側で検出したＬ字形溝で，ＳＢ3205を囲んでいる。北辺長8.1m，東辺長5.1m，上面幅0.5～0.7mで，深さ0.3mの遺存状況である。建物との間隔は北辺側・東辺側とも１m程であった。

ＳＤ3300（Fig.52，PL.30-2）

第111次調査区の南側に位置する東西溝で，ＳＢ3306と重複し，ＳＤ3190・3218・3236・3304と接続する。東延長部分は第154次調査でも確認しているが，西端は調査区外にある。上面幅は東端側で2.1m，西端側で2.4mを測る。溝の中央部の底面は凹凸が激しく，方形土坑が連続した形状を呈する。埋土下層は黒灰色粘質土が堆積していた。

ＳＤ3333（Fig.53，PL.45-3）

第115次調査南区の南西部で検出した鍵形に巡る溝である。西側と南側は調査区外となる。上端幅2.2m，下端幅は東西溝が1.6m，南北溝が0.8m，深さ0.6mを測る。溝の内側には護岸のための杭が打ち込まれ，南北溝の西肩部には拳大から人頭大の石が配されている。

護岸の杭

ＳＤ3334（Fig.53）

第115次調査北区から南区にかけて位置し，途中ＳＤ3333と切り合うが，ＳＤ3335と一連の溝と考えられる。北西から南東に蛇行し，上面幅1.2～2.4m，深さ0.4mを測る。

ＳＤ3335（PL.45-3）

第115次調査南区東側で検出した。前述した如く，途中ＳＤ3333と切り合うが，ＳＤ3334に

接続するとみられる。

ＳＤ3336

第115次調査北区の北西部に位置し，ＳＤ3340に切られ，ＳＢ3351を切っている。北東から南西に走る溝で，長さ15.4mを検出した。北端での上面幅2.0m，深さ1.1mを測る。

ＳＤ3337

第115次調査北区の中央部で検出した南北溝で，ＳＢ3351と重複する。北端はＳＤ3340に接続し，南はＳＤ3338と接続する。上面幅0.8～1.5m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3338（PL.45-2）

第115次調査北区の中央部で検出した溝で，北西－南東方向に走る。西側は調査区外に延びる。上面幅0.7～1.2mで，深さは10cmと浅い。

ＳＤ3339

ＳＤ3337の東側に位置する南北溝で，ＳＤ3338とは直交関係にある。検出長7.1mで，北端幅1.8m，深さ0.15mを測る。

ＳＤ3340（Fig.53，PL.45-1）

第115次調査北区の北側で検出した東西溝で，ＳＢ3351を切っている。西側は調査区外に延びるが，東側は第109次調査の東西溝ＳＤ3149に接続するものとみられる。東端部での上面幅2.6m，深さ1.1mで，断面形はＶ字形をなす。埋土は上層が黄灰色砂で，下層は黒灰色粘質土・灰色粘土であった。

ＳＤ3344

第115次調査南区の北東側に位置し，北東－南西方向に走る。検出長7.5m，幅2.6mで，深さは0.2mを測る。

ＳＤ3347（Fig.35）

区画施設　第111次調査区の西側で検出したＬ字形溝で，ＳＢ3230の区画施設と考えられる。ＳＫ3292・ＳＤ3289に切られるため遺存状況は悪い。溝の東西長5.9m，上面幅0.5mで，ＳＢ3230の東側柱列から３m東の箇所で南に折れる。建物の東側が空いているのは，こちらに通用口を設けた

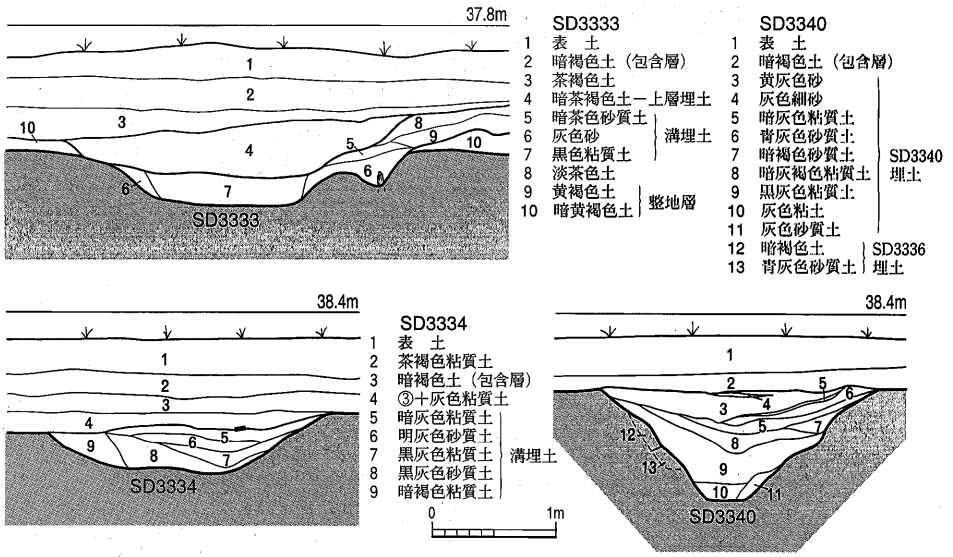


Fig.53　溝ＳＤ3333・3334・3340土層図（1/60）

ためとみられる。

ＳＤ3400Ａ・Ｂ（Fig.52，PL.48-1）

第117次調査区の中央部で検出した北東から南西に走る溝である。北側から流れる２本の溝が調査区の北部で合流する。溝埋土の堆積状況は西溝埋土に東溝埋土が乗っかることから西溝をＳＤ3400Ａとし，東溝をＳＤ3400Ｂとしたが，溝の時期差を示すものではなく，堆積の違いとして捉えられる。合流地点での幅4.4m，深さ1.3m，南端部での幅2.6m，深さ1.1mで，南側に向かって深くなる。溝の断面形状は逆台形を呈し，埋土は上層が青灰色粘土，下層が黄灰色砂であった。中・下層から多量の土器が出土している。ＳＤ3400ＢはＳＥ3380・3385・3390に切られる。

ＳＤ3430（PL.48-2）

ＳＤ3400の3.5m西側に位置し，ＳＥ3405に切られる。北東から南西に走る溝で，遺構検出段階ではＳＤ3440との切り合いは判然としなかったが，下層で二つの流れに分かれ，ＳＤ3440がこれを切っている。上面幅1.8m，深さ0.4mを測る。溝の断面形状はＵ字形を呈し，埋土は上層が黒色粘質土，下層が茶灰色粗砂である。

ＳＤ3432

第117次調査区の西側で検出した東西溝で，西端をＳＫ3437に切られ，東端はＳＤ3440に切られる。溝中央部での幅0.7mで，深さは５cmと浅い。

ＳＤ3435

第117次調査区の北東側で検出した東西溝で，ＳＢ3423・3424，ＳＥ3370に切られる。検出長6.2mで，東側は調査区外に延びる。上面幅0.75m，深さ0.3mを測る。

ＳＤ3440（PL.48-2）

第117次調査区の西側に位置し，北東から南西に流れる。ＳＥ3410に切られ，ＳＤ3430を切っている。上面幅1.9m，深さ1.1mを測り，埋土には灰色砂が堆積していた。

ＳＤ3663

第122次調査区の中央部で検出した南北溝で，ＳＢ3660掘方を切る。北側は北西方向に蛇行している。上面幅0.4～0.7m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3664

第122次調査区の南東部で検出した東西溝で，西端はＳＸ3682に切られる。検出長5.5m，上面幅0.4～0.6m，深さ0.3mを測る。

ＳＤ3666（PL.56-2）

第122次調査区の東端で検出した南北溝で，埋土上面には石列ＳＸ3662が構築されている。南北長18mで，東西溝ＳＤ3667と接続する。上面幅1.6m，深さ0.6mを測り，断面形はＵ字形を呈する。

ＳＤ3667

第122次調査区の東端で検出した東西溝で，ＳＤ3666と接続する。上面幅1.4m，深さ0.8mを測る。東側は調査区外に延びるため東西長2.8mを検出したに過ぎない。

ＳＤ3668

第122次調査区の北側で検出した東西溝で，ＳＢ3660を切る。東西長11.2m，幅1.2m，深さ

0.3mを測る。

ＳＤ3669

ＳＤ3668に並走する東西溝で，ＳＢ3660・3686を切る。東西長10.6m，幅0.4m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3671

第122次調査北拡張区で検出した東西溝で，上面幅0.9m，深さ0.2mを測る。削平が著しく，溝東端は消滅している。

ＳＤ3840（PL.60-2,64）

第130次調査区の西端で検出した下層の南北溝で，北端は調査区南端から12m付近で終焉する。上面幅8.5m，深さ0.7mを測る。溝の東肩には，護岸施設ＳＸ3845がある。溝の北端近くで「元亨三年」（1323）銘墨書木札を含む多量の漆器・木製品が出土した。第109・111次調査区で検出したＳＤ3200と対になり，中世観世音寺の参道側溝とみられる。

「元亨三年」銘木簡

護岸施設

ＳＸ3845（Fig.54，PL.63）

第130次調査区の南西で検出した。観世音寺参道の東側溝ＳＤ3840に伴う護岸施設である。溝の東肩部に設けられ，長さ5.4mを測る。比較的簡易な造りで，先ず30～50cm間隔で杭を打ち込み，次に横板を渡し，最後に掘方と板との隙間を掘削土で充填している。板材は長さ150cm，幅15cmのものであった。なお，板材の前面から完形の土師器坏が２点出土した。

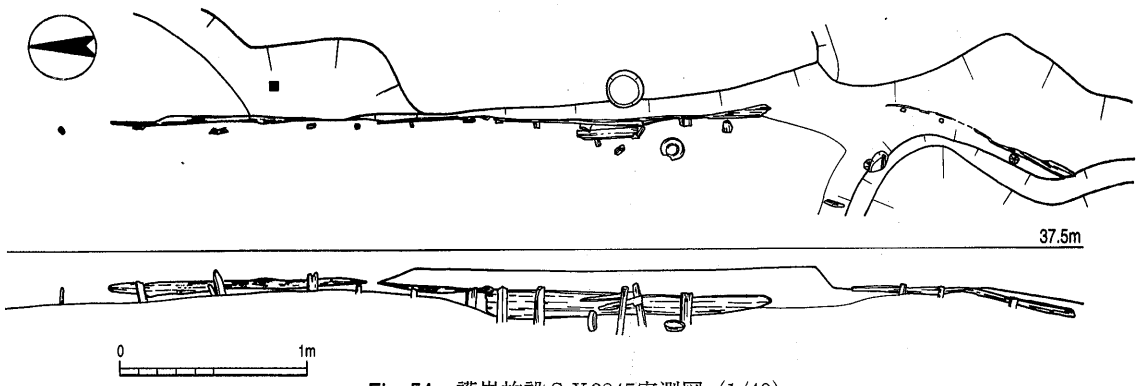


Fig.54　護岸施設ＳＸ3845実測図（1/40）

ＳＤ3842（PL.62-1）

第130次調査区の東側で検出した南北溝で，ＳＢ3862，ＳＫ3848・3849を切り，ＳＤ3843に切られる。南北長5.8mで，幅1.4m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ3843（Fig.55，PL.65-2）

第130次調査区の北東部で検出した石組溝で，長さ７mを検出した。上端幅0.4m，深さ0.2mで，20～40cm大の花崗岩を並べている。

ＳＤ3844（PL.62-1）

第130次調査区の南側で検出した溝で，ＳＤ3846と一連の遺構と考えられる。幅1.2m，深さ0.2mを測る。

ＳＤ3846（Fig.55，PL.62-1）

第130次調査区の南東側で検出した東西溝で，ＳＤ3847と一連のコ字形に巡る溝である。上

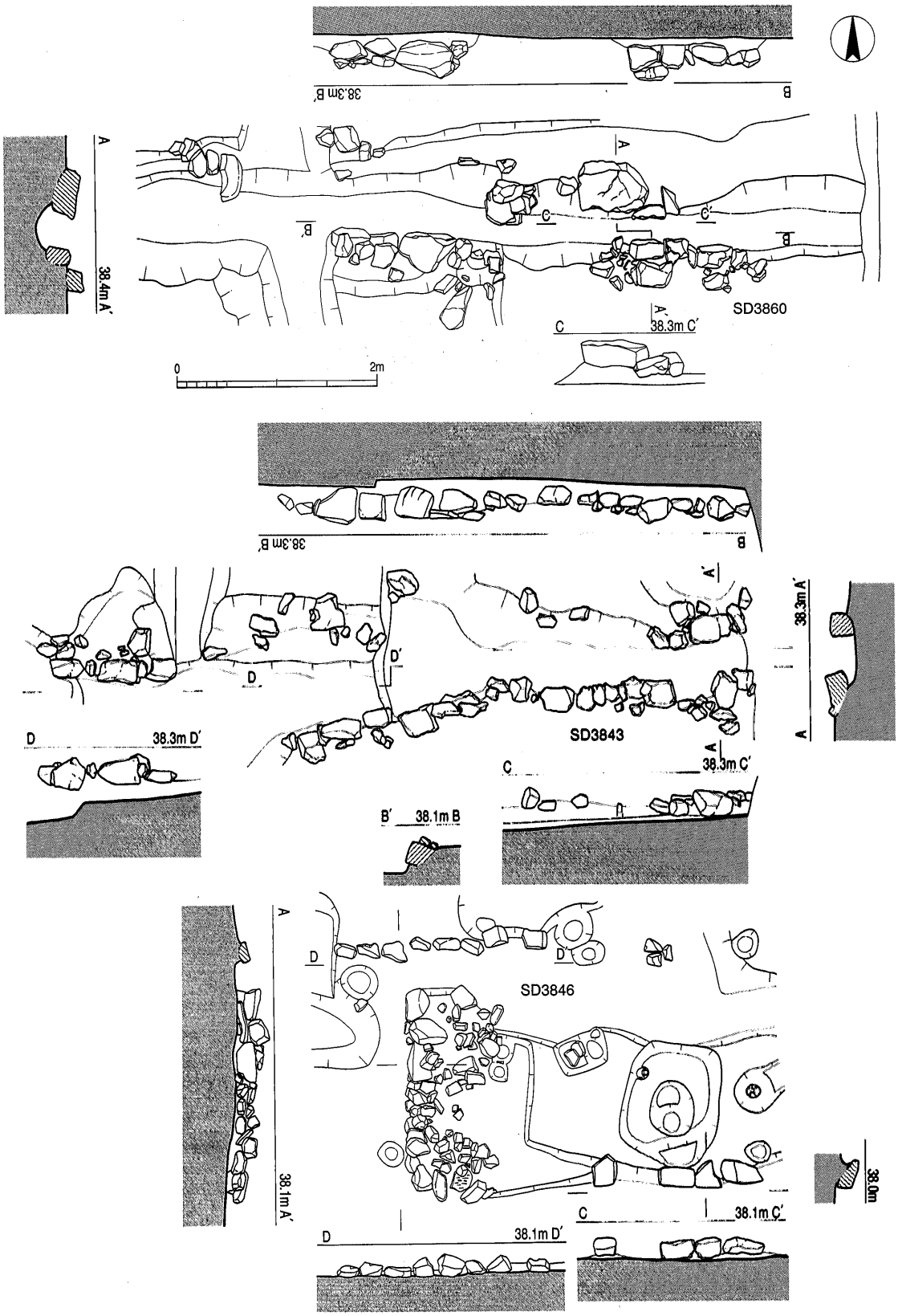


Fig. 55　石組溝ＳＤ3843・3846・3860実測図（1/60）

端幅0.8m，深さ0.2mを測る。北側の一部に石列が遺存している。

ＳＤ3847（PL.62-1）

ＳＤ3846の1.5m南側で検出した。同溝に関連するコ字形の溝である。上端幅0.5m，深さ0.3mを測る。北縁の一部とＳＤ3846との西縁に石列が遺存している。

ＳＤ3854（PL.66-2）

ＳＤ3840の北側で，ＳＫ3853の西縁を湾曲して流れる下層溝で，８m余り検出した。幅0.8m，深さ0.3を測る。

ＳＤ3855（PL.66-1）

第130次調査区の西側で検出した。調査区の東端部から西に向かって延び，調査区に沿って鍵形に南に折れる。上端幅0.5m，深さ0.4mを測る。

ＳＤ3860（Fig.55，PL.65-2，66-1）

第130次調査区の北端部に沿って西に流れ，南門跡地を避けるように南に屈曲し，さらに西方向に鍵形に折れる。上面幅0.3m，深さ0.3mを測る。溝の年代は近世に属し，ＳＤ3865に切られる。

ＳＤ3865（PL.65-2）

第130次調査区の北東側から9.5m程南に延び，そこから西へ屈曲し，さらに調査区の西壁際で南に折れる鍵形の溝である。幅1.0m，深さ0.5mを測る。溝の北方では石組による護岸が，東西方向では溝に沿って竹による護岸を施していた。ＳＤ3855・3860を切る。　（小田）

４）井　戸

井戸は第23次・39-1次・39-2次・109次・111次・115次・117次・122次調査で検出した。井戸の形態分類については，横田賢道（賢次郎）の分類に従った[1]。

ＳＥ480（Fig.56，PL.9-2･3）

第23次調査区の上層遺構面の北西で検出した桶側構造の井戸で，掘方の西側は調査区外に延びる。井戸枠は裾開きとなる桶側最下段の下半部のみ確認した。桶側の下端径0.68m。桶側は幅10cm程の板材18枚からなる。Ⅳ類。井戸埋土中からは多くの箸が出土した。

多量の箸が出土

ＳＥ867（Fig.56，PL.13-1･2）

第39-1次調査区の西端で検出した方形縦板枠と曲物を組み合わせる構造の井戸である。縦板枠は一部が残存しているのみであるが，一辺0.7m程であることが知れる。曲物は径53cm，高さ29cmを測る。Ⅱ-Ｂ-ｂ類。

ＳＥ868（Fig.56，PL.13-3，14-1）

ＳＥ867の南側で検出した方形縦板枠の下部に曲物を据える構造の井戸である。井戸枠は一辺0.7m，高さ0.5mで，四隅に角柱を立て，縦板を上下２段の横桟で止めている。縦板は８～20cm，厚さ３cm程の板材を一辺に５枚使用する。曲物は径63cm，高さ43cmを測る。底面には丸瓦・平瓦が敷き詰められている。Ⅱ-Ｂ-ｂ類。　（吉村）

ＳＥ869

ＳＥ867の２m東側に位置し，北半部は調査区外に延びる。掘方は径1.3mの円形を呈し，中には井戸枠の残骸と思われる板材が残っていた。　（小田）

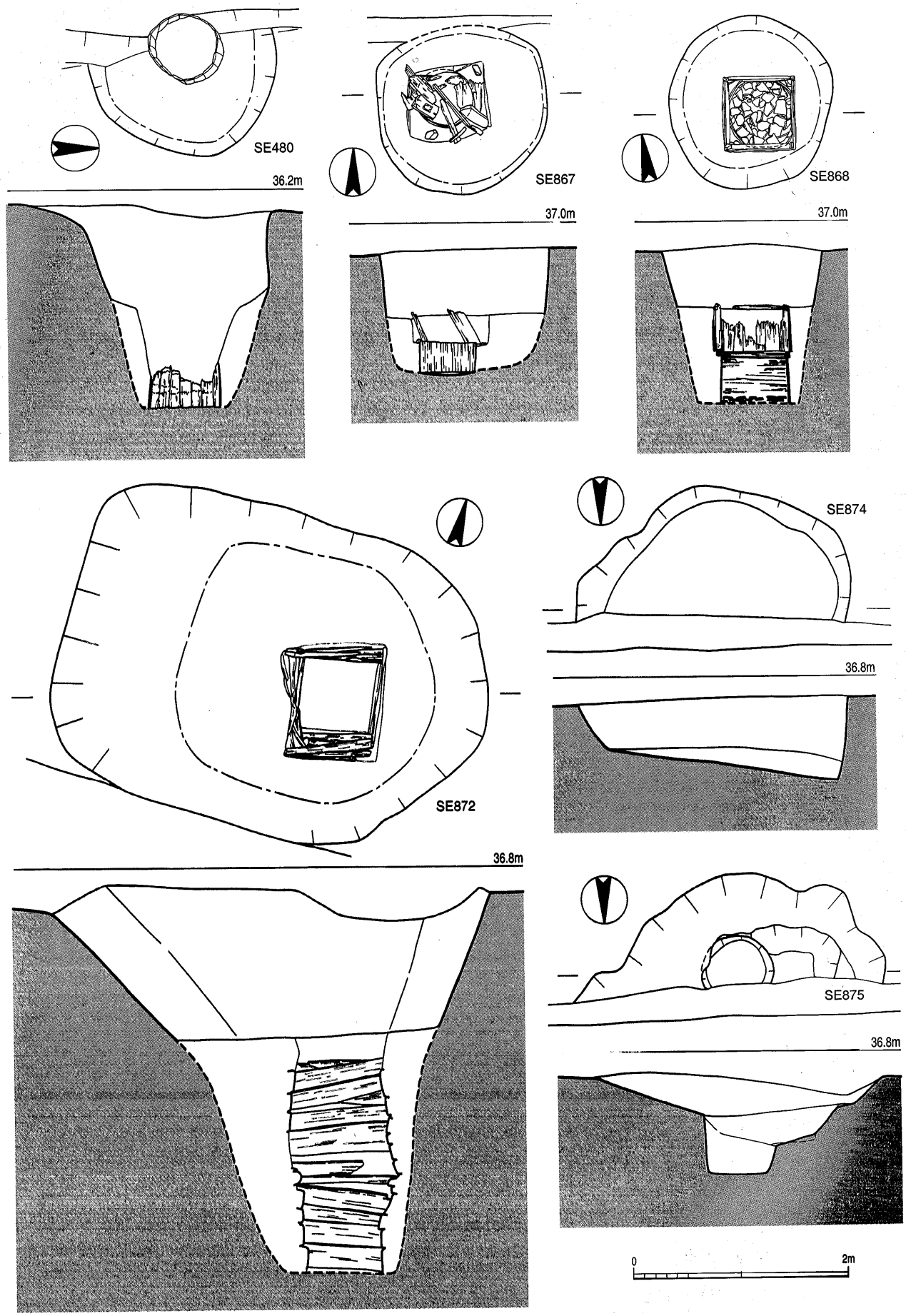


Fig. 56 南辺域井戸実測図① (1/50)

ＳＥ870（Fig.57，PL.12-2）

第39-1次調査区の西側で検出した。井戸枠が内側に倒壊し，原状を留めていなかったが，方形縦板構造の井戸と考えられる。ＳＥ871を切る。Ⅱ-Ａ類か。曲物の底と考えられる円形の板材や下駄が出土した。

下駄の出土

ＳＥ871（Fig.57）

第39-1次調査区の西側で検出し，井戸枠部分は調査区外の北側となる。ＳＥ870に切られる。

ＳＥ872（Fig.56，PL.14-2･3）

第39-1次調査区の東側で検出した。方形横板構造の井戸である。井戸枠は掘方の東側に寄って作られている。枠全体が土圧によって変形しているが，一辺0.75m程を測る。板材は幅15～25cm，厚さは10cmと分厚い。11段からなっていたようである。板材の端部に凹凸の枘を設け，上段と下段の枘の出入りが互い違いになるように組み上げている。また，枠の板材が二重になっており，外側の板材は内側の板材の空隙を埋めるように配されていた。Ⅰ-Ｂ類。　（吉村）

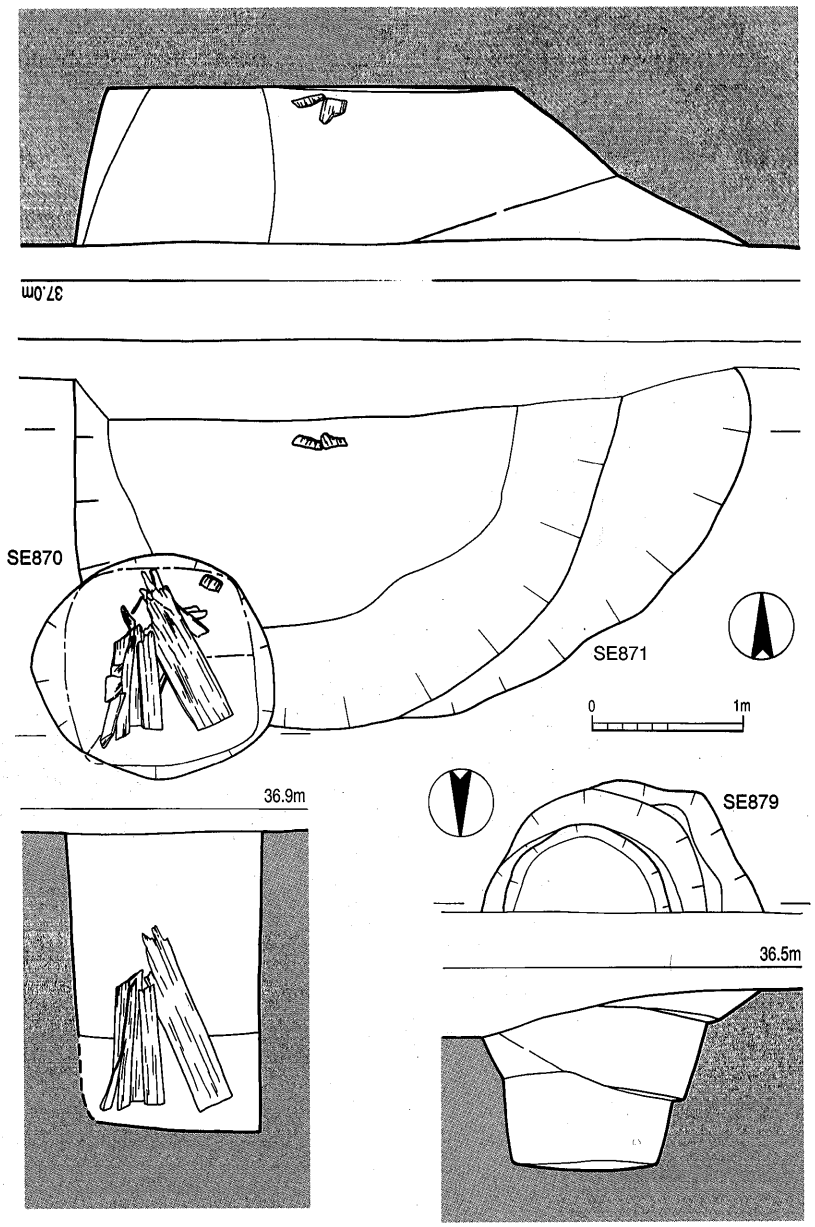


Fig.57　南辺域井戸実測図②（1/50）

ＳＥ874（Fig.56）

ＳＥ872のすぐ北側で検出した。北半部は調査区外に延びるが，隅丸方形を呈するものと思われる。短軸2.25m，深さ0.6mを測る。一応，井戸としたが，土坑の可能性が高い。

ＳＥ875（Fig.56）

ＳＥ875の東隣に位置し，北半部は調査区外にある。掘方は不整形を呈し，中央がすり鉢状に窪む。素掘りの井戸か，若しくは曲物が抜き取られたⅢ類井戸になるか。中央の径0.64m，深さ0.52mを測る。

ＳＥ879（Fig.57）

ＳＥ872の西隣で検出した。トレンチ的に一部を掘り下げて検出したため北半は未掘となった。掘方は円形を呈し，東西長1.9m，深さ1.15mを測る。井戸枠は遺存しておらず，素掘りの井戸と思われる。（小田）

ＳＥ895（Fig.58，PL.16-2･3）

第39-2次調査４Tr東端で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える構造である。井戸枠は一辺0.8m，深さ1.6mで，三段の横桟で縦板を固定している。板材は幅20cm，厚さ１cmで，縦板は一辺に５枚使用する。曲物は径40cm，高さ22cm。Ⅱ-Ｂ-ｂ類。

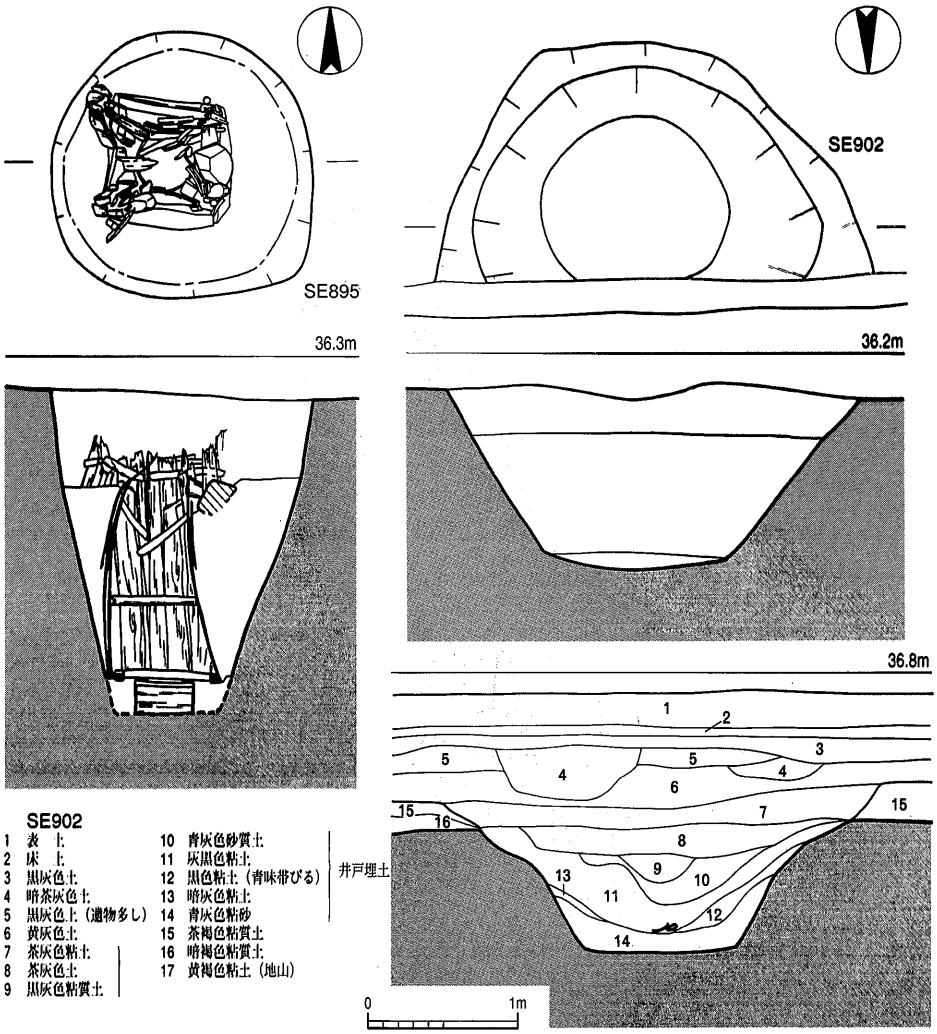


Fig.58　南辺域井戸実測図③（1/50）

ＳＥ902（Fig.58，PL.17-1）

ＳＥ892の西側に位置する。井戸枠は抜き取られ，構造は判らない。深さ1.2mを測る。

ＳＥ3145（Fig.59，PL.31-1）

第109次調査区の東側で検出した。井戸枠の残存状況は悪いが，上部が石組，下部が方形縦板構造のものと思われる。板材は抜き取られていたが，平瓦を枠の補修材として使用していた。Ⅱ-Ｂ-ａ類。

瓦を補修材として使用

ＳＥ3150（Fig.59，PL.31-2）

ＳＥ3145の西隣で検出した。方形縦板構造の井戸である。枠は一辺0.8mで，高さ0.5mが残存している。板材の幅は８～12cmで，一辺に８枚使用する。井戸枠は隅柱となる角材を打ち込んで支柱とし，枘を設けて横桟を架している。なお，横桟には自然木を使用する。Ⅱ-Ａ類。

ＳＥ3155（Fig.59，PL.31-3）

第109次調査区の北東側で検出した。花崗岩の自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径0.8m，底部では0.6mを測る。石組は５段が残存する。Ⅴ類。（吉村）

ＳＥ3157（Fig.59）

第109次調査区の北東側に位置する。平面形は円形を呈し，径1.32m，深さ0.92mを測る。井戸枠はみられず，素掘りの井戸になろう。（小田）

ＳＥ3160（Fig.59，PL.32-1）

ＳＥ3157の南西側で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西に片寄って置かれている。三段が残存するが，最上段の桶側は腐朽が著しい。中段の桶側は上端径63cm，下端径68cm，高さ75cm以上。下段の桶側は上端径63cmで，下部は腐朽している。板材は中段のもので，幅7.5cm，厚さ３cmを測る。Ⅳ-Ａ-ａ類。

ＳＥ3165（Fig.59，PL.32-2）

第109次調査区の中央部に位置し，ＳＫ3183を切っている。人頭大の花崗岩自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径0.5m，底部では0.4mを測る。石組は６～９段が残存する。Ⅴ類。

ＳＥ3170（Fig.60，PL.32-3）

第109次調査区の北端で検出した。桶側構造の井戸であるが，掘方が狭く，また，桶側が裾広がりにならないなど，通常の例と違って溜枡的な用途であったと考えられる。井戸枠は径0.43～0.5mを測る。７～９cm幅の板材を15枚使用している。

溜枡的用途

ＳＥ3175（Fig.60，PL.33-1）

第109次調査区の南西側に位置し，ＳＢ3205と重複する。曲物を２段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物の外側には，６枚の縦板を立てて補強材とする。曲物の径は37cm，高さ27cmを測る。Ⅲ類。（吉村）

ＳＥ3176（Fig.60）

第109次調査区の南西隅に位置し，ＳＤ3290に切られる。埋土上層の杭列はＳＤ3290の護岸として打ち込んだものである。北壁側には別遺構と切り合うためテラスを有する。長軸1.65m，深さ0.6mを測る。井戸枠がみられないので，素掘りの井戸になろう。（小田）

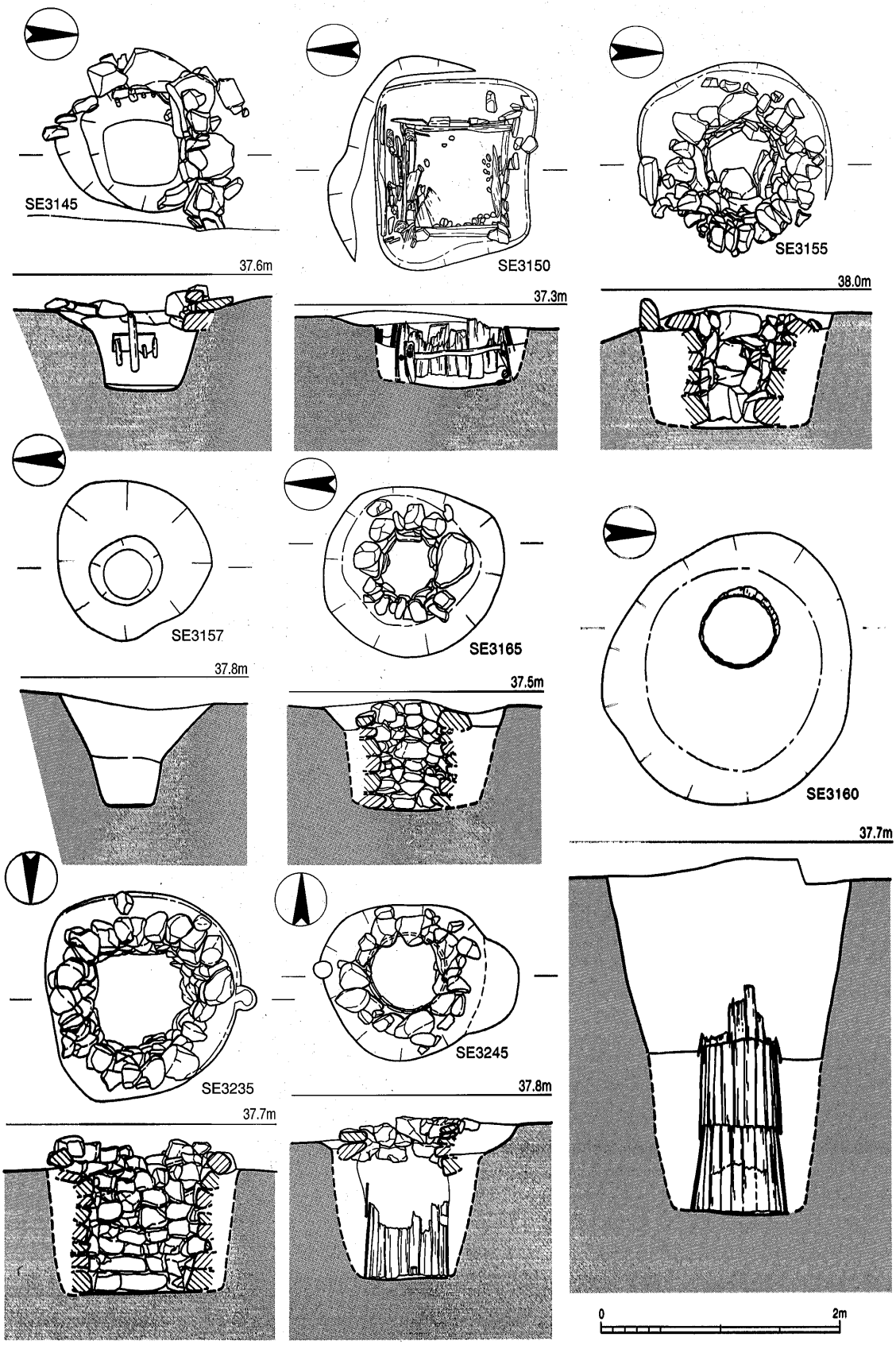


Fig. 59 南辺域井戸実測図④ (1/50)

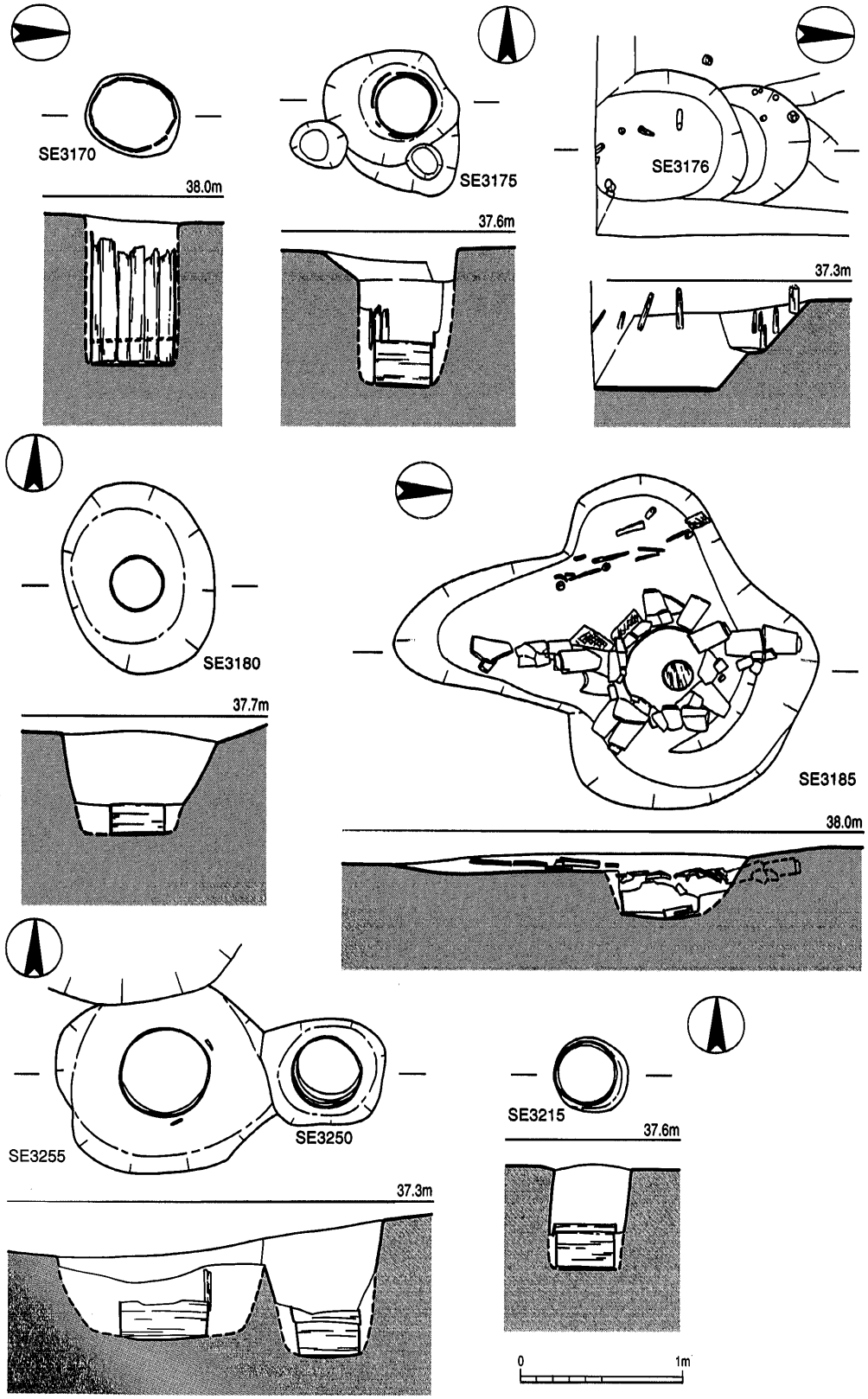


Fig. 60　南辺域井戸実測図⑤（1/40）

ＳＥ3180（Fig. 60, PL. 33-2）

第109次調査区の西端で検出した。円形の掘方下部に曲物を据える構造の井戸である。曲物の径は34cm，高さ21cmを測る。Ⅲ類。

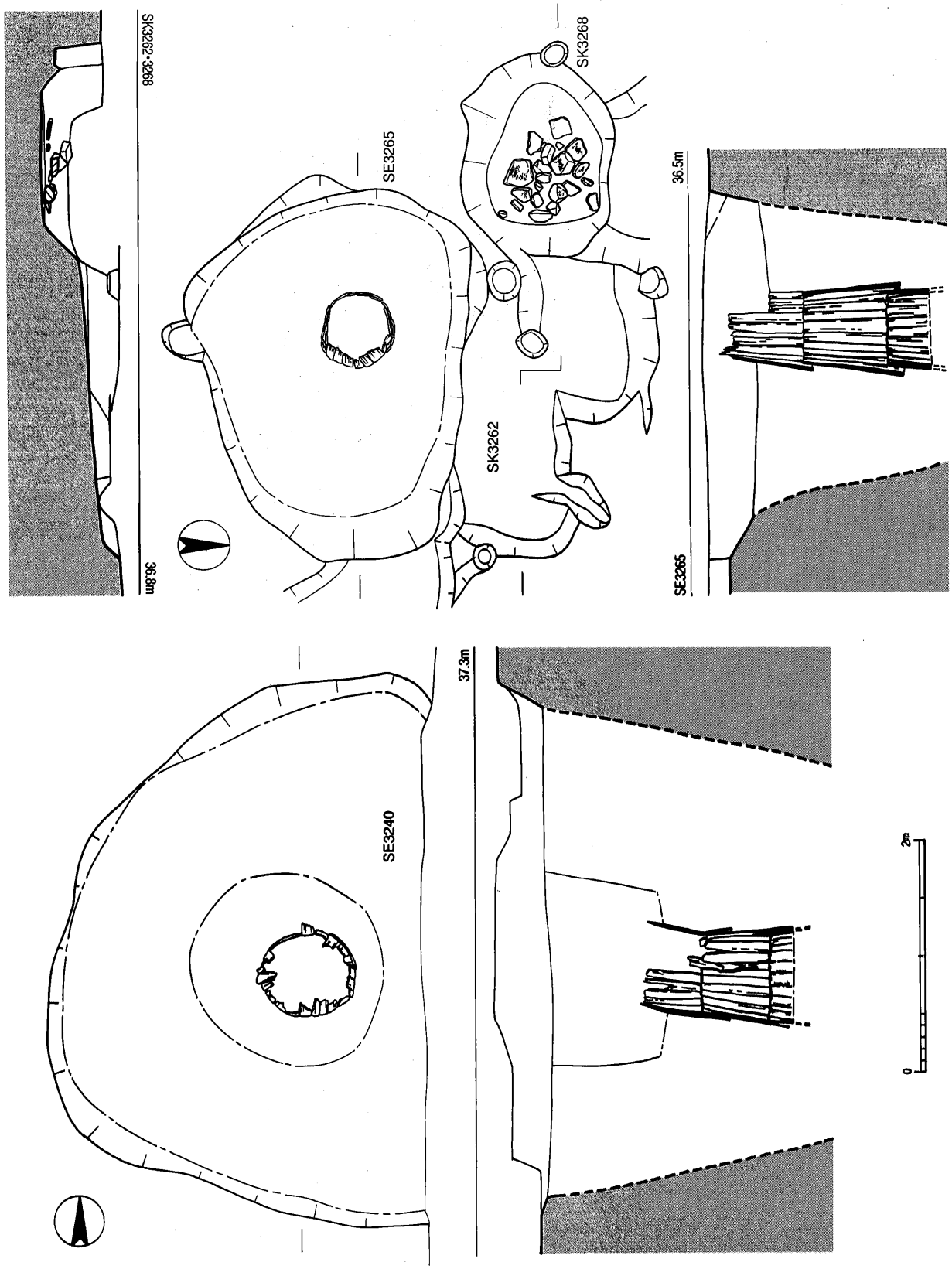


Fig. 61 南辺域井戸実測図⑥ (1/50)

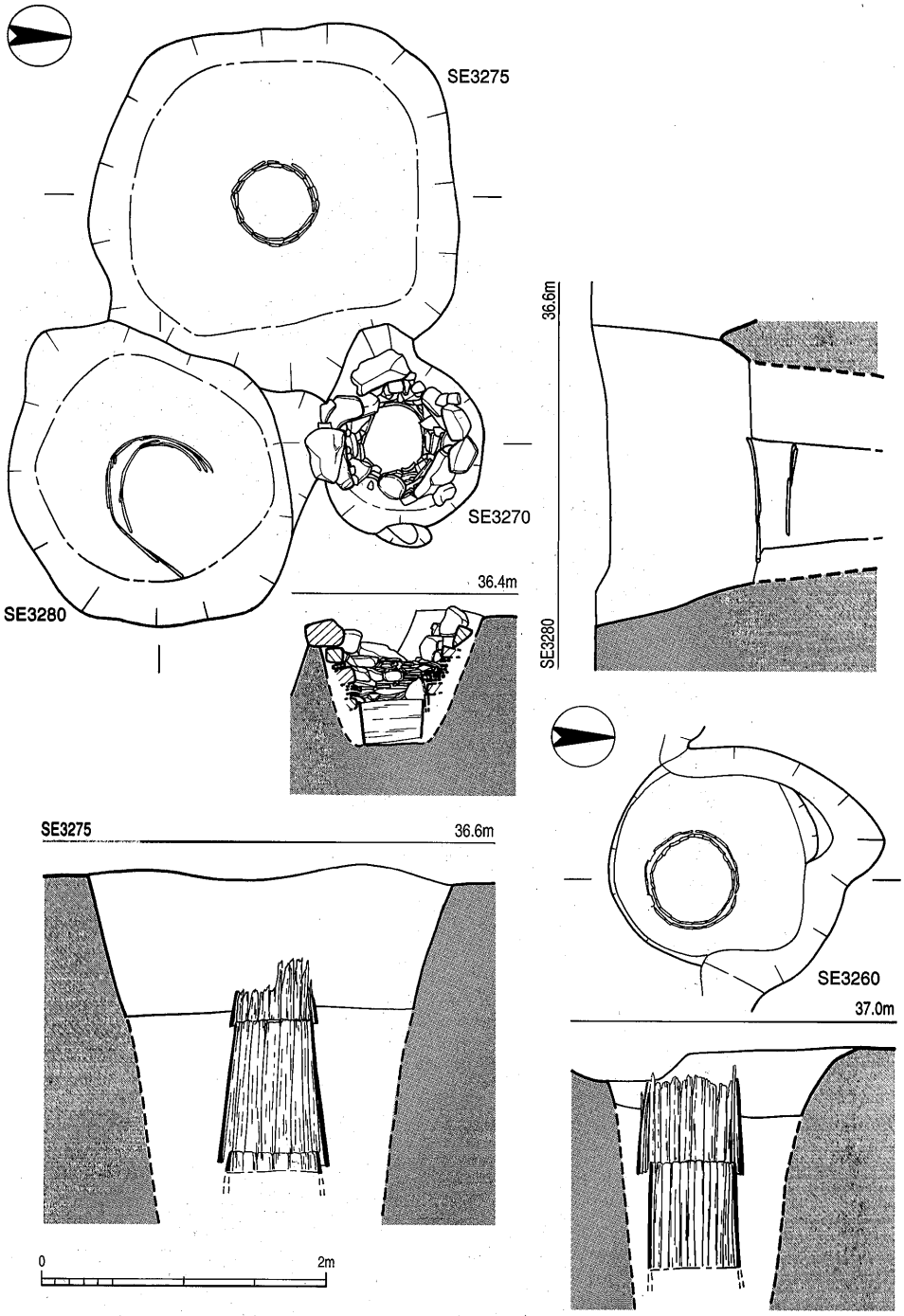


Fig. 62　南辺域井戸実測図⑦（1/50）

ＳＥ3185（Fig. 60，PL. 33-3）

溜枡状の施設

第109次調査区の北東隅で検出した。浅い掘方に曲物を据える溜枡状の施設である。曲物は径45cm，高さ18cmを測る。曲物の縁には完形の丸瓦を放射状に置き，隙間に平瓦を配する。南北に延びる瓦列部分が暗渠になる可能性も考えられたが，下部は溝状を呈していない。埋土からは，ここで使用したとも考えられる小形の曲物（径18cm，高さ６cm以上）が出土した。Ⅲ類。

ＳＥ3215（Fig. 60，PL. 34-1）

第109次調査区の南側に位置し，ＳＢ3307と重複する。曲物を２段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物は腐朽が著しいが，下部の曲物は径37cm，高さ23cmを測る。Ⅲ類。

ＳＥ3235（Fig.59，PL.34-2）

第111次調査区の東側で検出した。人頭大の花崗岩自然石を用いた石組構造の井戸である。上面での内径1.05m，底部では0.75mを測る。石組は９段が残存する。Ｖ類。

ＳＥ3240（Fig.61，PL.34-3）

第111次調査区の中央やや南側に位置し，ＳＢ3366と重複する。桶側構造の井戸である。３段が残存するが，最上段の桶側は腐朽が著しい。中段の桶側は上端径68cm，下端径87cm，高さ82cm。下段の桶側は上端径77cmを測る。板材は中段のもので，幅７～９cmのものを25枚使用している。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3245（Fig.59，PL.35-1）

第111次調査区の北部で検出した。上部が石組，下部に桶側を配する構造の井戸である。上部の石組は花崗岩の自然石を使用し，５段が残存する。下部の桶側は腐植が進んでいるが，下端径は70cmを測る。井戸枠の一枚には枘穴が穿たれていた。Ⅳ-Ｂ-ａ類。

ＳＥ3250（Fig.60，PL.35-2）

第111次調査区の中央やや西側に位置し，ＳＢ3306と重複する。曲物を２段に重ねる構造の井戸である。上部の曲物は腐朽が著しいが，径42cm，下部の曲物は径37cm，高さ21cmを測る。Ⅲ類。

ＳＥ3255（Fig.60，PL.35-3）

ＳＥ3250の西隣に位置するが，前後関係は不詳。桶側の下部に曲物を配する構造の井戸である。桶側は遺存状況が悪く，２枚が残るのみである。曲物は径52cm，高さ22cmを測る。Ⅳ-Ｂ-ｂ類。

ＳＥ3260（Fig.62，PL.36-1･2）

第111次調査区の南西側に位置し，ＳＸ3305と重複する。桶側構造の井戸である。２段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが下端径74cmを測る。下段の桶側は上端径52cm，高さ75cm以上を測る。板材は幅４～７cmのものを使用している。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3265（Fig.61，PL.36-3，37-1）

第111次調査区の南西側で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西側に片寄って配され，枠は３段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが下端径68cmを測る。中・下段の桶側は上端径62cm，中段の桶側の高さ78cm以上を測る。板材は幅５～10cmのものを使用し，中段が21枚，下段が22枚からなる。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3270（Fig.62，PL.37-2･3）

第111次調査区の南西隅に位置し，ＳＥ3275を切っている。上部に石と瓦を積み，下部に曲物を据える構造の井戸である。上部の石組は４段が残存する。下部の曲物は径45cm，高さ30cmを測る。Ⅳ-Ｂ-ａ類。

ＳＥ3275（Fig.62，PL.37-2，38-1･2）

ＳＥ3270の西隣に位置し，これに切られる。桶側構造の井戸である。井戸枠は３段が残存する。上段の桶側は腐朽が進んでいるが，下端径62cmを測る。中段は上端径54cm，下端径69cm，高さ109cmを測る。下段の桶側は上端径62cmで，板材は幅８～10cmのものを使用する。Ⅳ-Ａ類。

（吉村）

ＳＥ3280（Fig.62，PL.37-2，38-3）

ＳＥ3270のすぐ南に位置し，ＳＥ3275とは切合い関係を有するが，前後関係は判然としない。掘方は長軸2.44m，短軸2.02mの偏円形を呈し，深さは２mまでしか確認していない。井戸枠はすでに抜き取られ，掘方上面から1.2mと1.4m掘り下げた部位で竹のタガを検出したのみであるが，上面径0.75mを測ることから桶側構造の井戸と考えられる。（小田）

ＳＥ3345（Fig.63，PL.46-1）

第115次調査南区の北側で検出した。床面より僅かに浮いた状態で竹タガが遺存していた。桶側構造か。ＳＤ3334に切られる。

ＳＥ3350（Fig.63，PL.46-2･3）

第115次調査北区の南端で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の北側に片寄って配される。上部の枠は抜き取られ，最下段の桶側のみ残存する。桶は上端径60cm，下端径70cm，高さ82cmを測る。板材は幅８～14cmである。井戸枠の一枚には枘穴が穿たれていた。なお，

井戸祭祀

先端部を尖らせ，節を抜いた竹が突き立てられており，廃棄に伴って井戸祭祀を行っている。竹の下端は底面から30cm程浮いた状態であった。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3370（Fig.64，PL.49-1）

第117次調査区の北東隅で検出した。ＳＤ3435・ＳＫ3379に切られ，ＳＢ3424と重複する。掘方の中央で井戸枠が抜かれた痕跡を確認したが，構造については明らかではない。深さ1.8

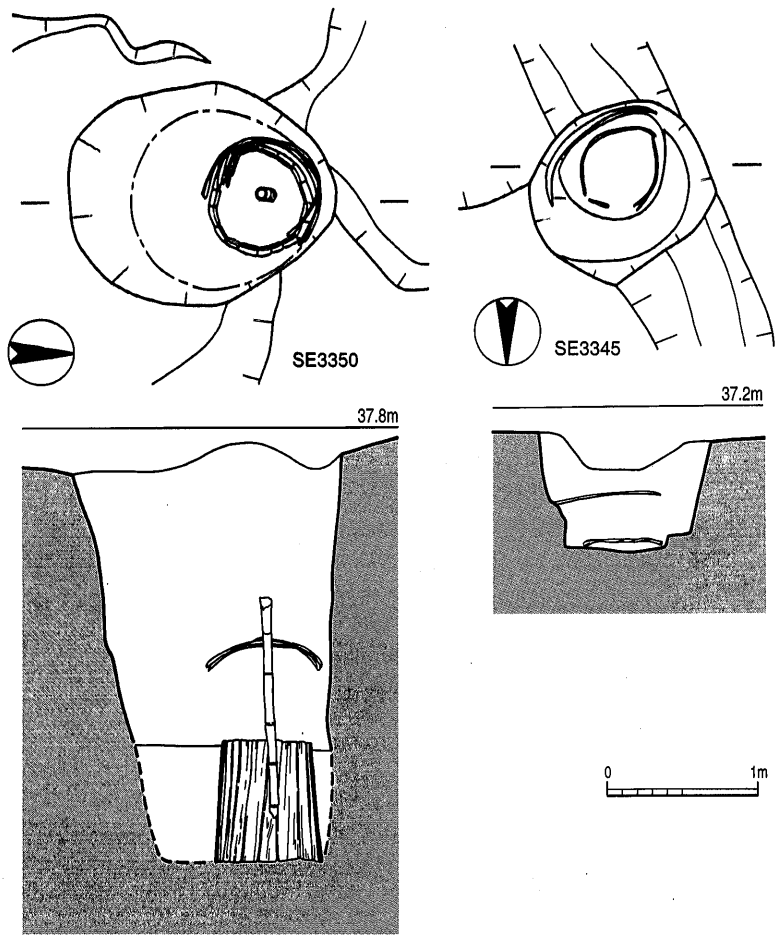


Fig.63　南辺域井戸実測図⑧（1/50）

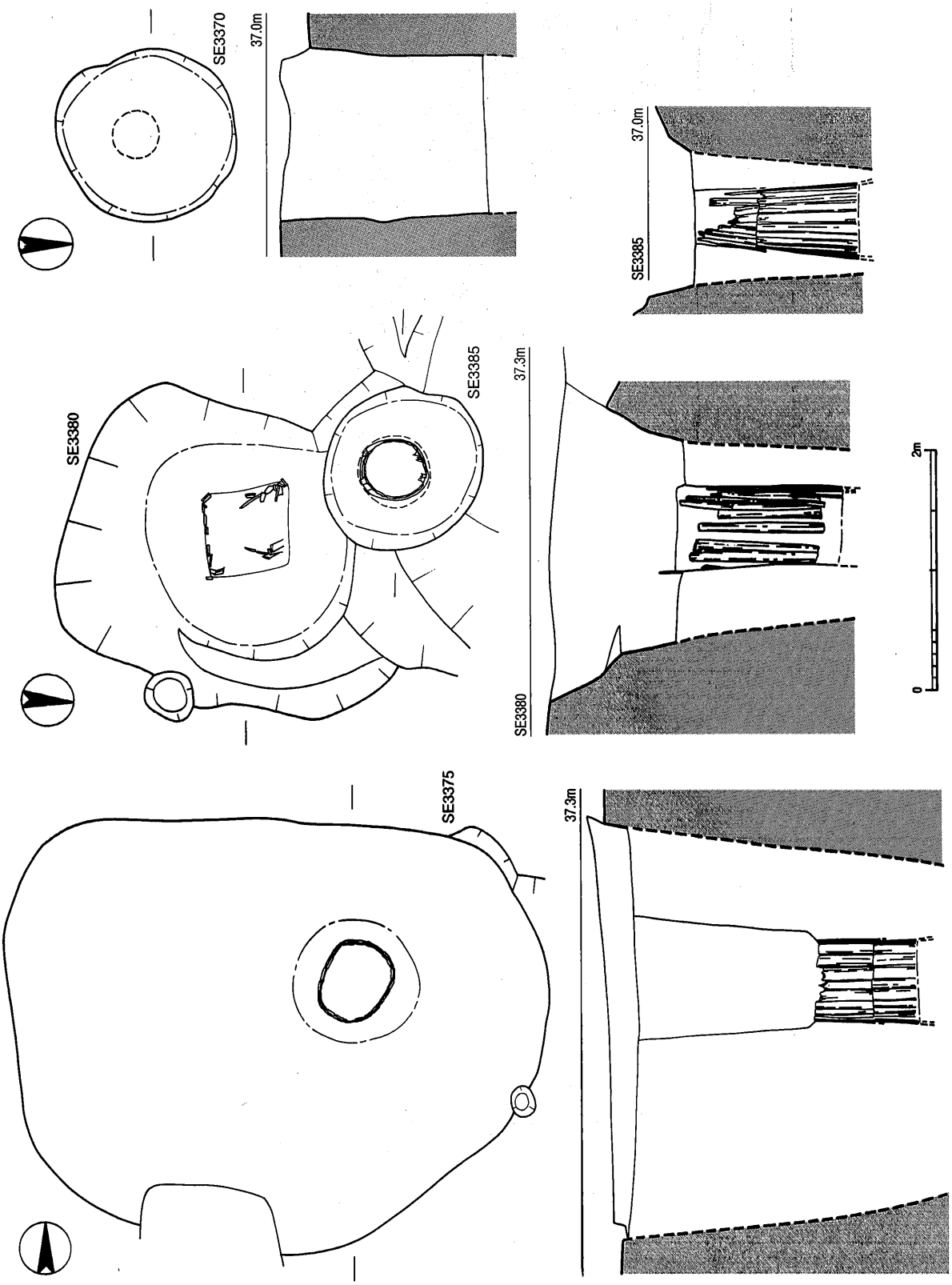


Fig. 64 南辺域井戸実測図⑨ (1/50)

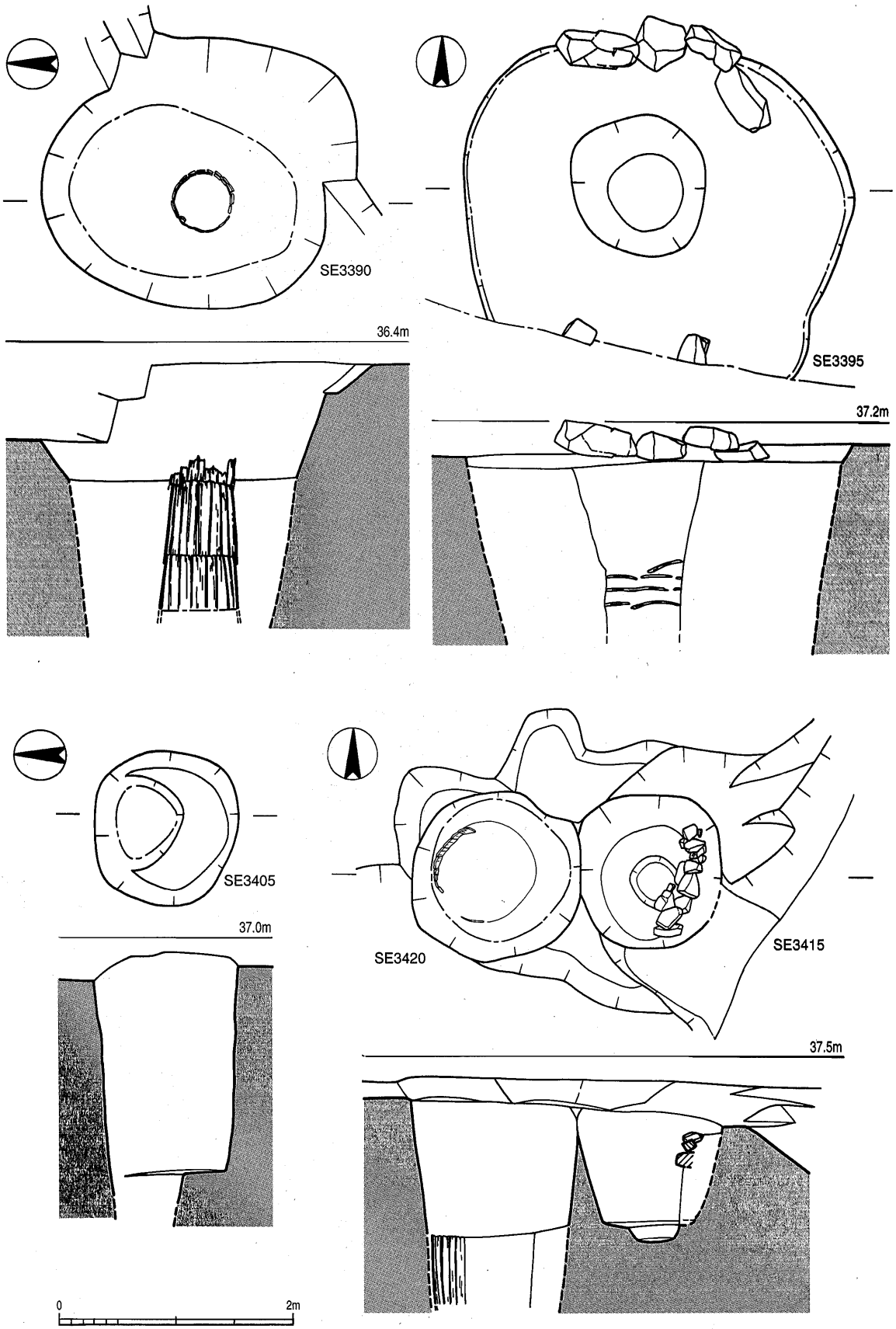


Fig. 65　南辺域井戸実測図⑩（1/50）

m程掘り下げたが，底面にまでは達していない。

ＳＥ3375（Fig.64，PL.49-2･3）

第117次調査区の東側で検出した。ＳＫ3411に切られ，ＳＢ3422・ＳＫ3412を切る。桶側構造の井戸で，井戸枠は掘方の東側に片寄って置かれている。崩壊の危険があったため，桶側を２段分確認するに留めた。上・下段とも桶側の上端径67cmを測り，幅７～10cmの板材を21枚使用している。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3380（Fig.64，PL.50-1･2）

ＳＥ3375のすぐ北側で検出した。方形縦板構造の井戸である。枠は一部しか残存していないが，一辺0.7m程で，深さ1.35mまで掘り下げた。板材は幅７～10cmで，８枚が遺存しており，一辺に10枚使用していたものと考えられる。Ⅱ類。ＳＥ3385に切られている。

ＳＥ3385（Fig.64，PL.50-1）

ＳＥ3380のすぐ北側に位置し，同井戸とＳＤ3400Ｂを切っている。桶側構造の井戸である。上段の桶側は腐朽が著しい。下段の桶側は上端径47cm，高さ85cm以上を測り，幅９cm程の板材を19枚使用している。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3390（Fig.65，PL.50-3）

ＳＥ3385の西側に位置し，ＳＤ3400Ｂを切っている。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の南側にやや片寄って配されている。桶側は三段確認したが，最上段は腐植が著しい。中段の桶側は上端径46cm，下端径64cm，高さ78cm，板材は幅８～10cm，厚さ１～２cmを測る。下段の桶側の上端径は56cmで，板材は幅８～14cmと中段のそれよりも厚めになっている。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3395（Fig.65，PL.51-1･2）

第117次調査区の南端中央に位置し，ＳＫ3413を切っている。桶側構造と考えられる井戸である。井戸枠は抜き取られているが，竹タガが残っていた。ＳＫ3413と切り合う箇所には50～70cm大の花崗岩割石４個があり，壁面の補強として置いたものと考えられる。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3405（Fig.65，PL.51-3）

第117次調査区の南西側に位置し，ＳＤ3430を切っている。井戸枠は抜き取られて残存していない。深さ２m程の部分が三日月形のテラスになっている。埋土は黒灰色粘質土である。

ＳＥ3410（Fig.66，PL.52-1）

ＳＥ3405の0.5m南西に位置し，ＳＤ3430を切る。石組構造の井戸であるが最下段の石積みが残存するのみである。その下部に曲物を据えるものであろうか。北壁際には廃棄時の井戸祭祀に関わると考えられる長さ44cm以上の竹が残っていた。　井戸祭祀

ＳＥ3415（Fig.65，PL.52-2）

第117次調査区の北西部で検出した。井戸枠は遺存していないが，底部に曲物を据えた可能性がある。上層においてみられた自然石の集積は，井戸廃棄後の沈下を防ぐための所業か。

ＳＥ3420（Fig.65，PL.52-2）

ＳＥ3415の西隣で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方の西側に片寄って配されている。幅10cm，厚さ１cm程の板材が８枚遺存していた。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3425（Fig.66，PL.52-3）

第117次調査区の西端に位置し，ＳＫ3438・3439・3442を切っている。方形縦板と曲物を組

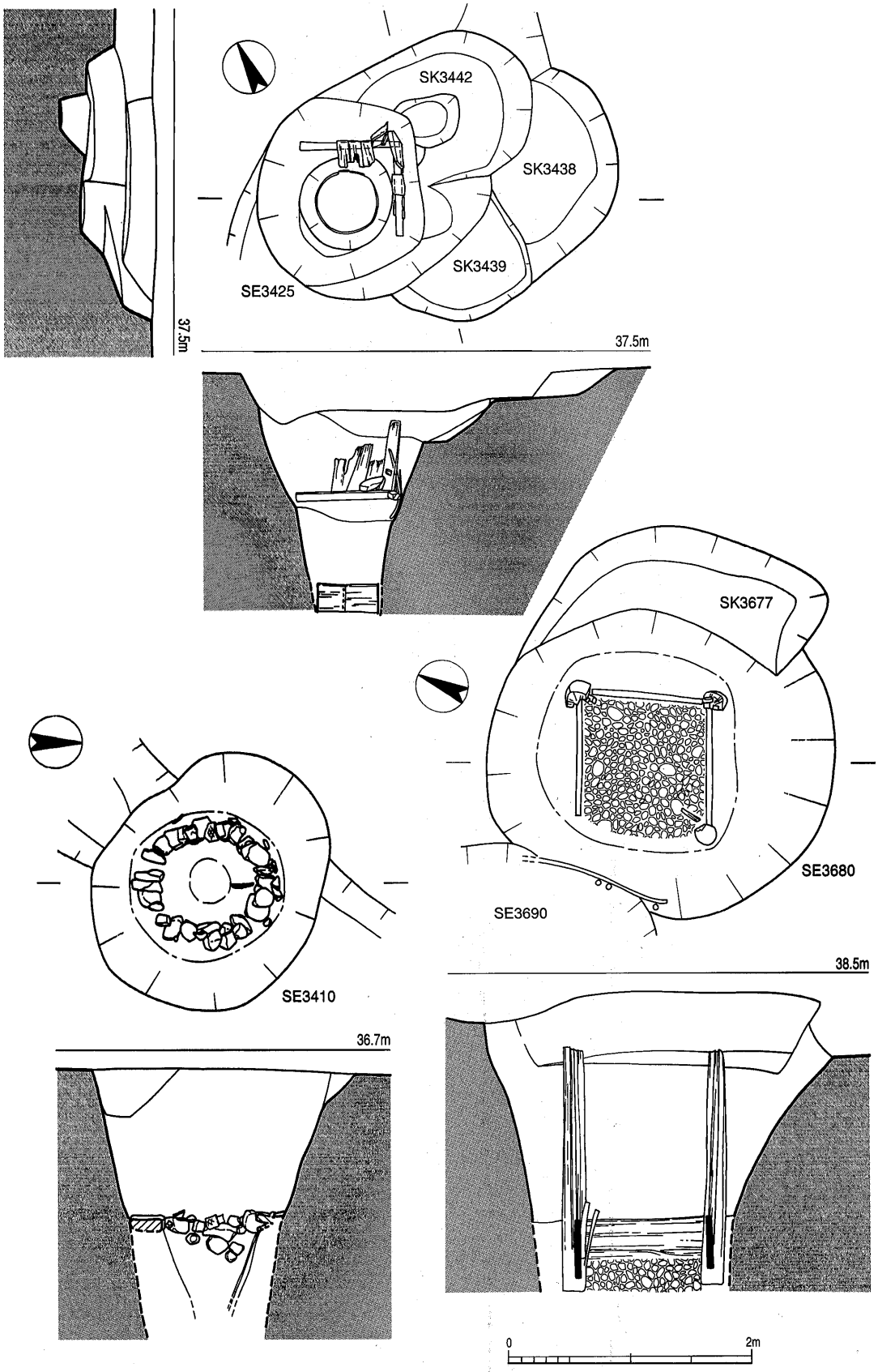


Fig. 66　南辺域井戸実測図⑪（1/50）

み合わせる構造の井戸である。上部の方形縦板枠は一辺0.8mを測る。底面に組んだ横木と隅木・横桟で縦板を留める。支柱には横桟を通すための枘孔が穿たれている。下部の曲物は径51cm，高さ23cmを測る。Ⅱ-B-b類に類似するが，上部井戸枠と下部曲物との約50cm間には枠がなく，地山壁面を枠として利用する特異な構造である。（吉村）

地山面を枠として利用

SE3680（Fig.66，PL.57，58-1）

第122次調査区の西側に位置し，SE3690・SB3670に切られ，埋土上層にはSK3677が存在する。掘方は円形を呈し，長径2.86m，底部までの深さ2.35mを測る。掘方東側の段落ちはSK3677の名残である。井戸枠は方形横板構造のもので，支柱3本と最下部の横板3枚を留める程度であった。支柱は長さ2mを測り，2面をL字形に面取し，横板を落とし込む溝を設けている。残存する板の幅が46cmなので横板は4段に復原できる。井戸底には15cmの厚さで小礫を敷き詰めているが，水を濾過するためと考えられる。井戸の埋土中からは観世音寺創建伽藍に使用したとみられる老司Ⅰ式軒丸・軒平瓦が出土しており，作業事務所的性格のSB3660に付

SB3660に付随する

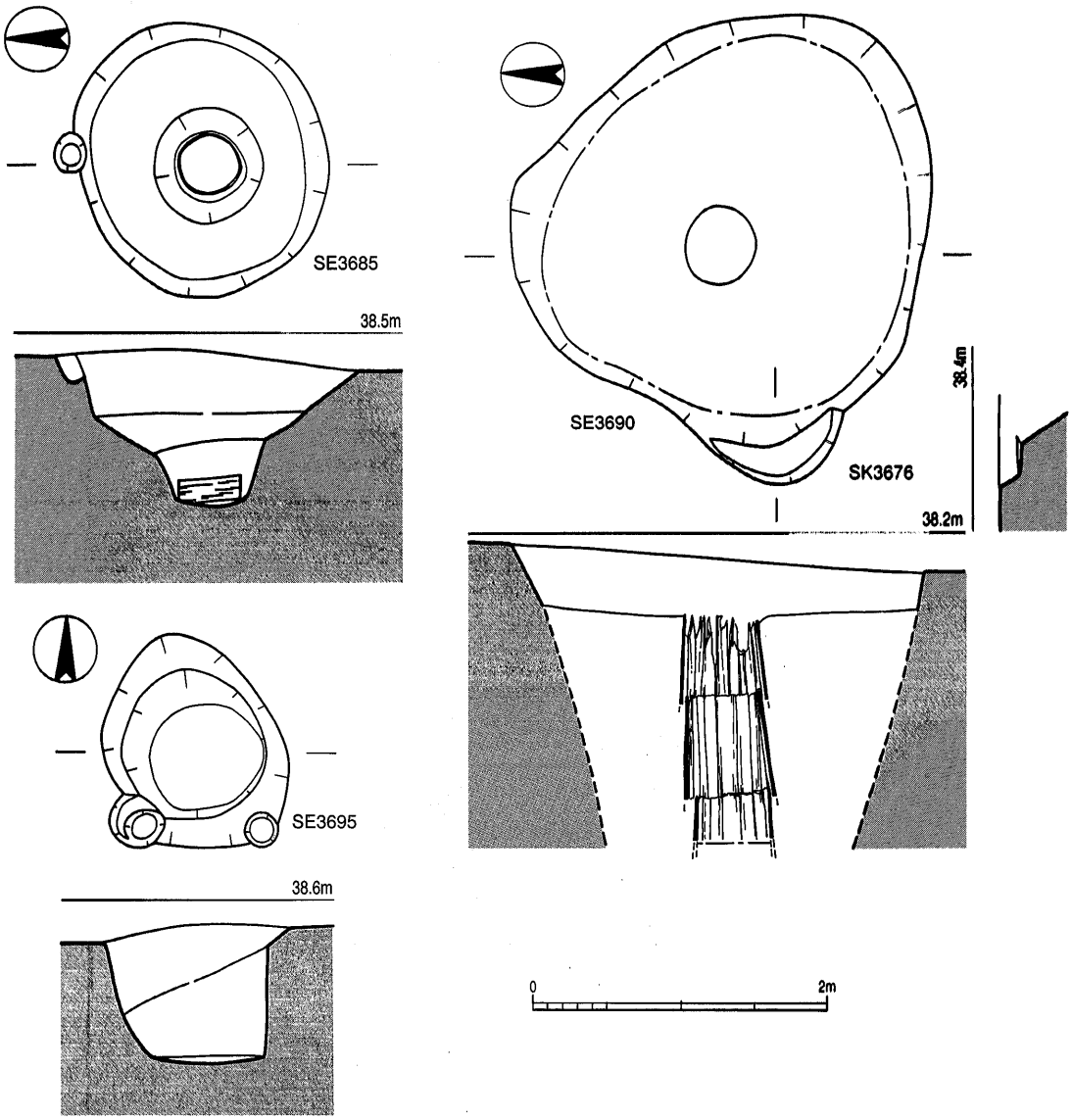


Fig.67　南辺域井戸実測図⑫（1/50）

随するものである。土器・瓦類の他に白木椀・槌・藤蔓の縄などの木製品等も出土している。

（小田）

ＳＥ3685（Fig.67，PL.59-1）

第122次調査区の中央部で検出した。底部に曲物を据えるものである。曲物は径42cm，高さ16cm以上で，上部は欠失している。Ⅲ類と考えられる。ＳＢ3660Ａ・Ｂの柱掘方を切る。

ＳＥ3690（Fig.67，PL.58-2･3）

第122次調査区の西側に位置し，ＳＥ3680・ＳＫ3676を切り，ＳＢ3670と重複する。桶側構造の井戸である。桶側は三段確認したが，最上段は腐植が著しい。中段の桶側は上端径52cm，高さ70cm以上で，幅７～13cmの板材を18枚使用する。下段の桶側上端径は50cmで，幅８～12cmの板材15枚からなる。上段の板材の枚数は22枚。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3695（Fig.67，PL.59-2）

ＳＥ3690の北側に位置し，ＳＢ3670に切られる。長軸1.4m，深さ0.9mを測る。井戸枠は検出されていないが，掘方の形状や埋土からみて井戸と考えられる。（吉村）

5）土　坑

ＳＫ365（Fig.68，PL.6-3）

第16次調査区の東端に位置し，南半部は調査区外に延びる。平面形は円形を呈し，径1.25m，深さ0.2mを測る。埋土中には角礫が詰まっていた。

ＳＫ521（Fig.68，PL.11-1）

第28次調査区南側で検出した。石積土坑で，南半は調査区外に延びる。一辺２m，深さ0.5mの方形土坑の四周に10～40cm大の角礫を積み上げたものであるが，石積みはかなり粗い。底面が粘質土であることからＳＸ525に関連する水溜桝と考えられる。

水溜桝

ＳＫ524

第28次調査区東半部で検出した下層遺構で，ＳＤ522のすぐ北側に位置する。長さ1.8m，幅0.52mを測る長円形の土坑で，土坑内には角礫が投棄されていた。

ＳＫ873（Fig.69）

第39-2次調査３Trの北東隅に位置し，ＳＫ876と重複する。東半部が調査区外に延びるため詳細は不明。検出長2.1mで，深さは10cmと浅い。底面は平坦面をなす。

ＳＫ876（Fig.69）

ＳＫ873の西隣に位置するが，北半部が調査区外にあるため詳細は不明。東西長4.66m，検出幅1.2mで，深さが10cmと浅いことから段落ち的なものになるか。底面はフラットであるが，西側に緩傾斜している。

ＳＫ877（Fig.70）

第39-1次調査区の西側で検出した。隅丸長方形を呈する小土坑で，長軸1.13m，短軸0.53mで，深さは10cmと浅い。

ＳＫ878（Fig.70）

第39-1次調査区の東側に位置し，ＳＤ880・ＳＥ872を切っている。隅丸長方形を呈する土坑で，長軸2.1m，短軸1.25mで，深さは0.3mを測る。底面は平坦をなす。

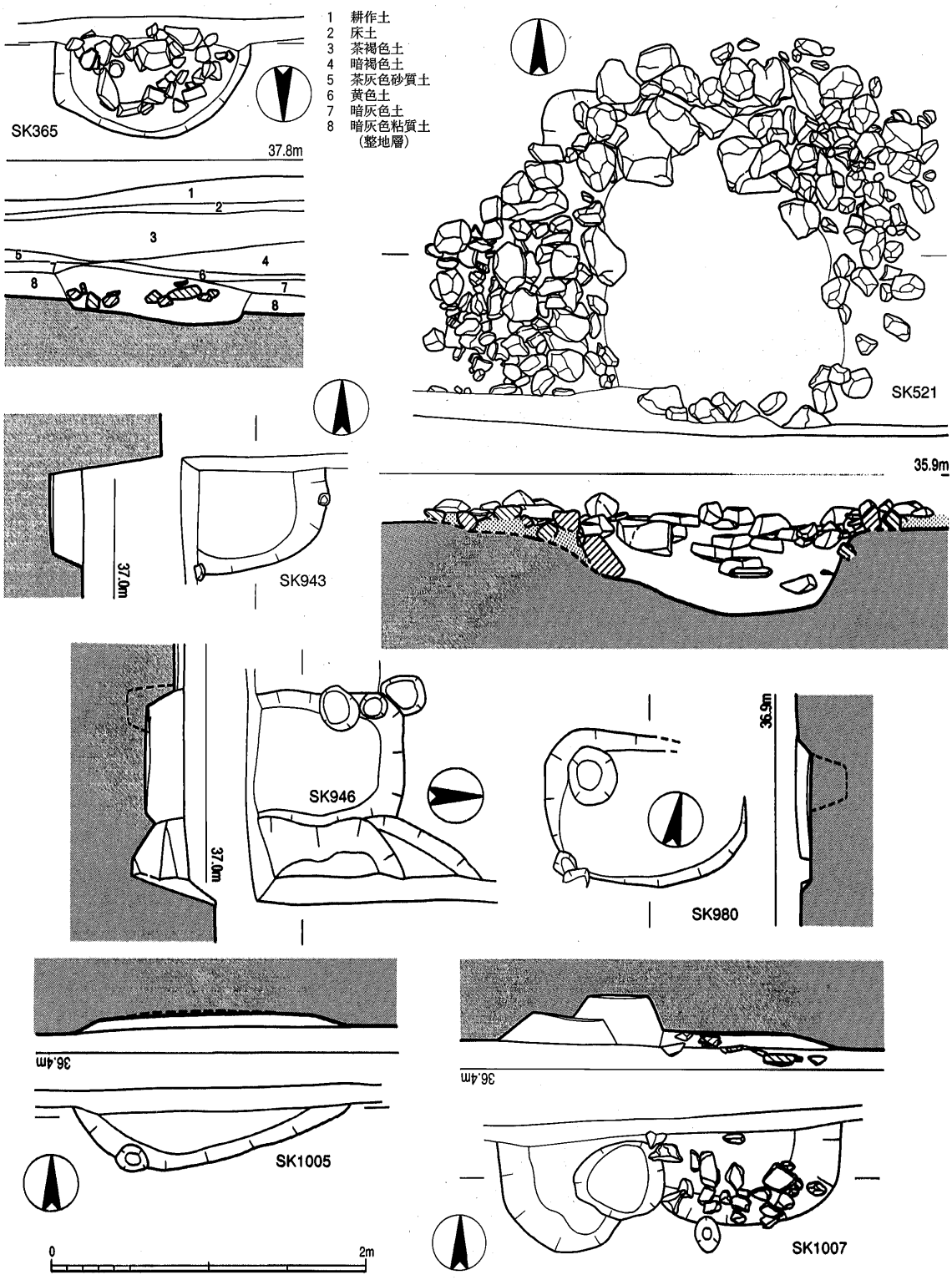


Fig. 68 南辺域土坑実測図① (1/40)

S K885

第39-2次調査 3 Tr 北側で検出した。大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.2m。

S K886 (Fig. 70)

S K885のすぐ南側で検出した。不整形を呈し，小土坑二つが繋がった形態をなす。長軸1.6

m，短軸0.87m，深さ0.2～0.3mを測る。

ＳＫ887（Fig.70）

ＳＫ886の4.5m南西に位置し，掘立柱建物ＳＢ883・889に切られる。平面形は倒卵形を呈し，長軸1.68m，短軸1.22m，深さ0.2mの大きさ。底面は平坦をなす。

ＳＫ891（Fig.70）

第39-2次調査3Tr南西隅に位置し，ＳＢ889と重複する。西壁の大半が調査区外にあるため詳細は不明であるが，平面形は方形を呈するか。南北長1.38m，深さ0.25mで，底面は平坦面をなしている。

ＳＫ897（Fig.70）

第39-2次調査4Trの北東部に位置し，ＳＫ898を切っている。北壁は調査区以外にあるが，円形を呈しよう。東西幅1.2m，深さ0.55mで，埋土下位には泥炭層が堆積していた。

ＳＫ898

ＳＫ897のすぐ南西側で，同土坑に切られて位置する。北半部は調査区外に延びるが，円形を呈しよう。検出幅1.46m，深さは10cmと浅い。

ＳＫ907（Fig.70）

第39-2次調査4Tr中央で検出した土坑で，ＳＢ906・ＳＸ903に切られる。隅丸方形を呈し，長軸1.65m，短軸1.42m，深さ0.22mを測る。底面は平坦である。

ＳＫ910（Fig.69）

ＳＫ907のすぐ西側で検出した土坑で，ＳＫ911・912と連なっている。南半部は調査区外に延びる。検出幅1.48m，深さ0.3mを測る。

ＳＫ911（Fig.69）

ＳＫ910・912との中間に位置する。楕円形を呈し，長軸2.1m，短軸1.4m，深さ0.35mを測る。底面は平坦面をなす。埋土上位には長さ90cmの焼土塊があり，フイゴ羽口が出土しているものの，当土坑とは直接関係はない。

焼土・鞴羽口の出土

ＳＫ912（Fig.69，PL.18-1）

ＳＫ911の北隣で検出した。平面形は楕円形を呈し，長軸1.83m，短軸0.9m，深さ0.35mを測る。底面は平坦面をなす。

ＳＫ913（Fig.69，PL.17-2）

ＳＫ912のすぐ北側に位置する。北壁は調査区外にあるが，平面形は隅丸長方形を呈しよう。検出長1.94m，幅2.15m，深さ0.42mを測る。埋土は上層が黒灰色土，下層は黒灰色粘質土と腐植土の互層となっている。南西隅には灰層が認められた。

ＳＫ919（Fig.69）

第39-2次調査4Trの西側で検出した下層の土坑で，ＳＫ920に切られ，ＳＤ929と重複する。平面形は偏円形を呈し，径2.38m，深さ0.3mを測る。底面は中央がやや窪んでいる。

ＳＫ920（Fig.69）

ＳＫ919の南側で，同土坑を切って位置する。円形を呈するようであるが，大半が調査区外にあるため詳細は不明。

ＳＫ926（Fig. 69）

第39-2次調査４Trの西側に位置し，ＳＤ939と重複する。東西幅1.75m，深さ0.6mを測る。南半部が調査区外にあるため詳細は不明。青磁碗・土師器坏などが出土している。

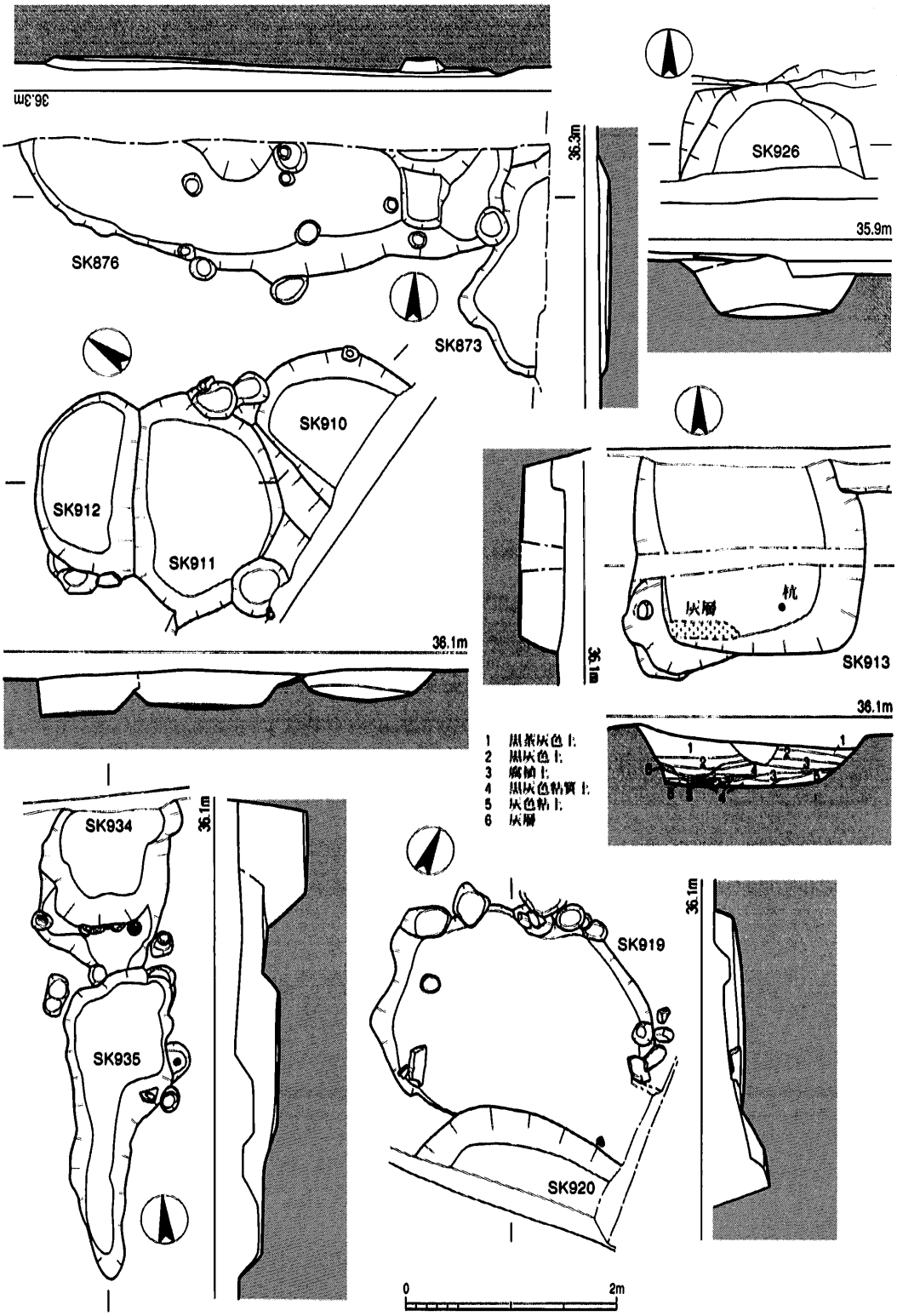


Fig. 69　南辺域土坑実測図②（1/60）

ＳＫ927（Fig.71，PL.17-3）

ＳＫ919の1.6m北西に位置する下層土坑で，ＳＫ928を切っている。平面形は不整円形を呈し，東西長2.5m，深さ0.52mを測る。土坑中央に８×13cmの角柱を立てているが，何を意図するのか不明。埋土には灰層が厚く堆積していた。

灰層の堆積

ＳＫ928（Fig.71）

ＳＫ927に北東壁を切られて位置する。南北長1.06mの隅丸方形を呈し，深さは0.28mの遺存状況であった。底面は平坦をなす。

ＳＫ934（Fig.69）

ＳＫ927の0.5m西側で検出した下層遺構。土坑の南壁はＳＫ935に切られている。北壁は調査区外にあるが，平面形は楕円形を呈しよう。検出長1.5m，幅1.2m，深さ0.64mを測る。白磁碗が出土した。

ＳＫ935（Fig.69）

ＳＫ934の南に位置し，同土坑を切っている。また，東西溝ＳＤ929・939と切合い関係にあるが，前後関係はつかめていない。南北に長い溝状を呈する土坑で，長軸2.95m，短軸1.03m，深さ0.4mを測る。底面は北側に緩く下がっている。

ＳＫ943（Fig.68）

第39-3次調査１Trの北西隅で検出したが，北壁を確認した程度で詳細は不明。深さは0.2mを測る。

ＳＫ945（Fig.71）

第39-3次調査２Trの東端で検出したが，大半が調査区外に延びる。南北長2.4m，深さ0.3mを測り，底面はフラットである。

ＳＫ946（Fig.68）

第39-3次調査２Trの北東隅で検出したが，北壁を確認した程度で詳細は不明。東壁は別土坑と重複する。長方形を呈し，北壁長0.8m，深さは0.25mを測る。

ＳＫ952（Fig.71）

ＳＫ945の2.1m西側に位置する溝状の土坑で，ＳＤ947・948に切られる。検出長3.5m，上面幅0.96m，深さ0.2mを測る。底面はフラットである。埋土中には炉壁と考えられる焼土片と炭化物が含まれていた。

炉壁片の出土

ＳＫ954（Fig.71）

ＳＫ952のすぐ西側に位置し，ＳＫ958を切り，ＳＫ956と重複する。東側がやや長い偏円形を呈し，長軸1.6m，短軸1.2m，深さ0.4mを測る。底面は平坦であった。

ＳＫ955（Fig.71）

ＳＫ952の１m南側に位置し，ＳＫ956と重複する。大半が調査区外に延びるため詳細は不明。検出長2.2mで，深さは0.4mを測る。

ＳＫ956（Fig.71）

ＳＫ954・955に挟まれる形で位置し，ＳＫ958を切っている。不整形を呈し，東西長3.1m，深さ0.6mを測る。埋土は暗灰色土で，炭化物が含まれていた。

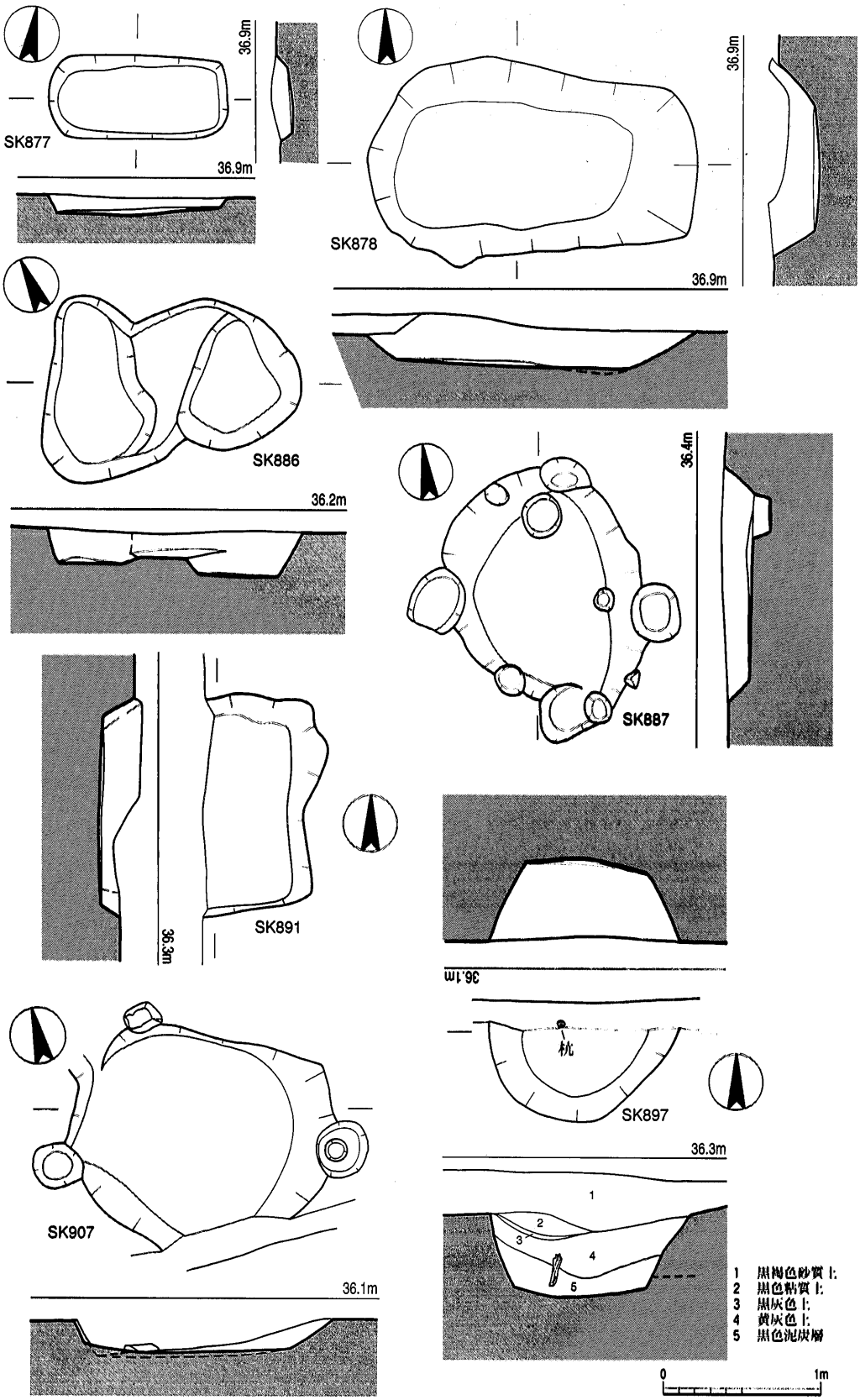


Fig. 70 南辺域土坑実測図③ (1/40)

S K 957 (Fig. 71)

S K954のすぐ北側に位置する。不整形を呈する土坑で，長軸2. 38m，短軸1. 76m，深さ0. 26

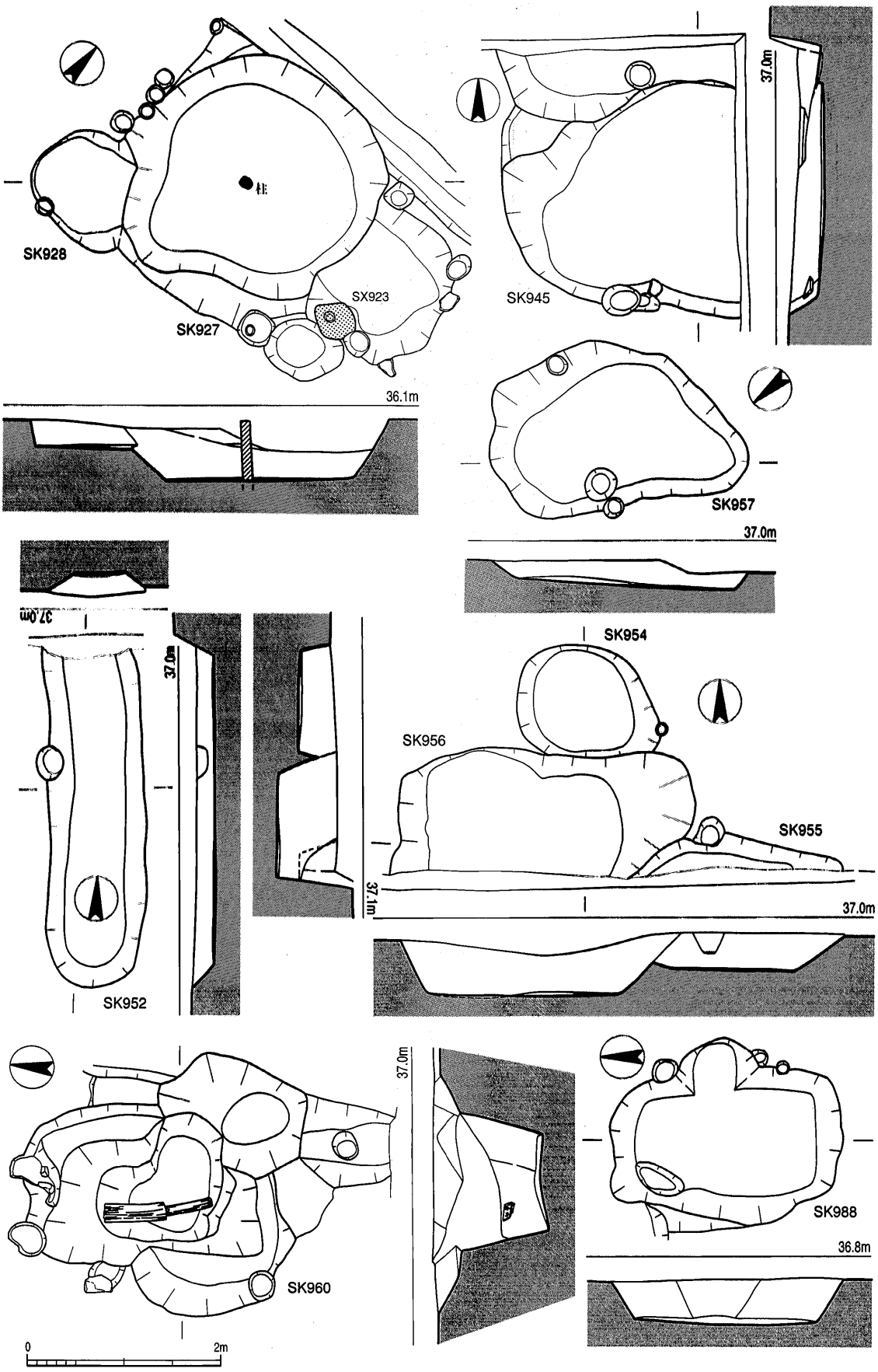


Fig. 71　南辺域土坑実測図④（1/60）

mを測る。底面は南側にやや下がっている。

SK958

SK954・956・957に切られるため規模等詳細。壁高は0.2mを測る。底面は平坦をなす。

SK960 (Fig.71)

SK957の3.5m西側に位置し，SB950を切っている。上面は土坑が切り合った不整形を呈し，中央部は長軸1.6m，短軸1.3m，深さ1.1mの方形土坑となる。埋土中から長さ65cmの板材が出土したが，板材の長さと穴の大きさからすると井戸にはなりえない。

SK963 (Fig.72)

SK963～984は第39-3次調査2Trの中央部で検出した土坑群で，大小の楕円形土坑が切り合っている。SK963はSK966に切られるが，楕円形を呈し，残存長1.94m，短軸1.02mで，壁高は0.13mと著しい削平を受ける。埋土中には礫が多く含まれていた。

SK964 (Fig.72)

SK963のすぐ南側に位置し，SK967を切っている。平面形は楕円形を呈し，長軸1.92m，短軸1.4m，深さ0.12mを測る。底面は平坦をなす。

SK965 (Fig.72)

土坑群の北端に位置し，SK966を切る。北半部は調査区外にある。円形を呈し，検出長2.4m，深さ0.3mを測る。土坑の中央には角礫が集積されていた。 角礫の集積

SK966 (Fig.72)

SK965に北東壁を切られて位置し，SK963・967を切っている。平面形は長円形を呈し，長軸2.15m，短軸1.64m，深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

SK967 (Fig.72)

SK966に北壁を，SK964に東壁を，SK970に南壁を切られるため南北長は1.8mの残存状況である。東西幅は2.04mで，深さは0.2mを測る。

SK968 (Fig.72)

SK966のすぐ西隣に位置する。北壁はSK971に切られ，南壁はSK974と重複する。楕円形を呈し，残存長1.8m，東西幅1.33m，深さ0.24mを測る。

SK970 (Fig.72)

SK967の南壁を切って位置するが，南半は調査区外にあるため詳細は不明。東西幅1.56m，深さ0.24mを測る。

SK971 (Fig.72)

土坑群の北端に位置し，SK968・972を切る。北半部は調査区外にある。円形を呈し，検出長1.5m，深さ0.4mを測る。

SK972 (Fig.72)

SK968のすぐ西隣に位置する。北壁はSK971に切られ，南壁はSK973に切られる。東西長0.95mの小土坑で，深さは0.3mであった。

SK973 (Fig.72)

SK968のすぐ西隣に位置し，SK972・974・978を切っている。平面形は楕円形を呈し，長軸3.02m，短軸2.26m，深さ0.55mを測る。土坑群にあっては比較的大きな土坑である。底面

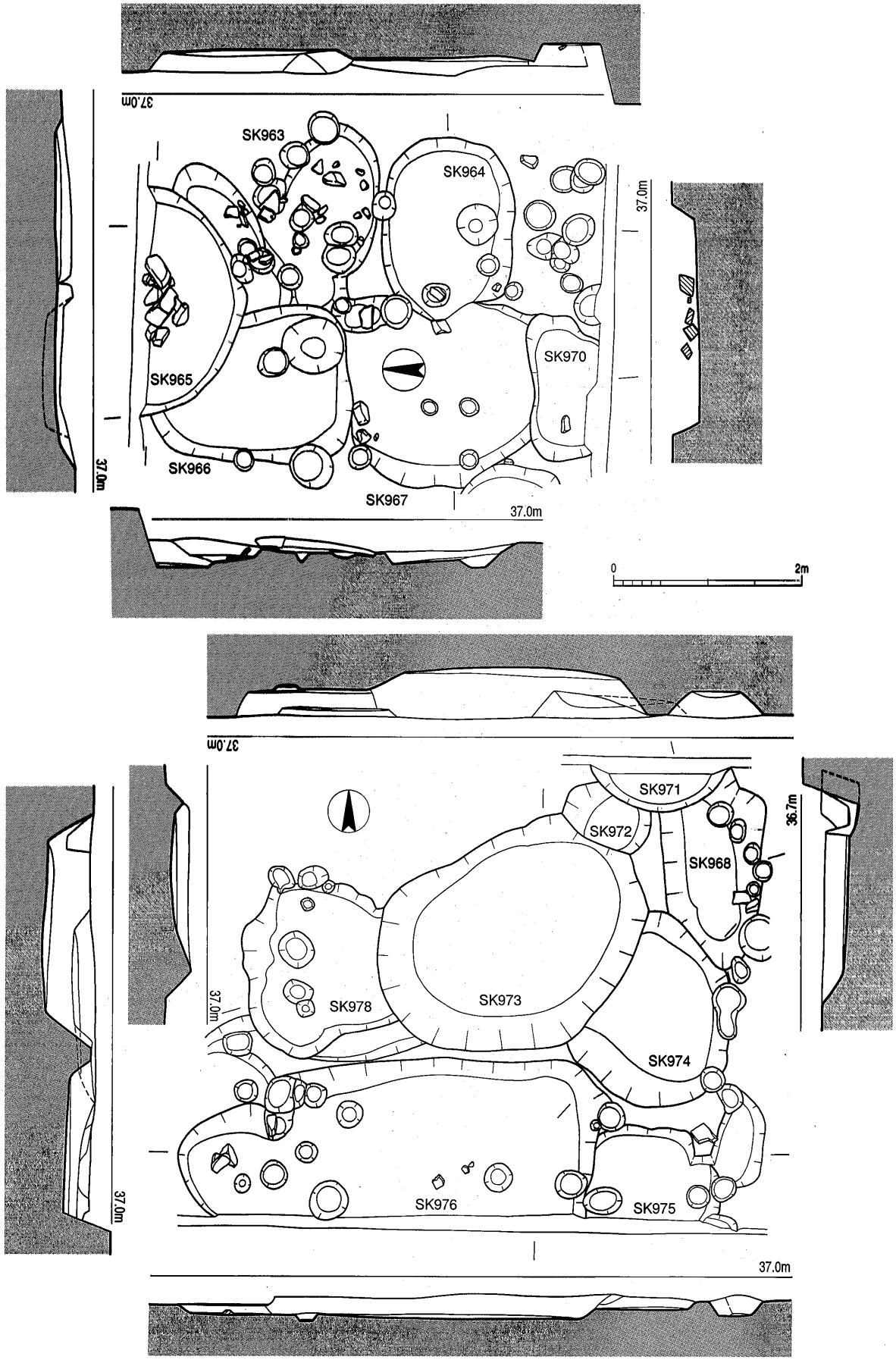


Fig. 72　南辺域土坑実測図⑤（1/60）

は中央が僅かに下がっている。

SK974（Fig.72）

SK973に北西壁を切られて位置し，SK968と重複する。楕円形を呈し，残存長1.44m，東西幅1.8m，深さ0.2mを測る。底面は中央部がやや下がっている。

SK975（Fig.72）

SK974のすぐ南側に位置し，西壁をSK976に切られる。また，大半が調査区外にあるため詳細は不明。壁高も10cm程度の遺存状況である。

SK976（Fig.72）

SK973のすぐ南側に位置し，SK975を切っている。南壁の大半が調査区外にあるため規模など詳細は不明。東西長4.4mの大きさ。埋土は暗灰色土で，炉壁・焼土が含まれていた。また，完形の土師器丸底坏・白磁碗などが出土している。

炉壁・焼土の出土

SK978（Fig.72）

SK973に東壁を切られて位置する。南北長1.86m，深さ0.26mを測る。

SK980（Fig.68）

SK978のすぐ北側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.26m，短軸0.96mで，深さは9cmと削平が著しい。

SK983（Fig.73）

SK976の西隣に位置し，SB985・SK984に切られ，SB990と重複する。北壁の一部を検出した程度であるが，平面形は円形を呈するか。検出長3.7m，深さ0.15mを測る。

SK984（Fig.73）

SK983のすぐ北側に位置し，同土坑を切っている。平面形は楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸1.4m，深さ0.15mを測る。底面はフラットである。

SK988（Fig.71）

SK984の2.3m西側に位置し，SB986と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸2.4m，短軸1.6m，深さ0.46mを測る。底面は平坦をなし，埋土には暗灰色土が堆積していた。

SK989（Fig.73）

SK988の0.8m南側に位置し，SB986に切られる。南壁は調査区外にあるが，平面形は隅丸長方形を呈しよう。東西幅1.7mで，壁高は12cmの遺存状況であった。

SK993

SK988の西隣で，同土坑に東壁を切られる。不整長円形の土坑で，東西長5.8m，南北幅2.1m，深さ0.2mを測る。

SK994（Fig.73）

SK993のすぐ西側に位置する。不整方形を呈し，東西長1.8mで，壁高は10cmと著しい削平を受ける。底面は平坦で，柱穴が数個みられるが，土坑に伴うものではない。

SK999（Fig.73）

SK994のすぐ西側に位置する。大半が調査区外にあるが，平面形は方形を呈するか。北壁長3.4mで，壁高は18cmの遺存状況である。また，東壁側には幅0.8mのテラスを有する。底面は中央部が若干窪んでいる。

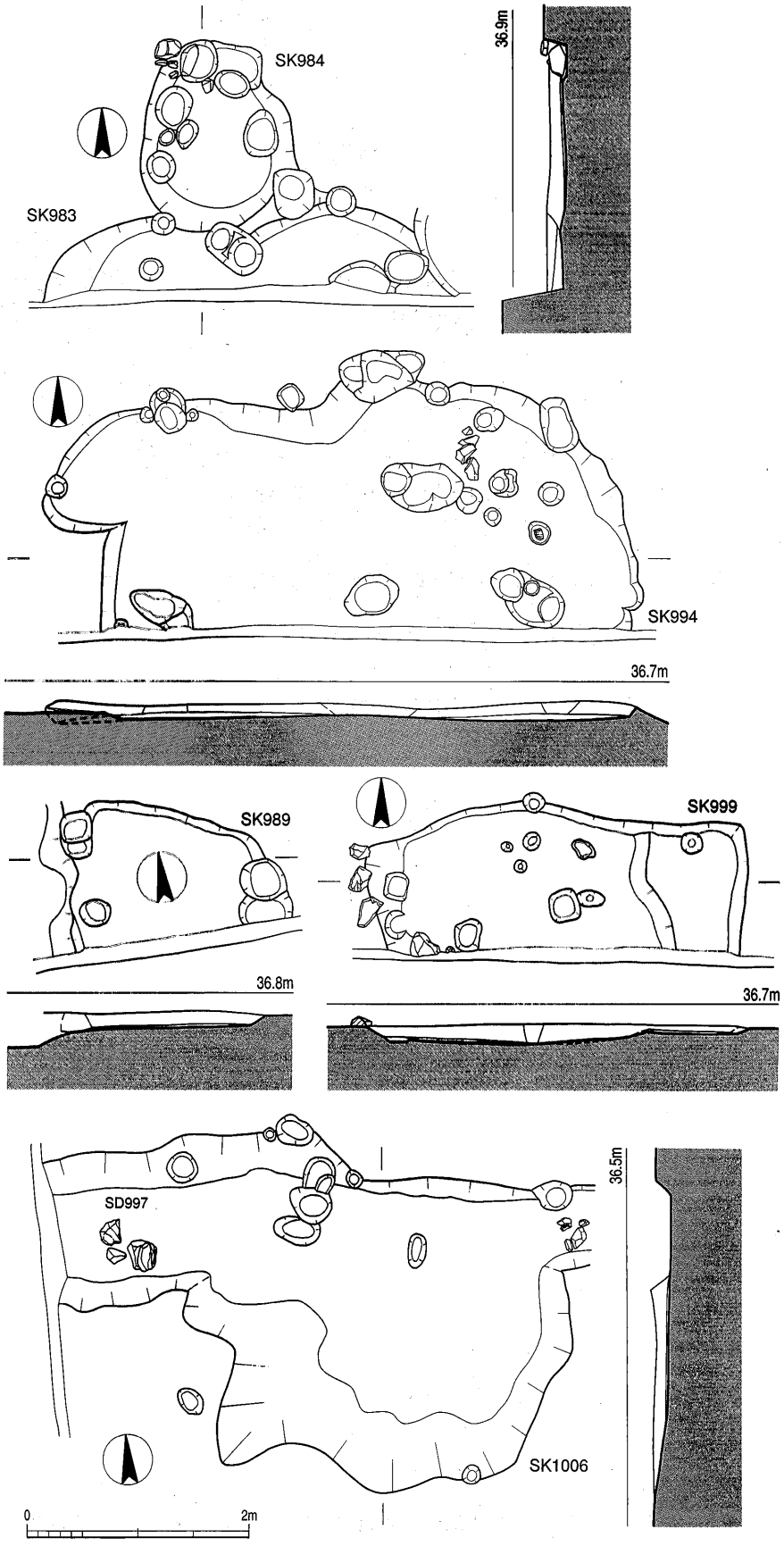


Fig. 73　南辺域土坑実測図⑥（1/60）

SK1005（Fig.68）

第39-3次調査2Trの西側で検出したが，南壁を確認した程度で詳細は不明。検出幅1.76m，深さ8㎝で，隅丸方形を呈するか。

SK1006（Fig.73）

SK1007のすぐ南に位置し，東西溝SD997に北壁を切られる。不整形を呈し，東西長3.5m，壁高0.15mを測る。埋土には焼土層が堆積していた。

SK1007（Fig.68）

SK1005の1m西側に位置するが，当土坑も南壁を確認した程度で規模等詳細は不明。南壁の上層から礫・瓦が出土している。東西幅2.18m，深さ0.2mを測る。

SK1521（Fig.92，PL.20）

第61次調査区の北側で検出した。長円形を呈すると考えられるが，西側は調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.1m，幅1.4m，深さ0.3mで，底面は東側に向かって下がっている。埋土中からは古墳時代の須恵器及び獣形土製品が出土している。

SK3158（Fig.74）

第109次調査区の北東側に位置し，SB3202と重複する。平面形は円形を呈し，長軸1.6m，短軸1.5m，深さ0.3mを測る。底面は平坦をなす。

SK3159（Fig.74）

SK3158の6.5m南西側で検出した。平面形は円形を呈し，長軸1.6m，短軸1.55m，深さ0.5mを測る。底面は中央が若干窪んでいる。また，埋土下層から自然木を検出したが，土坑の下に潜るため当土坑とは直接関係はない。

SK3161（Fig.75）

第109次調査区の北東側に位置し，SK3162と重複する。平面形は楕円形を呈するが，東壁は調査区外に延びる。検出長2.1m，東西幅2.2m，深さ0.6mを測る。底面は平坦をなす。

SK3162（Fig.75）

SK3161に北東壁を切られて位置する。楕円形を呈し，長軸2.7m，短軸2.05m，深さ0.5mを測る。底面はフラットである。

SK3163（Fig.75）

SK3159の1m西に位置し，SK3164を切っている。楕円形を呈し，長軸2.25m，短軸1.42m，深さ0.4mを測る。底面は平坦で，壁も垂直に立ち上がる。

SK3164（Fig.75）

SK3163の北西に位置し，同土坑に切られる。偏円形を呈し，長軸1.8m，短軸1.5m，深さ0.38mを測る。

SK3166（Fig.74）

SK3163の2m南に位置し，SD3217に切られる。円形を呈し，東西幅1.45m，深さ0.2mを測る。底面は平坦面をなす。

SK3167（Fig.74）

SK3164の4m北西側に位置し，SA3206と重複するが，前後関係はつかめていない。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.95m，短軸1.22m，深さ0.28mを測る。底面は平坦であるが，

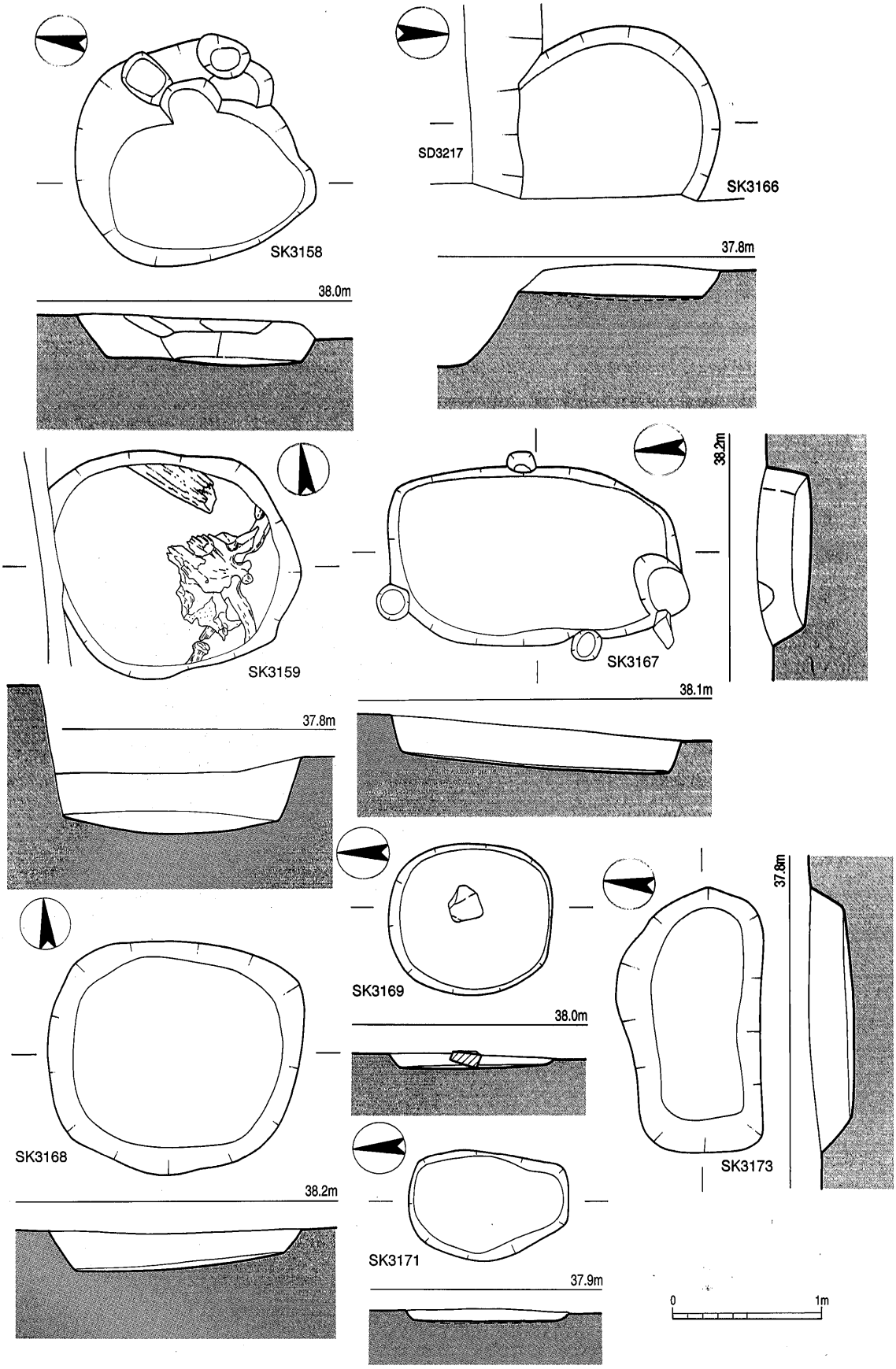


Fig. 74　南辺域土坑実測図⑦（1/40）

南側に下がっている。

SK3168（Fig.74）

SK3167の6m北西側に位置し，SB3207と重複するが，前後関係は不詳。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.7m，短軸1.58m，深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが，西側に下がる。

SK3169（Fig.74）

SK3167の6.2m西側で検出した。円形を呈し，長軸1.12m，短軸1.03mで，深さは10cmと削平が著しい。底面は平坦で，中央から花崗岩の割石が出土した。

SK3171（Fig.74）

SK3169の2.5m西側で検出した。不整円形を呈する小土坑で，長軸1.1m，短軸0.75mで，深さは0.8cmと著しい削平を受ける。

SK3172（Fig.76）

SK3171のすぐ南側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.7m，短軸1.02m，深さ0.15mで，北壁側に三日月形のテラスを有する。

SK3173（Fig.74）

SK3172の7m南側で検出した。不整長方形を呈する土坑で，長軸1.8m，短軸1.0m，深さ0.32mを測る。底面は平坦である。

SK3174（Fig.75）

第109次調査区の南西部で検出した。隅丸長方形を呈し，長軸4.55m，短軸1.35m，深さ0.25mを測り，底面はフラットである。

SK3177（Fig.77）

SD3200の上層で検出した土坑で，埋土には黒灰色粘質土が堆積していた。平面形は不整長方形を呈し，長軸6.85m，短軸2.6m，深さ0.34mを測る。底面は平坦をなし，西壁側に歪なテラスを有する。

SK3178（Fig.76）

第109次調査区の南端中央で検出した。隅丸長方形を呈し，長軸1.5m，短軸1.14m，深さ0.48mを測り，底面は東側に緩く傾斜している。

SK3179（Fig.76）

SK3178の1m北側に位置し，SB3388と重複する。隅丸方形を呈する土坑で，長軸1.9m，短軸1.82m，深さ0.32mを測る。壁面は垂直気味に立ち上がり，底面は平坦である。

SK3181（Fig.76）

SK3178の1m北側に位置し，SB3309と重複する。隅丸長方形を呈する土坑で，長軸1.87m，短軸1.88m，深さ0.4mを測る。底面は平坦をなす。

SK3182（Fig.76）

第109次調査区の南側に位置し，SB3297に切られる。平面形は楕円形を呈し，長軸2.95m，短軸0.83m，深さ0.38mを測り，底面は中央部が僅かに窪んでいる。また，西側にテラスを有する。

SK3183（Fig.75）

SK3166の6.5m南西側に位置し，SB3318を切っている。平面形は不整方形を呈し，長軸

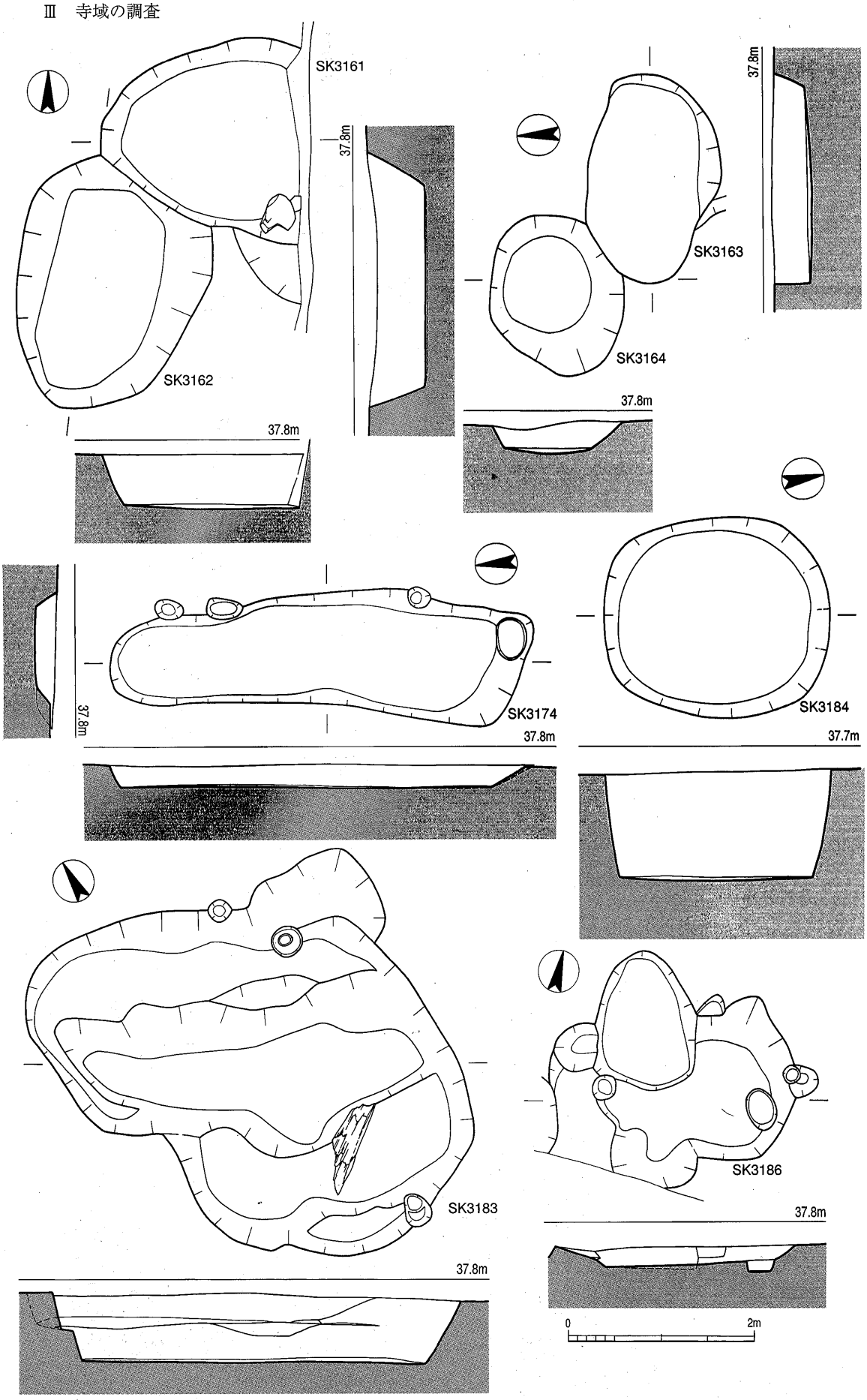


Fig. 75　南辺域土坑実測図⑧（1/60）

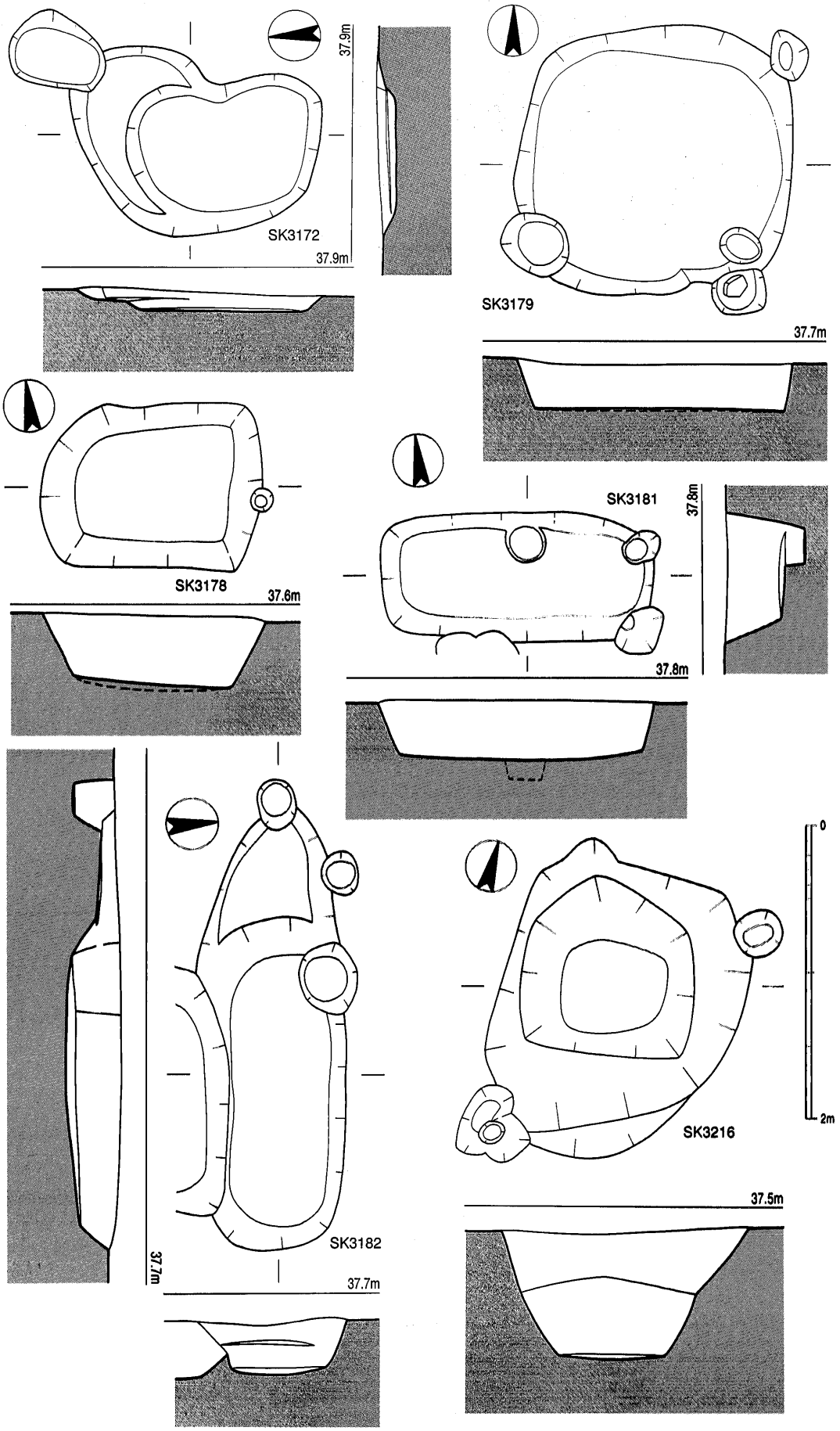


Fig. 76 南辺域土坑実測図⑨ (1/40)

5.0m，短軸3.2m，深さ0.7mを測る。底面は中央が下がり，北・南側にテラスを有する。また，南テラス側からは木片が出土している。

ＳＫ3184（Fig.75）

ＳＫ3179東隣に位置し，ＳＥ3165・ＳＤ3190に切られる。円形を呈し，長軸2.43m，短軸2.12m，深さ1.2mを測る。

ＳＫ3186（Fig.75）

第109次調査区の南側に位置し，ＳＢ3199・3297と重複する。平面形は不整方形を呈し，長軸2.62m，短軸1.47m，深さ0.2mを測る。北壁は別の土坑と重複している。

ＳＫ3216（Fig.76）

ＳＫ3178の3.5m西側に位置し，ＳＢ3361に切られ，門建物ＳＢ3359と重複する。隅丸長方形を呈する土坑で，長軸2.03m，短軸1.63m，深さ0.85mを測る。割合深い土坑で，底面は平坦をなす。

ＳＫ3242（Fig.77）

第111次調査区の南東側に位置し，東西柵ＳＡ3212と重複し，ＳＫ3243に切られる。平面形は不整方形を呈し，長軸2.8m，短軸2.2mで，深さは0.14mと浅い。底面は中央が若干窪む。

ＳＫ3243（Fig.77）

ＳＫ3242の北側で，当土坑を切って位置する。楕円形を呈する土坑で，長軸2.32m，短軸1.78m，深さ0.25mを測る。底面は中央が若干窪んでいる。

ＳＫ3244

ＳＫ3243の２m北東側に位置し，ＳＢ3364と重複する。平面形は長軸1.26m，短軸1.12mの隅丸方形を呈するが，調査時点で下場のレベルを入れ忘れたため図示できない。

ＳＫ3246（PL.40-1）

ＳＫ3244の2.5m東側で検出した。平面形は径1.45mの円形を呈する。調査時点で下場のレベルを入れ忘れたため図示できないが，写真を見ると深そうであり，或いは井戸となる可能性を有する。

ＳＫ3247（Fig.78，PL.40-2）

ＳＫ3246の2.5m東側で検出した。隅丸方形を呈する土坑で，長軸2.5m，短軸1.65mを測る。断面図が完結していないのは，調査時点で下場のレベルを入れ忘れたためによる。

ＳＫ3248（Fig.81）

ＳＫ3247の6.5m西側に位置し，ＳＡ3211に切られる。不整方形を呈する土坑で，長軸2.23m，短軸1.5m，深さ0.33mを測る。底面はＶ字状に下がっている。

ＳＫ3249（Fig.79）

第111次調査区の南東側で検出した。平面形は不整形を呈し，長軸3.66m，短軸1.82m，深さ0.32mを測る。両端部に三日月形のテラスを有する。底面は中央が下がっている。

ＳＫ3251（Fig.78）

第111次調査区の南端に位置し，ＳＢ3366と重複する。南壁は調査区外にある。平面形は隅丸方形を呈し，東西幅1.36m，深さは0.38mで，底面は東側に下がっている。

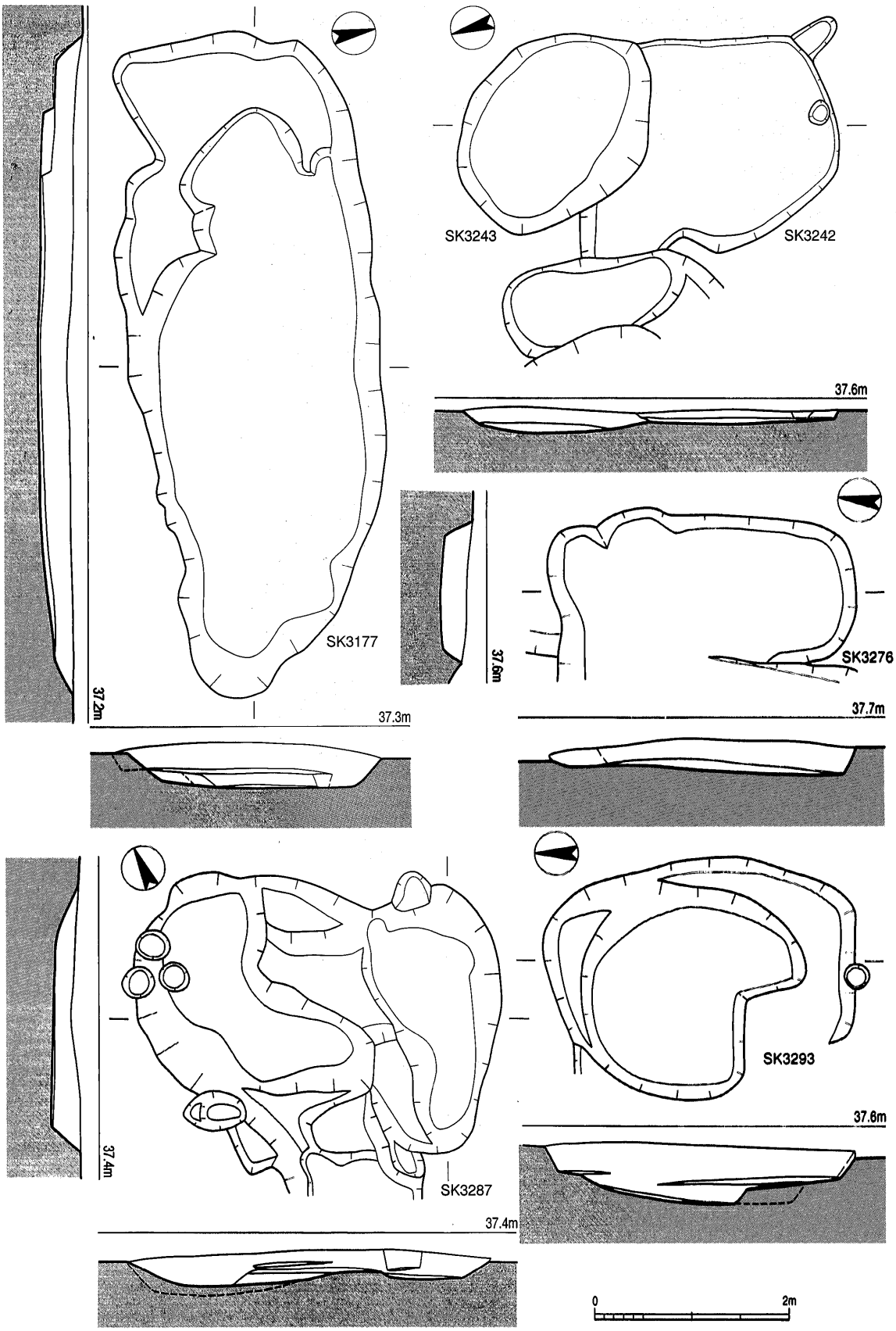


Fig. 77 南辺域土坑実測図⑩ (1/60)

ＳＫ3252（Fig.78）

第111次調査区の北端に位置し，ＳＢ3219に切られる。楕円形を呈し，長軸2.95m，短軸1.56m，深さ0.15mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3253（Fig.79）

ＳＫ3252の１m西側に位置し，ＳＢ3199と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸3.2m，短軸1.6m，深さ0.3mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3254（Fig.78）

ＳＫ3252の２m南西側で検出した。偏円形を呈する土坑で，長軸1.4m，短軸1.18mで，深さは８cmと削平が著しい。底面は平坦をなす。

ＳＫ3256（Fig.78）

ＳＫ3254の1.5m南西側で検出した。不整円形を呈し，長軸2.7m，短軸2.1mで，深さ0.16mを測る。底面は平坦である。

ＳＫ3257（Fig.78）

ＳＫ3254の0.7m西側に位置し，南北溝ＳＤ3218に切られる。隅丸方形を呈し，長軸2.35m，短軸1.65m，深さ0.46mを測る。底面は中央が窪み，南壁側に幅0.4mのテラスを有する。

ＳＫ3258（Fig.80）

第111次調査区の南西側に位置し，ＳＢ3306と重複する。平面形は長円形を呈し，長軸2.3m，短軸1.65m，深さ0.45mを測る。底面は平坦であるが，東側に傾斜している。

ＳＫ3259（Fig.80，PL.40-3）

ＳＫ3258の５m南側に位置し，ＳＤ3241に切られる。偏円形を呈し，長軸2.13m，短軸1.84m，深さ0.88mを測る。底面は平坦で，壁面は垂直気味に立ち上がる。

ＳＫ3261（Fig.80）

ＳＫ3259の3.5m西側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.4m，短軸1.35m，深さ0.75mを測る。底面は平坦をなし，壁面は垂直気味に立ち上がる。

ＳＫ3262（Fig.61）

第111次調査区の南西側に位置し，ＳＥ3265・ＳＫ3268に切られる。不整方形を呈し，土坑二つが合わさった形態を呈し，残存長2.6m，深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが，西側に下がっている。

ＳＫ3263（Fig.80）

第111次調査区の南西側に位置し，西壁は調査区外に延びる。楕円形を呈し，検出長1.95m，幅1.48m，深さ0.6mを測る。底面は中央が窪んでいる。埋土中から木が出土している。

ＳＫ3264（Fig.80，PL.37-2·41-1）

第111次調査区の南西側に位置し，ＳＢ3377と重複する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.3m，短軸1.15m，深さ1.13mを測る。埋土中位から木製の椀が出土している。底面は平坦で，壁面は直線的に立ち上がる。

木椀が出土

ＳＫ3266（Fig.79，PL.41-2）

第111次調査区の南西隅に位置し，ＳＢ3378と重複する。平面形は楕円形を呈し，長軸2.76m，短軸2.24m，深さ0.7mを測る。底面は平坦で，壁面は垂直気味に立ち上がる。

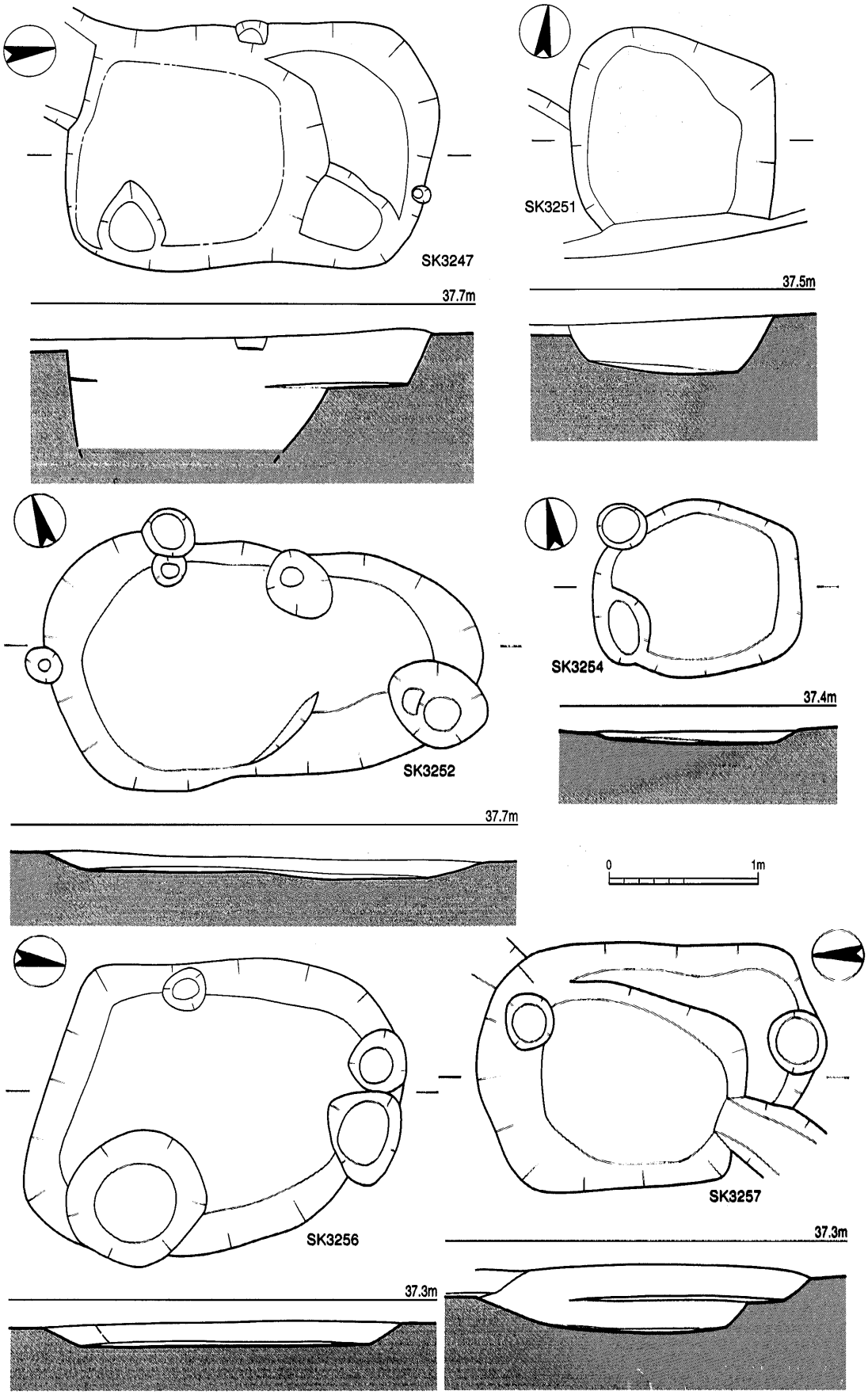


Fig. 78 南辺域土坑実測図⑪ (1/40)

ＳＫ3267（Fig.79）

第111次調査区の南西隅に位置し，東半部は調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈し，南北長3.16mを測る。底面は中央がやや窪む。

ＳＫ3268（Fig.61，PL.41-3）

ＳＫ3262を切り，その西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸1.76m，短軸1.26m，深さ0.5mを測る。埋土下位には焼けた石や平瓦片がみられた。

ＳＫ3269（Fig.81）

第111次調査区の東側に位置し，ＳＡ3212・ＳＢ3365と重複する。偏円形を呈し，長軸1.55m，短軸1.33m，深さ1.2mを測る。断面形状は尖底をなす。

ＳＫ3271（PL.42-1）

ＳＫ3269の2.5m南側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.85m，短軸1.42mを測る。調査時点でレベルを入れ忘れたので図示できない。

ＳＫ3272（Fig.81）

第111次調査区の北側に位置し，ＳＢ3363と重複する。円形を呈し，長軸1.1m，短軸0.98m，深さ0.27mを測る。底面は中央がやや窪む。

ＳＫ3273（Fig.79，PL.42-2）

ＳＫ3177の１m西側に位置する上層遺構。平面形は楕円形を呈し，長軸3.36m，短軸3.0m，深さ0.4mを測る。東壁には0.2～0.4m大の石を積んでおり，底面中央には径0.9m，深さ0.45mの穴を有する。形態的には井戸状であるが，中央土坑が浅すぎるきらいがある。

ＳＫ3274（Fig.81）

第109次調査区の南西で，ＳＢ3349の西隣に位置する。長方形を呈し，長軸1.86m，短軸1.02m，深さ0.28mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3276（Fig.77）

第111次調査区の南東側に位置し，ＳＡ3212と重複する。隅丸方形を呈し，長軸3.18m，短軸1.48m，深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが，南側に下がっている。

ＳＫ3277（Fig.80）

ＳＫ3276の東隣に位置し，ＳＡ3212と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.9m，短軸0.95m，深さ0.27mを測る。底面は平坦であるが，北側に下がる。

ＳＫ3278（Fig.79）

ＳＫ3247のすぐ北側に位置する。楕円形を呈し，長軸2.48m，短軸1.56m，深さ0.43mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3279（Fig.79）

ＳＫ3278の東隣に位置する。偏円形を呈し，長軸1.42m，短軸1.36mで，深さは0.15mと浅い。底面は平坦をなす。

ＳＫ3281（Fig.81）

ＳＫ3276の西隣で検出した。西壁はＳＢ3365に切られる。隅丸長方形を呈し，長軸2.95m，短軸1.16m，深さ0.28mを測る。底面は平坦をなす。

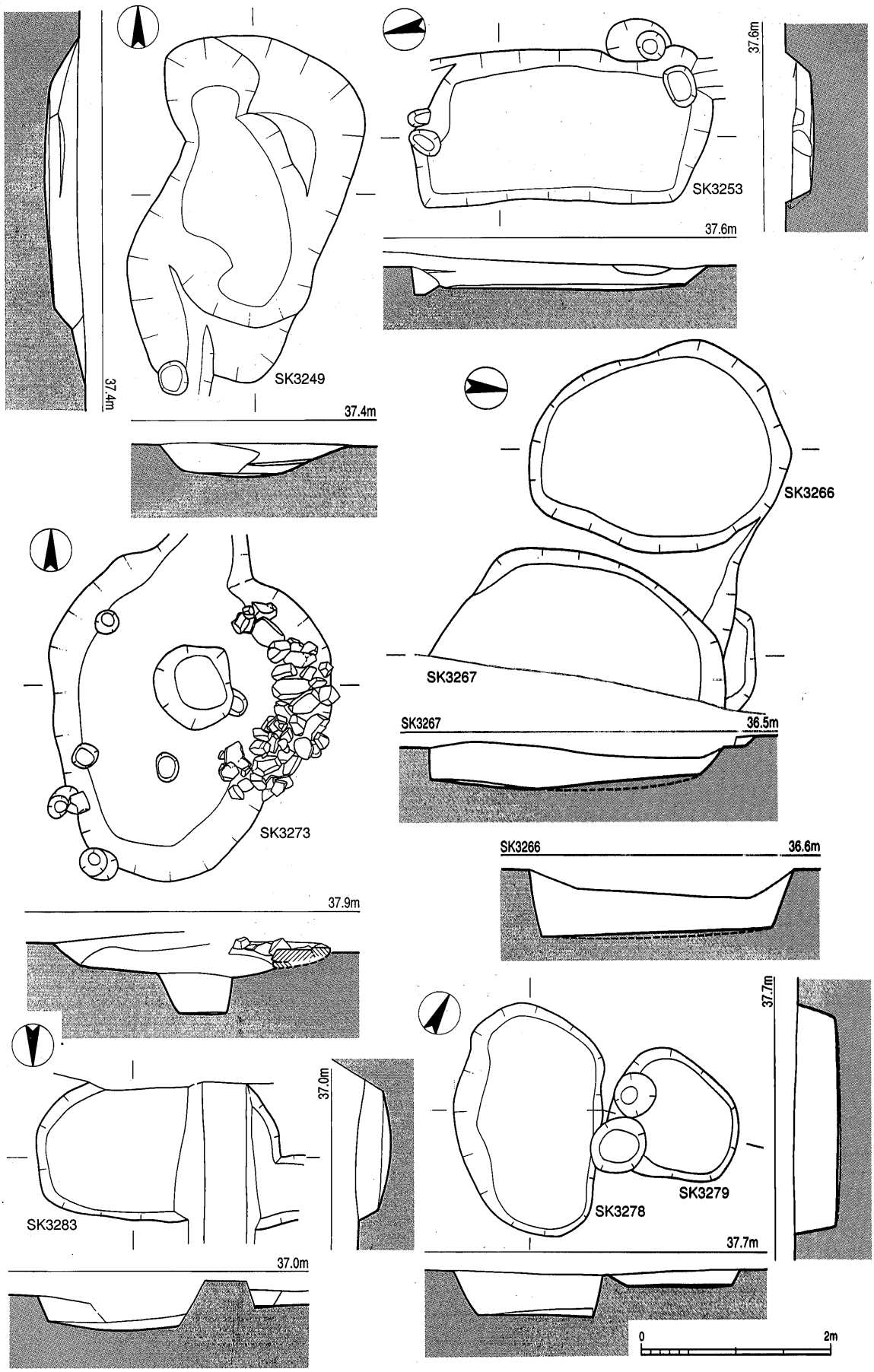


Fig. 79 南辺域土坑実測図⑫ (1/60)

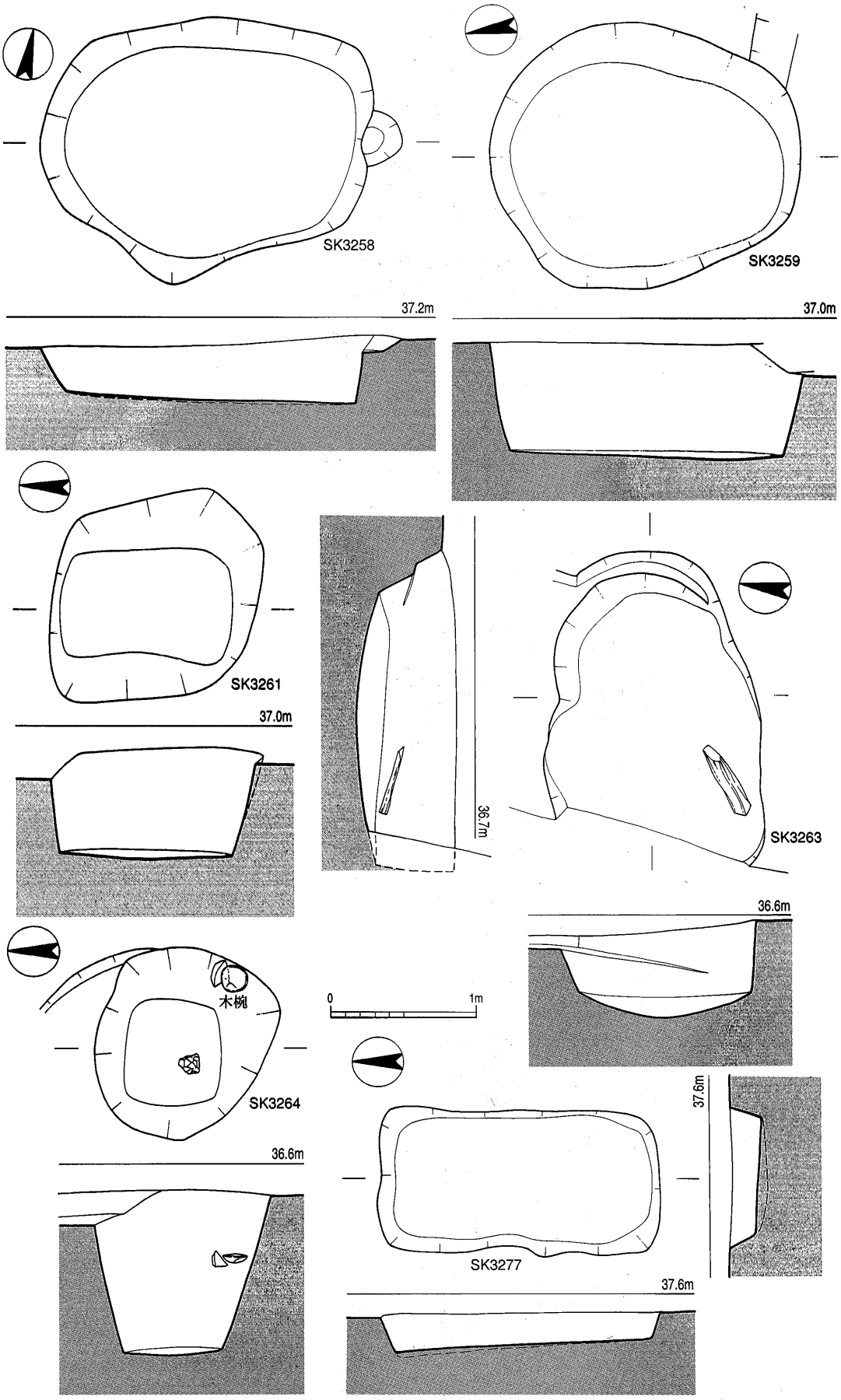


Fig. 80　南辺域土坑実測図⑬（1/40）

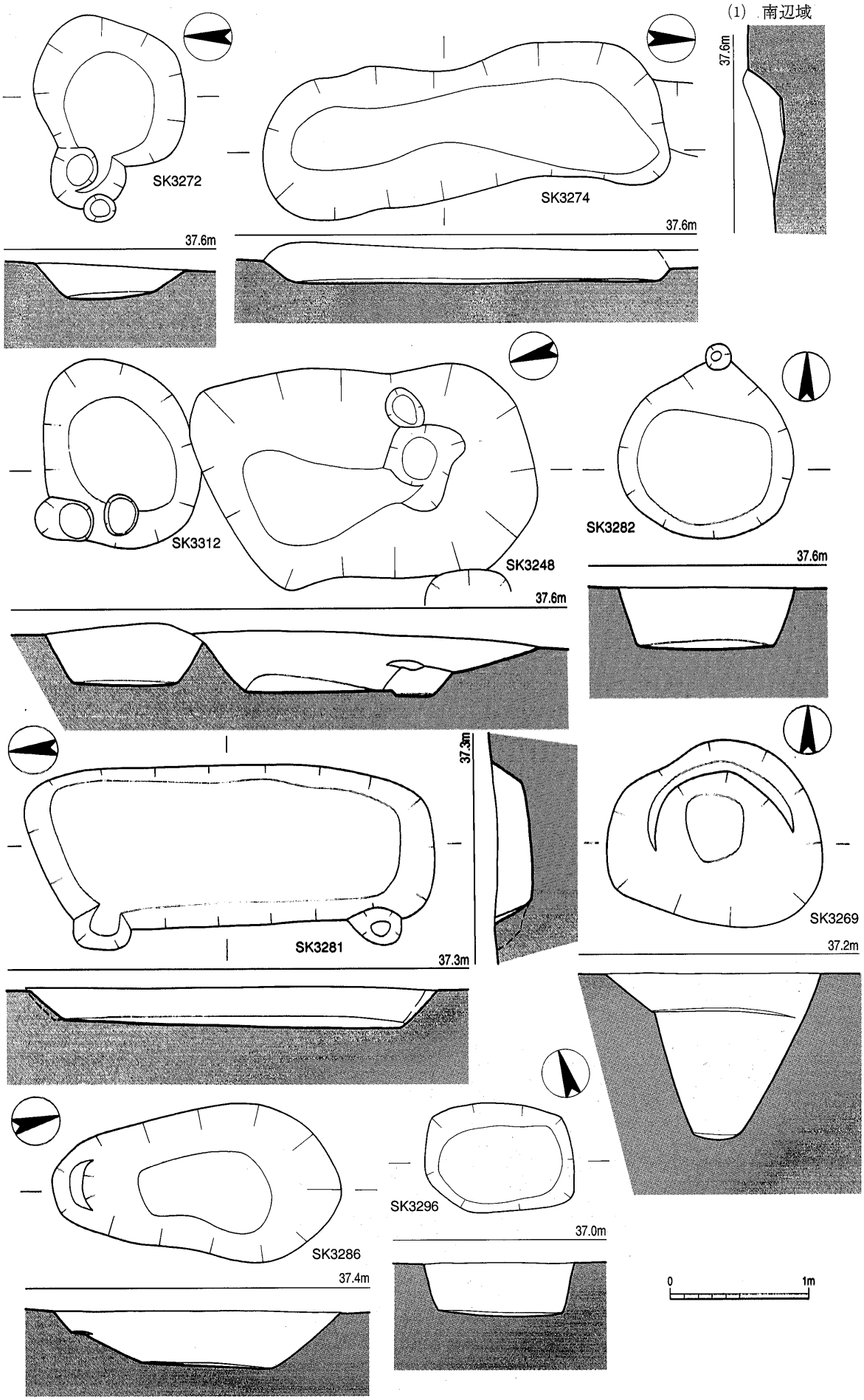


Fig. 81　南辺域土坑実測図⑭（1/40）

ＳＫ3282（Fig.81）

ＳＫ3243の東隣で検出した。円形を呈し，長軸1.26m，短軸1.12m，深さ0.43mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3283（Fig.79）

第111次調査区の南端中央に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸2.56m，短軸1.43m，深さ0.28mを測る。底面は中央が窪んでいる。

ＳＫ3284（Fig.82）

第111次調査区の南側に位置し，ＳＢ3306切られる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.82m，短軸1.76m，深さ0.33mを測る。底面は中央が窪んでいる。

ＳＫ3286（Fig.81）

第111次調査区の中程で検出した。平面形は楕円形を呈し，長軸2.05m，短軸1.15m，深さ0.43mを測る。底面は北側に若干下がっており，南側に僅かなテラスを有する。

ＳＫ3287（Fig.77）

第111次調査区の中程に位置し，ＳＡ3195・3212と重複し，ＳＤ3190・3232に切られる。不整形を呈し，長軸3.75m，短軸2.48m，深さ0.32mを測る。底面は凹凸が著しい。

ＳＫ3288（Fig.82）

ＳＫ3259の２m南で検出した小土坑。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.34m，短軸1.26m，深さ0.28mを測る。

ＳＫ3292（Fig.82）

ＳＫ3256の0.5m南側に位置し，ＳＡ3197と重複する。不整形を呈し，長軸3.2m，短軸2.5m，深さ0.6mを測る。底面は中央が窪み，北・南側にテラスを有する。

ＳＫ3293（Fig.77）

ＳＫ3293の南側に位置し，ＳＡ3197，ＳＢ3358と重複する。隅丸方形を呈し，長軸2.33m，短軸1.1m，深さ0.38mを測る。底面は中央が若干窪む。

ＳＫ3294（Fig.82）

ＳＤ3300底面で検出した一連の土坑で，一辺0.9～2.2mの方形土坑８個が連続した形態をなす。ＳＤ3200は排水溝とするより，土取りのために掘削した土坑が結果的に連続したものとも考えられる。

ＳＫ3295（Fig.83，PL.42-3）

第111次調査区の南端中央で検出した。平面形は楕円形を呈し，長軸4.05m，短軸2.6m，深さ1.15mを測る。二段に掘り込まれ，下段径2.5mで，断面は逆台形を呈する。下段土坑の縁に沿って木杭が６本程打ち込まれているが，倒れた状態で出土した。杭は長さ100cm，径10cm程の大きさで，先端を尖らせている。埋土中からは多く鋳型片が出土しており，「南无□□」の墨書がある卒塔婆も発見された。なお，当土坑の西側には鋳型を含む落込ＳＸ3305があり，付近に鋳造工房が存在するものとみられる。

卒塔婆が出土

ＳＫ3296（Fig.81）

第111次調査区の西端に位置し，ＳＤ3238に切られる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.09m，短軸0.78m，深さ0.4mを測る。

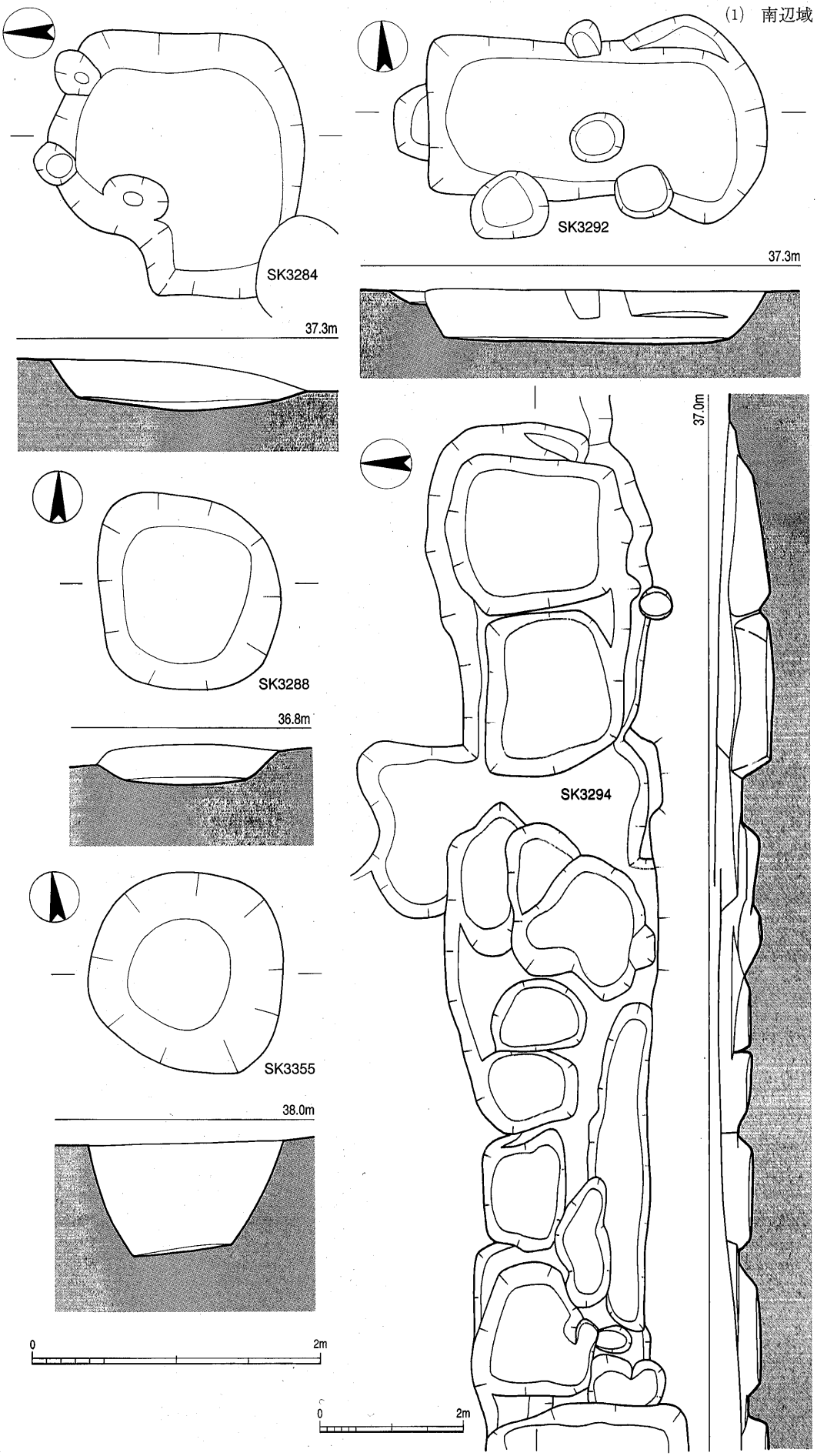


Fig. 82　南辺域土坑実測図⑮（1/40・1/80）

ＳＫ3312（Fig.81）

ＳＫ3248のすぐ北側に壁を接して位置する。円形を呈し，長軸1.42m，短軸1.1m，深さ0.4mを測る。断面形は逆台形をなす。

ＳＫ3319（Fig.83）

ＳＫ3295の４m東側に位置し，落込ＳＸ3313と重複する。東半部は調査区外にあるが，平面形は楕円形を呈し，長軸3.88m，深さ0.7mを測る。北西側には扇形のテラスを有する。

ＳＫ3355（Fig.82）

第115次調査北区の南東側に位置する。円形を呈し，長軸1.46m，短軸1.4m，深さ0.75mを測る。断面形状は逆台形を呈する。

ＳＫ3373（Fig.83）

第117次調査区の南東側で検出した。一辺2.3mの隅丸方形を呈し，深さは0.4mを測る。南側には浅い土坑があり，重複している。

ＳＫ3379（Fig.83）

第117次調査区の北東隅に位置し，ＳＢ3423・3424と重複し，井戸ＳＥ3370に切られる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸3.9m，短軸2.8m，深さ0.3mを測る。底面は平坦で，東西両側にテラスを有する。埋土中には多量の焼土と人頭大の石が投棄されていた。

ＳＫ3391（Fig.84）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＫ3392と重複する。平面形は不整方形を呈し，長軸1.58m，短軸1.22m，深さ0.55mを測る。

ＳＫ3392（Fig.84）

ＳＫ3391の西隣に位置する。不整形を呈し，長軸1.15m，短軸1.02m，深さ0.48mを測る。断面形状は摺鉢状を呈する。

ＳＫ3399（Fig.84）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＫ3409，ＳＢ3422を切る。平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.25m，短軸1.26m，深さ3.3mを測る。底面は平坦で，南側に三日月形のテラスを有する。

ＳＫ3401（Fig.84）

第117次調査区の南側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.18m，短軸1.16m，深さ0.96mを測る。埋土は泥炭層の単一層で，完形の土師器・白磁が一括出土した。

ＳＫ3404（Fig.84）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＫ3409に切られる。径0.9mの円形を呈し，深さは0.8mを測る。底部穿孔土師器が数点出土した。

ＳＫ3409（Fig.84）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＫ3411・3413・3399に切られ，ＳＫ3404を切っている。平面形は長方形を呈し，残存長5.22m，幅3.66m，深さ0.86mを測る。埋土は黄褐色土ブロックが混入した黒灰色土で，人為的に埋められている。

人為的な埋め戻し

ＳＫ3411（Fig.84）

第117次調査区の東側に位置し，ＳＥ3375・ＳＫ3409を切る。隅丸方形を呈し，長軸1.36m，短軸1.16mで，深さは５cmと遺存状態は悪い。底面中央には焼土・炭がみられた。

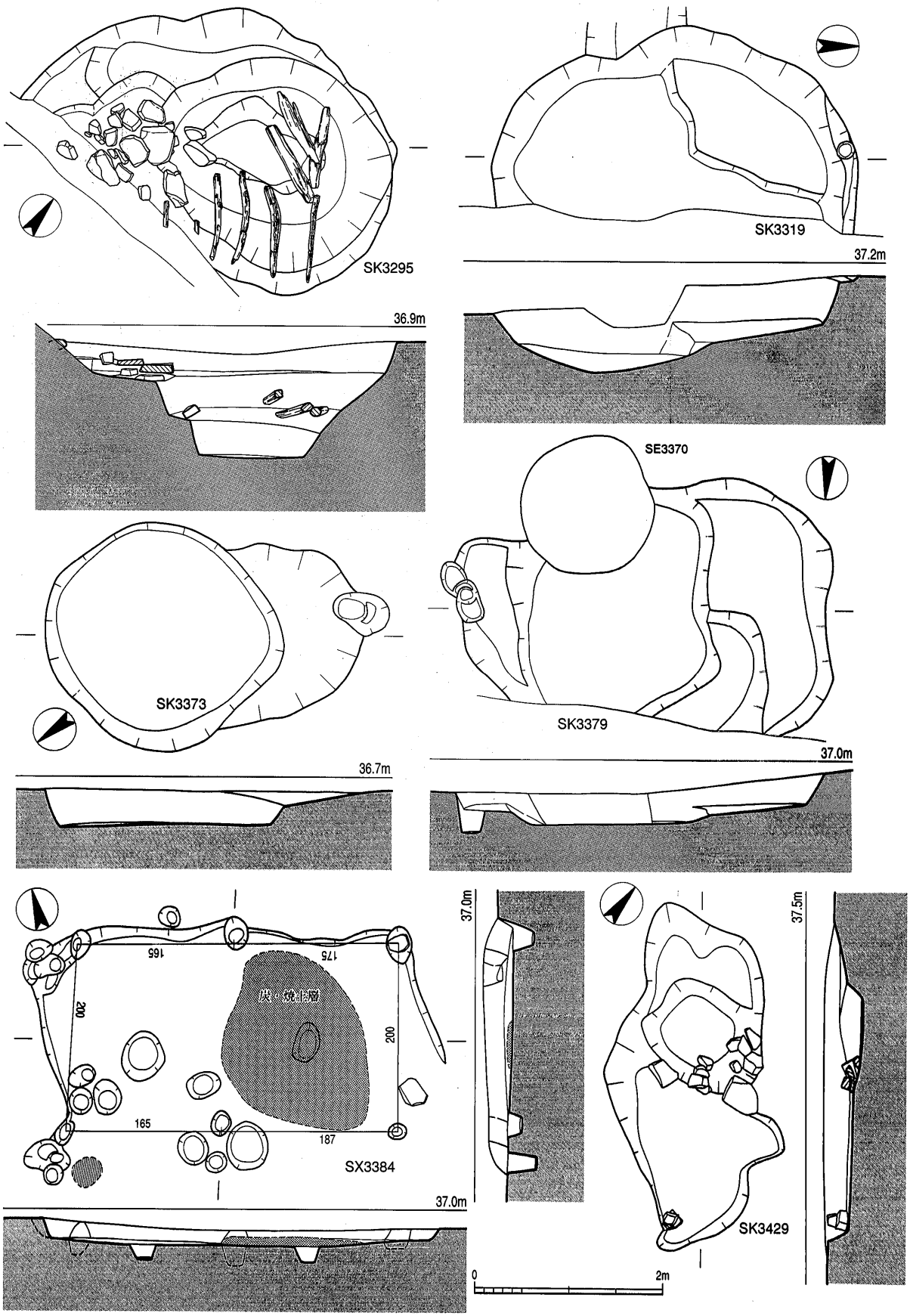


Fig. 83 南辺域土坑実測図⑯ (1/60)

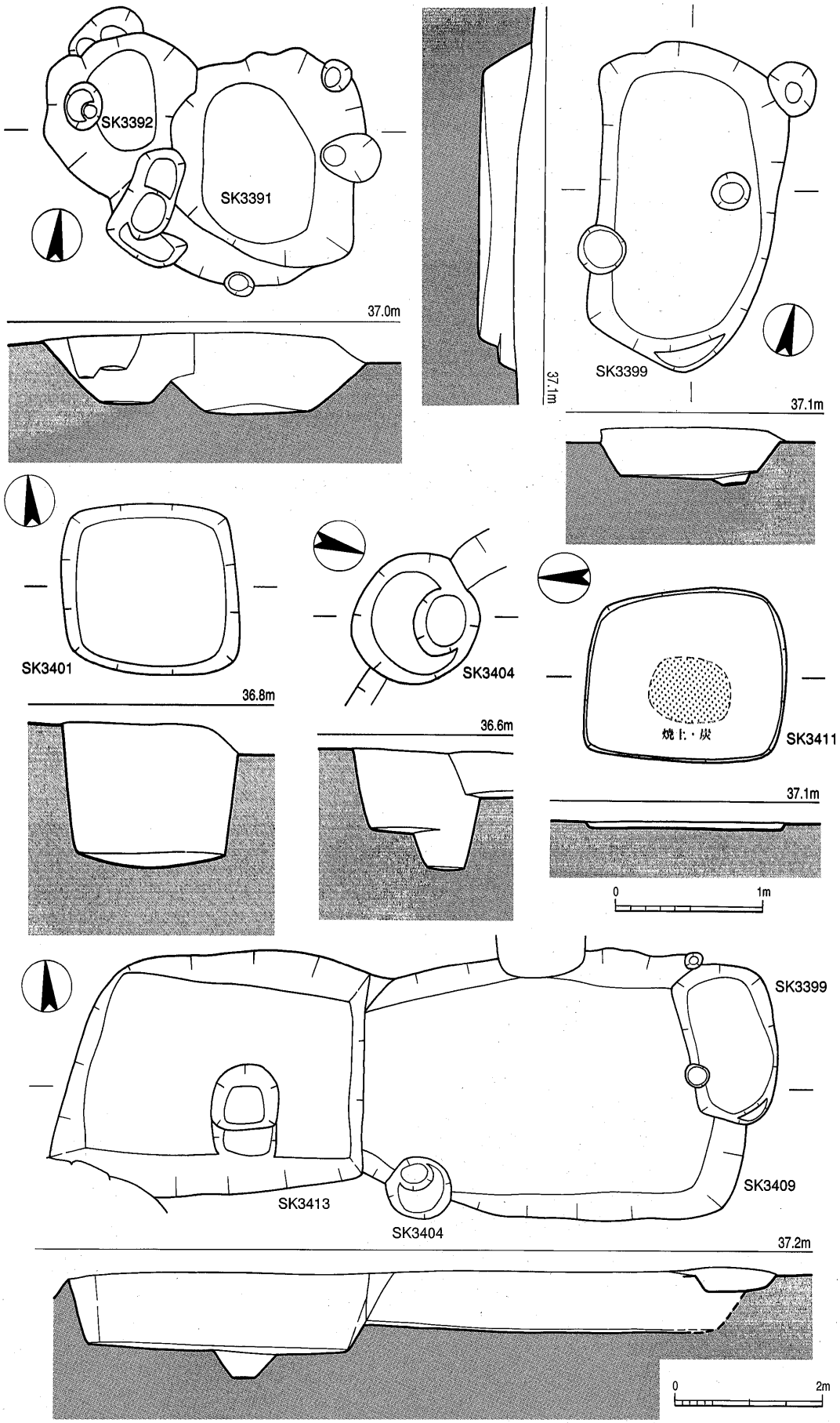


Fig. 84　南辺域土坑実測図⑰（1/40・1/80）

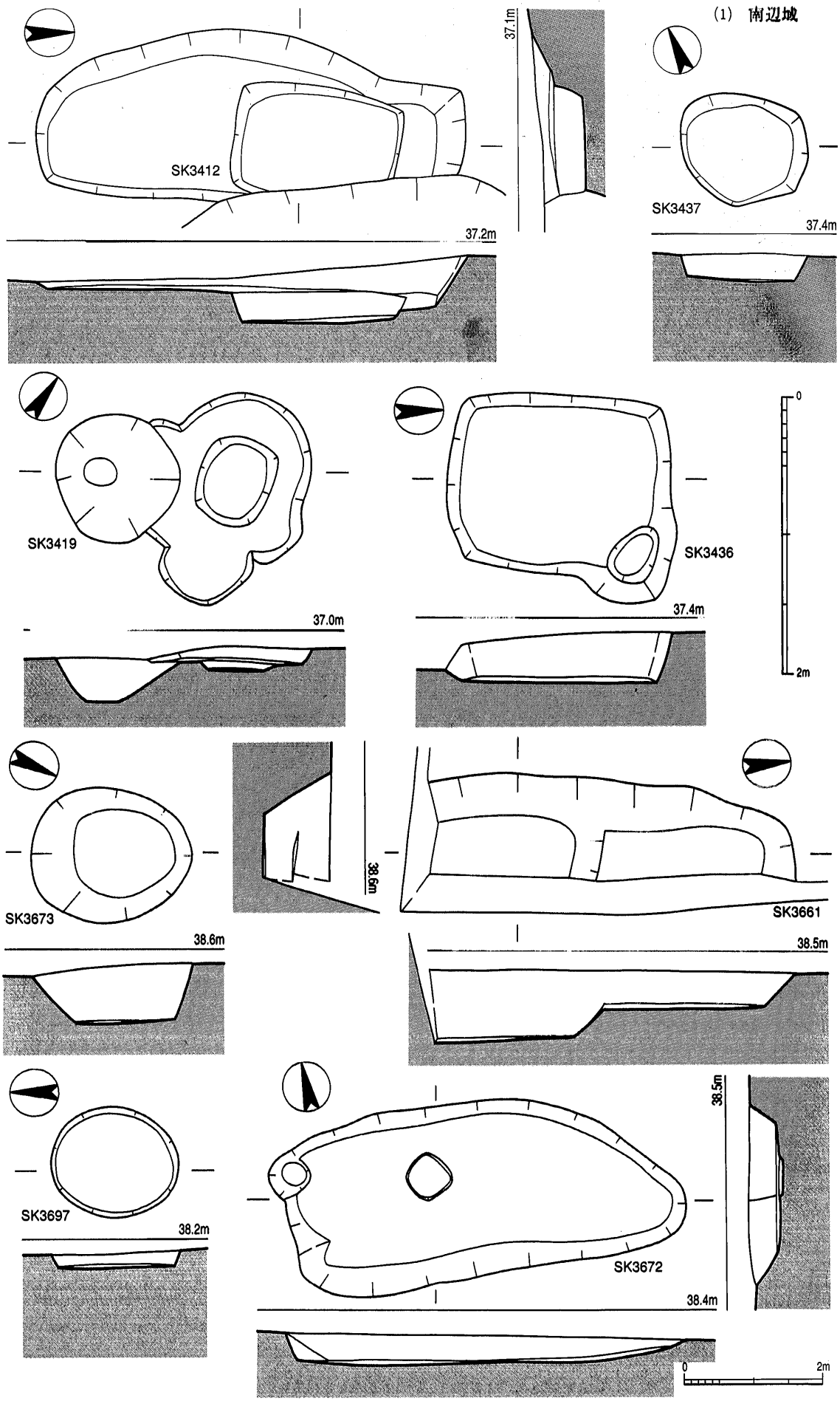


Fig. 85　南辺城土坑実測図⑱（1/40・1/80）

ＳＫ3412（Fig.85）

第117次調査区の中程に位置し，ＳＥ3375に切られる。隅丸長方形を呈し，長軸3.1m，短軸1.23m，深さは0.35mを測る。底面の北壁寄りに方形土坑が掘り込まれている。

ＳＫ3413（Fig.84）

第117次調査区の中程に位置し，ＳＫ3409を切り，ＳＥ3395・ＳＤ3400に切られる。長方形を呈し，長軸4.1m，短軸3.3m，深さ1.1mを測る。底面の南壁寄りには0.9m程の穴が掘削されている。埋土は一気に埋め戻された状況を呈する。

ＳＫ3419（Fig.85）

ＳＫ3401の１m北側に位置する。柱穴状の小土坑で，径0.9m，深さ0.3mを測る。断面形状は摺鉢形をなす。

ＳＫ3429（Fig.83）

第117次調査区の北西で検出した。不整形を呈する土坑で，長軸3.7m，短軸1.68m，深さ0.4mを測る。底面中央が窪み，北西側にテラスを有する。埋土中には角礫が投げ込まれており，石鍋片も出土している。

ＳＫ3436（Fig.85）

第117次調査区の南西隅で検出した。方形を呈し，長軸1.6m，短軸1.3m，深さ0.38mを測る。底面は平坦面をなす。

ＳＫ3437（Fig.85）

ＳＫ3436の２m北東側に位置する小土坑で，ＳＤ3432と重複する。円形を呈し，長軸0.9m，短軸0.8m，深さ0.2mを測る。

ＳＫ3438（Fig.66）

第117次調査区の西端で検出した。ＳＫ3438・3439・3442は連続する土坑で，ＳＥ3425に切られる。三つの土坑の中では最も古い。残存長2.3m，深さ0.4mを測るが，東壁の一部を残す程度で，詳細は不明。

ＳＫ3439（Fig.66）

ＳＫ3438の西隣で，同土坑を切り，ＳＥ3425に切られる。東西幅2.3m，深さ0.85mを測るが，南壁の一部を残す程度で詳細は不明。

ＳＫ3441（Fig.86）

第117次調査区の西端部に位置し，ＳＥ3425・ＳＫ3442に切られている。不整方形を呈し，東西幅は3.4m，深さ0.5mを測り，底面は中央が下がっている。

ＳＫ3442（Fig.66・86）

ＳＫ3438・3439の北側で，同土坑を切り，ＳＥ3425に切られる。残存長2.1m，東西幅2.46m，深さ0.6mで，底面中央には円形の小土坑（径0.9m，深さ0.5m）が掘られている。

ＳＫ3447（Fig.86）

第117次調査区の北端部に位置し，ＳＤ3400Ａに切られている。西壁を残す程度で詳細は不明。土器の出土があったことから土坑として報告した。

ＳＫ3661（Fig.85）

第122次調査区の南東隅に位置し，大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.63mで，

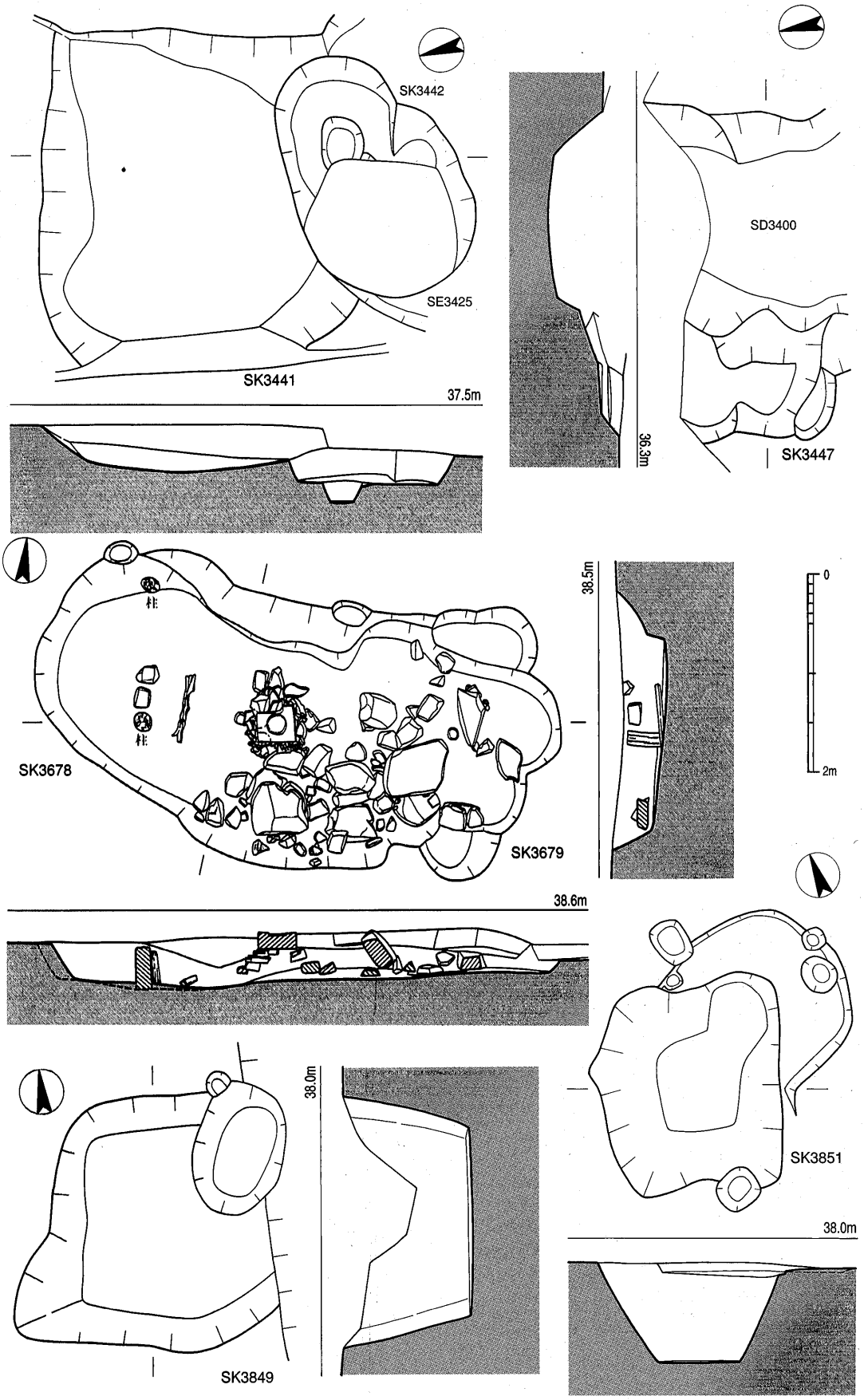


Fig. 86 南辺域土坑実測図⑲ (1/60)

深さ0.5mを測る。北側にはテラスを有する。

ＳＫ3672（Fig.85）

第122次調査区の南側に位置し，ＳＢ3660を切る。平面形は長円形を呈し，長軸5.78m，短軸2.53m，深さ0.46mを測る。底面は中央に下がっている。

ＳＫ3673（Fig.85）

第122次調査区の北側に位置し，ＳＢ3660Ｂ掘方に切られる。平面形は円形を呈し，長軸1.15m，短軸0.98m，深さ0.43mを測る。

ＳＫ3674（Fig.87）

第122次調査区の西端に位置し，ＳＢ3670と重複する。平面形は偏円形を呈し，長軸1.2m，短軸0.9m，深さ0.45mを測る。底面には柱が遺存していたが，対になる土坑は存在せず，柱掘方ではない。

ＳＫ3676（Fig.67）

ＳＥ3690に東半部を切られるため詳細は不明。残存長1.05mで，深さは15cmの遺存状態。底面は平坦を呈するようである。

ＳＫ3677（Fig.87，PL.59-3）

井戸ＳＥ3680の最終埋没過程で掘り込まれている。隅丸方形を呈し，一辺2.2m，深さ0.7mを測る。下部から箕の縁木が出土している。また，南側に見える木柱は井戸枠の支柱である。

ＳＫ3678（Fig.86）

第122次調査区の北西側に位置し，東壁をＳＫ3679に切られる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.34m，深さ0.4mを測る。土坑内に木柱が２本あるが，土坑に伴うものかは不明。

ＳＫ3679（Fig.86）

ＳＫ3678の東で，同遺構を切って位置する。平面形は不整形を呈し，ＳＫ3678を含めた長さは5.3m，幅2.7mを測る。埋土中には多量の自然石・瓦片が含まれており，中央部には五輪塔の地輪が据わった状態で確認された。

ＳＫ3697（Fig.85）

ＳＫ3677の１m南東側に位置する小土坑。円形を呈し，長径0.93m，短径0.8mで，深さ10cmを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3848（Fig.87）

第130次調査区の東側に位置する下層遺構で，ＳＢ3862下部で検出した。楕円形を呈し，長軸1.75m，短軸1.35m，深さ0.9mを測る。底部は中央に下がっており，底面から自然木が出土した。北壁側と東壁にテラスを有する。

ＳＫ3849（Fig.86）

ＳＫ3848の西側に位置する下層遺構で，ＳＢ3862・ＳＤ3842に切られる。平面形は不整方形を呈し，南北長2.6m，深さ1.3mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3851（Fig.86）

ＳＫ3848の１m南に位置し，平面形は隅丸方形を呈する。長軸2.05m，短軸1.8m，深さ1.05mを測る。底面は平坦で，断面形は逆台形を呈する。

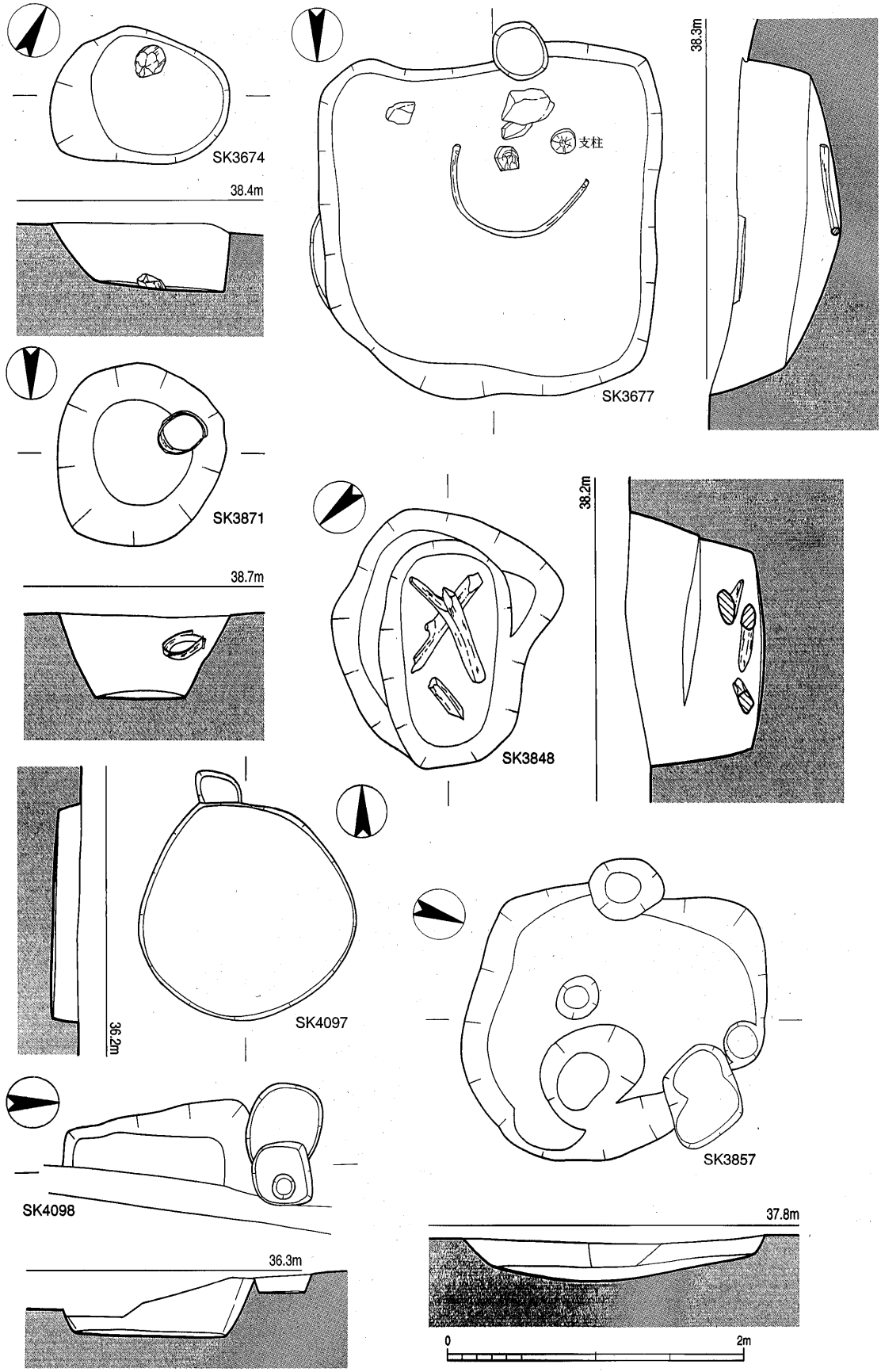


Fig. 87 南辺域土坑実測図⑳ (1/40)

ＳＫ3853（Fig.88，PL.66-3）

第130次調査区の北西側で検出した下層遺構で，採土穴ＳＸ3856に切られる。平面形は楕円形を呈し，長軸3.9m，短軸3.4m，深さ0.84mを測る。底面はほぼ平坦である。

ＳＫ3857（Fig.87）

ＳＫ3851の２m西側に位置し，ＳＢ3862・3876と重複する。不整円形を呈し，長軸2.24m，短軸1.85mで，深さは25cmと削平を受ける。

ＳＫ3863

第130次調査区の南西隅に位置する。ＳＤ3840に切り込むもので，プランを明確にしえなかった。土師器・陶磁器・動物形燭台などが出土している。

ＳＫ3871（Fig.87）

第130次調査の南西に位置する上層遺構。円形を呈し，径1.2m，深さ0.56mを測る。埋土上層から曲物が出土している。

ＳＫ4097（Fig.87，PL.68）

第154次調査区の中央部で検出した。径1.45mの円形を呈し，深さは15cmの遺存状況であった。底面は平坦をなす。

ＳＫ4098（Fig.87，PL.）

第154次調査区の東壁中央に位置し，大半が調査区外にある。西壁長1.25m，深さ0.4mを測る。底面はフラットである。　（小田）

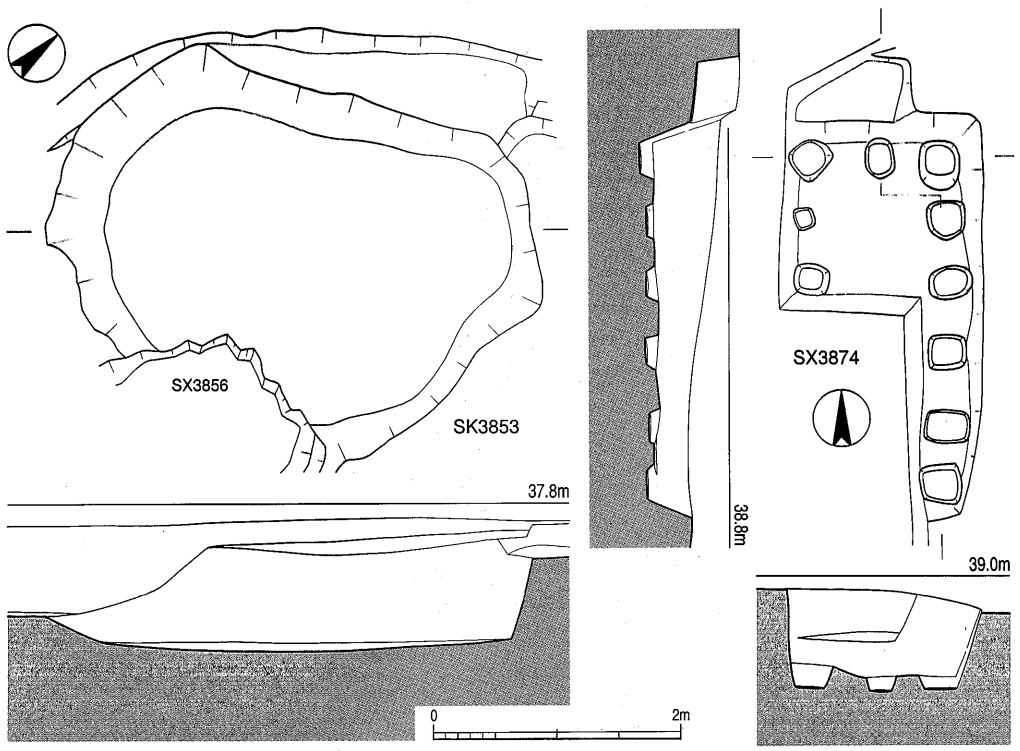


Fig.88　土坑ＳＫ3853，防空壕ＳＸ3874実測図（1/60）

6）鋳造関連遺構

S X525（Fig. 89，PL. 10）

第28次調査区の北西隅で検出したが，大半が調査区外に延びる。方形の基壇状を呈し，南辺には10～30cm大の花崗岩割石を並べており，石積は2段遺存する。また，東辺にも割石を並べているが，南側は攪乱が著しい。基壇は黒茶灰色土・茶灰色砂質土・暗茶灰色粘質土を積んでおり，現状で南辺長5.4m，東辺長4.02mを測る。上面には保土穴S X527があり，銅滓が出土している。この面には焼土・炭層がみられることから鋳造関連の遺構と考えられる。 鋳造関連

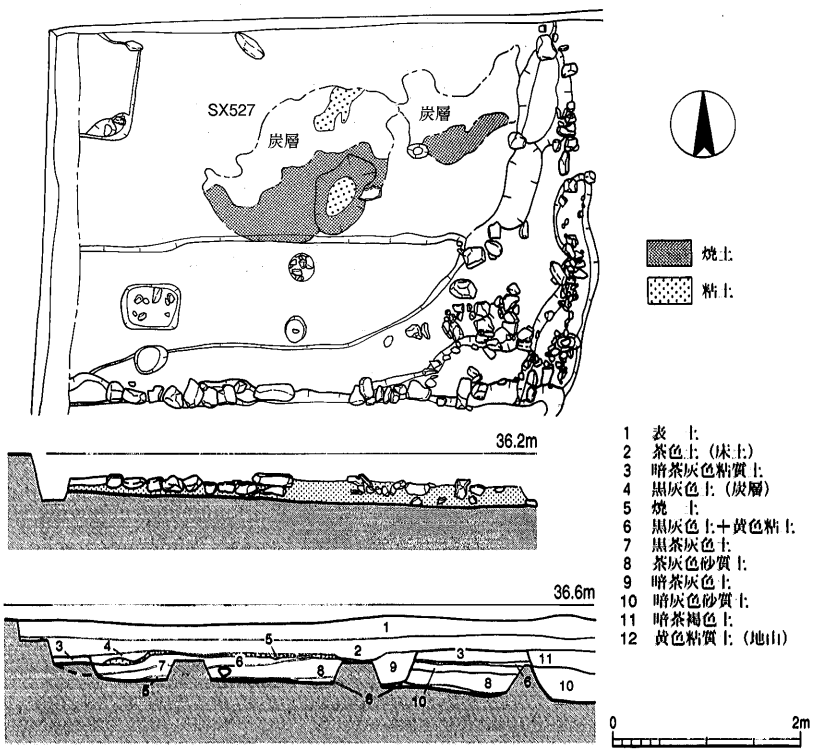


Fig. 89 石組区画S X525実測図（1/80）

S X527（Fig. 89）

S X525の上面で検出した保土穴で，50×90cmの大きさを測る。壁面は強い火熱により赤変しており，上面には焼土・炭層が堆積している。また，埋土中から銅滓が出土した。

S X901（Fig. 90）

第39-2次4 Tr上層の東側で検出した保土穴である。掘方は長さ63cm，幅48cm，深さ20cmの楕円形を呈し，

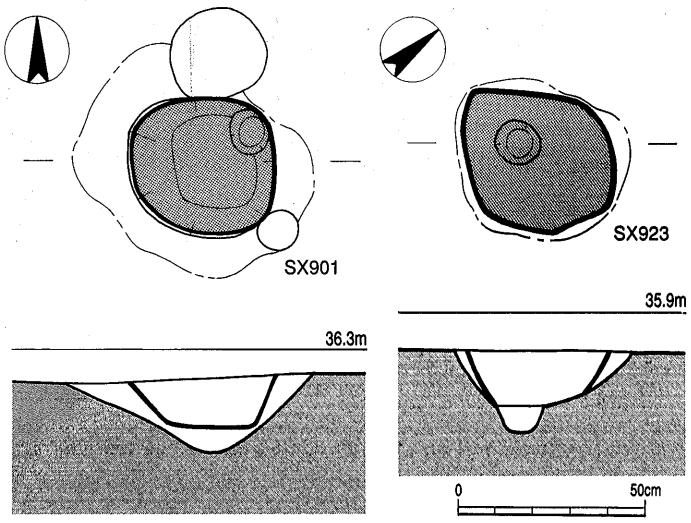


Fig. 90 保土穴S X901・923実測図（1/20）

掘方内に黄褐色粘土を詰めた後，35×40cmの穴を掘り込んでいる。壁面は強い火熱を受ける。

ＳＸ923（Fig. 90）

当遺構も第39-2次４Tr上層の西側で検出した保土穴である。構築方法はＳＸ901と同じく，径45×50cm，深さ15cmの掘方壁面に黄褐色粘土を貼付している。壁面は強い火熱を受け，厚さ１cm余りが赤化していた。

ＳＸ3384（Fig. 83）

第117次調査区の東側で検出した竪穴遺構で，内部に柱穴を有する。削平により南壁を失うが，平面形は隅丸長方形を呈しよう。長軸4.0mで，短軸は柱穴との関係から2.4m程になるも

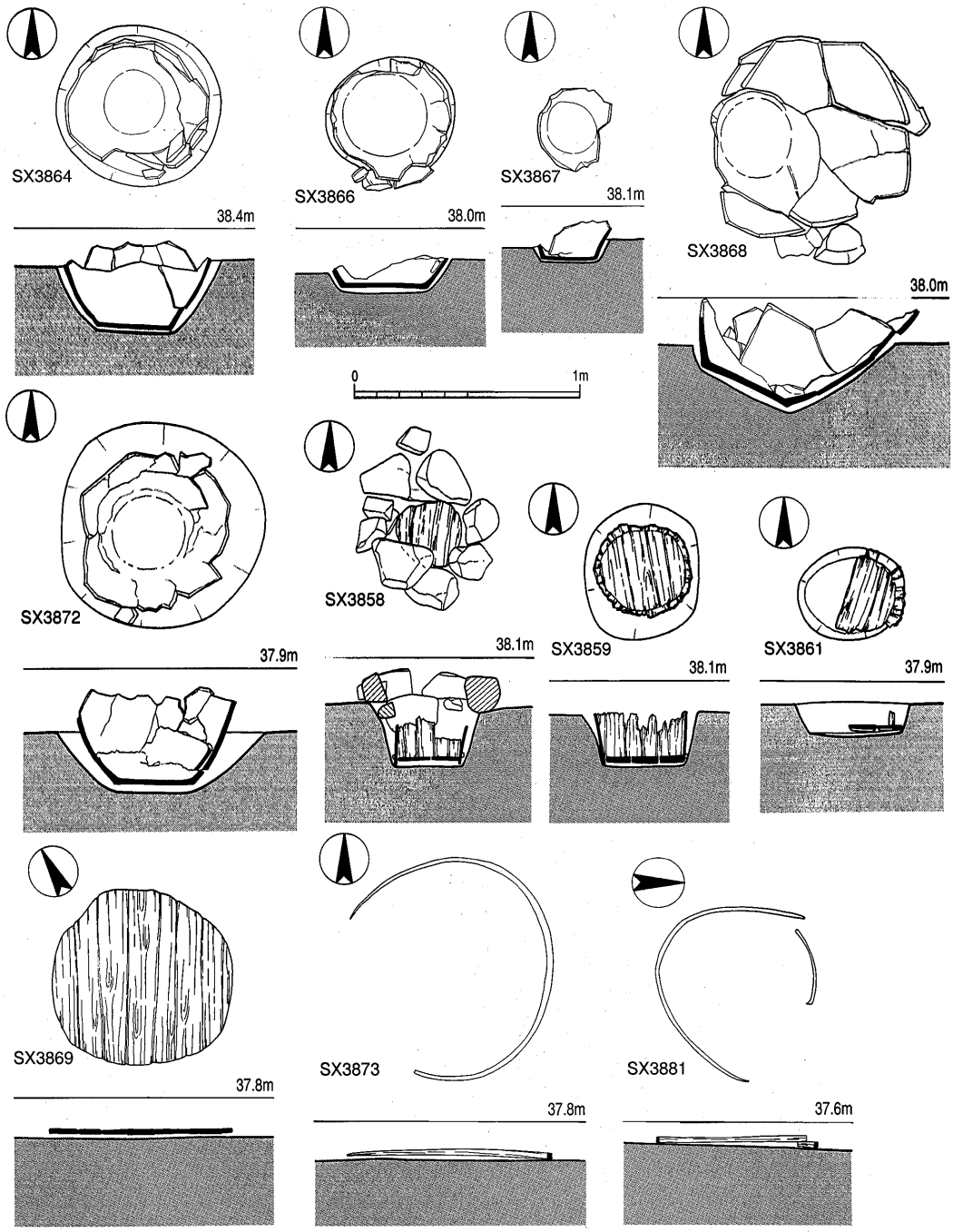


Fig. 91　埋甕・埋桶実測図（1/30）

のと思われる。竪穴内部には梁行１間（２m）×桁行２間（3.52m）規模で，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.15m大の柱穴がある。床面は平坦で，東半部には炭・焼土が厚く堆積していた。形態的に金属製品工房と考えられる。（小田）

7）埋甕・埋桶

埋甕・埋桶は第130次調査西部で検出した上層遺構で，床土除去後に検出した。何れも後世の削平により上半部を失う。埋甕は土師質甕を埋置したもので，埋桶は木桶を埋置したものである。用途としてはトイレ遺構，水溜施設などが考えられよう。便所遺構？

ＳＸ3858（Fig.91）

小型の埋桶で，調査区の中央で検出した。掘方上部に石組を行い，下部に桶を据える構造をなす。桶は径29cm，残高18cmの遺存状況で，底板は４枚。石積は２段数える。

ＳＸ3659（Fig.91）

小型の桶埋で，ＳＸ3858の２m北西で検出した。掘方径50cmで，桶は径40cm，残高22cmを測る。桶側は板材を14枚使用する。底板は４枚である。

ＳＸ3861（Fig.91）

小型の桶埋で，ＳＸ3859の2.8m南西側で検出した。掘方は楕円形を呈し，径50cm。桶は板材を欠損するが，径40cm程になろう。桶側の板材と底板２枚が残る程度であった。

ＳＸ3864（Fig.91，PL.67-1）

中型の埋甕で，調査区の北西部に位置する。掘方径70cm，甕の残高は37cmを測る。底面は水平に近いが，東側に向かって僅かに傾斜している。

ＳＸ3866（Fig.91）

小型の埋甕で，ＳＸ3864の1.6m南に位置する。掘方径56cmで，甕は著しい削平により残存高14cmに過ぎない。底面は水平をなす。

ＳＸ3867（Fig.91，PL.67-2）

小型の埋甕で，ＳＸ3866の5.3m南に位置する。掘方径35cm，甕の残高は17cm。底面は水平。

ＳＸ3868（Fig.91，PL.67-3）

大型の埋甕で，ＳＸ3867の２m南西で検出した。掘方径90cm，甕の残高45cmであった。甕を東側に傾けて埋置している。甕の内部には漆喰状の膠着物がみられた。

ＳＸ3869（Fig.91）

埋甕ＳＸ3868の西隣に並存する。大型の埋桶で，桶の底板のみ残存していた。底板径は80cmで，８枚の板材を使用している。

ＳＸ3872（Fig.91，PL.67-4）

中型の埋甕で，ＳＫ3871の2.5m南西に位置する。掘方径90cm，甕の残高40cmを測る。

ＳＸ3873（Fig.91）

ＳＸ3864の西3.5mに位置する。タガのみ遺存していたが，埋桶と考えられる。タガの径は95cmを測る。

ＳＸ3881（Fig.91）

ＳＸ3866の50cm南側で検出した。当遺構もタガのみの遺存であったが，埋桶であろう。（小田）

8）落　込

S X903

第32-2次調査4 Tr東側で検出した。溝状の落込で，東壁はＳＤ896と接続する。長さ5.2m，幅1.7m，深さ0.3mを測る。

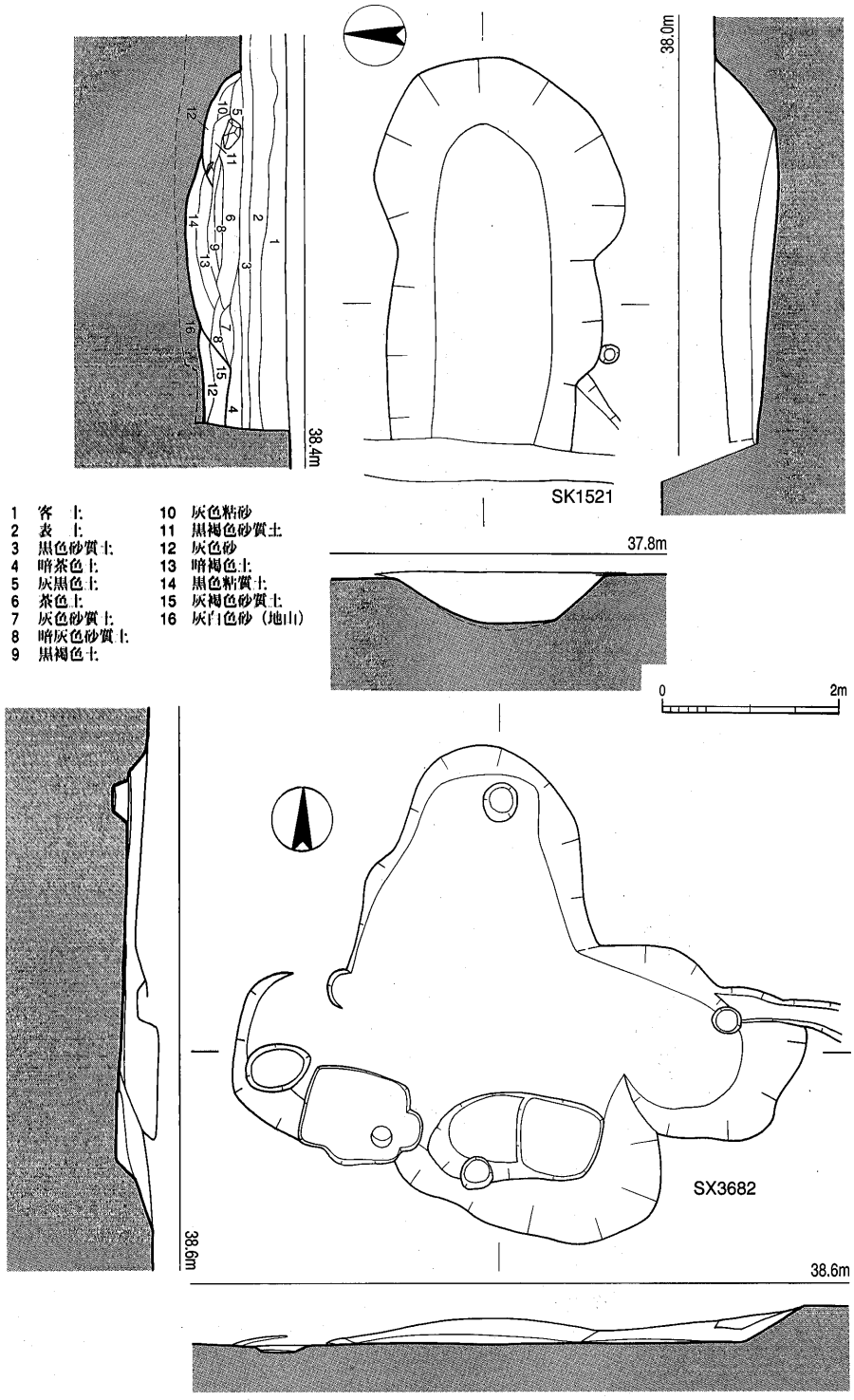


Fig. 92　土坑ＳＫ1521，落込ＳＸ3682実測図（1/80）

S X3210

第109次調査区の北東部で検出した。不整形の落込で，明瞭な掘方を呈するものではない。底面は北側に向かって下がり，深さは0.2mを測る。埋土は黒色土であり，南西隅の埋土中から金銅製如来立像が出土した。

金銅仏の出土

S X3305

第111次調査区の南西部で検出した。溝状を呈し，埋土上面には焼土・炭を多く含む層が4×9mの範囲で広がっており，菩薩形頭部・錫杖などの鋳型が出土した。多数の鋳型を出土したS K3295の西に接する。こうしたことから，この近辺に鋳造遺構が想定される。

仏具類鋳型の出土

S X3310

第111次調査区の南西部で検出した不整形の落込で，S K3268と切り合う。西側は調査区外に延びている。深さは10～20cmと浅い。

S X3313

第111次調査区の南端部で検出した不整形の落込で，南側に下がっている。現状で南北2.1×東西7.3m程の大きさ。

S X3682 (Fig.92)

第122次調査区の南東部で検出した不整形の落込で，S B3660A・Bを切る。南北長5.5m，東西長6.4mで，最も深い箇所で0.4mを測る。

S X3841 (PL.65-1)

第130次調査区北西隅で検出した下層遺構で，東西幅5.2m，深さ1.2m，長さ18mを確認した。埋土下層には灰色砂，最下層には腐植土が堆積しており，自然流路と考えられる。埋土中には古墳時代後期の須恵器が包含されていた。(小田)

自然流路

9）その他の遺構

石　積

S X092 (Fig.24，PL.5-2)

第5次調査区南西隅部で，築地S A091と平行して検出した。20～50cm大の花崗岩自然石を50cm程積み上げたもので，南側を面として揃えている。この石積は第Ⅰ層を切込んで構築しており，築地より後出するものである。

通　路

S X487 (Fig.93，PL.9-4)

第23次調査区下層の北西側で検出した礫敷遺構で，S E480に切られる。北側は調査区外に延び，検出長13.1m，幅1.4mを測り，南端で西側に屈曲する。溝内には5～15cm大の礫を密に敷き詰めており，通路遺構と考えられる。

礫敷通路

S X917 (PL.18-2)

第39-2次4 Tr上層の西側で検出した瓦敷遺構である。南北両側は調査区外に延びる。10cmの瓦片を1.2m幅で敷いているが，疎らであった。通路遺構になるか。

石　列

S X3341

第115次調査南区の南西側で検出した。南北方向の石列で，25～33cm大の花崗岩自然石５個を長さ1.4m並べており，西側に面を揃えている。どういった性格かは判らない。

ＳＸ3662（PL.56-1）

第122次調査区の北東で検出した。ＳＤ3666が完全に埋没した後に構築している。南北方向の石列で，長さ2.9mを確認したが，南側２個は軸からずれている。石材は20×30cm大の花崗岩角礫で，西側に面を揃える。石列と関連する遺構を検出しておらず，性格は不詳。

採土穴

ＳＸ3856（PL.66-3）

土取り穴

第130次調査区の北西部で検出した。当調査区西側から109次調査区東半部にかけては，下層に暗青灰色粘土の堆積層が拡がっており，この粘土を採掘した土取り遺構である。壁面には掘削具の痕跡が鋸歯状に残っており，埋土中からは粘土運搬に用いたとみられる蓆及び笊がそれぞれ１点出土している（PL.64）。

なお，採土遺構は大宰府政庁前面の不丁地区を中心として第58次・73次・83次・84次・86次・87次・131次・134次・156次調査，及び日吉地区の第153次調査でも確認しており，時期的には９世紀代を上限として14世紀代を下限とする。

防空壕

ＳＸ3874（Fig.88）

第130次調査区の北西隅で検出した。長方形を呈し，長さ3.3m，幅1.6m，深さ0.8mの大きさである。北面には蹴上高0.3m，踏面幅0.5mのテラスを１段設け，入口部としている。床面の壁際には30cm前後の方形柱穴を0.5～0.6m間隔で巡らせており，屋根を支える角柱の痕跡とみられ，半地下式の防空壕と考えられる。なお，埋土上層からは「昭和15年」銘の一銭銅貨１点と五銭硬貨１点が出土しており，太平洋戦争中に掘削されたものであろう。　（小田）

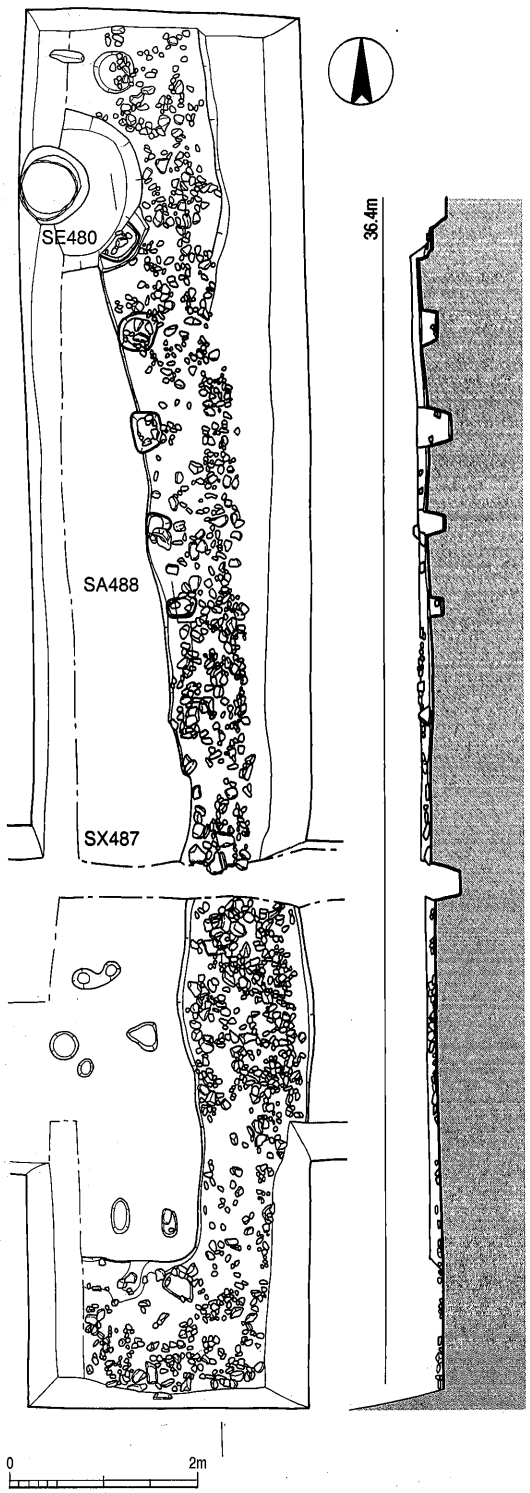


Fig.93　柱列ＳＡ488，通路ＳＸ487実測図（1/80）

註１　横田賢次郎「大宰府検出の井戸」
九州歴史資料館研究論集３　1977

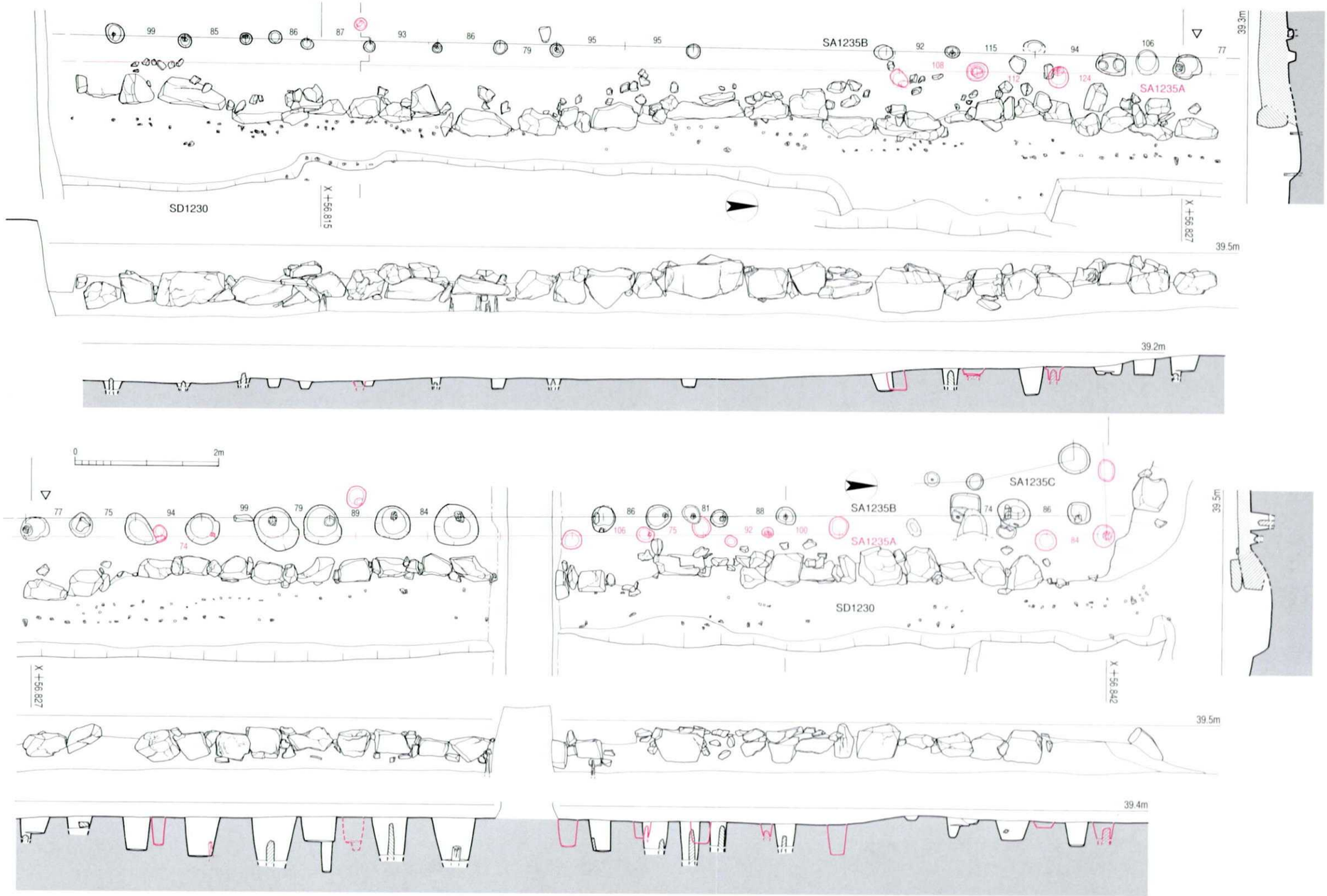


Fig. 94　柵ＳＡ1235Ａ～Ｃ，溝ＳＤ1230実測図（1/60）



Fig. 95　柵ＳＡ1235Ａ・Ｃ実測図（1/60）

(2) 東辺域

東辺域の調査としては，大宰府史跡第20次・45次・47次・66次・119次・121次調査がある。第45次・119次・121次調査は観世音寺の解明を目的とした計画調査であるが，他は現状変更(住宅改築等)に伴う確認調査として実施した。なお，第66次調査では顕著な遺構が検出されなかったので，「Ⅱ調査の概要」の項でふれるに留めた。

1) 柵

ＳＡ1235Ａ・Ｂ・Ｃ (Fig.94・95，PL.74-1·2·4)

第45次・119次調査北区で検出した。溝ＳＤ1230と併走して設けられている。前回の報告では，新旧二時期と報告していたが，図面の詳細な検討の結果，三時期あることが判明し，古期をＳＡ1230Ａ，新期をＳＡ1230Ｂ，最新期をＳＡ1230Ｃとした。ＳＡ1230Ａは溝肩に近接するもので，東西長25.5m，南北長19mを確認した。柱穴は径0.2～0.3m，深さ0.3～0.7mで，柱間0.9mを測る。古期のものには柱根が良好な状態で遺存している。

ＳＡ1230ＢはＳＡ1230Ａの0.3m西側に設けられたもので，南北長17.5mを確認した。柱穴は径0.3～0.6m，深さ0.4～0.6m，柱間は0.9～1.1mの間隔を測る。

ＳＡ1230Ｃは東西方向の柵で，ＳＡ1230Ａの0.3m南側に位置する。径0.3～0.5mで，深さが15cmと浅いことからＳＡ1230Ｂとは別物で，東西長16m分検出した。柵の内側には建物・井戸・土坑などの遺構が密集しており，柵で囲まれた狭い範囲に故意に隔離した感がある。

ＳＤ1230に併う柵

ＳＡ1271 (Fig.96)

第45次調査区の西端に位置し，柱穴６個が南北方向に並ぶもので，11.7m分検出した。柱穴は径0.3～0.4m，深さ0.1～0.15mで，柱間は1.78～3.4mを測る。溝ＳＤ1233と併走していることから両者の関連が窺われる。

ＳＡ1272 (Fig.96)

第45次調査区の西端に位置し，ＳＤ1236と重複する。径20～30cm大，深さ10cm前後の柱穴７個が10～35cm間隔で南北方向に並んでいる。溝の北端部のみに集中し，長さ３mを測る。

ＳＡ1352 (Fig.97)

第47次調査区の中央に位置する東西方向の柵で，ＳＡ1353を切っている。３間以上（６m）検出したが，東西両端は調査区外に延びる。柱穴は径0.3mの円形を呈し，深さ0.3m前後を測る。柱間は東側から1.95m，2.06m，1.64mとばらつきがある。底部に偏平な石を据え礎盤としている。ＳＢ1350とは柱筋・方向を等しくすることから，同建物に関連するとみられる。

ＳＡ1353 (Fig.97)

ＳＡ1352のやや北側を東西方向に走る柵で，４間以上（8.1m）検出したが，東西両端は調査区外に延びる。柱穴は径0.2～0.3mの円形を呈し，深さ0.1～0.3mを測る。柱間は1.95mとほぼ等間である。ＳＡ1352同様，底部に偏平な石を据え礎盤としている。主軸方位は北から西に86度振っている。

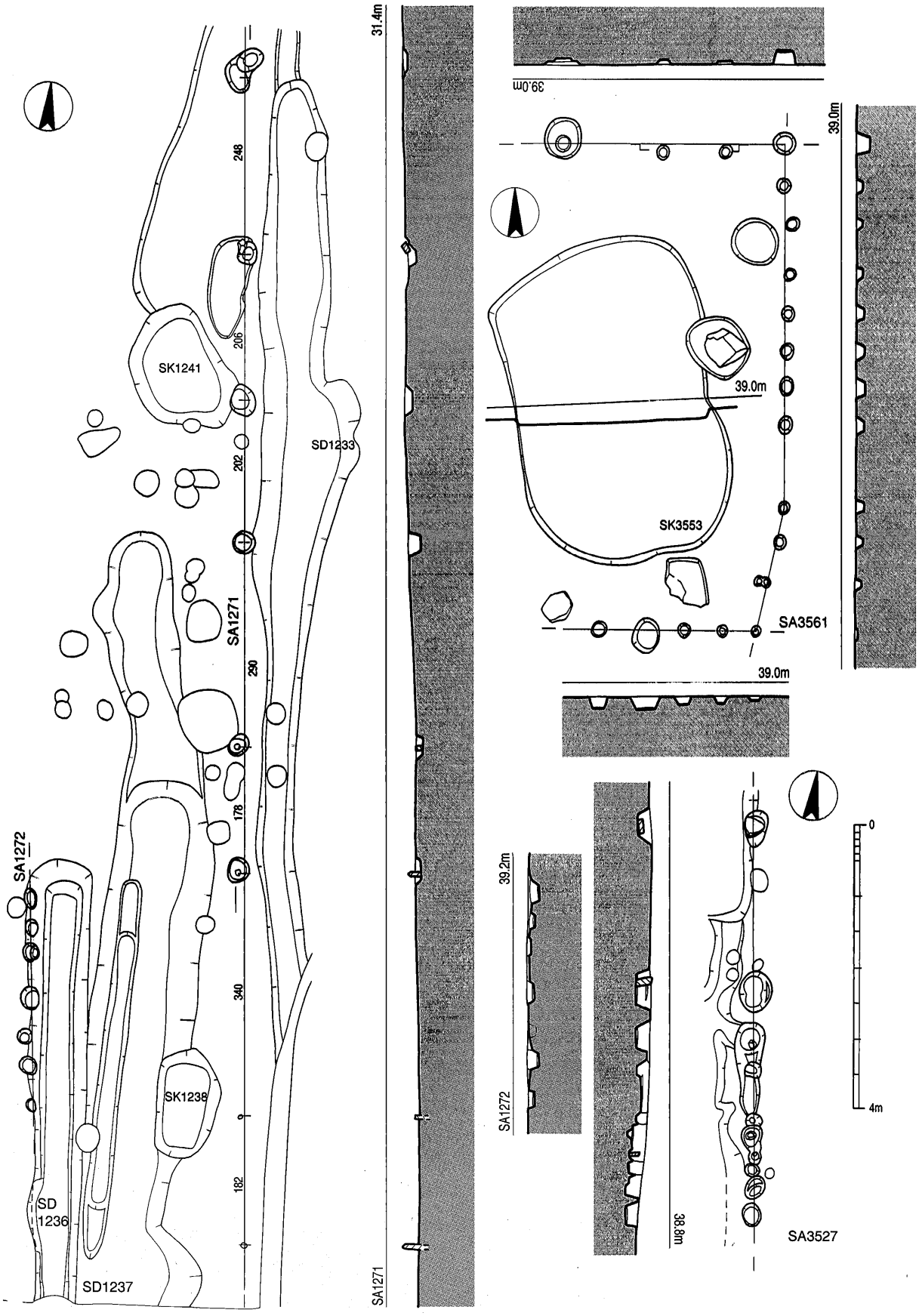


Fig. 96　東辺域柵実測図①（1/80）

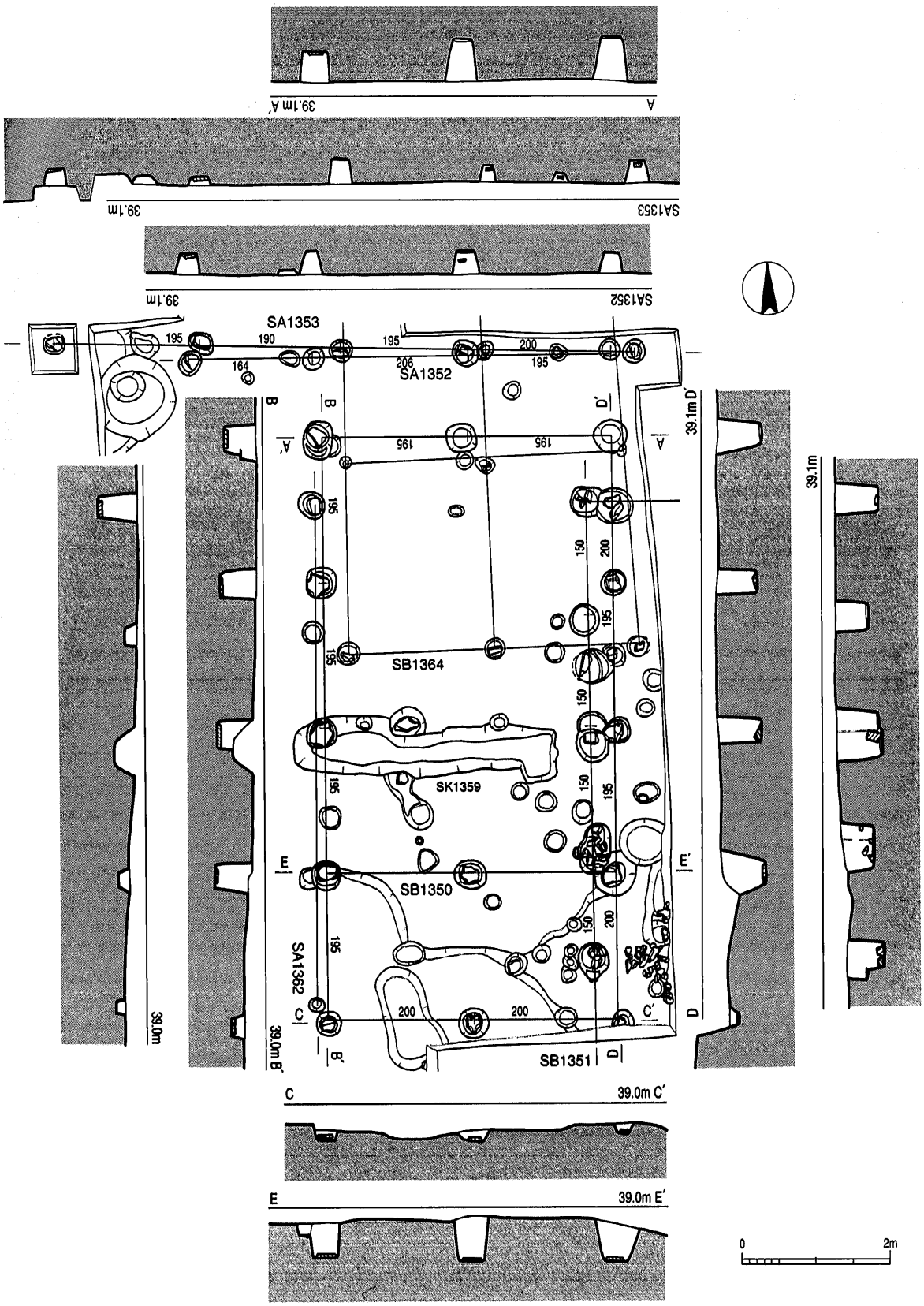


Fig. 97 東辺域柵実測図② (1/80)

ＳＡ1362（Fig.97）

ＳＢ1350の西側柱列と重複して検出した。前後関係は，建物が柵を切っている。４間分（７m）確認したが，もう１間分南側に延びる可能性がある。柱穴は径0.18～0.34mの円形を呈し，深さ0.2～0.5mを測る。北端の柱穴のみ礎盤を有し，深さも0.5mとしっかりしていた。ＳＢ1351と軸を等しくすることから同建物の目隠塀的役割が考えられる。

目　隠　塀

ＳＡ3527（Fig.96, PL.94-1）

第119次調査北区の南側で検出した。柱穴が７個ばかり連続するもので，中には柱根が遺存しているものがあった。柱穴は径20～30cmを測り，柱間は0.5～１mの間隔であった。方位は北から西に９度振っている。

ＳＡ3561（Fig.96, PL.93-2）

ＳＡ3527の３m西側で検出した上層遺構。径10cm程の小ピットが「コ」字形に巡るもので，その中に位置するＳＫ3553との関連が窺われる。柱間は0.25～0.45mの間隔で，密に並んでいる。土坑及び柵の性格は不明。

ＳＡ3567（Fig.107）

第119次調査北区の西側で検出した。Ｌ字形の柵で，柱穴は径0.2～0.3cm，深さ0.2cm。柱根が一部遺存しており，柱間は0.6m間隔を測る。柵の南側にＳＢ3568が存在することから建物の目隠塀と考えられる

目　隠　塀

ＳＡ3621（Fig.98）

第121次調査区の南端に位置する南北方向の柵で，ＳＢ3610と重複し，ＳＢ3626に切られる。前回の報告では，２間分を確認したと報告したが，図面検討の結果，３間以上になるものと判断した。柱掘方は一辺0.8m程の隅丸方形ないしは長方形を呈し，残りの良いもので深さ0.6mを測る。柱間は北側から3.1m,2.96m,2.9mを測る。主軸方位は東に３度振っている。

ＳＡ3622（Fig.99，PL.103-2）

ＳＢ3610の４m北側に位置する東西方向の柵で，ＳＤ3630・3637に切られる。東端部には築地塀ＳＡ3625が存在するため，それより東側には延びないものと考えられる。前回は４間分確認したと報告していたが，５間分と訂正する。柱掘方は隅丸方形を呈し，一辺0.6～0.9m，深さ0.3～0.5mを測る。西側２個に柱痕が遺存し，径0.3m，柱間2.56mの間隔。

ＳＡ3623（Fig.99，PL.103-2）

ＳＡ3622とほぼ平行してそれの3.2m北側で検出した。６間分検出したが，もう数間東西方向に延びるものと思われる。柱掘方は隅丸方形を主体とし，一辺0.4～0.7mの大きさ。深さは削平により，0.1～0.3mと浅めであった。また，柱痕が遺存していないため正確な柱間は測り得ないが，底面中央で1.64～2.18mの間隔である。

ＳＡ3624（Fig.98）

ＳＡ3623の４m北側に位置する南北方向の柵で，ＳＩ3638を切り，ＳＤ3649及びＳＫ3644に切られる。柱掘方６個を検出したが，途中，溝・土坑に切られるため７間以上の柵になる。柱掘方は一辺0.7mの隅丸方形を呈し，掘方の底面は南側に下がっている。柱痕が遺存していないため柱間は測り得ない。主軸方位は東に１度振っている。

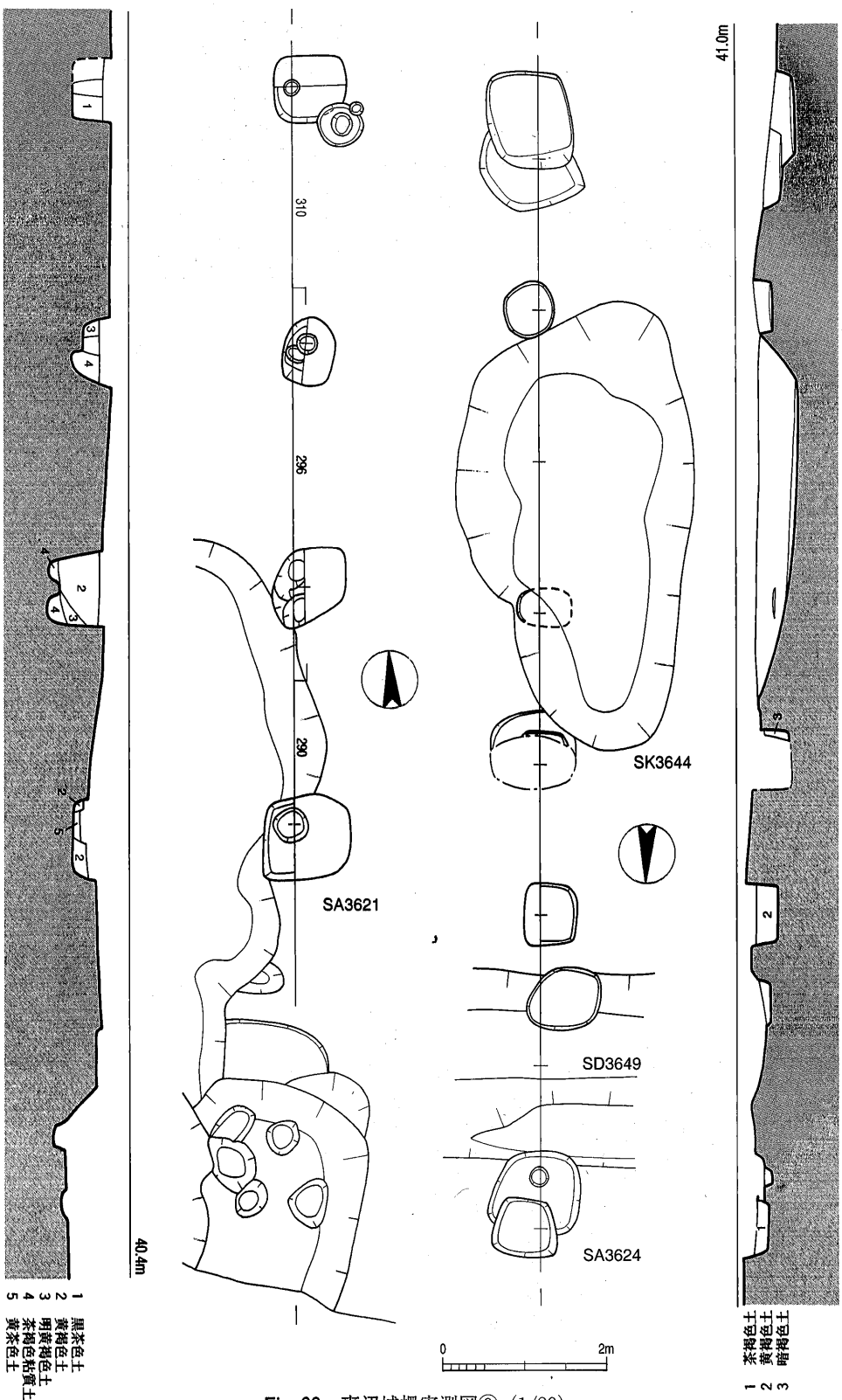


Fig. 98 東辺域柵実測図③ (1/80)

S A 3625 (Fig. 100, PL. 103-3)

第121次調査区の東端に位置する南北方向の柵で，長さ30.1m分を検出した。S D3630に切られ著しい削平を受けるが，柱掘方12個を確認した。柱掘方は方形を呈し，一辺0.5m程の大きさで，深さは0.3m前後である。柱痕が残っていないため正確な柱間は不明であるが，掘方

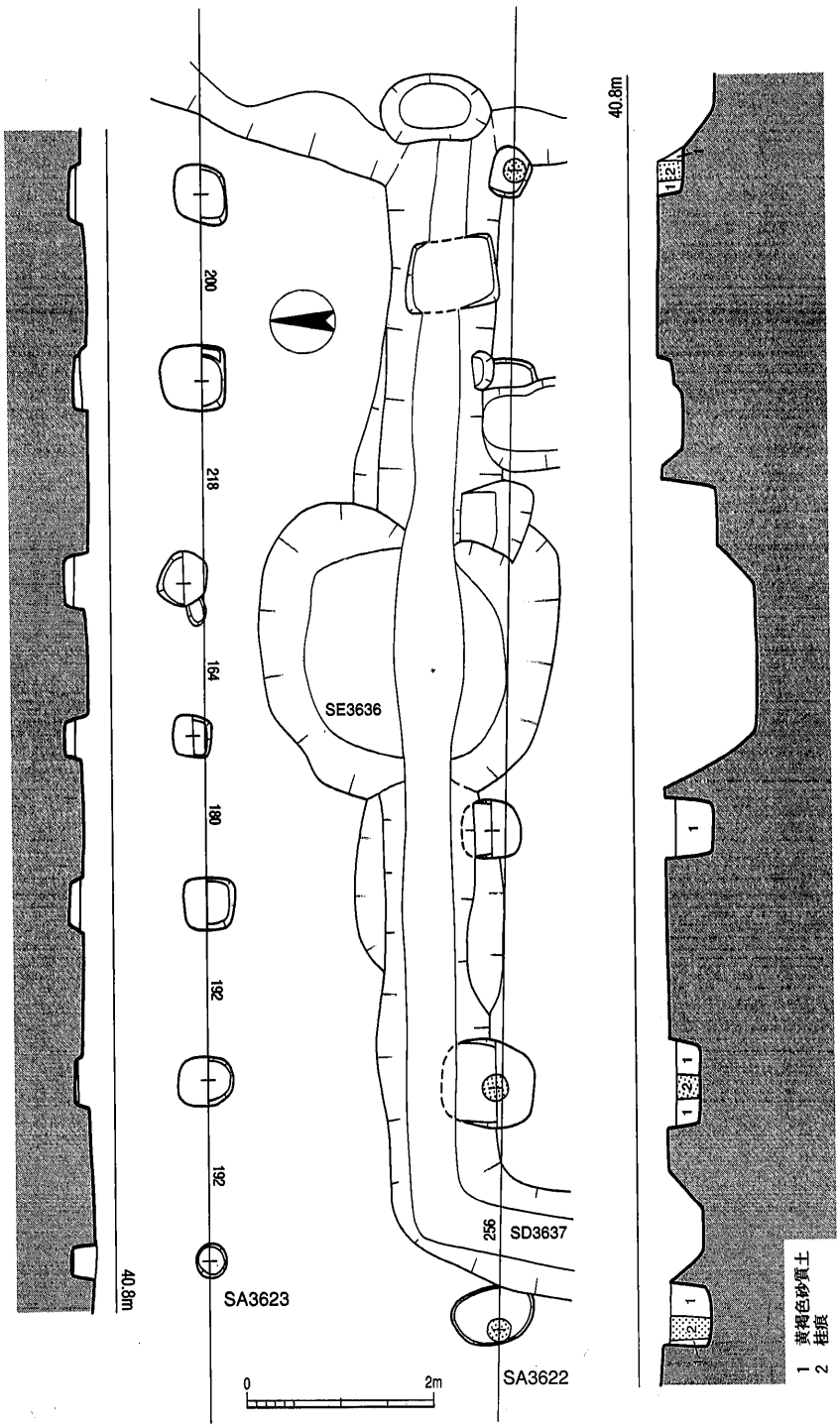


Fig. 99　東辺域柵実測図④（1/80）

ＳＡ3625は板塀

心々で３～3.2mの間隔を測る。また，第45次調査でもＳＡ3625の南端柱掘方から35.9m南側で方形の柱穴を検出しており，一連の柵と考えられる。ＳＡ3625は観世音寺推定中軸線から東に84.8mの箇所にあり，この距離は『資財帳』でいう南辺築地57丈（171m）の半分の距離85.5mに近似する数値である。（小田）

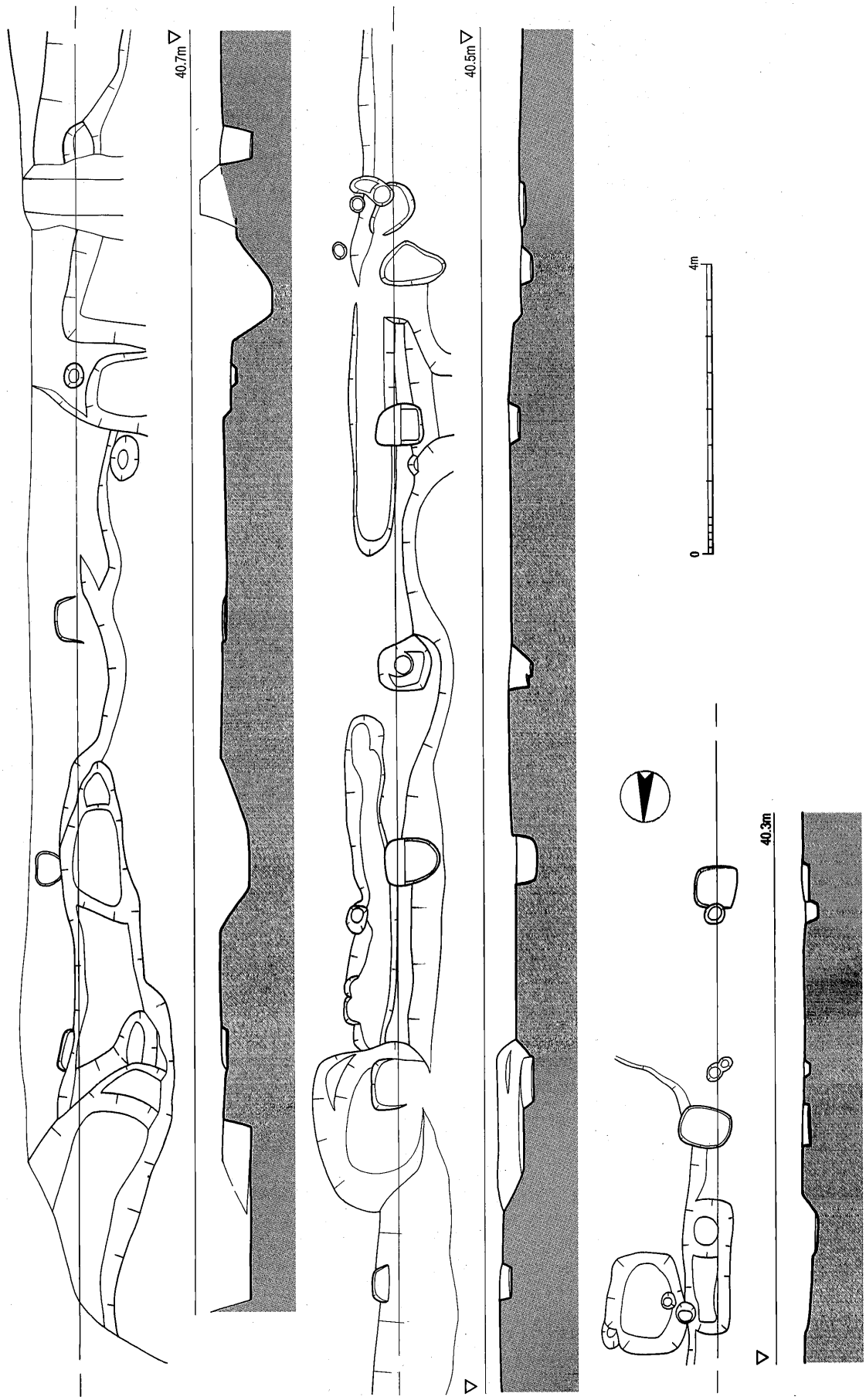


Fig. 100 築地ＳＡ3625実測図（1/80）

2）建　物

各次調査において建物を検出しているが，第45・119次調査区においては柱穴が蝟集しているため建物として確実なものを図示するに留めた。

ＳＢ1240Ａ・Ｂ（Fig. 95，PL. 76-2）

ＳＡ1235に伴う門建物

第45次調査区の北部で検出した東西１間分の礎石建物である。それぞれＳＡ1235Ａ・ＳＡ1235Ｂに伴い，門的な機能を持つと考えられる。ＳＢ1240Ａが旧期で，新期のＳＢ1240Ｂは礎石位置を0.6m程南側にずらしている。前者は70cm×40cmと50cm×35cmの扁平な石材を礎石として使用している。礎石の心々距離は3.2mを測る。後者は西側の掘方内に40cm×25cmの礎石が残るが，東側については根石のみしか遺存していなかった。礎石の心々距離は3.2mを測る。（吉村）

ＳＢ1250（Fig. 101，PL. 76-1）

第45次調査区の北東隅に位置する掘立柱建物で，ＳＫ1265を切り，ＳＤ1230・ＳＫ1211に切られる。前回は，２×３間の総柱建物と報告していたが，図面検討の結果，ＳＤ1230に切られ

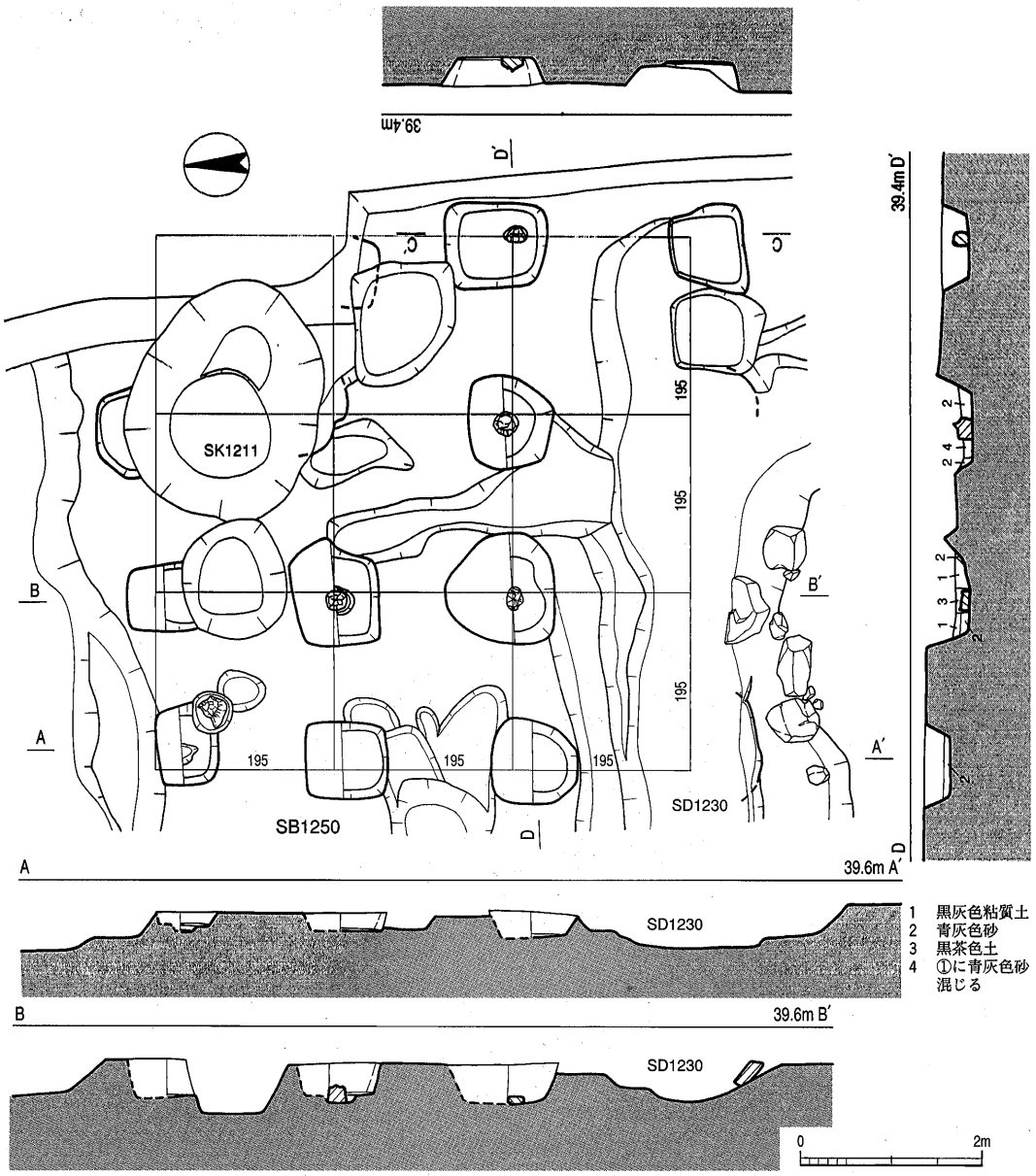


Fig. 101　東辺域建物実測図①（1/80）

る格好で南東隅柱の掘方が遺存しているので，梁行・桁行とも３間（5.85m）の総柱建物とした。ただ，建物の東側は調査区外であるため，もう１間分柱掘方が存在する可能性があり，或いは梁行３間×桁行４間規模になるかもしれない。

柱掘方は0.9～1.1mの隅丸方形を主体とし，深さ0.4m程を測る。また，４個の掘方に径30cm足らずの柱根が遺存しており，柱根をもとに柱間を復原すると1.95m等間となる。梁行方位は東に２度30分振っている。

ＳＢ1275（Fig.102）

第45次調査区の東側に位置し，ＳＢ1276と重複する掘立柱建物で，梁行１間（1.98m）×桁行２間（3.69m）の東西棟建物とした。柱穴は径0.3～0.5m，深さ0.2mを測る。桁行の柱間は東側が1.64m，西側が2.05mと西側が広くなっている。梁行方位は西に５度振っており，ＳＡ1230Ａの東西柱列と方位を等しくする。

ＳＢ1276（Fig.102）

ＳＢ1275と重複して位置し，ＳＥ1183・1184に切られる。南側柱穴２個は井戸に切られ失うが，梁行２間（3.7m）×桁行２間（3.76m）の総柱建物として復原した。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。柱間は等間ではなく，ばらつきがある。西側の梁行方位は東に７度振っている。

ＳＢ1296（Fig.102）

第45次調査区の北西側に位置し，ＳＥ1201と重複する掘立柱建物である。また，南側柱列は南東の隅柱を検出したのみで，他の柱穴は土層観察ベルトの下に潜る。梁行２間（2.8m）×桁行３間（5.22m）の東西棟建物である。柱穴は円形で，径0.24～0.4m，深さ0.2m前後を測る。東梁行方位は西に７度振っている。桁行はＳＡ1230Ａの東西柱列と方位を等しくする。

ＳＢ1315（Fig.103）

ＳＢ1317の１m西隣に位置し，ＳＥ1193・1197・1198・1199，ＳＫ1216・1249・1251・1270と重複するが，当建物が先行する。梁行３間（７m）×桁行５間（10.6m）の東西棟建物で，梁行方位はＳＡ1230Ａの南北柱列と同じくする。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.3m前後を測る。西梁行方位は西に２度振っている。

ＳＢ1316（Fig.102）

ＳＢ1276の４m南側で検出した掘立柱建物で，ＳＥ1202に切られ，ＳＢ1317と重複する。梁行２間（3.62m）×桁行３間（5.92m）の東西棟建物である。柱穴は円形を呈し，径0.34～0.42m，深さ0.4m前後を測る。桁行の柱間は1.74～2.64mとばらつきがみられる。西梁行方位は東に２度振っている。柱筋はＳＡ1230Ａに揃えている。

ＳＢ1317（Fig.102）

ＳＢ1316，ＳＥ1182・1202と重複して位置し，ＳＫ1213に切られる。南北棟建物で，梁行３間（6.48m）×桁行４間（8.68m）の規模を有する。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.64m，深さ0.4m前後を測る。柱間は梁行が1.7～2.64m，桁行が1.82～2.7mを測り，ばらつきがある。東桁行方位は東に４度30分振っている。

ＳＢ1318（Fig.103）

ＳＢ1317の1.5m南側に位置する掘立柱建物で，梁行２間（2.62m）×桁行間２（3.74m）

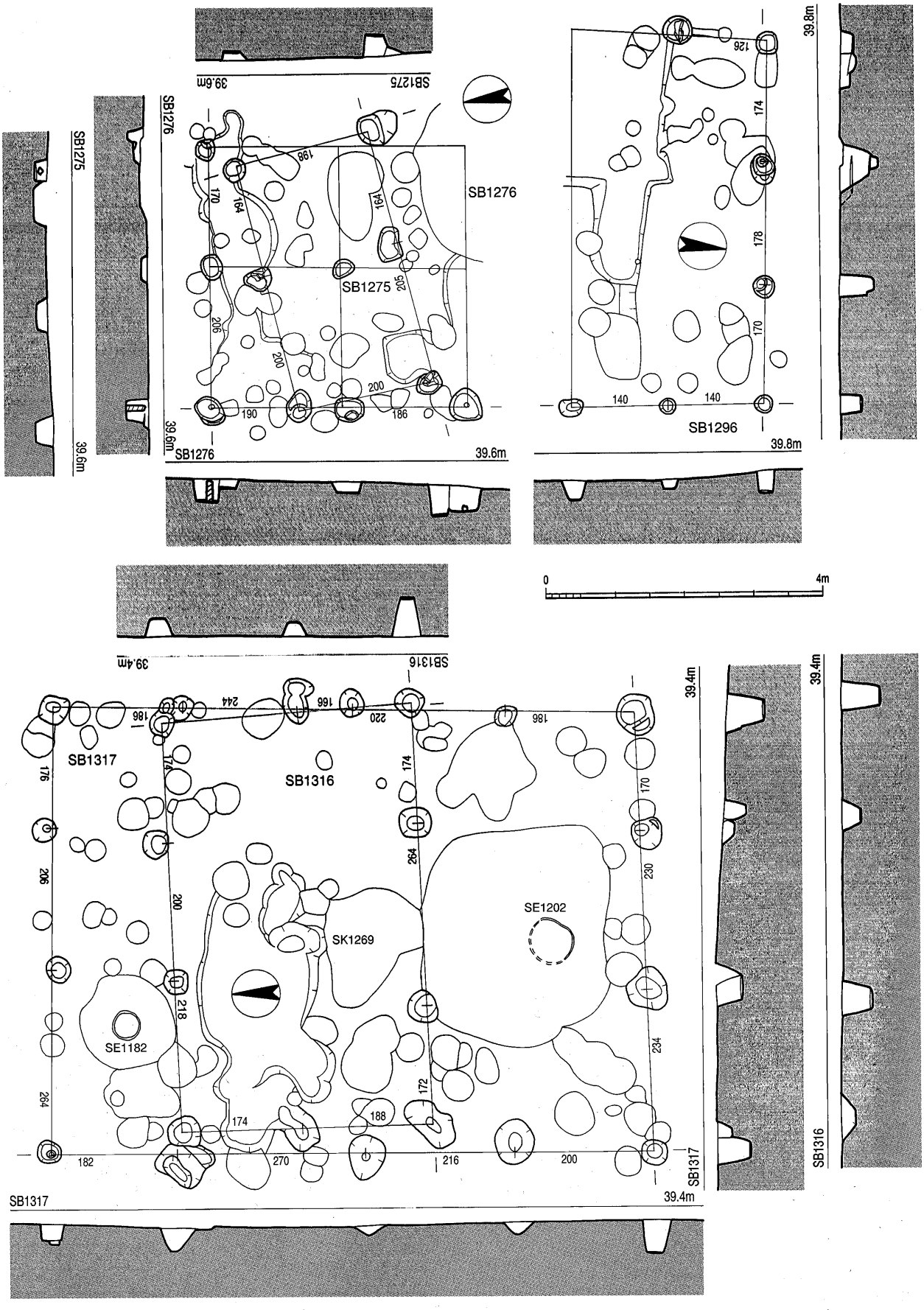


Fig. 102　東辺域建物実測図②（1/80）

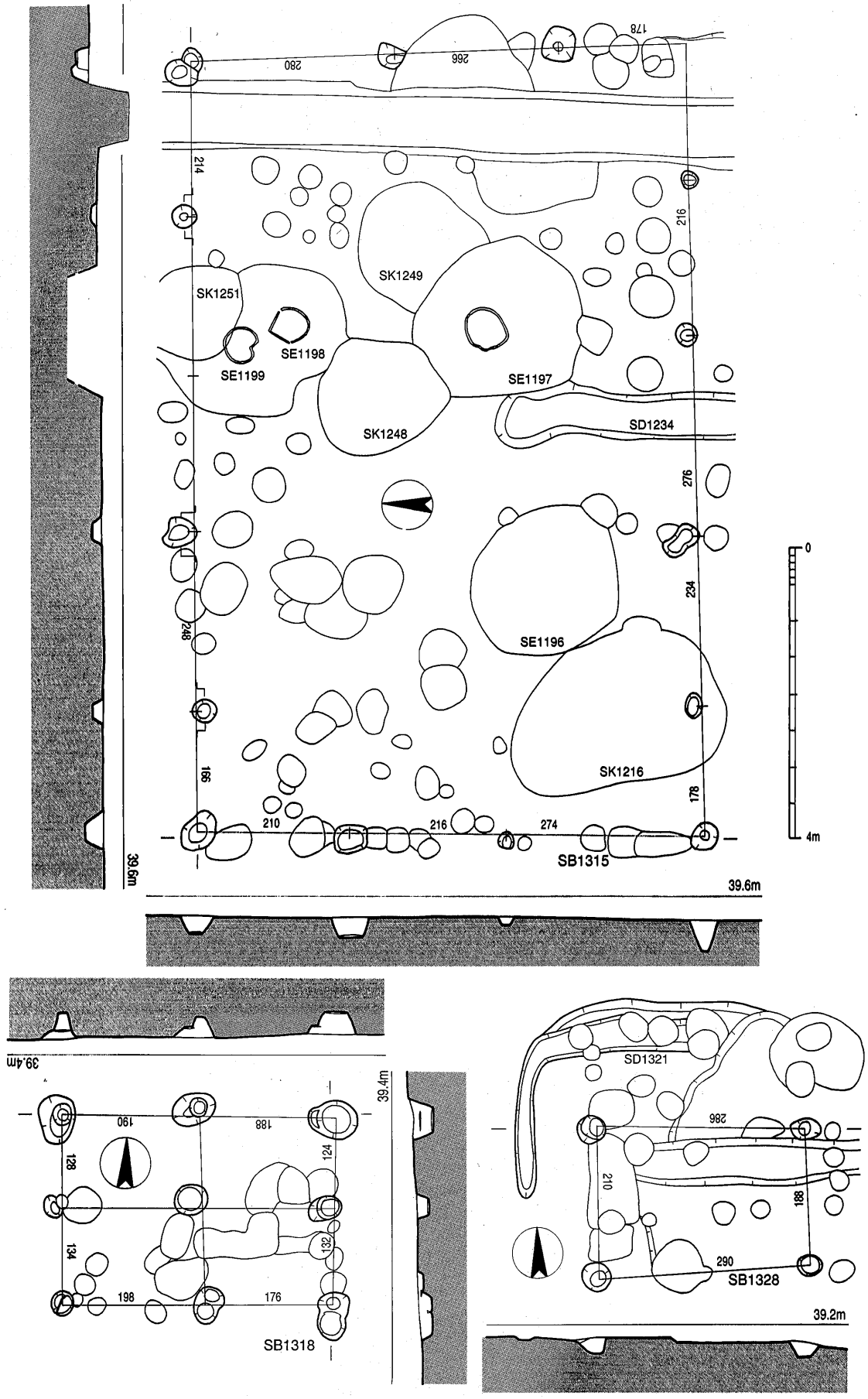


Fig. 103　東辺域建物実測図③（1/80）

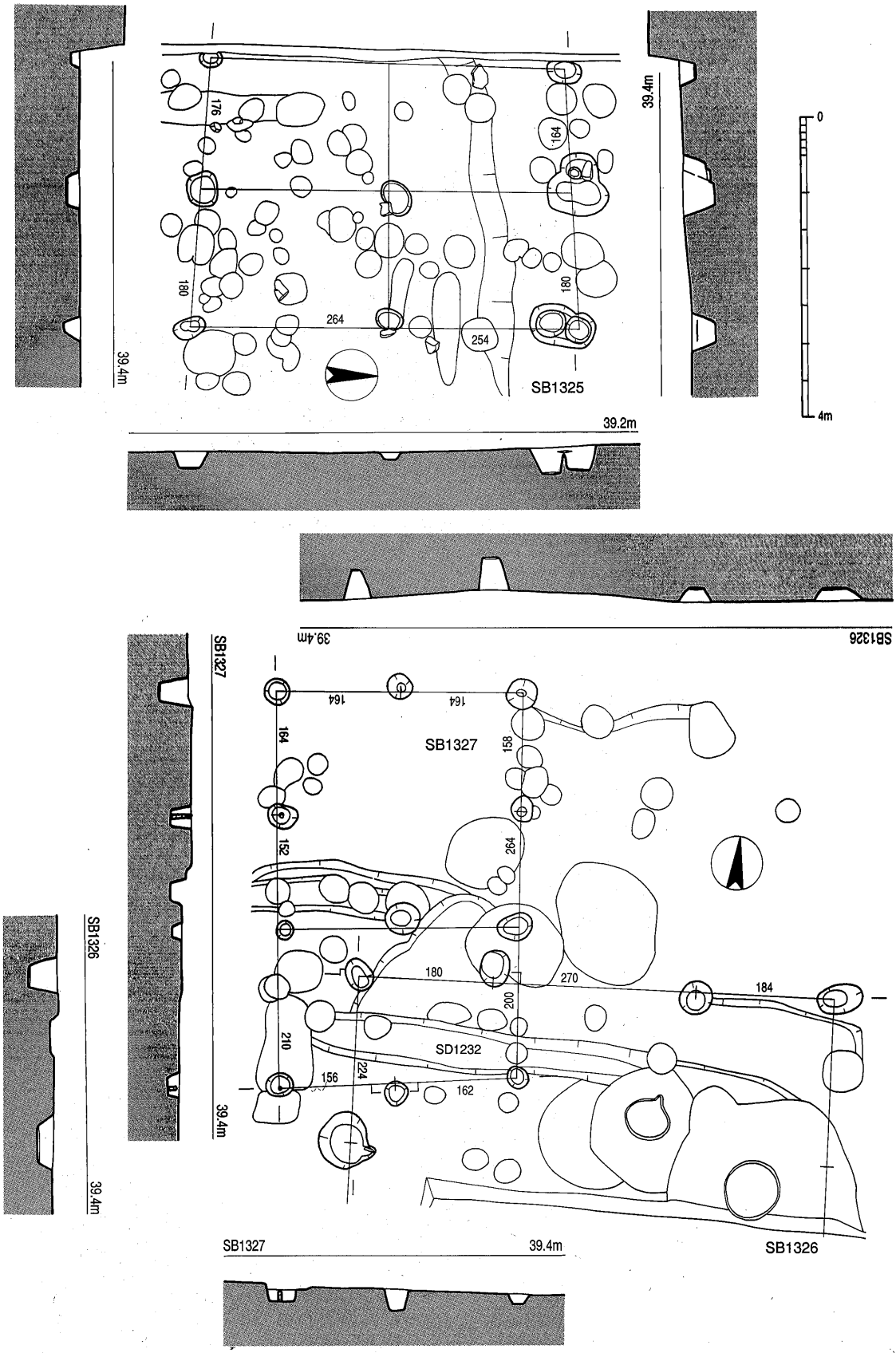


Fig. 104　東辺域建物実測図④（1/80）

の総柱建物として考えた。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.54m，深さ0.3m前後を測る。西側梁行柱筋はＳＢ1315の東側梁行柱列と筋を揃えており，同時存在が考えられる。

ＳＢ1325（Fig.104）

ＳＢ1317の1.5m南側に位置する掘立柱建物で，梁行２間（3.56m）×桁行間２（5.48m）の総柱建物として考えた。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.2m前後を測る。梁行の柱間は1.64～1.8mであるが，桁行の柱間は2.64mと長すぎるきらいがある。東側桁行方位は西に２度振っている。

ＳＢ1326（Fig.104）

第45次調査区の南西側に位置する掘立柱建物で，ＳＢ1327・1328，ＳＥ1188・1189と重複する。南側柱列が積石塚ＳＸ1220の下に潜り込むため全体の規模は不明であるが，柱間が短い南北方向が桁行とすると梁行は３間（6.34m）で，現状で桁行１間以上の南北棟建物となる。梁行の柱間は東から1.84m・2.7m，1.8mの間隔を有する。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.7m，深さ0.2m前後であった。西側の桁行方位は３度西に振っている。

ＳＢ1327（Fig.104）

ＳＢ1326・1328，ＳＤ1231・1232と重複する掘立柱建物である。梁行２間（3.28m）×桁行３間（5.26m）の南北棟建物で，南から１間目に束柱掘方を有する。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2m前後を測る。東桁行方位は西に５度振っている。

束柱掘方

ＳＢ1328（Fig.103）

ＳＢ1326・1327，溝ＳＤ1232と重複する。梁・桁行とも１間で，西側梁行2.1m，南側桁行2.9mを測る。柱穴は円形を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.2m前後を測る。梁行方位は東側に２度振っている。また，建物の１m北側には「コ」字形を呈する小溝ＳＤ1231があり，建物を囲繞していることから両者の関連が窺われる。

ＳＢ1350（Fig.97，PL.71-1）

第47次調査区の南半において検出した。ＳＡ1362・ＳＢ1364と重複し，ＳＢ1351及びＳＫ1359に切られる。前回の報告では，梁行２間×桁行３間の南北棟建物と報告していたが，図面検討の結果，前回報告のＳＢ1355北側柱列を当建物の廂部分とみなし，今回は，梁行２間×桁行３間の身舎の南側柱列に廂を付加した２×４間建物として復原した。

片廂建物

建物規模は身舎で梁行3.9m，桁行5.9mを測る。身舎の柱穴は円形を呈し，径0.3～0.6m，深さ0.6m前後と大きめであるが，それに比して廂部分の３個は小振りで，深さも0.2mと浅めであった。桁行方位は東に２度振っている。

ＳＢ1351（Fig.97）

ＳＢ1350の東側柱列を切って位置する。西側柱列４間分（6.5m）の検出に留まるが，もう１間分南側に延びる可能性を有し，梁行２間×桁行５間の建物規模が想定される。柱穴は隅丸方形に近い円形を呈し，径0.4m，深さ0.4～0.6mを測る。柱間は1.5m等間として復原した。柱穴内には角礫が数個入っており，柱押さえとして入れたものであろう。桁行方位はＳＢ1350と同じく東に２度に振っている。

柱押さえの石

ＳＢ1355（Fig.105）

第47次調査区の南端に位置し，ＳＢ1350・1351と重複するが，前後関係は判然としない。ま

た，建物の南東部は調査区外であるが，一応梁行２間（2.9m）×桁行３間（4.8m）の東西棟建物としておく。柱穴は径0.3m前後の円形を呈し，深さ0.3m程を測る。柱穴内には礎盤を敷いたものや，角礫を入れたものがみられた。柱間は桁側が1.6m等間，梁側が1.45m等間とした。梁行方位は西に４度振っている。

ＳＢ1364（Fig.105）

ＳＡ1352・1353，ＳＢ1350・1351と重複するが，前後関係は明らかでない。当初，梁行１間（2.54m）×桁行２間（3.98m）の東西棟建物としたが，北側柱列の柱穴は小さく，深さも浅めであることから隅柱とはみなし難いため２間×２間の総柱建物と考えた。柱穴は円形を呈し，径0.15～0.3m，深さ0.1～0.3mである。柱穴の底部には偏平な石を据え礎盤としている。桁行方位は東に２度振っている。（小田）

ＳＢ3460（Fig.106，PL.94-1）

第119次調査南区の南側で検出した梁行２間×桁行１間以上の総柱礎石建物である。南側は調査区外となる。礎石は一辺20～40㎝程で，原位置を動いているものもある。柱間は梁・桁行とも２m等間に復原される。

ＳＢ3461（Fig.106，PL.94-2）

第119次調査南区の北西で検出した梁行２間以上×桁行２間以上の建物である。５ヶ所に径10㎝程の柱根が残っており，柱間は梁側が1.52m・1.68m，桁側が1.8m等間に復原される。２間×２間の総柱建物として完結する可能性もある。（吉村）

ＳＢ3551（Fig.107）

第191次調査北区の東側に位置する掘立柱建物である。建物の周囲10m程には井戸・土坑な

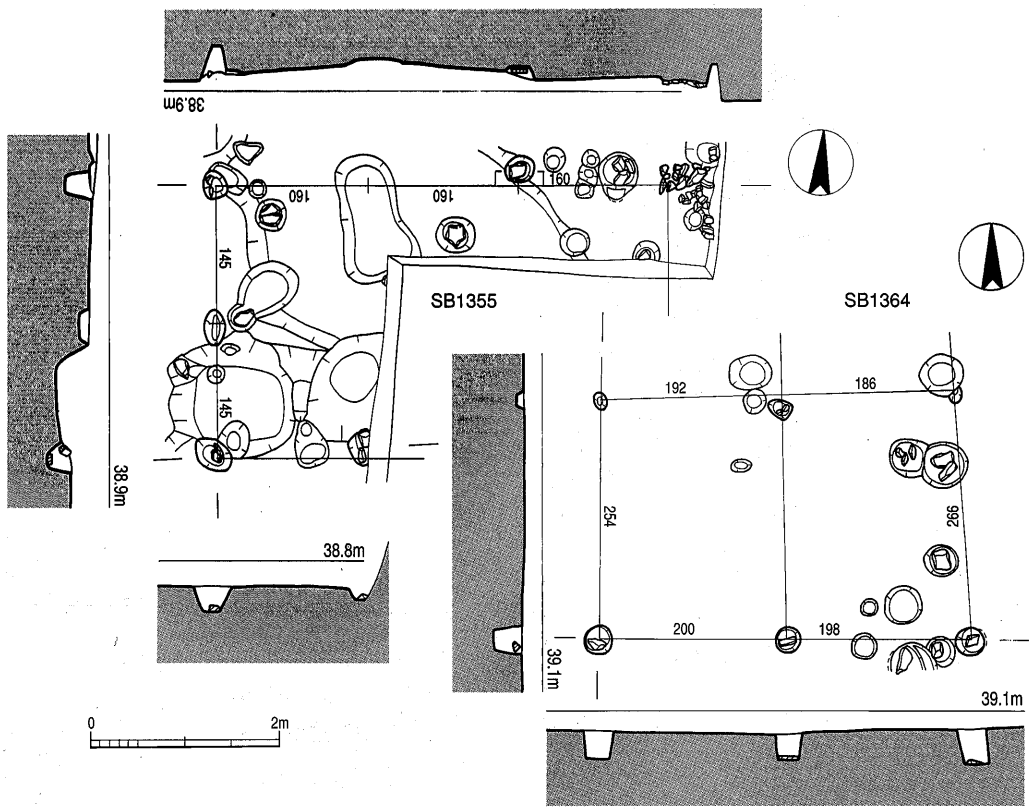


Fig.105　東辺域建物実測図⑤（1/80）

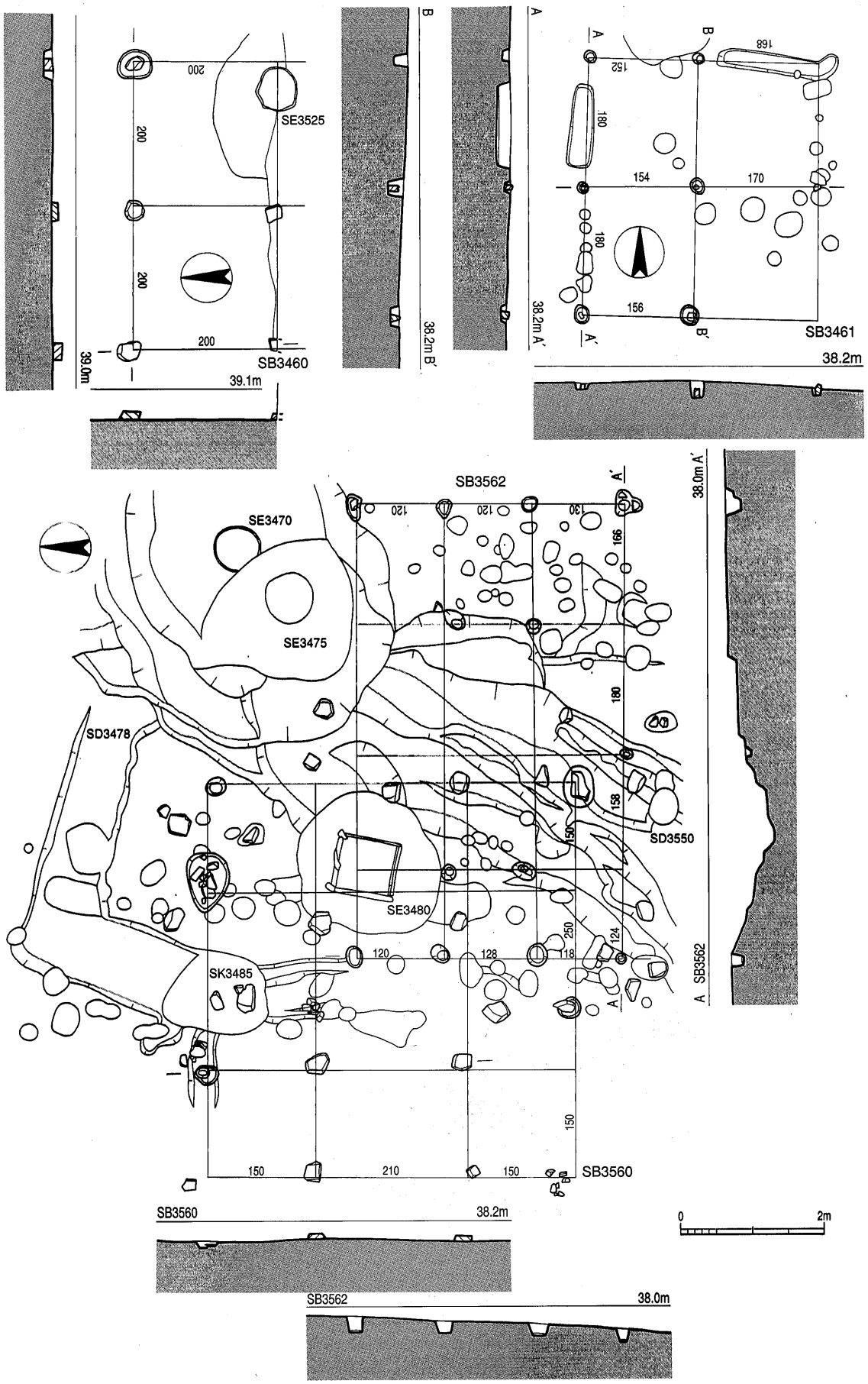


Fig. 106　東辺域建物実測図⑥（1/80）

どの主立った遺構はなく，柱穴が無数に存在している。中でもやや大振りの柱穴を抽出し，ＳＢ3551・3552とした。他にも纏まる柱穴がみられるが，建物としての確証が得られないので上記２棟を提示するに留めた。

ＳＢ3551は梁行２間（4.7m）×桁行３間（5.8m）の南北棟建物で，柱穴は円形を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.2m前後を測る。柱間は梁行側が2.04～2.58m，桁行側が1.54～2.22mで，かなりばらつきがある。東側桁行方位は西に３度振っている。

ＳＢ3552（Fig.107）

SB3551の南側で，同建物と重複して位置する。梁行３間（5.06m）×桁行４間（7.86m）の南北棟建物とした。柱穴は0.4mの円形を呈し，深さ0.2m前後である。柱間は梁行側が1.46～1.94m，桁行側が1.6～2.18mの間隔を測る。東側桁行方位は東に３度振っている。

ＳＢ3560（Fig.106）

第119次調査南区の南西側で検出した上層の礎石建物である。ＳＢ3562，ＳＤ3478・3550，ＳＥ3480と重複するが，当建物が最も新しい。東西３間（5.5m）×南北３間（5.1m）の総柱建物としたが，西側へ延びる可能性がある。礎石には一辺20～30cm大の偏平な割石を用いている。柱間は梁側が1.5m・2.1m・1.5mで，桁側は1.5m,2.5m,1.5mで，中央間が広くなっている。梁行方位は座標北を示す。

ＳＢ3562（Fig.106）

ＳＢ3560の東側に位置し，同建物と重複する掘立柱建物で，ＳＤ3550，ＳＥ3475・3480に切られる。梁行３間（3.7m）×桁行４間（6.34m）の総柱東西棟建物としたが，西端側柱列の柱間が1.24mと他に比して短いことから廂とも考えられる。柱穴は径18～26cmと小さなもので，深さは30cm前後である。梁行方位はＳＢ3560と同じく座標北を示す。

ＳＢ3563（Fig.107）

ＳＢ3460の西側で，同建物と重複して位置するが，層位的には下層の掘立柱建物である。大半が調査区外にあるが，梁行３間（5.12m）×桁行１間以上（1.28m＋α）の南北棟建物とした。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.35m，深さ0.2m前後を測る。

ＳＢ3564（Fig.107）

ＳＢ3563と重複している。柱穴３個を検出したのみであるが，東西及び南北方向へは延びていないことから梁行は２間（４m）となる。調査区内においては，桁側柱穴は検出できなかったので，柱間は1.4m以上有することになる。柱穴は径0.4mの円形で，深さ0.3mを測る。

ＳＢ3565（Fig.107，PL.94-3）

第119次調査北区の西側で検出した上層の掘立柱建物である。梁行間２（1.74m）×桁行３間（2.46m）の小規模な南北棟建物で，柱穴は円形を呈し，径0.22～0.46mで，深さは15cm前後を測る。柱間は0.78～0.98m間隔と非常に狭く，恒常的に起居する建物とは考え難い。

ＳＢ3568（Fig.107）

第119次調査北区の西側で，ＳＡ3567の1.1m南側に位置する。梁行１間（2.4m）×桁行３間（5.34m）の東西棟建物とした。柱穴は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.3m前後を測る。桁行の柱間は東から1.78m・1.84m・1.72mを測る。当建物と平行して位置するＳＡ3567は，建物の目隠塀的な施設と考えられる。

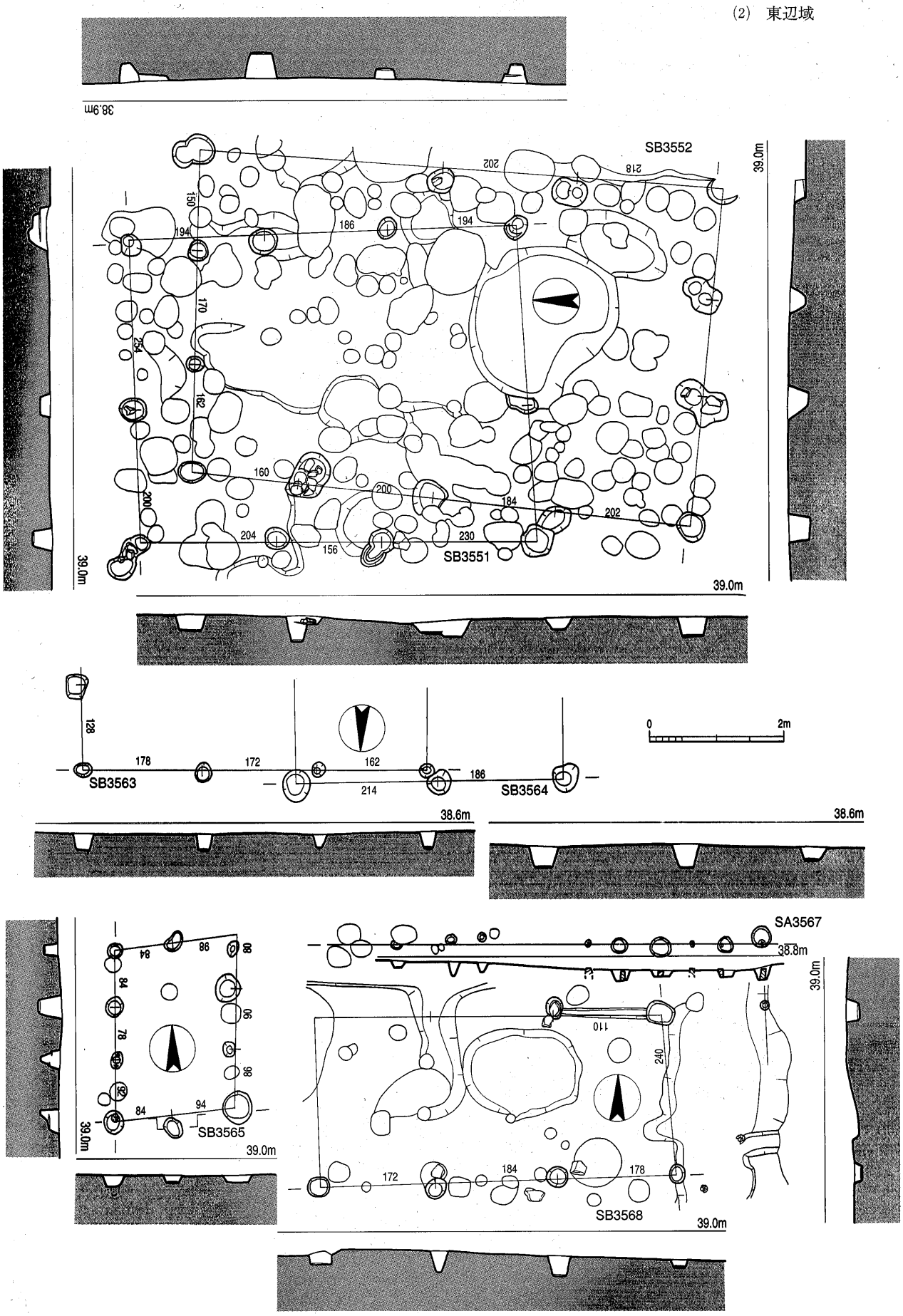


Fig. 107 東辺域建物実測図⑦ (1/80)

ＳＢ3610（Fig. 108，PL. 104-1）

第121次調査区の南側に位置する東西棟の掘立柱建物で，ＳＡ3621・ＳＢ3626と重複するが，柱掘方の小さいＳＢ3636が最も後出する。ＳＤ3630によって建物の東半部を切られるため桁行４間以上の建物であるが，桁行５間だと寸詰まりの感があり，７間だと同時期のＳＡ3625に重複するため，桁行６間としておく。

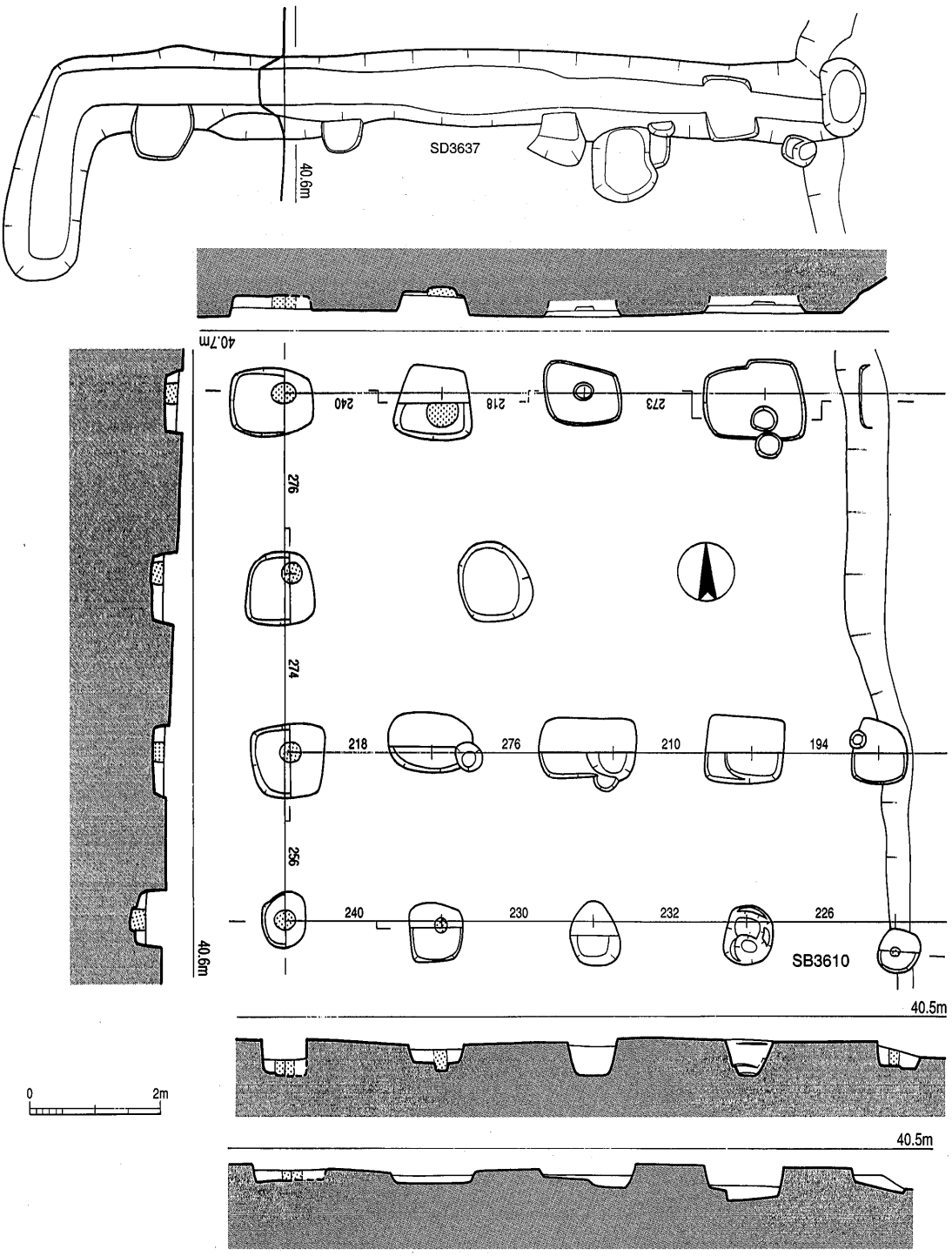


Fig. 108　東辺域建物実測図⑧（1/100）

当建物は梁行２間（5.52m）×桁行６間（14m）の身舎の南側桁行に廂を付加した所謂片廂形式である。身舎部分の柱掘方は方形ないしは長方形を呈し，一辺0.9～1.3mの大きさであるが，廂部分の柱掘方は一辺0.8mと一回り小さい。また，梁行側の掘方では柱痕を検出してお

片廂建物

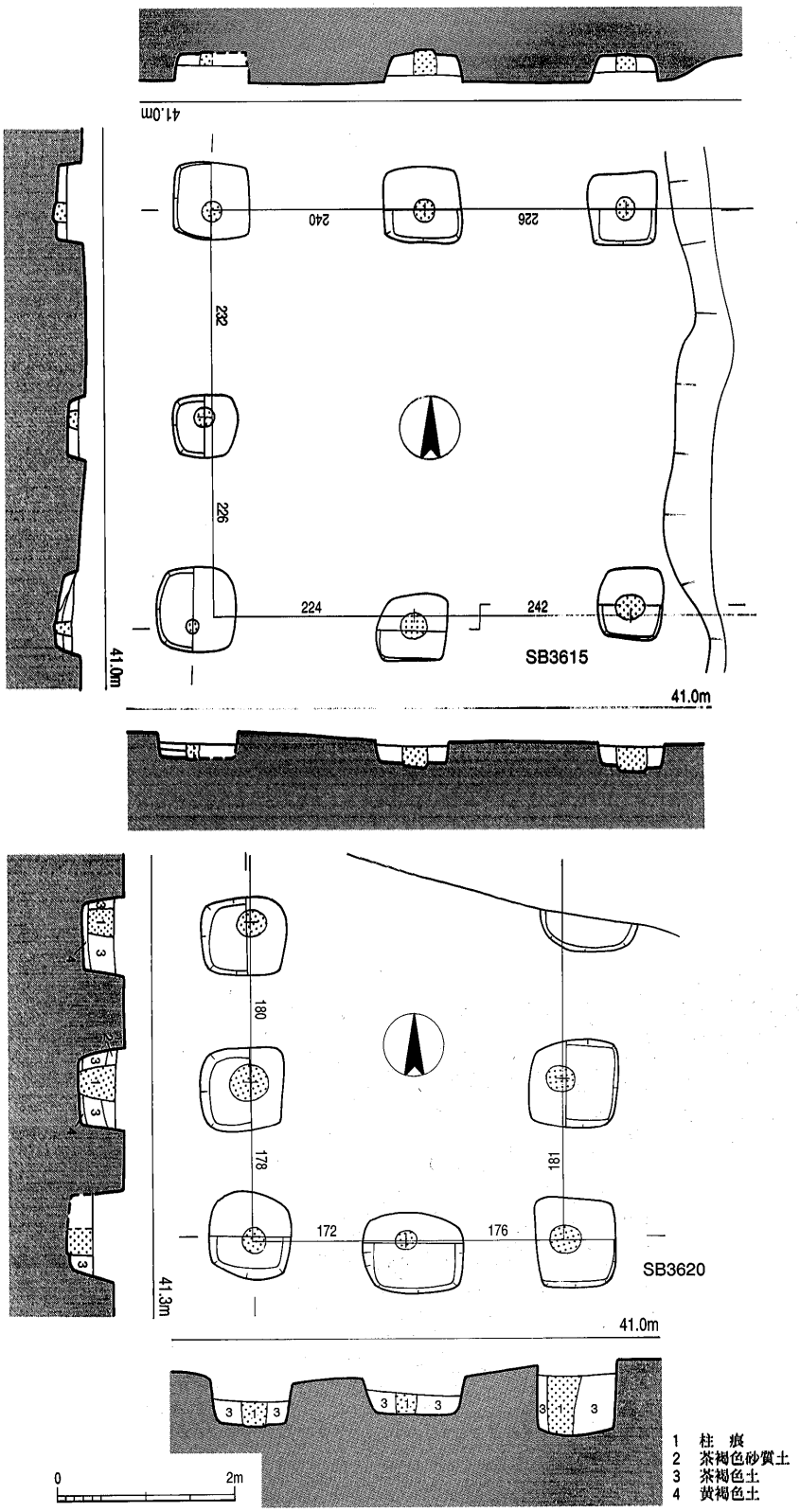


Fig. 109 東辺域建物実測図⑨（1/80）

り，径0.3m前後，柱間2.74m等間を測る。桁行側は柱痕のすべてを確認し得ていないが，2.4m間隔になるか。なお，梁行方位は15分西に振っている。

ＳＢ3615（Fig.109，PL.104-2）

ＳＢ3610の11m北側に位置する東西棟の掘立柱建物で，ＳＩ3638を切り，ＳＤ3630に切られる。また，ＳＢ3641とは重複関係にあるが，ＳＢ3641が後出するものと考えられる。当建物もＳＤ3630によって建物の東半部を切られるため梁行２間（4.58m）×桁行２間以上の建物であるが，ＳＡ3625との位置関係からすると桁行は５間（11.5m）となる。柱掘方は一辺0.7～0.9mの隅丸方形を呈し，30cm前後の柱痕を確認した。柱痕部分が掘方底面より下がっているのは建物の自重によるものであろう。梁行方位は東に30分振っている。

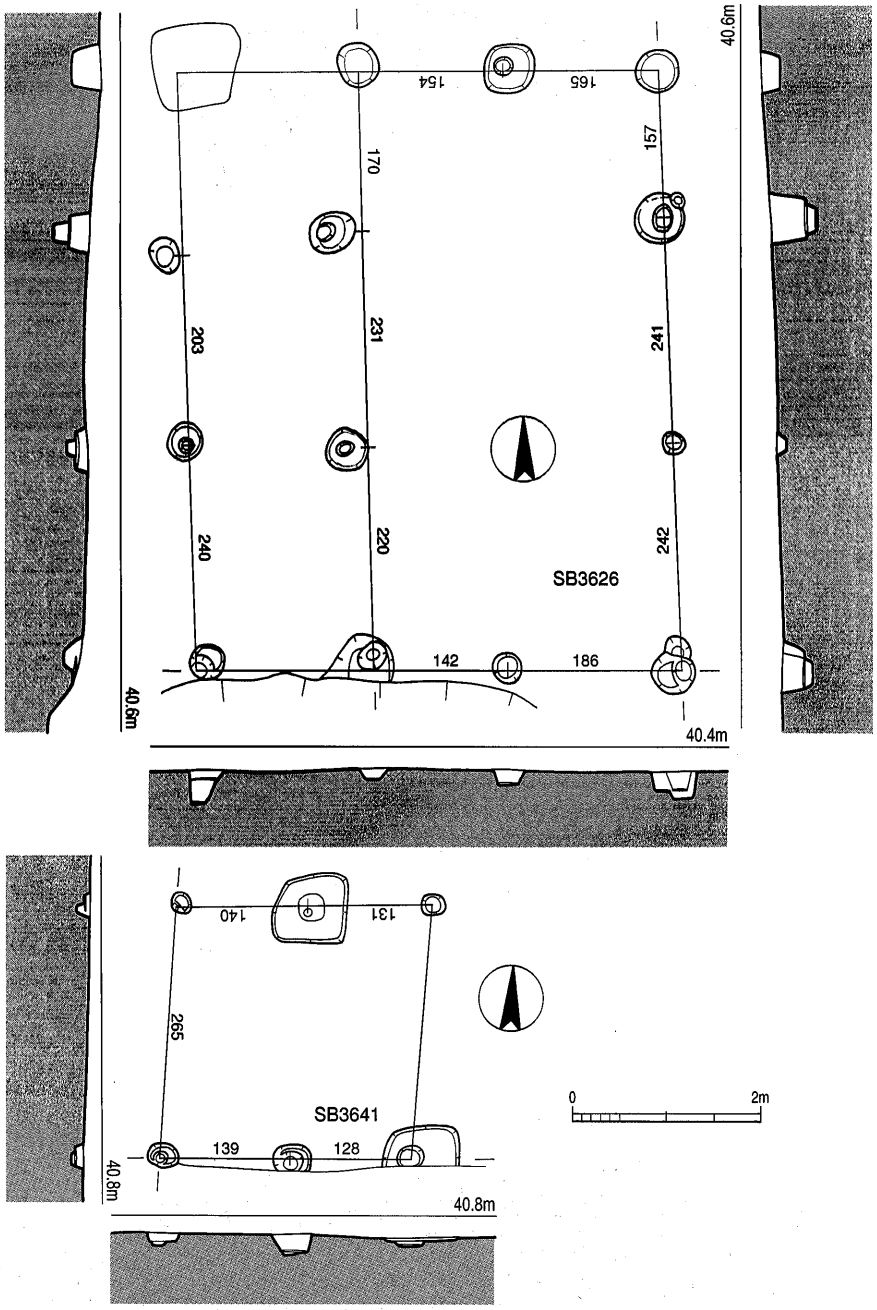


Fig.110　東辺域建物実測図⑩（1/80）

S B 3620 (Fig. 109, PL. 105)

第121次調査区の北端に位置する南北棟の掘立柱建物で，柱掘方は調査区外の北側に延びる。建物規模は梁行２間（3.46m）×桁行２間以上（3.58m）で，柱掘方は隅丸方形を呈し，一辺0.9～1.1m，深さ0.5～0.8mを測る。柱痕は30cm前後であった。また，西側桁行の柱掘方は底面に黄褐色土を突き固め，その上に柱を立てていた。桁行方位は東に15分振っている。

S B 3626 (Fig. 110, PL. 104-1)

S B3610・S A3621と重複し，両者を切っている。前回は当建物の北側梁行柱掘方３間分を東西方向の柵S A3659と報告していたが，今回は掘立柱形式の片廂建物と訂正する。建物は梁行２間（3.28m）×桁行間３（6.4m）の身舎の西桁行側に廂を付設したもので，柱掘方は径0.3～0.5mの円形を呈し，柱穴が二重に掘り込まれているものもある。一段下がった部分は径15cm程であり，柱痕跡を示すとみられる。桁行の柱間は1.57～2.42mとばらつきがある。桁行方位は東に30分振っている。 片廂建物

S B 3641 (Fig. 110)

S B3615の南側柱列と重複して検出したが，柱穴が小さい当建物が後出するものと考える。梁行２間（2.7m）×桁行１間（2.7m）の南北棟掘立柱建物で，柱穴を結んだ線はやや歪な方形を呈する。柱穴は0.2～0.4mの円形を呈し，柱間は梁側が1.28～1.4m，桁側が2.65～2.7mを測る。桁行方位は北から東に２度30分振っている。 （小田）

3）竪穴住居

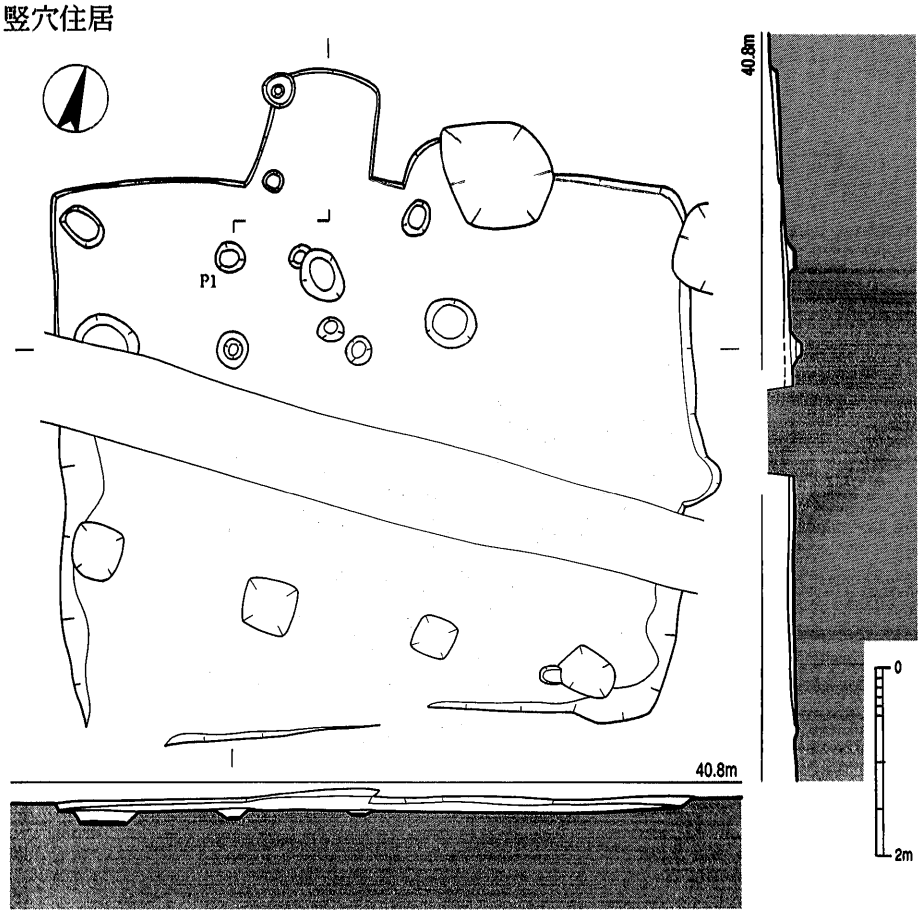


Fig. 111 竪穴住居S I 3638実測図（1/80）

ＳＩ3638（Fig.111）

第121次調査区の中央やや西側に位置し，ＳＡ3623・3624，ＳＢ3615，ＳＤ3637に切られる。

平面形は東西側に長い方形を呈し，北壁長6.68m，東壁長5.56mを測り，壁高は削平により10cmの遺存状態である。北壁のやや西よりに幅1.32m，奥行き1.18mの張出しがあり，突出型のカマドとみられるが，袖部・煙道は留めていない。また，Ｐ１を主柱穴と見なしたものの浅すぎるきらいがある。埋土中からは古墳時代の土器が出土しており，観世音寺造営以前は集落であったことが判る。（小田）

突出型のカマド

4）溝

ＳＤ435

第20次調査の南北Trで検出した。南北方向に走る溝で，検出長24m，深さ0.5mを測る。西岸のみの検出であるが，東西Trに東岸はかかっていないので溝幅は５m未満と推定される。ただ，大宰府政庁中軸線から約750m（≒７町）東の位置にあり，寺域との関連が窺える。

ＳＤ1210

第45次調査区南東隅に位置し，ＳＥ1180に切られる。南北方向に走る溝状の落ちで，南端での幅2.6mで，深さは６cm程であった。

ＳＤ1230Ａ・Ｂ（Fig.94・95・112，PL.74,75-1・2・4,95-1）

第45次調査区及び第119次調査区で検出した。第119次調査南区ではＳＤ3520と番号を付したが，当溝とは一連のものである。45次調査区の北西隅から14m程南に流れ，一旦東に向きを変える。東側に26m程流れた後，更に南側に流れを変えている。クランク形を呈する溝で，溝幅は北端部分で2.7m，深さ0.6m，東西部分で幅2.5～2.6m，深さ0.35～0.5m，南北部分で幅0.8～2.2m，深さ0.4mを測る。第119次調査分を含めると南北部分の長さは78mにも及ぶ。

当溝は新旧二時期あり，古期をＡ，新期をＢとした。Ａ溝は素掘りの溝であるが，調査区の東辺部の溝底には溝と平行して20cm程の間隔で杭が２列打ち込まれており，しがらみを組んでいたものと思われる。上面幅1.5mを測り，黒色砂・黒灰色砂泥が堆積していた。Ａ溝埋没後にＢ溝を掘削しているが，Ｂ溝は溝の内側を石で護岸したもので，長さ40～110cmの花崗岩を用いている。北辺部分では護岸の石は殆どが抜き取られていた。また，溝に接して柵ＳＡ1235を設けており，柵の内側には建物・井戸・土坑などの遺構が蝟集しているが，溝の北東部においては池状の落込ＳＸ1200が存在する程度であった。

ＳＤ1231（Fig.103）

第45次調査区の南西側で検出した。ＳＢ1327と重複し，東端は土坑に切られる。現状でＬ字形を呈し，東西長3.2m，南北長2.1m，中央部での幅0.68mで，深さは削平により壁高13cmを留めるにすぎない。溝の１m南側には掘立柱建物ＳＢ1328があり，それを囲む施設になろう。

ＳＤ1232

ＳＤ1231の1.2m南側に位置する東西溝で，ＳＥ1188・1189，ＳＫ1222に切られる。残存長6.6m，中央部幅0.64mで，壁高は５cmを留める程度であった。

ＳＤ1233（Fig.96）

ＳＤ1231のすぐ西隣に位置する。南北方向に走る溝で，南端は積石塚ＳＸ1220の下に潜り込

む。検出長19.7m，最大幅1.3mで，深さは12cmと浅い。北側６m程は幅が一回り小さくなっている。また，この溝と平行して西肩際に1.8～2.8m間隔で柱根を有する柱穴列があり，柵ＳＡ1271の番号を付した。

ＳＤ1234

第45次調査区の中央やや南側で検出した。ＳＢ1315と重複し，ＳＥ1187・1320，ＳＫ1203・1204・1227に切られる。調査区の中央部から南端にかけて走る溝で，検出長15.2m，幅0.6～1.1m，深さ0.1～0.26mを測り，南側に向かって深くなっている。

ＳＤ1236（Fig.96）

第45次調査区の南西隅で，ＳＤ1233の2.5m西側に位置し，ＳＤ1237を切る。検出長6.25m，幅0.88m，深さ0.63mを測る。溝の西肩際には10～40cm間隔で小ピットが連続しており，柱穴列ＳＡ1272とした。

ＳＤ1237（Fig.96）

ＳＤ1233とＳＤ1236の間に位置する南北溝で，ＳＫ1238を切り，南端をＳＤ1236に切られる。検出長10.85m，幅1.5mで，深さは15cm程であった。

ＳＤ1266

第45次調査区の北側に位置し，ＳＫ1264を切っている。南北長5.8m，深さ0.2mを測り，南端はＳＤ1230と重複する。

ＳＤ1268

第45次調査区の東西掘下げTrで確認した。東西幅1.8m，深さ0.23mを測るが，下層遺構であるため詳細は不明。ＳＫ1267に切られる。

ＳＤ1300Ａ・Ｂ（Fig.112，PL.75-3,89-1,95-2）

第45次調査区中央を南北方向に流れる溝で，第119次調査北区でも検出しており，検出総長48.5mを測る。溝の心は観世音寺推定中軸線から東に103mの距離に位置する。溝の幅は北端で2.1m，深さ0.25m,45次調査区南端で幅2.05m，深さ0.53m,119次調査北区南端で幅1.85m，深さ0.5mで，両端部での比高差は70cmを測り，断面は逆台形を呈する。

溝の埋土は上層（Ｂ溝）・下層（Ａ溝）とに分けられ，ＳＤ1300Ａの北端は石組排水施設ＳＸ1306を介して池ＳＧ1305に接続する。また，ＳＤ1300Ｂの先端は東側に屈曲し，瓦組暗渠ＳＸ1245に接続している。上層埋土中からは「厨」・「主□（税カ）」銘墨書土器が，下層埋土中からは「由」・「□寺」銘墨書土器，唐三彩壺片が出土した。

墨書土器・唐三彩が出土

ＳＤ3478

第119次調査南区の西側で検出した。Ｌ字形を呈する溝で，東半部はＳＤ3550に切られ，南先端部はＳＫ3485と重複する。中央部での幅0.9m，深さ0.16mを測る。

ＳＤ3500（Fig.112）

第119次調査北区の掘下げTrで検出した。45次調査区側へ延びるものと思われるが，掘り下げていないため確認し得ていない。検出長18mで，溝幅は北端で3.1m，南端で3.2mを測り，深さは0.65mの遺存状況である。断面は逆台形を呈し，埋土は黒色粘質土を主体とする。割合多くの土器が出土した。

ＳＤ3520（Fig.112）

第119次調査北区の東側を南北に流れる溝で，南端は南区の北壁から3.6mの位置で終わっている。北端での幅1.82m，深さ0.15mで，南端での幅0.9m，深さ0.2mを測る。前回の報告では，新旧二時期あり，古期のものをＳＤ3520Ａ，東側の新期溝をＳＤ3520Ｂとし，ＳＤ1230Ａと一連の溝として報告していたが，土層図の関係からするとＳＤ3520ＢはＳＤ1230Ｂの下層溝であるＳＤ1230Ａに該当し，ＳＤ3520Ａは全く別の溝であるため訂正しておく。

ＳＤ3550（PL.96）

第119次調査南区の中央部を弓なりに流れる溝で，ＳＤ3478を切り，ＳＢ3560・3562，ＳＥ3470・3475・3480・3490に切られる。南側は調査区外に延びるが，北区では検出していないことから溝の北端は両区の中程にある。溝の幅は北側で1.75m，深さ0.32m，南端で溝幅2.7m，深さ0.6mを測る。南壁から北側５mにかけての壁面には護岸のための杭が打ち込まれていた。

ＳＤ3555

第119次調査南区の南西端部に位置する溝状の落込で，検出長9.5mを測る。方向的にはＳＤ1300と同じであるが，調査中に壁面が崩壊し，掘り下げを断念したため詳細は不明。

ＳＤ3619

第121次調査区の南西隅で検出した。北西から南東方向に流れる大溝で，瓦溜ＳＸ3618に切

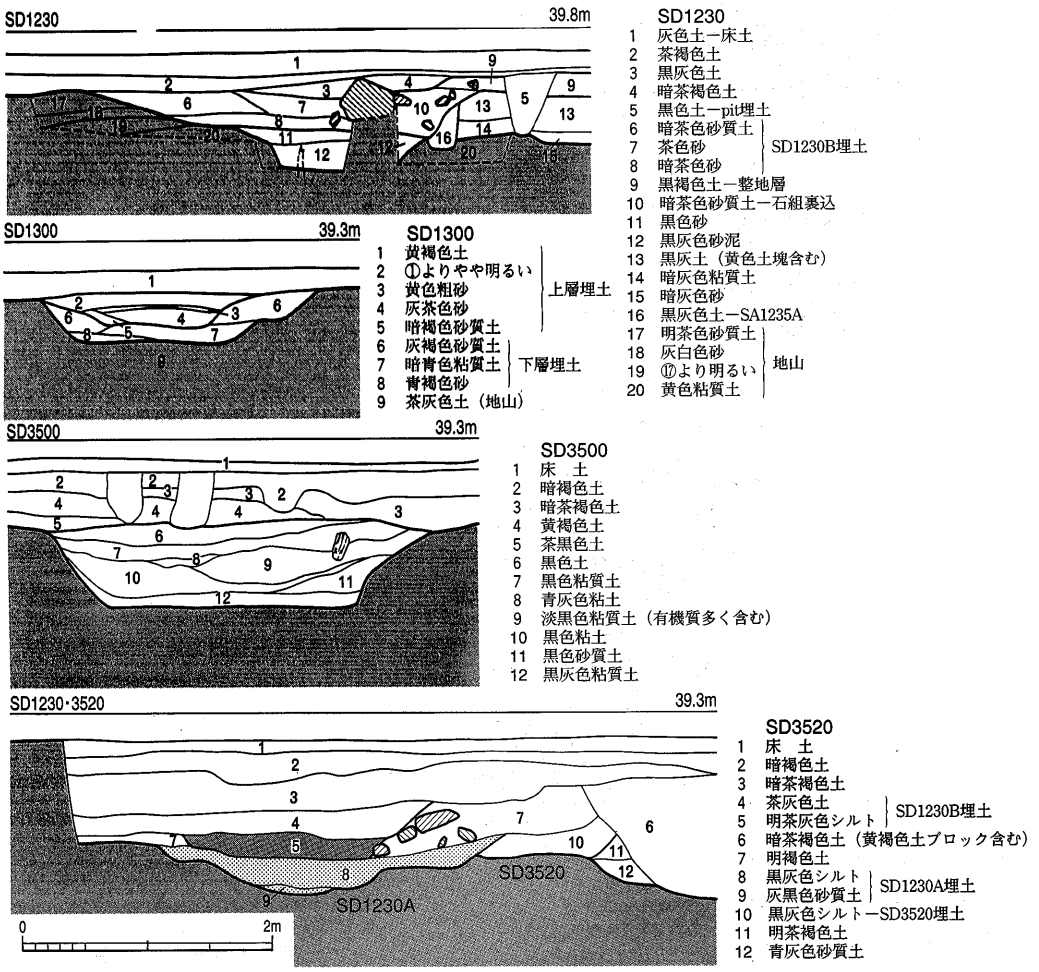


Fig.112　溝ＳＤ1230・1300・3500・3520土層図（1/60）

られ，埋土上層には土器溜ＳＸ3655が掘り込まれている。中央部での幅5.3m，深さ0.5mを測る。埋土は粘質土で，百済系単弁軒丸瓦が出土した。

ＳＤ3628

第121次調査区の南西側に位置し，南北方向に走る。ＳＸ3640に切られ，ＳＢ3610を切る。長さ10.5mを検出したが，南端はＳＸ3618と切り合う。幅1.14m，深さ15cmの浅い溝である。

ＳＤ3629

ＳＤ3619の北側に位置し，同溝と切合い関係にある。長さ3.5m，幅1.15m，深さ0.2m程の小溝である。

ＳＤ3630（PL.103-3）

第121次調査区の東半部を占める幅広の南北溝で，柵・建物・井戸・土坑などの遺構を切っている。幅7.5～8.4m，深さ0.2～0.3mを測る。溝の底面は土坑が密集したかの如く起伏が著しく，或いは土取りの結果，溝状を呈するに至ったとみられる。

底面は連続土坑状

ＳＤ3637（Fig.108，PL.103-1）

第121次調査区の中程で検出した。ＳＡ3622・ＳＥ3636を切り，東側はＳＤ3630に繋がる。現状でＬ字形を呈し，東西長11.6m，中央での幅1.3m，同深さ0.37mを測る。底面はＳＤ3630側に傾斜している。

ＳＤ3649

ＳＤ3637の16.5m北側に位置する東西溝で，ＳＡ3624を切る。西側は調査区外に延びているが，東側はＳＸ3650に切られる。検出長13mで，中央幅2.3m，深さ0.2mで，溝底はＳＤ3630側に緩傾斜している。（小田）

5）井　戸

ＳＥ1180（Fig.113，PL.77-1）

第45次調査区の南東隅で検出した桶側構造の井戸である。南半分は調査区外となる。上段の桶側の一部を確認したのみである。板材は幅11～13cmである。Ⅳ-Ｂ類か。

ＳＥ1181（Fig.113，PL.77-2･3）

ＳＥ1180の北側で検出した。石組の下部に桶側を据える構造の井戸である。石組は径1.52m，深さ2.4mを測り，14段積まれている。石組下部40cm程の高さまでは10数cm程度の小振りの石を用いている。下部構造の桶側は上端径82cm，高さ70cm以上である。Ⅳ-Ｂ-ａ類。

ＳＥ1182（Fig.113，PL.78-1）

第45次調査区の中央やや東側で検出した。ＳＫ1213に切られる。底部に曲物を据える井戸である。径39cm，高さ17cmの曲物の外側に，さらに径43cm，高さ17cmの曲物を重ね置きしている。Ⅲ類。

ＳＥ1183（Fig.114，PL.78-2,79-1）

ＳＥ1182の３m北側で検出した。桶側構造の井戸である。井戸枠は掘方のやや北東側に偏って配され，枠は２段が残存する。上段の桶側は上端径62cm，高さ100cm以上を測る。下段の桶側は上端径・下端径とも59cm，高さ116cmを測る。通常の同類の井戸の桶側のように枠下方が開かずに直立している。板材は幅８～10cmのものを使用している。底面は礫敷きである。ＳＥ

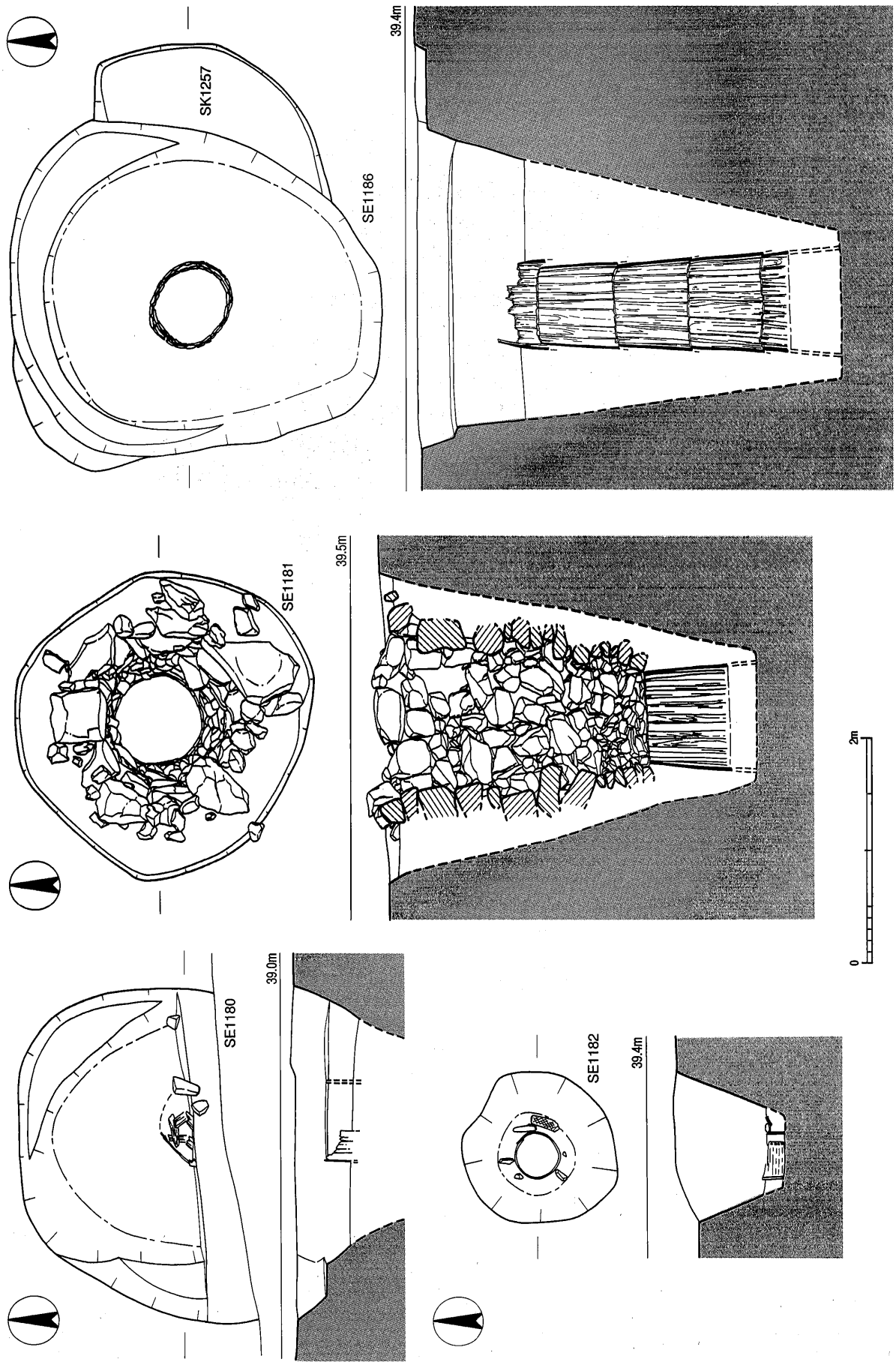


Fig. 113　東辺域井戸実測図①（1/50）

1184を切る。Ⅳ-A類。

SE1184 (Fig.114, PL.78-2,79-2·3)

SE1183の西隣で，同井戸に切られる。方形縦板枠の下部に桶側を据える構造の井戸である。方形縦板枠は内法で48～53cm，深さ1.28mを測る。横桟は3本あり，凹凸に枘を穿って組み合わせる。縦板は通常の板材ではなく半裁した竹を使用するが，東側の一部には，幅22cm，長さ148cm，厚さ約2cmの木板を立てている。下部の桶側は上端径61cm，下端径42cm，高さ71cmで，タガが2箇所に残る。通有の桶側構造の桶とは逆に下方の径が小さくなっている。Ⅱ-B-c類。

SE1185 (Fig.114)

SE1154の西隣に位置し，SK1222と重複する。底部に曲物を据える井戸である。曲物は径41cm，高さ22cm以上である。Ⅲ類と考えられる。

SE1186 (Fig.113, PL.81-1)

SE1183のすぐ北東側に位置し，SK1257を切る。桶側構造の井戸である。枠は5段目まで確認した。最上段の桶側は腐食が著しいが，以下，上端径・高さは66cm・78cm，69cm・73cm，75cm・72cm，82cm・22cm以上を測る。板材は幅7～15cmのものを使用し，2段目が23枚，3段目22枚，4段目23枚からなる。Ⅳ-A類。

SE1187 (Fig.115)

第45次調査区の南端で検出した。三辺に横木のみが残っており，一辺47cm程の井戸枠が復原できる。方形横板構造の井戸の可能性もある。底部には一面に瓦片が敷き詰めてあった。

SE1188 (Fig.115, PL.80-1·80-2)

SE1187の4m北側に位置し，SE1189を切る。桶側構造の井戸である。枠は3段確認した。上段部の上端部は腐食が進んでいるが径74cm，高さ81cmを測る。中段部はそれぞれ68cm・97cm，下段部は54cm・54cmを測る。下段部の桶は一回り小形で，径の大きい方を上向きに据える。底部は礫敷きである。板材は7～12cmで，厚さは3cmを測る。各桶側の接続部には隙間がみられるが，ここには小石を充填して補強している。Ⅳ-A類。

SE1189 (Fig.115, PL.80-1·80-3)

SE1188の西に位置し，同井戸に切られる。桶側構造の井戸である。枠は3段であるが，上段の桶側は腐食が著しい。2段目は上端径48cm，高さ82cm。3段目はそれぞれ52cm，136cmである。板材は幅7～10cmで，厚さ3cmを測る。Ⅳ-A類。

SE1190 (Fig.114, PL.81-2·3)

SE1188の3m北東で検出した。桶側構造の井戸である。SK1225・1226と切り合う。枠は3段であるが，上段の桶側は腐食が著しい。2段目は上端径68cm，高さ78cm。3段目はそれぞれ54cm，90cmである。板材は幅7～10cmで，厚さ3cmを測る。Ⅳ-A類。

SE1191 (Fig.115, PL.82-1)

SE1190のすぐ北側に位置する。枠は抜き取られ遺存していないが，底面の中央部で先端を斜めに切断した竹が出土しており，井戸廃棄時の井戸祭祀を行ったものと考えられる。 井戸祭祀

SE1192 (Fig.115, PL.82-2)

第45次調査区の南西で検出した。SE1193を切り，SK1243と重複する。井戸枠は存在しないが，形状等からみて井戸と考えられる。

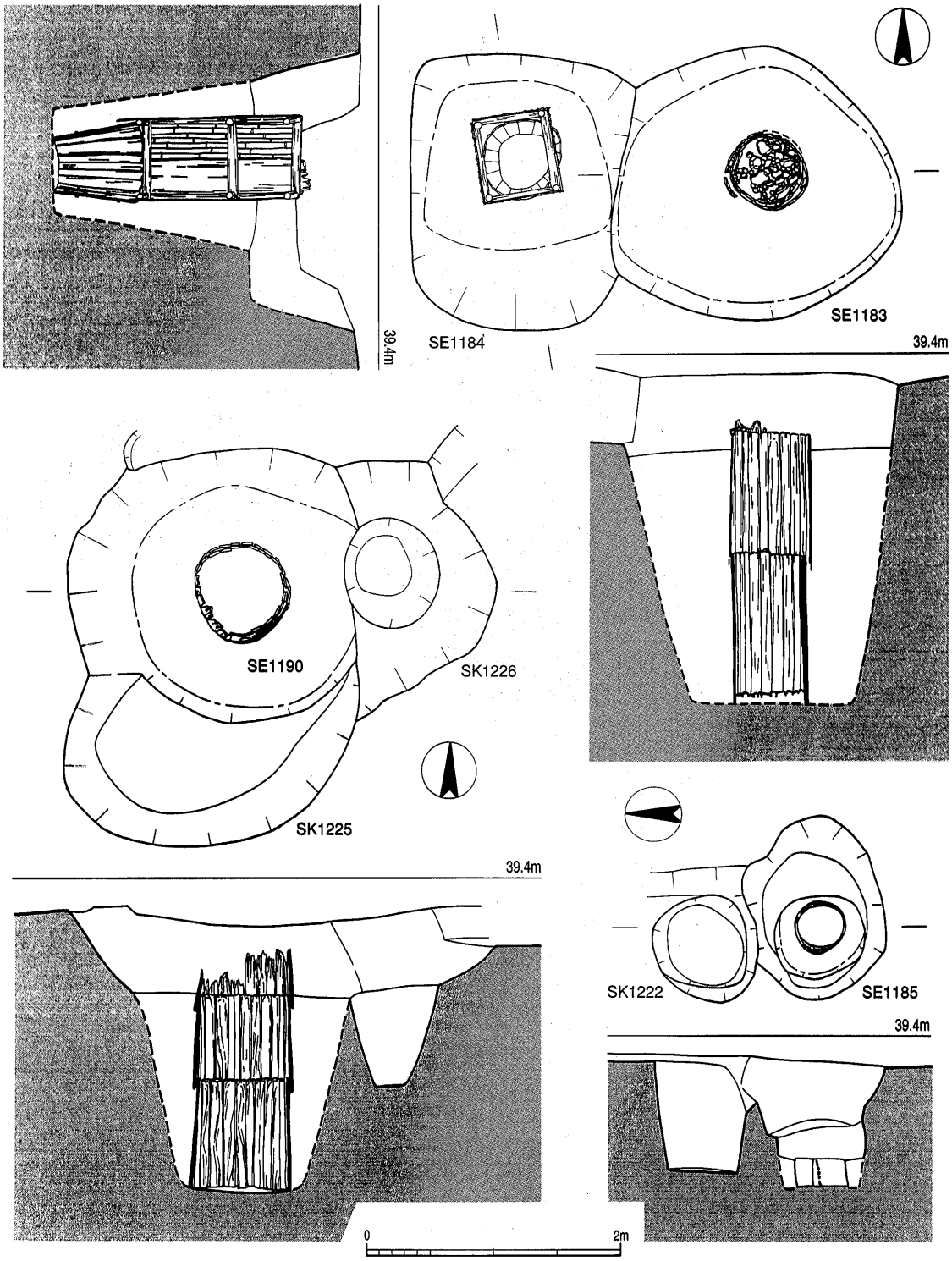


Fig. 114　東辺域井戸実測図②（1/50）

ＳＥ1193（Fig. 116，PL. 82-2･3）

ＳＥ1192に南壁を切られる。井戸枠は存在しない。検出面から底面まで3.6mと深く，形状等からみて素掘りの井戸と考えられる。

ＳＥ1194（Fig. 116，PL. 83-1･2）

ＳＥ1193のすぐ北側に位置する。桶側構造の井戸である。枠は４段確認した。上段部の上端

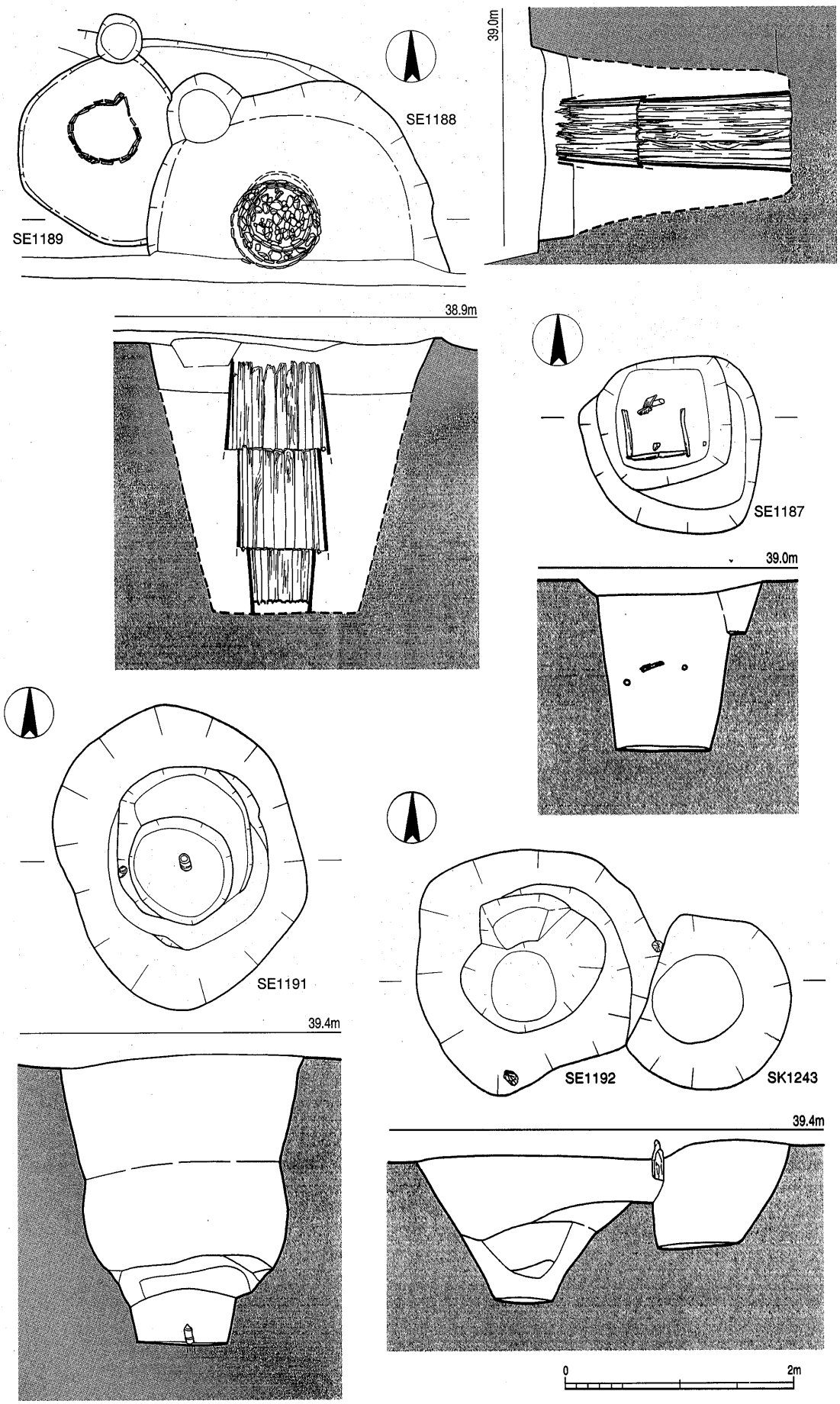


Fig. 115　東辺域井戸実測図③（1/50）

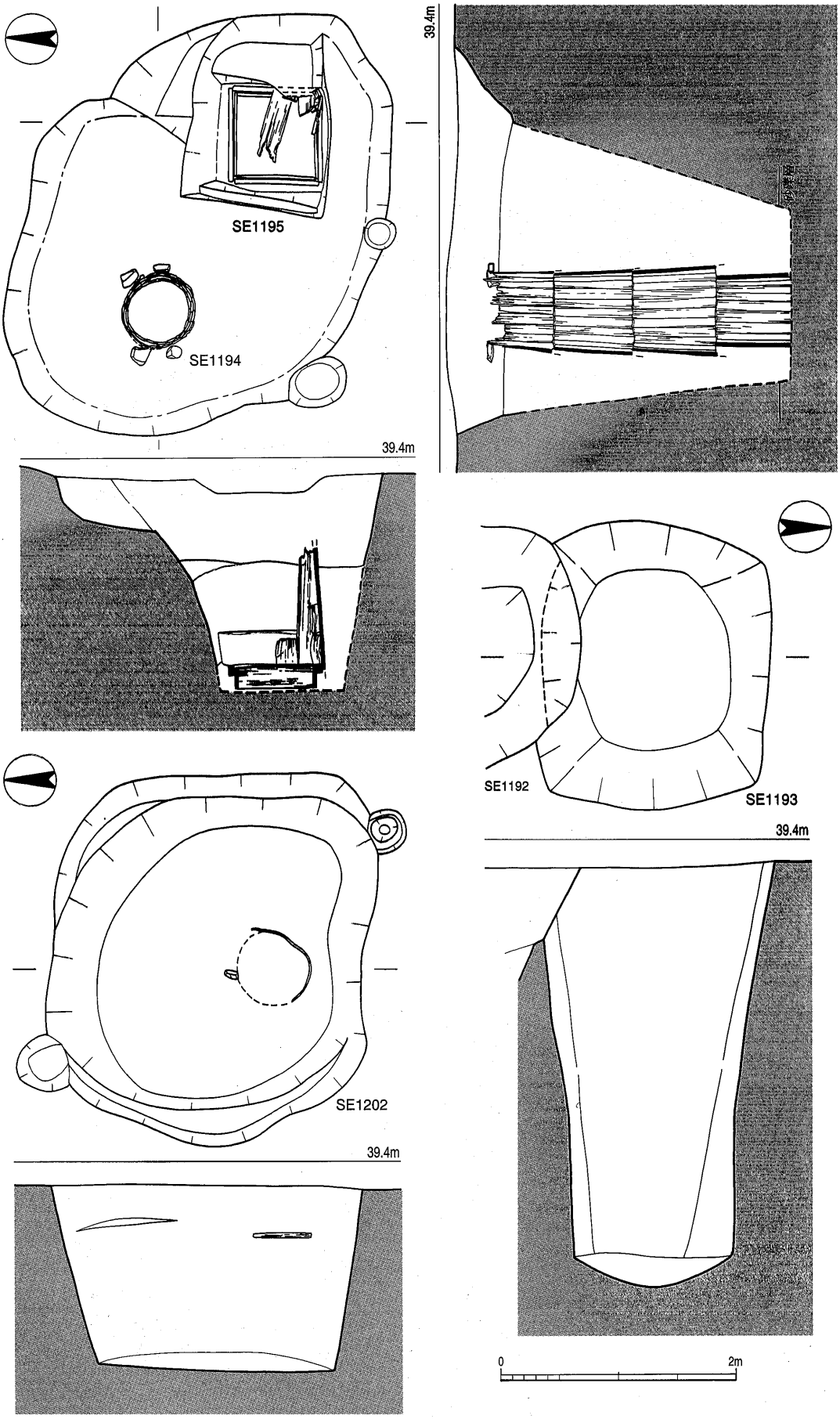


Fig. 116　東辺域井戸実測図④（1/50）

は腐食が進んでいる。２段目は上端幅62cm・高さ73cm，３段目はそれぞれ63cm・74cm。最下段は53cm・63cmと一回り小形で，桶側が裾広がりにならず，上端径と下端径が同一径となる。板材は６～10cmで，厚さは3.5cmを測る。ＳＥ1195を切る。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ1195（Fig.116，PL.83-1･3）

ＳＥ1194の東側で，ＳＥ1194に切られる。方形横板構造の井戸である。最下部に一辺77cm，幅18cmの横板を方形に組み，その外側を厚さ５cm程の横桟で留めている。横桟は凹凸に枘を切る。そして，横桟の外側に幅19cm，長さ107cm，厚さ2.5cm程の横板を組み上げている。掘方は隅丸方形である。Ⅰ-Ｂ類。（吉村）

ＳＥ1196（Fig.118，PL.84-1）

ＳＥ1191の2.3m北側に位置する。平面形は不整円形を呈し，長軸2.28m，短軸2.08m，深さ0.86mを測る。断面形状は上部が大きく開口する摺鉢形をなし，枠などもみられないことか

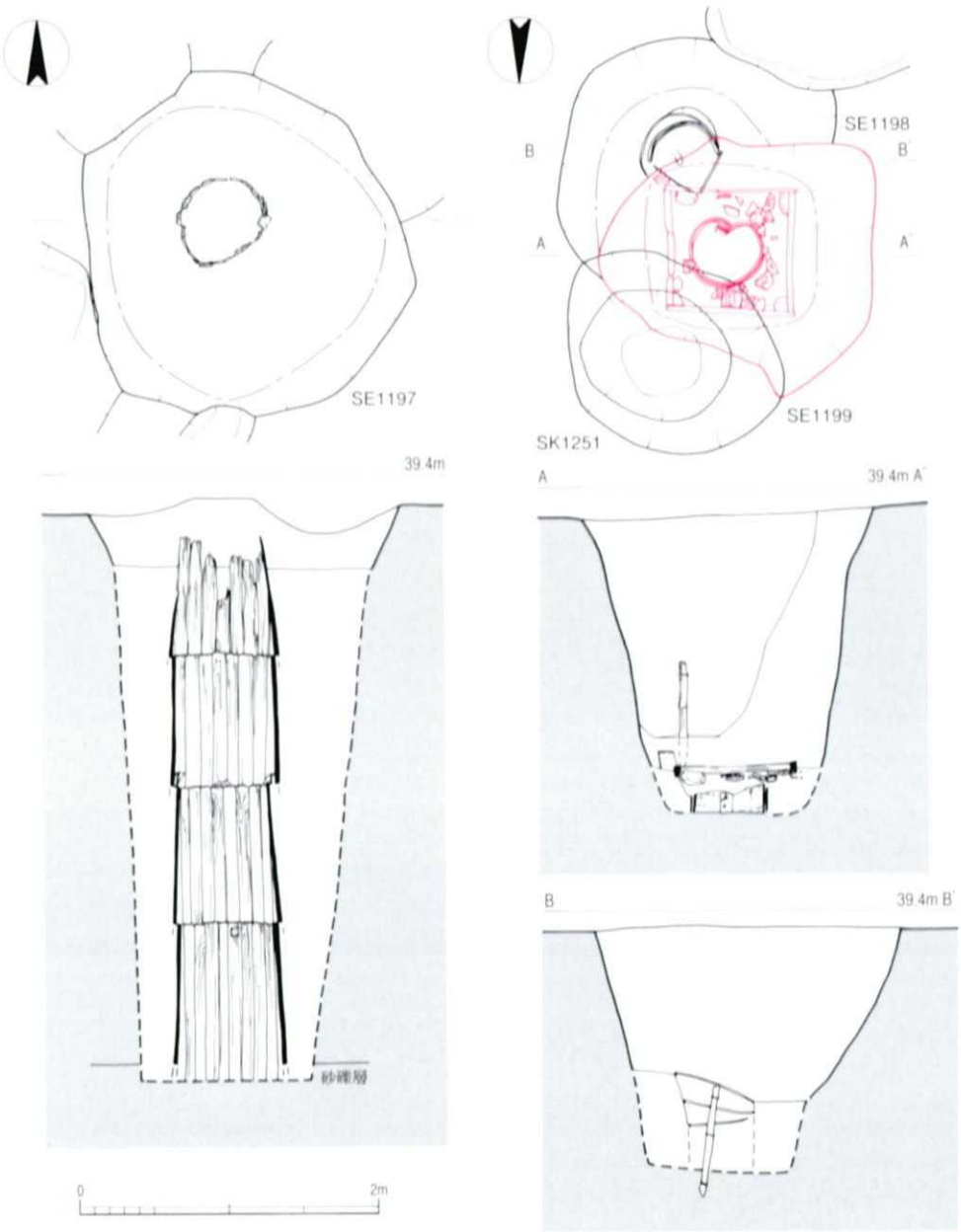


Fig.117　東辺域井戸実測図(5)（1/50）

ら土坑とした方が妥当であろう。　（小田）

ＳＥ1197（Fig.117，PL.84-2）

ＳＥ1196の1.5ｍ東側に位置する。桶側構造の井戸である。枠は４段確認した。上段部の上端部は腐植が進んでいる。１段目は上端幅54cm・高さ88cm，２段目はそれぞれ65cm・93cm，３段目は58cm・98cm，最下段は62cm・106cmを測る。４段目の上端部近くに12cm×12cmの枘穴が

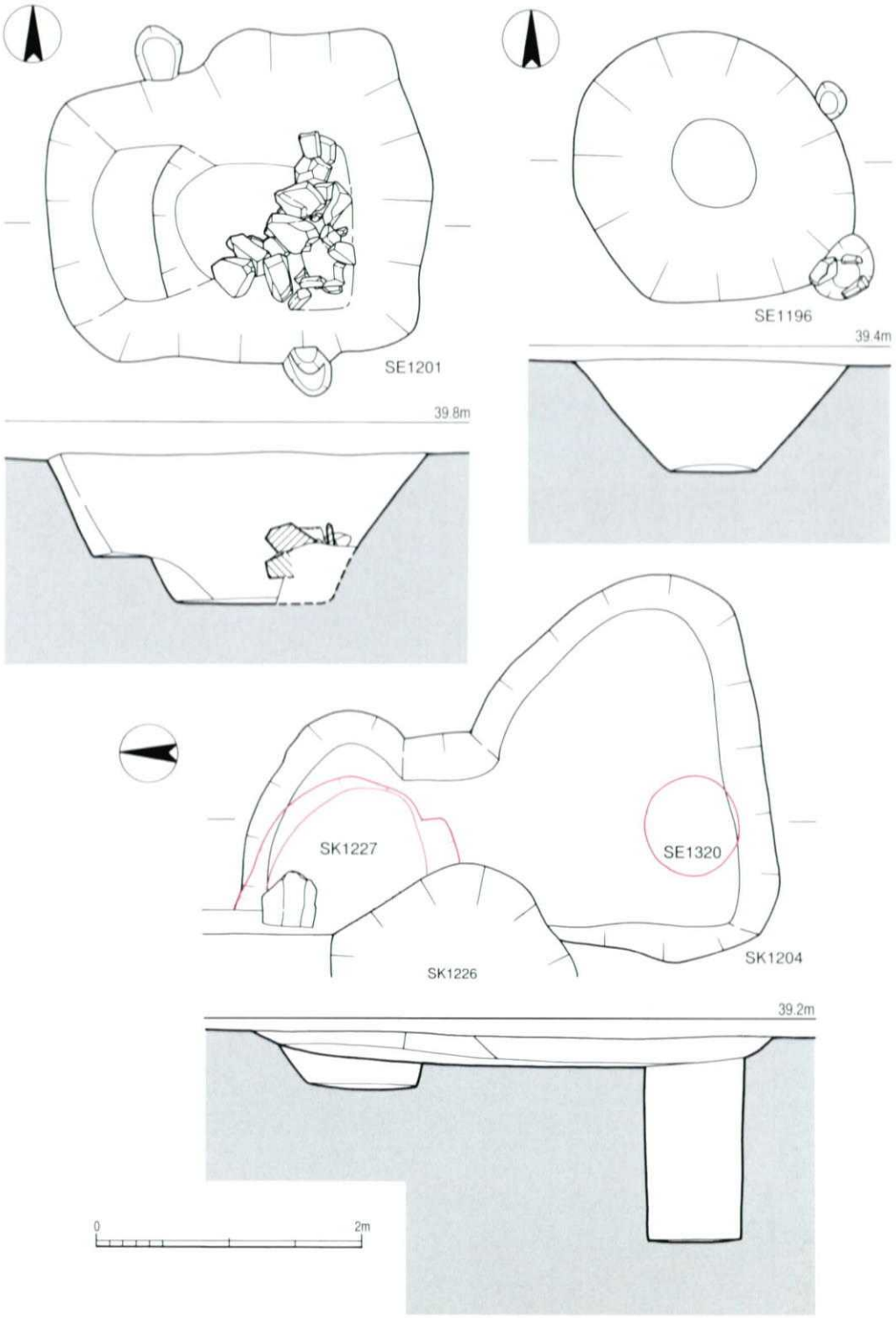


Fig.118　東辺域井戸実測図⑥（1/50）

穿たれている。板材は幅7～9cmで，厚さは3cmを測る。Ⅳ-A類。

SE1198（Fig.117，PL.84-3）

SE1197の北側に位置する。井戸枠は抜き取られ遺存していないが，竹タガが3段に残っていることから桶側構造の井戸と考えられる。井戸の中央には，節を抜いて先端部を尖らせた竹が突き刺ささっており，井戸祭祀を行っている。SE1199を切る。Ⅳ類か。 井戸祭祀

SE1199（Fig.117，PL.84-2･3）

SE1198に南壁を切られる。井戸枠は多くが抜き取られ遺存状態が悪いが，方形縦板の井戸枠の下部に曲物を据えるタイプである。上部の井戸枠の最下部の横桟は方形に組まれ，一辺63cmを測る。材の幅は8cm，厚さ5cm。下部の曲物は二重になっており，それぞれ径46cm・高さ19cm，48cm・16cmを測る。横桟と曲物との隙間には瓦片が敷かれている。Ⅱ-A類。（吉村）

SE1201（Fig.118，PL.85-1）

第45次調査区の西側で検出した。掘方は隅丸長方形を呈し，長軸2.91m，短軸2.5m，深さ1.15mを測る。東壁側に2段の石積みが残存しており，石積み構造の井戸と考えられる。また，西壁にはテラスを設けている。

SE1202（Fig.116，PL.85-2）

SE1182の3.5m南側に位置する。平面形は不整方形を呈する。井戸枠は抜き取られ，曲物の一部が浮いた状態で出土した。

SE1320（Fig.118）

SK1204を掘り下げて検出した。円柱形を呈する素掘りの井戸で，径0.72m，深さ1.38mを

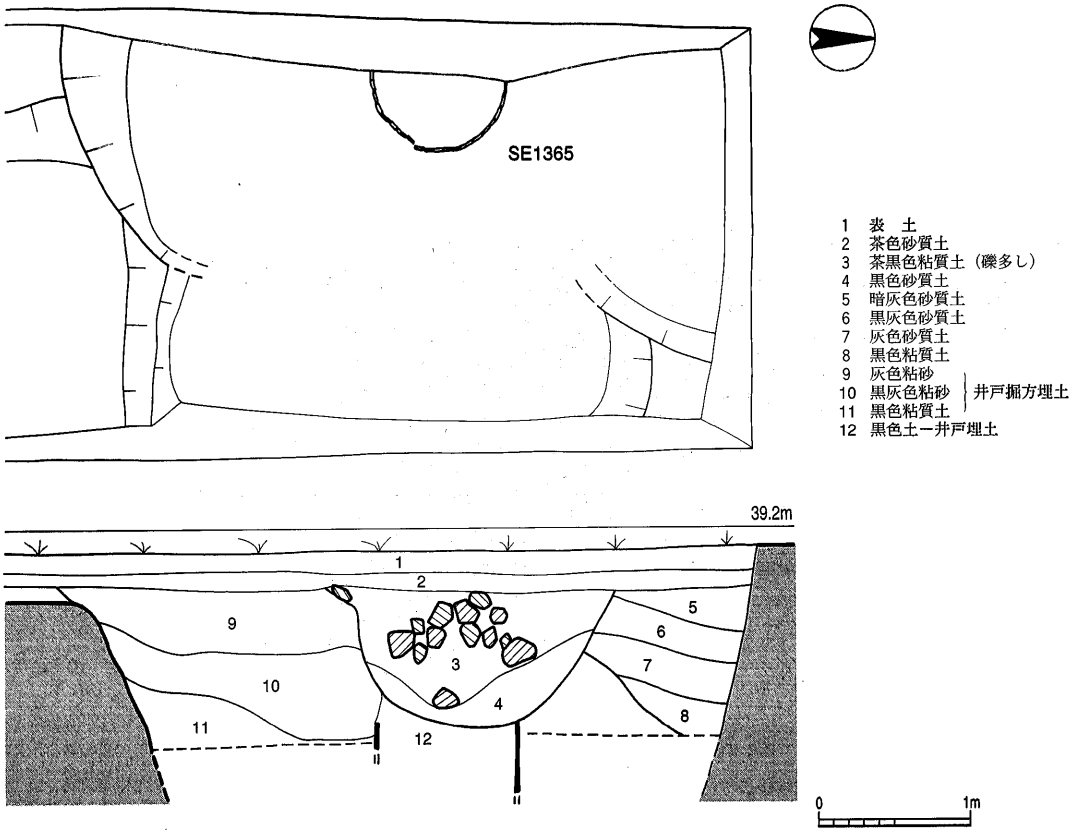


Fig.119 東辺域井戸実測図⑦（1/50）

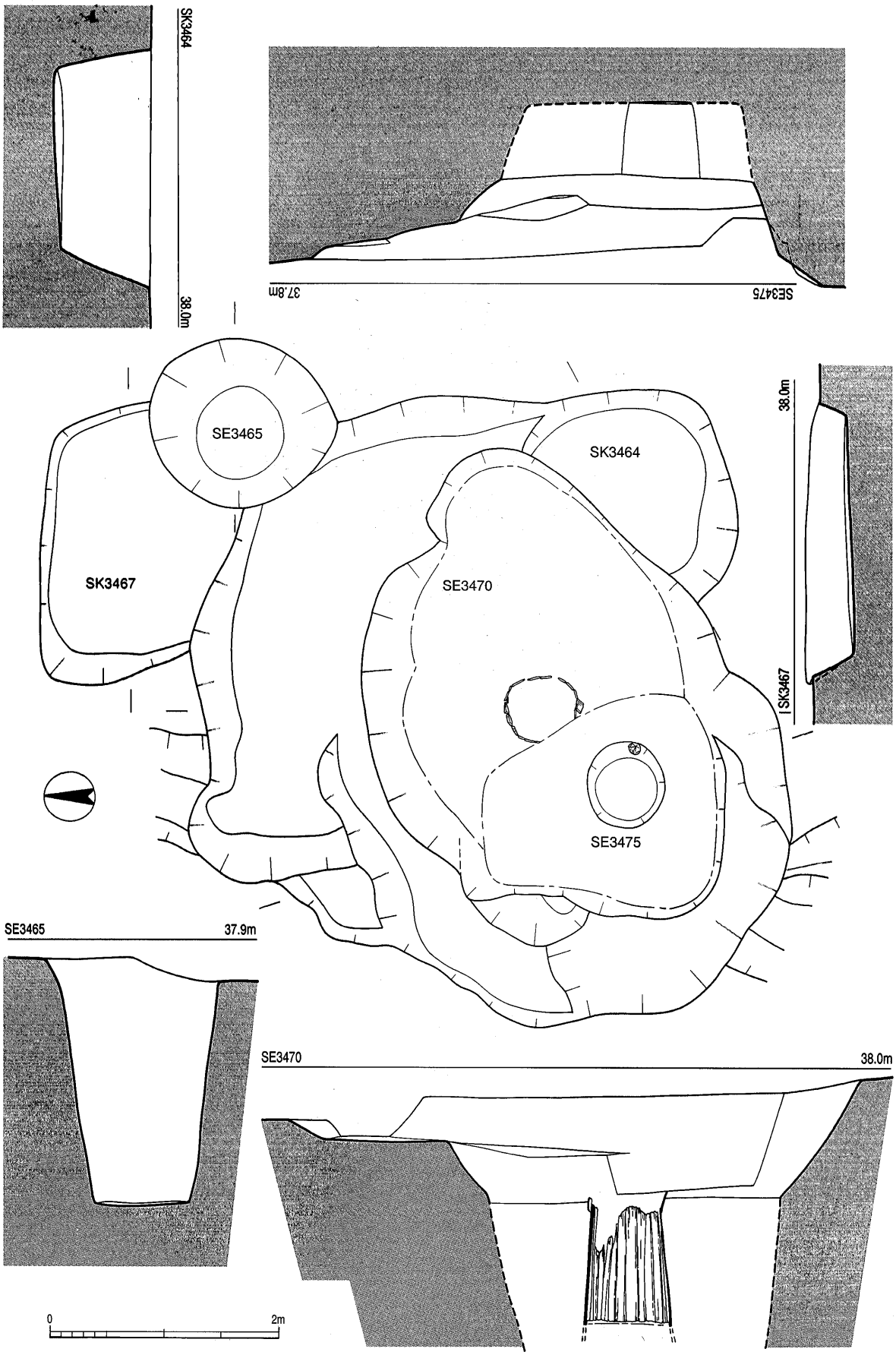


Fig. 120　東辺域井戸実測図⑧（1/50）

測る。井戸底から「東院」銘墨書土器が出土している。（小田）

「東院」銘墨書土器

ＳＥ1365（Fig.119，PL.71-2）

第47次調査区の北側で検出した桶側構造の井戸である。西側は調査区外となる。周辺が軟弱な土質であるために，井戸枠の一部を確認するに留めた。井戸枠の上端径は88cmで，板材の幅は５～13cmを測る。Ⅳ-Ａ類。井戸枠上部に土坑状の落ち込みがあるが，自然石が多く含まれていることから，井戸枠部の沈下に伴う人為的な埋め戻しと考えられる。

ＳＥ3465（Fig.120，PL.97-1）

第119次調査南区の中央部で検出した。井戸枠は遺存しておらず，形状等からみて素掘りの井戸と考えられる。底面は砂礫層に達する。ＳＫ3467を切っている。

ＳＥ3470（Fig.120，PL.97-2･3）

第119次調査南区の中央部で検出した桶側構造の井戸である。枠は２段分確認したが，上段についてはほとんど腐植し，僅かに３枚分の板材を確認し得たのみである。２段目は上端径56cm，高さ110cm以上で，幅９～10cmの板材を約20枚使用している。ＳＥ3475に切られる。Ⅳ-Ａ類。

ＳＥ3475（Fig.120，PL.97-2）

第119次調査南区の中央部で検出した。枠は残存していないが，桶側構造の井戸と考えられる。井戸枠の際に，径10cm程の杭が打ち込まれている。枠部の埋土は茶灰色粘質土。

ＳＥ3480（Fig.121，PL.98-1）

ＳＥ3475の東側で検出した。方形縦板構造の井戸である。縦板は幅12cmのものが２枚残るのみである。井戸枠は一辺73cm×70cmを測る。枠下端部の南・東辺には幅９cm，厚さ２cmの板材を，北・西辺には径７cm程の丸木を横桟として組む。隅木は径８cmの丸木である。底面から曲物が出土した。Ⅱ-Ａ類。

ＳＥ3490（Fig.121，PL.98-2）

第119次調査南区の北側で検出した。底部に曲物を据える井戸である。曲物は径44cm，高さ18cmである。ＳＤ3550に切られる。Ⅲ類。唐三彩壺の胴部破片が出土している。

唐三彩壺片の出土

ＳＥ3495（Fig.121，PL.98-3）

ＳＥ3490の西側に位置する。方形縦板の井戸枠の下部に曲物を据える井戸である。上部の井戸枠は52cm×55cmで，深さ88cmを測る。板材の幅は11～13cmで，各辺に５枚ずつ使用する。曲物は38cm，高さ20cmを測る。Ⅱ-Ｂ-ｂ類。

ＳＥ3505（Fig.121，PL.99-1）

ＳＥ3495の西側に位置する。方形縦板構造の下部に桶側を置き，さらにその下に曲物を据える構造の井戸である。上部の縦板は東側に５枚残っており，板材の幅は12cm前後を測る。桶側は上端径60cm，下端径56cm，高さ62cm。板材は幅10cm，厚さ１cm程のものを18枚使用している。上部の縦板枠との間の隙間には，人頭大の石や瓦を敷いている。曲物は径50cm，高さ30cmを測る。Ⅱ-Ｂ類。

ＳＥ3510（Fig.121）

第119次調査北区の北東部で検出した。掘方の東側は調査区外となり，壁面の崩壊の恐れがあったため掘り下げていない。枠と考えられる部分には径60cm程の自然石が投げ込まれていた。ＳＤ1230を切る。

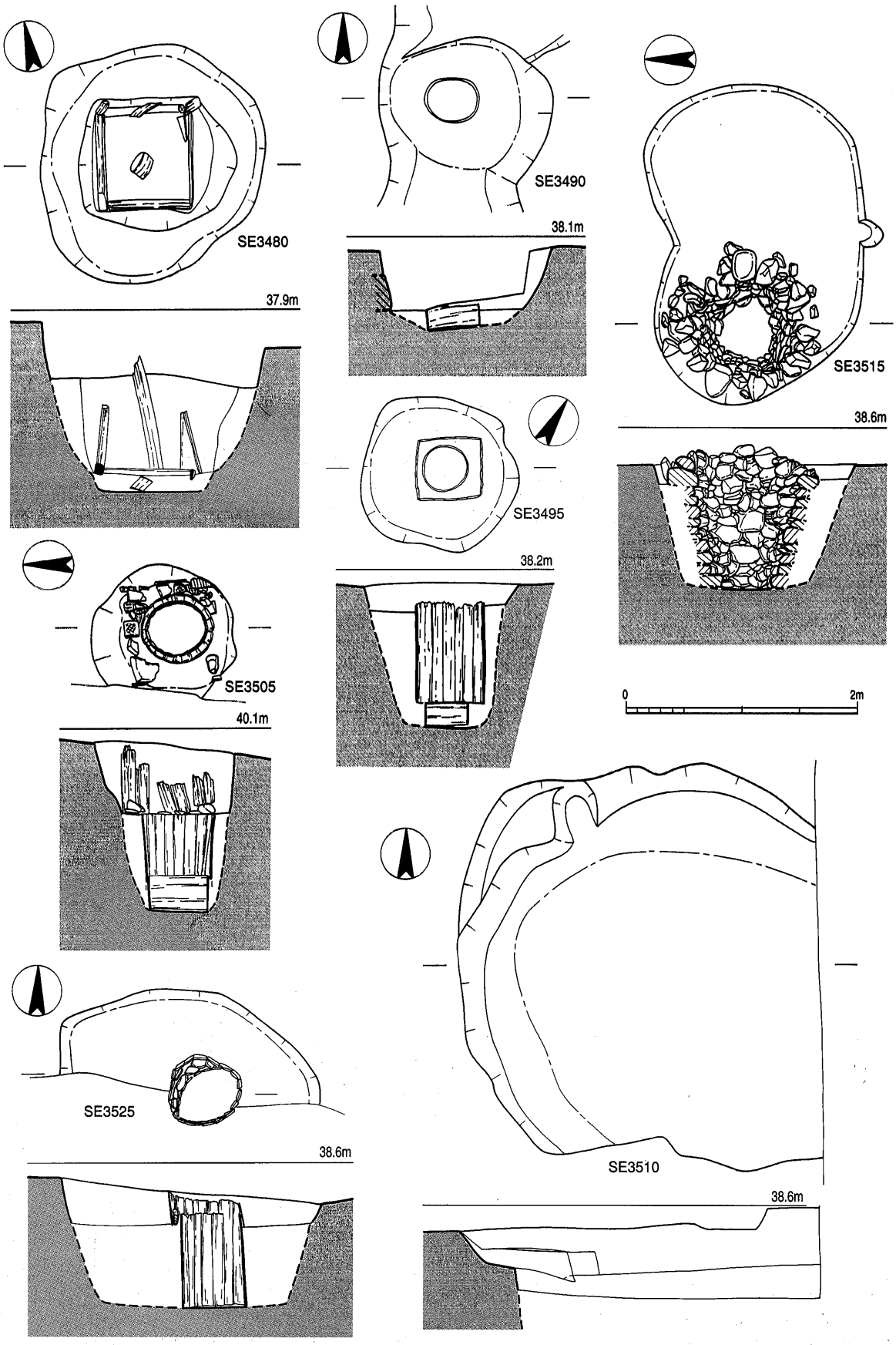


Fig. 121　東辺域井戸実測図⑨（1/50）

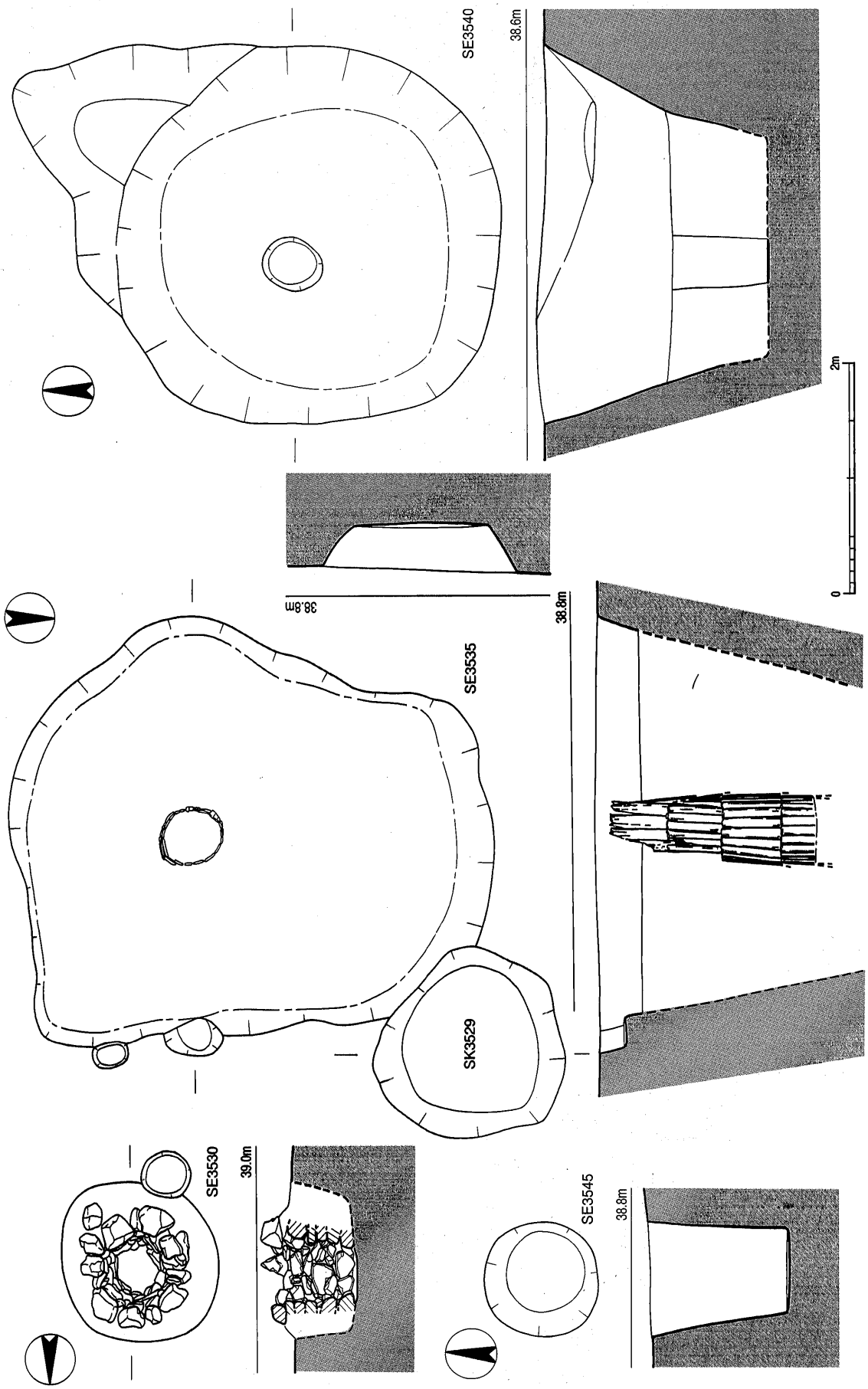


Fig. 122 東辺域井戸実測図⑩ (1/50)

ＳＥ3515（Fig. 121，PL. 99-2）

第119次調査北区の南側で検出した石組構造の井戸である。上端径0.8m，底径0.4mを測る。花崗岩の自然石による石積みは12段が残る。Ｖ類。

ＳＥ3525（Fig. 121，PL. 99-3）

ＳＥ3515の南側に位置する。桶側構造の井戸である。南側は調査区外となる。井戸枠は２段を確認した。上部の枠は腐食が著しく，下端部が遺存するのみである。板材は21枚を使用している。下段の桶側は上端径47cm，下端径54cm，高さ79cmを測る。板材の幅は９～11cmで，20枚を使用している。上部の枠との隙間には小石を詰める。Ⅳ-Ａ類。なお，埋土中から「呑𠙵天真急々如律令」銘の土師器皿が出土している。

ＳＥ3530（Fig. 122，PL. 101-1）

第119次調査北区の北側で検出した石組構造の井戸である。上端径0.58m，下端径0.38mを測る。花崗岩の自然石による石積みは６段が残る。Ｖ類。

ＳＥ3535（Fig. 122，PL. 100-1･2）

ＳＥ3530の南西に位置する。桶側構造の井戸で，枠は４段確認した。上段部の上端部は腐食が進んでいる。板材は幅14～15cmと下部のものよりも幅広の材を用いている。２段目は上端径54cm，３段目は53cm，最下段は55cmを測る。板材の幅は８～10cmで，２段目～４段目はそれぞ

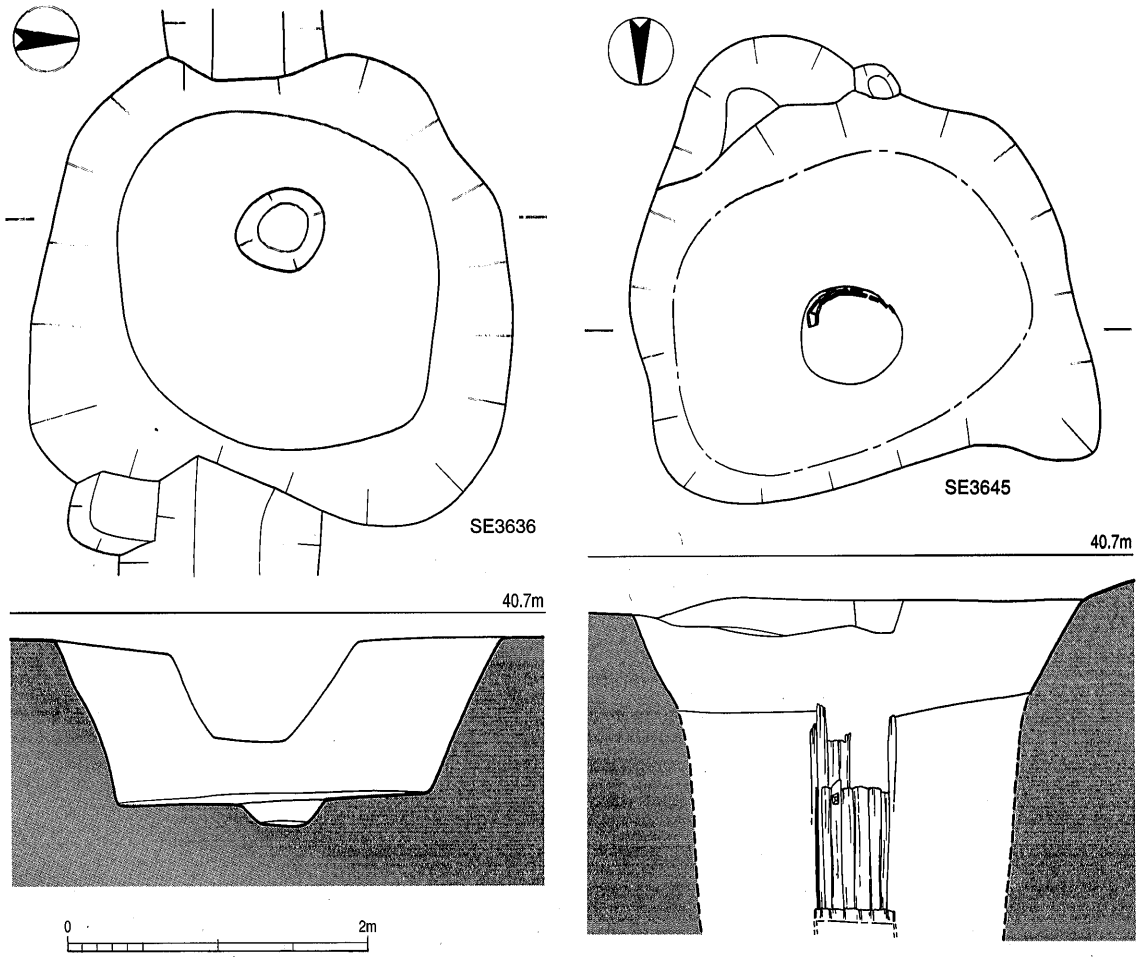


Fig. 123　東辺域井戸実測図⑪（1/50）

れ19枚を使用している。Ⅳ-A類。

SE3540 (Fig.122, PL.101-2)

SE3535の4m南西側に位置する。枠は遺存しないが桶側構造であると考えられる。

SE3545 (Fig.122, PL.101-3)

SE3540の5m西側に位置する。井戸枠は残っていないが，規模・形状からみて井戸と考えられる。

SE3636 (Fig.123, PL.106-1)

第121次調査区の中央部で検出した。井戸枠は残っていないが桶側構造の井戸と考えられる。枠は掘方の西に偏っている。SD3637に切られる。

SE3645 (Fig.123, PL.106-2·3, 107-1)

第121次調査区の北東部で検出した桶側構造の井戸である。井戸枠は3段確認した。いずれの桶側も完存していない。2段目の板材には枘穴が穿たれているものがある。板材の幅は9～10cmを測る。Ⅳ類。SD3630に切られる。 (吉村)

6) 土 坑

SK1203 (Fig.124)

第45次調査区の南端に位置し，SD1300を切り，SE1187と重複する。南半部は調査区外に延びるため詳細不明。東西長2.55m，深さ0.23mを測る。

SK1204 (Fig.118, PL.81-2)

第45次調査区の南側に位置し，SE1320を切り，SK1226に切られる。平面形は隅丸三角形状を呈し，長軸2.76m，深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

SK1205 (Fig.124, PL.85-3)

第45次調査区の西側で検出した。偏円形を呈し，長径2.8m，深さ1.1mを測る。西壁の中程にテラスを有する。底面は平坦をなす。

SK1211 (Fig.124, PL.86-1)

第45次調査区の北東側に位置し，SB1250を切っている。楕円形を呈し，長軸2.62m，短軸2.04m，深さ1.34mを測る。東壁側には低いテラスを有する。

SK1213

第45次調査区の中程で検出した上層遺構で，SE1182を切っている。楕円形を呈し，長軸1.95m，短軸1.32mを測る。浅めの土坑であるが，土師器が割合多く出土している。

SK1215 (Fig.124)

SE1193に西端を切られて位置する。楕円形を呈し，残存長1.6m，南北幅1.14m，壁高0.2mを測る。

SK1216 (Fig.124)

SK1215の2.5m東に位置する。長円形を呈し，長軸3.02m，短軸2.12m，深さ0.3mの大きさ。底面は平坦をなす。

SK1222 (Fig.114)

SE1185と重複しているが，遺構検出時点では土坑が井戸を切っていると判断した。円形を

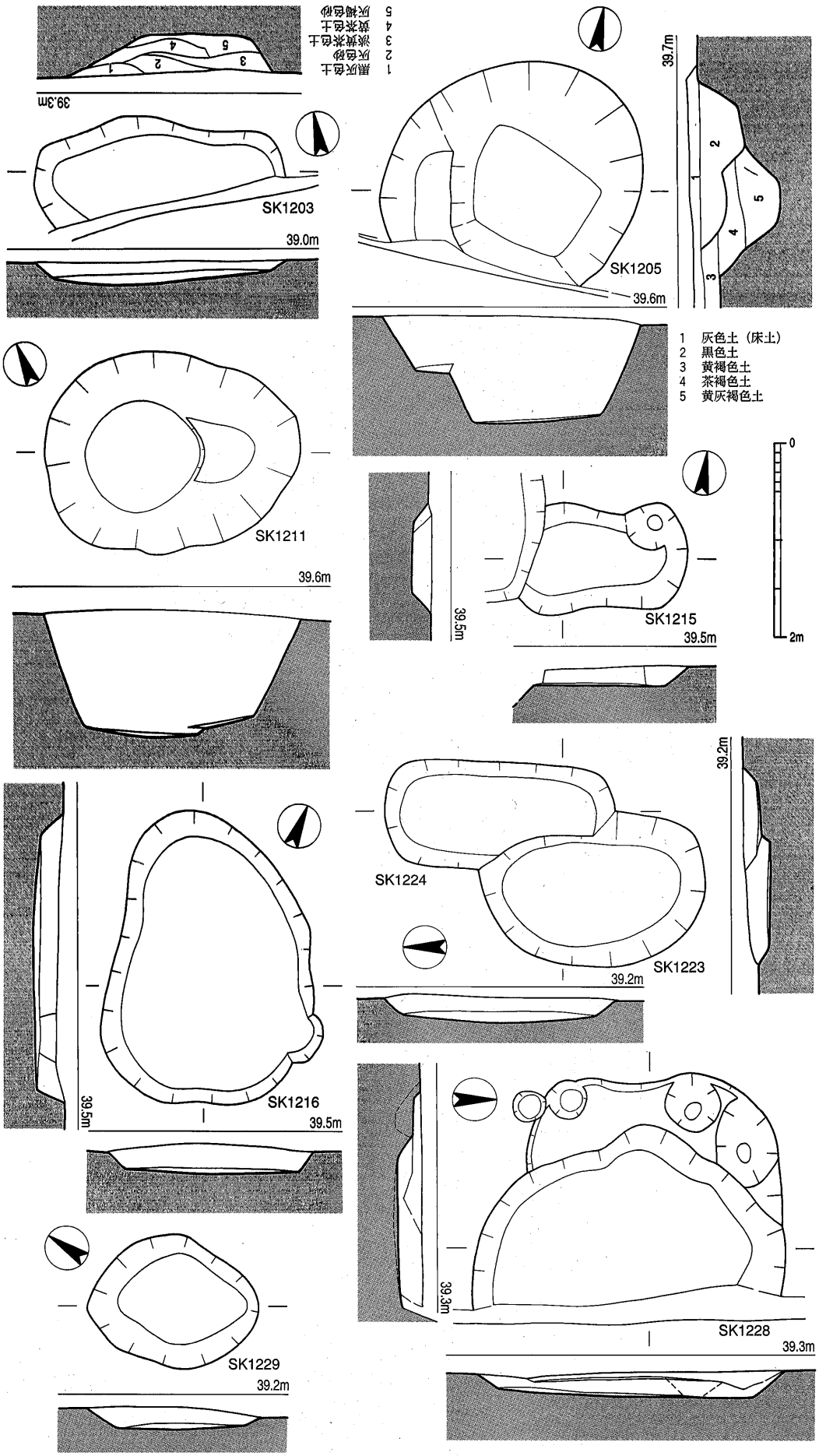


Fig. 124　東辺域土坑実測図①（1/60）

呈し，長径0.86m，短径0.73m，深さ0.87mを測る。形態的に井戸の可能性もある。

ＳＫ1223（Fig.124）

ＳＫ1204の1.5m南西に位置し，ＳＫ1224を切っている。楕円形を呈し，長軸2.3m，短軸1.6mで，深さは0.26mと浅めの土坑である。

ＳＫ1224（Fig.124）

ＳＫ1204のすぐ南西側に位置し，ＳＫ1223に南西壁を切られる。隅丸長方形を呈し，長軸2.38m，短軸1.12m，深さ0.18mを測る。底面はほぼフラットである。

ＳＫ1225（Fig.114）

ＳＥ1190に北半部を切られる。楕円形を呈し，残存長2.32m，幅1.98m，深さ0.25mを測る。埋土中には炭化物が多く混入していた。

ＳＫ1226（Fig.114）

第45次調査区の南側で，ＳＥ1190・1320，ＳＫ1227を切っている。上面は長軸1.86mと広がるが，途中で径0.87mと窄まり，底部は径0.26mを測る。

ＳＫ1227（Fig.118）

ＳＫ1226に西壁の大半を切られるため詳細は不明。残存長1.2m，最大幅1.65m，深さ0.44mで，底面は平坦である。

ＳＫ1228（Fig.124）

ＳＫ1204の１m北東側に位置し，ＳＤ1300を切っている。東壁は土層観察ベルトの下になり，西壁は別遺構と重複する。南北長3.22m，深さ0.24mで，底面は平坦面をなす。

ＳＫ1229（Fig.124）

ＳＫ1225の2.3m西側に位置する。菱形状を呈する浅い土坑で，長軸1.75m，短軸1.4m，深さ0.24mを測る。

ＳＫ1238（Fig.125）

第45次調査区の南西側に位置し，ＳＤ1237と重複する。楕円形を呈し，長軸1.55m，短軸0.88mと小型であるが，深さは0.83mと大きさに比して深めの土坑である。

ＳＫ1241（Fig.125）

第45次調査区の南西側で，ＳＫ1229の６m北西側で検出した。不整形を呈し，長軸1.68m，短軸1.27m，深さ0.28mを測る。

ＳＫ1243（Fig.115，PL.82-2）

ＳＥ1192の東隣に重複して位置する。径1.57m，深さ0.9mを測り，底面は平坦である。埋土中には土器・瓦片が多量に入っていた。

ＳＫ1244（Fig.126）

ＳＫ1243の南側で，同土坑と壁を接して検出した。長軸4.14m，短軸2.62mの不整方形を呈し，深さは0.2mと浅い。底面はフラットをなす。

ＳＫ1246（Fig.125）

ＳＫ1215の1.5m北側に位置し，ＳＥ1195に南西隅を切られる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.78m，短軸2.02mの大きさで，壁高は0.15mの遺存状況。底面はフラットである。

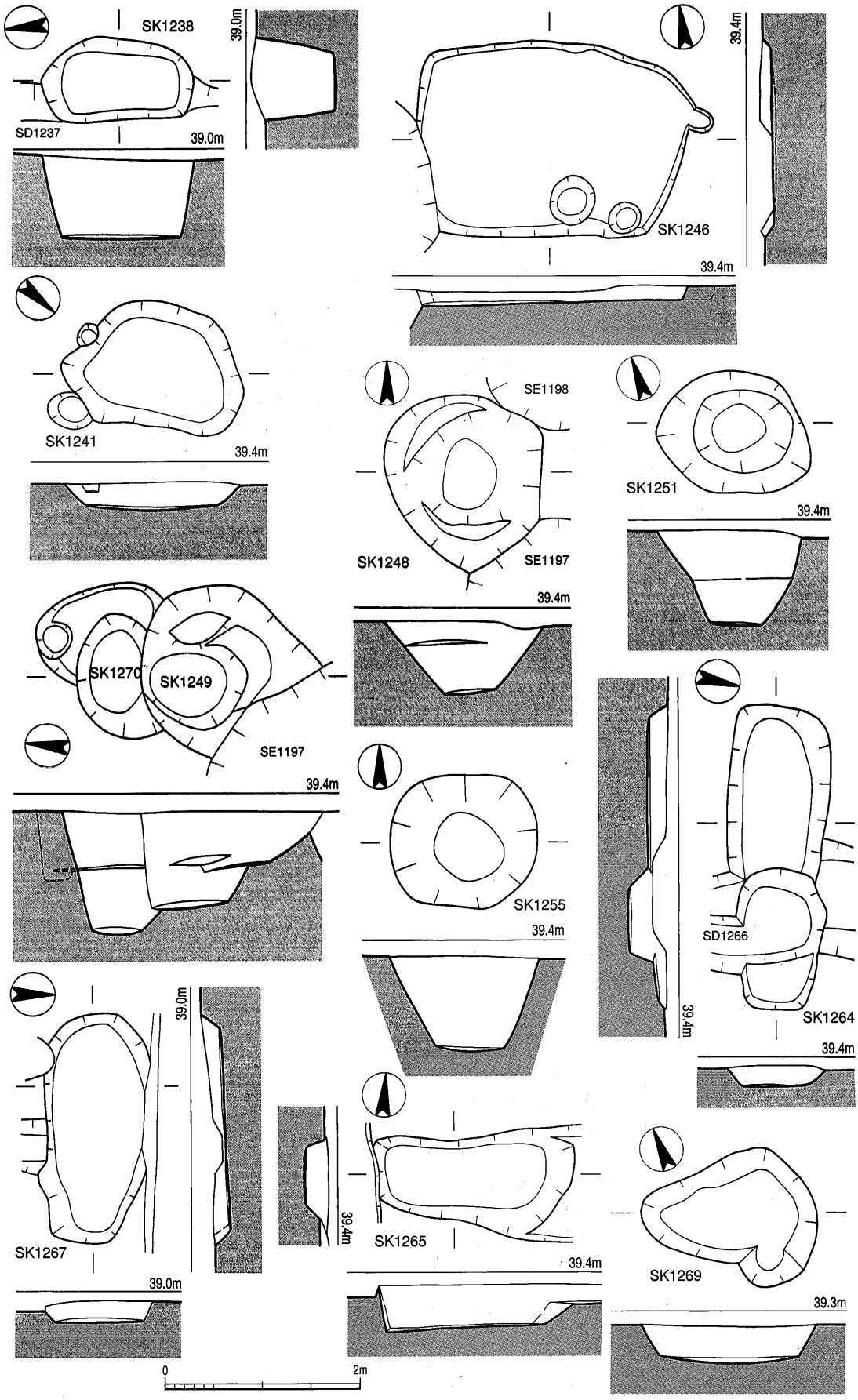


Fig. 125　東辺域土坑実測図②（1/60）

ＳＫ1248（Fig.125，PL.84-2,86-2）

ＳＫ1216の3.5m北東側に位置し，ＳＥ1197・1198を切っている。平面形は円形を呈し，断面は摺鉢形をなす。径1.6m，深さ0.73mを測る。

ＳＫ1249（Fig.125，PL.84-2）

第45次調査区の中程に位置し，ＳＥ1197に切られ，ＳＫ1270を切っている。円形を呈し，東西長1.63m，深さ0.98mを測る。南壁には幅0.3mのテラスを設けている。

ＳＫ1251（Fig.125）

ＳＫ1240の1.5m北側に位置し，ＳＥ1199を切っている。平面形は長円形を呈し，長軸1.6m，短軸1.24m，深さ0.98mを測る。

ＳＫ1255（Fig.125，PL.86-3）

ＳＥ1201の２m東側で検出した。円形を呈し，長径1.5m，短径1.35m，深さ0.98mを測る。断面は摺鉢形を呈し，上面は大きく開口する。

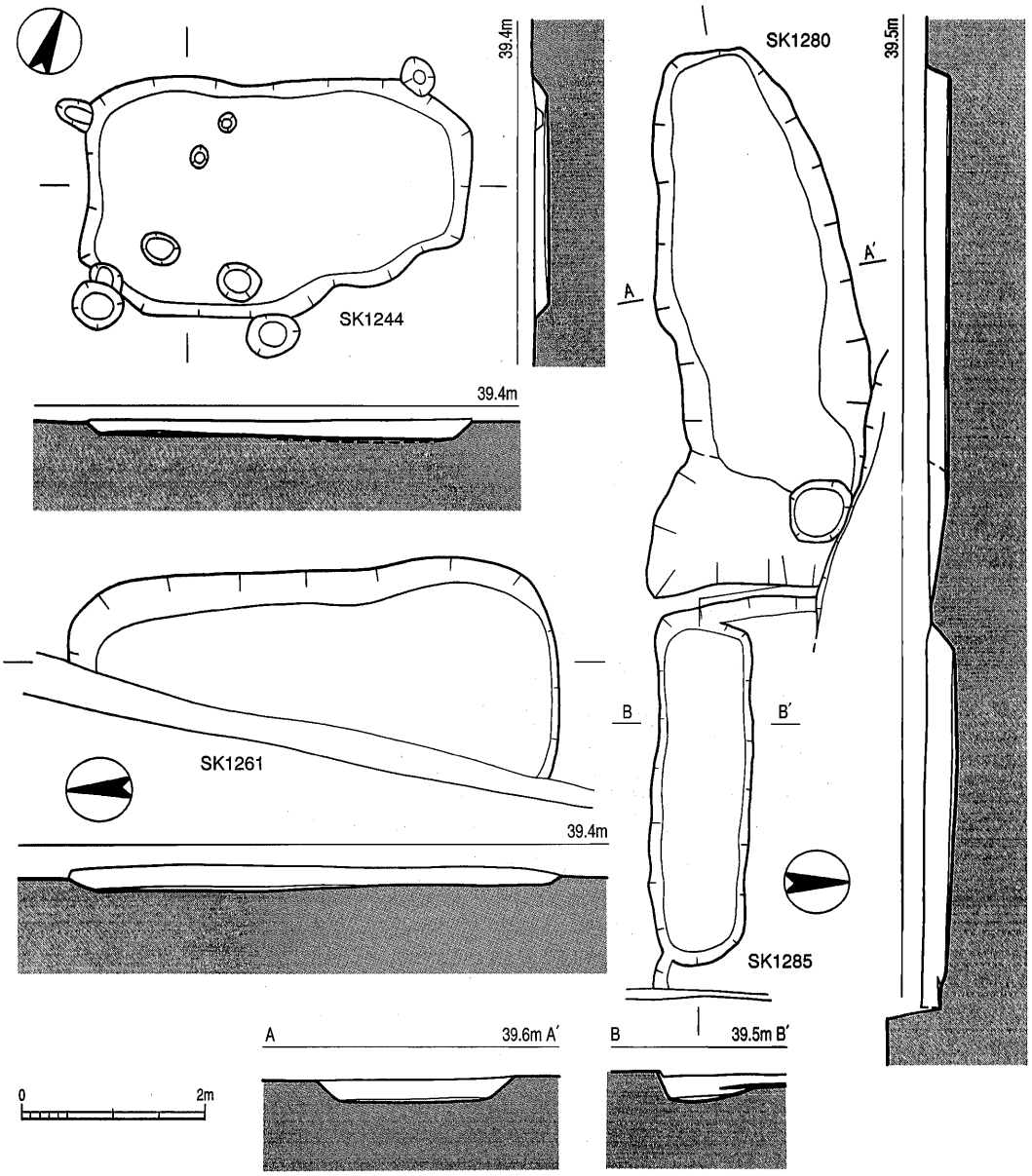


Fig.126　東辺域土坑実測図③（1/80）

ＳＫ1257（Fig. 113）

ＳＥ1186に西壁の大半を切られて位置する。不整形を呈し，最大幅1.96mを測る。底面は平坦で，壁高は10cmの遺存状況。

ＳＫ1261（Fig. 126）

第45次調査区の北西側で検出した。隅丸長方形を呈し，長軸5.3m，深さ0.28mを測る。底面は平坦であるが，北側に緩傾斜している。

ＳＫ1264（Fig. 125）

第45次調査区の北東側に位置し，ＳＤ1266に切られる。長方形の土坑で，東西方向に長軸を有する。長さ3.1m，幅１m，深さ0.2mを測る。

ＳＫ1265（Fig. 125）

ＳＫ1264の1.5m東側に位置し，ＳＢ1250柱掘方に切られる。長方形を呈し，長軸2.06m，短軸1.12m，深さ0.48mを測る。底面は西側に若干下がっている。

ＳＫ1267（Fig. 125）

第45次調査区の南東側に位置する。不整長方形を呈し，長軸2.34m，短軸0.98m，深さ0.16mを測る。

ＳＫ1269（Fig. 125）

ＳＫ1267の2.2m西側で検出した。三角形状を呈し，長軸1.8m，深さ0.68mを測る。

ＳＫ1270（Fig. 125）

ＳＫ1249の北側で，南壁を切られて位置する。また，東壁側は別遺構と重複している。深さは1.25mあり，小形ながらしっかりした土坑である。

ＳＫ1280（Fig. 126）

第45次調査区の北西側で検出した。茶灰色土層から切り込まれた長方形状の土坑で，下層には植物遺体層が堆積している。埋土中からは墨書を有する土器が多く出土している。また，鞴羽口・坩堝片もみられた。長軸5.86m，短軸2.04m，深さ0.24mの大きさ。

多量の墨書土器出土

ＳＫ1285（Fig. 126）

ＳＫ1280の東隣に位置する。当土坑も茶灰色土層から切り込まれた土坑で，土層的にもＳＫ1280と類似する。隅丸長方形を呈し，長軸3.9m，短軸1.08m，深さ3.02mを測る。埋土中から「造寺」・「□調長」銘の墨書土器が出土している。

「造寺」銘墨書土器

ＳＫ1354（Fig. 127）

第47次調査区の南西隅で検出したが，大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.85mを測る。今回，新たに報告した。

ＳＫ1357（Fig. 127）

ＳＫ1354のすぐ北側に位置し，ＳＢ1355・1362と重複する。前回未報告であるが，隅丸方形を呈し，中に角礫などが入っていたので，土坑として報告した。長軸1.35m，短軸1.26m，深さ0.35mを測る。

ＳＫ1359（Fig. 127，PL. 71-1）

第47次調査区の中央やや南側にあり，ＳＢ1350を切っている。東西に長い溝状の土坑で，長さ3.55m，幅0.8m，深さ0.4mを測る。底面は平坦ではなく，中程が深くなっている。埋土中

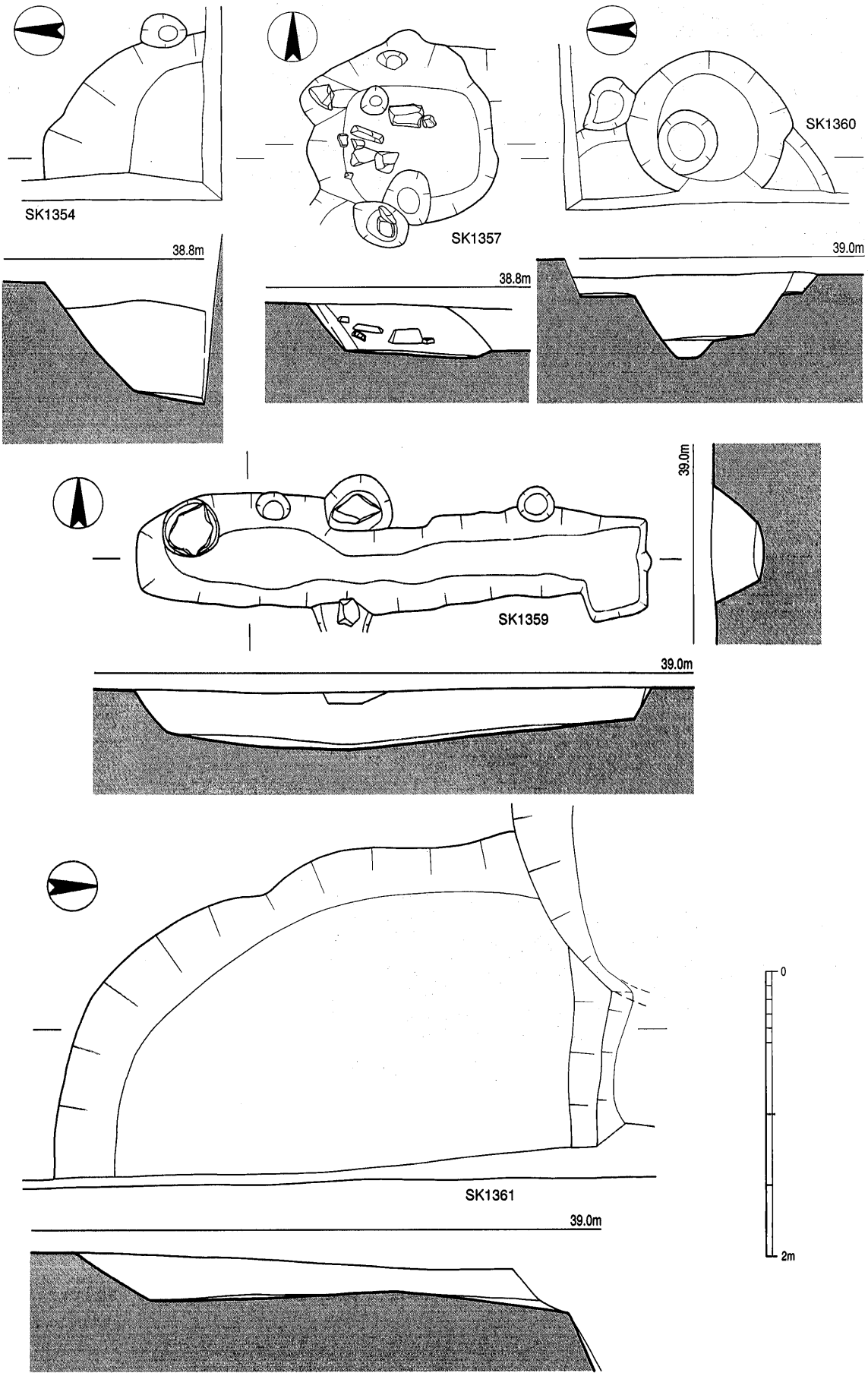


Fig. 127　東辺域土坑実測図④（1/40）

から多くの土器が出土している。

ＳＫ1360（Fig.127）

第47次調査区の西壁中央で検出した。直接的な切合い関係はないが，ＳＡ1352と重複する。径1.05mの円形を呈し，深さは0.45mを測る。底面にはピットがあるが，当土坑に伴うものか不詳。

ＳＫ1361（Fig.127）

第47次調査区の北側に位置し，ＳＥ1365に切られる。大半が調査区外にあるため詳細は不明。径６m程の円形を呈するか。壁高は0.3mで，底面は平坦である。

ＳＫ3464（Fig.120，PL.97-2）

第119次調査南区の中央で検出した。ＳＥ3470に西壁側を切られるものの隅丸方形を呈するか。残存長2.22m，深さ0.84mを測る。底面は平坦をなす。埋土は黒褐色土であった。

ＳＫ3467（Fig.120）

第119次調査南区の中央部に位置し，ＳＥ3465・3470に切られる。南壁を失うが，平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.34m，深さ0.42mを測る。

ＳＫ3471（Fig.128）

第119次調査南区の北東側で検出した。隅丸方形を呈し，長軸1.4m，短軸1.16m，深さ0.38mを測る。

ＳＫ3485（Fig.128）

ＳＫ3467の3.5m南西側で，ＳＤ3478の先端の穴を土坑として報告する。不整円形を呈し，長軸1.46m，短軸1.15m，深さ0.48mを測る。底面には角礫が置かれていた。

ＳＫ3501（Fig.128）

第119次調査北区の南東側に位置し，ＳＫ3502を切っている。不整円形を呈し，長軸2.36m，短軸2.2m，深さ0.45mを測る。埋土は黒灰色土で，多数の土師器が出土した。

ＳＫ3502（Fig.128）

ＳＫ3501の東側で，西壁の一部を切られて位置する。楕円形を呈する小土坑で，長径1.5m，深さ0.22mを測る。

ＳＫ3506（Fig.128）

ＳＫ3501の６m北側で検出した。不整長方形を呈するが，西壁は丸みを帯びる。長軸3.8m，短軸2.8m，深さ0.36mを測る。底面はほぼフラットである。

ＳＫ3507（Fig.128）

ＳＫ3506の１m北側で検出した。隅丸長方形の小土坑で，長軸1.2m，短軸0.75m，深さ0.5mを測る。埋土は粘性の強い黒灰色土であった。底面は平坦であるが，西に緩傾斜している。

ＳＫ3529（Fig.122）

第119次調査北区の中程に位置し，ＳＥ3535を切っている。平面形は不整円形を呈し，径1.68m，深さ0.42mを測る。底面は平坦をなす。

ＳＫ3553（Fig.96）

第119次調査北区の南西側で検出した上層遺構。平面形は長円形を呈し，長軸2.26m，短軸1.38m，深さは８cmと削平が著しい。ＳＡ3561に囲まれる形で位置する。

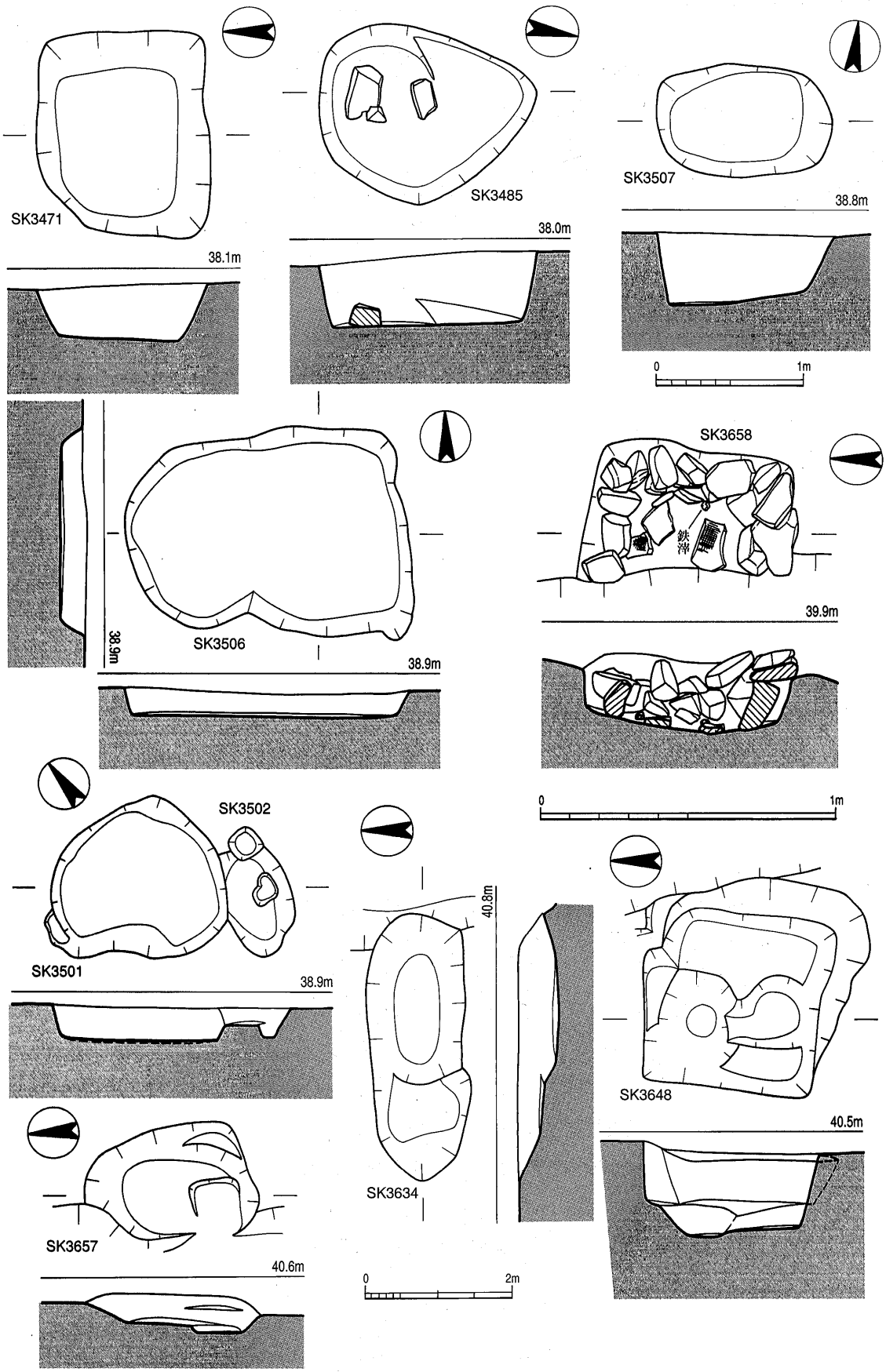


Fig. 128　東辺域土坑実測図⑤（1/20・1/40・1/80）

ＳＫ3614（Fig. 129）

第121次調査区の東壁中央で検出した。ＳＤ3630に上部を削平される。北壁長4.1m，南壁長2.5m，東壁長5.5mを測る逆台形を呈する土坑で，底面はフラットである。埋土には暗灰褐色の粘質土が堆積していた。

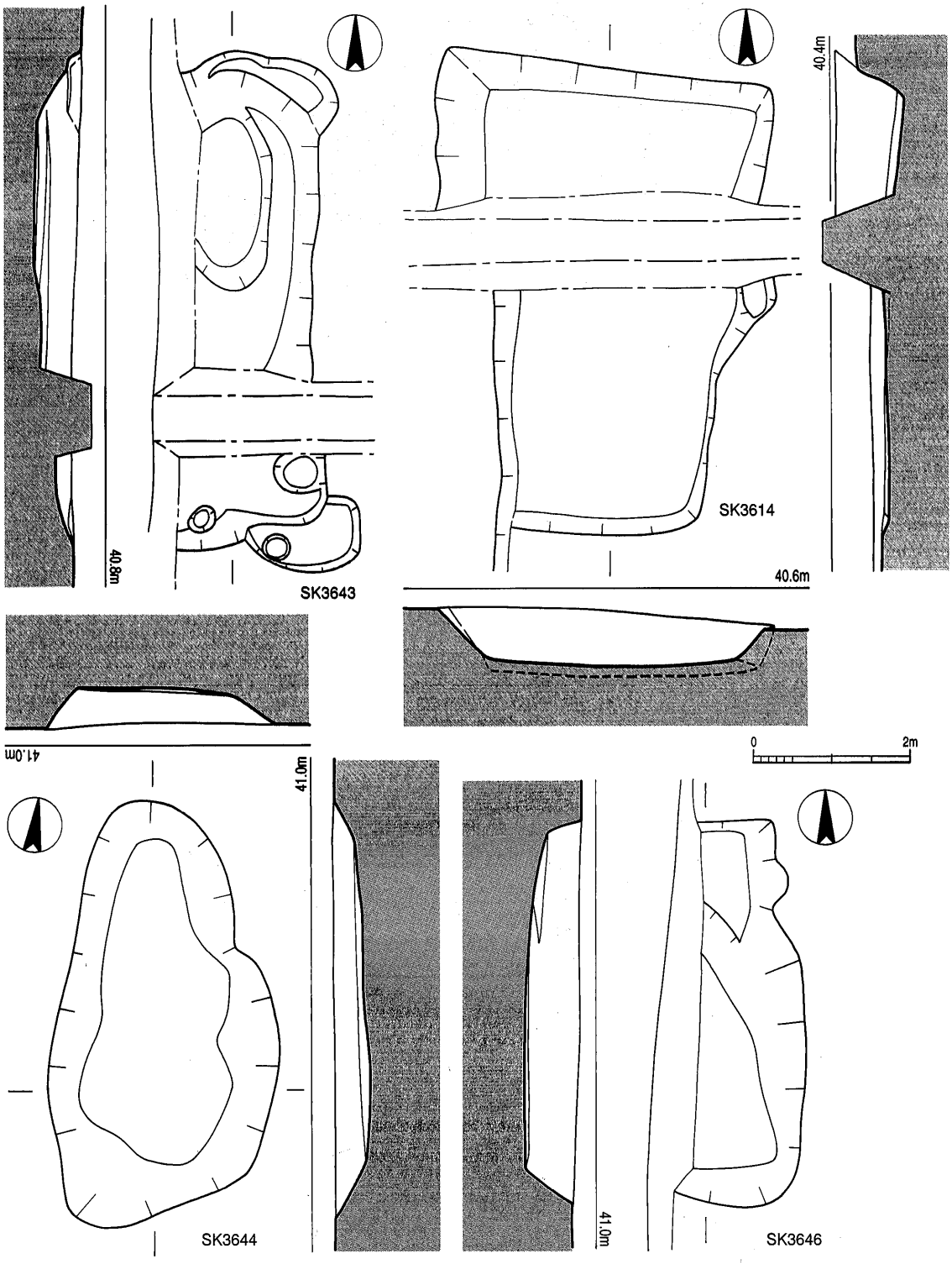


Fig. 129　東辺域土坑実測図⑥（1/80）

ＳＫ3634（Fig. 128）

ＳＫ3614の5.5m南西側に位置し，ＳＤ3630に東端部を切られる。長円形を呈し，長軸3.6m，短軸1.35m，深さ0.54mを測る。西壁側には幅0.7mのテラスを有する。

ＳＫ3643（Fig. 129）

第121次調査区の西壁中央で検出した。西半部は調査区外に延びるものの平面形は隅丸長方形を呈しよう。南北長6.3m，壁高0.54mで，底面の北半部が楕円形状に一段深くなっている。

ＳＫ3644（Fig. 129）

ＳＫ3643の３m北東側に位置し，ＳＡ3624を切る。不整楕円形を呈し，長軸5.4m，短軸2.9m，深さ0.45mを測る。底面は平坦であるが，南側に緩傾斜している。

ＳＫ3646（Fig. 129）

ＳＫ3644の2.5m西側で，ＳＫ3643の北側に位置する。西壁は調査区外に延びる。南北長4.9m，深さ0.7mを測る。底面はほぼフラットで，北側に低いテラスを有する。

ＳＫ3648（Fig. 128，PL. 107-2）

ＳＫ3634の5.5m南側にあり，ＳＢ3610・3626，ＳＡ3621に切られる。一辺2.4mの隅丸方形を呈し，底面には凹凸がみられる。埋土中から鉄滓が出土している。

ＳＫ3657（Fig. 128）

第121次調査区の東壁中央で検出した。ＳＡ3625を切り，ＳＤ3630に西壁を切られる。隅丸方形を呈し，長軸2.36m，短軸1.46m，深さ0.4mを測る。

ＳＫ3658（Fig. 128，PL. 107-3）

ＳＫ3614の3.5m南側に位置し，ＳＤ3630に切られる。前回は石組井戸ＳＥ3658と報告していたが，縮尺・寸法に誤りがあった。実際は東壁長64cm，残高24cmの大きさである。また，比較的小型の石組井戸であるＳＥ3530ですら掘方径は1.3mで，石組の下場内径は0.6mを測る。それからしても井戸とは見なし難く，今回は土坑として報告した次第である。掘方内には15cm前後の石が詰まっており，瓦片・鉄滓などが出土した。（小田）

７）池状遺構

ＳＸ1200

第45次調査区の北端で検出した。池状の落込で，ＳＢ1250及びＳＫ1280を切っている。東西21m，南北８mを確認したが，遺構としては北東側に広がる。最深部で遺構面からの深さ50cmを測る。埋土には腐植土が厚く堆積しており，多量の土器・陶磁器・瓦類及び木製品が出土した。また，「元㚑二年」銘の卒塔婆も出土している。

「元□二年」銘木簡

ＳＧ1305（Fig. 130，PL. 89-1）

第45次調査区の北側に位置し，ＳＡ1235・ＳＢ1240・ＳＤ1230に切られる下層遺構で，先の遺構と重複しているため北辺と南辺の一部を検出したにすぎないが，復原は十分可能である。平面形は東西方向に長い長方形を呈し，南北長は4.9m，東西復原長は6.5m，深さは最深部で0.8mを測る。取水部は幅1.9mで，池の最深部より20cm高い。また，池の南辺部には排水施設となる石組ＳＸ1306を付設しており，池と南北溝ＳＤ1300を繋いでいる。

長方形の池

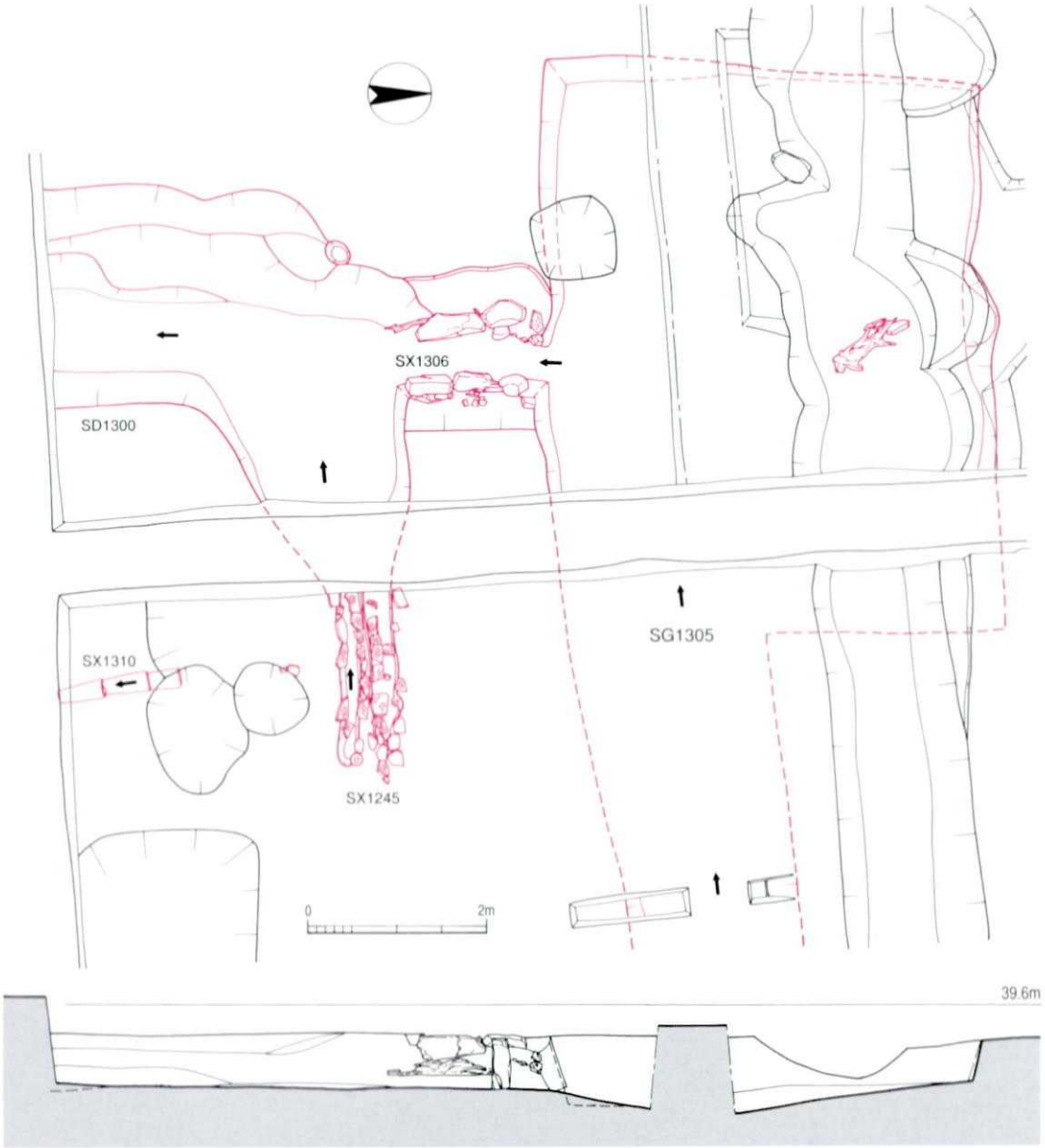


Fig.130　池ＳＧ1305実測図（1/80）

排水施設

ＳＸ1306（Fig.130･131，PL.89）

ＳＧ1305に伴う石組水路で，掘方は幅1.8ｍを測る。右岸の石組は２個で，池側の石は立てて用いるが，溝側の石は横板材の上に乗せた状態である。左岸は40㎝×50㎝程の偏平な石を３個立てていた。石組長1.35ｍ，内法0.36ｍを測る。

池と溝との接続部分を石組としたのは，接続部分の補強と水量調節及びこの箇所を通路として確保する必要があったためと考えられる。上部が削平されているため開渠となっているが，本来暗渠であった可能性を有する。（小田）

8）暗　渠

S X1245（Fig. 130·131，PL. 87-1·2）

第45次調査区の北側で検出した瓦組暗渠で，西端はＳＤ1300に接続するものと考えられる。階段状に３段掘り込み，各段ごとに平瓦片を斜めに埋設したもので，最下部は幅25cmの溝状となっている。ＳＧ1305廃絶後，ＳＤ1300の先端を右側に曲げＳＸ1245に繋げている。検出長2. 1

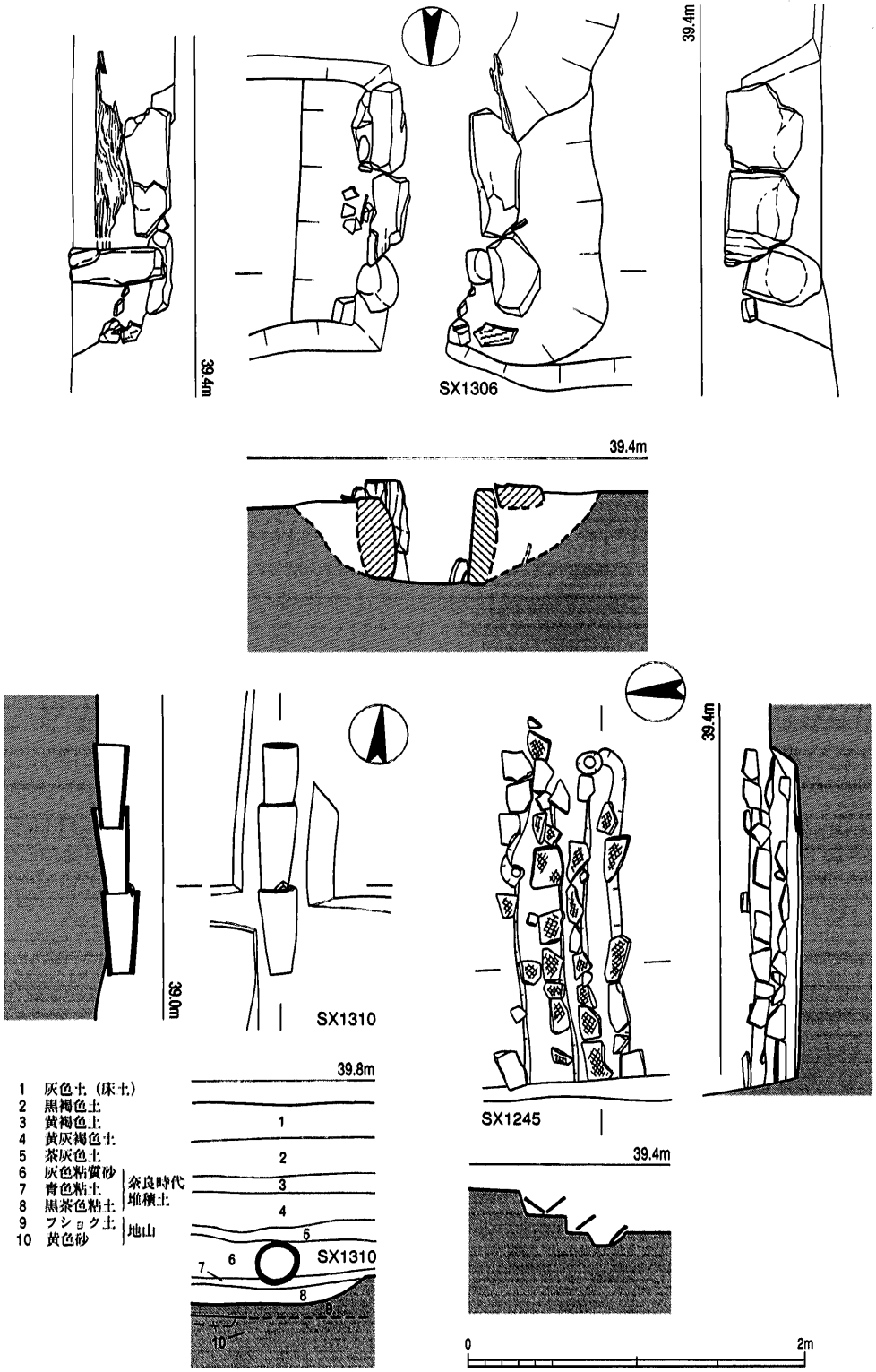


Fig. 131　排水施設ＳＸ1306，暗渠1310，瓦組ＳＸ1245実測図（1/40）

m，幅0.65mを測る。

ＳＸ1310（Fig.130･131，PL.87-1,88-1･2）

ＳＸ1245の２m南側で検出した。灰色粘砂に埋設されており，南北方向に土管を３本連結させたものである。土管一本の長さは50cm前後で，全長1.36mとなる。南側に排水しているが，いかなる施設に伴うものかは明らかでない。（小田）

９）鋳造関連遺構

ＳＸ3566（Fig.132）

第119区次調査北区の西側で検出した。１間×１間建物の中央に方形土坑を掘り込んだ形態をなす。柱穴は径50cm前後の円形をなし，梁行1.5m，桁行1.75mを測る。中央土坑は方形を呈し，0.7m×0.75m，深さ0.26mを測る。埋土中から鋳型片が出土しており，鋳造関連の施設と考えられる。

ＳＸ3640（Fig.132，PL.108）

第121次調査区の中央やや西側で検出した。瓦溜ＳＸ3632に掘り込んでいる。掘方は隅丸方形を呈し，南北1.7m，深さ0.28mで，底面は凹凸が著しい。最下部に炭化物混じりの暗黄褐色粘質土（③層）を入れ，次に茶褐色粘質土（②層）を1.1mの範囲で貼り付け，最後に灰白色粘土（①層）を0.7mの範囲で貼付する。②層の上面にも真土状の粘土を貼付しているが，

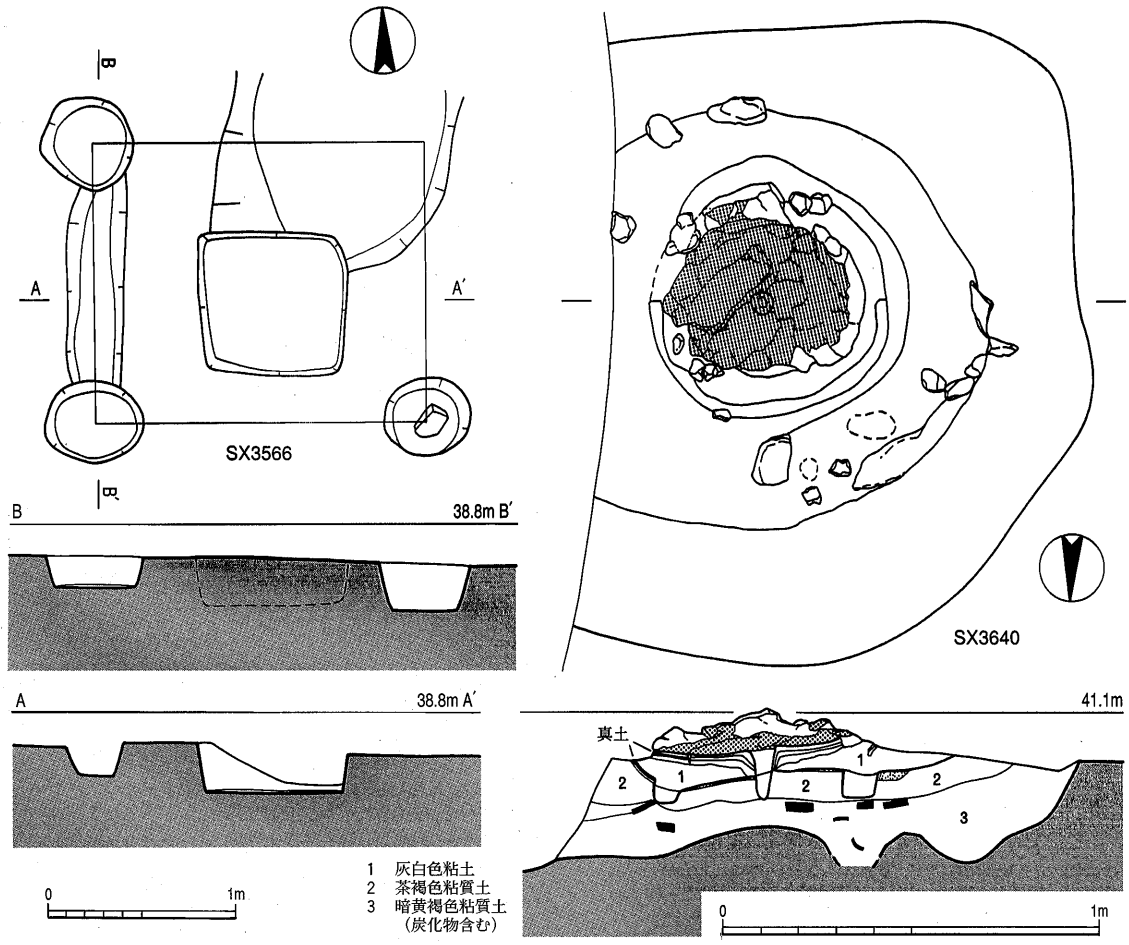


Fig.132　鋳造遺構ＳＸ3566・3640実測図（1/20・1/40）

上面のみならず厚さ１cmばかり黒変している。また，①層下部には枕木痕跡とみられる10cm弱の方形穴が左右に観察できる。①層目の表層は緻密な真土を貼付しており，強い火熱により赤化する。火熱が内部まで浸透したようで，表層から４cm程まで黒化している。上面中央には径６cm，深さ13cmの孔を穿つ。この孔が中子を支えるためのものであるなら①層自体は鋳型外型とみなされる。なお，当遺構は半裁し，保存している。（小田）

10）落　込

ＳＸ3618

第121次調査区の南端で検出した隅丸方形状の落込みで，ＳＤ3619と重複するが，土坑の方が後出する。南北長７m以上，深さ0.35mの大きさで，埋土は灰褐色粘質土であった。

ＳＸ3650

第121次調査区の北東隅で検出したが，大半が調査区外にある。ＳＤ3630と重複する落込で，検出面からの深さは0.7mを測る。寛政５年（1793）に完成したとされる『筑前国続風土記付録』の観世音寺周辺を描いた絵図によると，講堂の東側に「猿沢池」が描かれ，池の中には木と石？が表現されている。その30年程後の文政４年（1821）に描かれた『筑前名所図絵』では，講堂の東側に木が描かれ「さる沢」と表記されているが，既に池の表現はなく，畑となっている。この絵図に描かれた木が現在の楠とすると，ＳＸ3650は「猿沢池」に該当しよう。「猿沢池」か

ＳＸ3651

ＳＸ3650の２m西側で検出した。長軸4.8m，短軸3.3m，深さ0.2mの不整形を呈する浅い落込である。

ＳＸ3652

ＳＸ3651の1.7m北側に位置する。長軸2.8m，短軸1.5m，深さ0.2mの楕円形を呈する浅い落込で，ＳＢ3620の柱掘方は当土坑床面で検出した。また，掘方埋土上から須恵器甕が出土している。

ＳＸ3653

ＳＸ3651の3.8m西側で，西半部は調査区外に延びる。ＳＸ3635の南西壁を若干切っている。東壁長1.8m，深さ0.2mの隅丸方形を呈する浅い落込。

ＳＸ3654

ＳＸ3652の3.3m西側に位置する。遺存状態が悪く，東壁10cmが残る程度であった。

（小田）

11）その他の遺構

瓦　溜

ＳＸ3632

第121次調査鋳造遺構ＳＸ3640の東隣で，同遺構に切られる。不整形を呈する瓦溜で，幅2.1m，深さ0.2mを測る。

ＳＸ3635

ＳＸ3651の西側から調査区隅にかけては，茶褐色土が堆積した浅い落込が広がり，埋土中か

らは老司Ⅰ式軒瓦や鬼瓦とともに巴文軒丸瓦などの瓦類が出土しており，特にＳＸ3653と接する箇所に多くみられた。ＳＸ3651・3654も同様な遺構である。

土器溜

ＳＸ3655

第121次調査区の南西で検出した。ＳＤ3619埋没後の濁茶色土中から集積した状態で土師器坏が出土したが，掘込は明瞭ではない。坏は数個を重ねた状態で出土しており，その殆どに油煙がみられたことから灯火器としての使用が考えられる。講堂の補足調査として実施した第126次補足調査検出の廃棄土坑ＳＫ3789・3795も同様な性格の遺構で，法要に使用した土器を一括埋納したものとみられる。

土器の一括投棄

石　垣

ＳＸ437（Fig.133，PL.69）

第20次調査区の南端で検出した。石垣の南側は暗灰色土が堆積した谷部となっており，谷部を整地・地上げした際の護岸として構築されたもので，西側に延びる可能性がある。石垣は検出長2.1m，高さ1.06mを測り，一辺22～45cm，厚さ11～33cmの花崗岩・砂岩・凝灰岩の切石を最高５段積み上げたもので，中には五輪塔の地輪を転用したものもみられた。

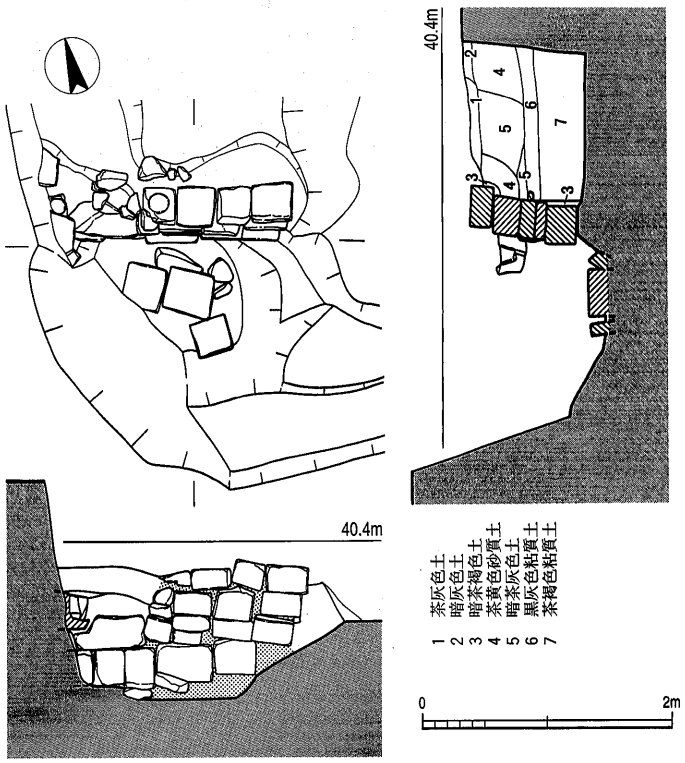


Fig.133　石垣ＳＸ437実測図（1/60）

積石塚

ＳＸ1220（Fig.134，PL.88-3）

第45次調査区の南西部には，長径6.7m×短径5.5mの小山が存在する。この小山については，奥村玉欄の編集による『筑前名所図会』（文政４年成立）に小山が描かれ，「ごま堂址」の文字が記入されていることから護摩堂＝菩薩院の基壇の一部とする意見と東辺築地の遺構とする意見があった。そこで，小山に幅１m，長さ4.3mのトレンチを入れ盛土土層の確認を行った。

その結果，盛土土層は大きく上層の表土層（①層：厚さ0.4～0.6m）と５cm大の礫が詰まった礫層（⑤層：厚さ0.9m）からなり，小石を積み上げた塚であることが判った。礫層には殆ど遺物は含まれないが，表土層には近世の遺物が含まれていた。また，積石塚本体は黒褐色土の上にあることから中世をさほど遡るものでもなく，菩薩院及び東面築地に関する遺構である可能性は完全に否定された。

しかし，積石塚の東側には「コ」字形に巡る幅0.9～1.1m，深さ0.5mの礫敷があり，東西

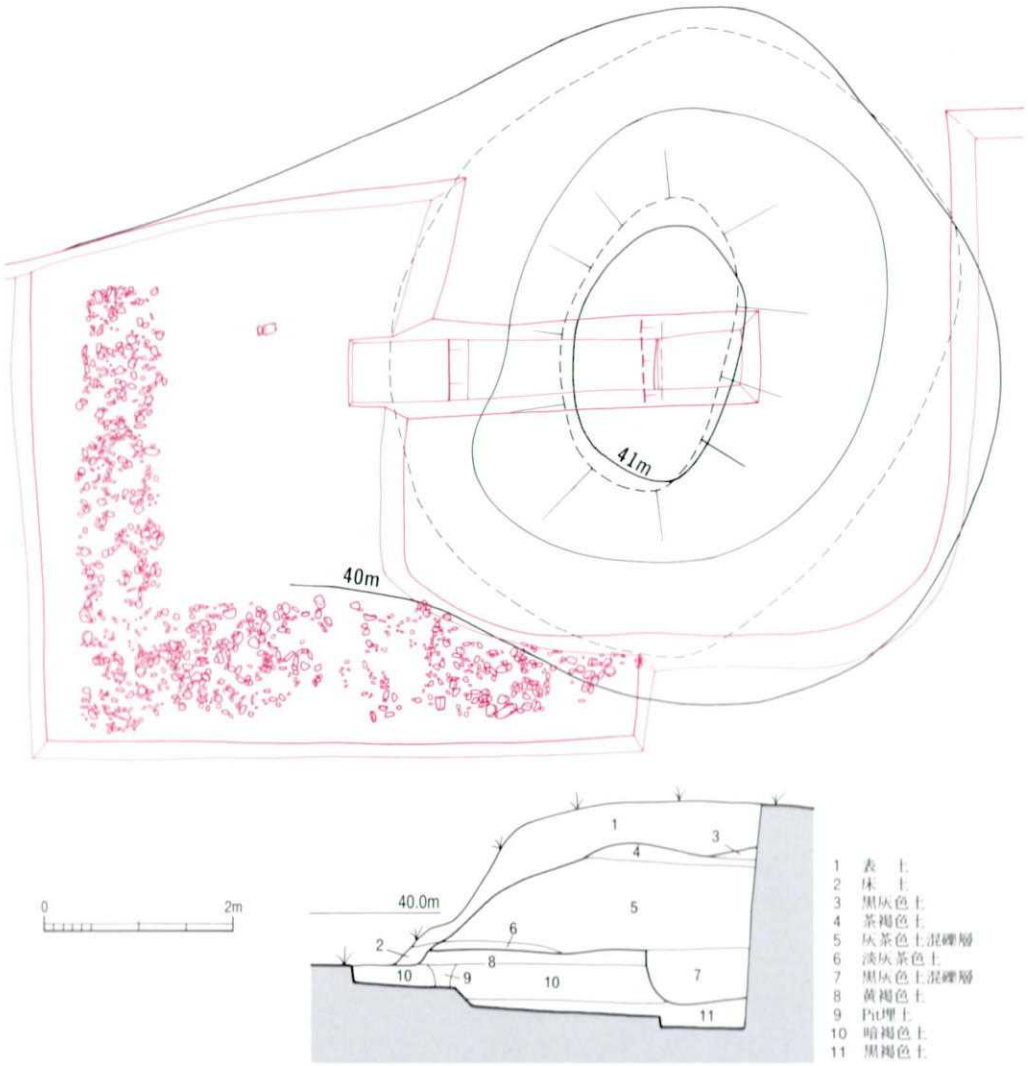


Fig. 134　積石塚ＳＸ1220実測図（1/80）

幅は外側で７ｍ，内側では５ｍを測る。しかし，この礫敷は第119次調査区までは延びていないので外側幅７ｍの方形を呈するものとみられる。この礫敷を建物に伴う雨落溝とみなすことが可能ならば伝承などから考えて，この場所に室町時代頃に護摩堂が建っていたとすることも強ち無理はない。ちなみに菩薩院に関しては，『観世音寺絵図』によると戒壇院と対になる場所－東面築地と南面築地との隅部に描かれており，現宝蔵の南側の未調査地に想定される。

護摩堂の跡か

（小田）

(3)　北辺域

北辺域の調査としては，大宰府史跡第70次・70次補足・120次・123次・144次調査がある。第70次・70次補足・120次調査は観世音寺の解明を目的とした計画調査であるが，他は現状変更（住宅改築等）に伴う確認調査として実施した。

1）柵

ＳＡ1737（Fig.135）

第70次調査区の東側で検出した。東西方向に走る柵で，４間分を確認した。柱穴は隅丸方形状を呈し，径0.5m前後を測る。柱間は2.4m等間である。

ＳＡ1840（Fig.135，PL.112-1･2）

第70次調査区の中央に位置する。下層遺構で，ＳＫ1771・1772・1778などの遺構に切られる。東西方向に走り，５間分を検出した。建物の可能性があったため精査したが，関連する柱穴は検出できなかった。

柱穴は隅丸方形を呈し，大きいもので1.1m程の掘方である。柱根が遺存しており，柱間は心々で西から2.55m，2.7m，2.55m，2.4m，2.4mと若干ばらつきがある。

ＳＡ3590（Fig.136，PL.129-2･3）

第120次調査区の南部で検出した東西方向の柵である。柱穴は東西溝ＳＤ3596中に掘り込まれている。８間分を検出した。柱間は一定しておらず，0.82～1.06mを測る。

ＳＡ3595（Fig.136，PL.129-2･3）

第120次調査区の南西部で３間分確認した。検出長は6.4m。柱筋に並ぶ小さなピットもこの柵に伴う可能性がある。

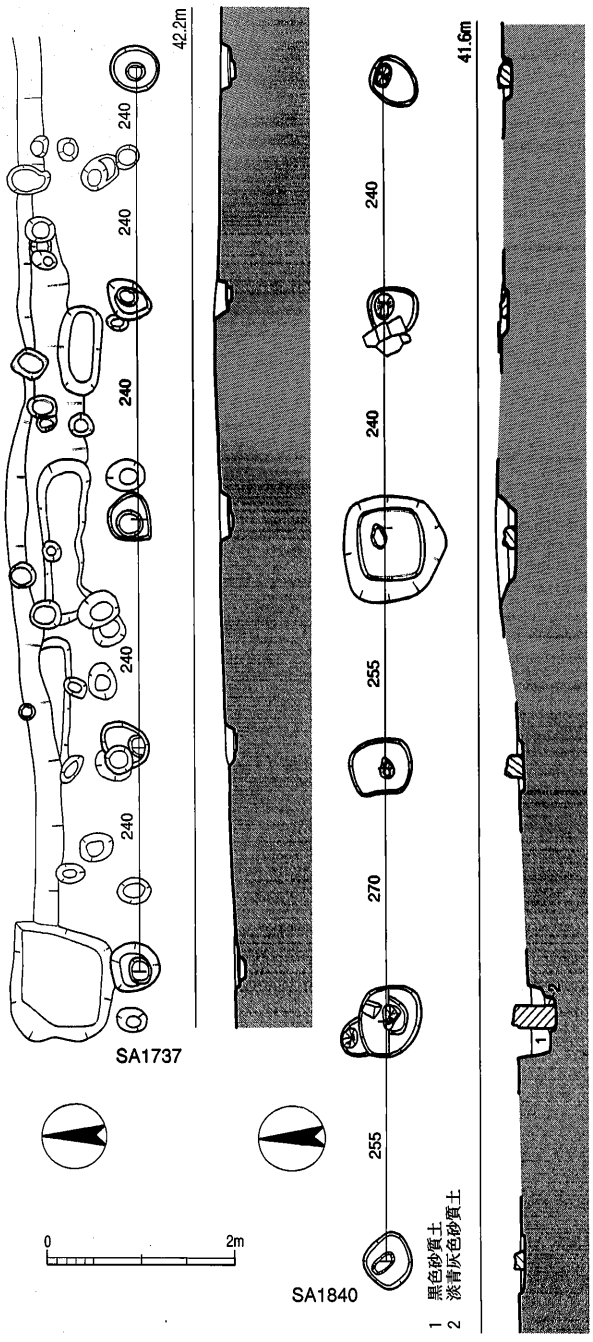


Fig.135　北辺域柵実測図①（1/80）

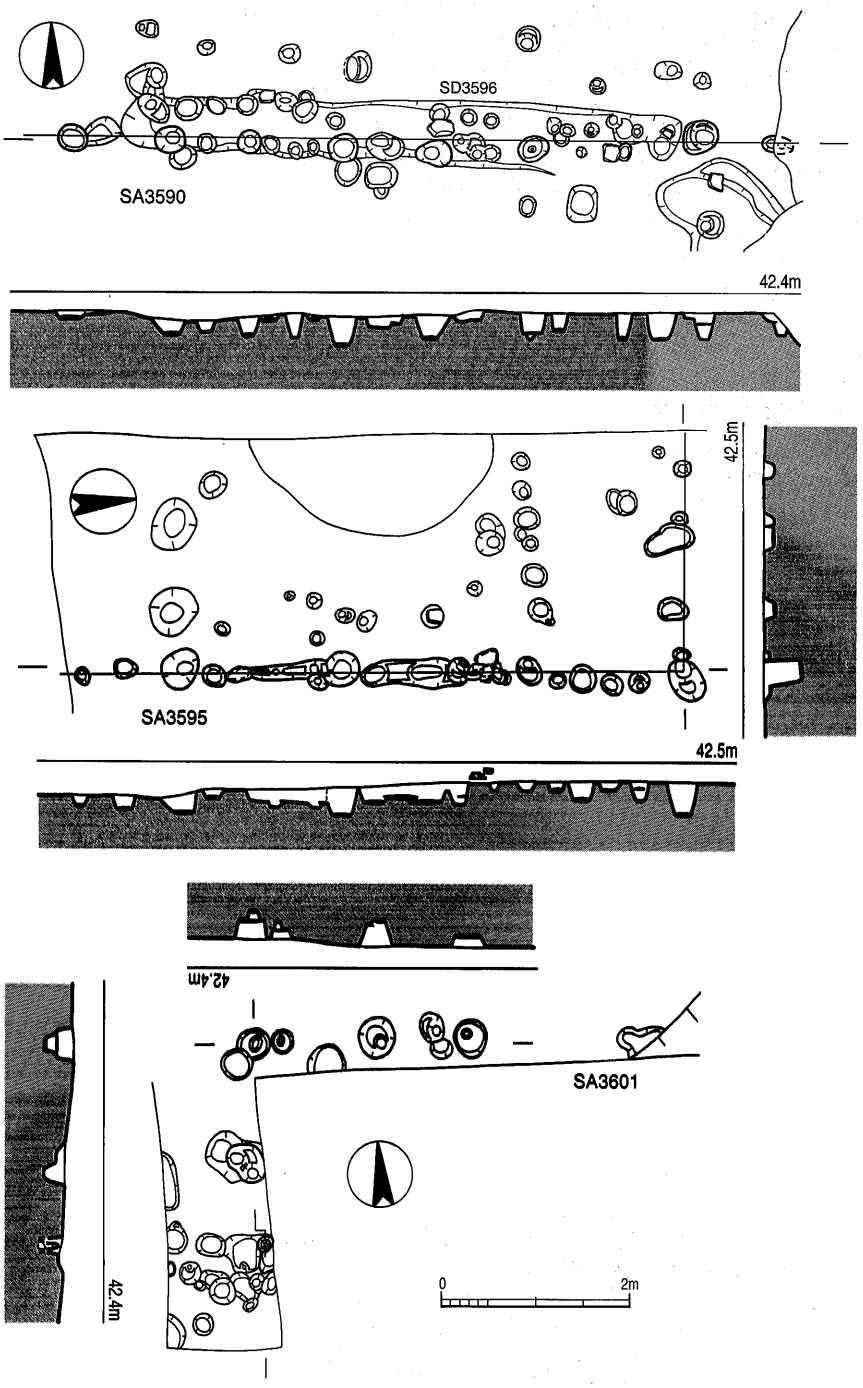


Fig. 136　北辺域柵実測図②（1/80）

S A 3601（Fig. 136）

第120次調査区の南中央に位置し，ＳＢ3606と重複するものの前後関係は不詳。北西隅部の検出に止まるが，東西２間分で南に折れるものと思われる。柱穴は円形を呈し，径0.34～0.4m，深さ0.2～0.3mを測る。（小田）

2）建　物

SB1691（Fig.137）

第70次調査区の東側で検出した上層遺構である。扁平な石2個が2.1m間隔で存在し，石の上面が平らで，かつ同レベルであることから建物礎石と判断した。

右側の礎石は長方形を呈し，長さ0.57m，幅0.43m，厚さ0.14mを測る。左側の礎石は三角形を呈し，長さ0.62m，厚さ0.26mの大きさである。礎石2個の遺存状態であるため建物規模等は不明。

SB1695（Fig.138）

礎石建物

第70次調査区の中央に位置し，床土除去後に検出した上層の礎石建物である。礎石自体は遺存しておらず，根石を

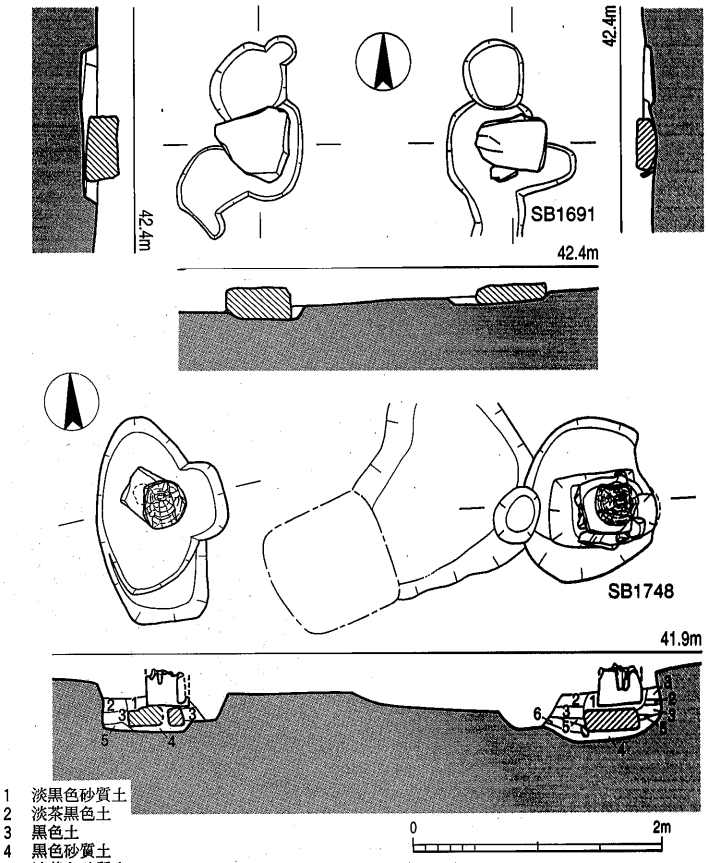


Fig.137　北辺域建物実測図①（1/60）

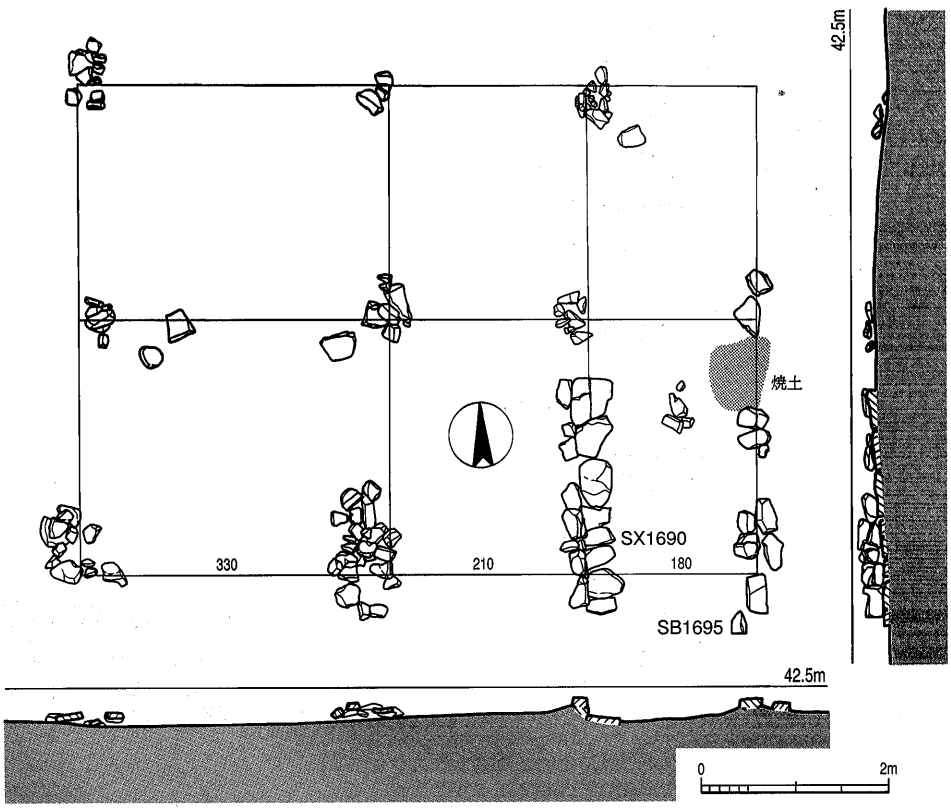


Fig.138　北辺域建物実測図②（1/80）

留めるのみ。根石には20～30cm大の花崗岩を使用している。礎石が残っていないため建物の正確な数値は測り得ないが，梁行２間（5.1m）×桁行３間（7.2m）の規模で，桁行の柱間は1.8m，2.1m，3.3mに復原した。石組ＳＸ1690は石列の方向及びレベルが根石と同じであることから当建物に伴う遺構と考える。また，東梁側中央には60cm程の焼土面がみられる。（小田）

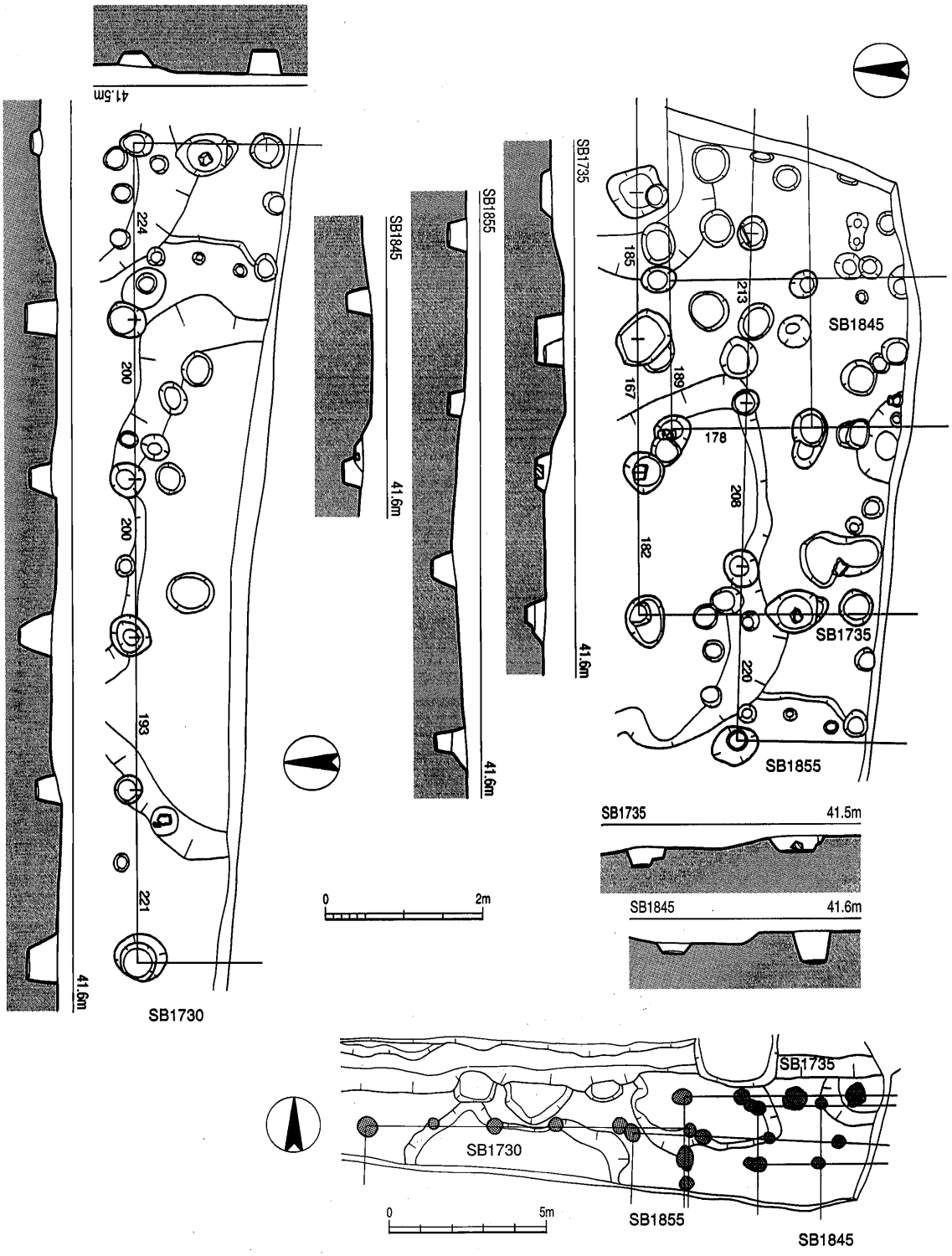


Fig. 139　北辺域建物実測図③（1/80）

ＳＢ1730（Fig.139，PL.113-1）

第70次調査区の南東部で検出した梁行１間以上×桁行５間の東西棟建物である。南側は調査区外となる。建物規模は10.41m×1.63m以上である。桁方向の柱間は2.08m等間に復原される。ＳＢ1735・1855と切り合う。

ＳＢ1735（Fig.139，PL.113-1）

第70次調査区の南東隅部で検出した梁行１間以上×桁行３間以上の東西棟建物である。南側と東側は調査区外となる。桁方向の柱間は1.79m等間に復原される。ＳＢ1730・1845・1855と切り合う。

ＳＢ1748（Fig.137，PL.112-3）

第70次調査区の中央部で検出した１間の掘立柱遺構である。最上層で検出した。掘方は東側が1.3m×1.1mの楕円形，西側が1.7m×1.1mの不整形を呈する。ともに径0.35mの柱根が遺

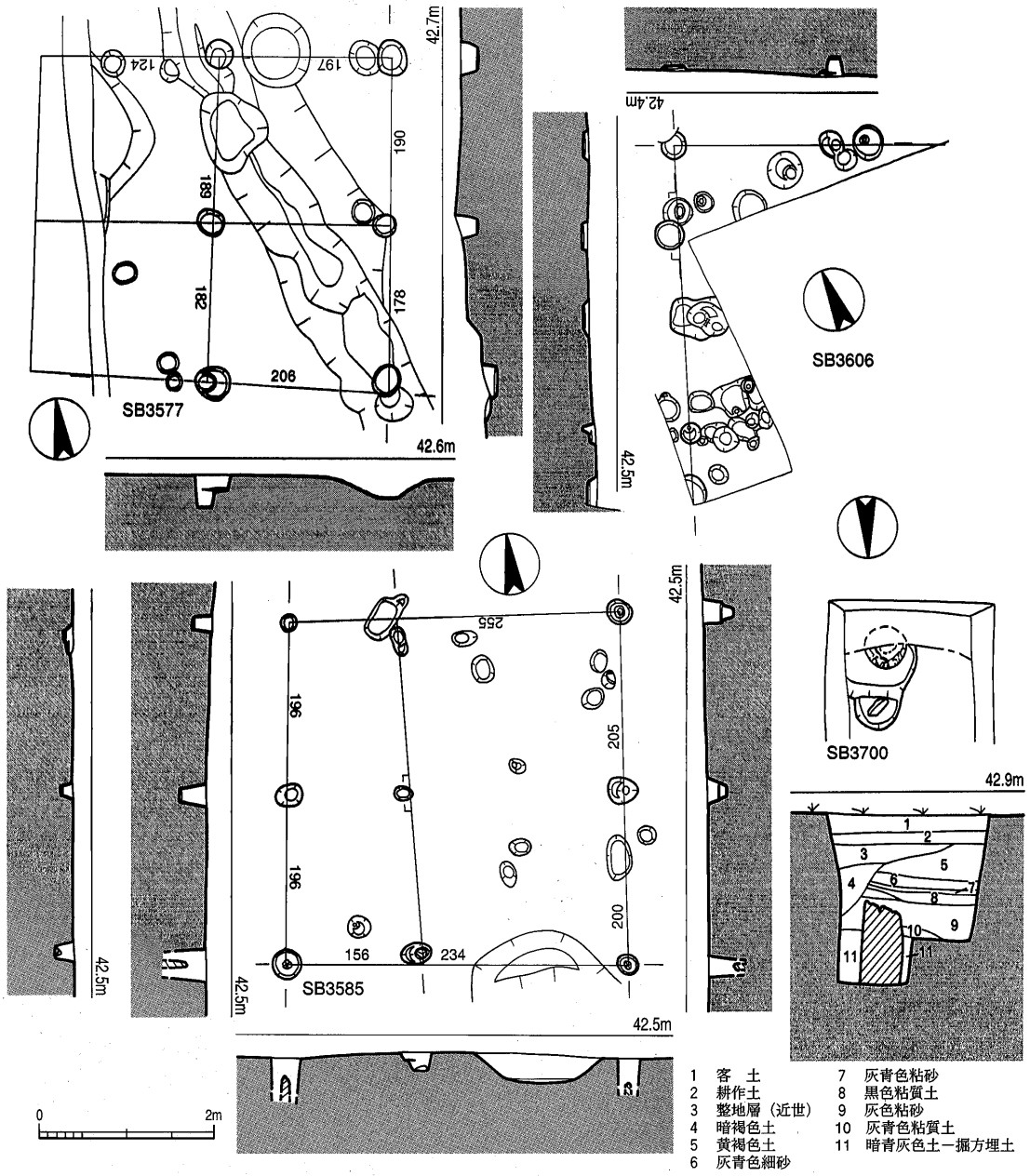


Fig.140　北辺域建物実測図④（1/80）

存している。下部が軟弱な地盤であるため自然石を礎盤として柱の下部に配している。柱の心々で3.65mを測る。遺構の性格については定かではない。（吉村）

ＳＢ1845（Fig.139，PL.113-1）

ＳＢ1735・1855と重複して検出した掘立柱建物であるが，両者の前後関係は不明。検出した範囲では梁行・桁行とも１間以上の規模であるが，２間（3.78m）×２間（3.56m）の総柱建物として復原した。柱穴は0.32～0.46mの円形を呈し，深さは0.3mの遺存状況。

ＳＢ1855（Fig.139，PL.113-1）

ＳＢ1735・1845と重複し，ＳＫ1757を切っている。北側柱を３間分検出した程度であるが，西端の柱穴は他に比して大きい。また，西延長線上に柱穴とすべき穴がないことから隅柱柱穴と考え，桁行３間以上の東西棟建物とみなした。

ＳＢ3577（Fig.140）

第120次調査区の北西部に位置し，ＳＤ3605を切っている。梁行２間（3.7m）×桁行２間の総柱建物として復原した。柱穴は0.26～0.4mの円形を呈し，深さ0.2～0.3mを測る。

ＳＢ3585（Fig.140，PL.129-2）

第120次調査区の南東側で検出した。ＳＤ3605を切り，ＳＥ3570と重複する。梁行１間（3.9m）×桁行２間（4.05m）の掘立柱建物で，柱穴を結ぶ線はほぼ方形をなす。柱穴は0.18～0.34mの円形を呈し，深さ0.2～0.4mを測る。なお，南側の隅柱には柱根が遺存していた。

ＳＢ3606（Fig.140）

第120次調査区の南端中央に位置し，ＳＡ3601と重複する。大半が調査区外にあるため詳細は不明であるが，一応梁行１間以上×桁行３間以上の掘立柱建物と考えた。桁側の柱間は1.03m，0.92m，1.29mとばらつきがみられる。（小田）

ＳＢ3700（Fig.140，PL.131-3･4）

第123次調査区で検出した柱である。狭小な調査区の南壁にかかっているため柱掘方の全形は知り得ないが，一辺0.8m程の方形を呈するものと思われる。柱根は径0.5m，残存長0.95mを測る。連続する柱穴が未検出であるが，ここでは建物遺構として報告しておく。（吉村）

3）溝

ＳＤ1786

第70次調査区の南側で検出した東西溝で，ＳＥ1790・ＳＫ1745・ＳＫ1802に切られる。断面形は逆台形を呈し，溝中央部での上面幅0.85m，下面幅0.36m，深さ0.16mを測る。両端部での比高差は10cm程で，底面は西側に向かって緩やかに下がっている。

ＳＤ1805（Fig.141･142，PL.113-2）

ＳＤ1786の南側に併走する溝で，ＳＥ1760・1765・1790，ＳＫ1740を切っている。断面形はＶ字形を呈し，溝中央部での上面幅3.2m，深さ1.15mを測る。底面は

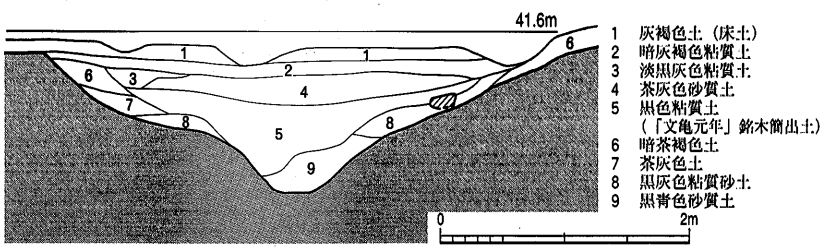


Fig.141　溝ＳＤ1805土層図（1/60）

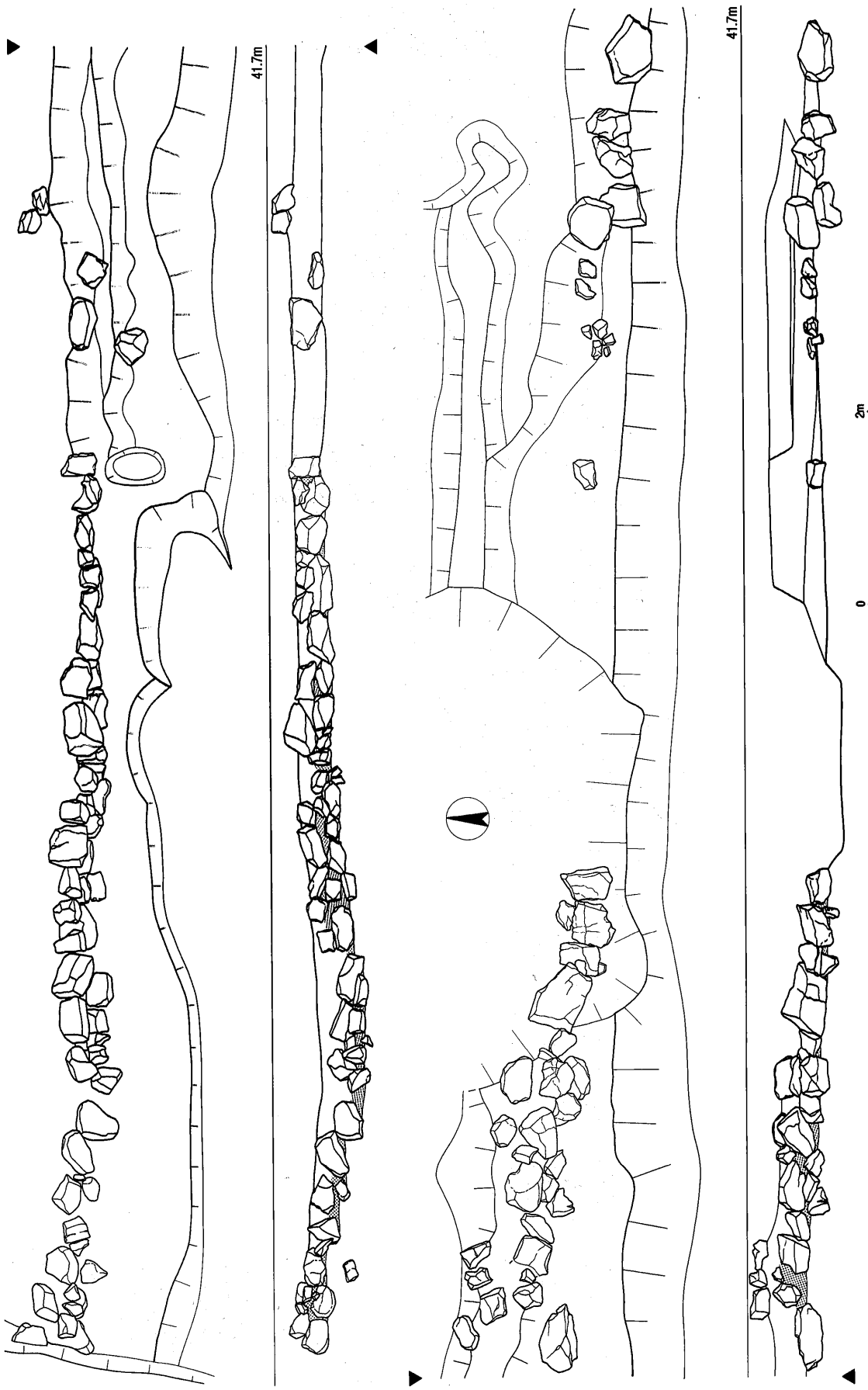


Fig.142　溝ＳＤ1805石列実測図（1/60）

東側に向かって緩やかに傾斜している。また，北側肩部には30～60cm大の花崗岩を並べ護岸としている。５層の黒色粘質土中から「文亀元年（1501）」銘の木簡が出土した。

「文亀元年」銘木簡

ＳＤ1814

第70次調査区の中程に位置する東西溝で，ＳＫ1788に切られる。礎石建物ＳＢ1695の根石を残した状態で検出したため検出長は7.5mに留まる。上面幅0.6m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ1824

ＳＤ1814の２m北側に位置し，ＳＥ1770・1800に切られる。概報段階では土坑とみなしてＳＫの記号を付していたが，東西に細長い形状を呈するので，今回は溝として報告する。検出長22.8m，東端幅0.7m，同深さ0.12m，西端幅1.56m，同深さ0.21mを測り，東側に向かって窄まっている。

ＳＤ1825

ＳＤ1824の１m西側で検出した溝で，ＳＥ1775・ＳＫ1788に切られる。北東－南西方向に流れ，溝の北端はＳＤ1830に接続し，南端には石組ＳＸ1842を設けている。北端幅2.1m，深さ0.37mを測る。なお，ＳＸ1842の南端から北側にかけては多量の製塩土器片とともに「安居」銘の墨書土器が出土した。

「安居」銘墨書土器

ＳＤ1830（Fig.143）

第70次調査区の北端で検出した東西溝で，ＳＤ1850の上層にあたる。第70次補足調査で溝の北側肩部をつかもうと努めたが，判然としなかった。埋土は暗灰色砂質土で，奈良時代の土器・製塩土器及び須恵質の風招が出土している。また，暗渠ＳＸ1832・1833の先端は当溝で終焉しており，溝との関連が指摘できる。

ＳＤ1841

ＳＤ1824とＳＤ1786の中程で検出した東西溝で，ＳＥ1755・ＳＫ1769に切られる。断面形は逆台形を呈し，上面幅0.46m，深さ0.17mを測る。

ＳＤ1850（Fig.143，PL.125-4）

ＳＤ1830の下層となる溝であるが，第70次補足調査において黄褐色整地土を除去して検出した。埋土上層は茶灰色粘質土で，下層は砂礫層である。

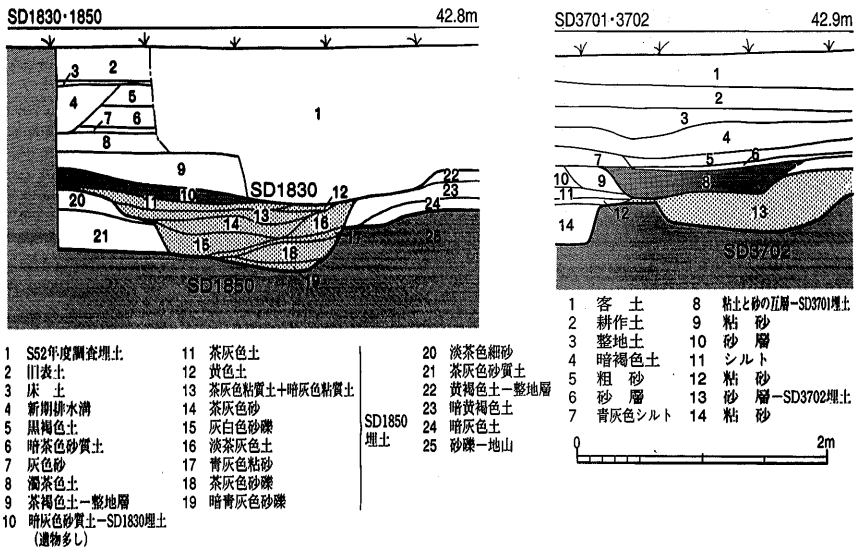


Fig.143 溝ＳＤ1830・1850・3701・3702土層図（1/60）

ＳＤ3573

第120次調査区の北東側で検出した小溝で，北西から南東方向に緩やかに弧を描きながら延びる。上面幅0.3m，深さ0.2mを測る。南端は瓦組暗渠ＳＸ3572の0.6m手前で終焉するが，本来ＳＸ3572に接続していたものとみられる。

ＳＤ3594

第120次調査区の南端中央で検出した東西小溝で，ＳＫ3593を切り，ＳＫ3589に切られる。上面幅0.2～0.4mで，深さは10cm前後と著しい削平を受ける。当溝は黄褐色整地層ＳＸ3604の北縁に沿って付設されており，ＳＸ3604の区画溝的性格を有する。

ＳＤ3596

ＳＤ3594の0.4m南側に位置し，黄褐色整地層ＳＸ3604に切り込む。東西方向に走る小溝で，東端はＳＥ3570に切られる。上面幅0.3m，深さ0.1mを測る。

ＳＤ3605（PL.130-2･3）

第120次調査区を北西から南東方向に走る溝で，南端はＳＥ3570で終わる。上面幅0.8m前後，深さ0.2～0.3mで，底面は凹凸が著しい。埋土には平安時代の遺物が含まれている。興味深いことに，この溝の北東側には奈良・平安時代前期の遺構は広がらない。

ＳＤ3701（Fig.143）

第123次調査で検出した。調査範囲が狭小であるため土坑とも溝とも判断がつきかねるが，埋土が砂層を主体とした粘土との互層をなすことから溝と判断した。埋土中から16世紀前後の遺物が出土している。

ＳＤ3702（Fig.143，PL.131-2）

SD3701の下層で検出した東西溝で，上面幅1.05m，深さ0.2mを測る。位置的に第70次調査検出の東西溝SD1786に連続するとみられる。須恵器の他に製塩土器が出土した。（小田）

製塩土器

4）井　戸

ＳＥ1701（Fig.144，PL.118-2）

第70次調査区の南西部に位置し，西半部は調査区外にある。掘方は長径4.35mの楕円形を呈し，掘方のやや北寄りに本体の坑を掘削する。坑は素掘りで，径1.56m，深さ0.68mを測る。掘方の周縁には護岸のための石を２～３段積み上げている。（小田）

ＳＥ1755（Fig.145，PL.115-1）

第70次調査区の東部で検出した石組構造の井戸である。上端径0.84mを測る。石積みは７段確認した。花崗岩の自然石を用いて構築されている。Ⅴ類。ＳＫ1750を切る。北東の壁に立てかけた状態で竹が出土した。井戸祭祀に関わるものと考えられる。

井戸祭祀

ＳＥ1760（Fig.146，PL.114-1）

第70次調査区の南東部で検出した。底部に曲物を据える井戸である。曲物は上部の腐食が進んでいる。径は56cmを測る。曲物の縁部に沿って平瓦を並べ，補強としている。Ⅲ類。

ＳＥ1765（Fig.146，PL.114-2）

第70次調査区の南西部で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える井戸である。数枚の縦板と３本の横桟を残すのみで遺存状態が悪いが，一辺50cmを測る。下部の曲物は径44cm，高さ

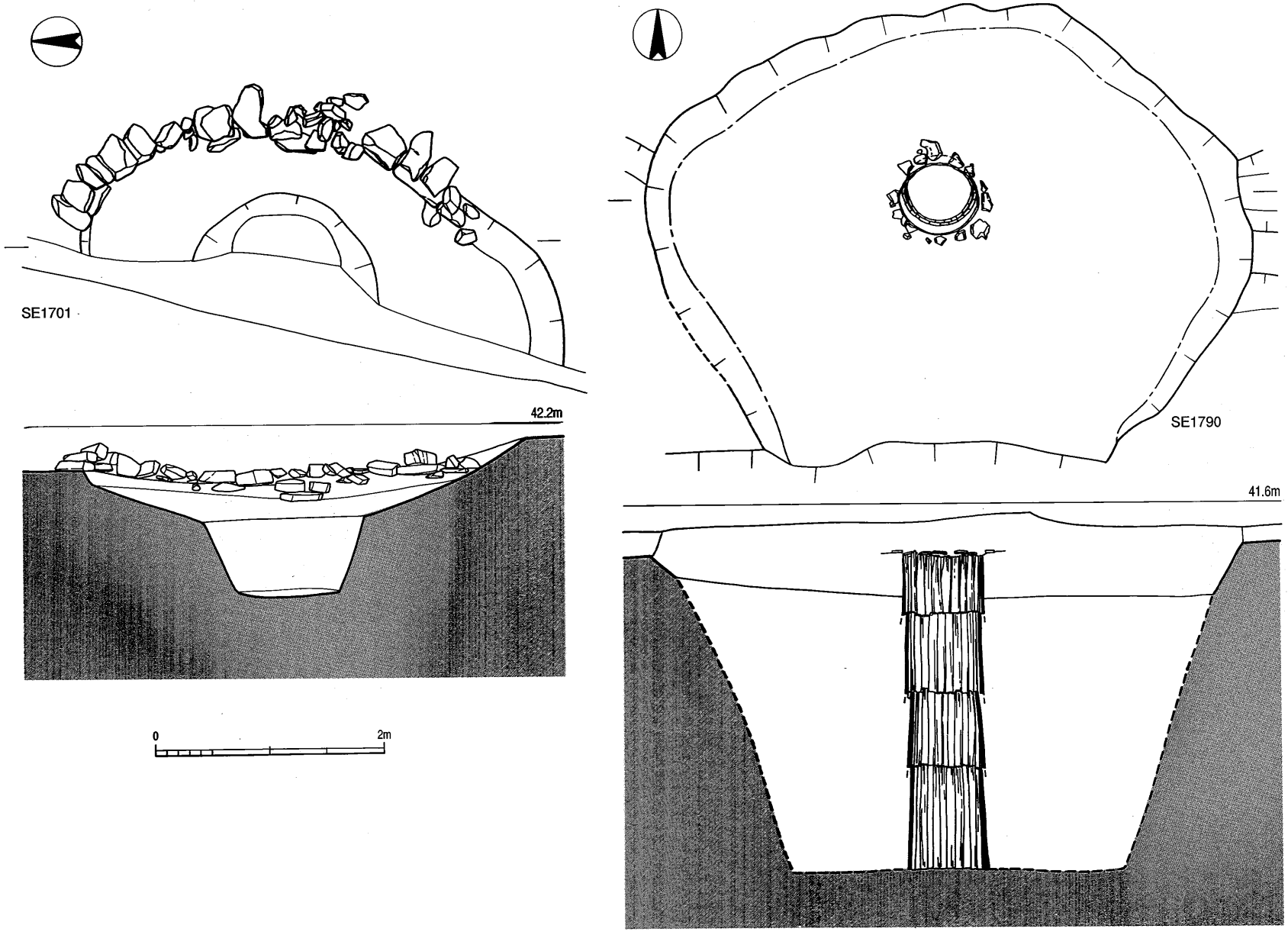


Fig. 144　北辺域井戸実測図①（1/50）

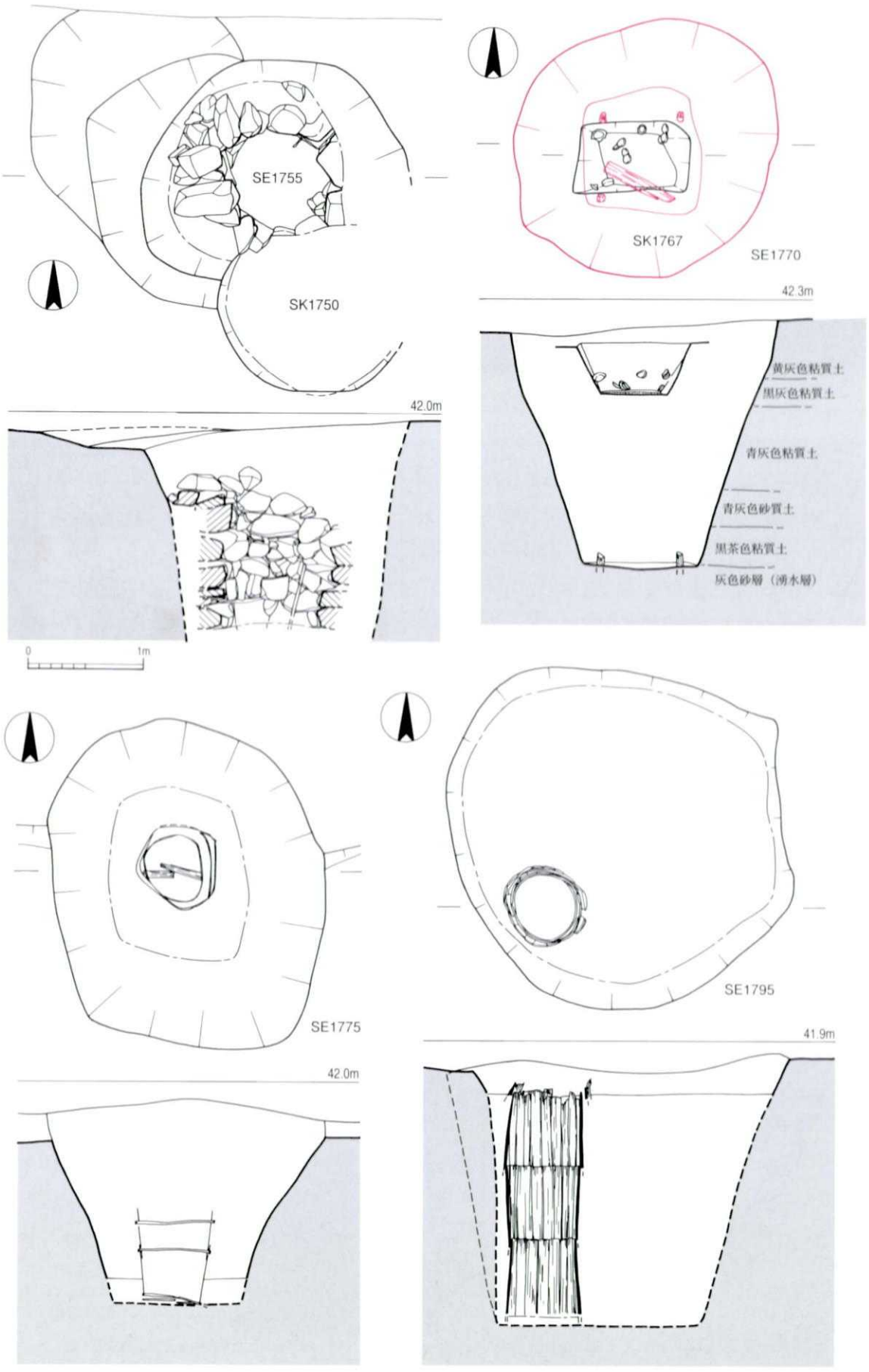


Fig. 145　北辺域井戸実測図②（1/50）

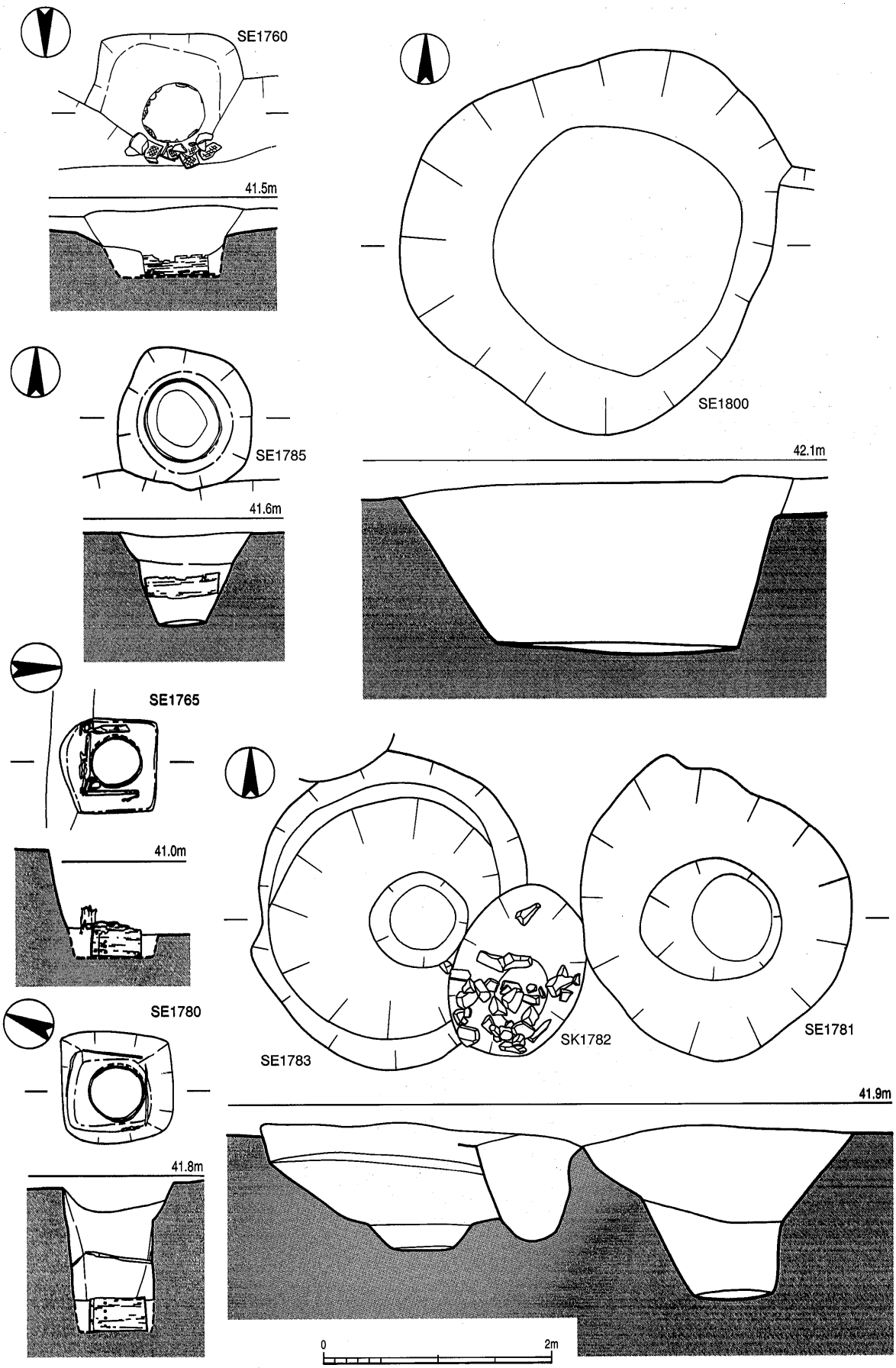


Fig. 146 北辺域井戸実測図③ (1/50)

26cmを測る。Ⅱ-B-b類。SD1805に切られる。

SE1770（Fig.145，PL.114-3）

第70次調査区の北東隅部で検出した方形縦板構造の井戸である。遺存状態が極めて悪く，径6cmの隅柱3本と縦板の残骸が残るのみである。Ⅱ-A類。上層部において1m×0.6m程の長方形を呈した土坑状の窪みを確認し，埋土となる炭層には土師器が一括投棄されていた。

SE1775（Fig.145，PL.115-2）

第70次調査区の北部で検出した。竹タガが3箇所残り，枠とした桶側の板材が2枚確認されたのみである。

SE1780（Fig.146，PL.116-1）

第70次調査区の中央部で検出した。方形縦板枠の下部に曲物を据える構造の井戸である。上部の枠の遺存状況は悪く，掘方の中位に横桟が残るのみである。曲物は径49cm，高さ28cmを測る。Ⅱ-B-b類。上層部で白磁がまとまって出土した。

SE1781（Fig.146）

第70次調査区の中央部で検出した。平面形は円形を呈する。SK1782に切られる。底部に曲物を据える井戸の可能性もある。

SE1783（Fig.146）

SE1781の0.5m西側で検出した。平面形は円形を呈する。SK1782に切られる。SE1781と同様，底部に曲物を据える井戸の可能性もある。

SE1785（Fig.146，PL.116-2）

SE1780の2.4m南西側で検出した。底部に曲物を据える構造の井戸である。曲物は径64cm，高さ17cmを測る。Ⅲ類。

SE1790（Fig.144，PL.116-3）

第70次調査区の南で検出した桶側構造の井戸である。井戸枠は4段からなる。桶側の径は1段目が67cm，2段目が61cm，3段目が53

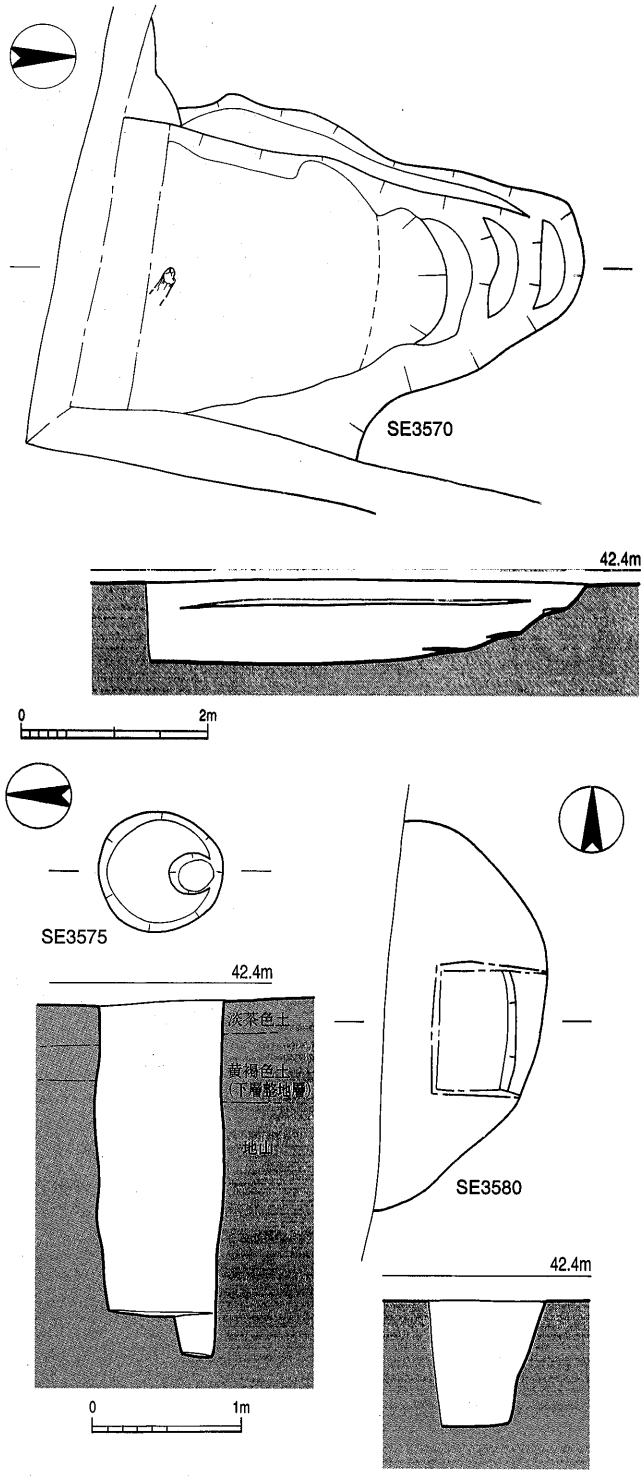


Fig.147　北辺域井戸実測図④（1/50・1/80）

cm，4段目が56cm・下端径66cm・高さ88cmを測る。板材の幅は6cm程で，1段目が21枚を，以下それぞれ22枚を使用している。最上段の桶側の縁に沿って瓦や小石を並べて補強としている。Ⅳ-A類。SD1805に切られる。

SE1795（Fig.145，PL.117）

第70次調査区の北西部で検出した桶側構造の井戸である。枠は掘方の南西際に配されている。井戸枠は4段からなるが，1段目は腐食が進んでおり，下端部分を僅かに残すのみである。桶側の径は2段目が59cm，3段目が62cm，4段目は58cmで，下端径66cm・高さ77cmを測る。板材の幅は6～13cmで，3段目が18枚，4段目が16枚を使用している。Ⅳ-A類。

SE1800（Fig.146，PL.118-1）

第70次調査区の北部で検出した。平面形は円形を呈する。埋土上位にレンズ状に堆積する炭層が確認された。土師器が一括出土しており，この中には墨書を有する例が多く含まれる。

SE3570（Fig.147）

第120次調査区の南東部で検出した。南側は調査区外となる。井戸枠は残存していなかったが，竹タガが遺存しており桶側構造の井戸と考えられる。掘方は北側が階段状になる。

SE3575（Fig.147）

第120次調査区の南西部で検出した円筒状の素掘りの井戸である。

SE3580（Fig.147）

120次調査区の南西部で検出した。西側は調査区外となる。構造は不明。（吉村）

5）土　坑

SK1685（Fig.148，PL.121-1）

第70次調査区の東端部で，SE1755の1m北側に位置する。径1.46m，深さ0.3mの穴を掘り，周縁に20～30cm大の花崗岩を並べた上層の遺構である。

SK1740・1745（Fig.149，PL.119-1）

SB1735のすぐ北側に位置し，SD1805に切られる。SK1745と重複しているが，前後関係は不明。深さは1.4mを測る。形状的に井戸かと考え底面まで掘り下げたが，井戸枠など出土しなかったため土坑とした。

SK1750（Fig.145，PL.115-1）

SE1755に北壁を切られて位置する。石組が倒壊する恐れがあったため完掘していない。径1.64mの円形を呈し，井戸になる可能性がある。

SK1756（Fig.148）

SD1805，SB1735・1845に切られるため遺存状態は悪く，深さは12cmを測る程度である。

SK1757（Fig.149）

SD1805及びSK1740に北壁を切られる。楕円形を呈し，長軸2.43m，短軸1.3m＋α，深さ1.18mを測る。埋土からは奈良時代の遺物が出土している。

SK1759（Fig.148）

第70次調査区の南中央で，SB1730の3m西側に位置する。大半が調査区外にあるため詳細は不明。北辺長1.92mで，深さは7cmと浅い。底面にある穴は別遺構であろう。

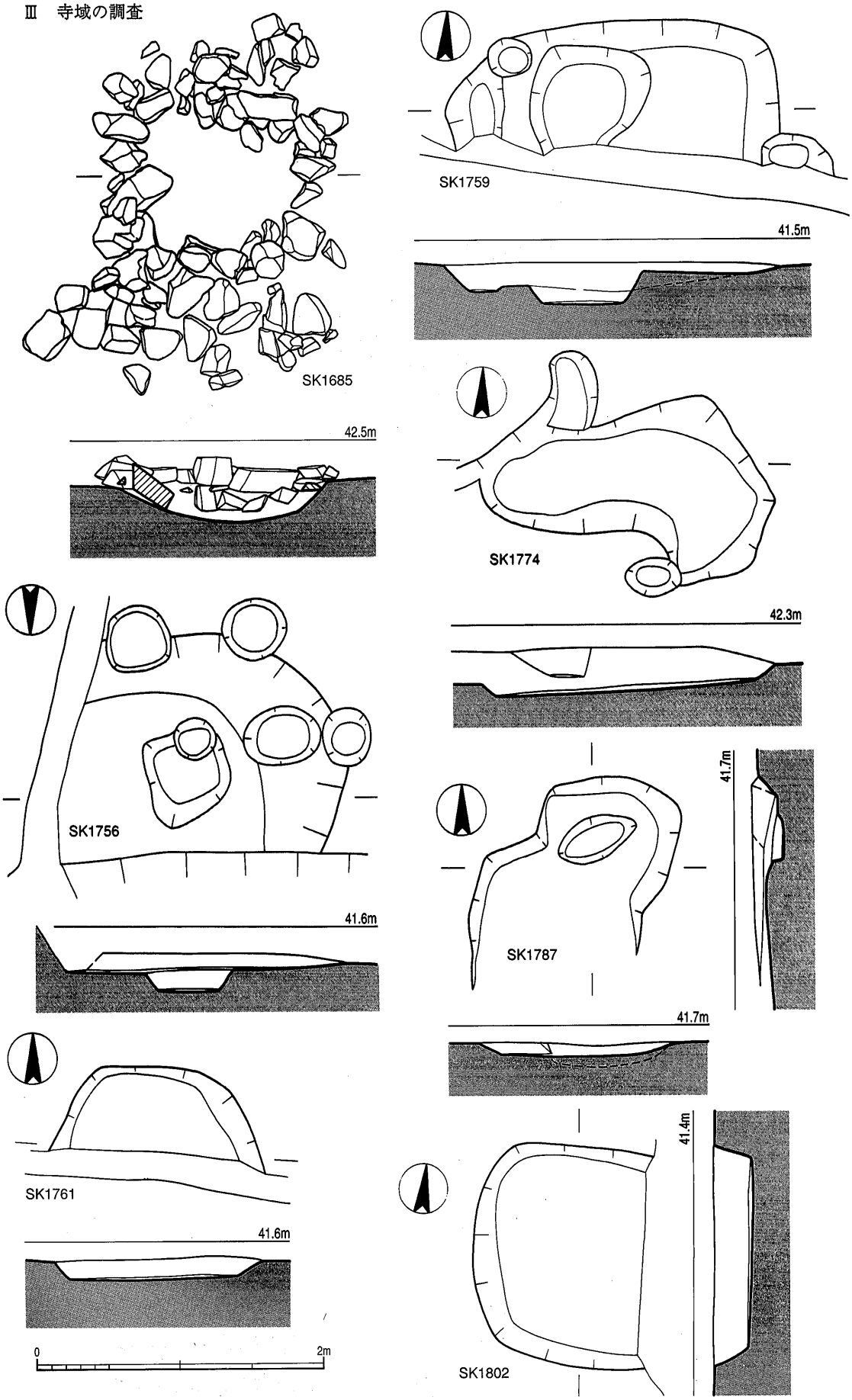


Fig. 148　北辺域土坑実測図①（1/40）

ＳＫ1761（Fig. 148）

ＳＫ1759の１ｍ西側に位置する。大半が調査区外にあり，詳細不明。楕円形を呈するか。壁高は15cmの遺存状況。

ＳＫ1767（Fig. 145）

ＳＥ1770の埋土上層に掘り込まれた土坑である。平面形は長方形を呈し，長さ0. 97m，幅0. 62m，深さ0. 45mを測る。埋土には炭を含み，底面には焼土層がみられた。また，土師器がまとまった状態で出土している。

ＳＫ1768（Fig. 149）

ＳＫ1768・1769・1771・1772は東西方向に連なる大型の浅い土坑群で，茶灰色土を除去した後に検出した。ＳＫ1768は最大幅1. 6m，深さ0. 34mを測る。

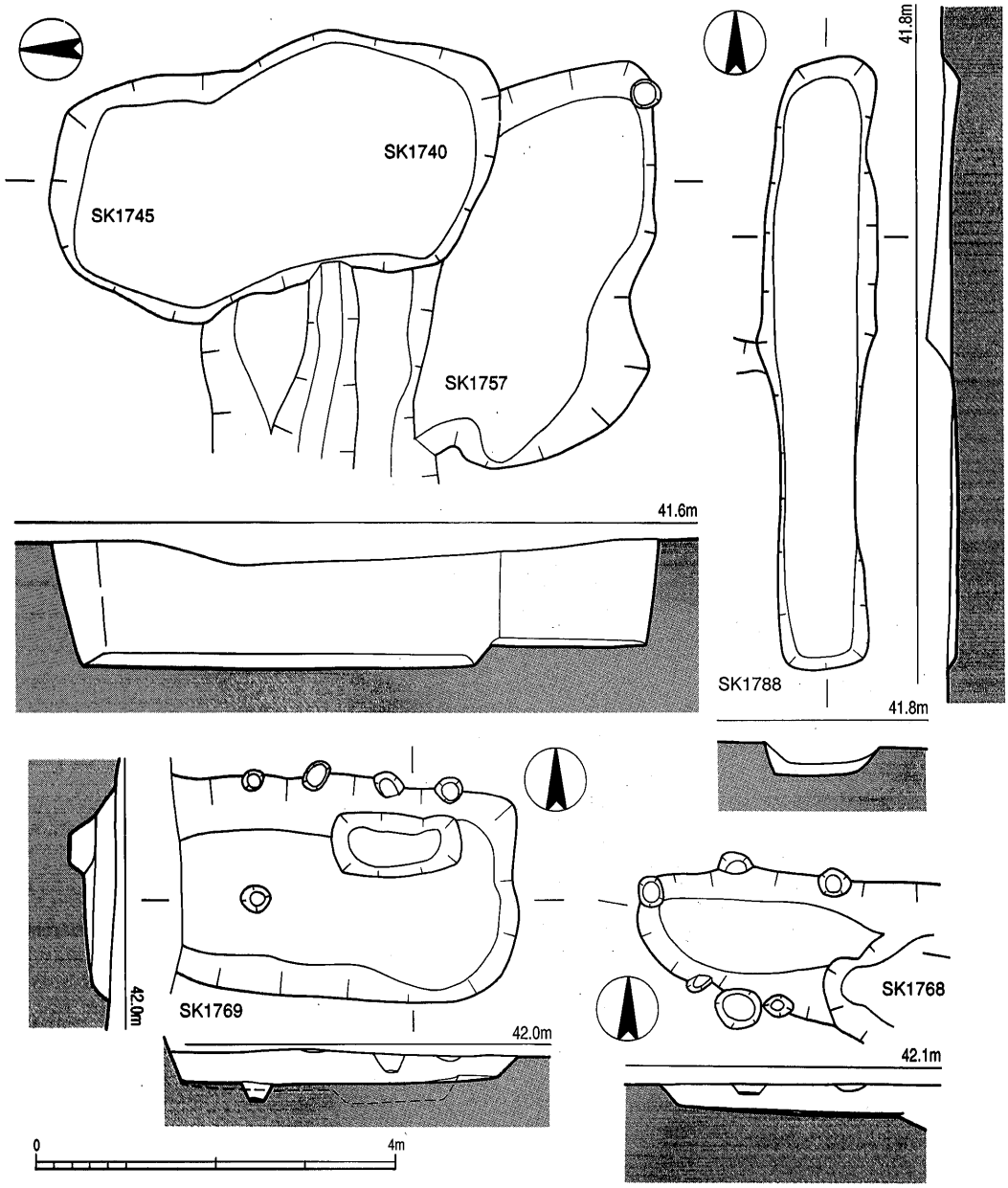


Fig. 149　北辺域土坑実測図②（1/80）

ＳＫ1769（Fig. 149）

ＳＫ1768の西隣に位置し，ＳＤ1841を切っている。隅丸長方形を呈する大型の土坑で，幅2. 48m，深さ0. 38mを測る。西壁はＳＸ1690の下に潜るため検出長3. 8mに留まる。

ＳＫ1771

ＳＫ1769の７m程西側に位置する。ＳＫ1788・ＳＸ1748に切られ，ＳＡ1840を切っているが，礎石建物ＳＢ1695の根石を残した状態で検出したため全体の規模は不詳。深さは他の土坑と同じ0. 3mを測る。

ＳＫ1772

ＳＫ1771の１m西側に位置し，ＳＡ1840を切っている。隅丸長方形を呈し，長軸4. 33m，短軸3. 2m，深さ0. 35mを測る。南壁側の深さは0. 73mと一段下がっている。

ＳＫ1774（Fig. 148）

第70次調査区の北東部に位置する。不整形を呈し，長軸2. 05m，短軸1. 34m，深さ0. 32mを測る。底面は西側に傾斜している。

ＳＫ1782（Fig. 146，PL. 119-3）

ＳＥ1781・1783の中間に位置し，両者を切っている。平面形は楕円形を呈し，長軸1. 53m，短軸1. 13m，深さ0. 93mを測る。埋土上層からは角礫及び瓦片が出土した。

ＳＫ1787（Fig. 148）

ＳＥ1785のすぐ北側に位置する。方形土坑が二つ重複したような形状を呈する。深さは17cmと削平が著しかったものの墨書土器などが出土している。

墨書土器の出土

ＳＫ1788（Fig. 149，PL. 120-1）

第70次調査区の中程で検出した。石組ＳＸ1842を切り，ＳＤ1814と重複する。南北に長い溝状を呈し，長軸6. 82m，短軸1. 06m，深さ0. 28mを測る。底面はほぼ水平で，埋土中から多量の土師器が出土している。

ＳＫ1802（Fig. 148）

第70次調査区の北西側で検出した。上層石列ＳＸ1700を残した状態で掘り下げたため，東半部は未掘となったが，隅丸方形を呈するものと思われる。南北長1. 53m，深さ2. 6m。

ＳＫ3574（Fig. 151）

第120次調査区の東端部に位置する上層遺構で，ＳＤ3573・ＳＸ3572を切っている。円形を呈し，長径1. 1m＋α，短径1. 06m，深さ1. 03mを測る。

ＳＫ3576（Fig. 150，PL. 130-3）

ＳＫ3574の４m北西で検出した上層遺構。平面形は不整方形を呈し，長軸2. 84m，短軸2. 46mで，底面中央のピットまでは1. 62mの深さを測る。底面は平坦ではなく，起伏が著しい。

ＳＫ3582（Fig. 151）

第120次調査区の中央やや南側で検出した上層遺構で，ＳＫ3591・3592を切っている。楕円形を呈し，長軸1. 5m，短軸0. 92m，深さ0. 32mを測る。底面の北東側にテラスを有する。

ＳＫ3583（Fig. 151）

ＳＫ3576の2. 3m南側で検出した下層遺構である。平面形は楕円形を呈し，長軸1. 93m，短軸1. 52m，深さ0. 53mを測る。底面は平坦をなす。

S K 3584（Fig. 151）

第120次調査区の西側で検出した中層遺構で，S K3586・3592を切る。倒卵形の小土坑で，長軸1.15m，短軸0.95m，深さは0.82mと径に比して深めに掘っている。

S K 3586（Fig. 151）

S K3584の北側に位置する中層の遺構である。平面形は隅丸三角形を呈し，長軸0.9m＋α，短軸0.96mで，深さは17cmと削平が著しい。

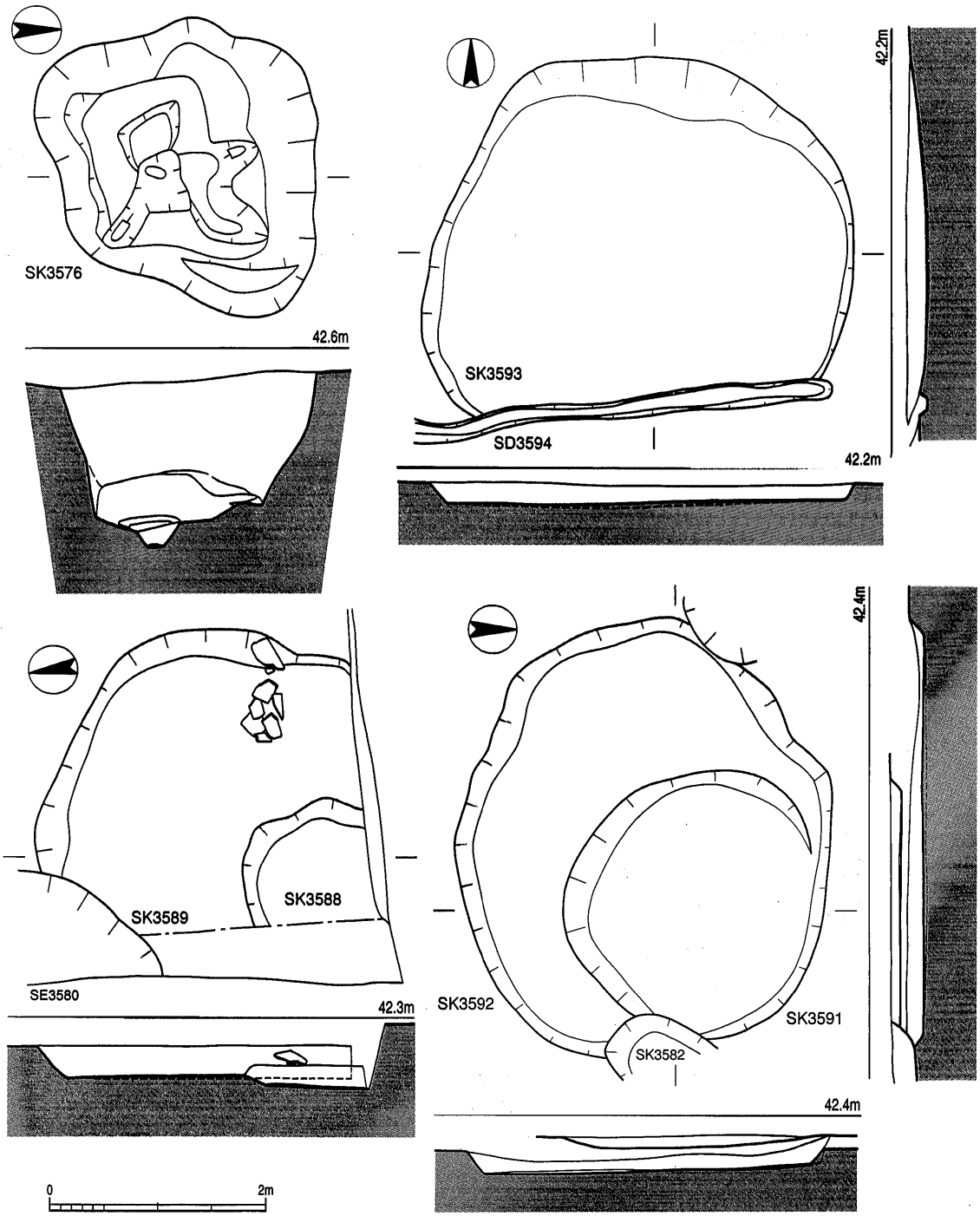


Fig. 150　北辺域土坑実測図③（1/60）

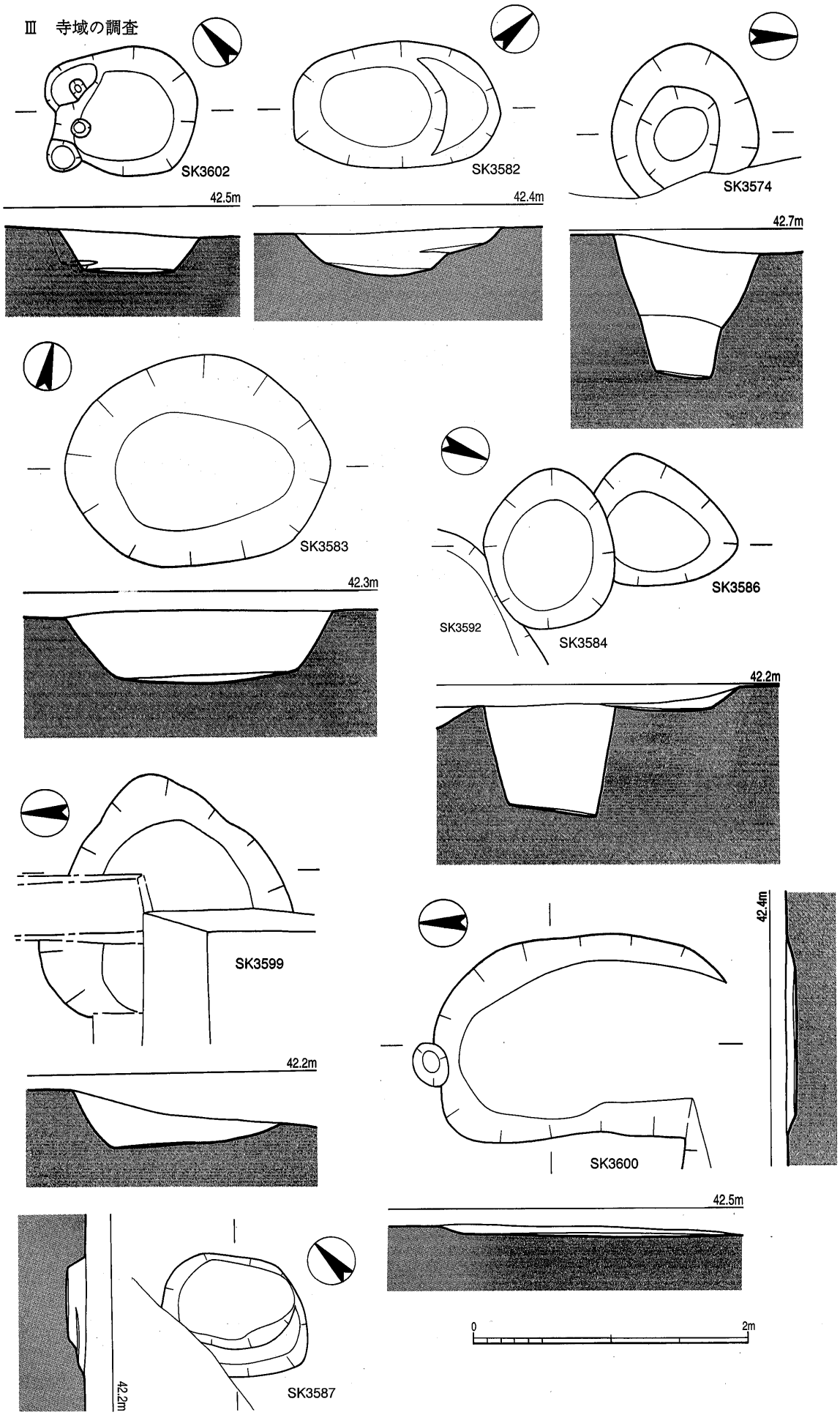


Fig. 151　北辺域土坑実測図④（1/40）

S K 3587（Fig. 151）

S K3584の0.5m西側に位置する中層の遺構。隅丸方形を呈し，長軸1.02m，短軸0.87m，深さ0.14mの大きさ。南西側に幅10cmのテラスを有する。

S K 3588（Fig. 150）

第120次調査区の南西隅で検出した下層遺構で，S K3589の底面に掘り込まれているが，前後関係はつかめていない。大半が調査区外にあるため詳細は不明。

S K 3589（Fig. 150）

第120次調査区の南西隅に位置し，S E3580に切られる。底面は平坦で，壁高は0.28mの遺存状況である。当土坑も大半が調査区外にあるため詳細は不明。埋土中からは暗渠に用いる土管が出土している。

土管の出土

S K 3591（Fig. 150）

S K3582の西隣に位置する上層遺構で，それに切られる。北壁は削平により失われるが，南壁は高さ10cmの遺存状況。

S K 3592（Fig. 150）

S K3591の下層で検出した不整円形の土坑で，長軸4.13m，短軸0.36m，深さ0.16mを測る。底面は平坦で，埋土中から奈良時代の遺物が出土している。

S K 3593（Fig. 150）

S K3592の南隣で，それに切られる。S D3594と重複するが，溝の方が先行する。隅丸方形を呈し，長軸3.82m，短軸3.4m＋α，深さ0.2mを測る。底面は平坦をなす。

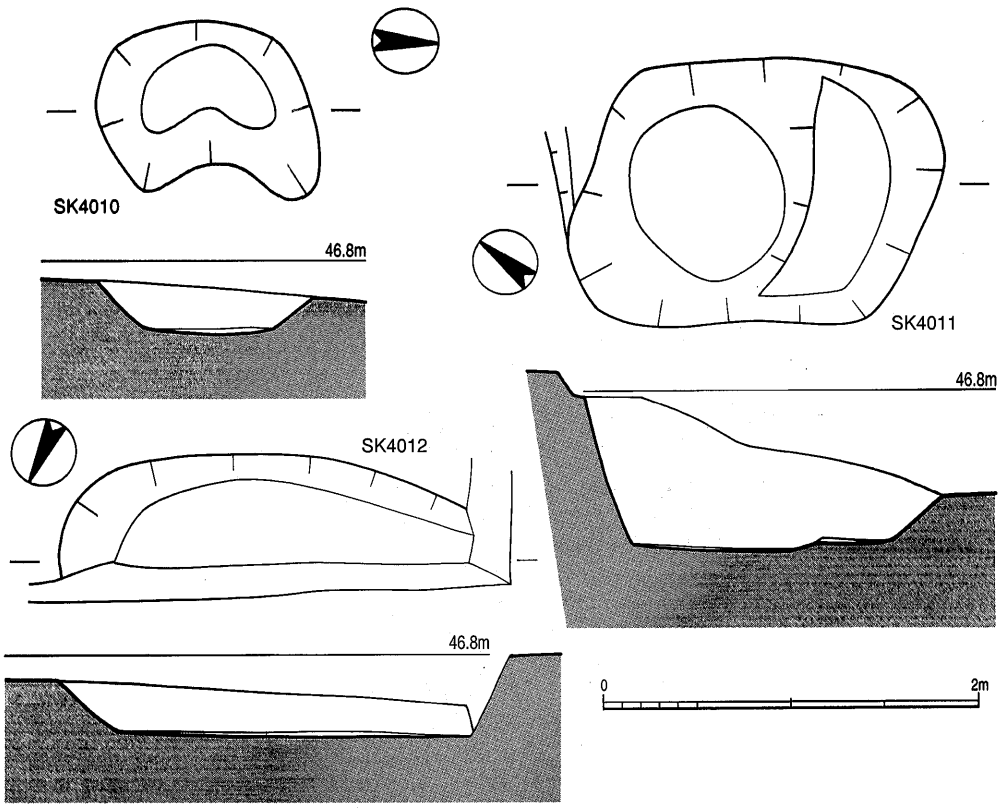


Fig. 152　北辺域土坑実測図⑤（1/40）

ＳＫ3599（Fig.151）

第120次調査区の南端で検出した下層遺構で，整地層ＳＸ3604に切り込む。隅丸三角形を呈し，長軸1.84m，深さ0.43m。瓦片・小石が多量に出土した。

ＳＫ3600（Fig.151）

ＳＫ3592の２m北側に位置する。長さ2.1m，幅1.43m，深さ0.1mの浅い長円形土坑で，埋土中には製塩土器片が多量に包含されている。また，当土坑を中心として３×４mの範囲にも製塩土器片が散在しており，製塩土器の廃棄土坑と考えられる。

製塩土器の廃棄土坑

ＳＫ3602（Fig.151）

ＳＥ3570の１m西側で検出した上層遺構である。平面形は円形を呈し，長径1.02m，短径0.93m，深さ0.28mの小土坑。

ＳＫ4010（Fig.152）

第144次調査区の中央で検出した下層遺構。不整形を呈し，長軸1.1m，短軸0.76m，深さ0.3mを測る。埋土中から室町期の陶磁器が出土している。

ＳＫ4011（Fig.152）

ＳＫ4010の西隣に位置する。歪んだ隅丸方形をなし，長軸2.07m，短軸1.4m，深さ0.8mの大きさ。南東側にテラスを有するものの底面との差は僅かである。埋土中からは炉壁片や鞴羽口が数点出土していることから付近に鋳造関連遺構が存在するものと思われる。

炉壁・鞴羽口の出土

ＳＫ4012（Fig.152）

ＳＫ4011の西隣で，調査区の西端隅部に位置する。大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長2.2m，深さ0.26mの大きさ。

６）暗　渠

ＳＸ1831（Fig.153，PL.124）

第70次調査区の北端で検出した暗渠施設で，ＳＸ1831からＳＸ1836まで６本の暗渠を確認した。これらはＳＤ1830と一連のものである。ＳＸ1831は最西端に設けられた南北方向の暗渠で，丸瓦を主体とする。瓦を葺く要領で北から順に並べられており，6.3m分を検出した。南端と北端の比高差は南側が５cm高くなっており，南側から北側に向かって排水している。

ＳＸ1832（Fig.153，PL.124）

ＳＸ1831の上部に設けられており，北東－南西方向に連なる。截頭円錐形を呈する土管を主体とするもので，検出長５m，土管数11本を数える。両端の比高差は0.2mあり，ＳＸ1831とは逆方向に排水している。

ＳＸ1833（Fig.154，PL.125-3～5）

ＳＸ1836の3.3m東側で検出した南北方向に連なる暗渠である。中央部をＳＥ1775に切られて失うが，検出長は6.5mを測る。北側は丸瓦を重ねているが，下部は素掘りのままである。また，南側には直交する形で平瓦を並べていたが，その意図するところは判らない。

ＳＸ1834（Fig.154，PL.126･127-1）

ＳＸ1833の11.5m東側に埋設しており，6.8mを検出した。北西－南東方向に連なり，北端はＳＤ1830に接続する。丸瓦２枚を重ね土管状としている。

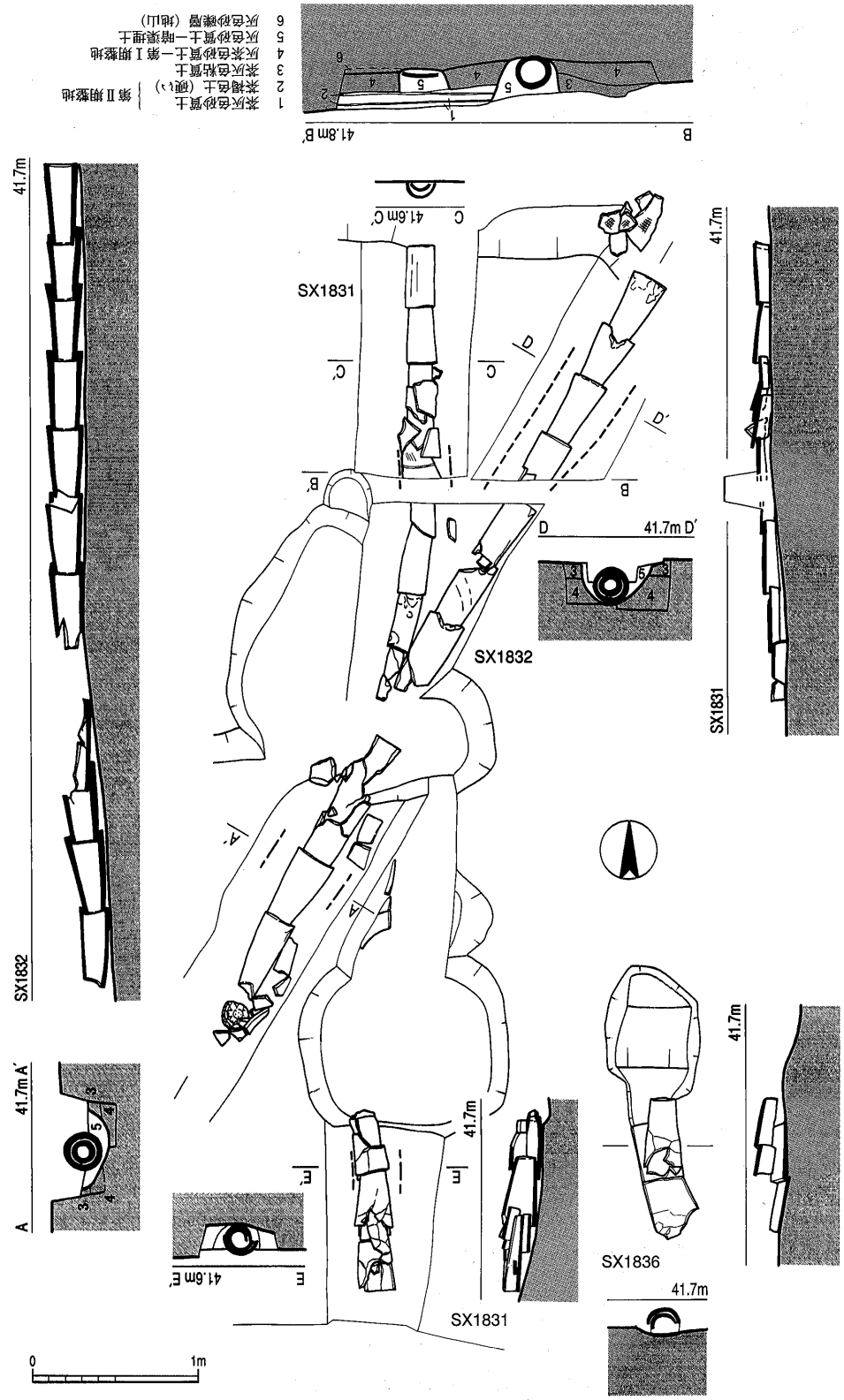


Fig. 153 北辺域暗渠実測図① (1/40)

S X1835 (Fig. 154, PL. 127-2·3)

S X1834の9.5m東側に埋設しており，1.45mの遺存状況である。北西－南東方向に連なり，北端はS D1830に接続する。截頭円錐形の土管を並べており，土管数は3本数える。土管の連結状態と底面のレベルからすると南側から北側へ排水している。

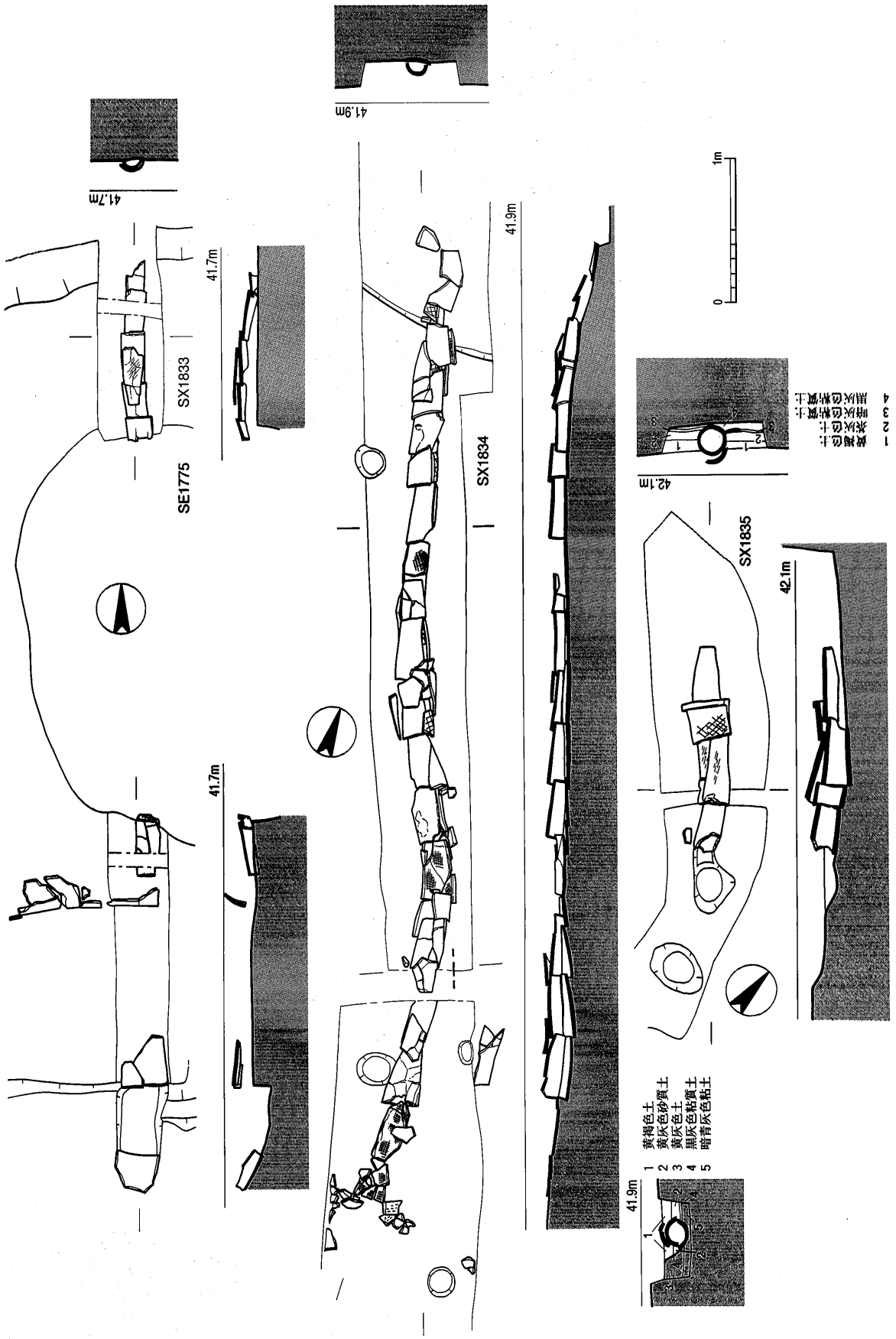


Fig. 154　北辺域暗渠実測図②（1/40）

ＳＸ1836（Fig. 153）

ＳＸ1831の1.5m東側で検出した。底部に平瓦を並べ，上に丸瓦を重ねた構造で，平瓦２枚分の遺存状況である。瓦の重なり具合からすると北側に排水している。暗渠の先端はＳＥ1775に切られる土坑に接続している。

ＳＸ3572（Fig. 155，PL. 131-1）

第120次調査区の東端部に位置し，ＳＫ3574に切られる。当遺構はＳＤ3573の南端部に相当し，この部分を暗渠としていた可能性がある。平瓦を３段程重ねており，瓦の下部には幅30cmの小溝を掘削している。

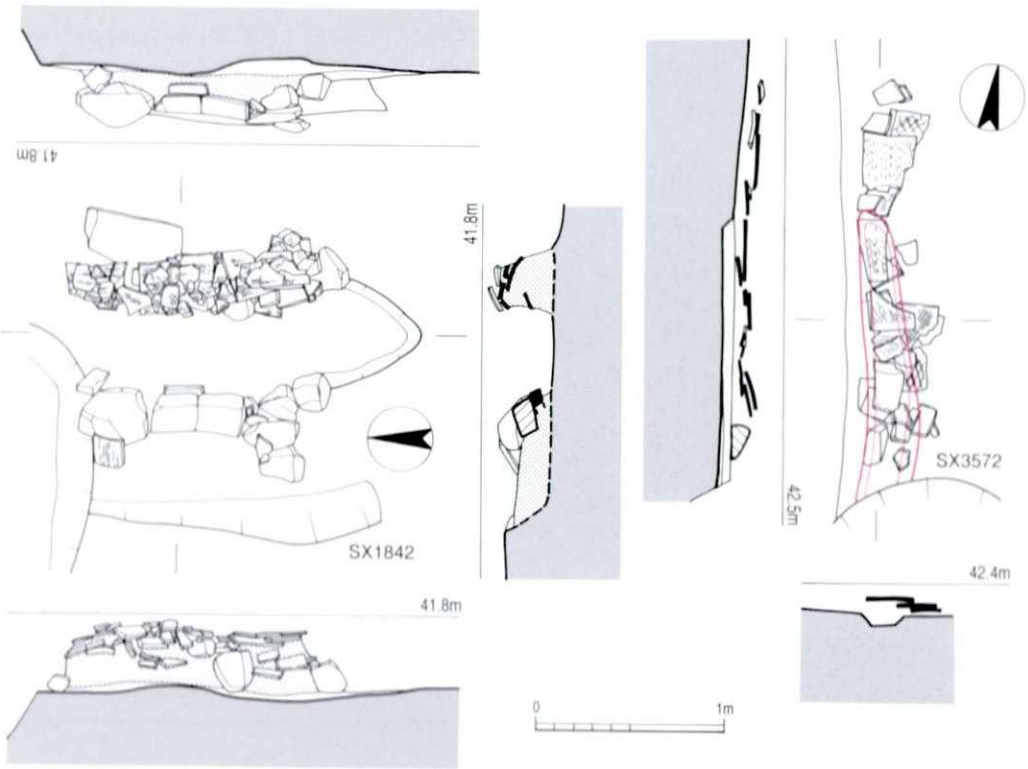


Fig. 155　暗渠ＳＸ3572，石組ＳＸ1842実測図（1/40）

7）地　鎮

ＳＸ1810（Fig. 156，PL. 122-3）

第70次調査区においてＳＥ1760の西側で検出した。掘方は長径38cm×短径33cm大の円形を呈し，底面中央に底部穿孔を施した須恵器坏身を安置し，須恵器の蓋を被せていた。内容物は確認できなかったが，地鎮遺構とみられる。

ＳＸ1815

第70次調査区においてＳＫ1759の１m西側で検出した。須恵器坏身・蓋のセットを埋置したもので，ＳＸ1810と同一の器形を呈することから同時に２個埋めた可能性がある。

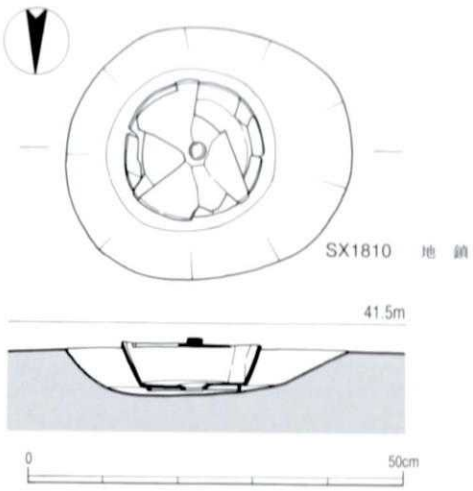


Fig. 156　地鎮ＳＸ1810実測図（1/10）

8）その他の遺構

石　組

ＳＸ1690（Fig.138，PL.122-1･2）

第70次調査の礎石建物ＳＢ1695に伴う施設で，建物の南東隅に付設している。方形の扁平な石を南北方向に８個並べ，その西端に接して横倒しにした石を置き，階段状を呈する。石組の南北長は2.5mを測る。

ＳＸ1842（Fig.155，PL.121-2）

第70次調査ＳＤ1825に付随する施設で，同溝の北端部にあたる。特異なことは，右側が平瓦を主として積み上げ，左側は角礫を並べている点である。

流　路

ＳＸ1796

第70次調査区西端部の流路をＳＸ1796として番号を付した。第70次調査に南接する第43次調査（僧房跡）でも北東－南西方向の流路を検出しており，それに接続するものである。

整地層

ＳＸ3604

第120次調査区南端部一帯には，黄褐色土の整地層が基壇状に一段高くなっており，北縁の区画溝としてＳＤ3594を掘削している。この基壇状の整地層は北辺築地としての可能性を否定できないが，この点に関しては『観世音寺－遺物・考察編－』において改めて検討したい。

（小田）

(4) 西辺域

西辺域の調査としては，大宰府史跡第48次・118次調査がある。現状変更（住宅改築）に伴い，確認調査を実施した。ともに推定寺域の西端部で，学校院との境界付近に位置する。

1）溝

ＳＤ1366（Fig.157，PL.133-2）

第48次調査区の西端に位置する。学校院東辺部にあたる第９・74・77次調査で検出した南北溝ＳＤ205東岸の可能性がある。深さは1.1ｍを測り，最下部には腐植土が堆積していた。当溝がＳＤ205の東岸とすると溝幅は約14ｍになる。

ＳＤ1367（PL.133-2）

第48次調査区の中程で検出した。南北方向に走る小溝で，幅0.5m，深さ0.36ｍの規模。

ＳＤ3450（Fig.157）

第118次調査区の西端で検出したが，大半が調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.63ｍを測る。埋土下位から老司Ⅰ式瓦が出土した。

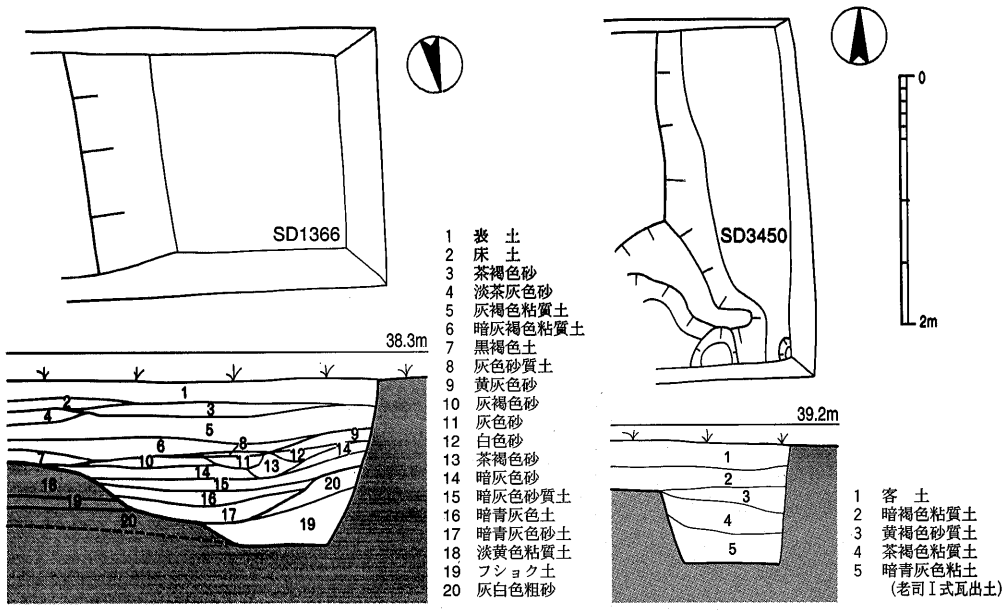


Fig.157 溝ＳＤ1366・3450土層図（1/60）

2）土 坑

ＳＫ3451（Fig.158，PL.134-2）

第118次調査区の中程で検出した。円形を呈し，長径1.6m，短径1.4m，深さ1.04ｍを測る。当初は井戸と考えたが，南壁がオーバーハングしていることから土坑としておく。

ＳＫ3452（Fig.158）

ＳＫ3451の1.3ｍ南東側に位置する。北壁を検出した程度で，詳細は不明。

ＳＫ3453（Fig.158）

ＳＫ3451の0.6m北東側に位置する。北壁は未検出となったが，楕円形を呈するか。検出長1.57m，幅0.9mで，深さは削平により10cmを測る程度。　（小田）

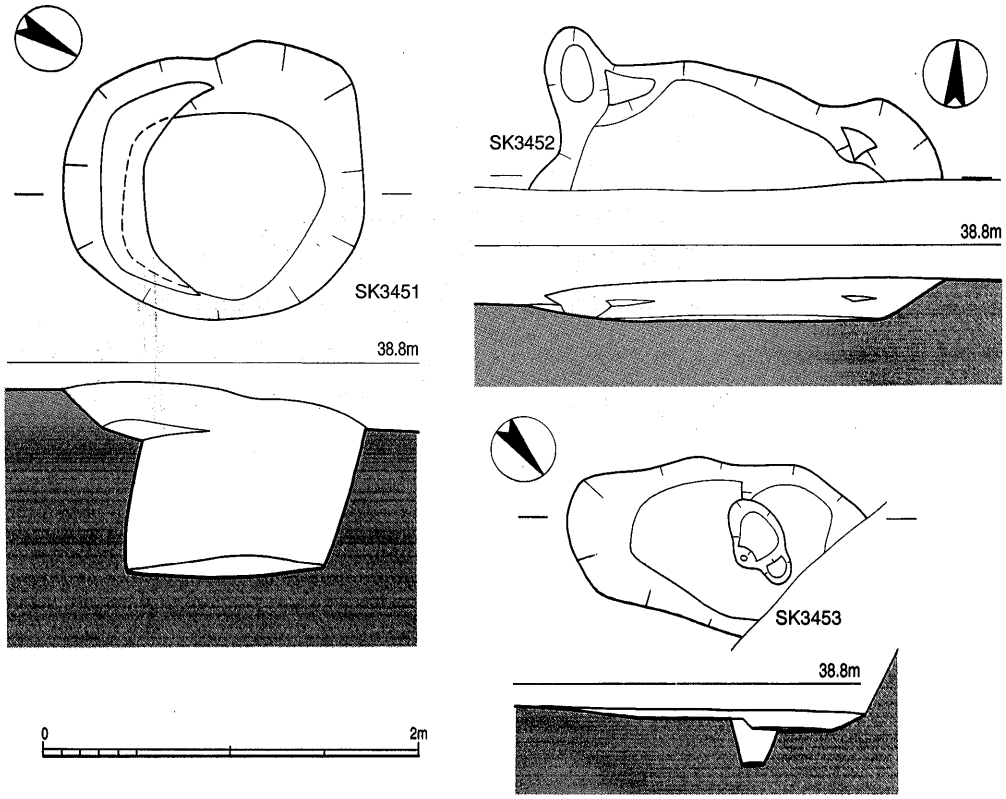


Fig.158　土坑ＳＫ3451・3452・3453実測図（1/40）

Ⅳ 総 括

ここでは，観世音寺の伽藍周辺部で実施した発掘調査によって得られた成果を各地域ごとにまとめ，併せて残された課題点について触れる。なお，様々な検討事項に関しては，次回報告の『観世音寺－遺物・考察編－』で改めてふれたい。

南辺域

［成　果］

南辺域においては，17次の調査を実施し，築地４基，柵16条，建物75棟，溝81条，井戸51基，土坑168基，鋳造遺構５基，落込７基，埋甕・埋桶11基，石列，通路，採土穴などを検出した。

第109・111次調査では，Ⅰ期（９～10世紀代）・Ⅱ期（11～13世紀前半代）・Ⅲ期（13世紀後半～16世紀代）の建物・柵・溝・井戸・土坑を主体とする遺構を検出した。Ⅰ期には当該地に建物は存在せず，南門の南面域は空閑地であったことが確認された。Ⅱ期遺構は東西溝ＳＤ3300以北には存在せず，強い規制を受けている。建物・井戸・土坑などの遺構が溝以北に進出するのは，Ⅲ期の13世紀後半代からであり，古代観世音寺の寺域との関連が窺われる。

南門の南西域は空閑地

Ⅲ期においては柵・溝で囲繞された区画内に数基の建物・井戸・土坑が存在し，大きく五つのブロックに分けられる。土坑・落込からは仏具に関する鋳型や鞴・坩堝などの鋳造関連遺物が出土しており，鋳物師集団の居住地とみられる。

鋳物師集団の居住地

第122次調査で検出した南北棟建物ＳＢ3660及び井戸ＳＥ3680は，８世紀前半の終焉であり，観世音寺造営に際して設けられた仮設事務所的な建物と考えられる。

仮設事務所

［課題点］

南辺築地に関する明瞭な遺構は検出できなかったが，参道側溝とみられる南北溝ＳＤ3200・3840の先端は，第109次調査区北端の東西溝ＳＤ3149の手前で終わっており，この東西溝付近に築地が想定されるが，北面築地との関連からすると『資財帳』記載の数字そのものの検討も必要となろう。

東辺域

［成　果］

東辺域においては，６次の調査を実施し，柵15条，建物33棟，竪穴住居１軒，溝25条，井戸40基，土坑56基，鋳造遺構２基，排水施設，落込，瓦溜，池，石積，積石塚などを検出した。

第121次調査においては，８世紀後半代の南北柵ＳＡ3625を検出した。『資財帳』には「□□（東長）陸拾伍丈板葺」とあり，ＳＡ3625は『資財帳』記載の板塀と判断される。

東辺は板塀

第45・119次調査においては，Ⅰ期（８世紀中頃～12世紀前半）・Ⅱ期（12世紀前半～中頃）・Ⅲ期（12世紀中頃～14世紀）の建物・柵・溝・井戸・土坑などの遺構が検出され，柵ＳＡ1235及び溝ＳＤ1230で囲繞された区画内には，多数の掘立柱建物・井戸・土坑があり，鋳造・鍛冶関連遺物が出土しており，金属製作工房とみられる。また，「□□東院」・「西院」・「厨」銘墨書土器の存在は，この地区が「東院」と呼ばれた工房ないしは厨関連施設であったことの傍証となろう。また，唐三彩壺の出土も特筆される。

金属製作工房

［課題点］

『資財帳』大衆物章には，「厨」・「竈屋」・「水屋」・「碓屋」などの厨房施設と「造瓦屋」が記載されているが，それらの施設と今回検出した建物群との関連は必ずしも明確ではなく，今後の課題といえる。

北辺域

［成 果］

北辺域においては，５次の調査を実施し，柵５条，建物11棟，溝14条，井戸16基，土坑36基，暗渠７基，地鎮２基，石組，流路などの遺構を検出した。

北辺築地の想定地

第70次調査においては，建物基壇や築地塀などの基礎地形に関連する６条の瓦組暗渠を検出した。この部分は版築状の整地層となっており，北辺築地をここに想定することが可能である。第120次調査においては，製塩土器を多量に廃棄した土坑が発見され，厨的施設の存在が推定される。

［課題点］

南辺域の項でも記したが，東西溝ＳＤ3149付近に南辺築地を想定し，瓦組暗渠の箇所に北辺築地を想定するとその間の長さは185m程となり，『資財帳』記載の東辺・西辺築地の長さ65丈（195m）より10m短くなる。単なる『資財帳』の記載誤りか，大きな疑問点である。

また，「小子房」・「客僧房」の僧房建物に関しては，その場所すら特定できておらず，今後の課題として残った。

西辺域

［成 果］

西辺域においては，第48次・118次の２次の調査を実施し，狭小な調査区ではあったが，溝３条，土坑３基を検出した。

学校院との境界線

第48次調査においては，学校院と観世音寺の境界線と考えられる南北溝ＳＤ205の東肩を確認した。

［課題点］

西辺域では２次の調査しか行っていないため，西辺築地については場所・規模など判っていない。また，寺域西辺部の状況も明らかではなく，学校院との境界も不明瞭であり，今後の大きな課題である。

PLATES



観世音寺本堂（背後の山は四王寺山，南上空から）



(1)　5 次調査区 1 層柱穴群（西から）



(2)　5 次調査区 2 層柱穴群（西から）



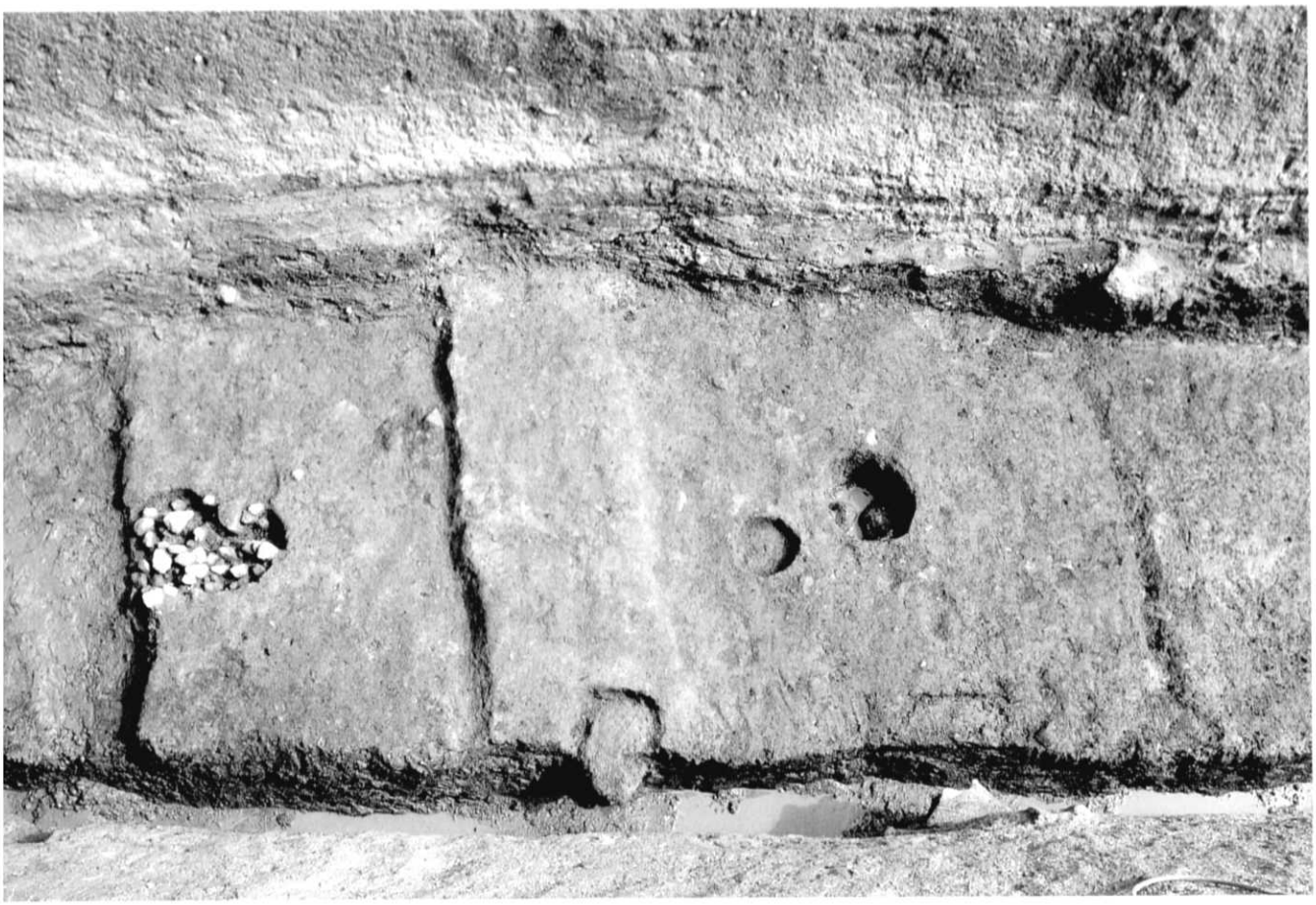
(1) 築地ＳＡ091Ａ・Ｂ（北から）



(2) 築地ＳＡ091Ａ・Ｂ（東から）



(1) 築地ＳＡ095（東から）



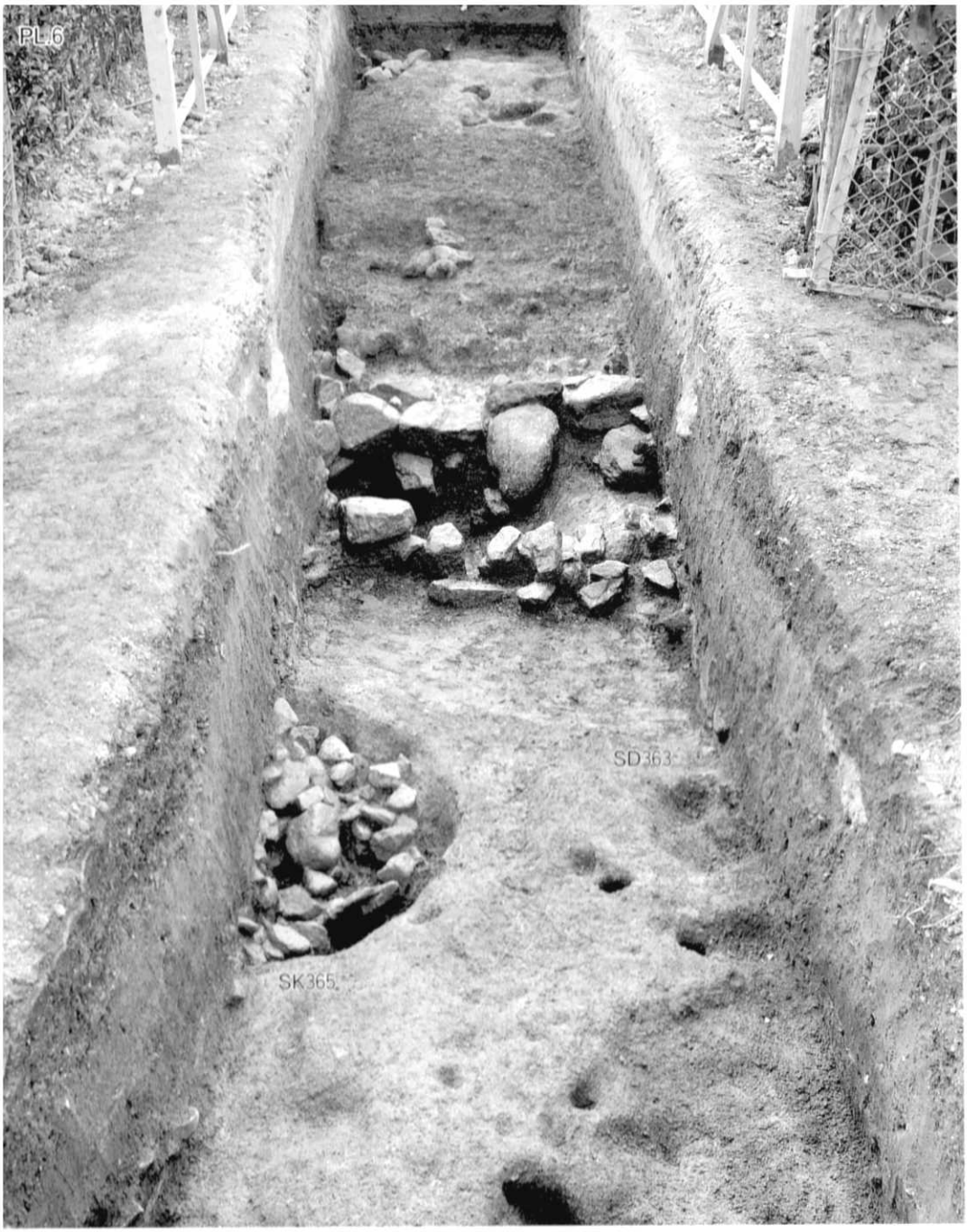
(2) 築地ＳＡ095（南から）



(1) 溝ＳＤ093（南から）



(2) 石積ＳＸ092（北から）



(1) 16次調査区（東から）



(2) 溝ＳＤ363（南から）



(3) 土坑ＳＫ365（北から）



(1) 23次調査区上層遺構（西から）



(2) 23次調査区下層遺構（西から）



(1) 築地状遺構ＳＡ467，溝ＳＤ468（北から）



(2) 築地状遺構ＳＡ472（北西から）



(1) 溝ＳＤ485（北から）



(4) 礫敷ＳＸ487（南から）



(2) 井戸ＳＥ480（東から）



(3) 井戸ＳＥ480枠（東から）



(1) 28次調査区（西から）



(2) 28次調査区（南から）



(1) 土坑ＳＫ521（南から）



(2) 下層遺構東半部（南から）



(1) 39-1次調査区（西から）



(2) 井戸ＳＥ870（南から）



(1) 井戸ＳＥ867（南から）



(2) 井戸ＳＥ867枠（南から）

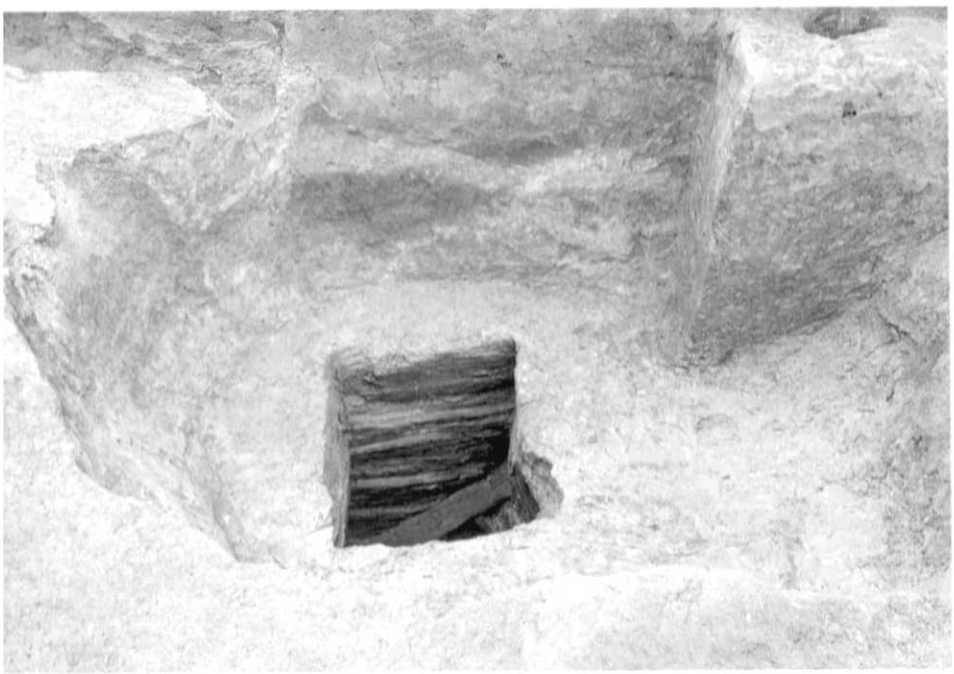


(3) 井戸ＳＥ868（西から）

PL.14



(1) 井戸ＳＥ868枠（西から）



(2) 井戸ＳＥ872（北から）



(3) 井戸ＳＥ872枠（北から）



(1) 39-2次調査区 3 Tr 上層遺構（東から）



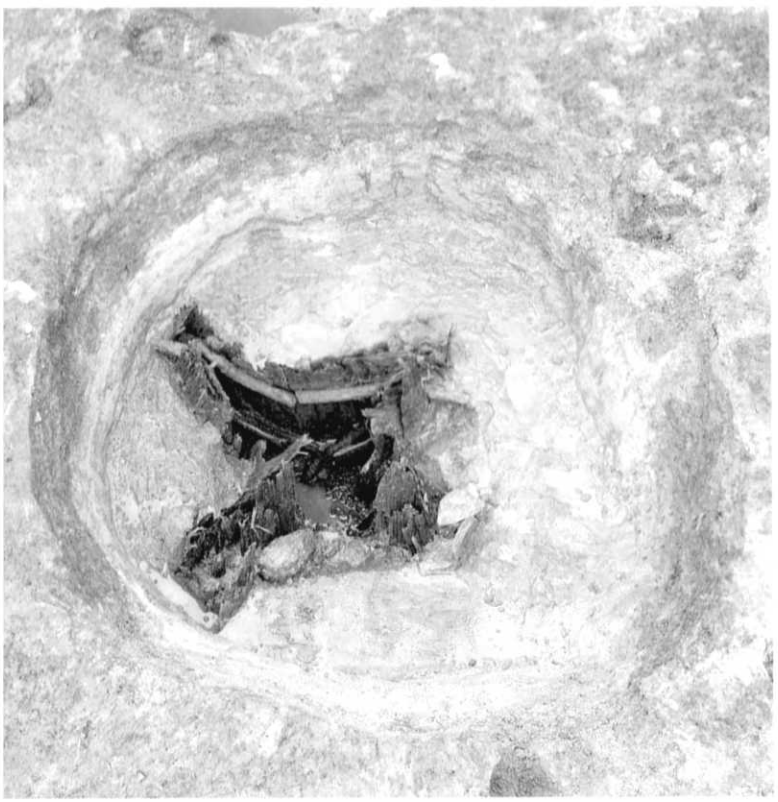
(2) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構（東から）



(3) 39-2次調査区 4 Tr 下層遺構（西から）



(1) 掘立柱建物ＳＢ884・889，溝ＳＤ890（西から）



(2) 井戸ＳＥ895（南から）



(3) 井戸ＳＥ895枠（南から）



(1) 井戸ＳＥ902（南から）



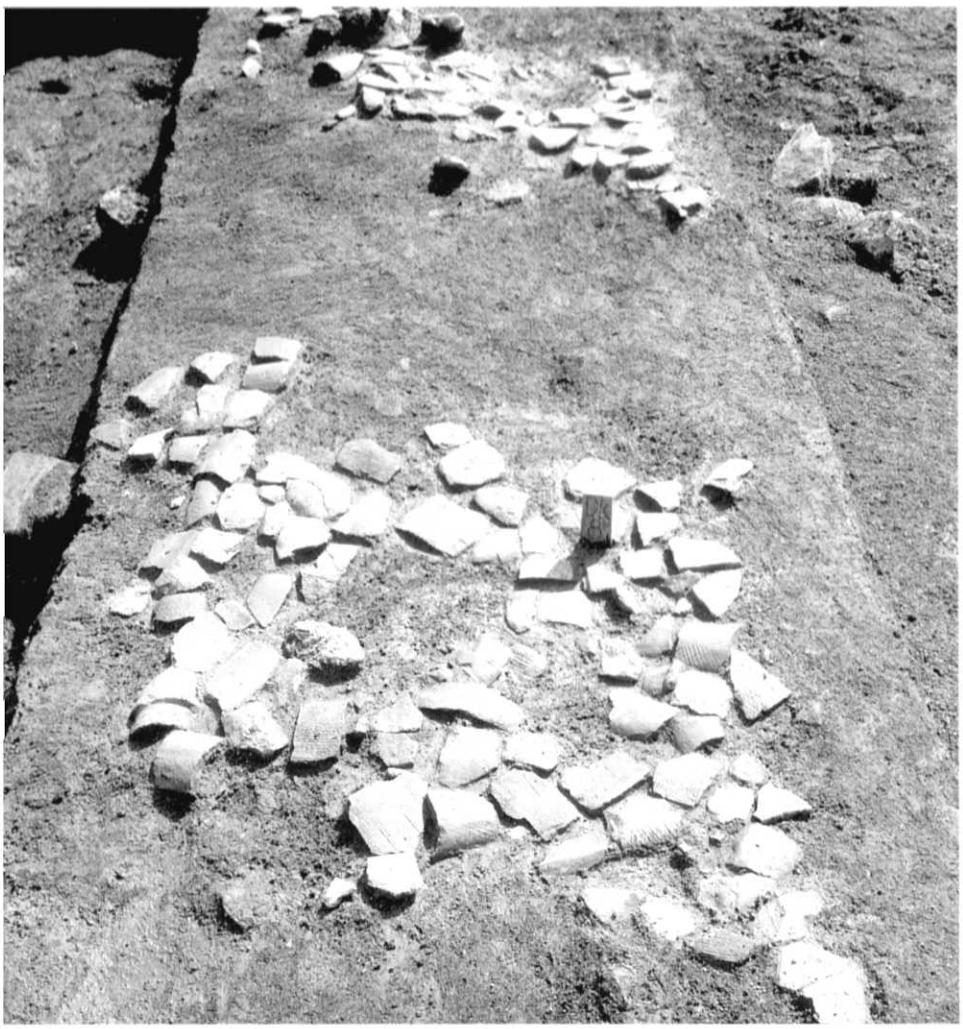
(2) 土坑ＳＫ913（南から）



(3) 土坑ＳＫ927（南から）



(1) 土坑ＳＫ911・912（北東から）



(2) 瓦敷ＳＸ917（北から）



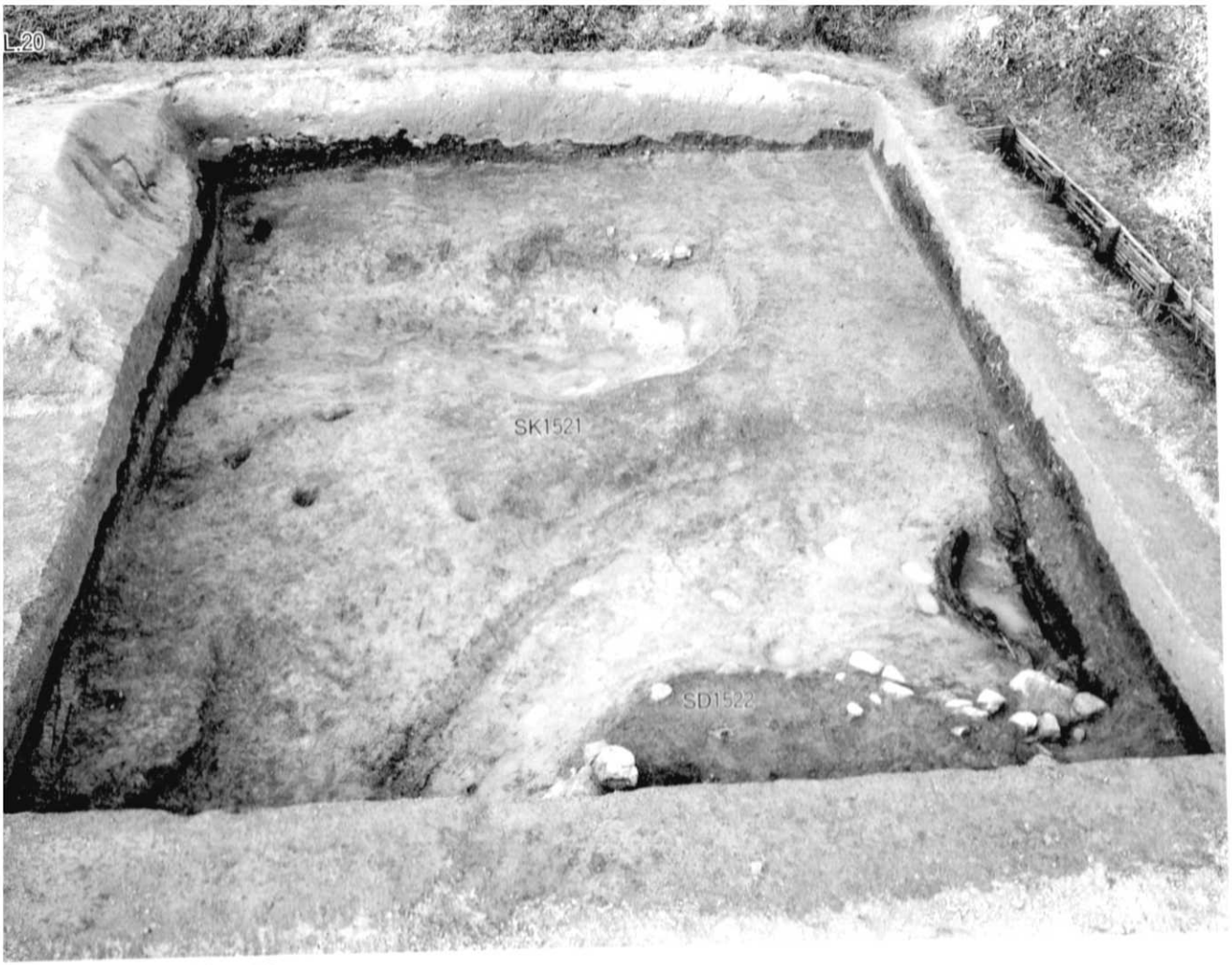
(1) 39-3次調査区 1 Tr（西から）



(2) 39-3次調査区 2 Tr（東から）



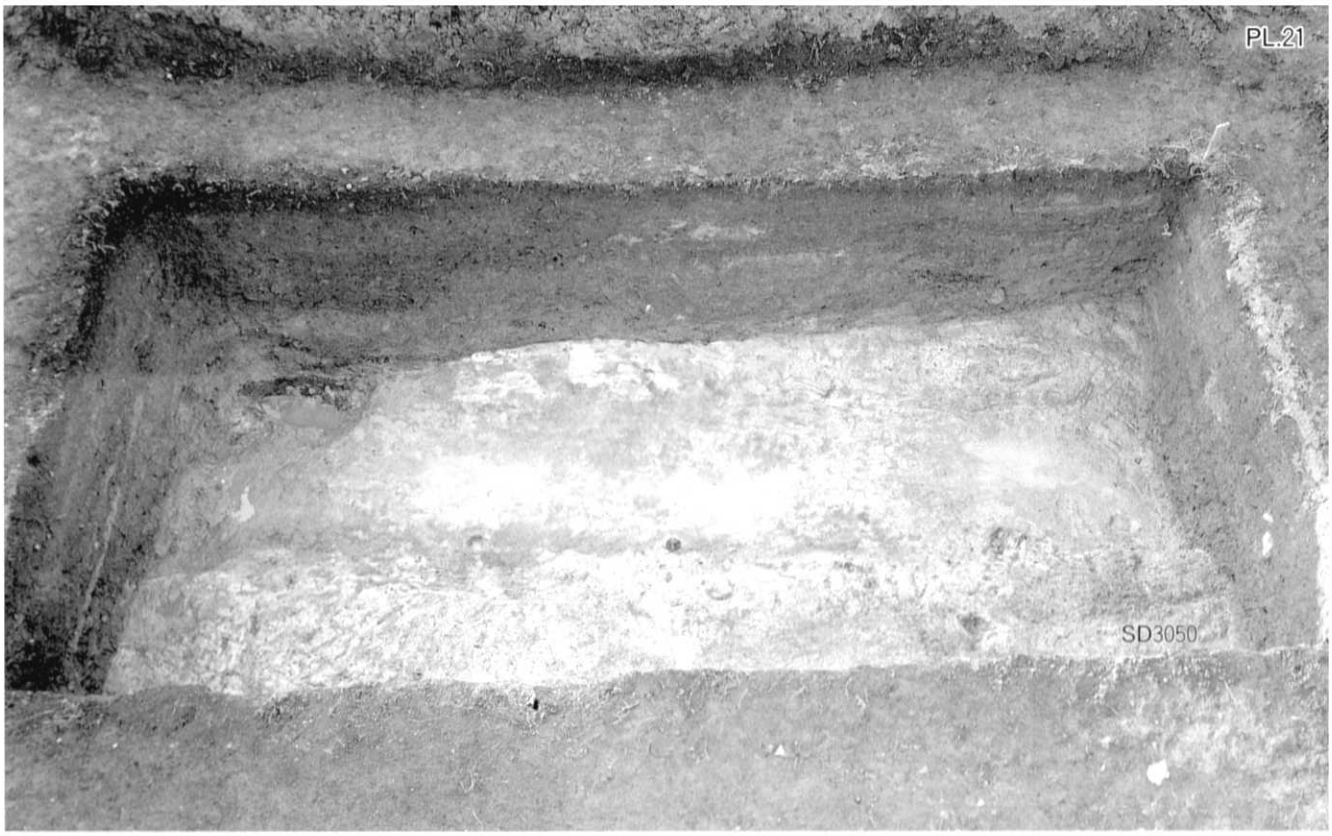
(3) 39-3次調査区 2 Tr（西から）



(1) 61次調査区（南から）



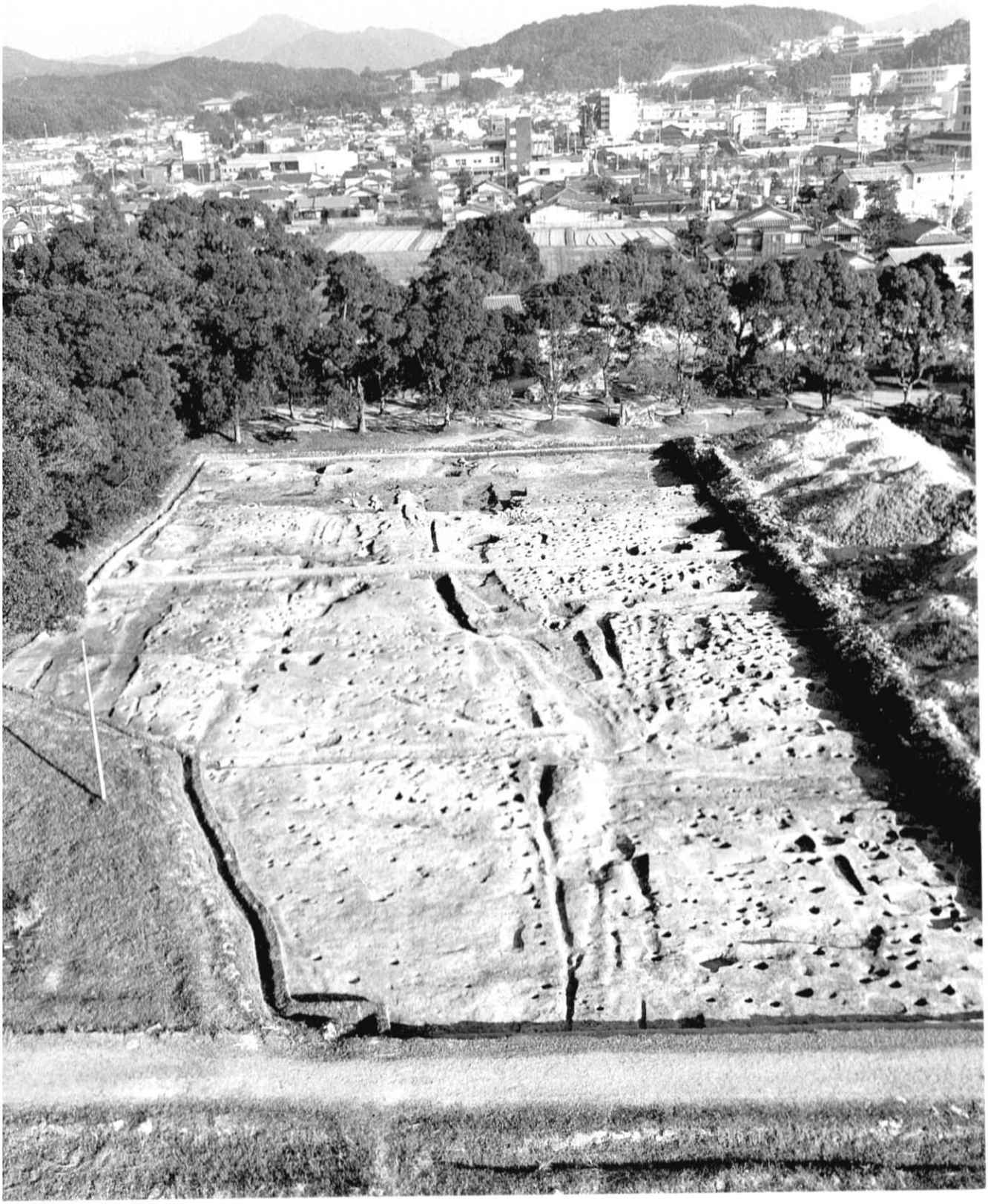
(2) 61次調査区（西から）



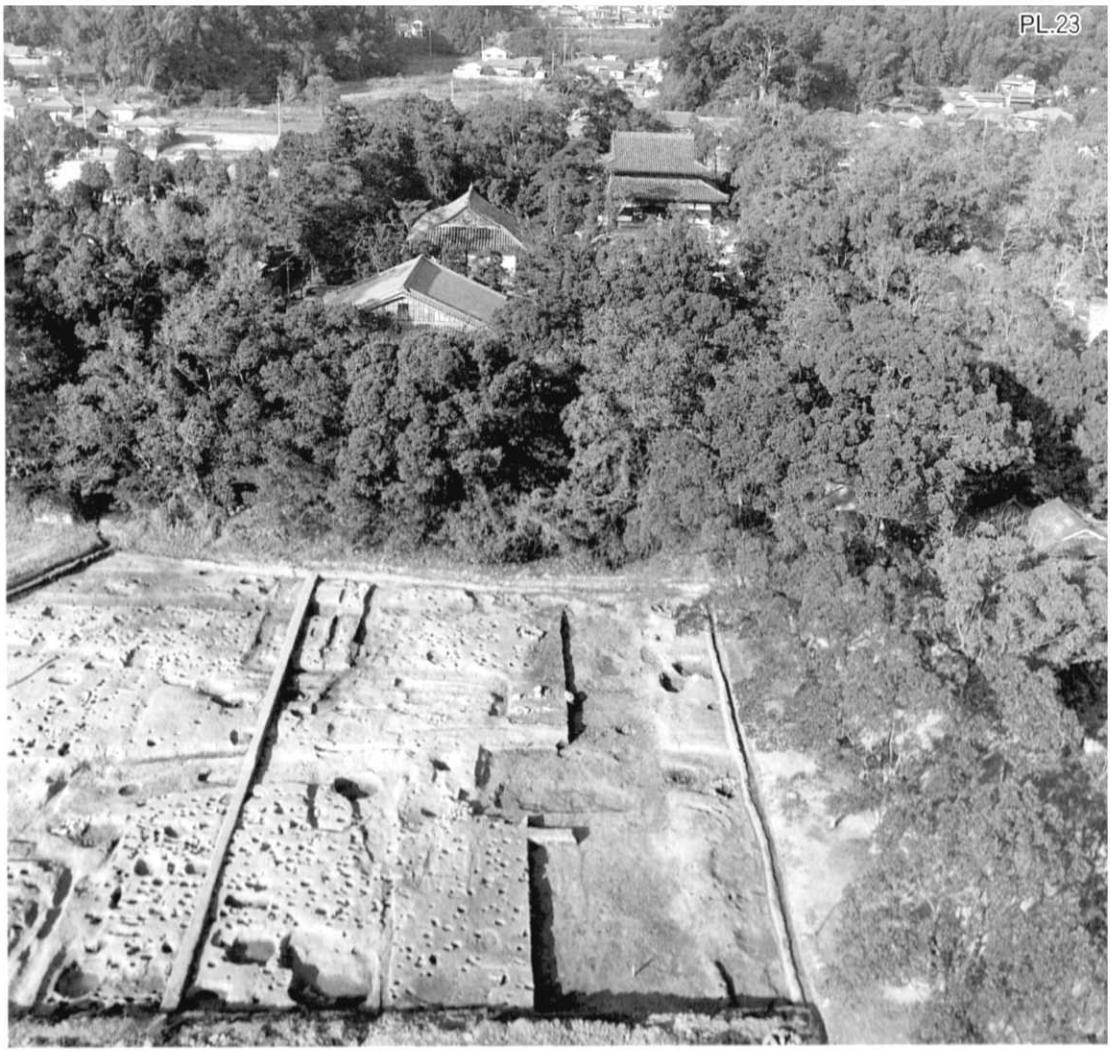
(1) 103次調査区（南東から）



(2) 溝ＳＤ3050（南西から）



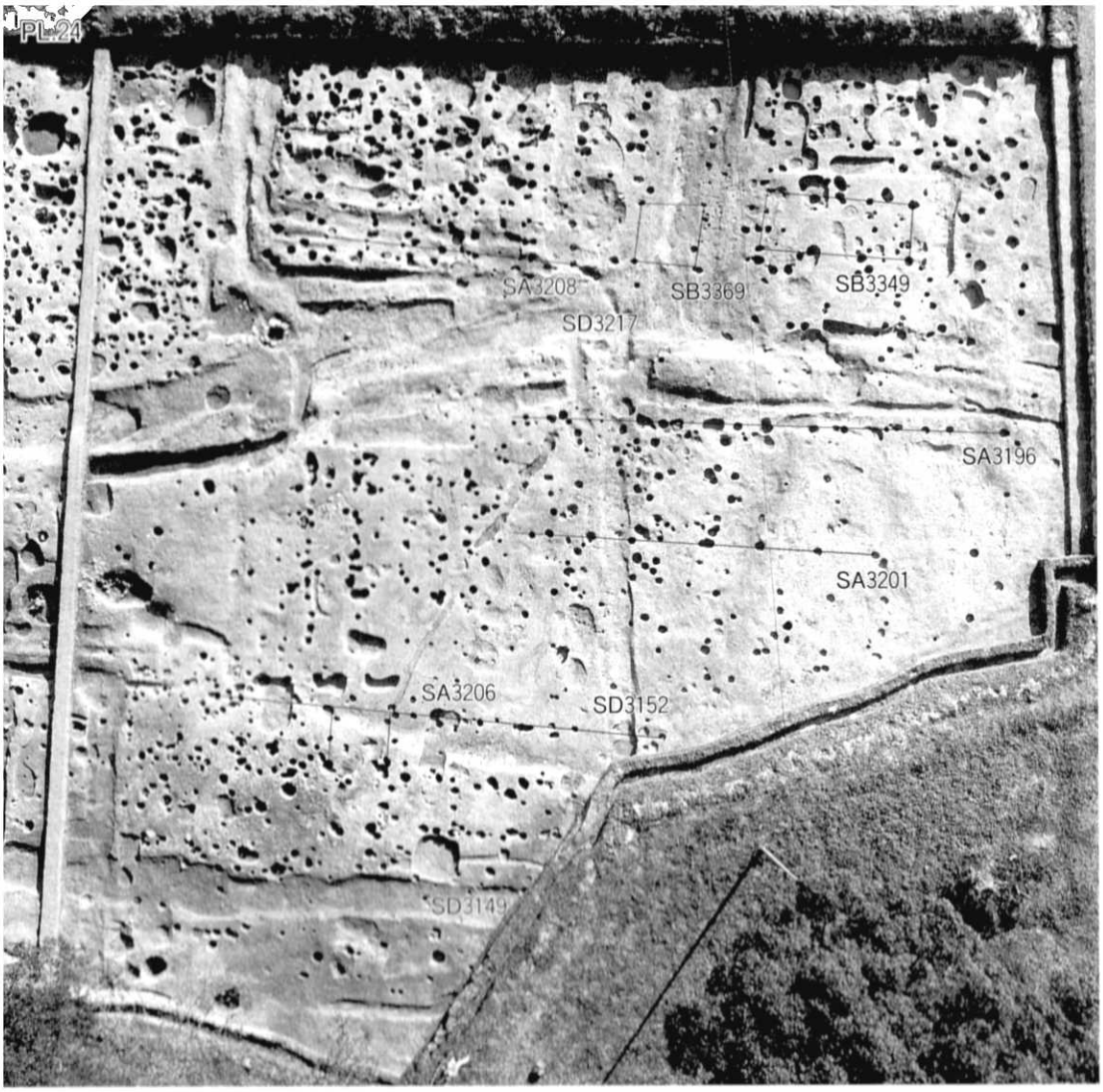
109次調査区全景（空中写真，西上空から）



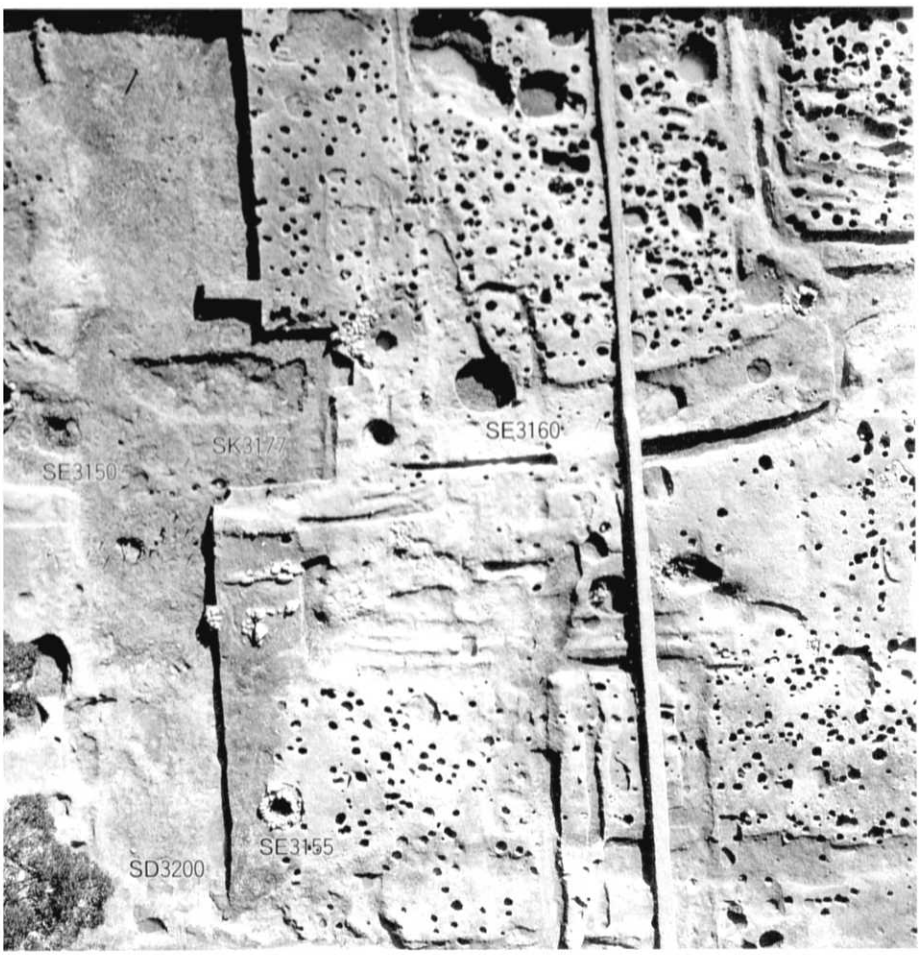
(1) 109次調査区（空中写真，南上空から）



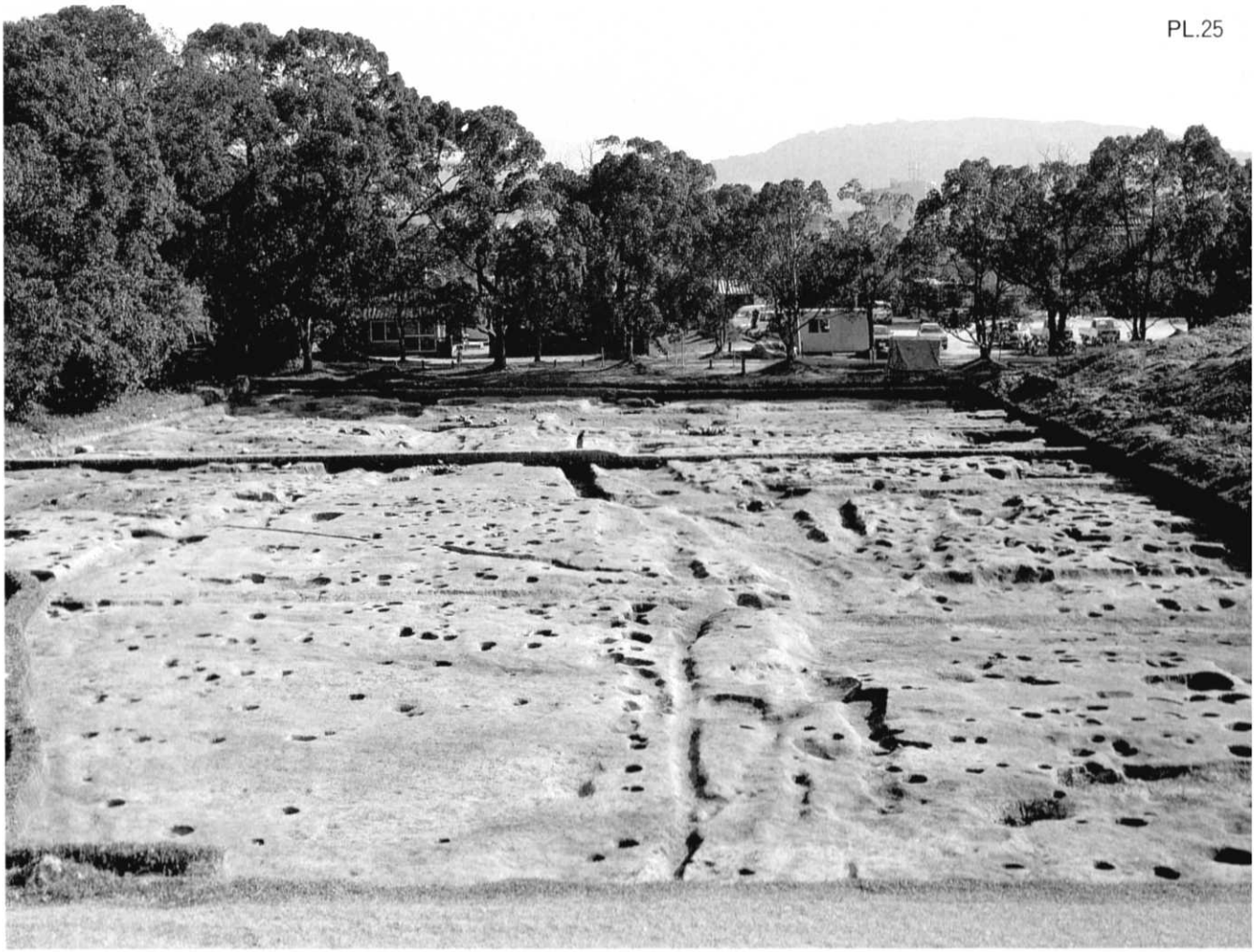
(2) 111次調査区（空中写真，北上空から）



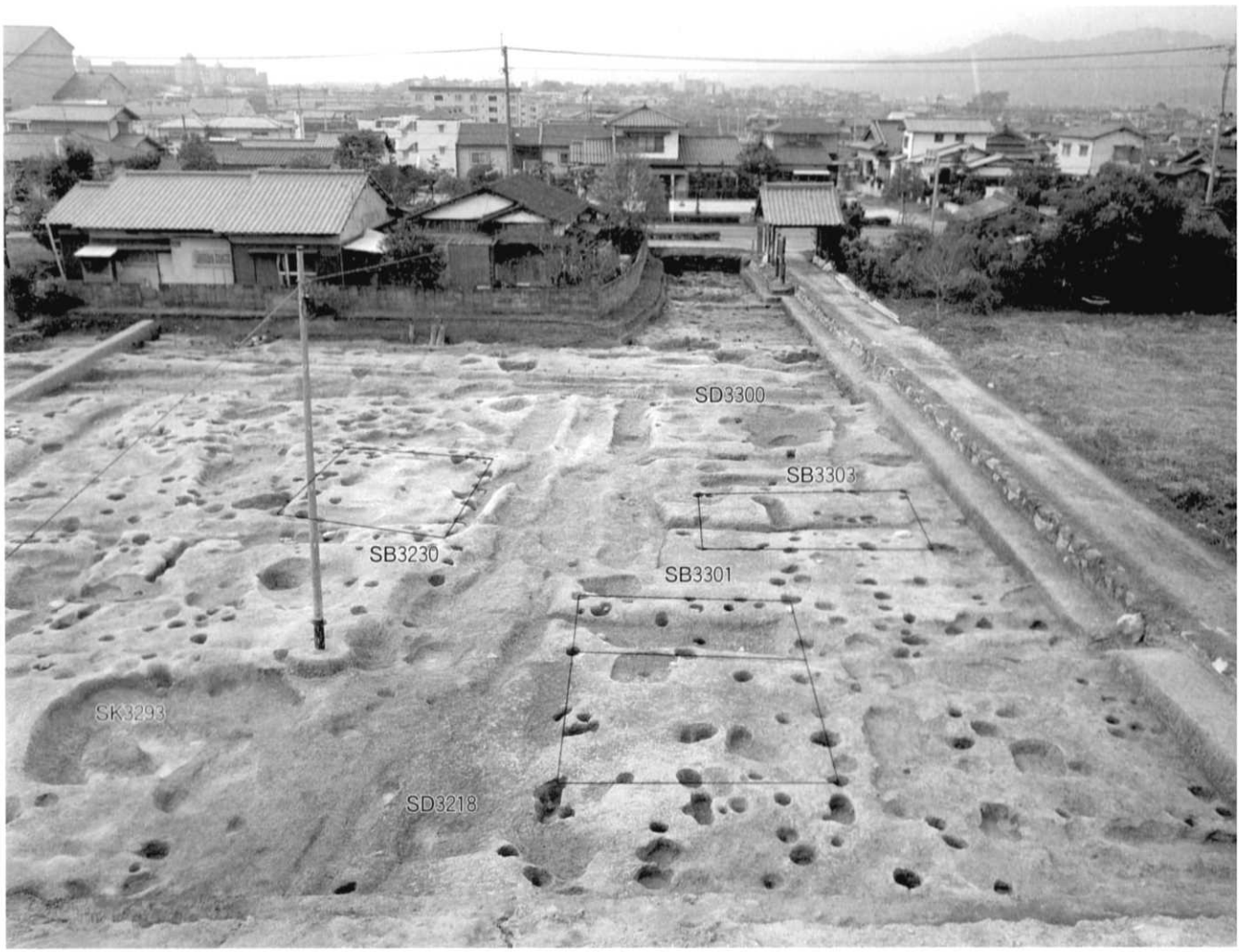
(1) 109次調査区西半部（北真上から）



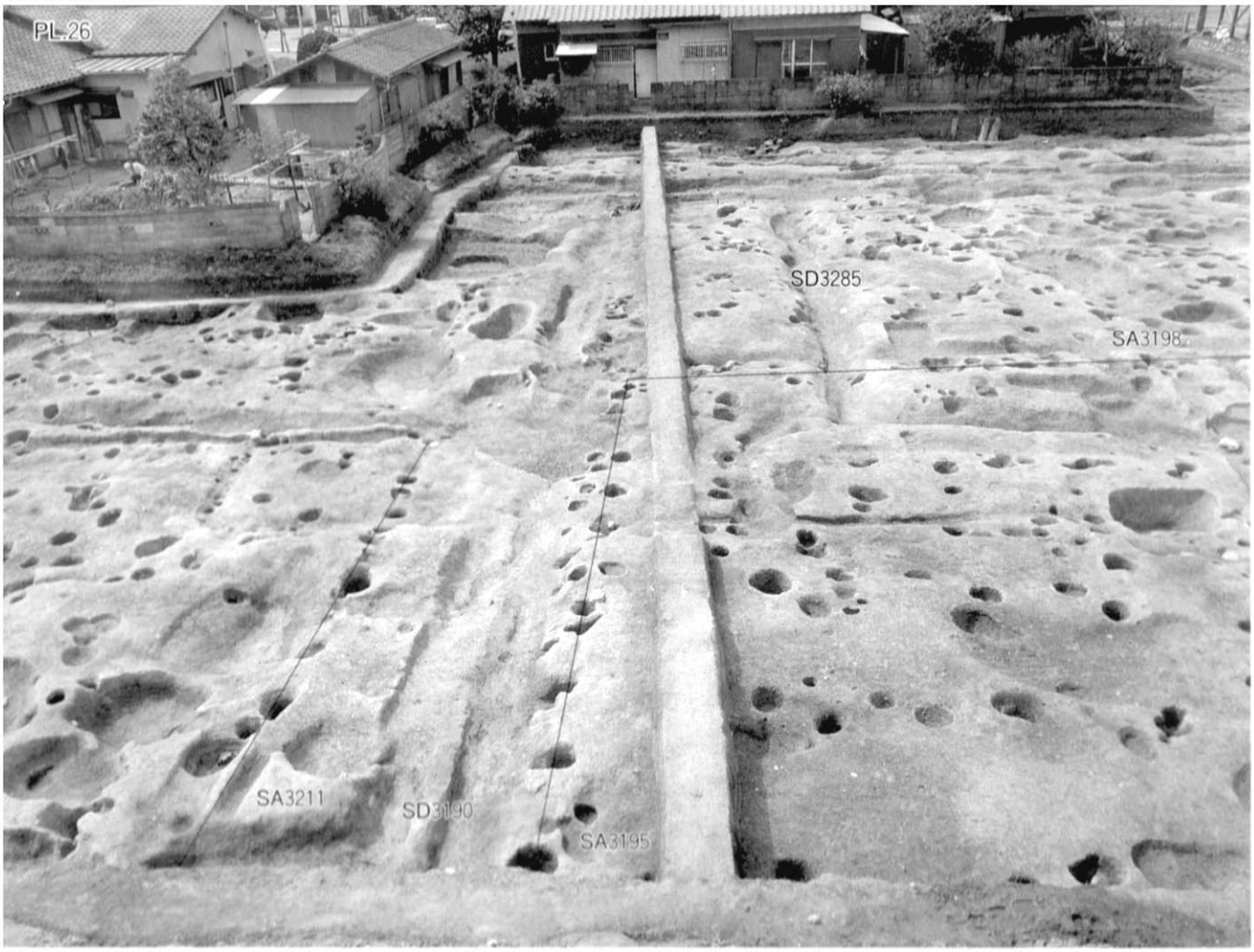
(2) 109次調査区東半部（北真上から）



(1) 109次調査区（西から）



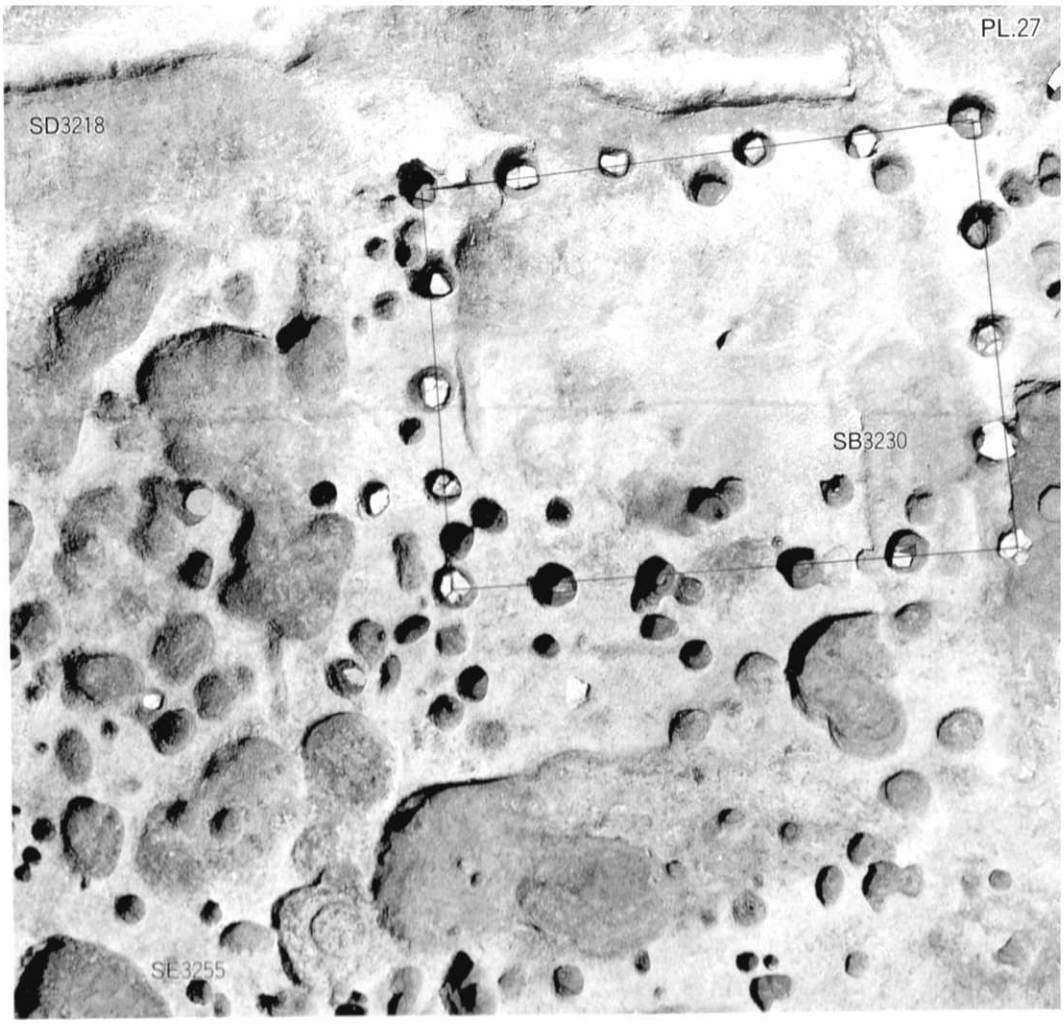
(2) 111次調査区西半部（北から）



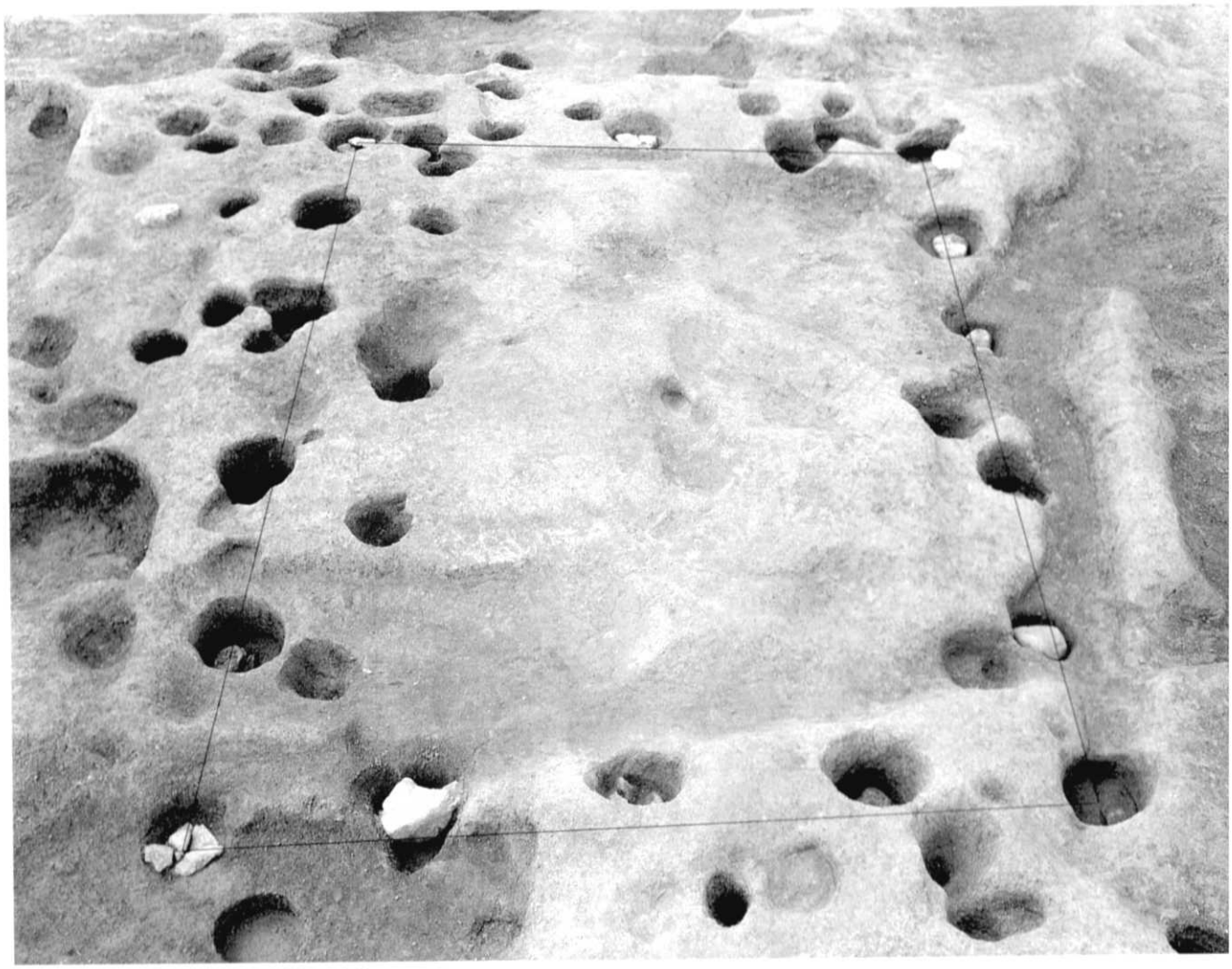
(1) 柵ＳＡ3195，溝ＳＤ3190（北から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ3205周辺（北から）



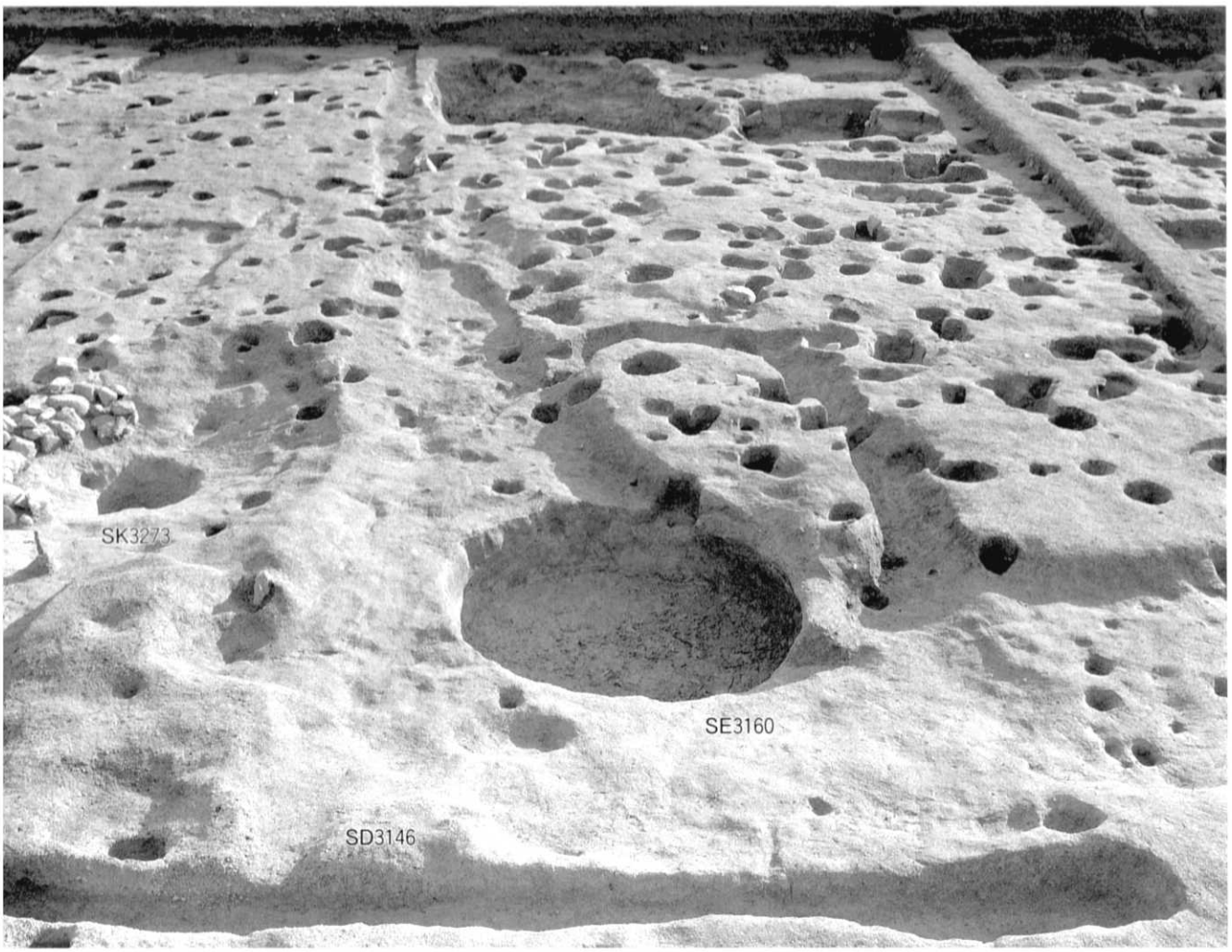
(1) 掘立柱建物ＳＢ3230（東真上から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ3230（北から）



(1) 井戸ＳＥ3155周辺（東から）



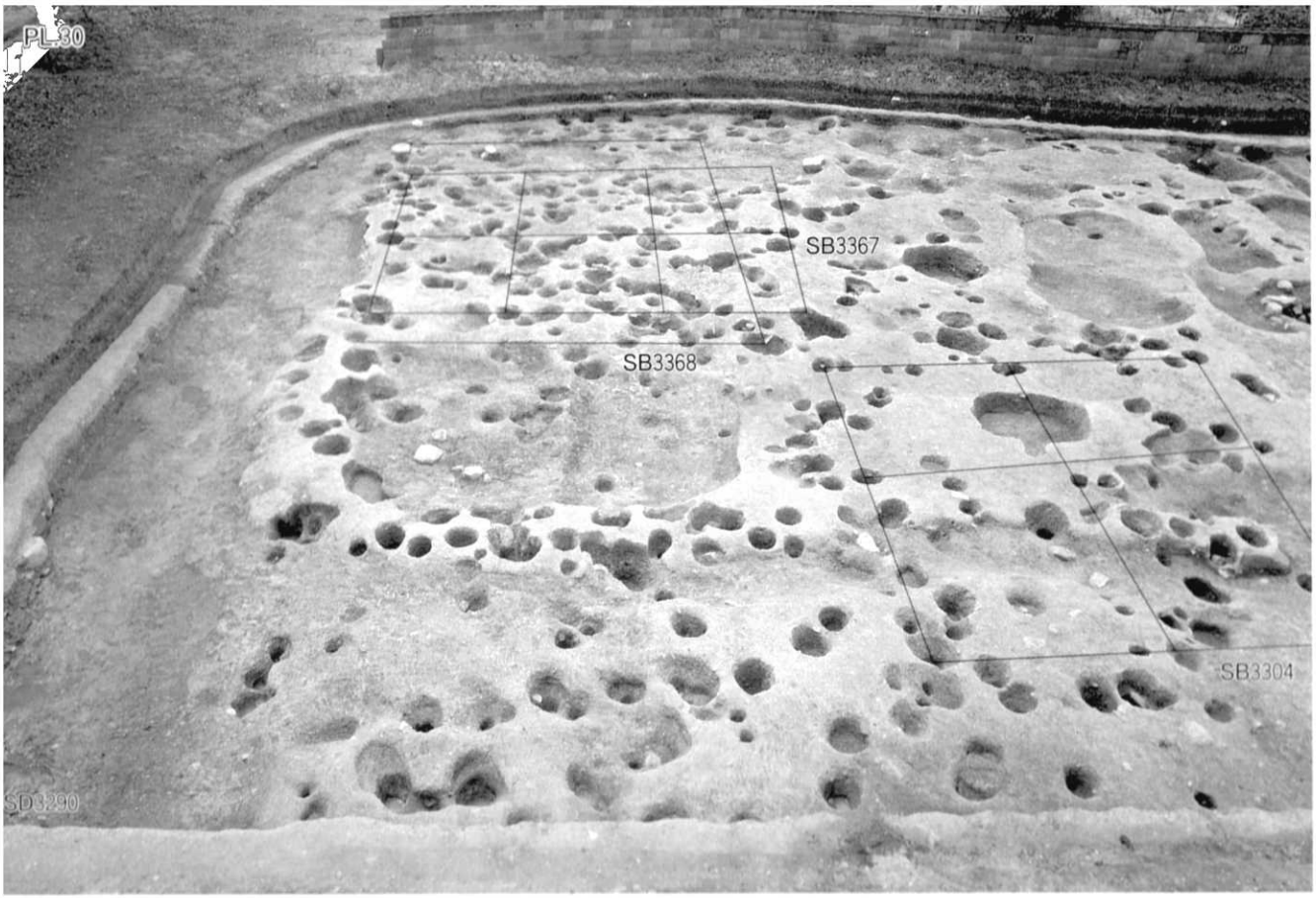
(2) 井戸ＳＥ3160周辺（北から）



(1)　溝ＳＤ3200（南から）



(2)　溝ＳＤ3200（北から）



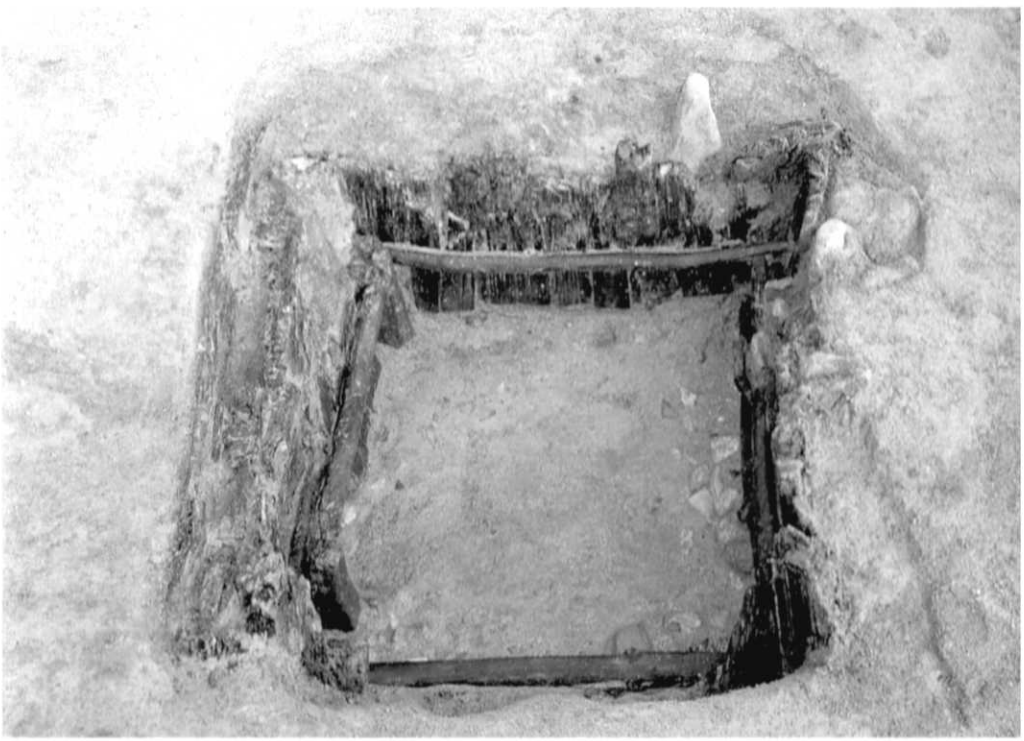
(1) 溝ＳＤ3290、掘立柱建物ＳＢ3304周辺（北から）



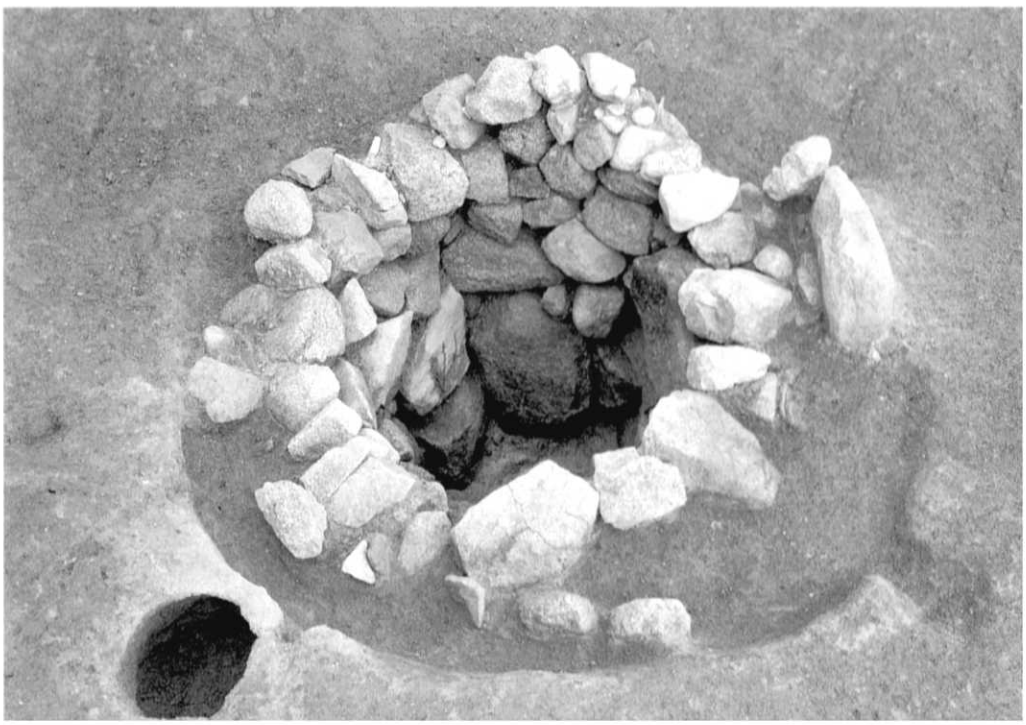
(2) 溝ＳＤ3300（西から）



(1) 井戸ＳＥ3145（東から）



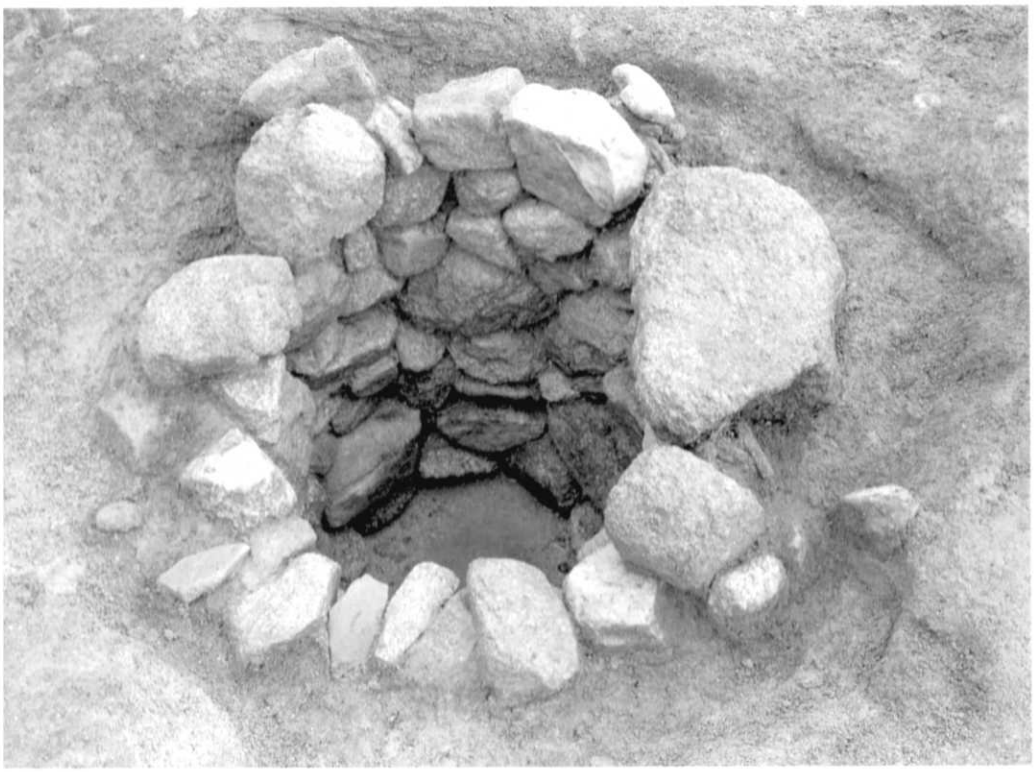
(2) 井戸ＳＥ3150（西から）



(3) 井戸ＳＥ3155（西から）



(1) 井戸ＳＥ3160（東から）



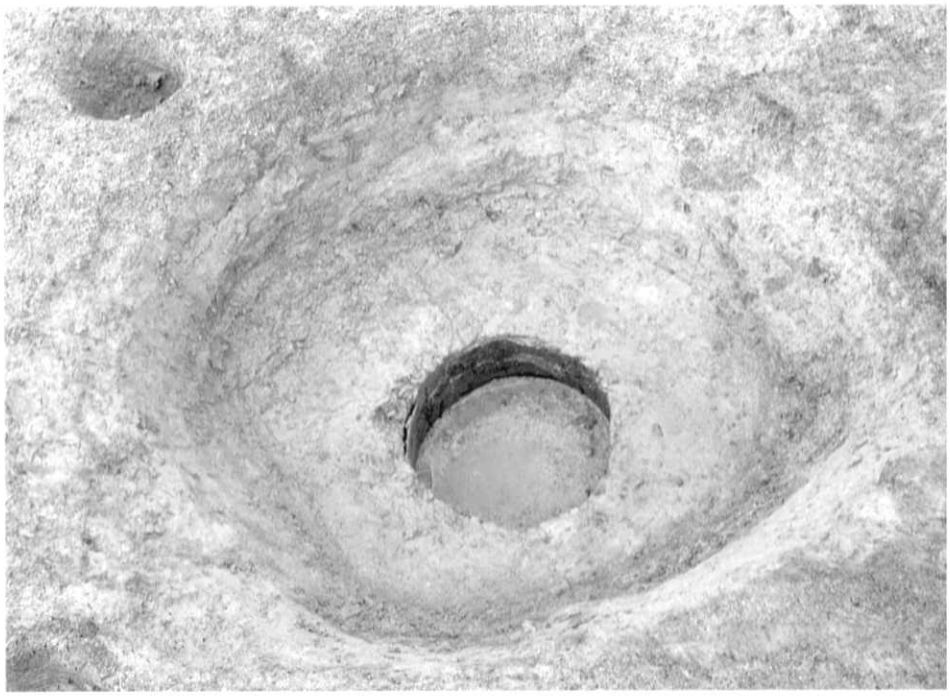
(2) 井戸ＳＥ3165（西から）



(3) 井戸ＳＥ3170（北西から）



(1) 井戸ＳＥ3175（西から）



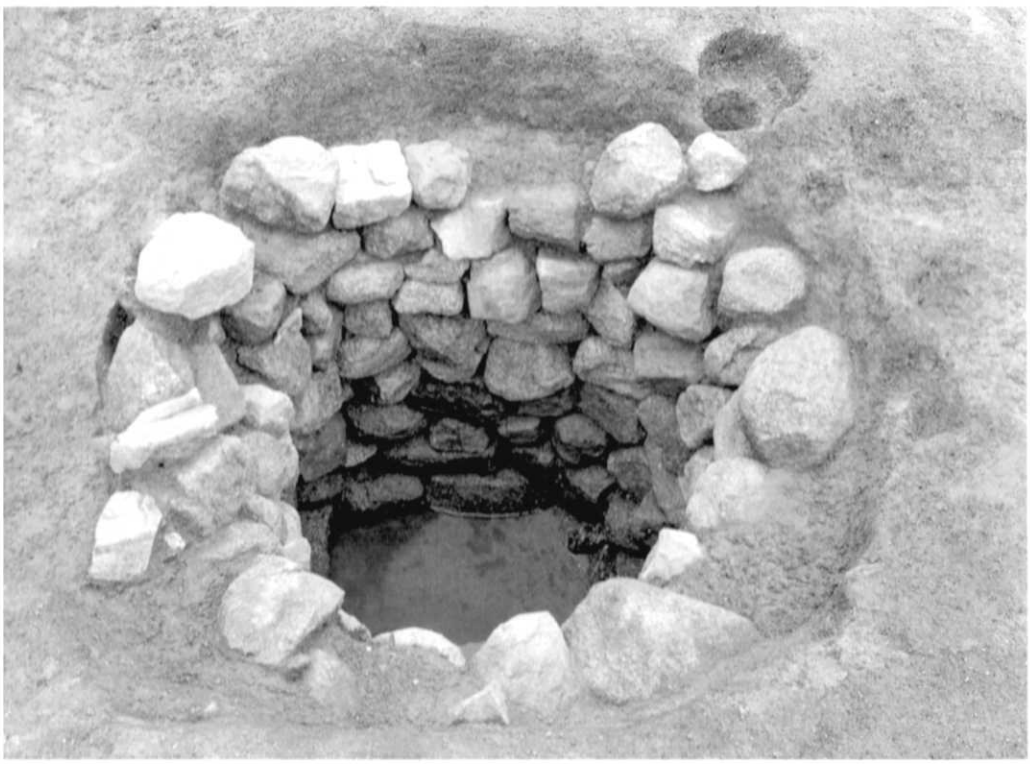
(2) 井戸ＳＥ3180（東から）



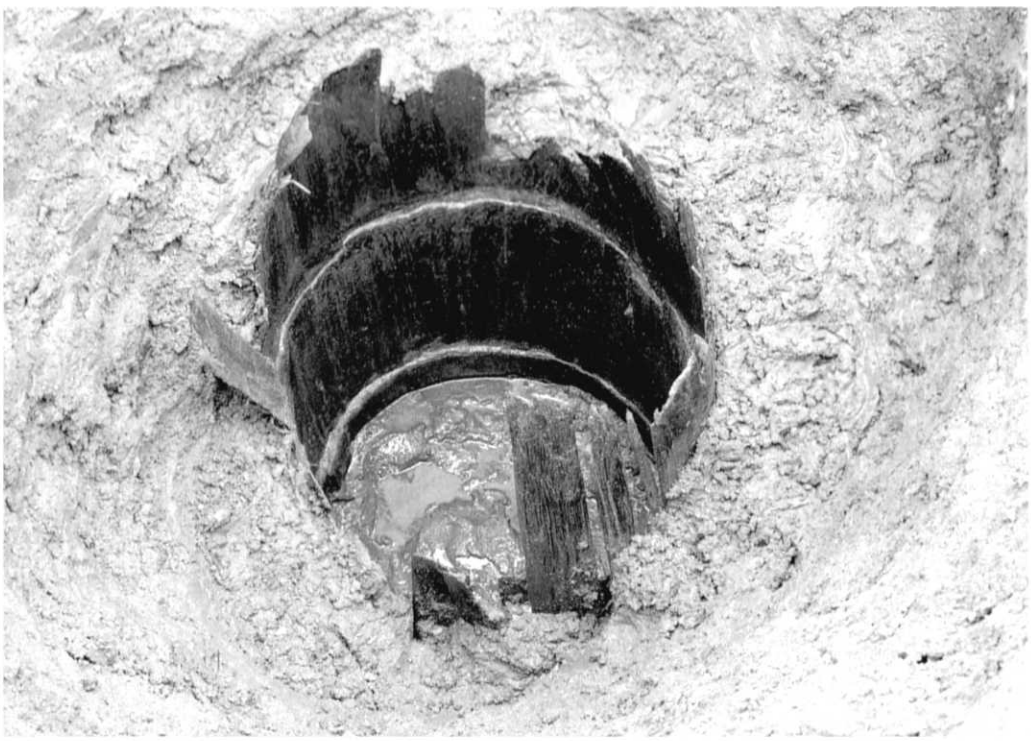
(3) 井戸ＳＥ3185（東から）



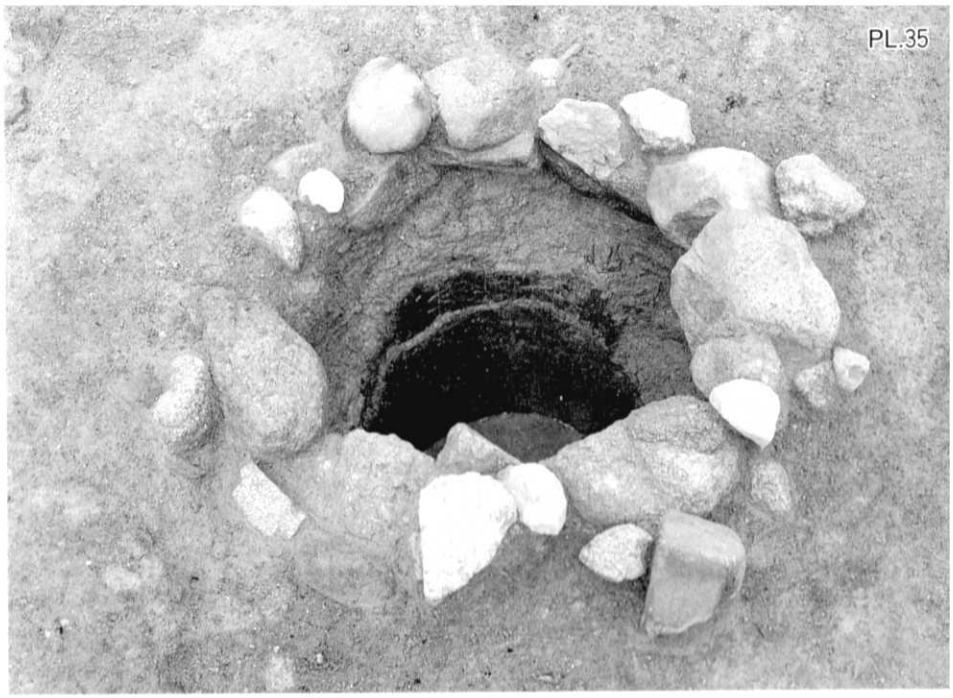
(1) 井戸ＳＥ3215（南東から）



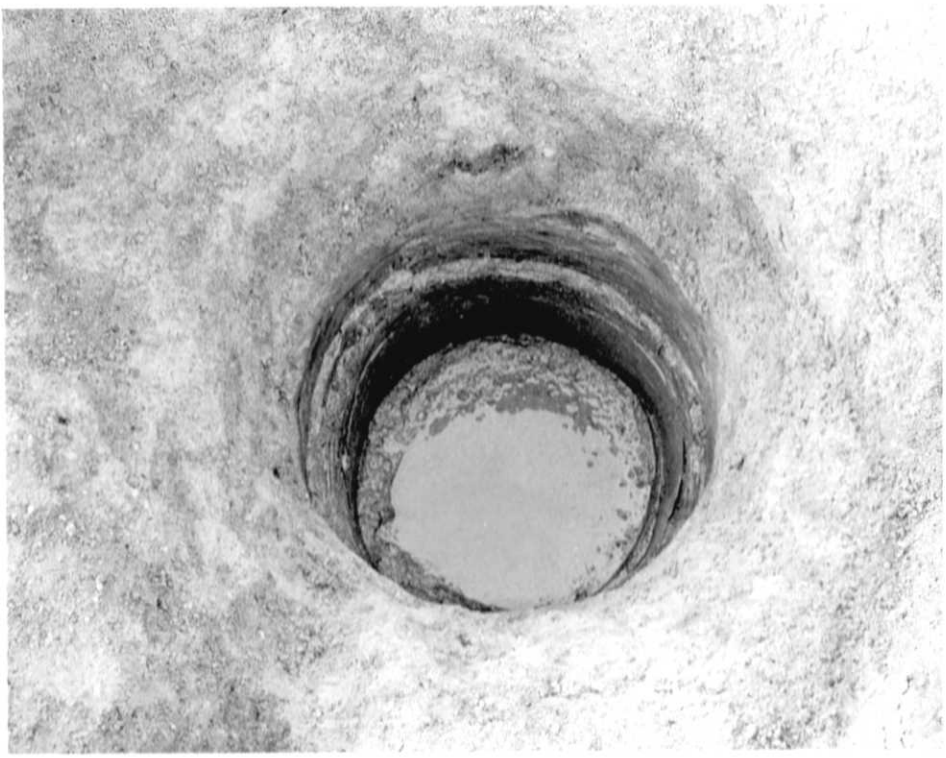
(2) 井戸ＳＥ3235（北から）



(3) 井戸ＳＥ3240（西から）



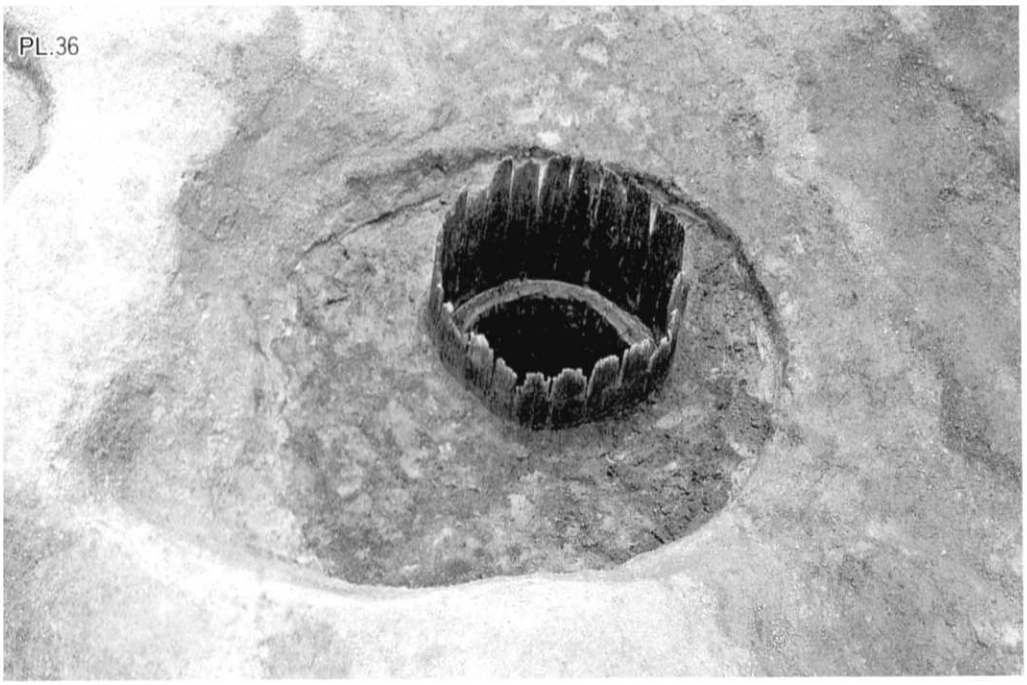
(1) 井戸ＳＥ3245（東から）



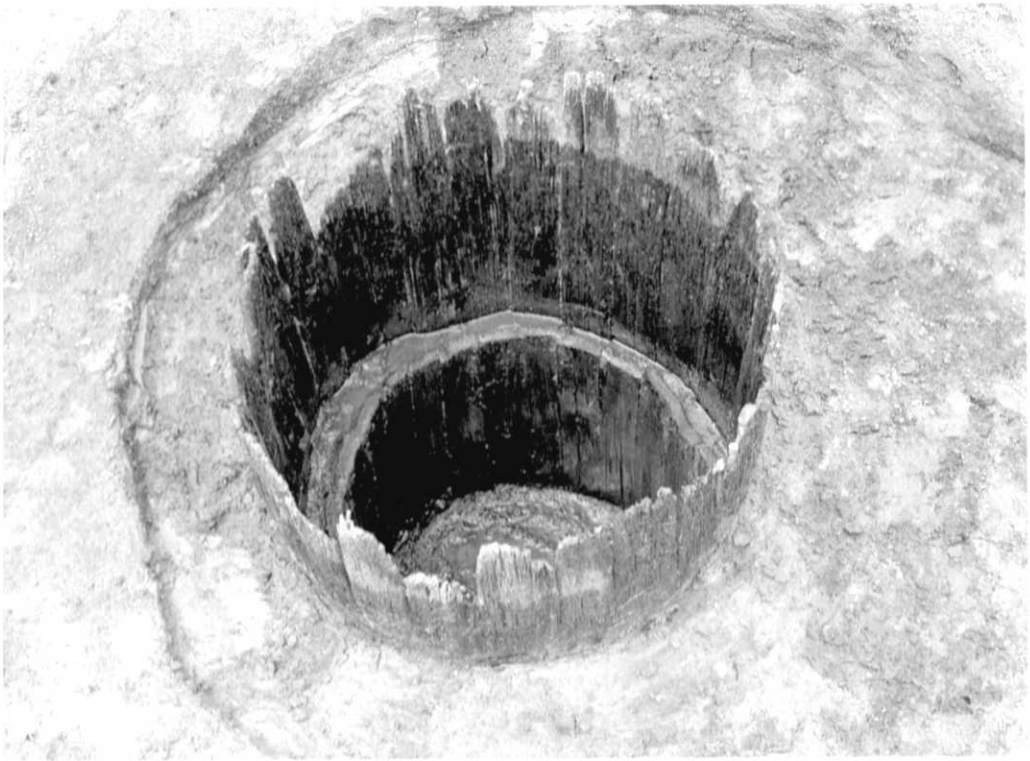
(2) 井戸ＳＥ3250（南から）



(3) 井戸ＳＥ3255（西から）



(1) 井戸ＳＥ3260（西から）



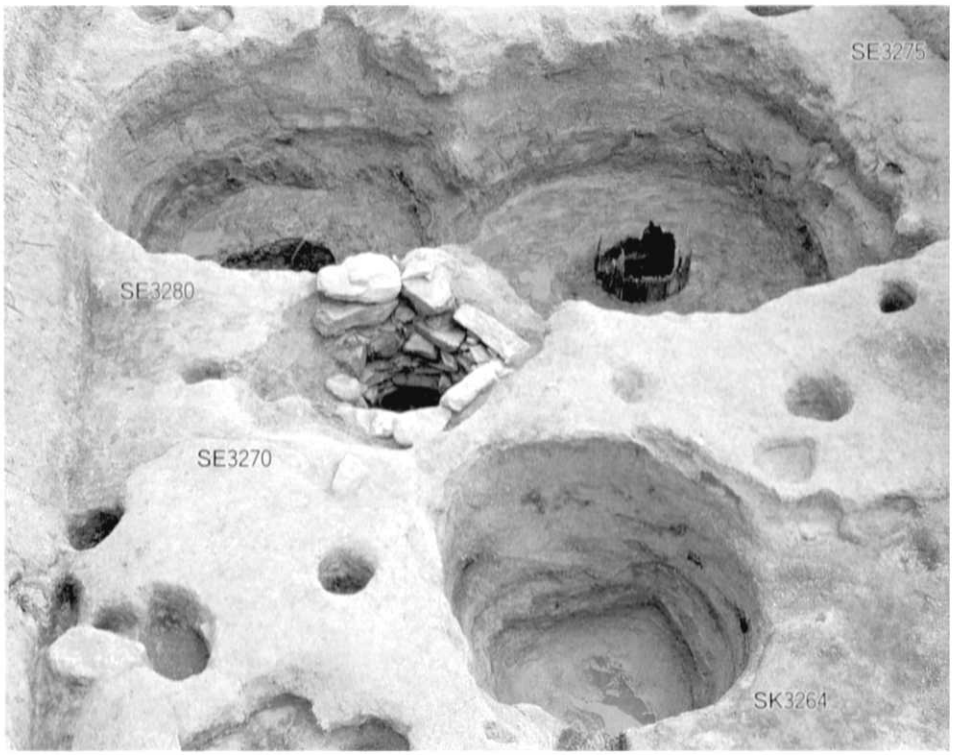
(2) 井戸ＳＥ3260枠（東から）



(3) 井戸ＳＥ3265（北から）



(1) 井戸ＳＥ3265枠（北西から）



(2) 井戸ＳＥ3270・3275・3280、土坑ＳＫ3264（北から）



(3) 井戸ＳＥ3270（北東から）



(1) 井戸ＳＥ3275（北から）



(2) 井戸ＳＥ3275枠（南から）



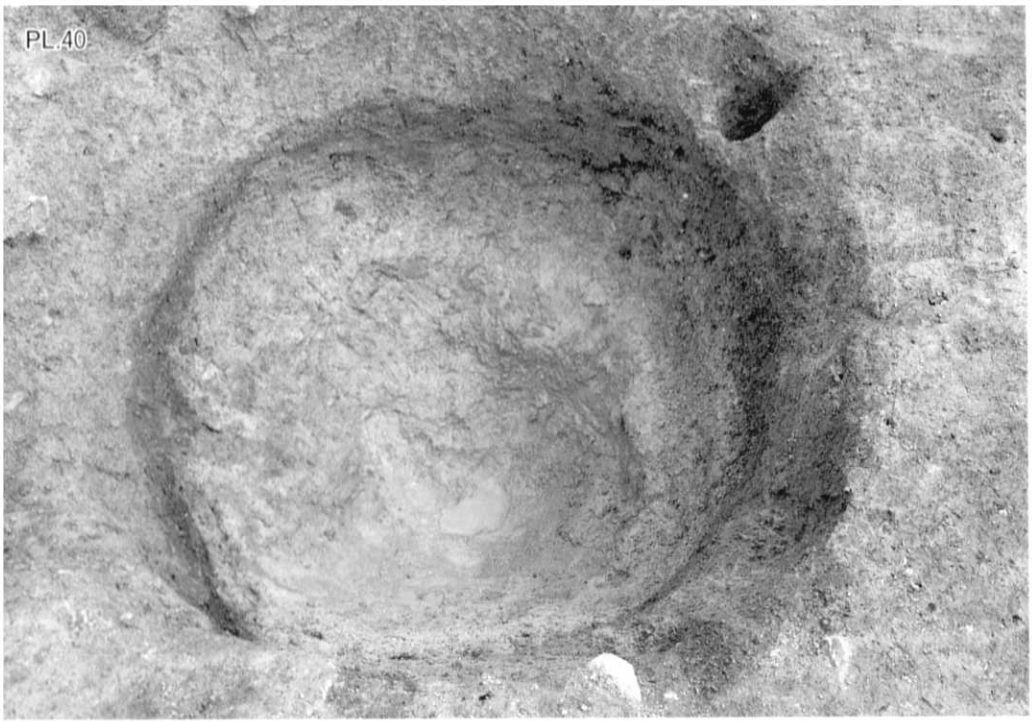
(3) 井戸ＳＥ3280（東から）



(1) 土坑ＳＫ3174周辺（西から）



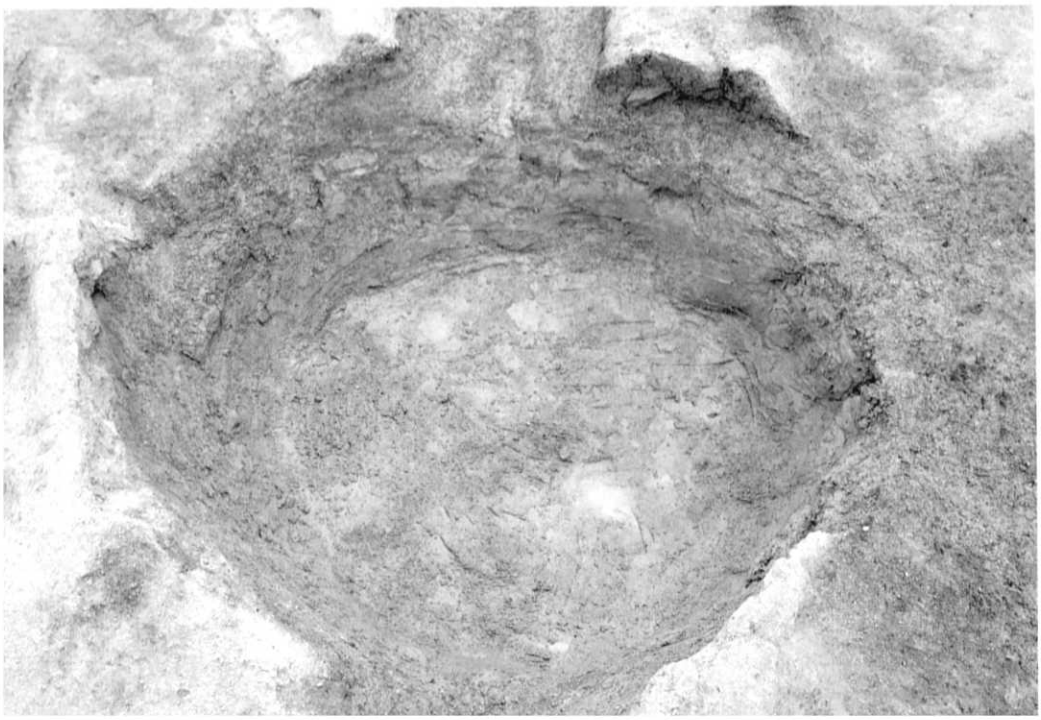
(2) 土坑ＳＫ3247周辺（北から）



(1) 土坑ＳＫ3246（西から）



(2) 土坑ＳＫ3247（東から）



(3) 土坑ＳＫ3259（西から）



(1) 土坑ＳＫ3264（北から）



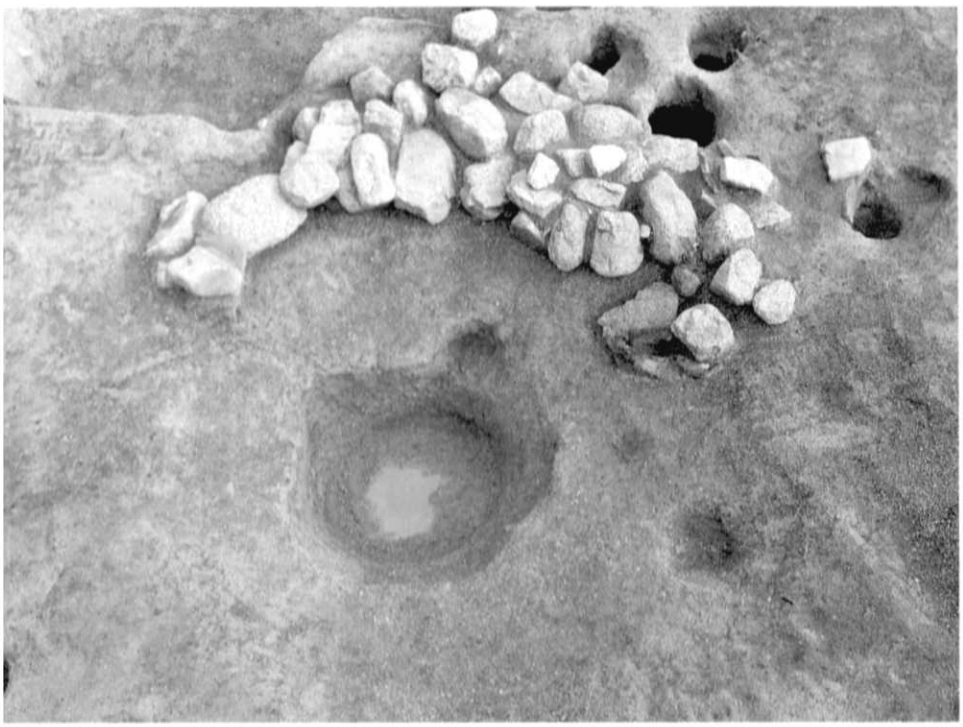
(2) 土坑ＳＫ3266（東から）



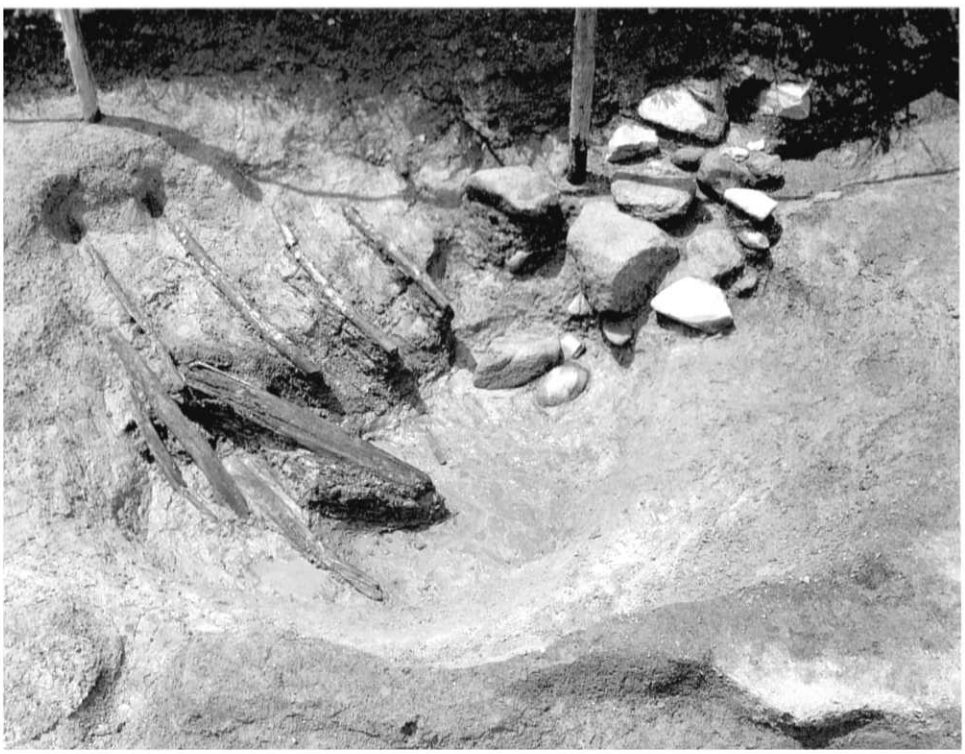
(3) 土坑ＳＫ3268（北東から）



(1) 土坑ＳＫ3271（北から）



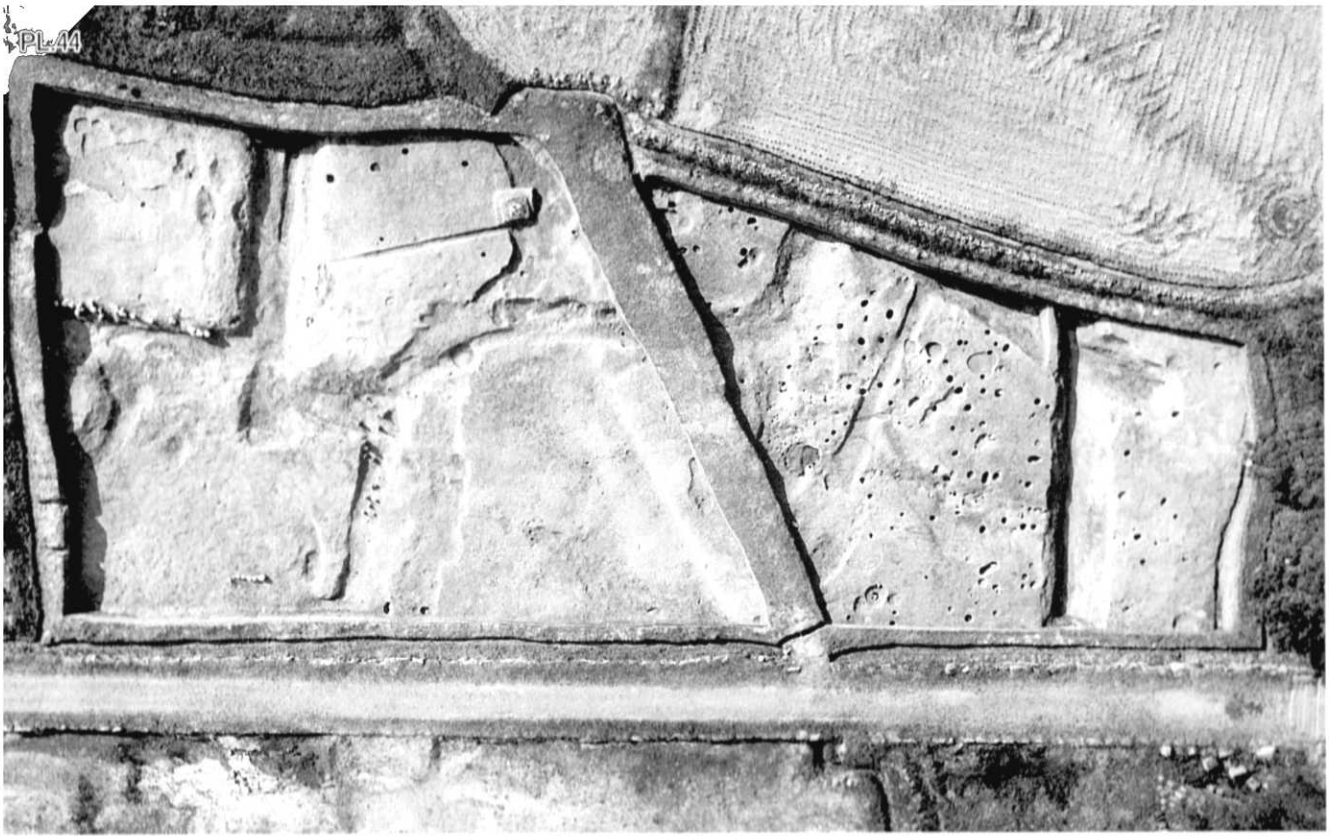
(2) 土坑ＳＫ3273（西から）



(3) 土坑ＳＫ3295（北から）



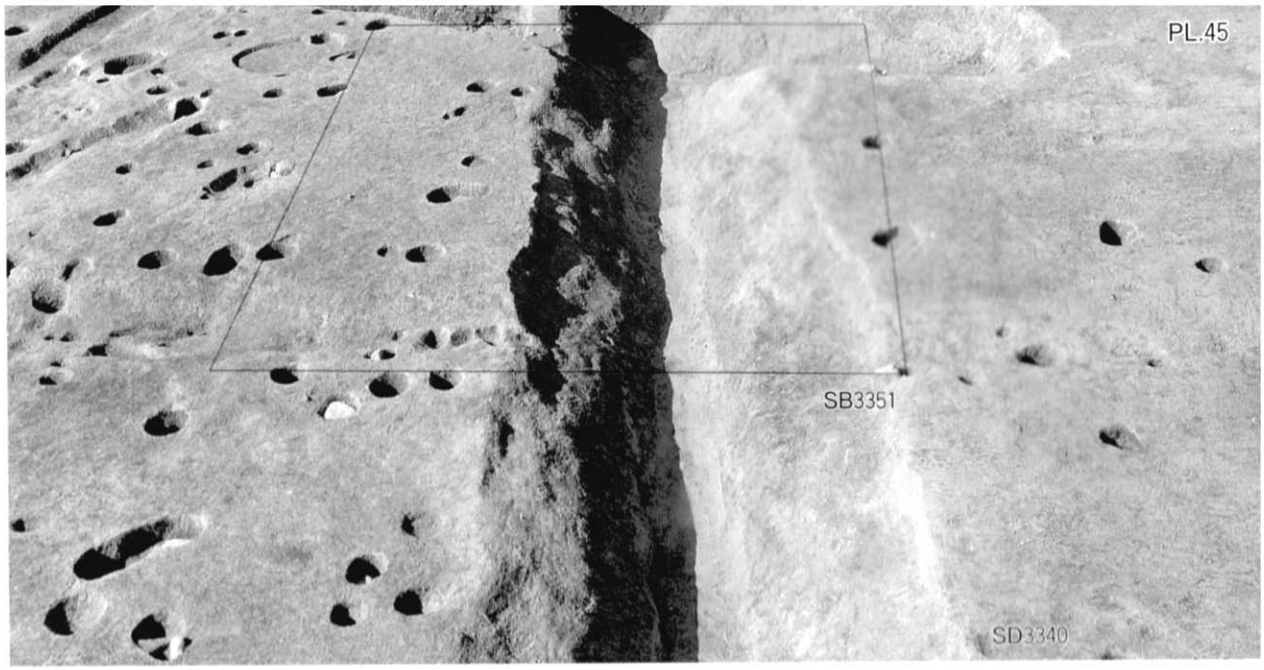
115次調査区全景（空中写真，南上空から　奥の建物は戒壇院本堂）



(1) 115次調査区全景（空中写真、東真上から）



(2) 115次調査区南半部（東真上から）



(1) 掘立柱建物ＳＢ3351，溝ＳＤ3340（東から）



(2) 溝ＳＤ3338（東から）



(3) 溝ＳＤ3333・3335（東から）



(1) 井戸ＳＥ3345（西から）



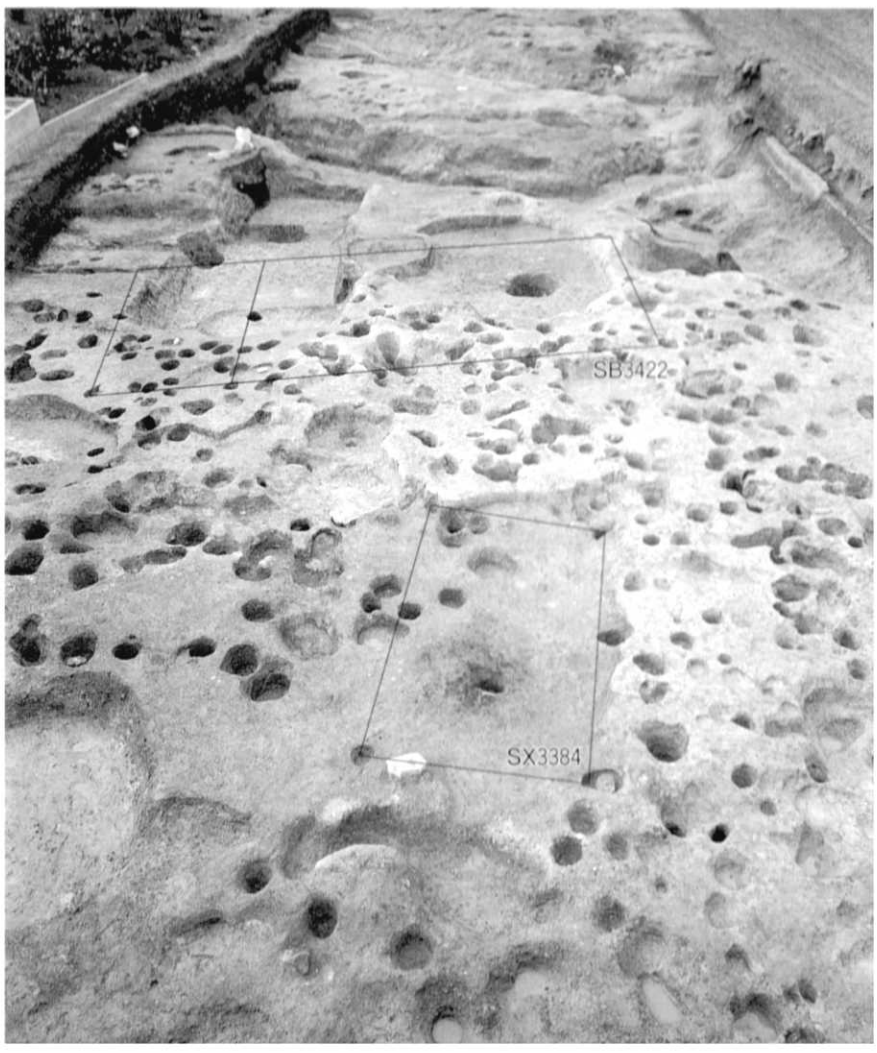
(2) 井戸ＳＥ3350（南から）



(3) 井戸ＳＥ3350下部（南から）



(1) 117次調査区全景（空中写真，西上空から）



(2) 調査区西半 Pit 群（東から）



(1) 溝ＳＤ3400Ａ・Ｂ（北東から）



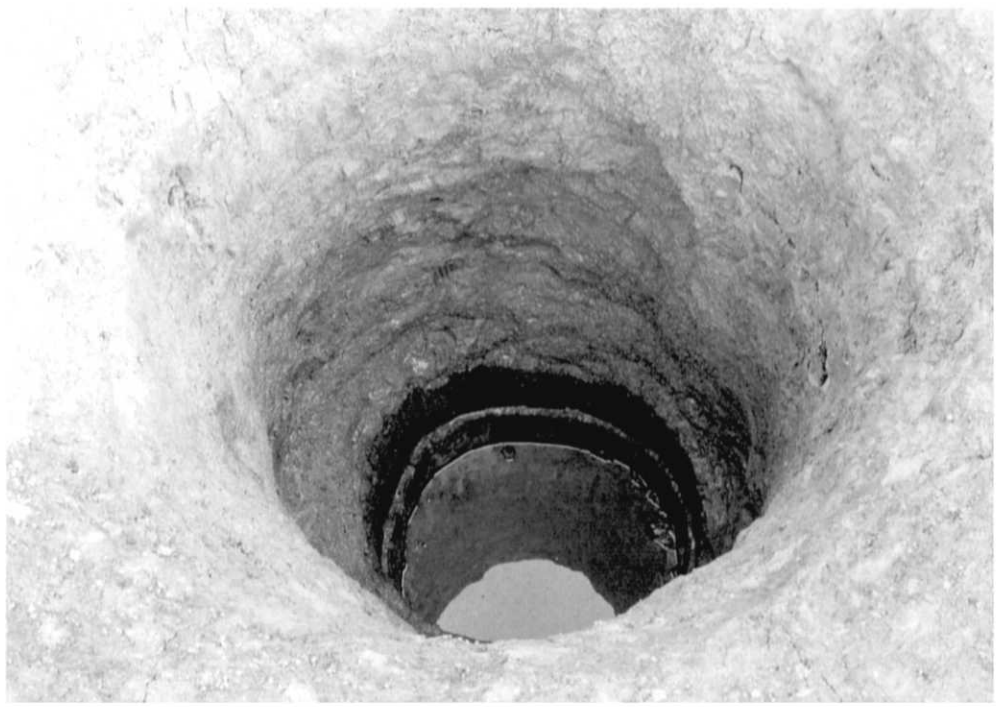
(2) 溝ＳＤ3430・3440（北東から）



(1) 井戸ＳＥ3370（南から）



(2) 井戸ＳＥ3375（東から）

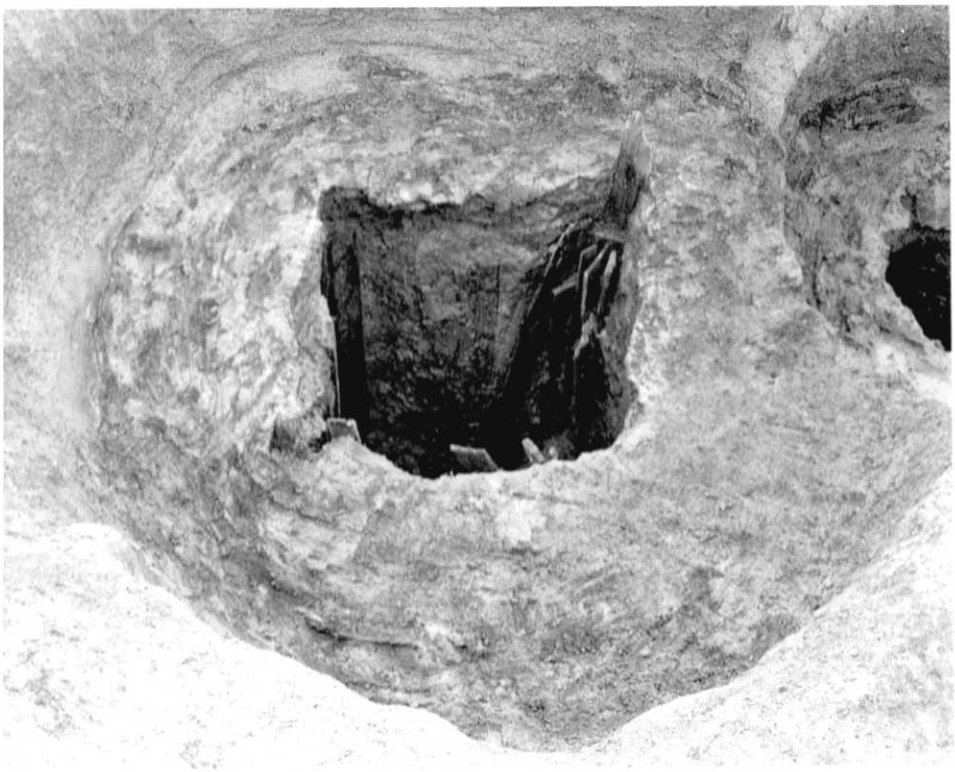


(3) 井戸ＳＥ3375枠（南から）

PL.50



(1) 井戸ＳＥ3380・3385（北から）



(2) 井戸ＳＥ3380枠（東から）



(3) 井戸ＳＥ3390（南東から）



(1) 井戸ＳＥ3395（東から）



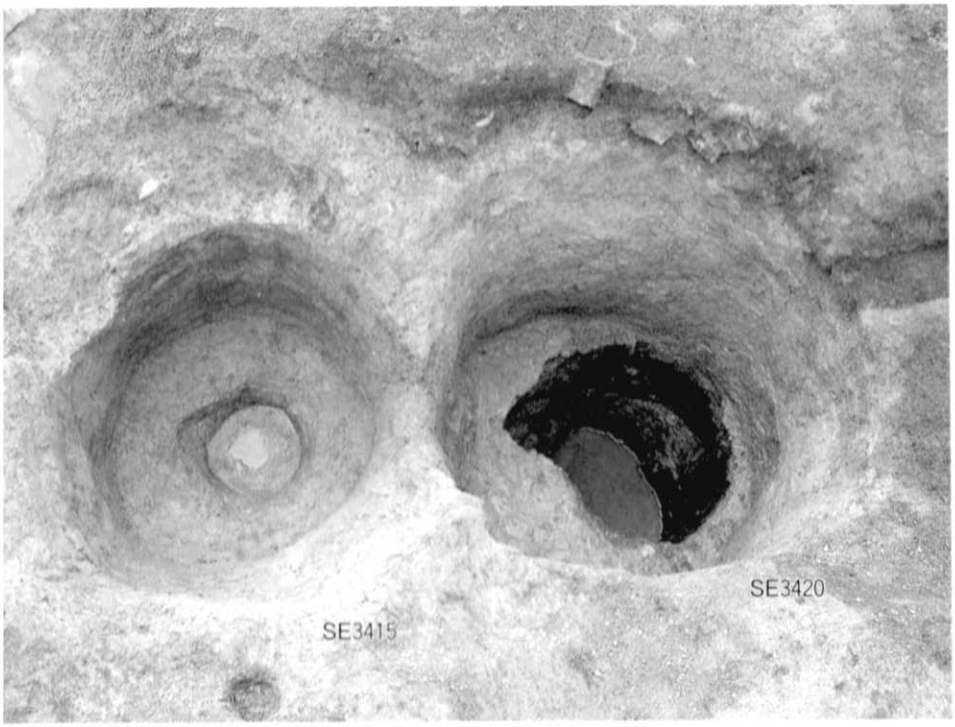
(2) 井戸ＳＥ3395下部（東から）



(3) 井戸ＳＥ3405（東から）



(1) 井戸ＳＥ3410（北西から）



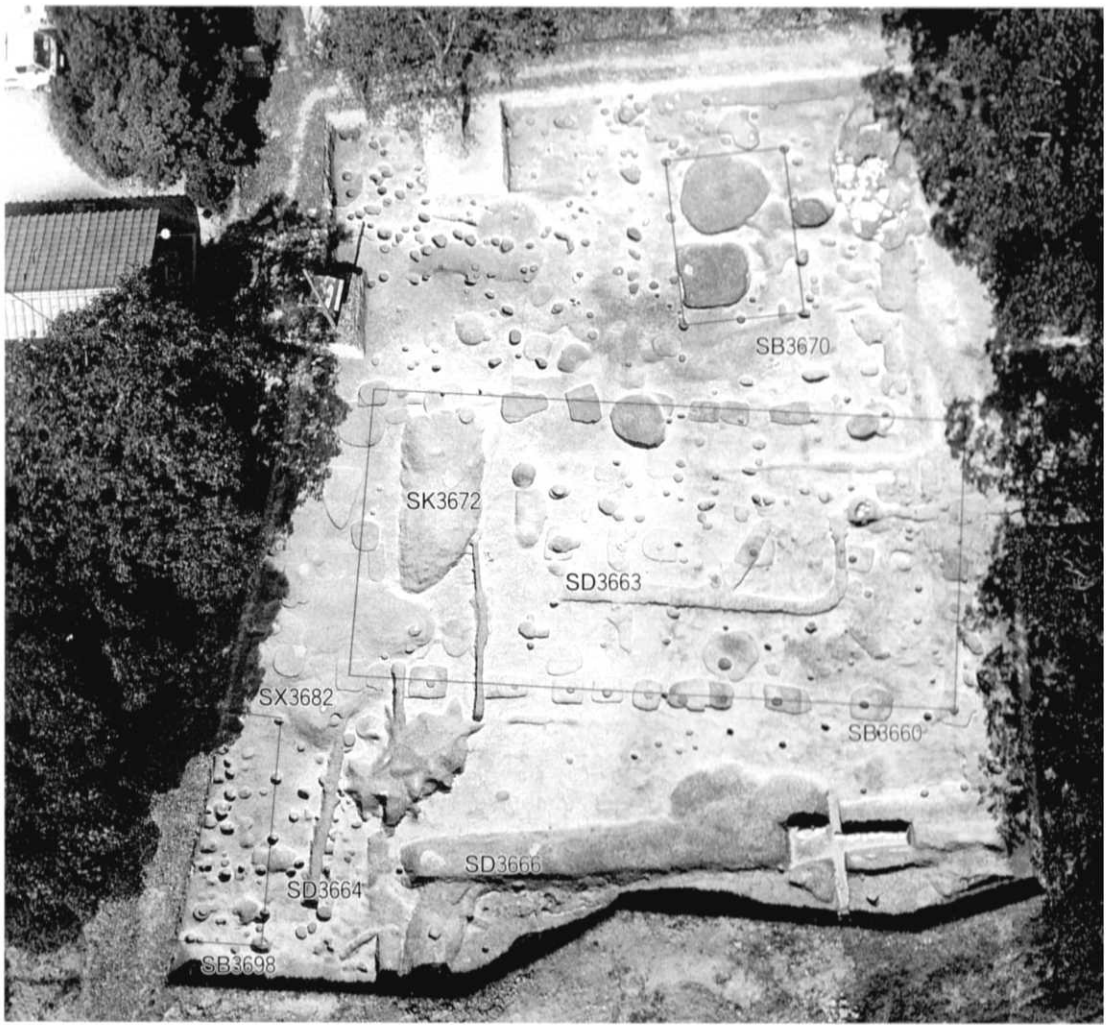
(2) 井戸ＳＥ3415・3420（北から）



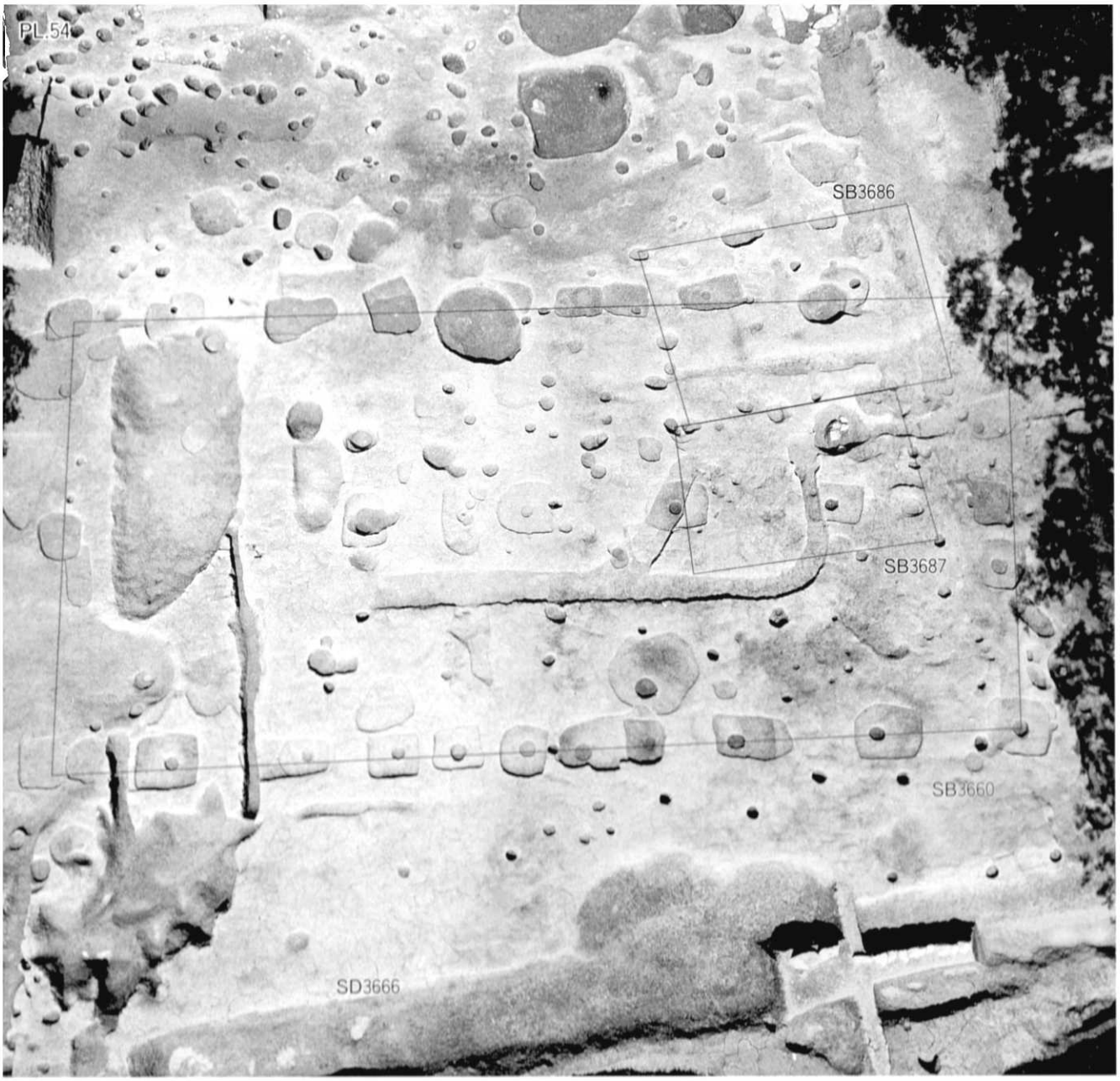
(3) 井戸ＳＥ3425（南西から）



(1) 122次調査区全景（東から）



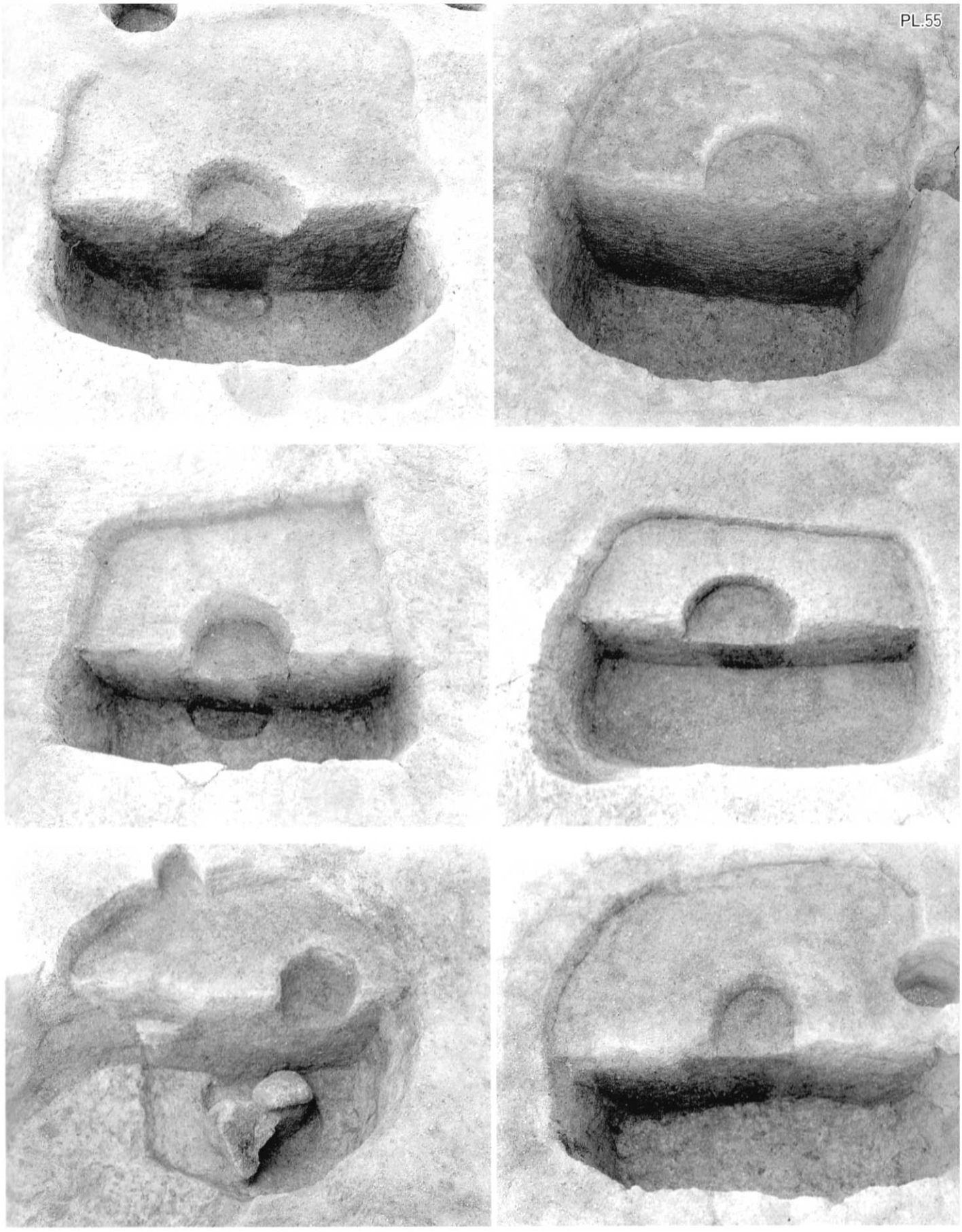
(2) 122次調査区全景（空中写真，東上空から）



(1) 掘立柱建物ＳＢ3660（東真上から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ3660（北から）



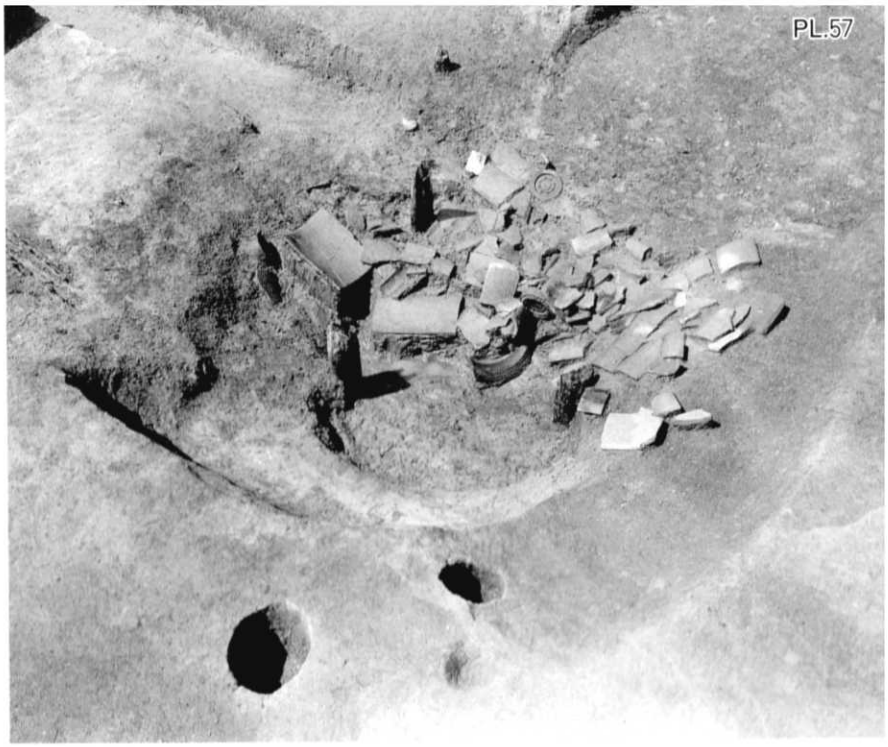
掘立柱建物ＳＢ3660柱掘方断割



(1) 掘立柱建物ＳＢ3670（東から）



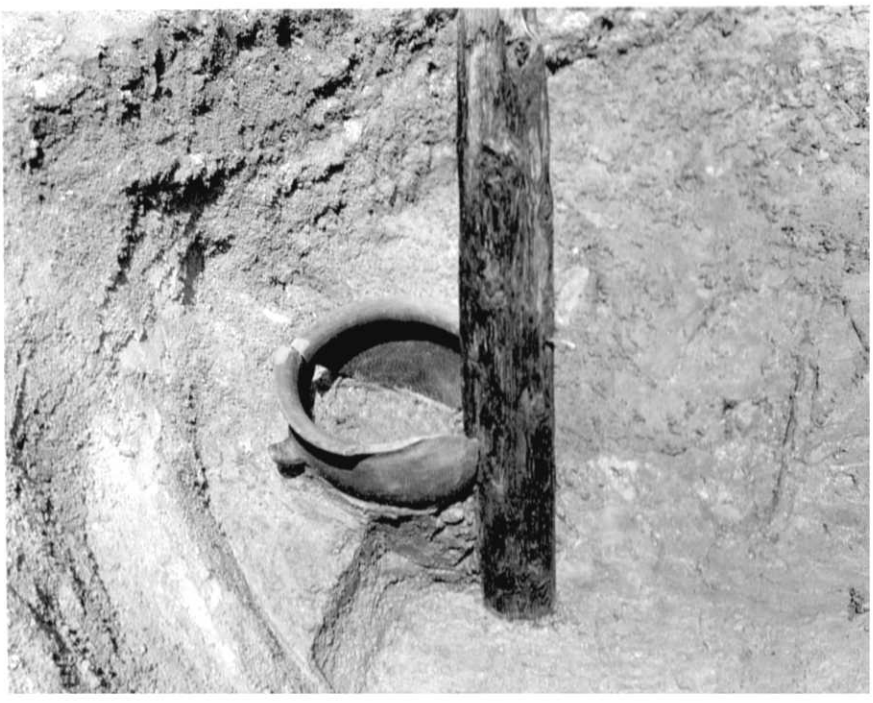
(2) 溝ＳＤ3666，石組ＳＸ3662（北から）



(1) 井戸ＳＥ3680上部（北東から）



(2) 井戸ＳＥ3680瓦出土状況（北東から）



(3) 井戸ＳＥ3680下部土器出土状況（南から）

PL.58



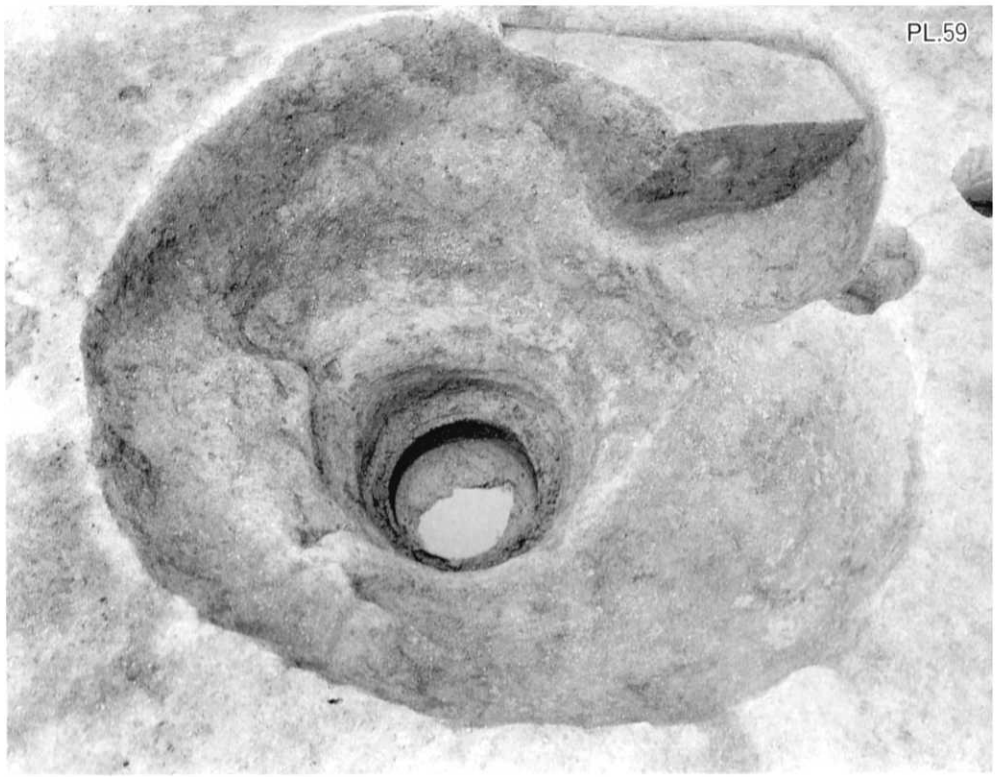
(1) 井戸ＳＥ3680枠（北西から）



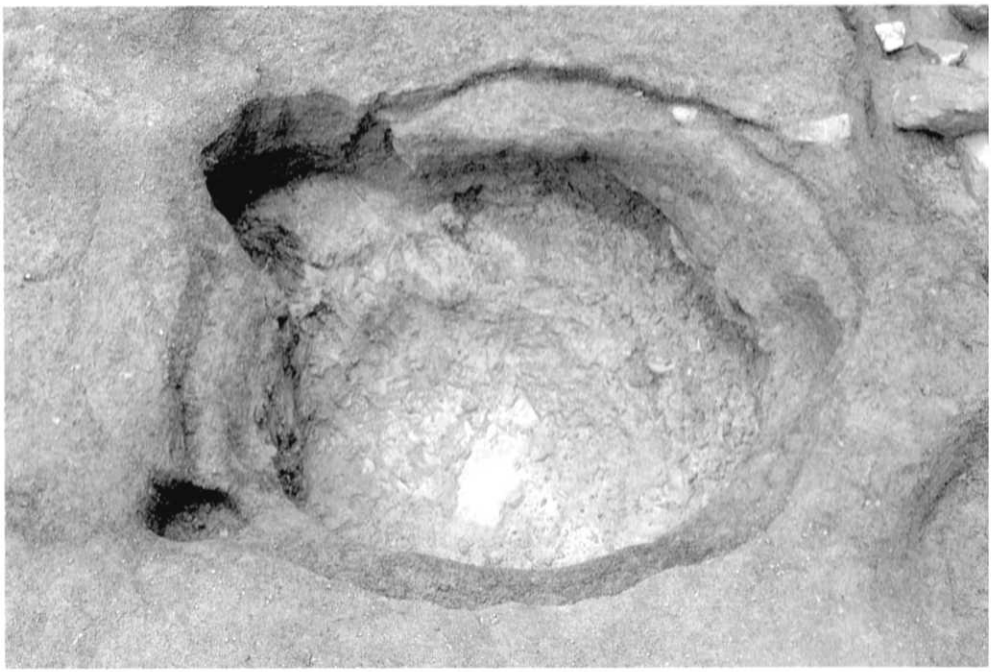
(2) 井戸ＳＥ3690（北東から）



(3) 井戸ＳＥ3690枠（北東から）



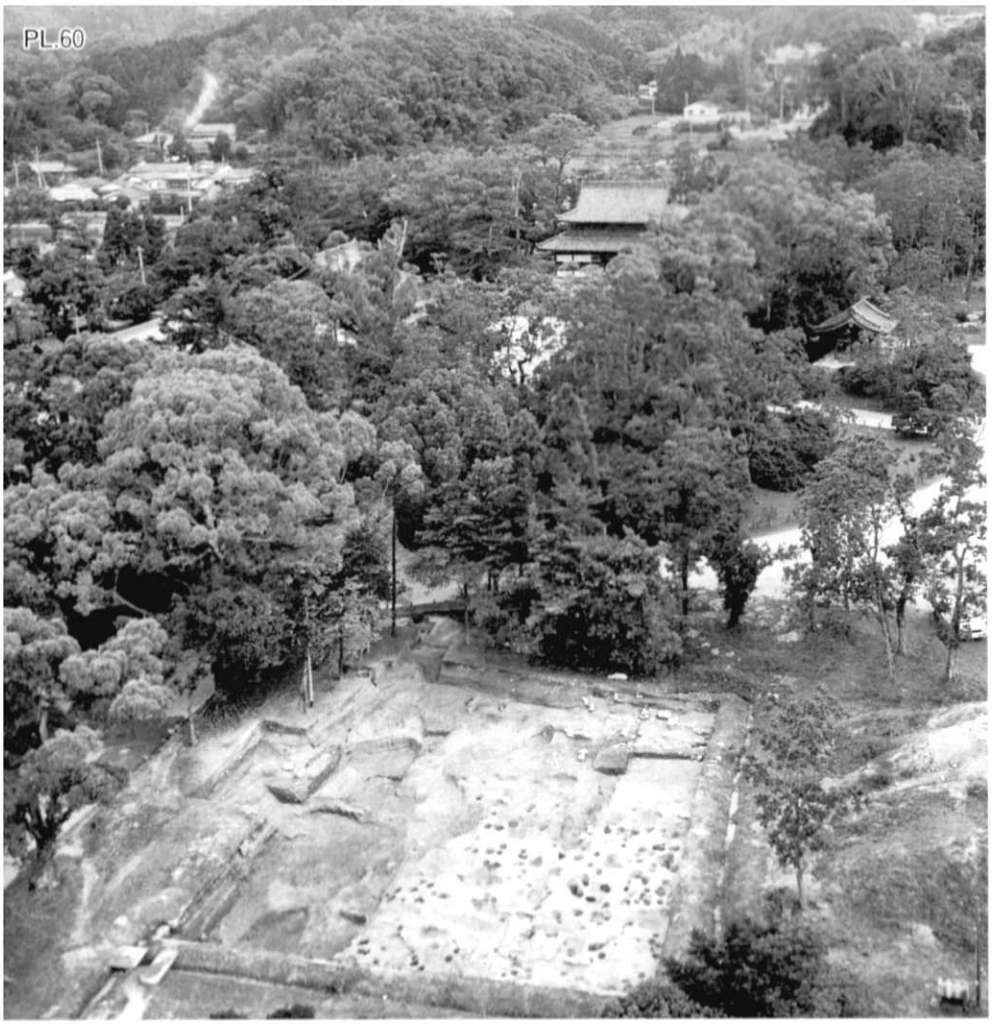
(1) 井戸ＳＥ3685（東から）



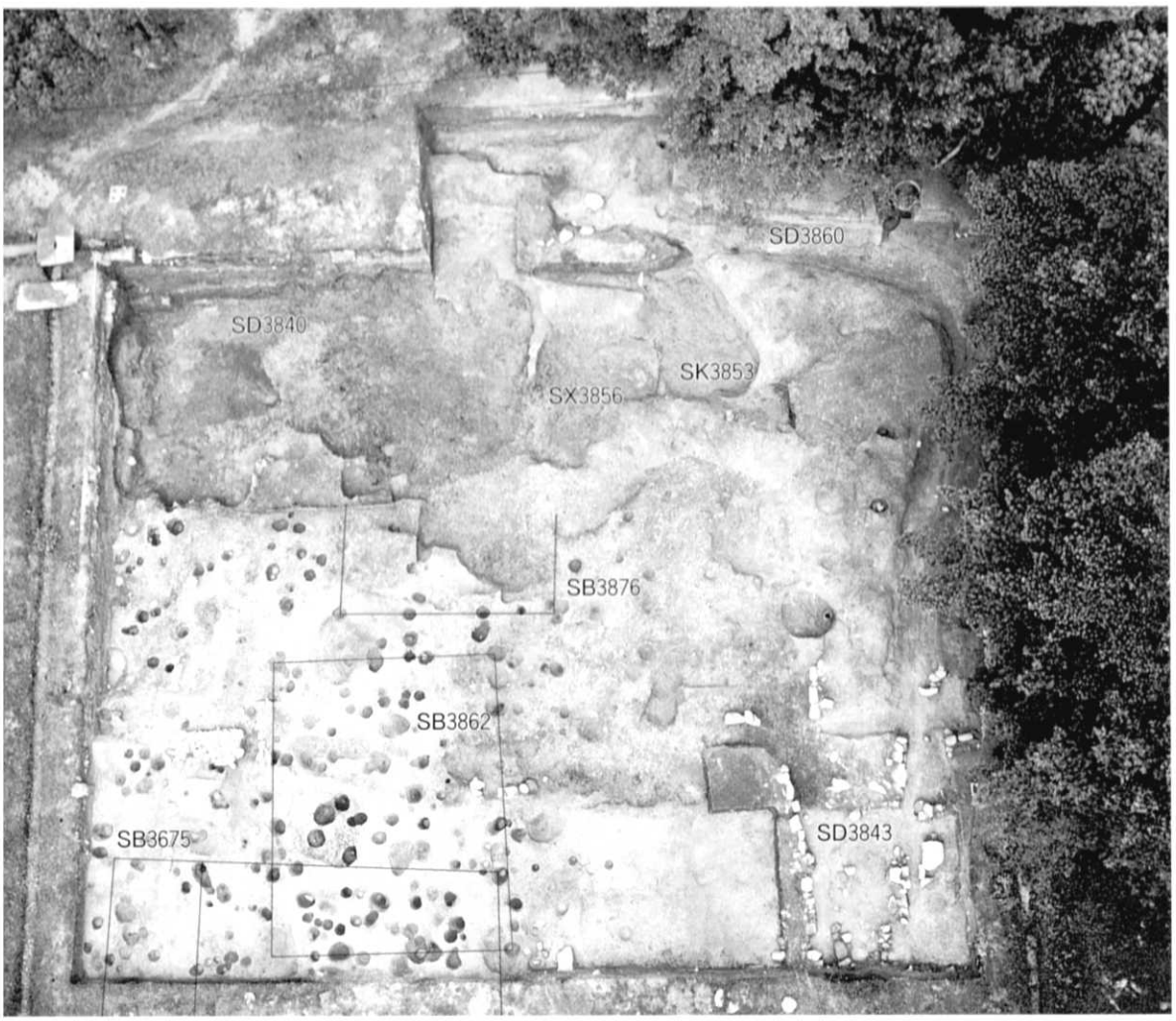
(2) 井戸ＳＥ3695（東から）



(3) 土坑ＳＫ3677（北から）



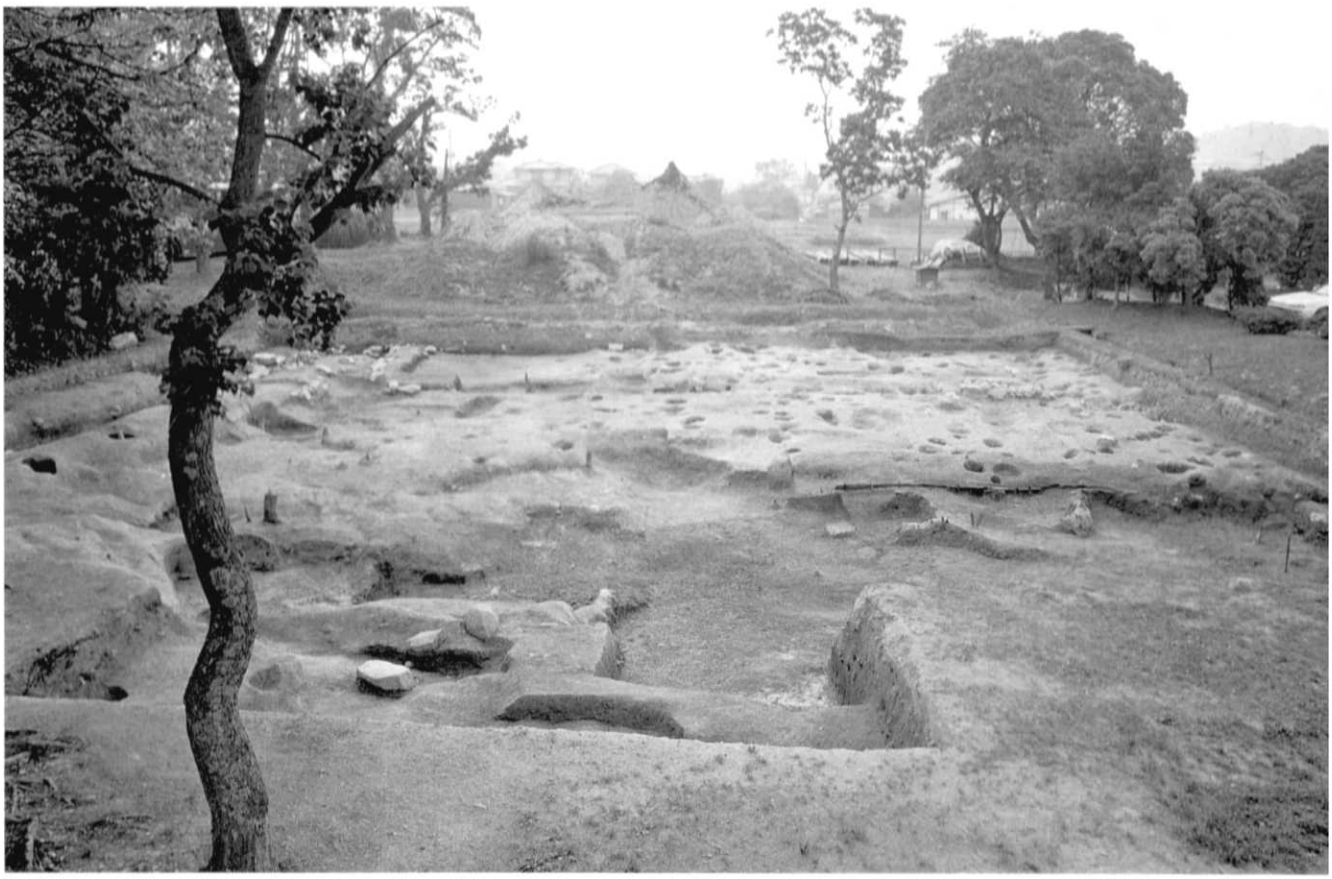
(1) 130次調査区全景（空中写真，南東上空から）



(2) 130次調査区全景（空中写真，東上空から）



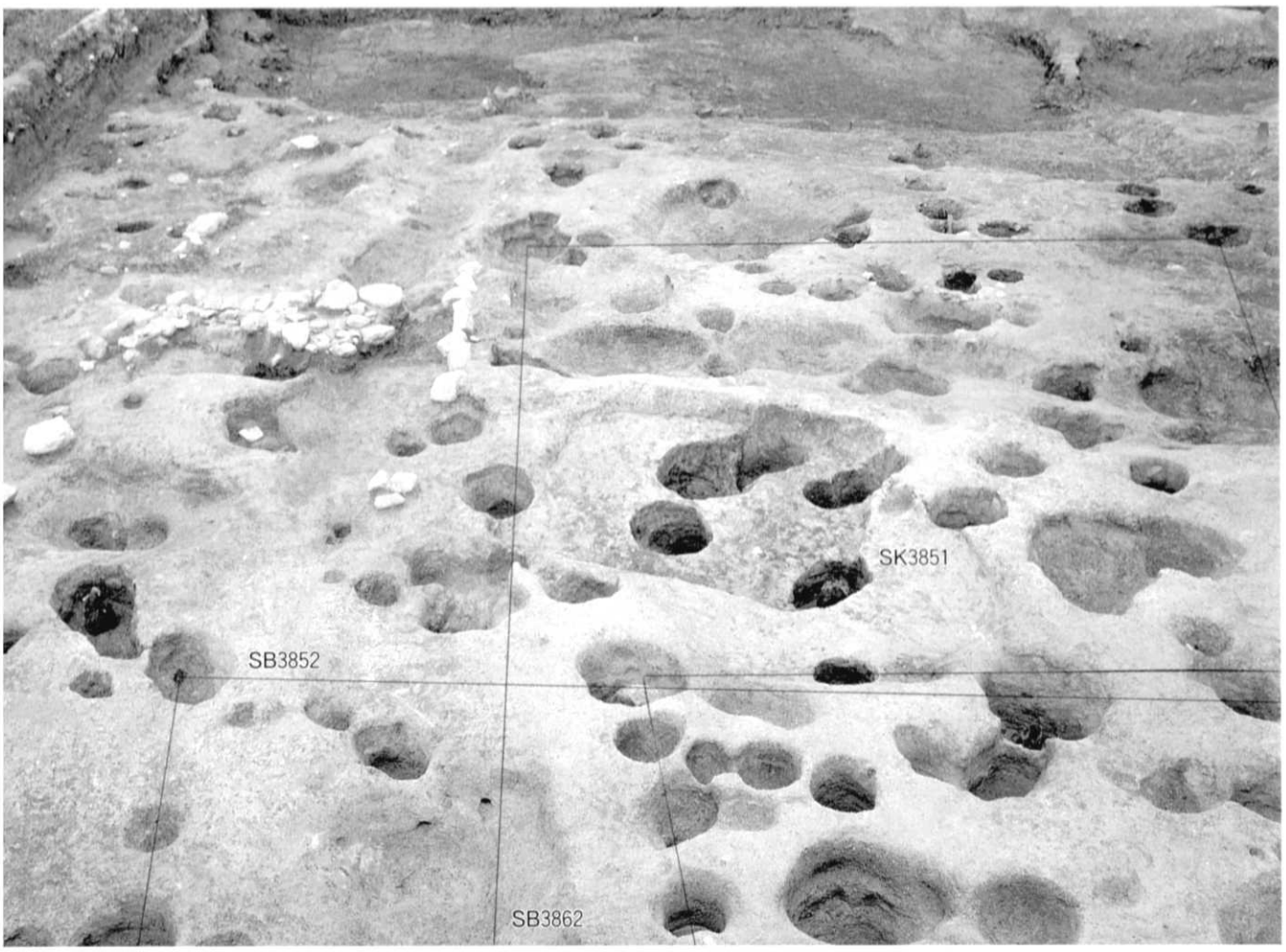
(1) 130次調査区（東から）



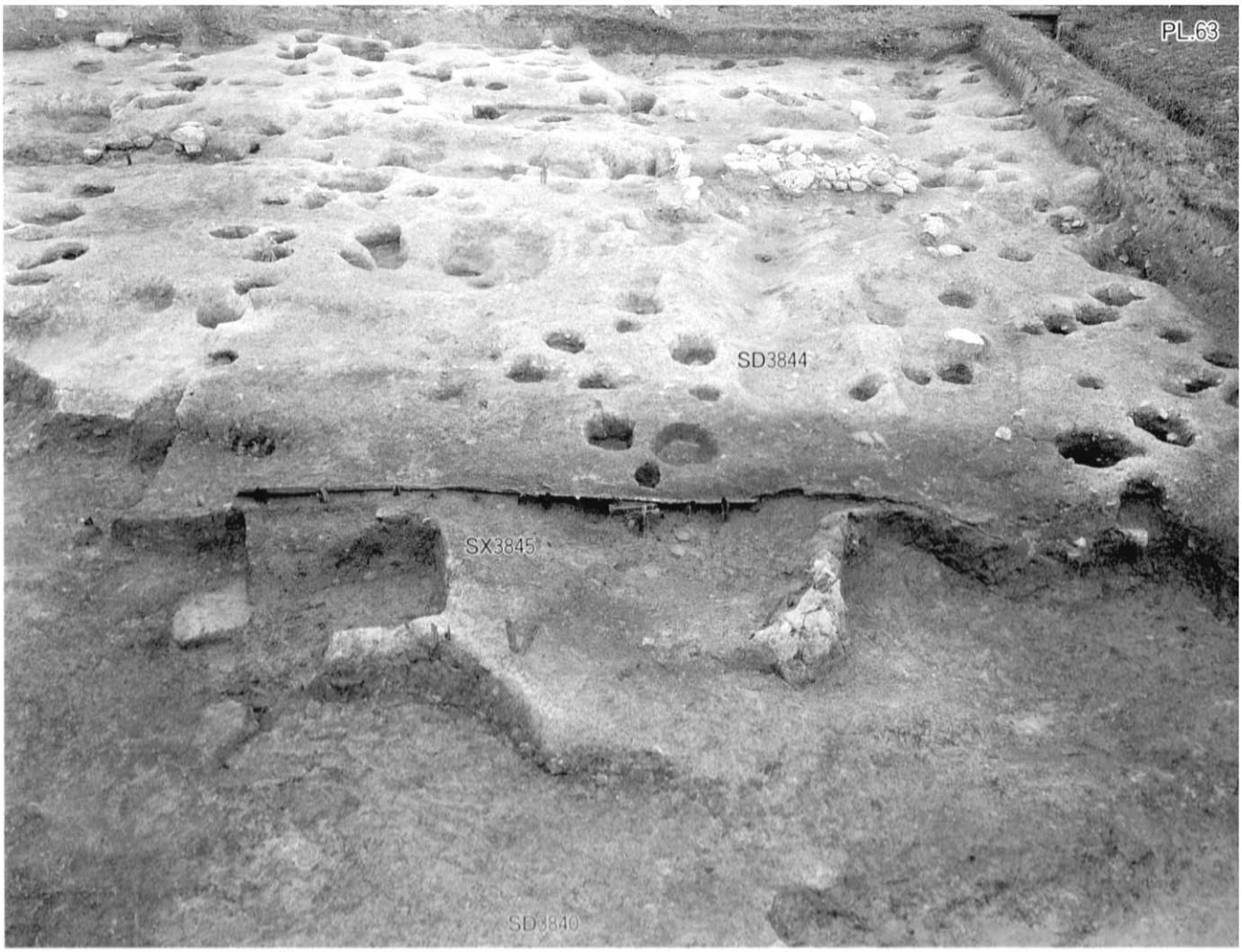
(2) 130次調査区（西から）



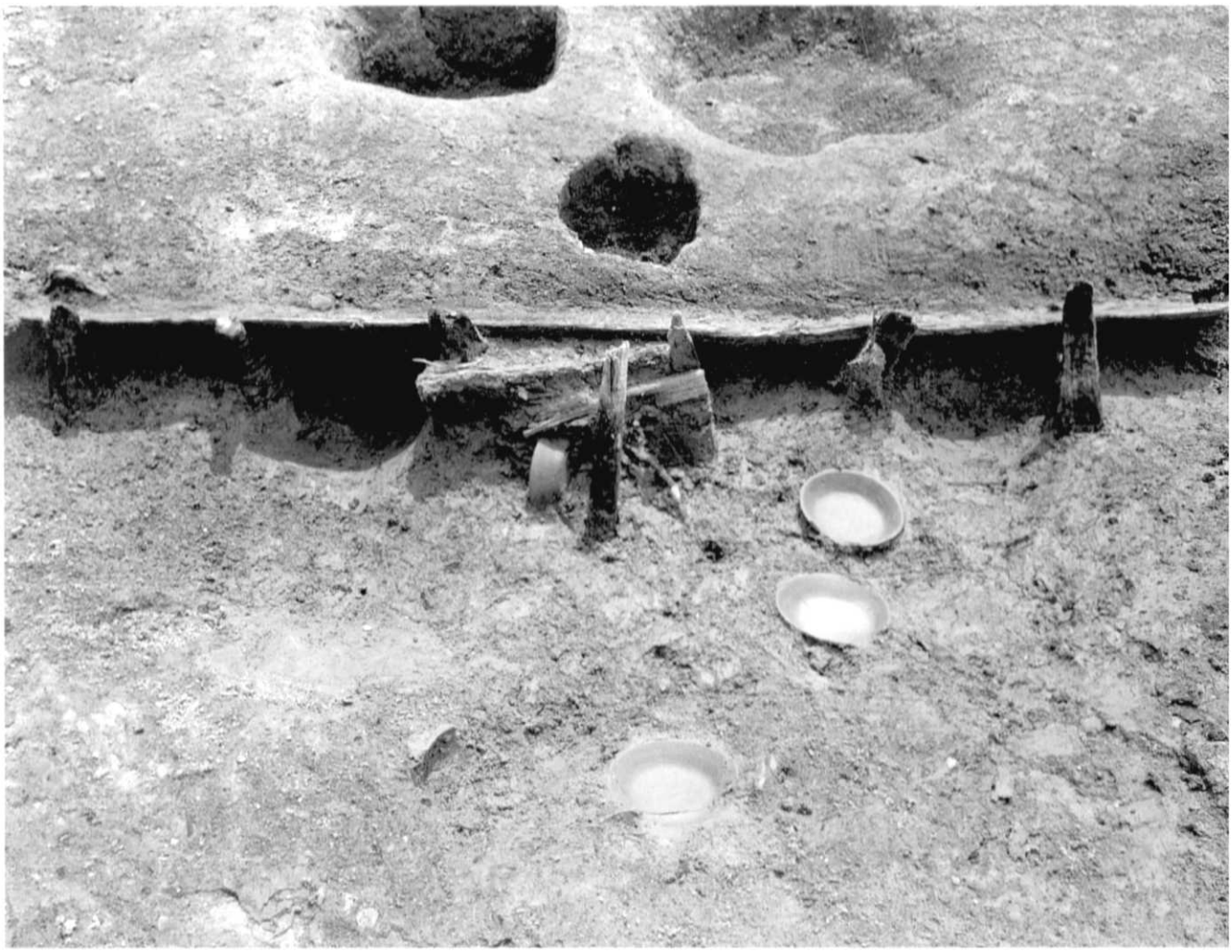
(1) 掘立柱建物ＳＢ3862，溝ＳＤ3842（南から）



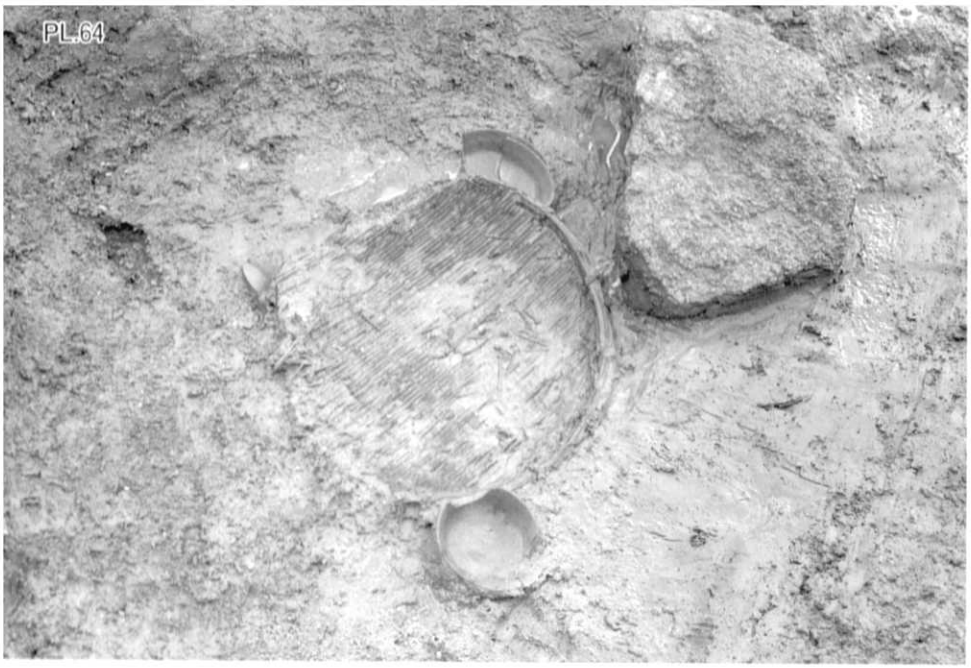
(2) 掘立柱建物ＳＢ3852・3862（東から）



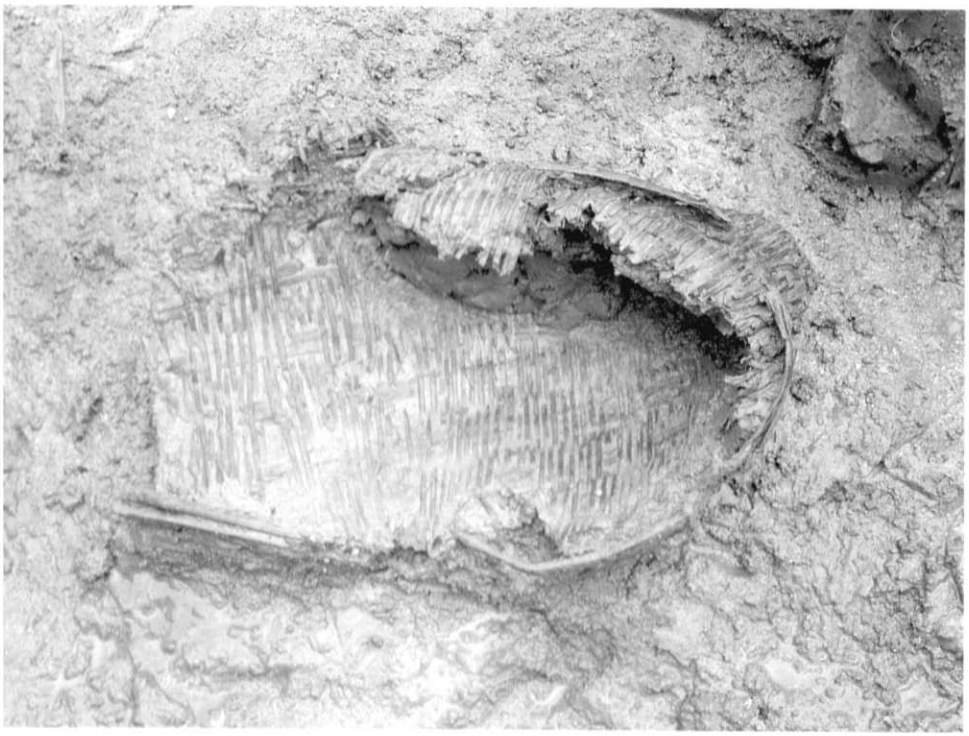
(1) 護岸ＳＸ3845（西から）



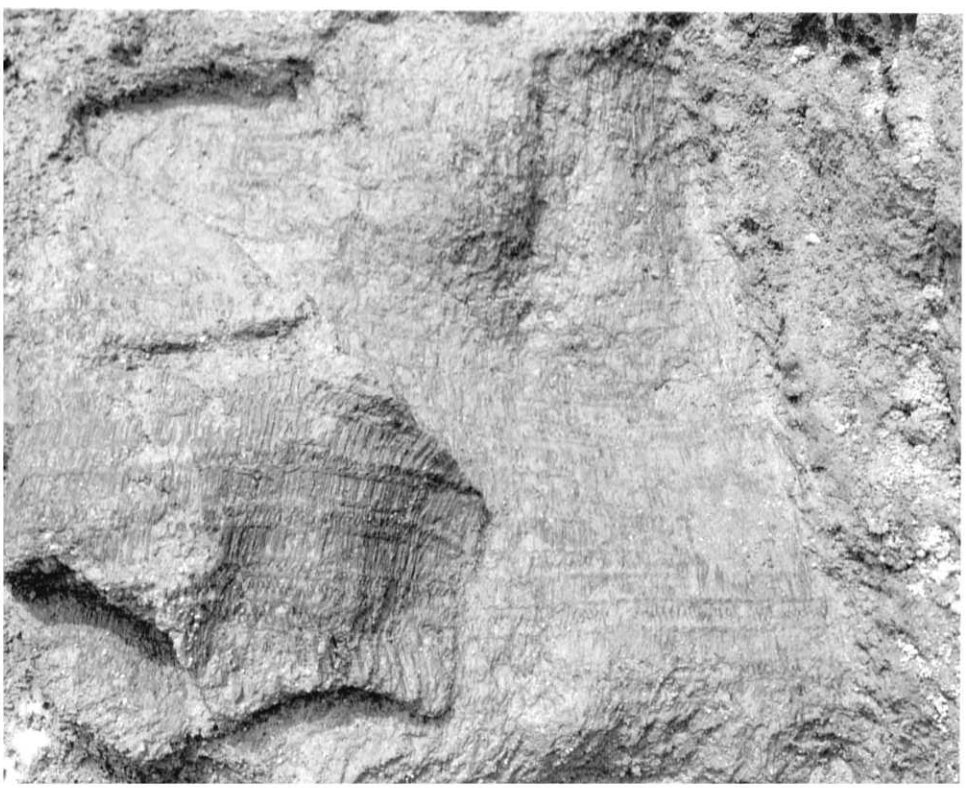
(2) 護岸ＳＸ3845細部（西から）



(1) 溝ＳＤ3840笊出土状況



(2) 溝ＳＤ3840箕出土状況



(3) 溝ＳＤ3840蓆出土状況



(1) 溝ＳＤ3841（南から）



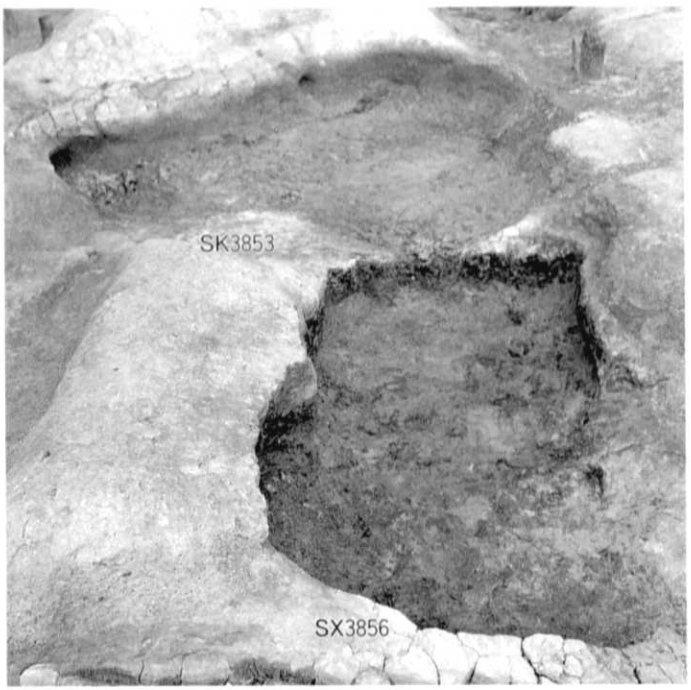
(2) 溝ＳＤ3843・3860・3865（東から）



(1) 溝ＳＤ3855・3860（南から）



(2) 溝ＳＤ3854，ＳＤ3840下層遺構（南から）



(3) 採土穴ＳＸ3856，土坑ＳＫ3853（南から）



(1) 埋甕ＳＸ3864（南から）



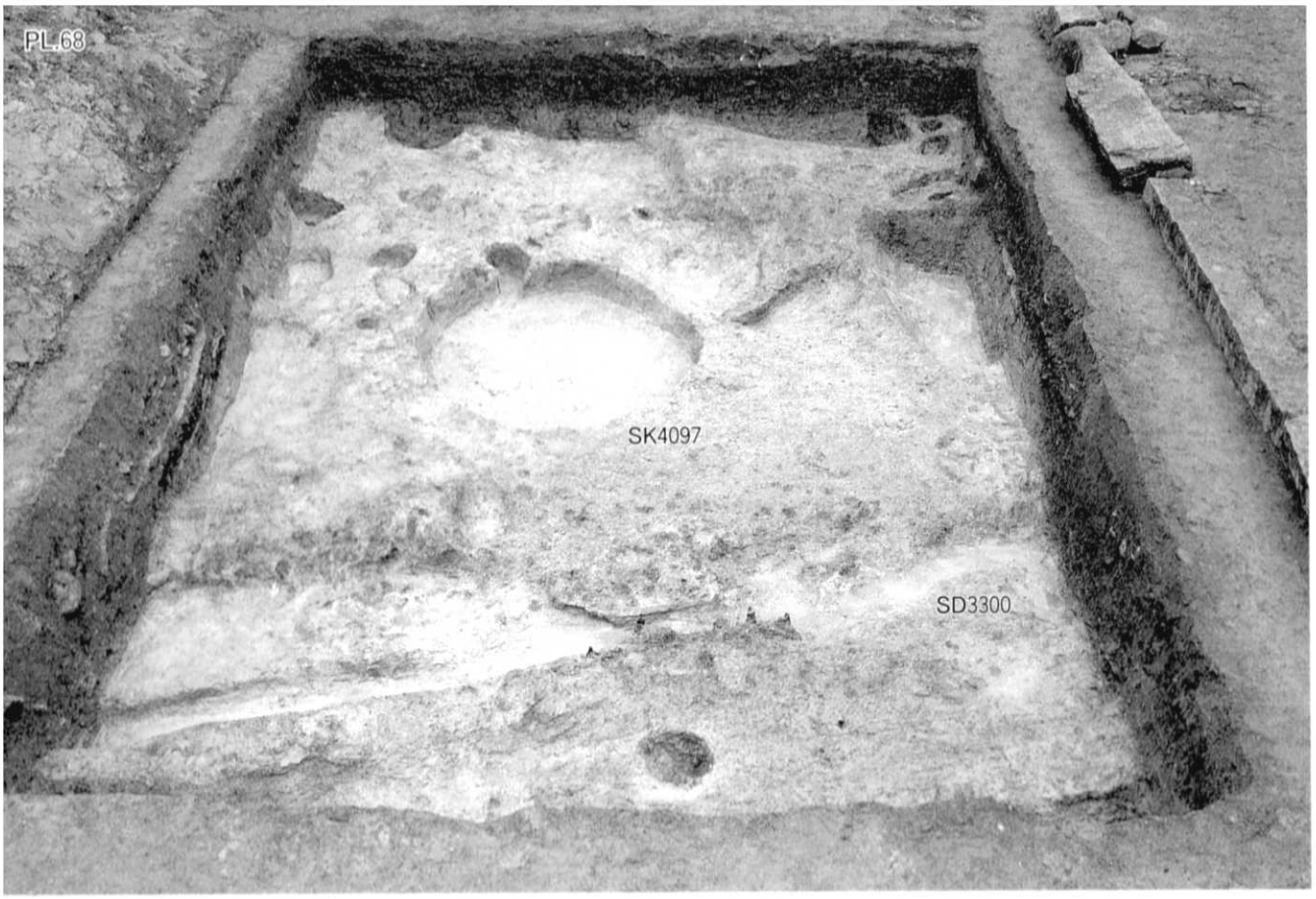
(2) 埋甕ＳＸ3867（南から）



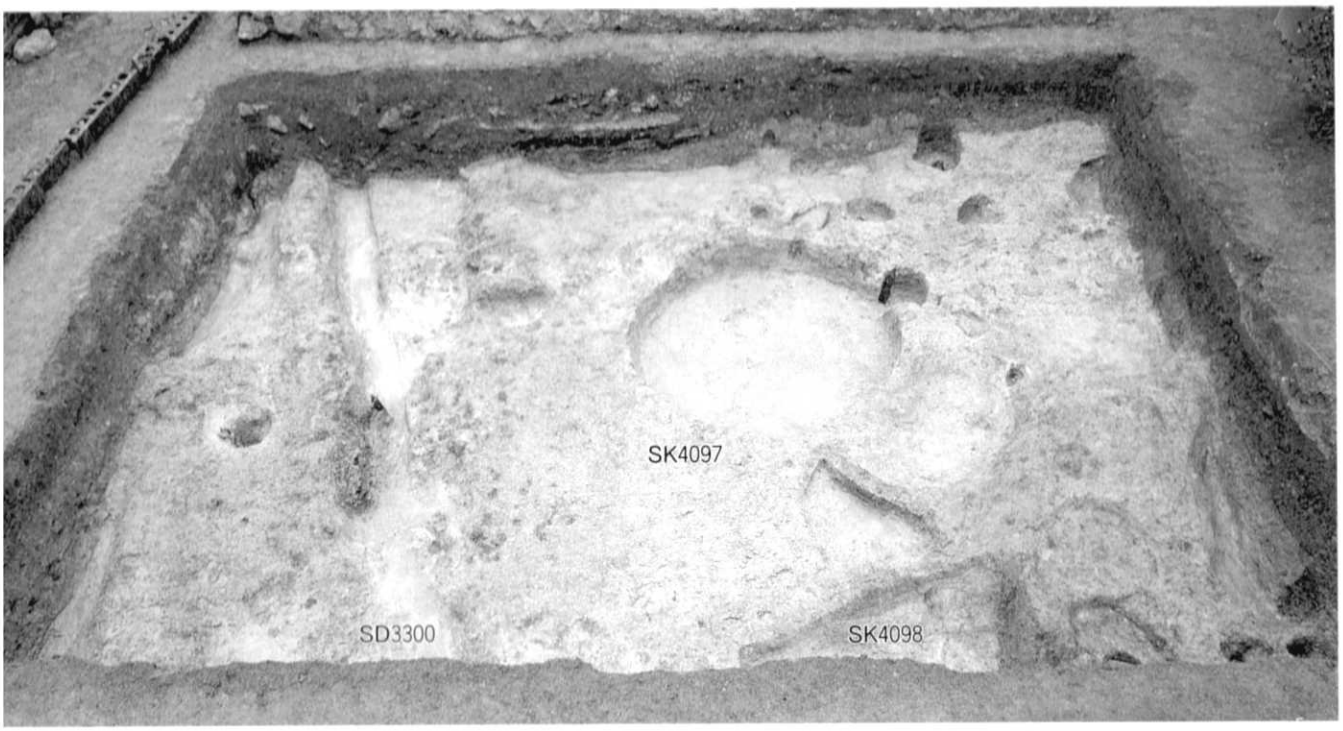
(3) 埋甕ＳＸ3868（南から）



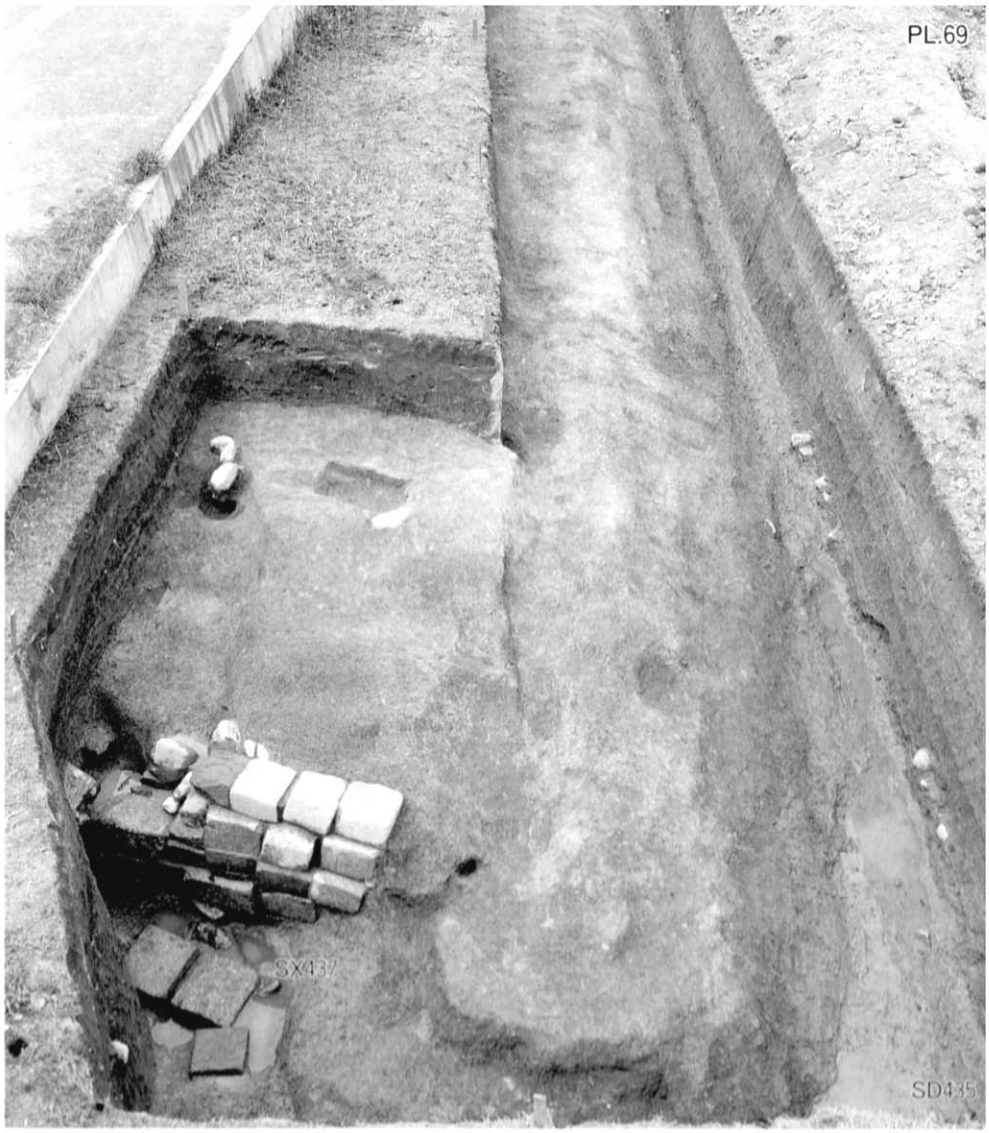
(4) 埋甕ＳＸ3872（南から）



(1) 154次調査区（南から）



(2) 154次調査区（東から）



(1) 20次調査区（南から）



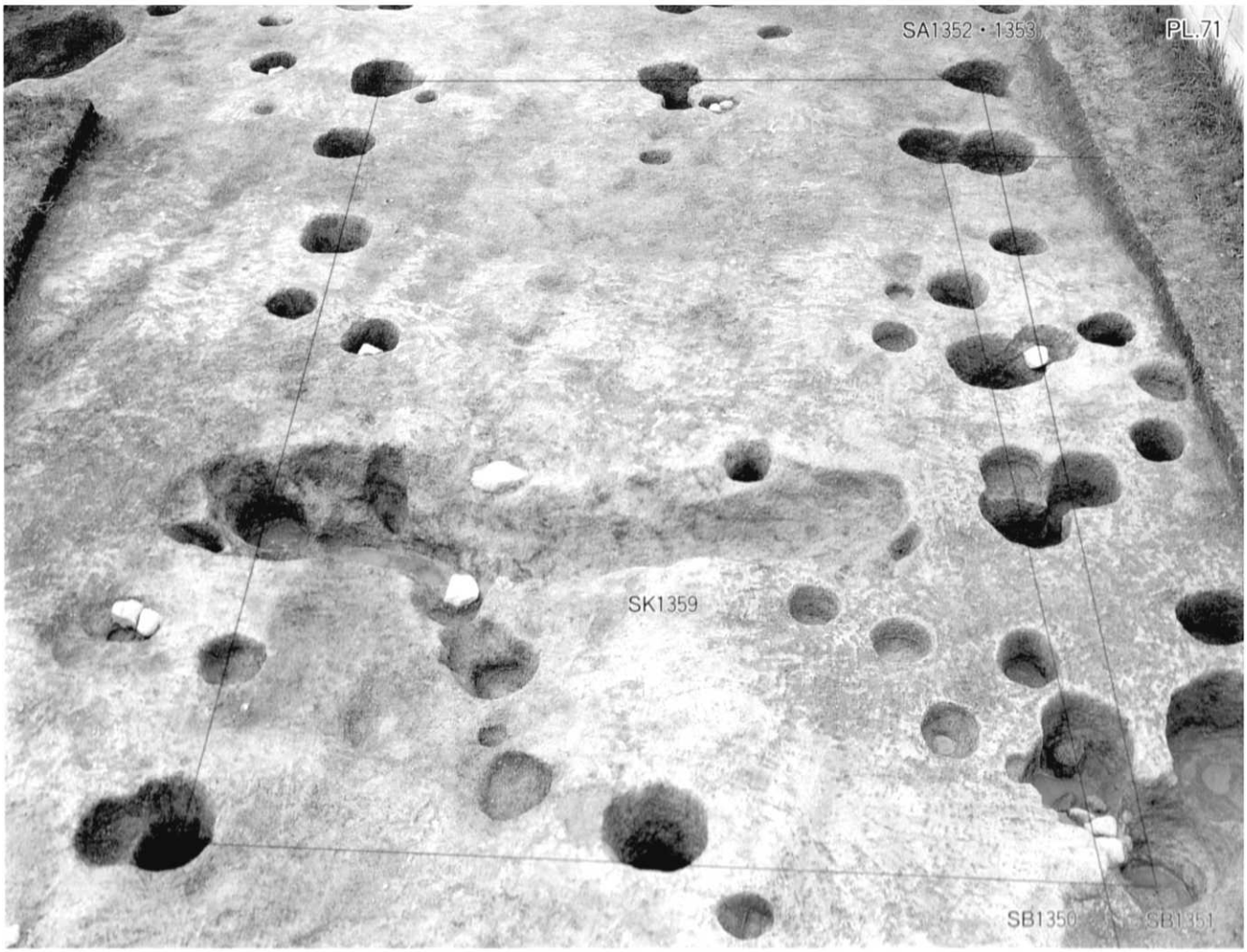
(2) 石垣ＳＸ437（南から）



(1) 47次調査区（南から）



(2) 47次調査区（北から）



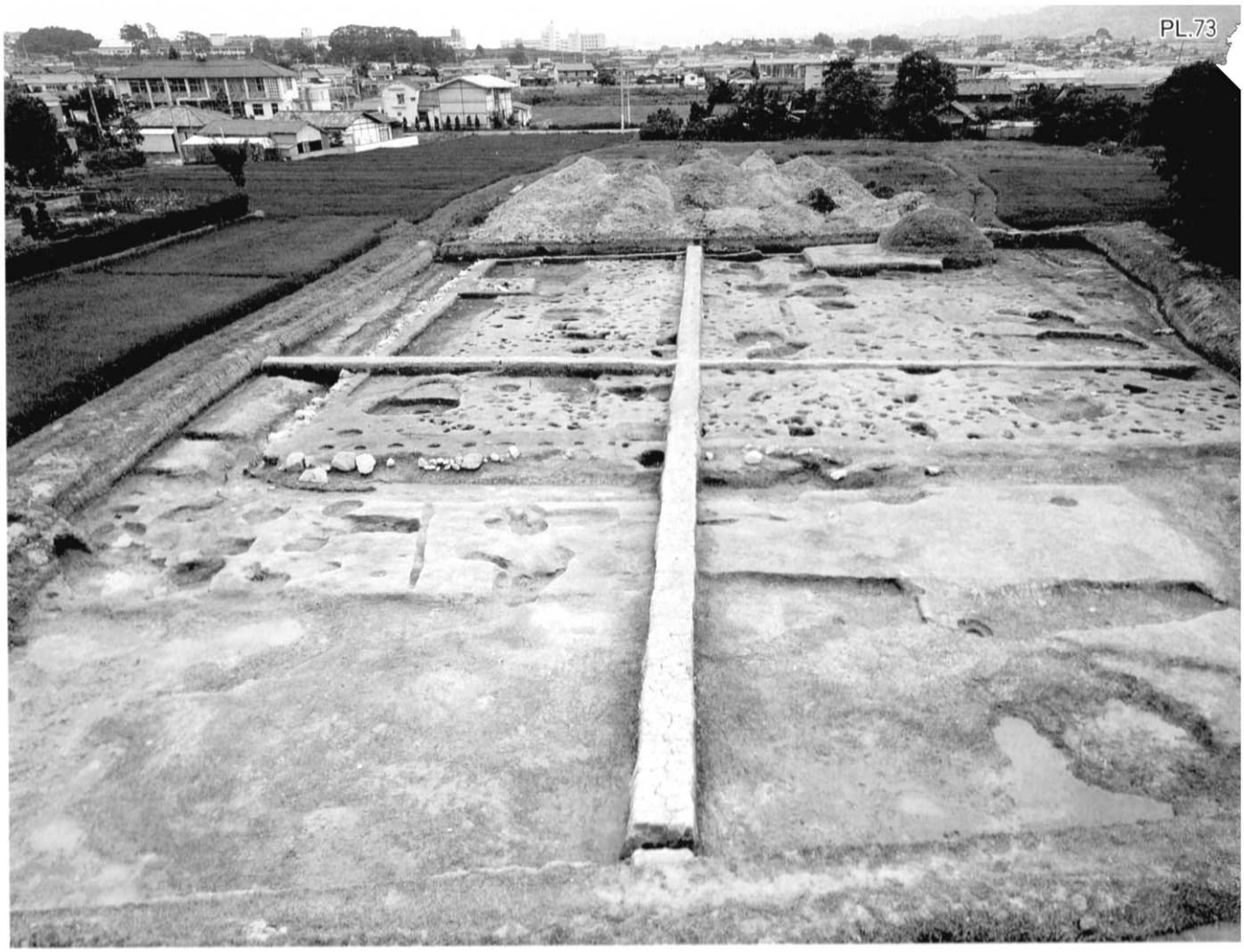
(1) 掘立柱建物ＳＢ1350，土坑ＳＫ1359（南から）



(2) 井戸ＳＥ1365（東から）



45次調査区全景（南から）



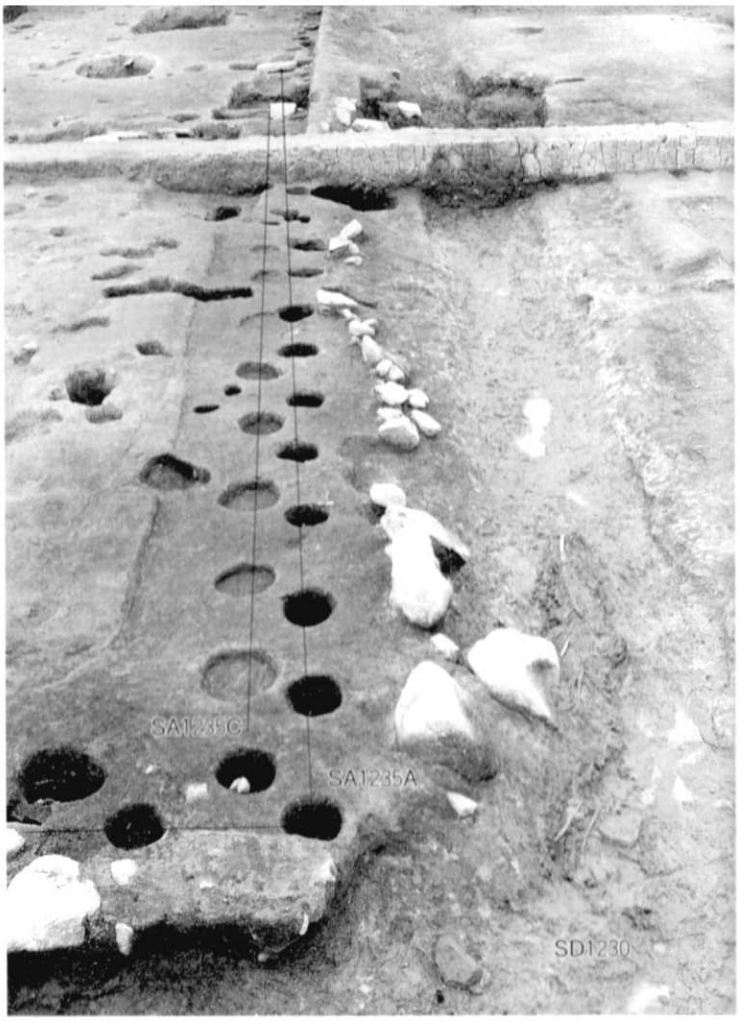
(1) 45次調査区（北から）



(2) 45次調査区（北東から）



(1) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（西から）



(2) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（東から）



(3) 溝ＳＤ1230（北から）



(4) 柵ＳＡ1235，溝ＳＤ1230（北から）



(1) 溝ＳＤ1230（南から）



(2) 溝ＳＤ1230護岸石列（南東から）



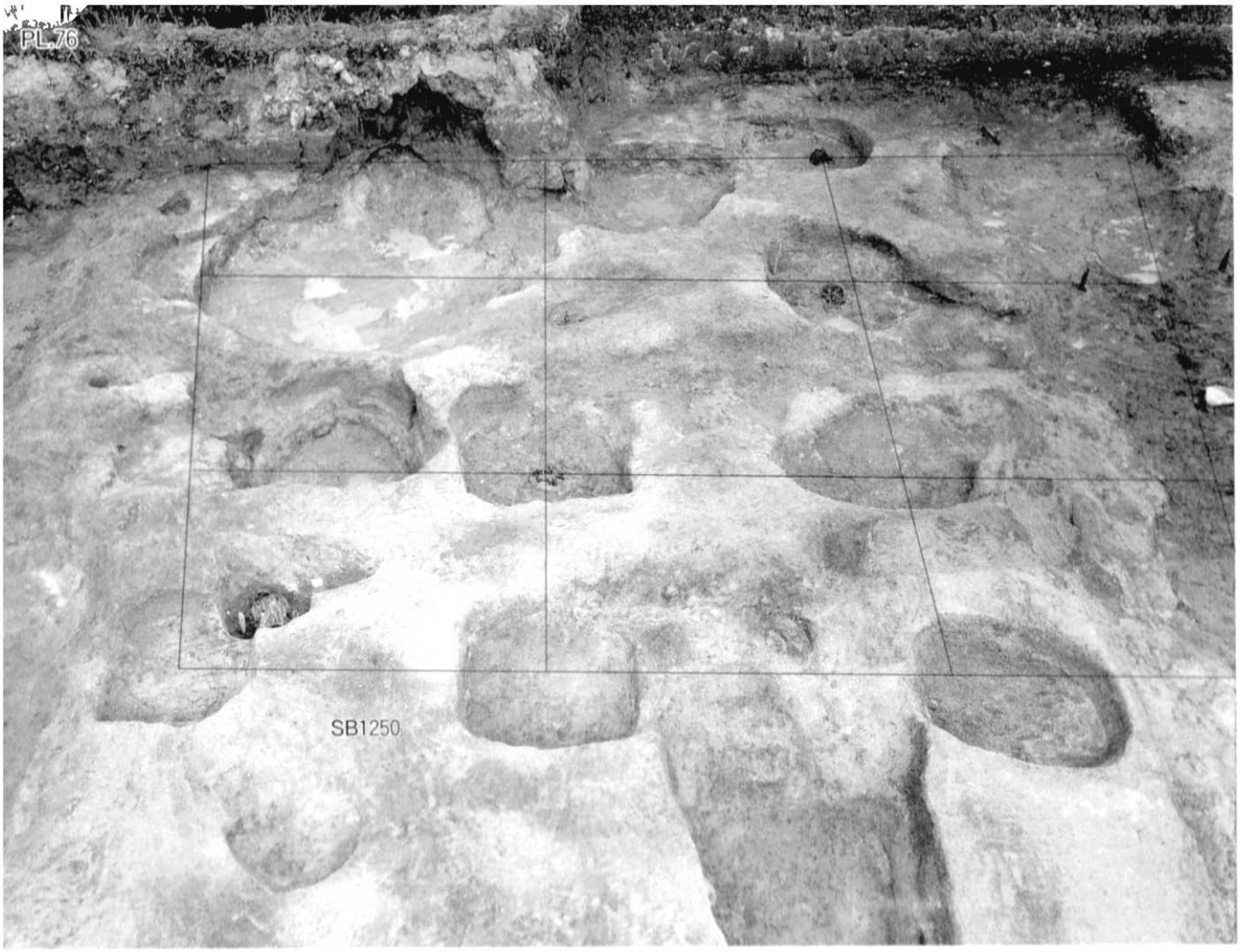
(3) 溝ＳＤ1300（南から）



(4) 溝ＳＤ1230（北から）



(5) 唐三彩出土状況



(1) 掘立柱建物ＳＢ1250（西から）



(2) 門遺構ＳＢ1240Ａ・Ｂ（北から）



(1) 井戸ＳＥ1180（北から）



(2) 井戸ＳＥ1181（西から）

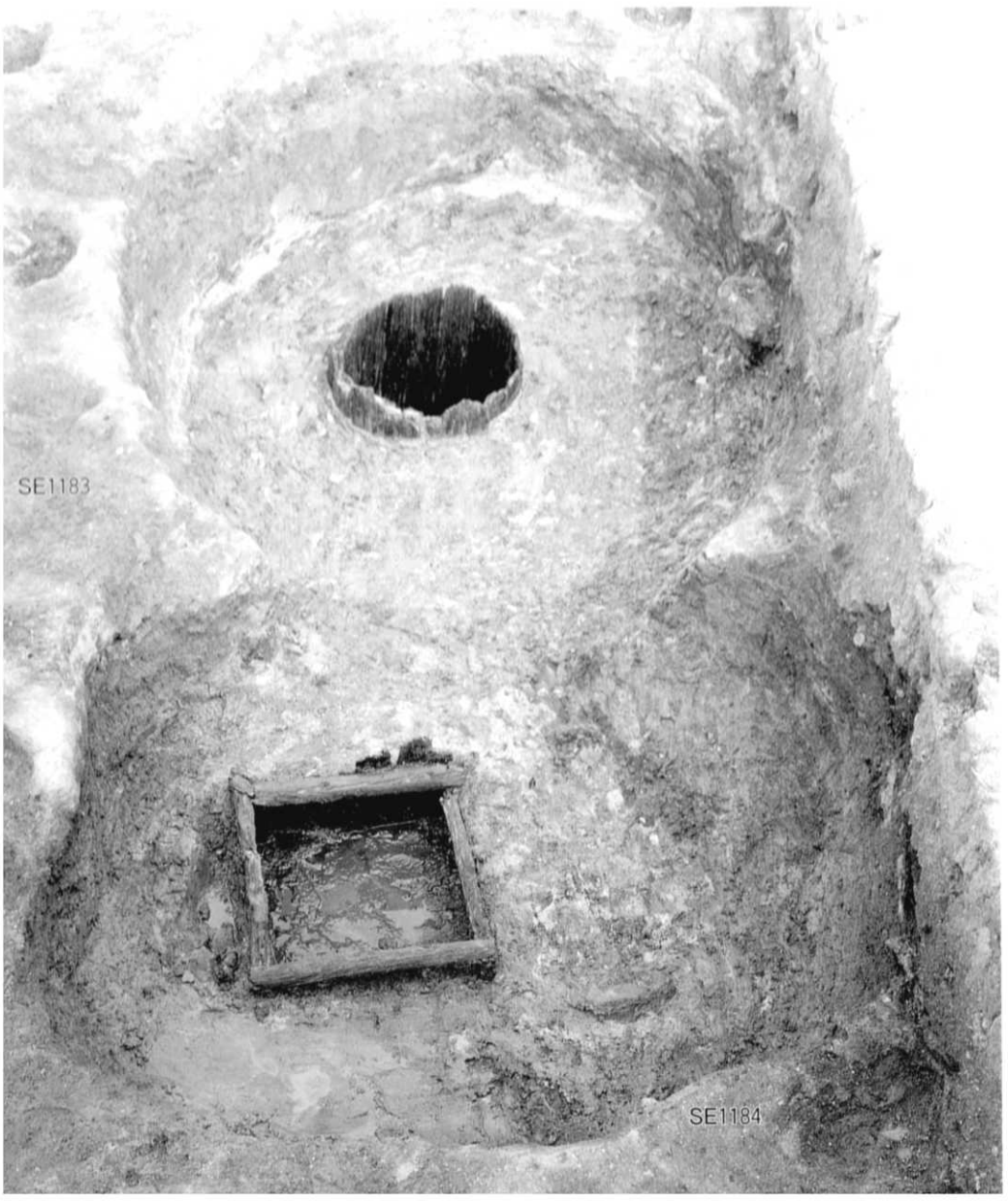


(3) 井戸ＳＥ1181枠（西から）

PL.78



(1) 井戸ＳＥ1182（北から）



(2) 井戸ＳＥ1183・1184（西から）



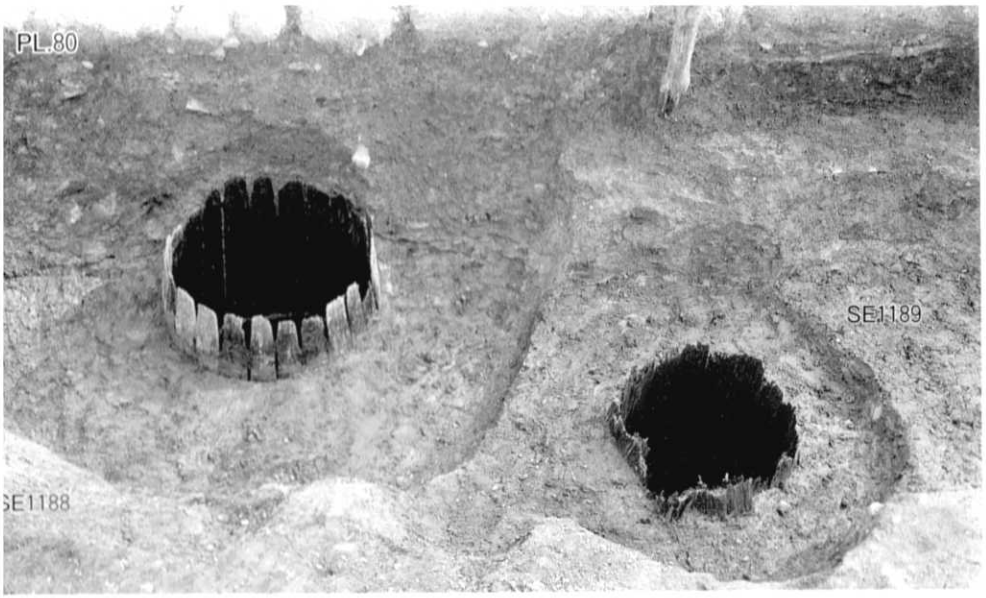
(1) 井戸ＳＥ1183枠（西から）



(2) 井戸ＳＥ1184枠（西から）



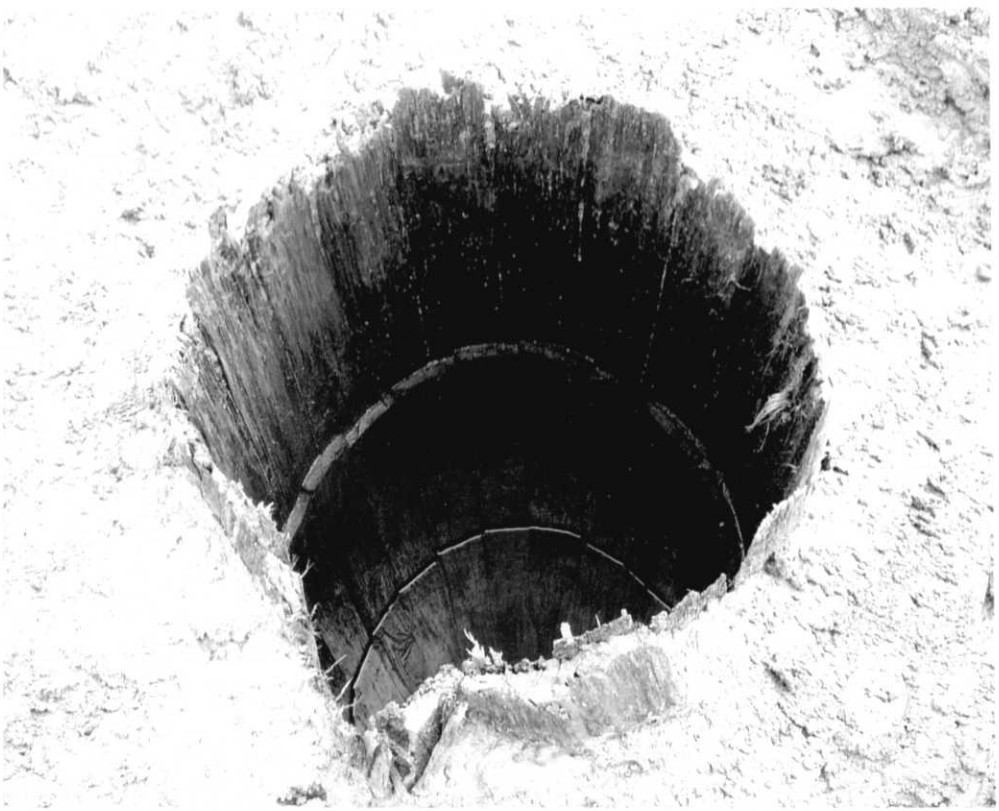
(3) 井戸ＳＥ1184下部（西から）



(1) 井戸ＳＥ1188・1189（北から）



(2) 井戸ＳＥ1188枠（南から）



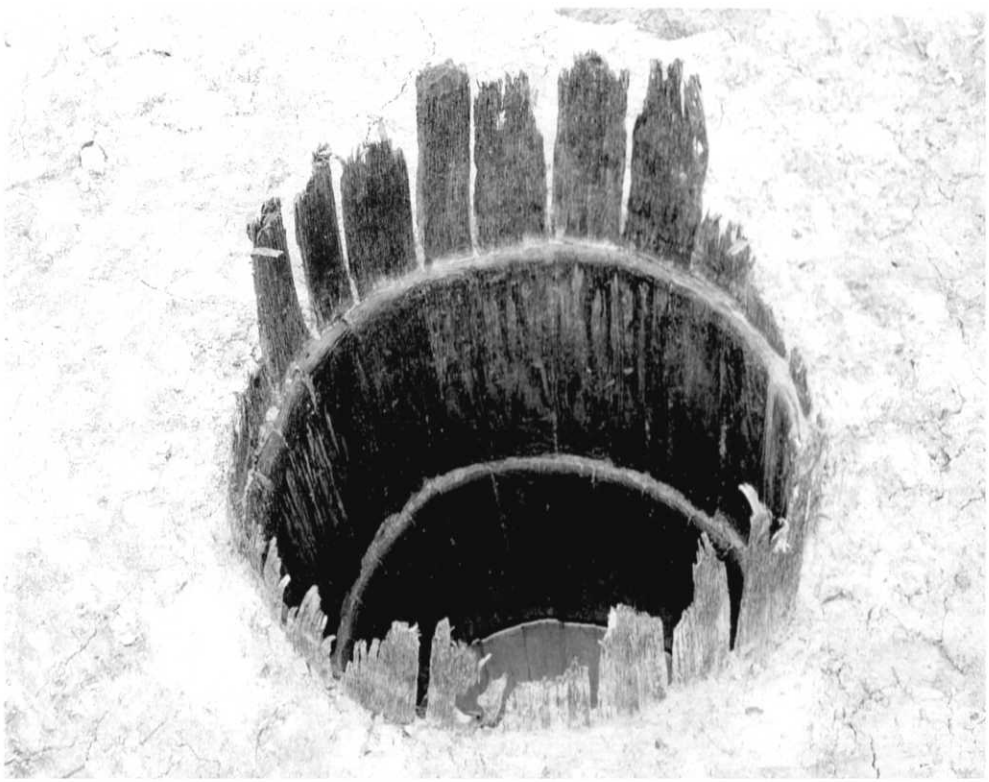
(3) 井戸ＳＥ1189枠（北から）



(1) 井戸ＳＥ1186（南から）



(2) 井戸ＳＥ1190，土坑ＳＫ1204（西から）



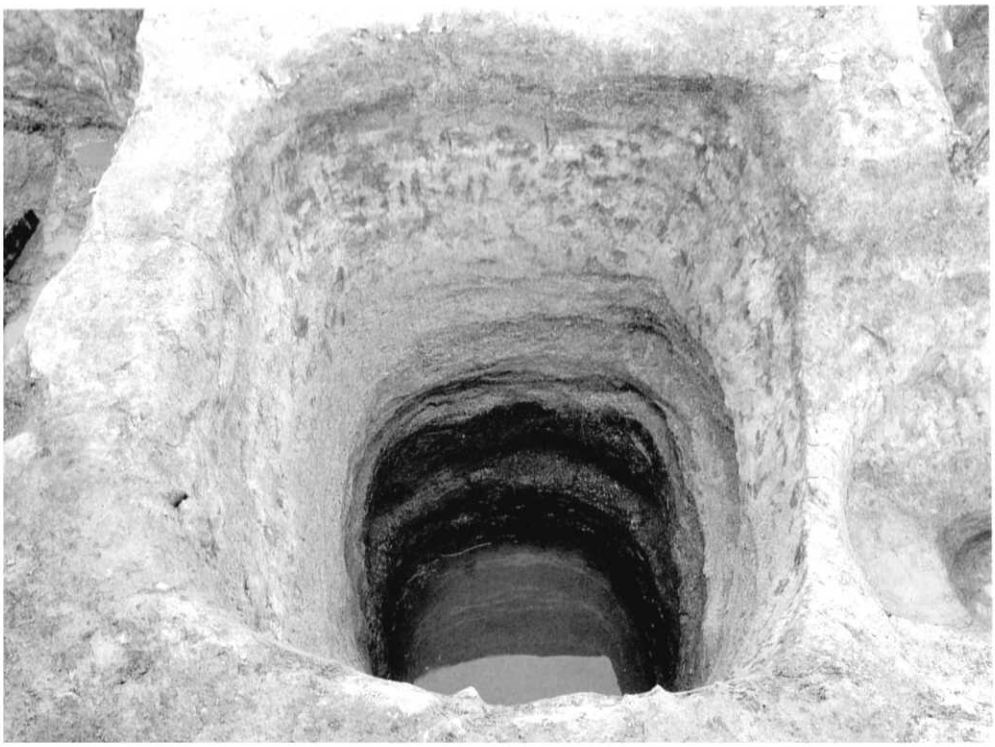
(3) 井戸ＳＥ1190（西から）



(1) 井戸ＳＥ1191（北から）



(2) 井戸ＳＥ1192・1193、
土坑ＳＫ1243（西から）



(3) 井戸ＳＥ1193（西から）



(1) 井戸ＳＥ1194・1195（北東から）



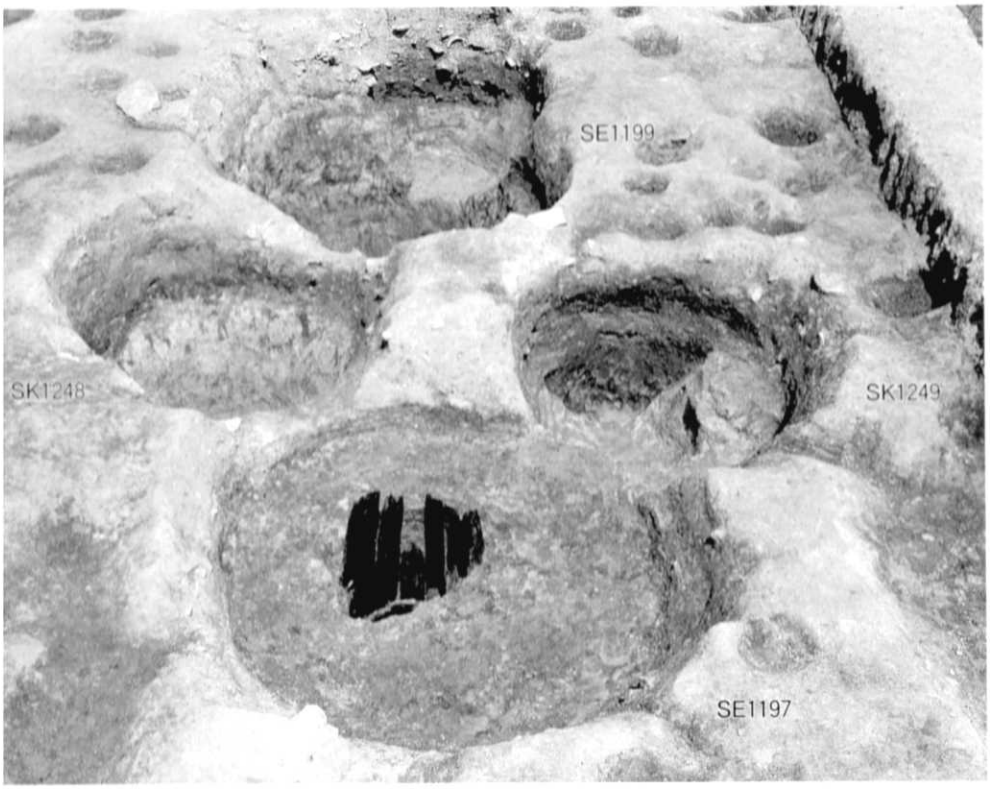
(2) 井戸ＳＥ1194枠（南から）



(3) 井戸ＳＥ1195（北から）



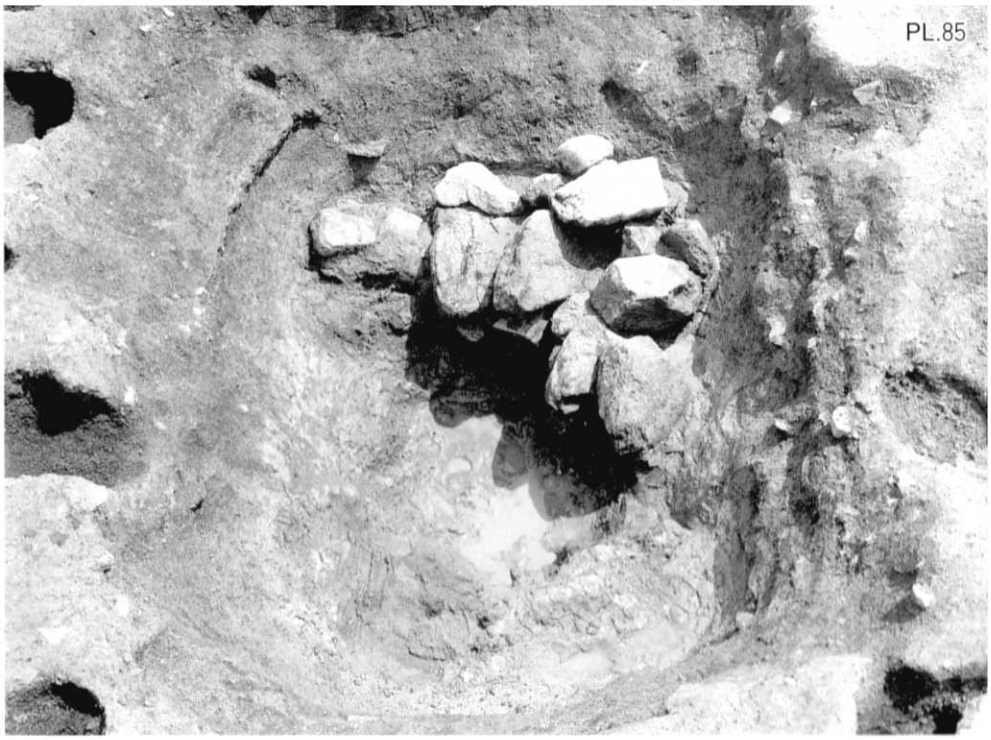
(1) 井戸ＳＥ1196（西から）



(2) 井戸ＳＥ1197・1199、
土坑ＳＫ1248・1249（南から）



(3) 井戸ＳＥ1198、1199枠（南から）



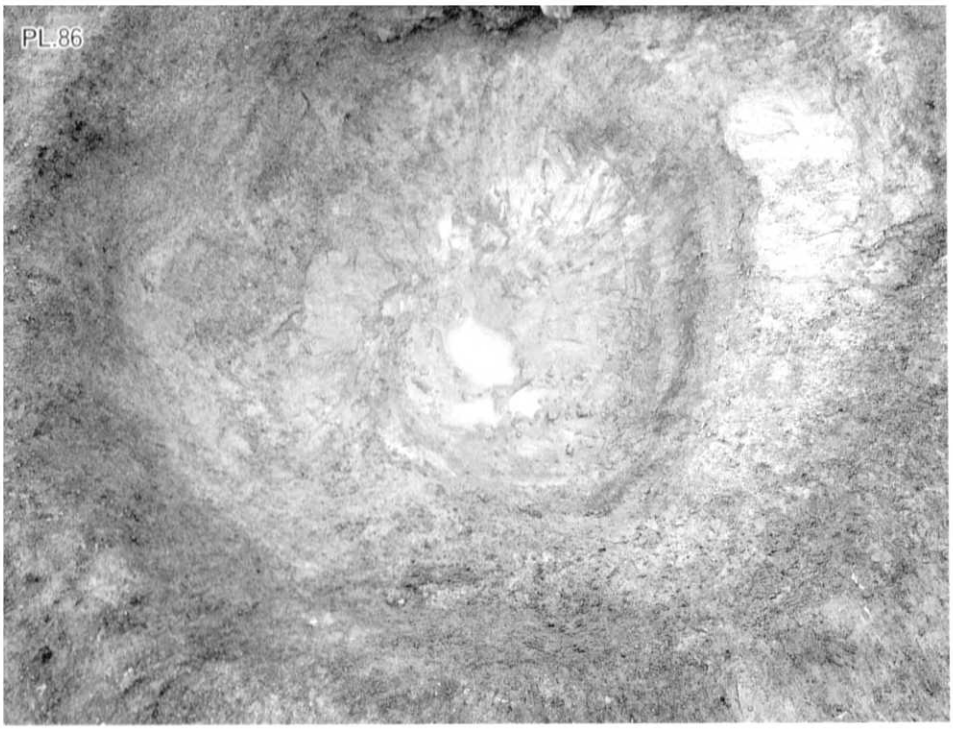
(1) 井戸ＳＥ1201（西から）



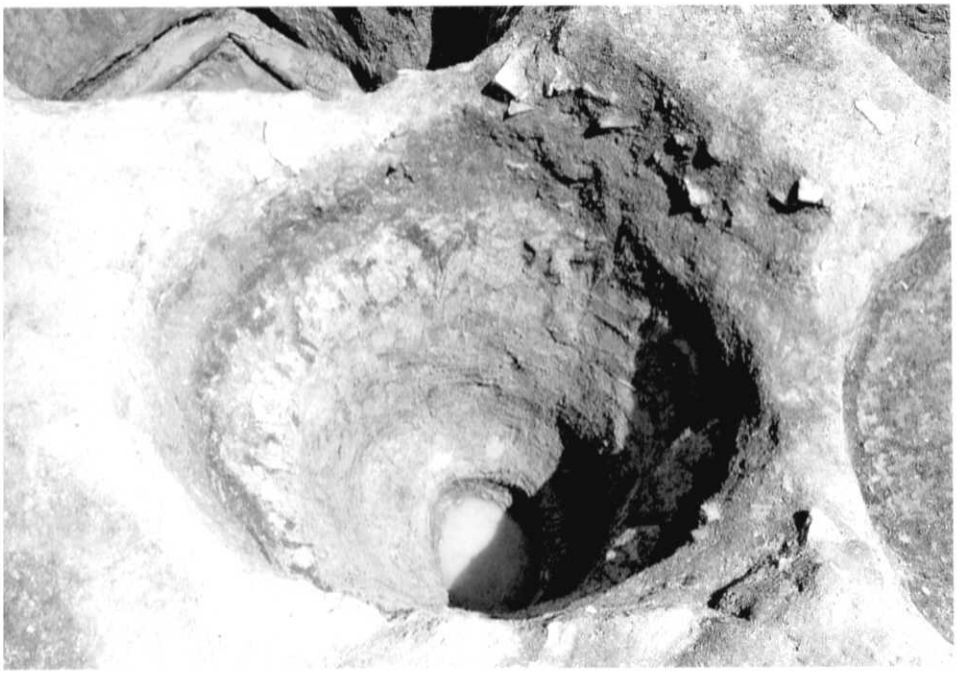
(2) 井戸ＳＥ1202（北から）



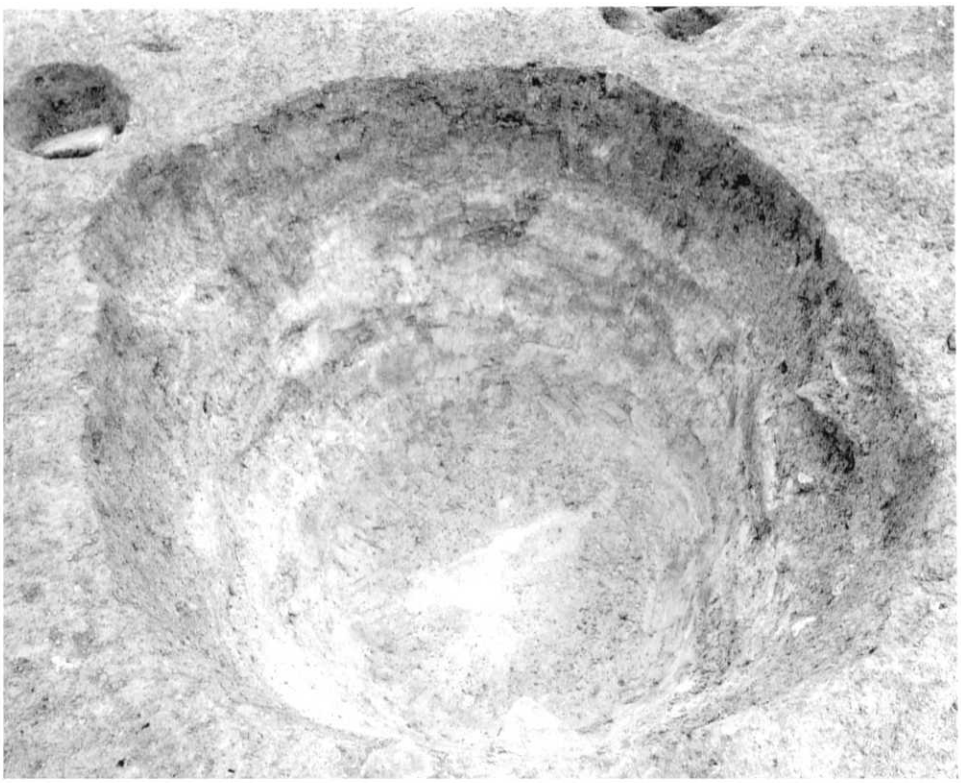
(3) 土坑ＳＫ1205（北から）



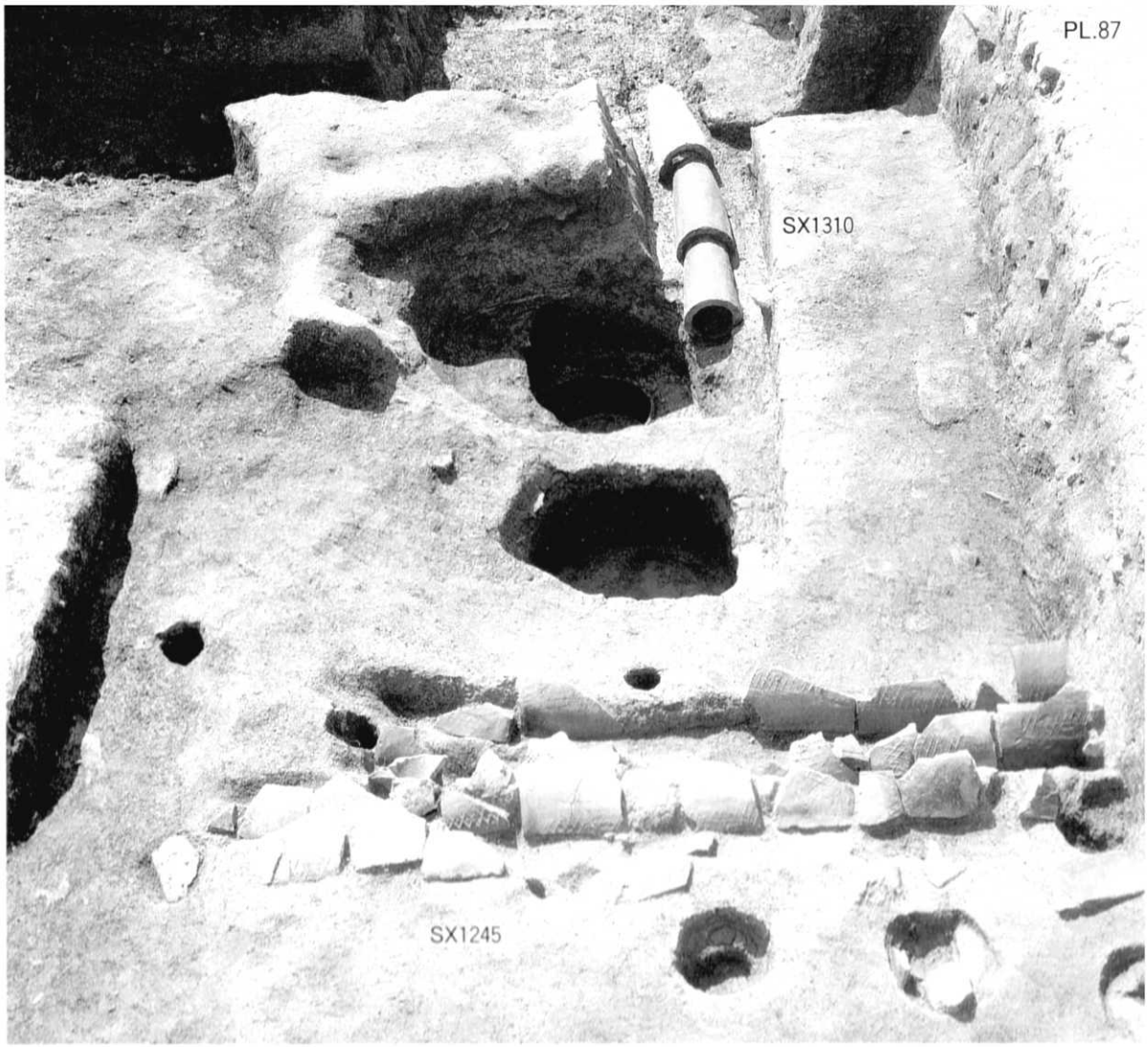
(1) 土坑ＳＫ1211（南から）



(2) 土坑ＳＫ1248（南西から）



(3) 土坑ＳＫ1255（西から）



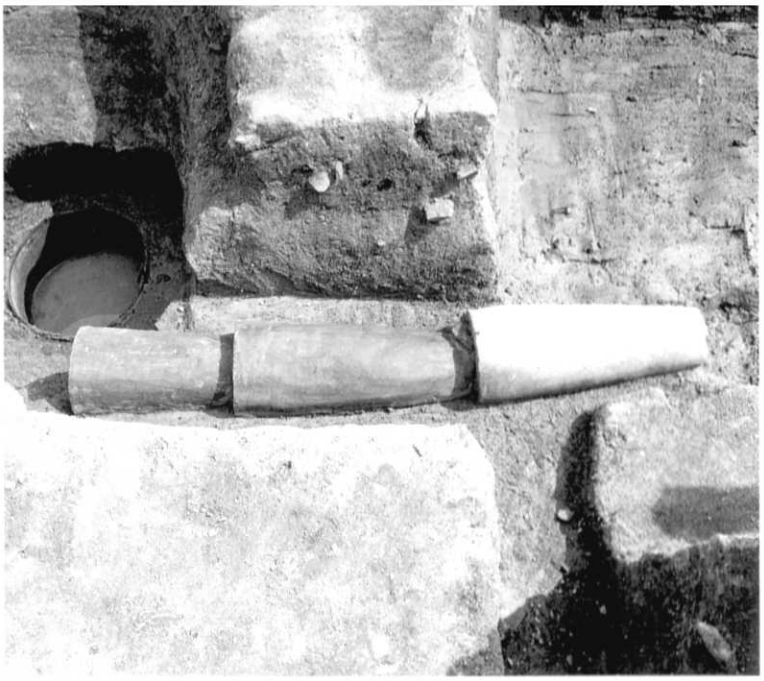
(1) 暗渠ＳＸ1245・1310（北から）



(2) 暗渠ＳＸ1245（東から）



(1) 暗渠ＳＸ1310（南から）



(2) 暗渠ＳＸ1310（西から）



(3) 積石塚ＳＸ1220（北から）



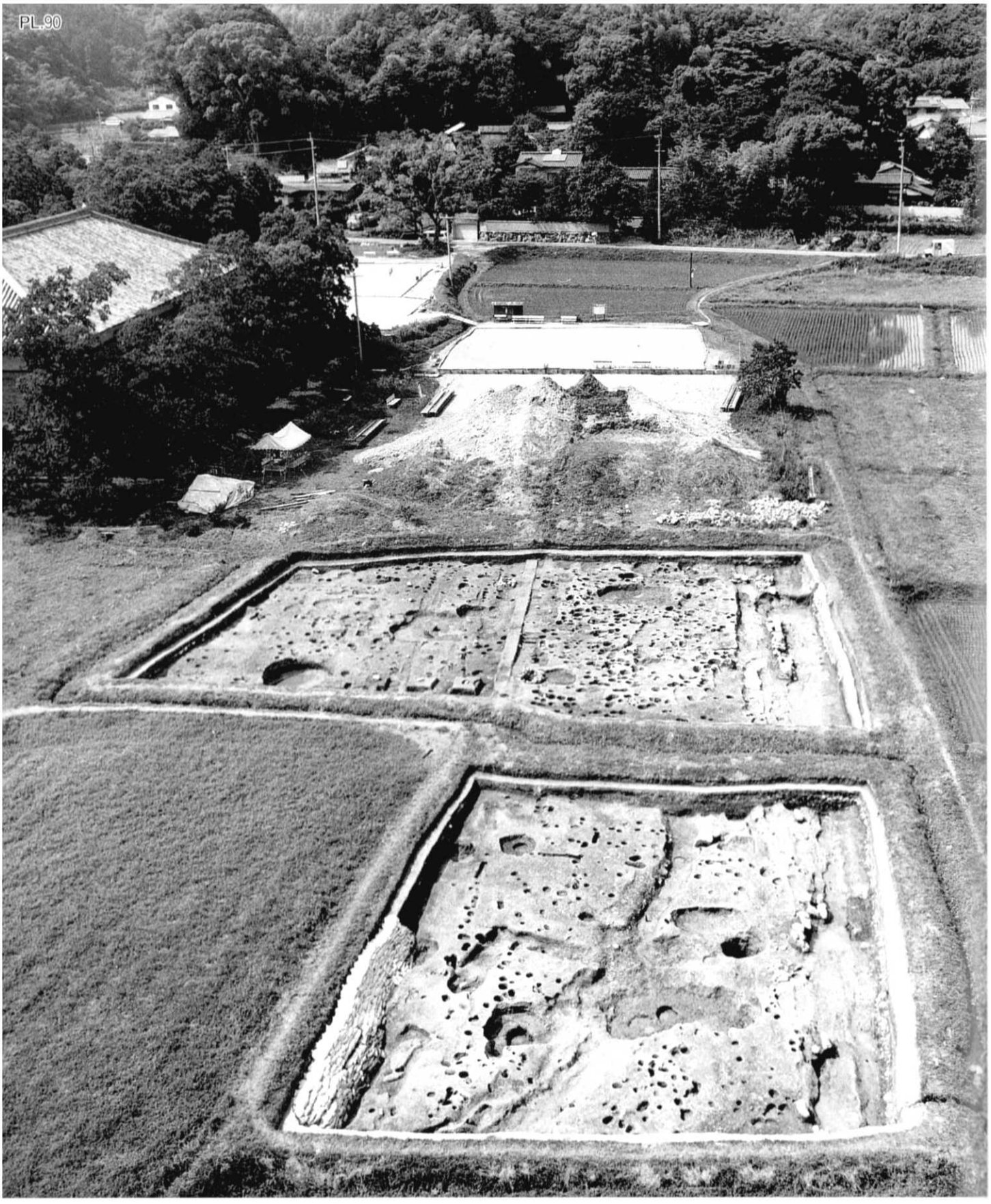
(1) 池ＳＧ1305，排水施設ＳＸ1306，溝ＳＤ1300（北から）



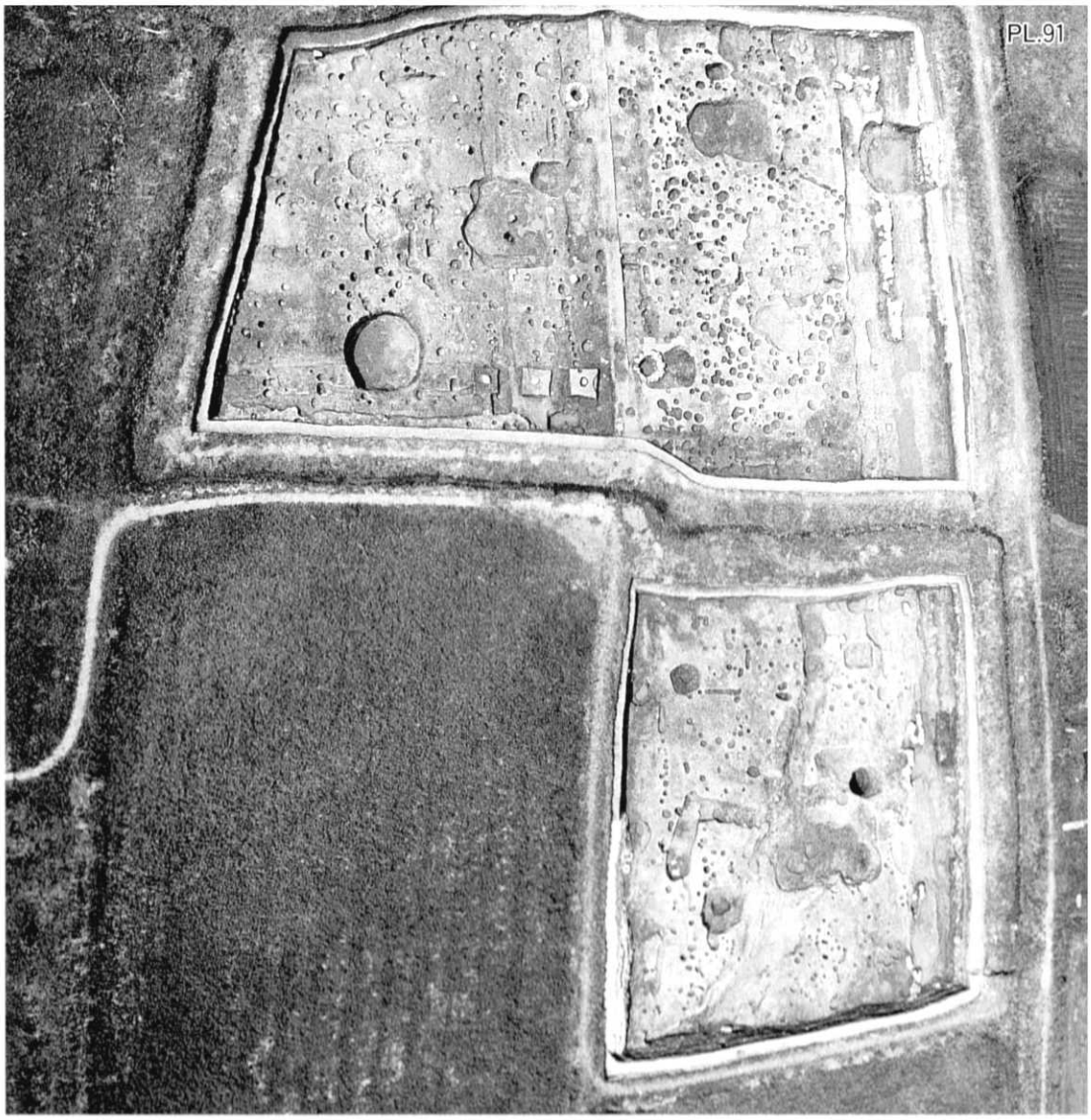
(2) 排水施設ＳＸ1306（北から）



(3) 排水施設ＳＸ1306（西から）



119次調査区全景（空中写真，南上空から）



(1) 119次調査区全景（空中写真，南上空から）



(2) 119次調査区北半部（東真上から）



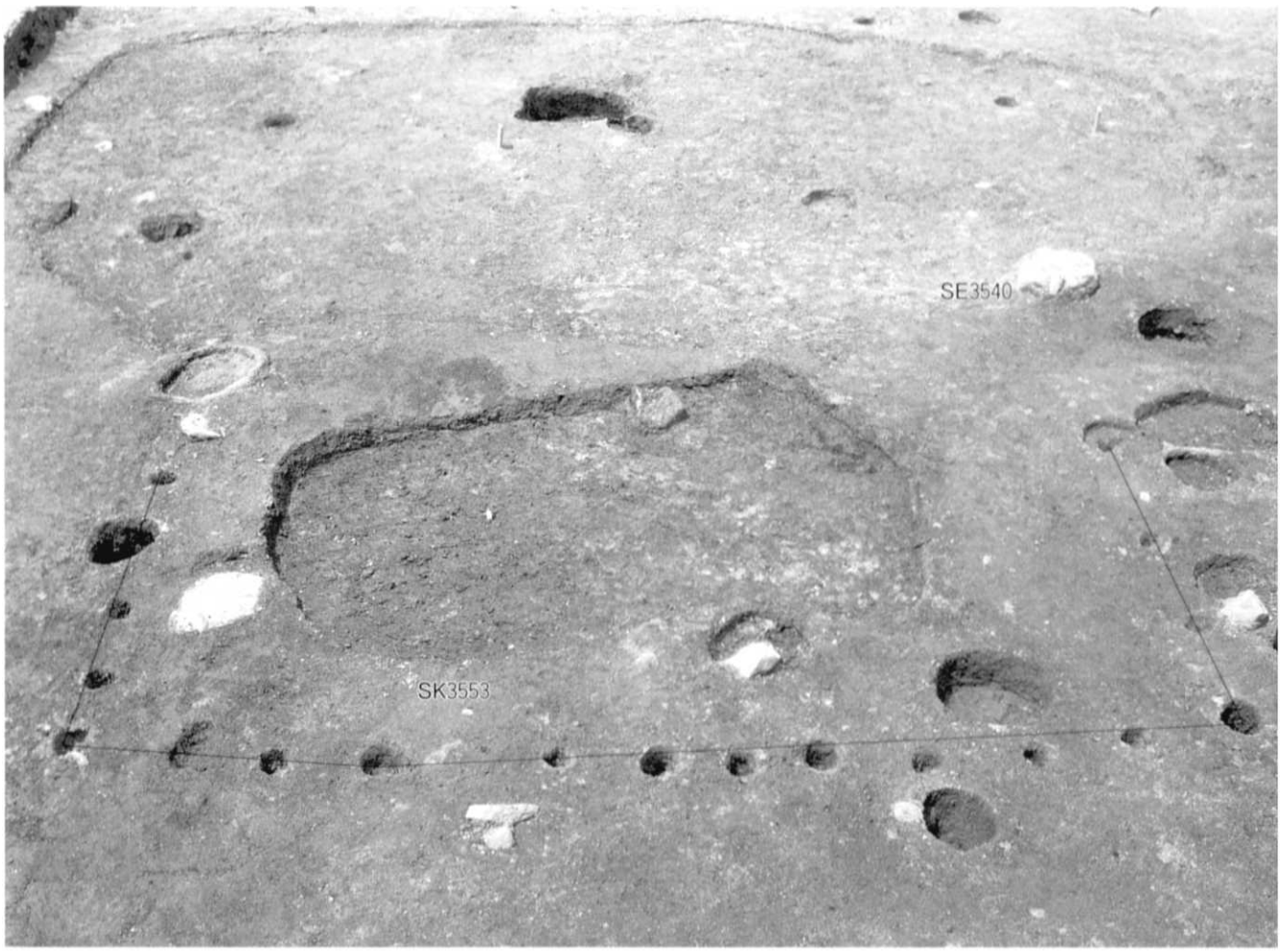
(1) 119次調査区全景（北から）



(2) 119次調査区全景（南から）



(1) 119次調査区北半部（西から）



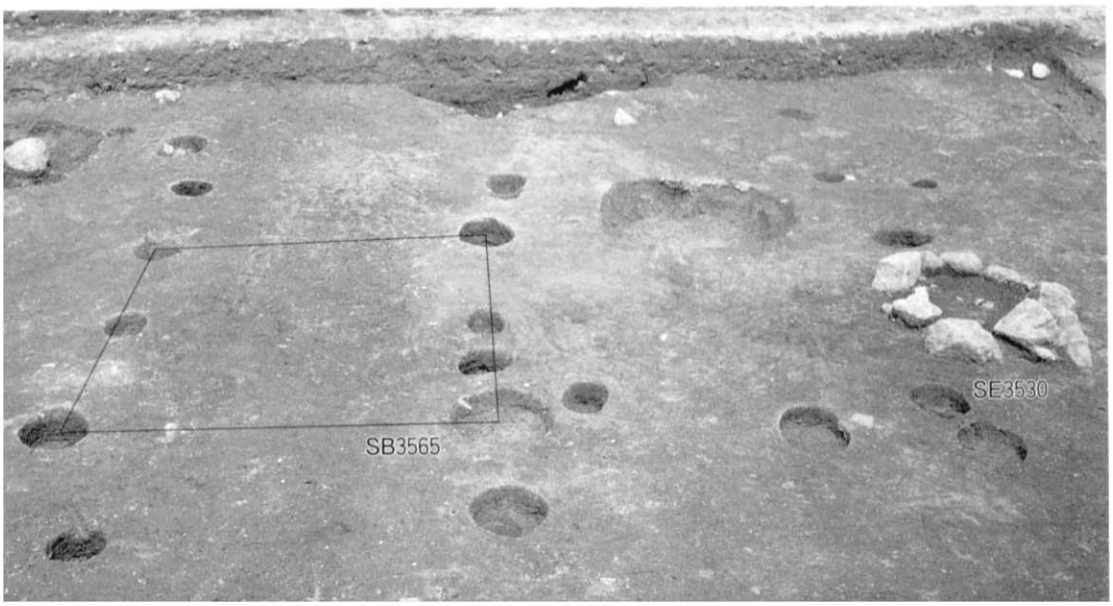
(2) 柵ＳＡ3561（東から）



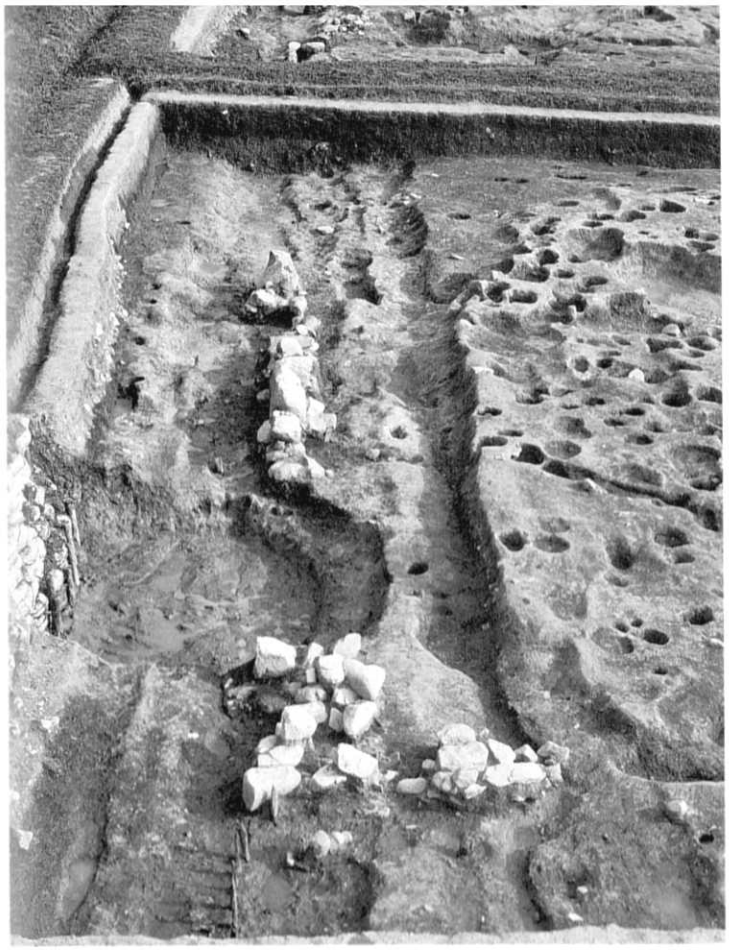
(1) 柵ＳＡ3527，礎石建物ＳＢ3460（北から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ3461（西から）



(3) 掘立柱建物ＳＢ3565（南から）



(1) 溝ＳＤ1230（北から）



(2) 溝ＳＤ1230（南から）



(3) 溝ＳＤ1300（北から）



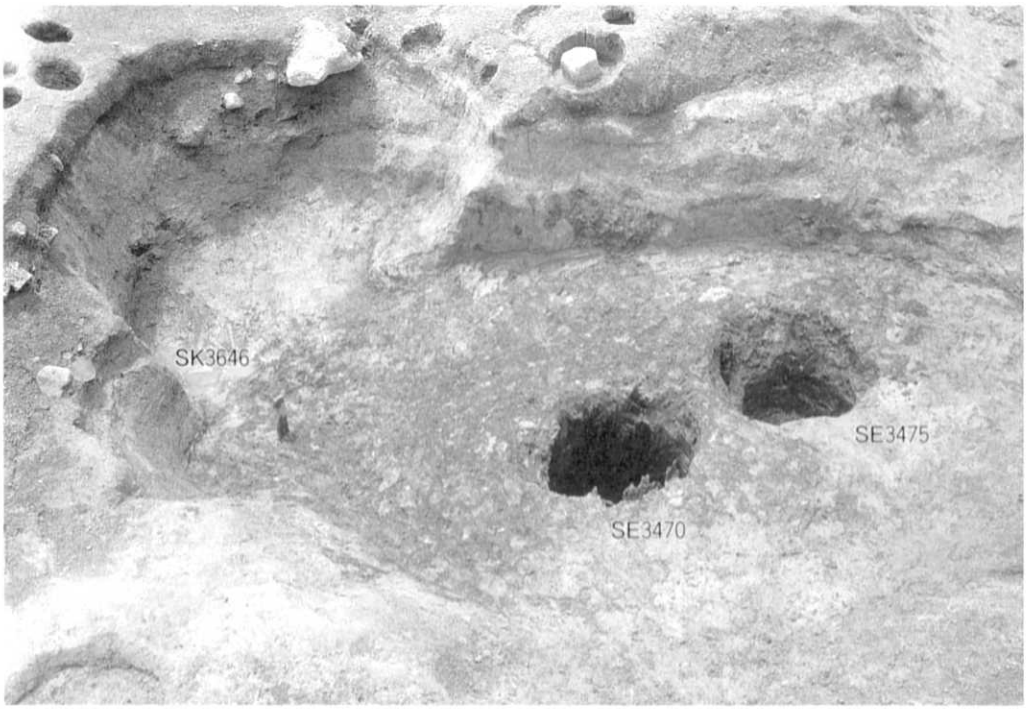
(1) 溝ＳＤ3550（南から）



(2) 溝ＳＤ3550（南から）



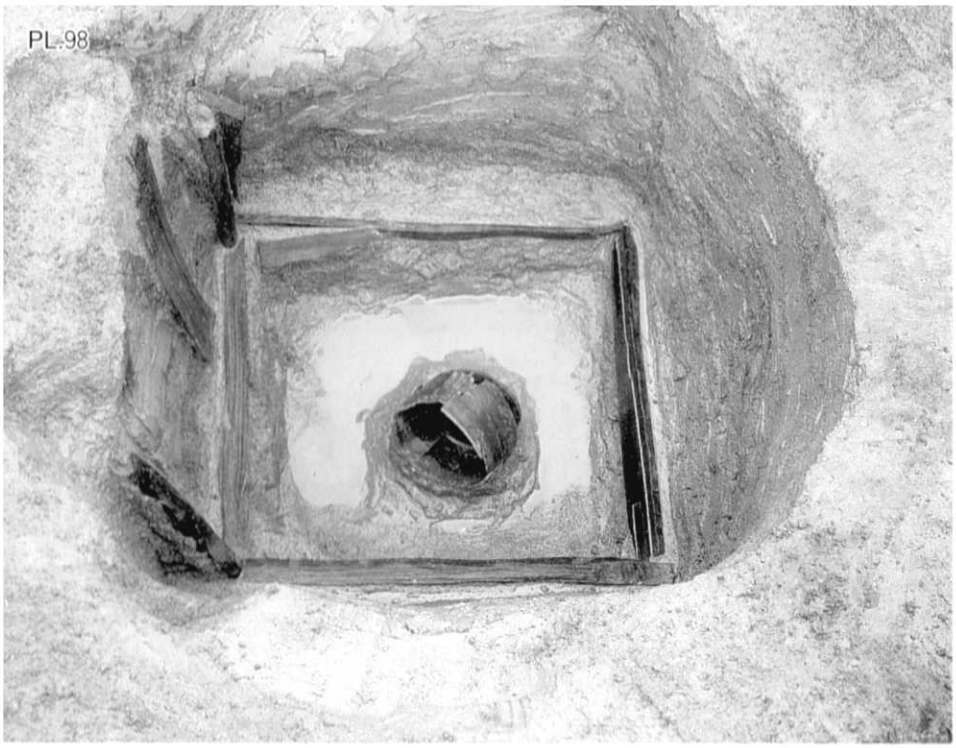
(1) 井戸ＳＥ3465（南から）



(2) 井戸ＳＥ3470・3475，
土坑ＳＫ3464
（北から）



(3) 井戸ＳＥ3470枠（南から）



(1)　井戸ＳＥ3480（西から）



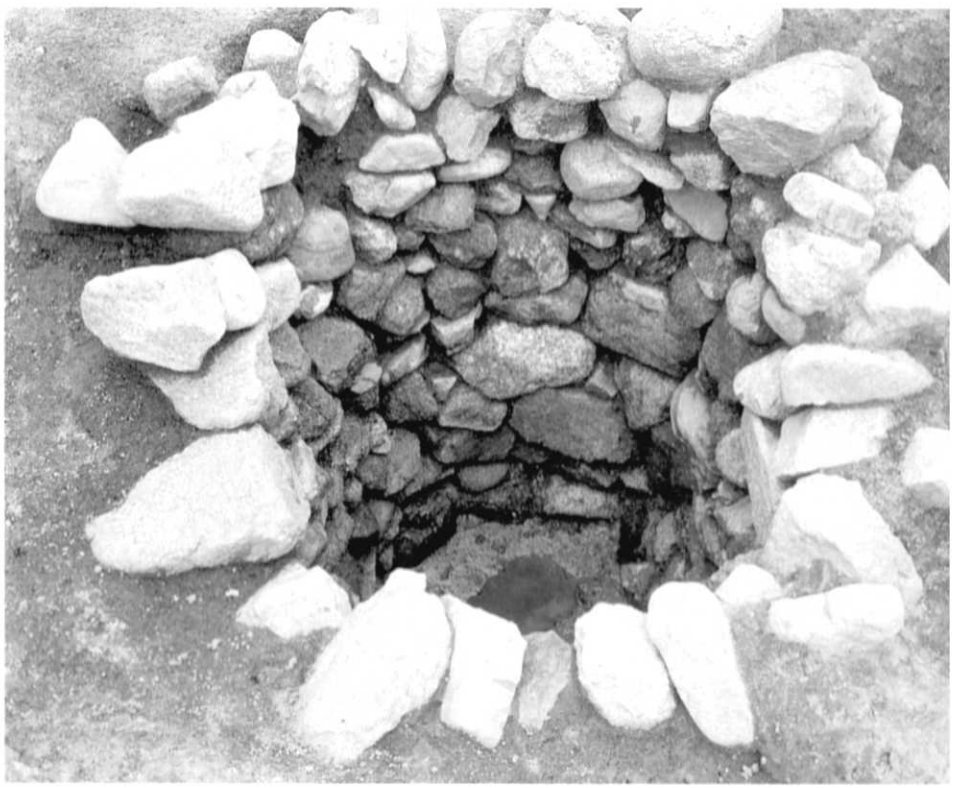
(2)　井戸ＳＥ3490（西から）



(3)　井戸ＳＥ3495（北から）



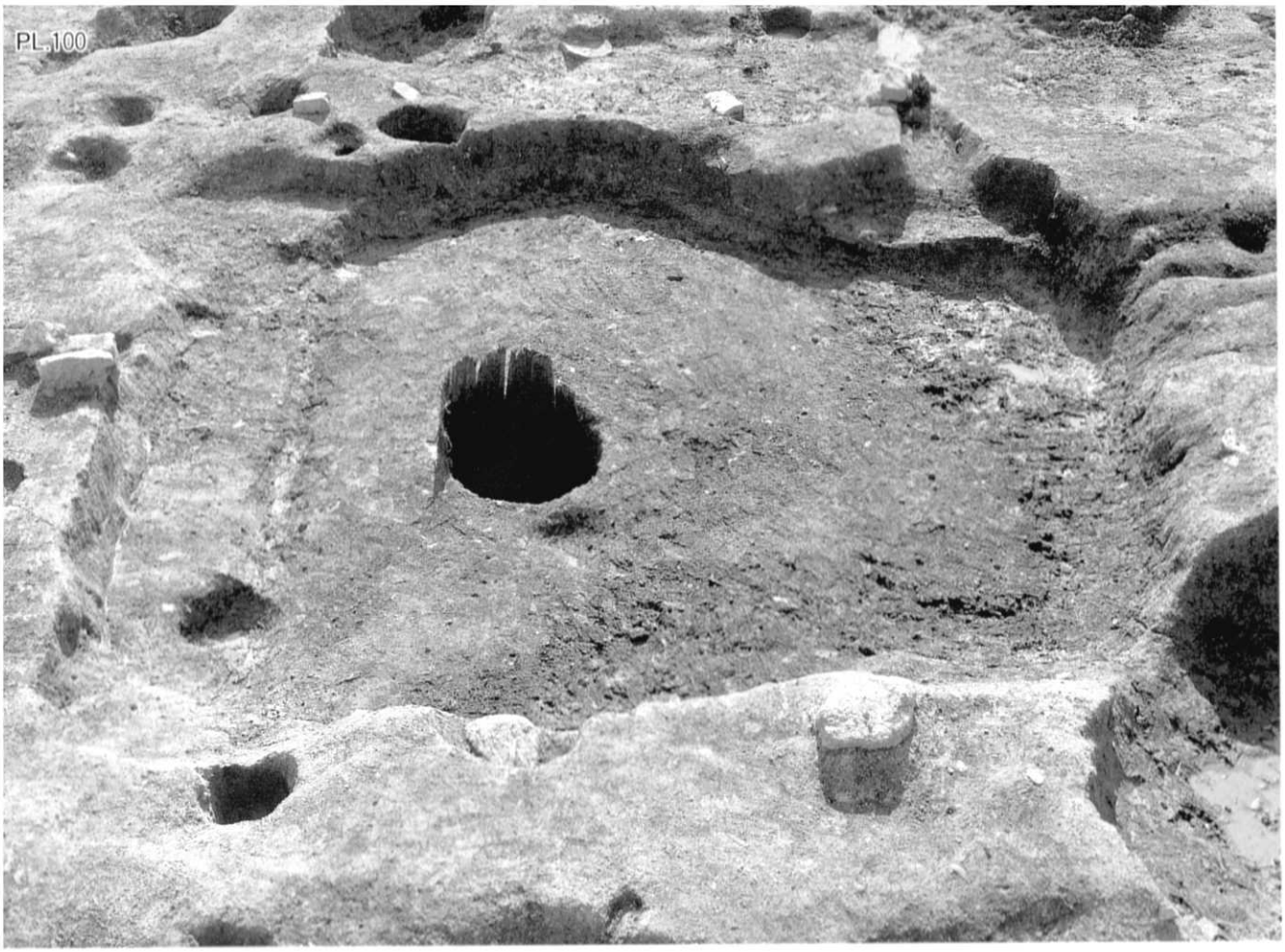
(1) 井戸ＳＥ3505（西から）



(2) 井戸ＳＥ3515（西から）



(3) 井戸ＳＥ3525（北から）



(1) 井戸ＳＥ3535（東から）



(2) 井戸ＳＥ3535枠（東から）



(1) 井戸ＳＥ3530（西から）



(2) 井戸ＳＥ3540（北から）



(3) 井戸ＳＥ3545（北から）



(1) 121次調査区全景（空中写真，西上空から）



(2) 121次調査区全景（北から）



(1) 柵・建物群（西真上から）



(2) 柵ＳＡ3622・3623、溝ＳＤ3637（東から）



(3) 柵ＳＡ3625、溝ＳＤ3630（南から）



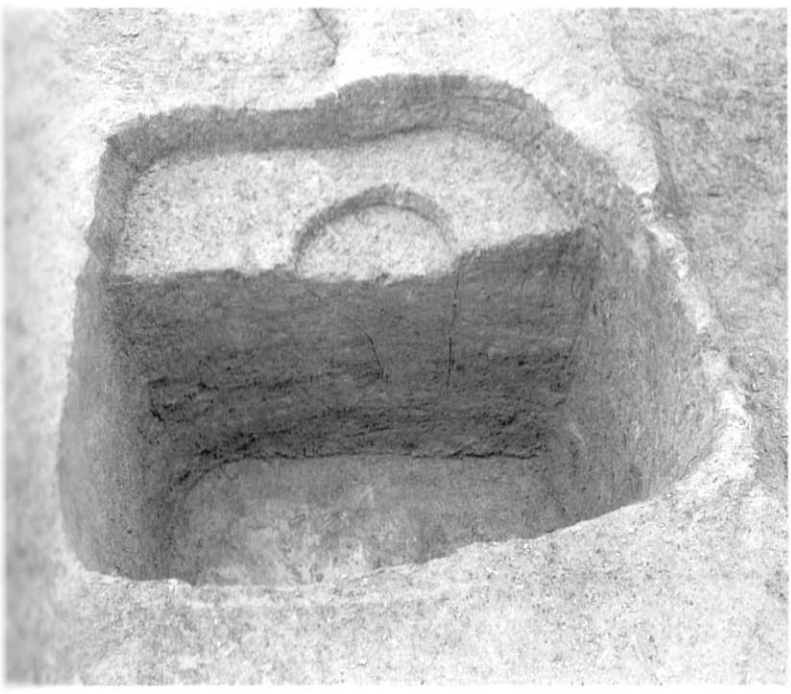
(1) 掘立柱建物ＳＢ3610・3626（東から）



(2) 掘立柱建物ＳＢ3615（西から）



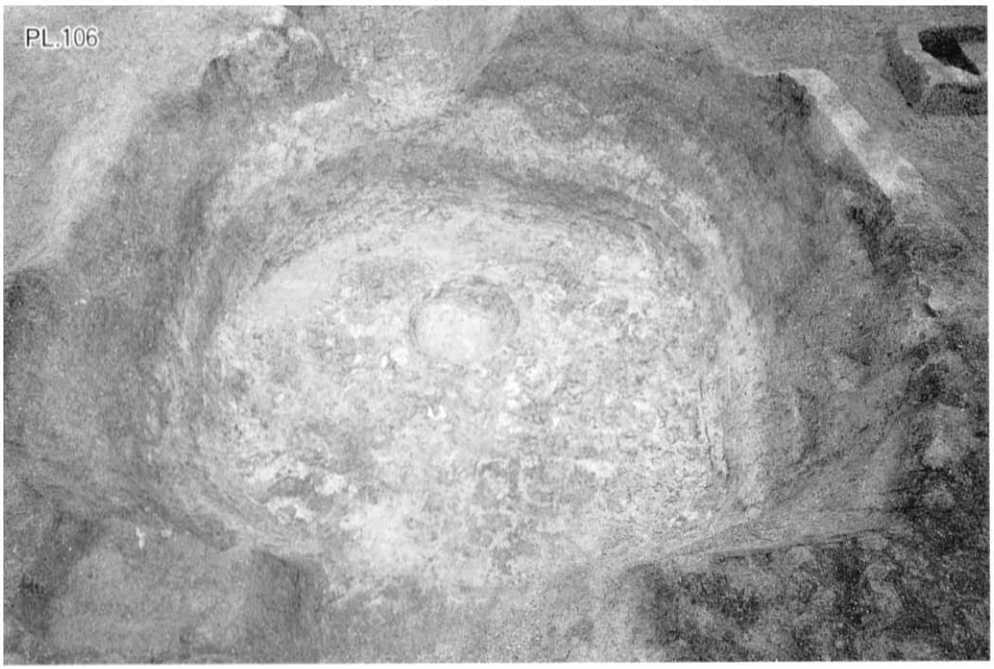
(1) 掘立柱建物ＳＢ3620（南から）



(2) ＳＢ3620柱痕 2



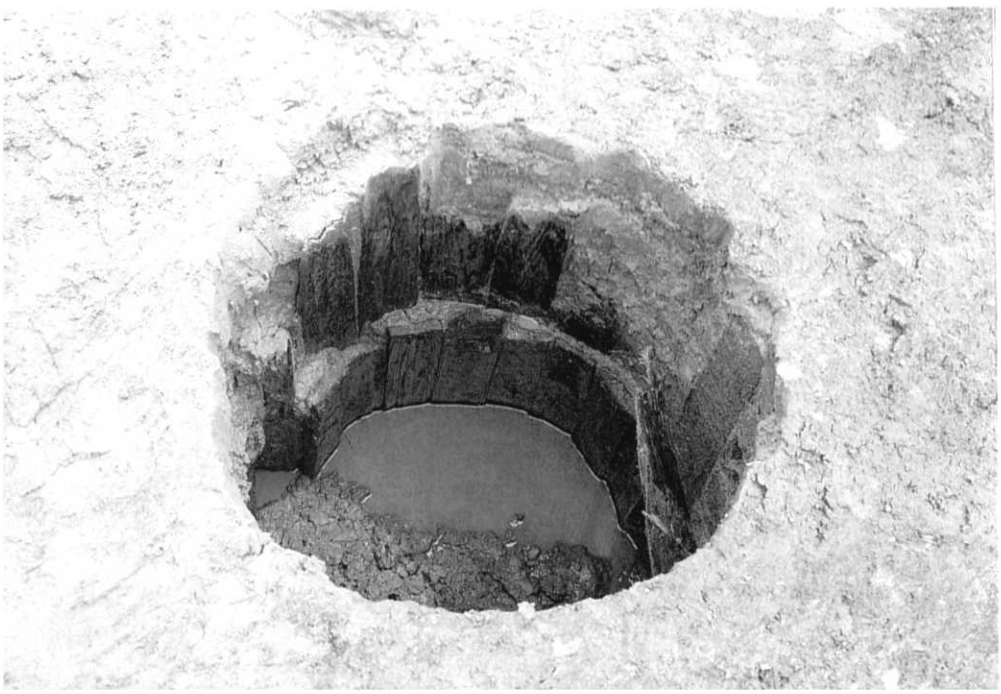
(3) ＳＢ3620柱痕 3



(1) 井戸ＳＥ3636（西から）



(2) 井戸ＳＥ3645（北から）



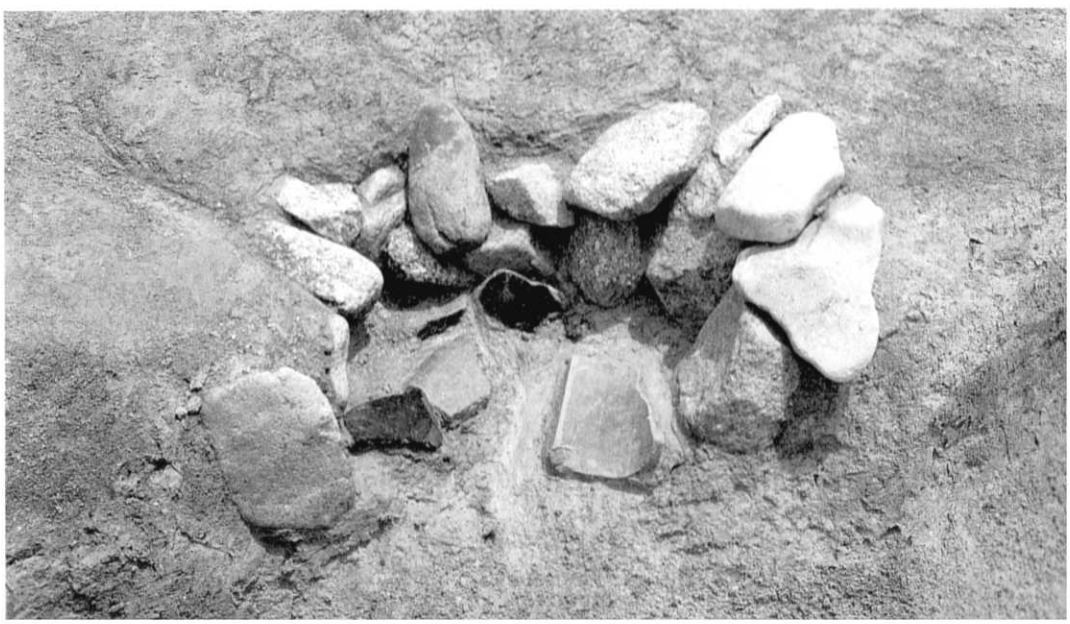
(3) 井戸ＳＥ3645枠（北から）



(1) 井戸ＳＥ3645下部
（北から）



(2) 土坑ＳＫ3648
（南から）



(3) 土坑ＳＫ3658
（西から）



(1) 鋳造遺構 S X 3640
（東から）



(2) 鋳造遺構 S X 3640
（北から）



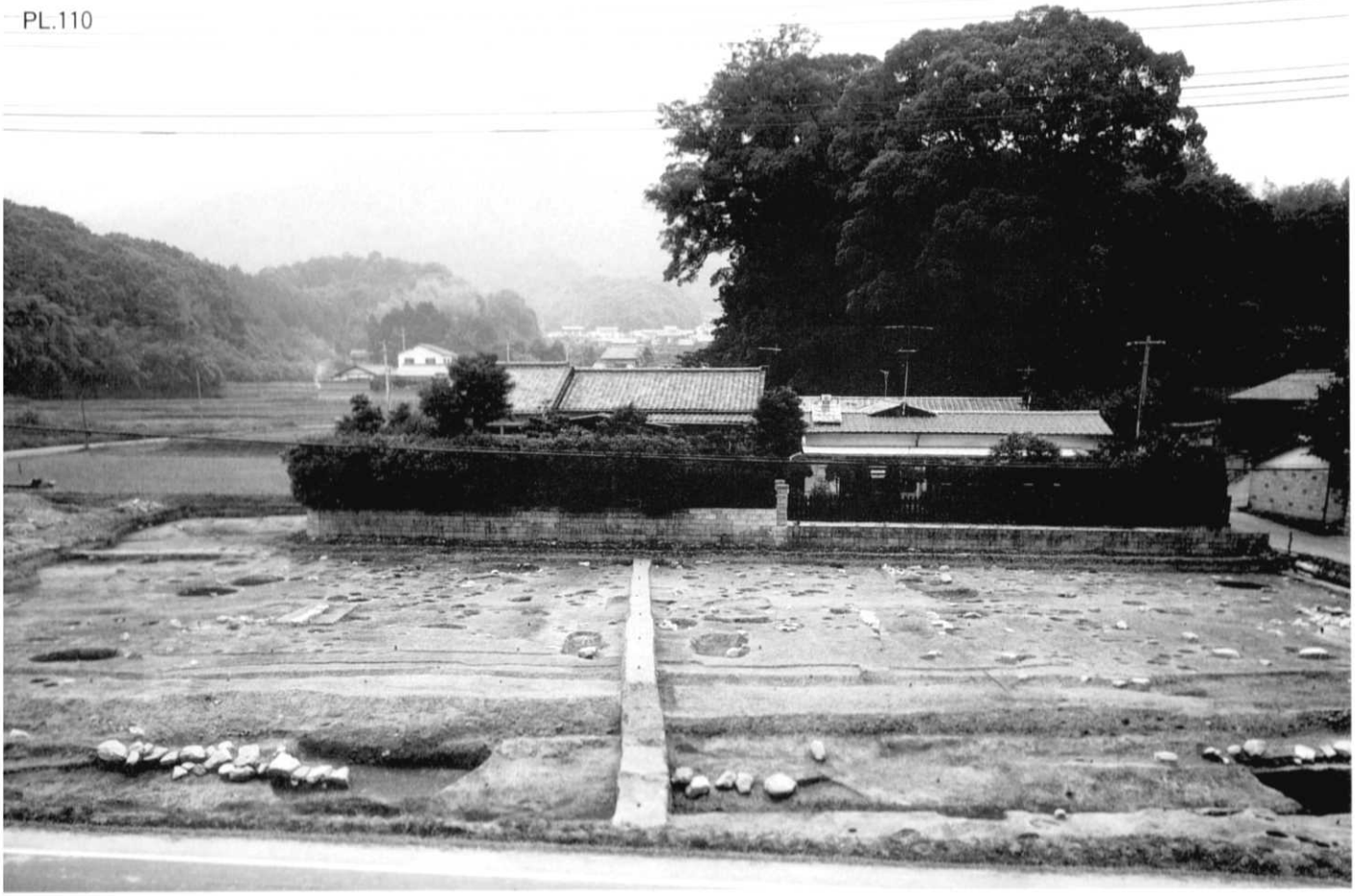
(3) 同　土層断面
（北から）



(1) 観世音寺北辺域（空中写真，北東上空から）



(2) 観世音寺北辺域（空中写真，北西上空から）



(1) 70次調査区上層遺構（南から）



(2) 70次調査区上層遺構（西から）



(1)　70次調査区下層遺構（南から）



(2)　70次調査区下層遺構（西から）



(1) 柵ＳＡ1840（東から）

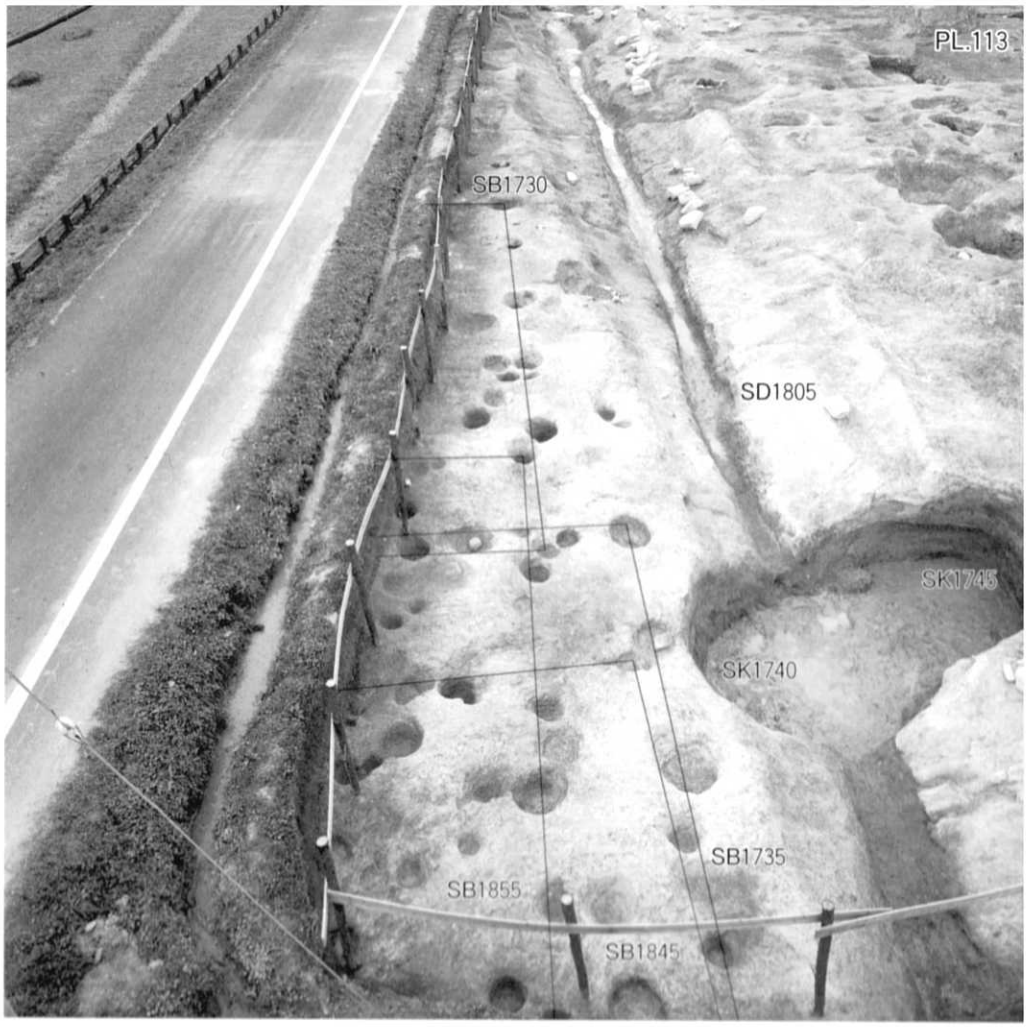


(2) 柵ＳＡ1840柱根（東から）





(3) 門建物ＳＢ1748柱痕（南から）



(1) 掘立柱建物ＳＢ1730・1735・1845・1855（東から）



(2) 溝ＳＤ1805（西から）



(1) 井戸ＳＥ1760（北から）



(2) 井戸ＳＥ1765（北から）



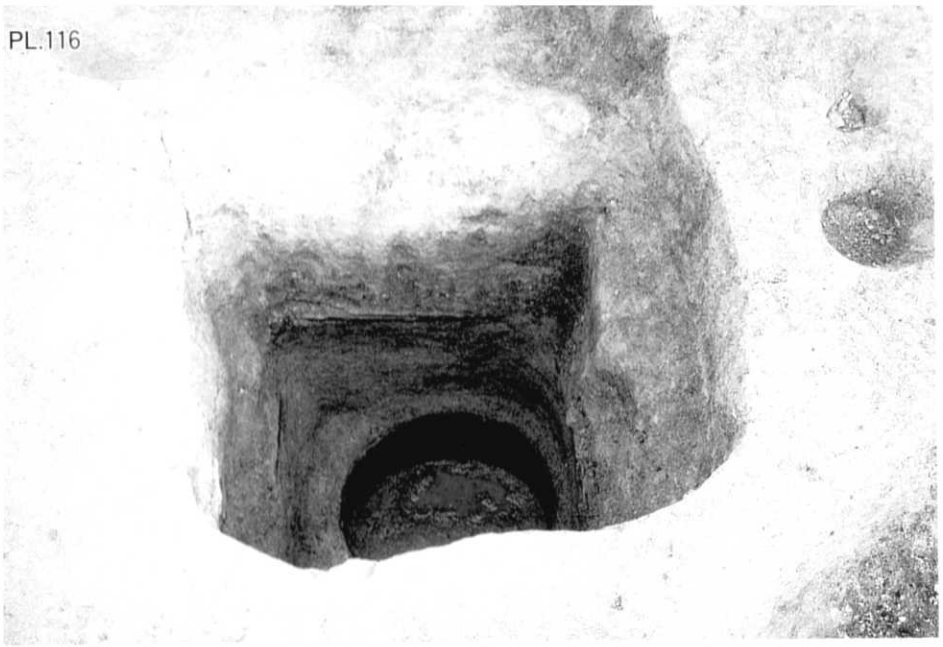
(3) 井戸ＳＥ1770（東から）



(1) 井戸ＳＥ1755，土坑ＳＫ1750（東から）



(2) 井戸ＳＥ1775（東から）



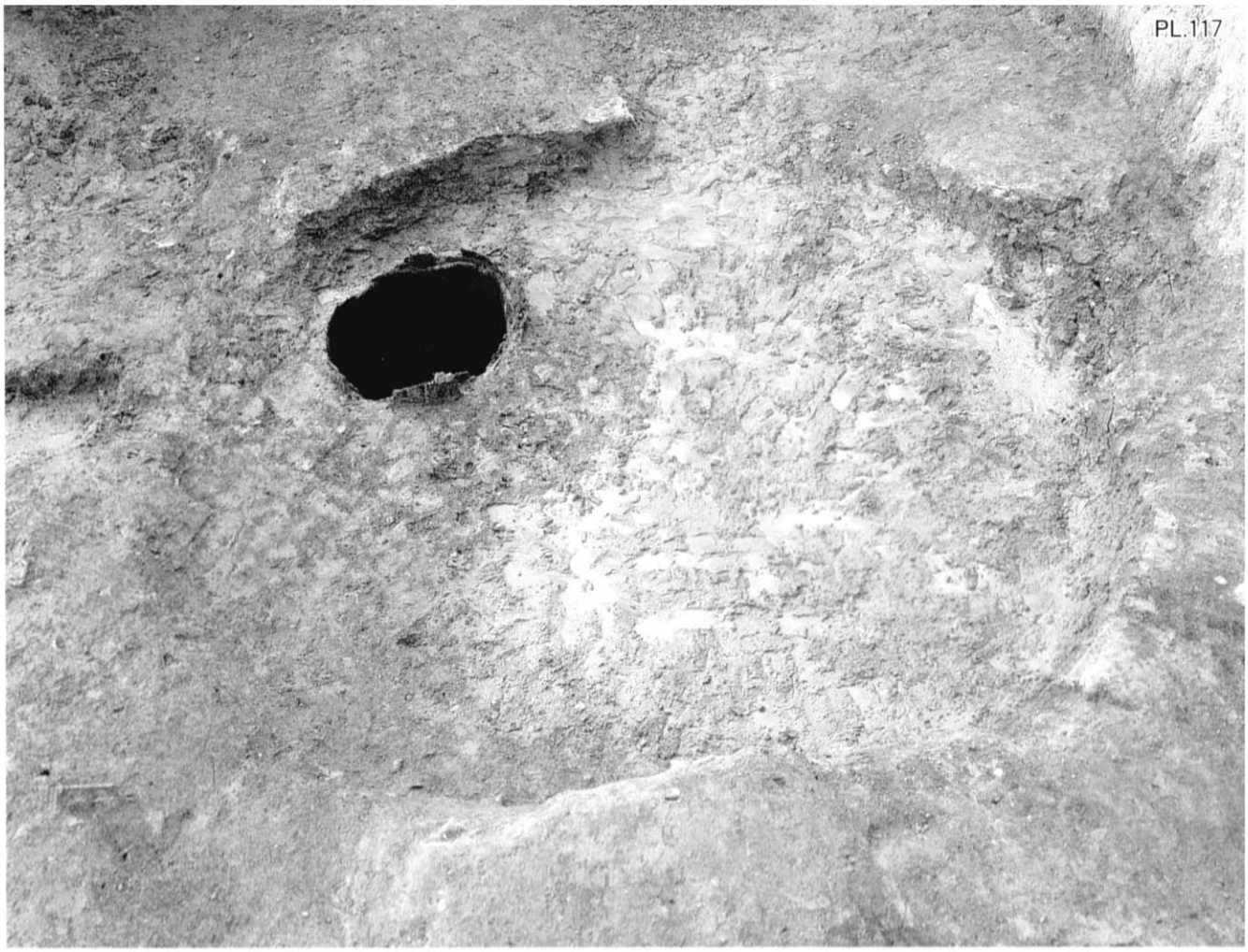
(1) 井戸ＳＥ1780（西から）



(2) 井戸ＳＥ1785（北から）



(3) 井戸ＳＥ1790（北から）



(1)　井戸ＳＥ1795（東から）



(2)　井戸ＳＥ1795枠（東から）



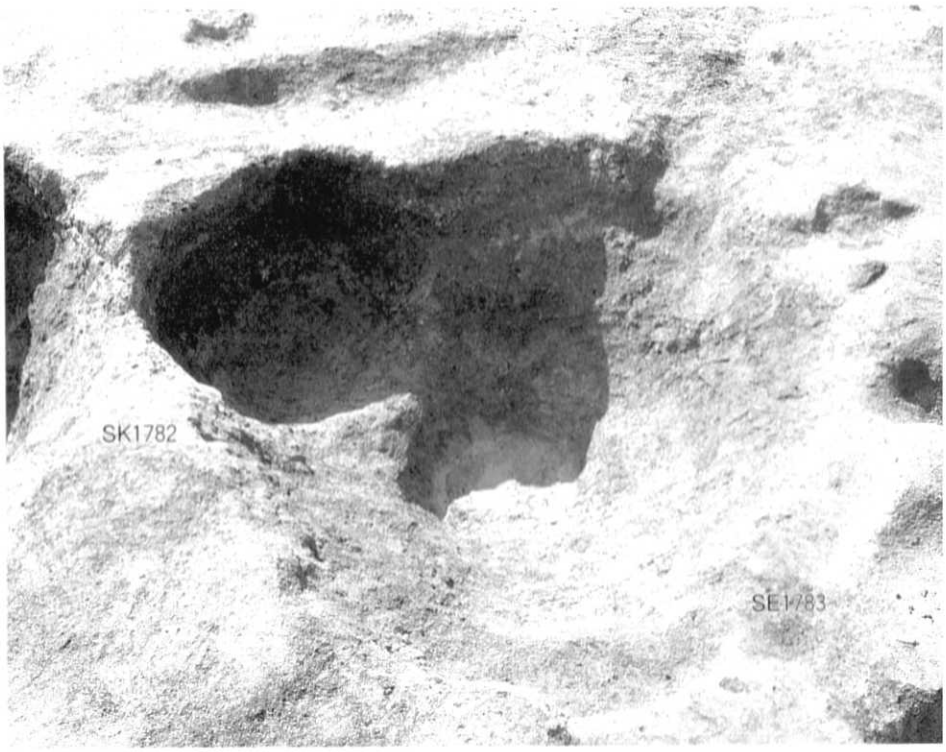
(1) 井戸ＳＥ1800（南から）



(2) 井戸ＳＥ1701（東から）



(1) 井戸ＳＥ1781（南から）



(2) 井戸ＳＥ1783，土坑ＳＫ1782
（北から）



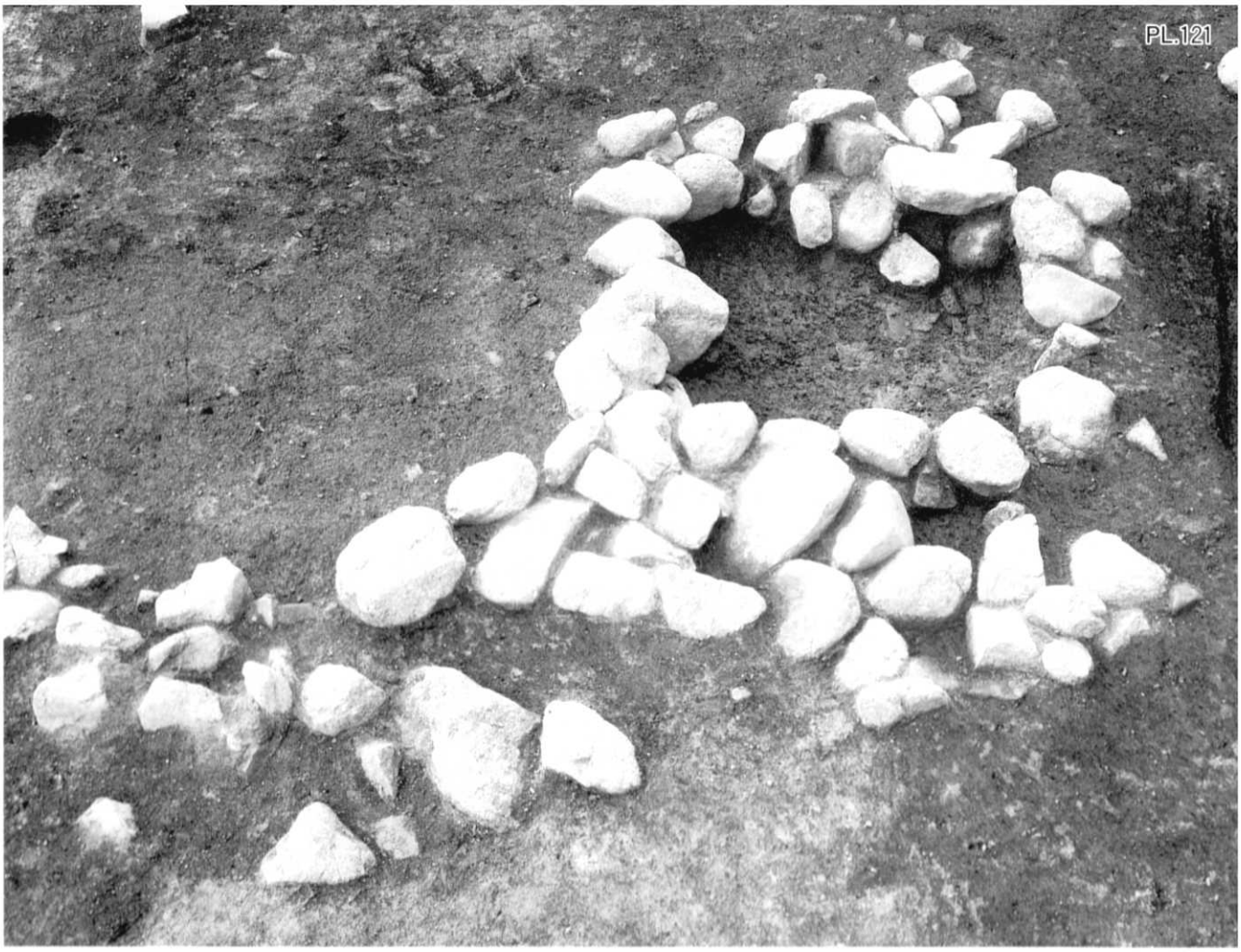
(3) 土坑ＳＫ1740・1745（北から）



(1) 土坑ＳＫ1788（南から）



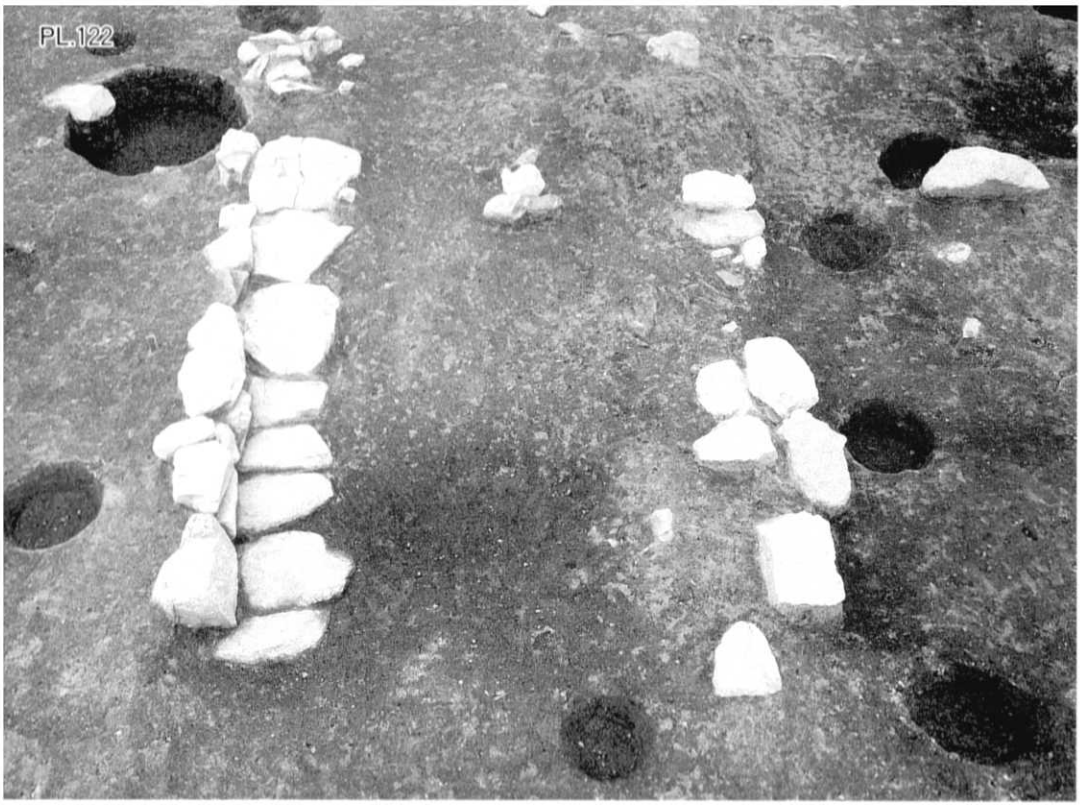
(2) 土器出土状況（西から）



(1)　石組土坑ＳＫ1685（南から）



(2)　石組ＳＸ1842（東から）



(1) 石列ＳＸ1690
（南から）



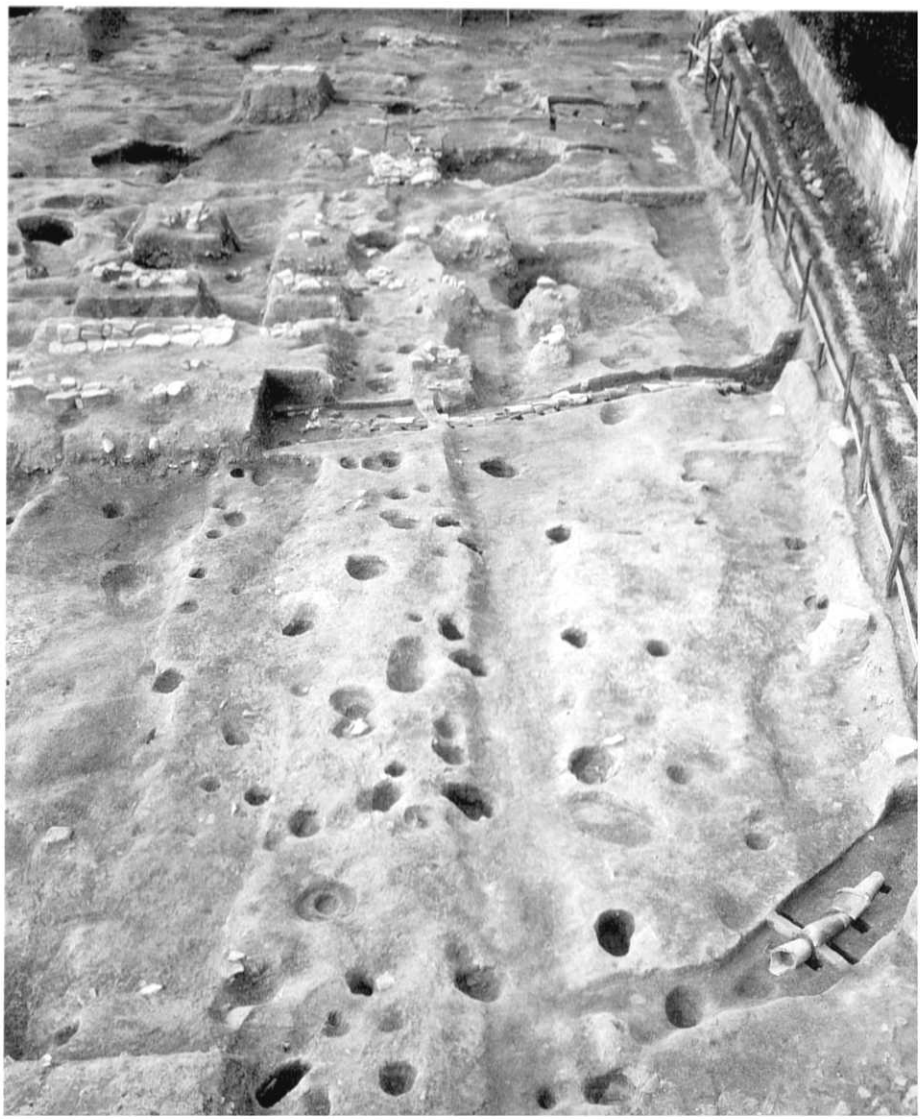
(2) 石列ＳＸ1690
（東から）



(3) 地鎮ＳＸ1810（南から）



(1) 下層暗渠群（西から）



(2) 下層暗渠群（東から）



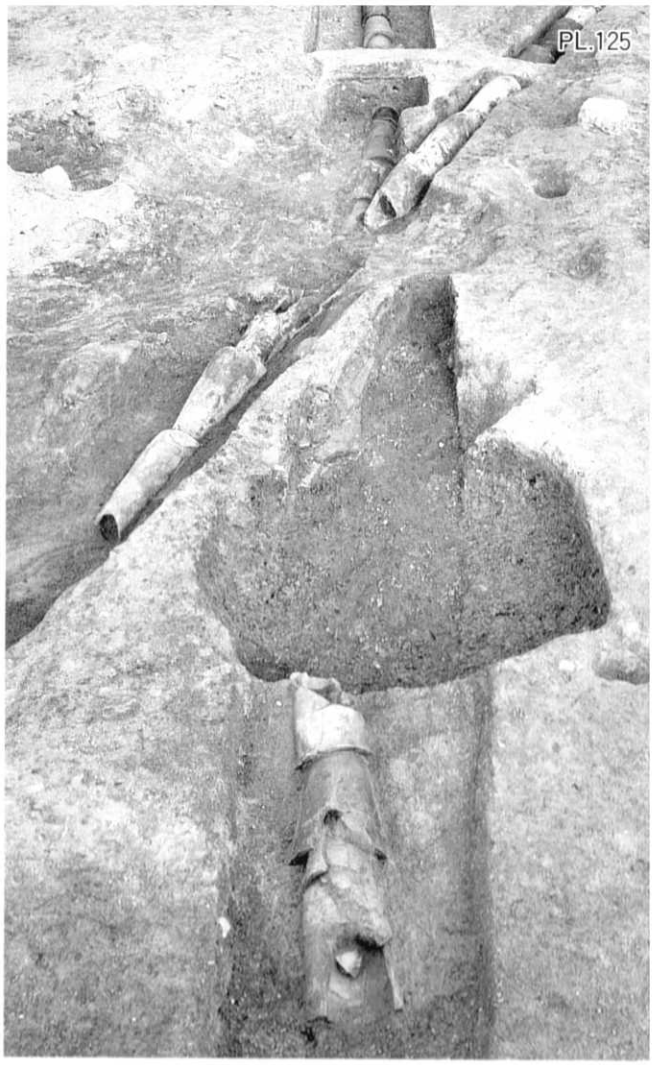
(1) 暗渠ＳＸ1831・1832・1833（東から）



(2) 暗渠ＳＸ1831・1832（西から）



(1) 暗渠ＳＸ1831・1832（北から）



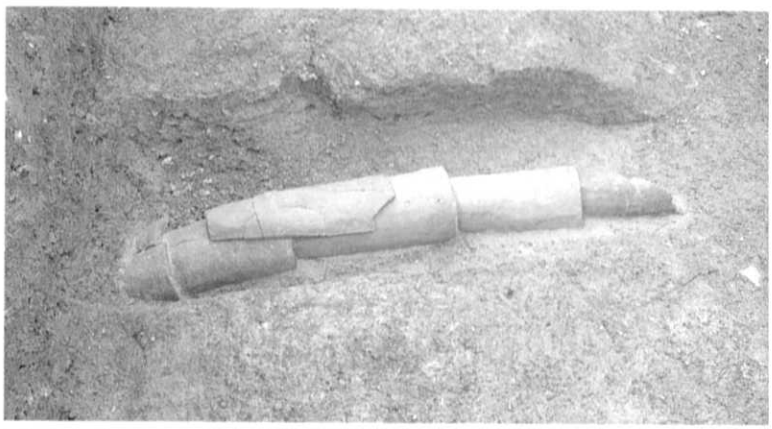
(2) 暗渠ＳＸ1831・1832（南から）



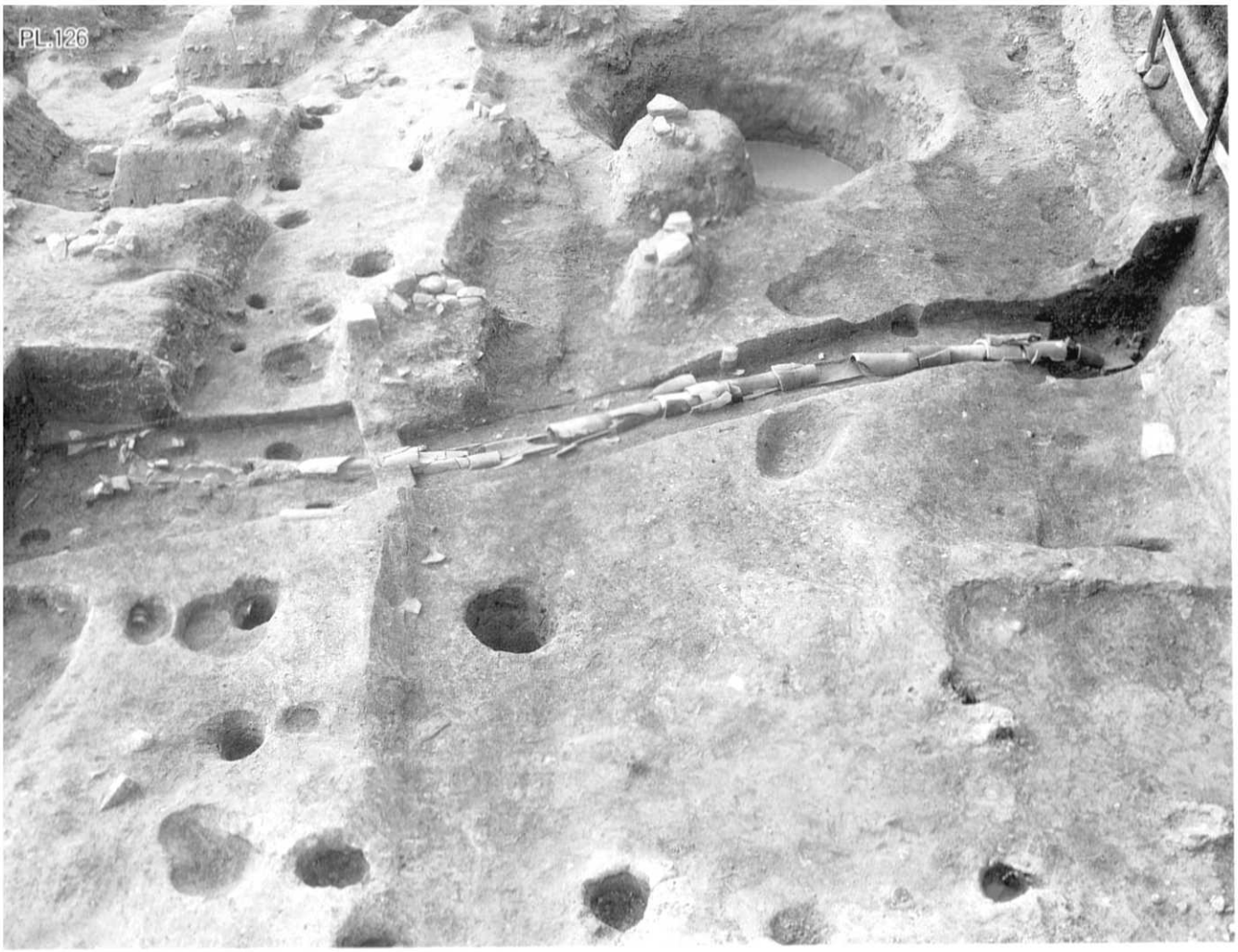
(3) 暗渠ＳＸ1833（北から）



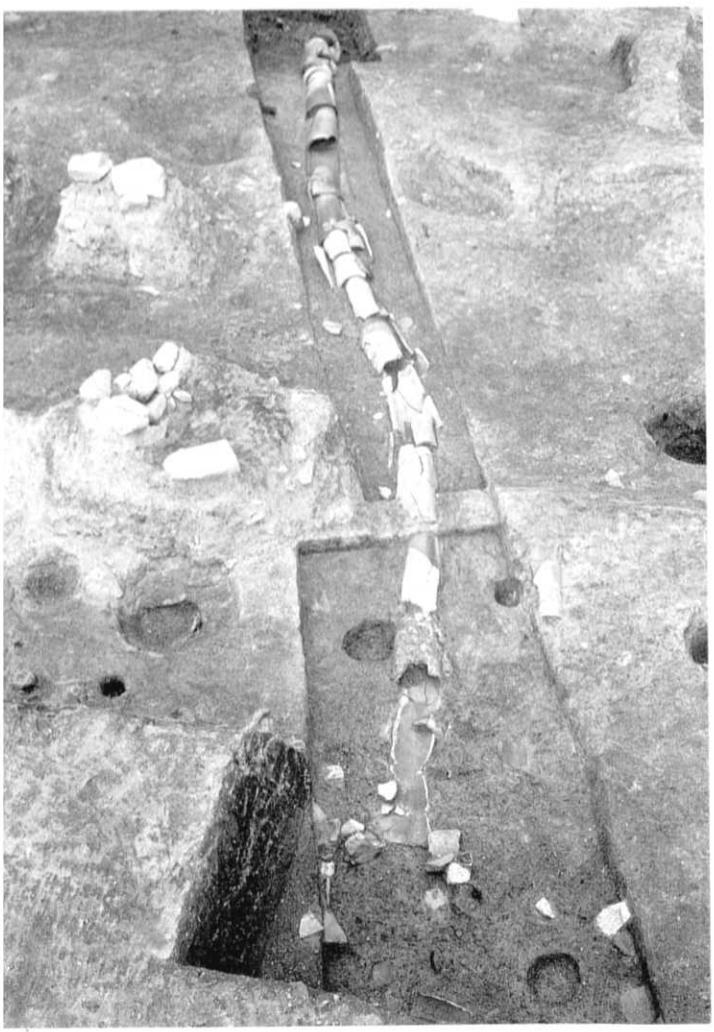
(4) 70次補足調査　暗渠ＳＸ1833，溝ＳＤ1850（西から）



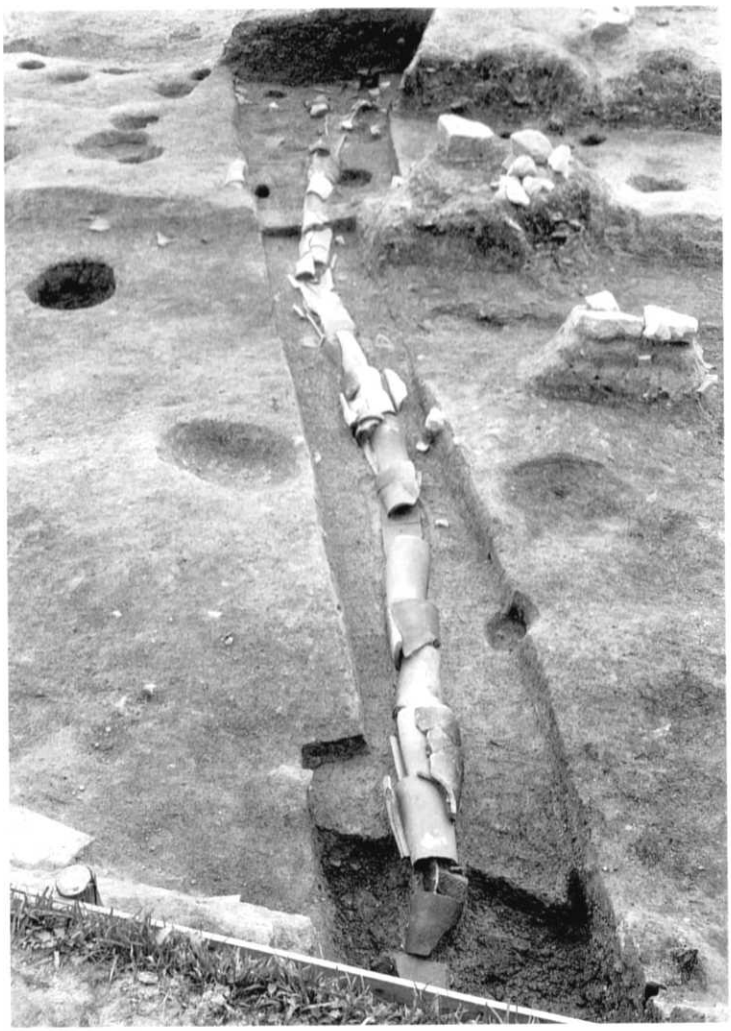
(5) 同　暗渠ＳＸ1833（東から）



(1) 暗渠ＳＸ1834（東から）



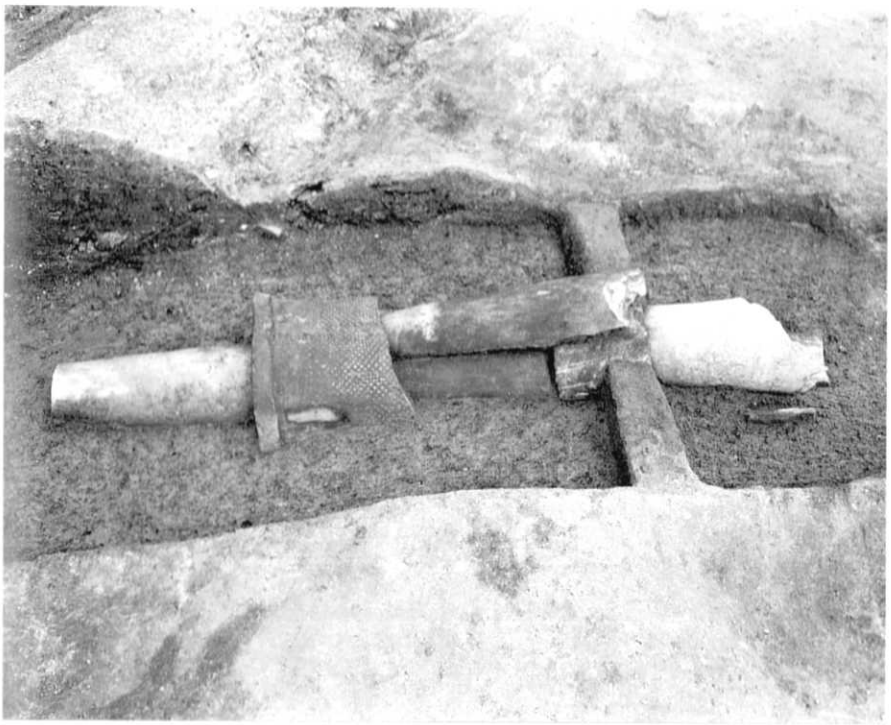
(2) 暗渠ＳＸ1834（南から）



(3) 暗渠ＳＸ1834（北から）



(1) 70次補足調査　暗渠ＳＸ1834、溝ＳＤ1850（北から）



(2) 暗渠ＳＸ1835（南西から）



(3) 暗渠ＳＸ1835（北西から）



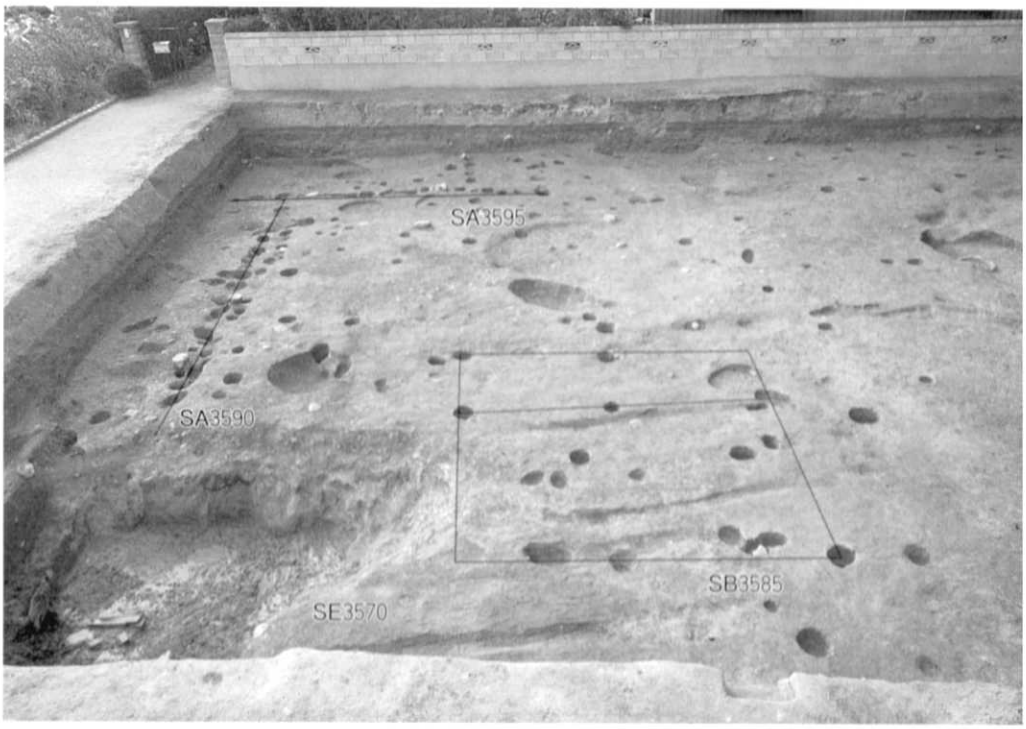
(1) 120次調査区上層遺構（北から）



(2) 120次調査区上層遺構（北から）



(1) 中層遺構（北から）



(2) 柵ＳＡ3590・3595，
掘立柱建物ＳＢ3585
（東から）



(3) 柵ＳＡ3590・3595
（南から）



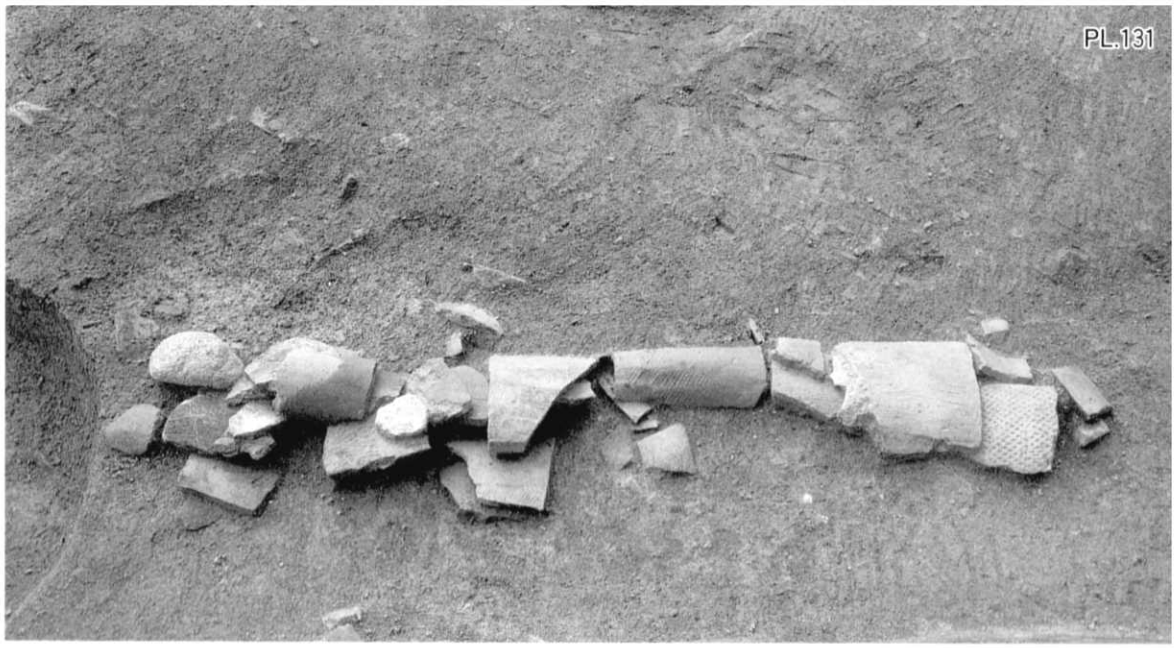
(1)　下層遺構（南から）



(2)　溝ＳＤ3605（東から）



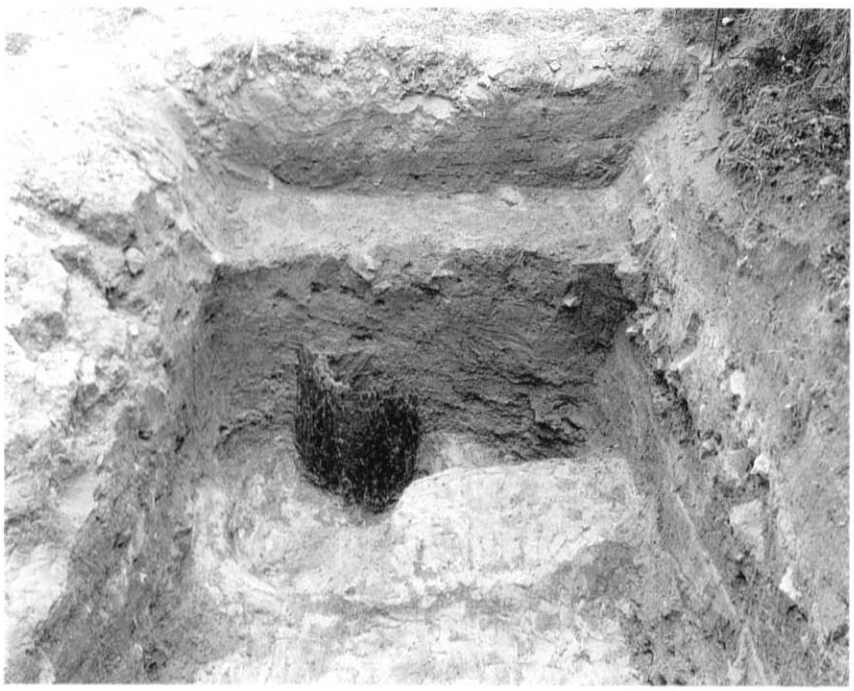
(3)　溝ＳＤ3605，土坑ＳＫ3576
（北から）



(1) 暗渠ＳＸ3572（東から）



(2) 123次調査区（東から）



(3) 掘立柱建物ＳＢ3700（北から）



(4) 同　柱根（北から）



(1) 144次調査区上層遺構（南西から）



(2) 144次調査区上層遺構（北東から）



(1) 48次調査区（東から）



(2) 48次調査区（南から）



(1) 118次調査区（東から）



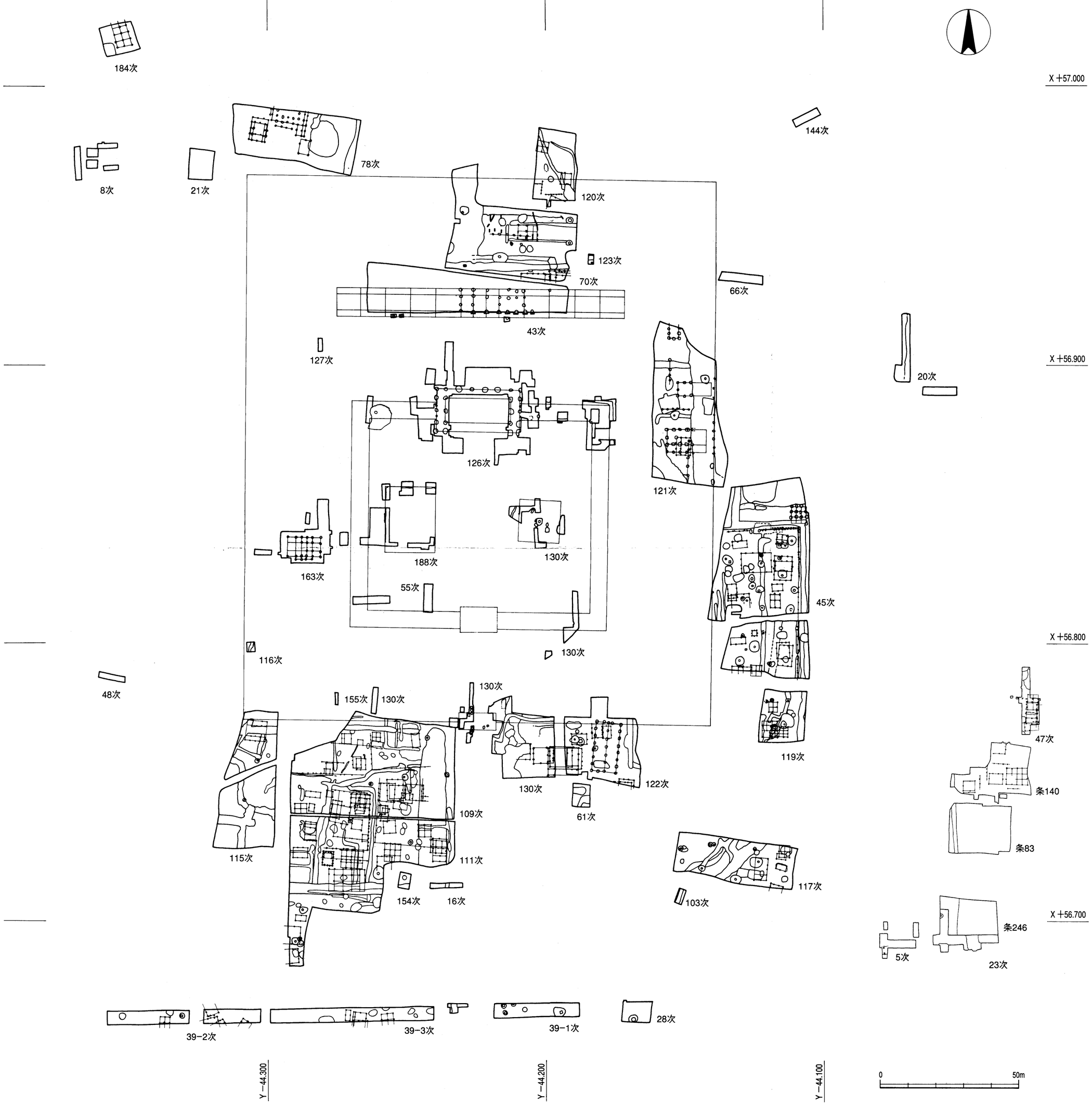
(2) 土坑ＳＫ3451（南から）

報告書抄録

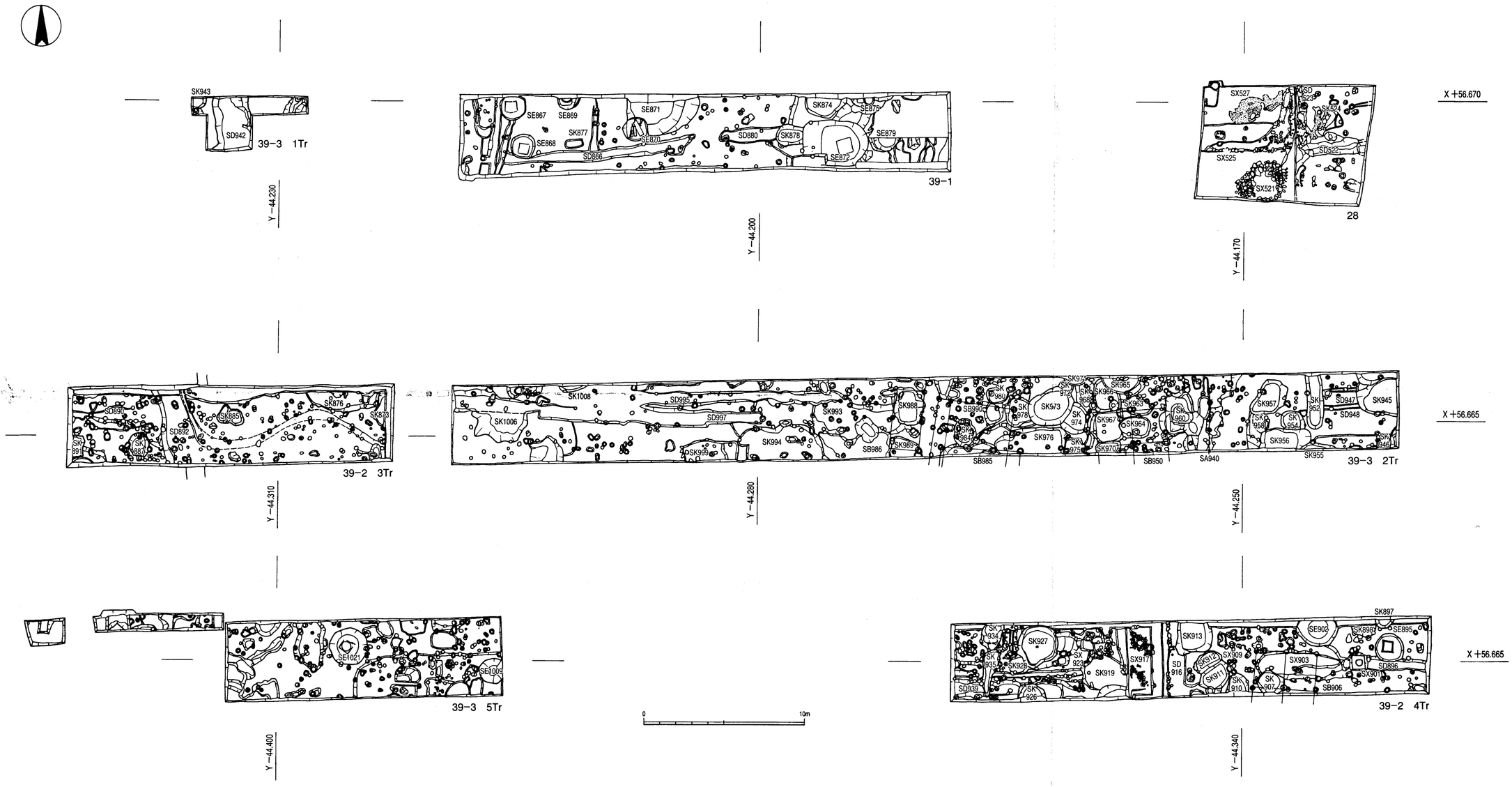
ふりがな	かんぜおんじ
書名	観世音寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	－寺域編－
シリーズ番号	
編著者名	小田和利（編集）・吉村靖徳
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂４－７－１　TEL092-923-0404
発行年月日	2006年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
観世音寺	太宰府市観世音寺5-6-1	40221		33 30 41	130 31 24	700710～030210	16,000㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観世音寺	寺院	奈良～室町	柵		
		奈良～室町	建物		
		奈良～室町	溝		
		奈良～室町	井戸		
		奈良～室町	土坑		
		鎌倉	鋳造遺構		
		奈良	池		



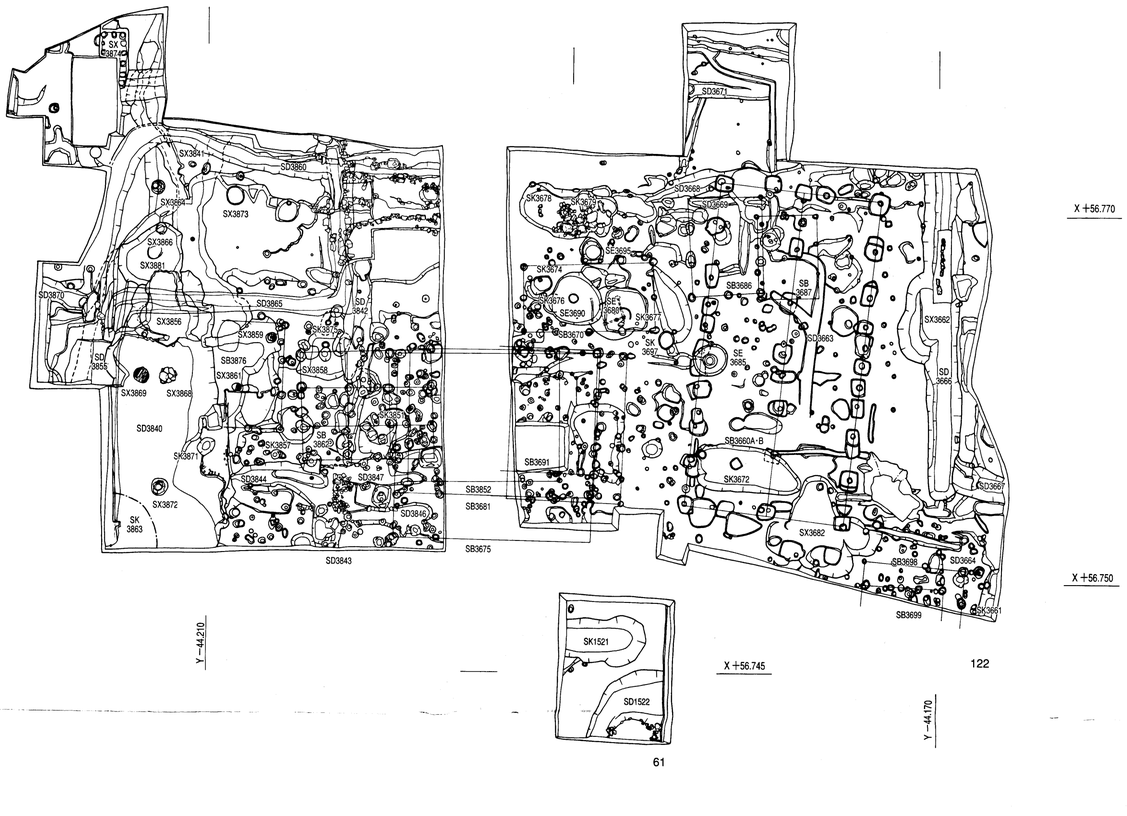
付　図1　観世音寺遺構配置図（1/1,000）



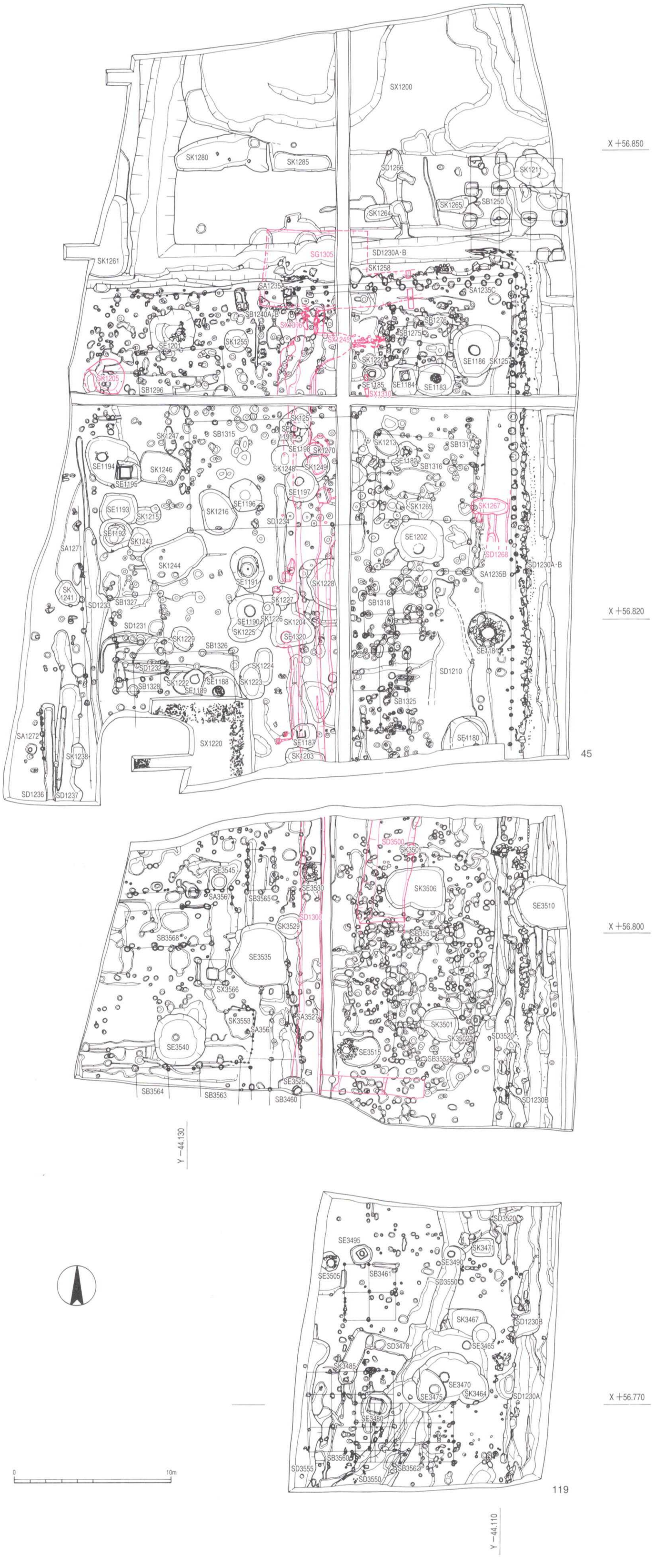
付　図2　南辺域遺構配置図①（1/200）



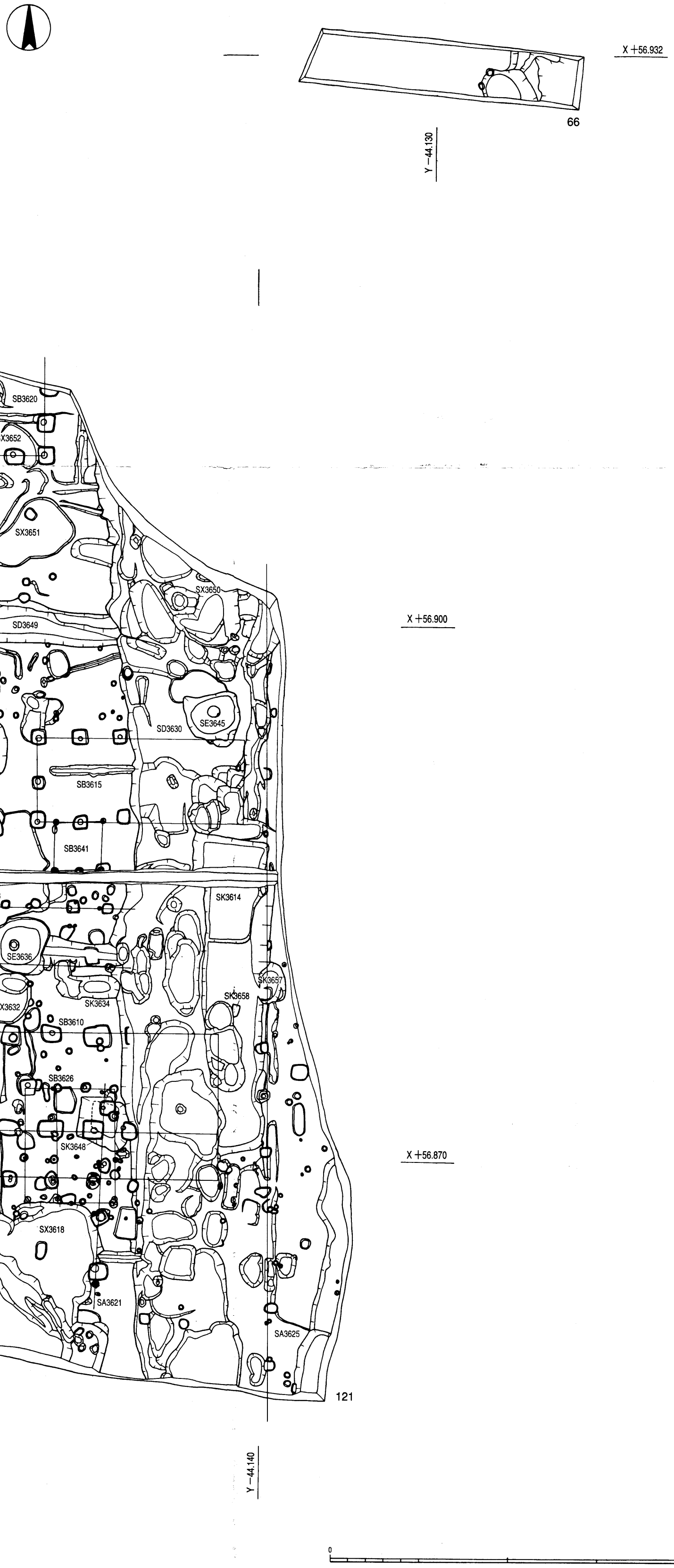
付　図3　南辺域遺構配置図②（1/200）



付　図4　南辺城遺構配置図③（1/200）



付　図5　東辺域遺構配置図①（1/200）



付　図6　東辺域遺構配置図②（1/200）



付　図7　北辺域遺構配置図（1/200）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 17	登録番号 3

観 世 音 寺

ー寺 域 編ー

平成18年３月31日

発 行　九 州 歴 史 資 料 館
太宰府市石坂４丁目７番１号

印 刷　株式会社 昭 和 堂
福岡市博多区東比恵4-2-10